野市町埋蔵文化財発掘調査報告書　第６集

下　ノ　坪　遺　跡　Ⅱ

ー農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書ー

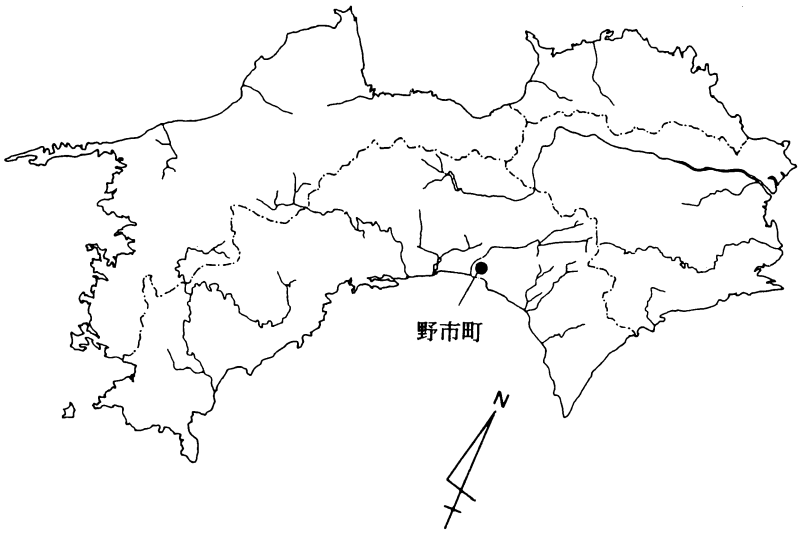
本　文　編

１９９８．３

高知県野市町教育委員会

下ノ坪遺跡 Ⅱ

本文編



1998. 3

高知県野市町教育委員会

序

21世紀を目前に現代社会はめまぐるしく変化をしています。

太陽と水と緑の町野市町が、人口増加の一途をたどり発展し続けていることはよろこばしい限りです。

開発の発展に伴い発掘調査も行われてまいりました。農業農村活性化、農業構造改善事業上岡地区区画整備工事に伴う発掘調査の結果、下ノ坪において四仙騎獣八稜鏡やガラス小玉が出土し遺構でも官衙的な掘立柱建物跡等が発見され野市の歴史を解明するうえでも重要な資料が発見されました。

ここに下ノ坪遺跡Ⅱを野市町埋蔵文化財発掘調査報告書の第6集として発刊する運びとなりました。関係者各位に深甚なる敬意を申しあげ、この報告書が町民の郷土愛へのつながりとなり、町発展の大事な糧となることを心から期待しております。

平成10年3月

野市町教育長　橋　田　速　生

例　　言

1　本書は、野市町教育委員会が平成６、７、８年度に実施した農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う下ノ坪遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　下ノ坪遺跡は、高知県香美郡野市町上岡字下ノ坪に所在する。

3　発掘調査は平成６年１月５日から３月15日、同６月７日から平成８年３月28日、同４月８日から７月16日まで実施した。

4　総調査面積は6,230㎡であり、各年度、調査区ごとの面積は第Ⅲ章のとおりである。

5　調査体制

(1)　平成６、７年度

小松　大洋（野市町教育委員会社会教育課　社会教育主事）

池澤　俊幸（高知県文化財団埋蔵文化財センター　調査員）

(2)　平成８年度

小松　大洋（野市町教育委員会社会教育課　社会教育主事）

出原　恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター　調査第３係長）

池澤　俊幸（　　同　　調査員）

行藤たけし（　　同　　非常勤職員）

6　本書の編集は出原が行い、執筆は以下のように分担した。

第Ⅰ・Ⅱ章（小松）

第Ⅲ章（池澤）

第Ⅳ章Ｃ・Ｅ区、Ｆ区（池澤）、Ｈ区(1)（池澤）、Ｈ区(2)弥生時代（出原）、
Ｈ区(3)古代（池澤）、Ｊ区（小松）

第Ⅴ章　１．下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落（出原）
２．南四国における弥生時代の鉄器について（小松）
３．南四国における古代前期の土器様相
―下ノ坪遺跡の成果を中心として―（池澤）
４．下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物（池澤）

第Ⅵ章　１．高知県下ノ坪遺跡出土の金属製品、赤彩土器の化学的調査（成瀬）
２．下ノ坪遺跡竪穴住居址出土の骨同定報告（パリノ・サーヴェイ㈱）

7　本報告書を作成するにあたっては、青銅製品及び赤色塗彩土師器の顔料について成瀬正和（宮内庁正倉院事務所保存課）の手を煩わせ、玉稿を頂いた。また、弥生土器について大久保徹也（香川県埋蔵文化財センター）、獣歯について松井章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）、鉄器について村上恭通（愛媛大学法文学部）よりそれぞれ貴重なご教示を頂いた（敬称略、五十音順）。八稜鏡の比較については長岡京市教育委員会・大宰府市教育委員会の多大な配慮を得た。

8　平成７年度の調査においては松村信博（高知県埋蔵文化財センター主任調査員）、本報告書作成においては山本純代（同調査補助員）、久家隆芳（同調査員）、更谷大介（野市町教育委員会臨時職員）の助力を得た。

9　発掘現場作業員は下記の方々である。記録的な暑夏と二度の冬を通して、精力的に作業に従事された方々に対し、記して敬意を表す。

貞岡重道・佐野宣重・佐々木龍男・吉川徳子・吉川誠喜・大黒貞之・町田恵子・森田彩子・岩崎一歩・近江川和成・楠瀬正人・田代　勝・田島一徳・浜田吉宏・松木宏史・竹村保夫・森本久美・村武　重・大和田延子・内田愛子・内田晴美・池宣　宏・小松一仁・石川　功・岡内美行・筒井　正・松崎邦久

10　重機による表土剝ぎ、排土運搬、埋め戻し、測量については共運工業の石川康人、石川武史、小松和則、森岡和信、秋山純一氏の便宜・助力を得た。

11　遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

岩貞泰代・岩本須美子・大原喜子・尾崎富貴・小野山美香・川久保香・河村真美・高橋加奈・田村美鈴・浜田雅代・東村知子・松木富子・松山真澄・森　綾子・矢野　雅・山中美代子・山本由里・横飛美紀

12　検出遺構のナンバーは、平成８年度刊行の「下ノ坪遺跡Ⅰ」からの通しナンバーである。但し、ピットのナンバーは各調査区単位である。

13　出土遺物には年度毎に「94-29NS」「95-8NS」「96-8NS」と注記し、野市町教育委員会で保管している。

Ｈ区全景（北より）

凡　　例

1　図版縮尺

遺構：竪穴住居址（ST）1/60、土坑（SK）1/40、ピット（P）1/40、遺物出土状況1/20又は1/30。

遺物：弥生・古墳時代の土器1/4、古代の土器（煮炊具・貯蔵具を除く）1/3、土師器甕・カマド・須恵器甕1/4又は1/3、鉄滓1/3。

以上を原則として適当な縮尺を使用し、各図版に記した。

2　図版トーン

遺構：　焼土多含　　炭化物　　朱の散布

砂礫層　　石

遺物：被熱 又は
須恵器の暗発色部

3　赤彩土師器、黒色土器、緑釉陶器は図版ではそれぞれ赤、黒、緑の略号を付した。

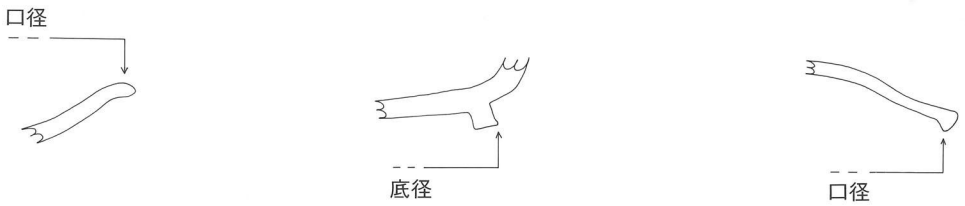
4　土色や遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

5　掘立柱建物を構成するピットの個別番号は、側柱建物については北東隅より時計回りに番号を付した。総柱建物については次のように記号を組み合わせて呼称した。

N ●7 ●8 ●1
↑ ●6 ●2
●5 ●4 ●3

●ハ3 ●ハ2 ●ハ1
●ロ3 ●ロ2 ●ロ1
●イ3 ●イ2 ●イ1

6　遺物計測位置の例



本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　遺跡周辺の地理・歴史的環境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　調査の経過及び方法 …… 5
　1．調査の経過 …… 5
　2．調査の方法 …… 6
第Ⅳ章　調査の成果 …… 9
　1．C・E区 …… 9
　　(1)　調査区の概要と基本層準 …… 9
　　(2)　自然流路SR 2と出土遺物 …… 9
　2．F区 …… 18
　　(1)　調査区の概要と基本層準 …… 18
　　(2)　弥生時代の検出遺構と遺物 …… 18
　　(3)　古墳時代後期の検出遺構と遺物 …… 25
　　(4)　古代の検出遺構と遺物 …… 27
　　(5)　遺物集中 …… 28
　　(6)　包含層出土遺物 …… 28
　3．H区 …… 36
　　(1)　調査区の概要と基本層準 …… 36
　　(2)　弥生時代の検出遺構と遺物 …… 39
　　(3)　古代の検出遺構と遺物 …… 64
　4．J区 …… 156
　　(1)　調査区の概要と基本層準 …… 156
　　(2)　検出遺構と遺物 …… 161
第Ⅴ章　考　　察 …… 200
　1．下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落 …… 200
　2．南四国における弥生時代の鉄器について …… 209
　3．南四国における古代前期の土器様相
　　―下ノ坪遺跡の成果を中心として― …… 222
　4．下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物 …… 263
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 266
　1．高知県下ノ坪遺跡出土の金属製品、赤彩土器の化学的調査 …… 266
　2．下ノ坪遺跡　竪穴住居址出土の骨同定報告 …… 270

挿　図　目　次

Fig. 1　調査風景
Fig. 2　下ノ坪遺跡の位置と周辺の遺跡
Fig. 3　下ノ坪遺跡発掘調査区
Fig. 4　Ｃ・Ｅ区基本層準及び出土遺物実測図
Fig. 5　SR 2 上層出土遺物実測図
Fig. 6　SR 2 下層出土遺物実測図
Fig. 7　SR 2 下層出土遺物実測図
Fig. 8　Ｅ区 SR 2 最下層出土遺物実測図
Fig. 9　Ｆ区検出遺構全体図
Fig. 10　Ｆ区検出遺構全体図
Fig. 11　Ｆ区基本層準
Fig. 12　ST 8 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 13　ST 8 出土遺物実測図
Fig. 14　SK 2 遺物出土状況、セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 15　落込み 1 出土遺物実測図
Fig. 16　SB 2、Ｐ１・２・３、平面・セクション・エレベーション図及び SB 2、SD15・16、Ｐ３出土遺物実測図
Fig. 17　SD 10・11・12出土遺物実測図
Fig. 18　集中１・２出土遺物実測図
Fig. 19　集中２・３出土遺物実測図
Fig. 20　Ｆ区 SR 2 － 5 ～ 7 層、包含層出土遺物実測図
Fig. 21　Ｈ区検出遺構全体図（弥生）
Fig. 22　Ｈ区基本層準（Ｈ本区南壁）
Fig. 23　Ｈ区基本層準
Fig. 24　ST 9 平面・セクション及び出土遺物実測図
Fig. 25　ST 9 出土遺物実測図
Fig. 26　ST 10平面・セクション及び出土遺物実測図
Fig. 27　ST 10出土遺物実測図
Fig. 28　ST 12床面遺物出土状況、同平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 29　ST 12出土遺物実測図
Fig. 30　ST 13河原石・遺物出土状況及び土器接合関係資料
Fig. 31　ST 13平面及びセクション図
Fig. 32　ST 13出土遺物実測図
Fig. 33　ST 13出土遺物実測図

Fig. 34　ST 13出土遺物実測図
Fig. 35　SD 21・22、32・33平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 36　SD 31・SX 7 平面・セクション・エレベーション図及び SX 7 出土土器実測図
Fig. 37　Ｐ３・Ｐ４遺物出土状況及びピット出土遺物実測図
Fig. 38　壷棺１　平面・エレベーション図及び壷棺内出土土器実測図
Fig. 39　壷棺２　平面・エレベーション図及び壺棺内出土土器実測図
Fig. 40　Ｈ区検出遺構全体図（古代）
Fig. 41　SB 8 遺構平面・セクション図
Fig. 42　SB 9 遺構平面・セクション・エレベーション図
Fig. 43　SB 9 出土遺物実測図
Fig. 44　SB 10遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 45　SB 11遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 46　SB 12出土遺物実測図
Fig. 47　SB 13遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 48　SB 14遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 49　SB 15遺構平面・セクション・エレベーション図
Fig. 50　SB 15出土遺物実測図
Fig. 51　SB 16遺構平面・セクション・遺物出土状態図及び出土遺物実測図
Fig. 52　SB 17遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 53　SB 18遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 54　SB 19遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 55　SB 20遺構平面・エレベーション図
Fig. 56　SB 20出土遺物実測図
Fig. 57　SB 20出土遺物実測図及び写真
Fig. 58　SB 21遺構平面・エレベーション図
Fig. 59　SB 21出土遺物実測図
Fig. 60　SB 22遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 61　SB 22出土遺物実測図
Fig. 62　SA 4 遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 63　SA 9 ・10・11出土遺物実測図
Fig. 64　集石遺構１平面・エレベーション図
Fig. 65　SK 16遺物出土状況・遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 66　SK 16出土遺物実測図
Fig. 67　SK 18遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 68　SK 20遺物出土状況・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 69　SK 20出土遺物実測図

Fig. 70　SK 21遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 71　SK 21出土遺物実測図
Fig. 72　SK 22遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 73　SK 22出土遺物実測図
Fig. 74　SK 22出土遺物実測図
Fig. 75　SK 27遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 76　SK 28遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 77　SK 28出土遺物実測図
Fig. 78　SK 29遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 79　SK 30遺物出土状況・セクション・エレベーション図
Fig. 80　SK 30出土遺物実測図
Fig. 81　SK 30出土遺物実測図
Fig. 82　SK 30出土遺物実測図
Fig. 83　SK 30出土遺物実測図
Fig. 84　SK 31、SK 32遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 85　SK 33遺物出土状況・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 86　SK 33出土遺物実測図
Fig. 87　SK 34遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 88　SK 34出土遺物実測図
Fig. 89　SK 34出土遺物実測図
Fig. 90　SK 34出土遺物実測図
Fig. 91　SD 26セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 92　SD 26出土遺物実測図
Fig. 93　SD 40遺物出土状況・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 94　SD 40出土遺物実測図
Fig. 95　SX 2 遺物出土状況・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 96　SX 2 出土遺物実測図
Fig. 97　Ｐ14、Ｐ15遺構平面・エレベーション図
Fig. 98　Ｐ14、Ｐ15出土遺物実測図
Fig. 99　Ｐ16、Ｐ17遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 100　SF 1 出土遺物実測図
Fig. 101　包含層出土遺物実測図
Fig. 102　SB 22内出土遺物実測図
Fig. 103　Ｊ区検出遺構全体図
Fig. 104　Ｊ区北壁及び南壁基本層準
Fig. 105　ST 11平面図及びセクション図

Fig. 106　ST 11平面・エレベーション図及びガラス小玉・朱・炭・焼土出土状況図
Fig. 107　ST 11出土遺物実測図
Fig. 108　ST 11出土遺物実測図
Fig. 109　SB 27平面及びエレベーション図
Fig. 110　SK 35遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 111　SK 36・37遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 112　SK 38遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 113　SK 39平面及びエレベーション図
Fig. 114　SK 40・41平面及びエレベーション図
Fig. 115　SK 42平面及びエレベーション図
Fig. 116　SK 43平面及びエレベーション図
Fig. 117　SD 48・SD 50平面・セクション及びエレベーション図
Fig. 118　SD 49平面及びセクション図
Fig. 119　SD 51遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 120　SD 52平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 121　SD 53平面及びエレベーション図
Fig. 122　SD 55遺物出土状況平面・セクション図
Fig. 123　SD 54遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 124　SD 55出土遺物実測図
Fig. 125　SD 55出土遺物実測図
Fig. 126　SD 55出土遺物実測図
Fig. 127　SD 55出土遺物実測図
Fig. 128　SD 55出土遺物実測図
Fig. 129　SX 9 平面及びエレベーション図
Fig. 130　SX 10遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 131　SX 10出土遺物実測図
Fig. 132　SX 11遺物出土状況平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 133　SX 11出土遺物実測図
Fig. 134　表土及び包含層出土遺物実測図
Fig. 135　田村遺跡出土の搬入土器
Fig. 136　『下ノ坪遺跡Ⅰ』報告書の搬入土器
Fig. 137　鉄斧・鉈
Fig. 138　鍬・鋤先・鉄鎌・摘鎌・刀子
Fig. 139　鉄鏃
Fig. 140　鉄鏃・鉄釧・その他
Fig. 141　器種図

Fig. 142　Ⅰ-7期における対比例
Fig. 143　四国西南部における変遷試案図
Fig. 144　杯・皿の形状類型例
Fig. 145　回転台土師器の類型例
Fig. 146　蛍光X線スペクトル図
Fig. 147　下ノ坪遺跡H区Ⅳ層出土佐波理容器実測図

第Ⅰ章　調査に至る経過

野市町下ノ坪遺跡は、「農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事」に伴う緊急発掘調査として平成６年度から平成８年度にかけて発掘調査を行ったものである。

下ノ坪遺跡のある上岡地区は、稲作、ハウス園芸の盛んな地域であるが農道の整備が遅れており、大型機械の導入が困難であり、また一部では用排水路も老朽化しており生産性向上の大きな妨げとなっていた。そのような現状から、近代農業に即応した耕区の区画形態に改善するため、野市町と上岡地区土地改良区が農林水産省の補助を受け5.2haを整備することになった。

一方、当事業区域内には条里区画の遺構が現存しており、また付近からも弥生土器等の散布が見られること等から、埋蔵文化財が遺存するのは必至とみて野市町教育委員会と上岡地区土地改良区が高知県教育委員会の助言を得て協議し、耕作地となる部分については全て盛土工法を採用し、遺跡に影響を及ぼす水路部分と永久構造物となる道路部分を調査することにした。

発掘調査は野市町教育委員会が主体となり(財)高知県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け平成７年１月より埋蔵文化財の記録保存を行うことを目的として実施した。

計画として、平成７年12月までを予定していたが出土する遺物の量、遺構が予想より多く農林水産省、土地改良区の方々のご理解を得て平成８年７月まで調査を延期し、実施することになった。また、調査の進展に伴い、重要遺物、遺構の検出が相つぎ本来調査区外であった耕作地部分の一部についても、調査区を拡張し、確認調査を行った。この確認調査のため拡張した調査区の遺構については、全て砂を入れ、保存するように努めた。

尚、調査区はＡ区からＯ区に分けて調査し、Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｍ・Ｏ区については、平成９年度に下ノ坪遺跡Ⅰとして報告書に出している。

Fig. 1　調査風景

第Ⅱ章　遺跡周辺の地理・歴史的環境

1．地理的環境

下ノ坪遺跡のある野市町は、県中央部に広がる高知平野の東端に位置し県下三大河川のひとつ物部川の下流域に発達した扇状地上にあり、南北約６㎞、東西約４㎞、面積23.15㎢、人口16,000人を越える町である。西は物部川をほぼ境として南国市、東は香我美町と隣接し、北は烏ケ森山系により土佐山田町と分けられる。南は赤岡町、吉川村の２町村と境を接し南端部より約0.3㎞南で土佐湾にのぞむ。

南部には、県都高知市と県東部を結ぶ国道55号線が東西に走っており、高知市より車で約30分と交通の便もよく、県都のベッドタウンとして人口も年々増加しており近年発展し続けている。

主要産業としては、江戸時代、野中兼山により潅漑施設が整備され、かつては豊富な水を生かした米作の穀倉地帯であったが、現在は近郊型の園芸農業が盛んとなっている。

自然地理学的には北東部に聞楽山系の山岳地と物部川左岸側に分布する、古期扇状地を呈する野市台地よりなっている。この聞楽山系は、秋葉山系と烏ケ森山系の２つからなり野市町の約３分の１強の面積をしめる。

秋葉山系は町の北東、香我美町の境にある聞楽山（標高368.2ｍ）より南西方向に高度を減じ、町のほぼ中心の三宝山（別名金剛山、標高213.9ｍ）の南西方向で野市台地の下に沈む。その秋葉山系の北方に平行して烏ケ森山系があり同じく、南西に向かって高度を減じて、物部川にその山脚を浸食されている。

その山地の下に広がる野市台地は古期扇状地性の氾濫源であり、現在の市街地をのせ、海抜高度約40～10ｍと北から南へ高さを減じている。また、台地の西端部分は５ｍほどの段丘崖となって沖積平地となっている。下ノ坪遺跡は、この沖積平地上にあり海抜12ｍを測る。

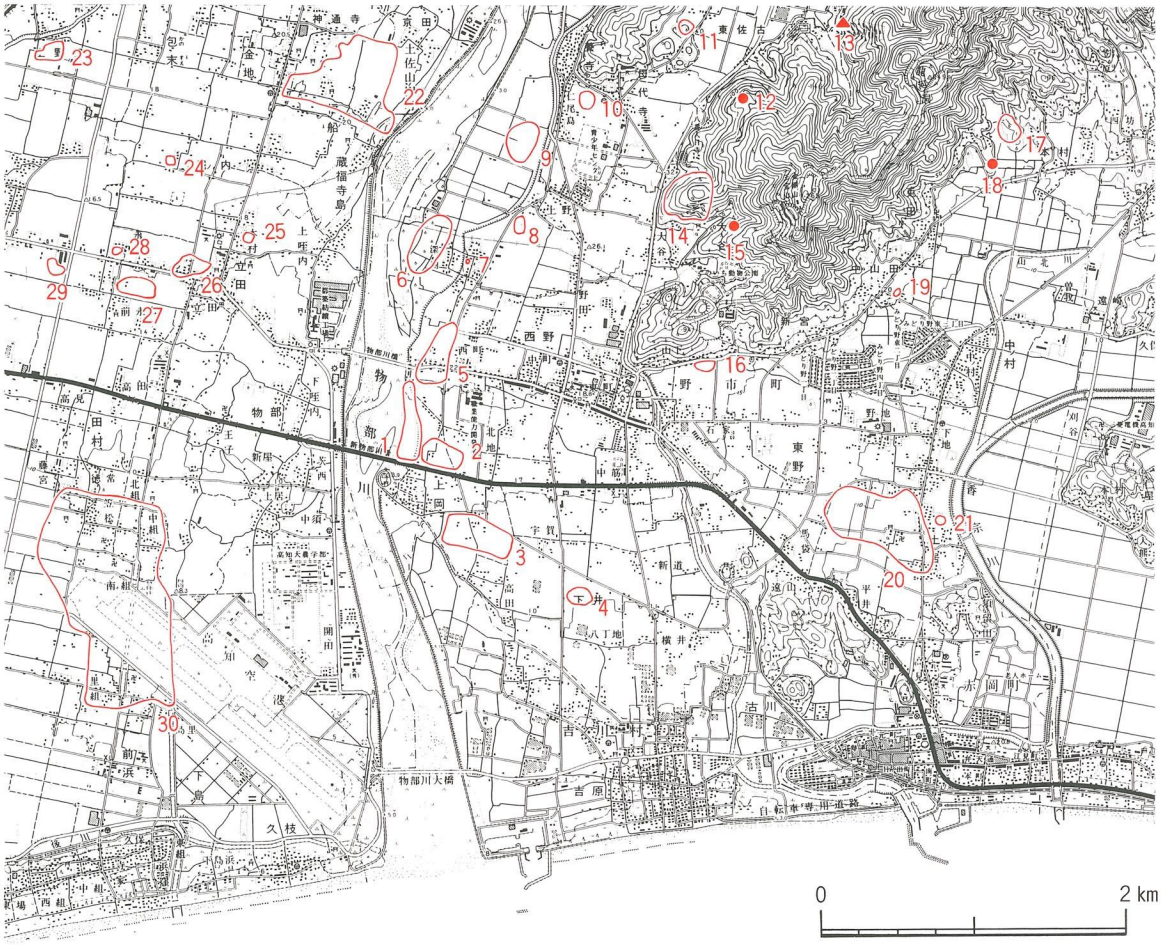
これらの台地は、秋葉山系の西端部の三宝山の山麓部でさえぎられた物部川の堆積物が南東側へ向かって放出されたためできた扇状地性堆積物によって形成されたものである。

物部川が現在の流路を形成したのは、中近世以降のことであり、それ以前はいくつもの流路からなっていたが、中世になるとそれまで多数存在していた小流路の幾つかが堆積作用によりつまっていき、大きな自然堤防が形成され現在の流路になったと考えられる。

この物部川はその昔から交通の手段として使われていたと考えられており、今回の調査でも興味深い結果となった。

2．歴史的環境

下ノ坪遺跡のある野市町は、北部に山塊を背負い南部に平野部が開けている。西は一級河川物部川に隔てられ東は香宗川がほぼ町境と重なっている。物部川は野市町をはじめ、高知平野東部の平野を潤しているが、近世以前においては現在よりも西部を流れており下流に大小の自然堤防を形成し、多くの縄文時代後期以降の遺跡が立地している。その中でも、田村遺跡は弥生時代における南四国最大の拠点集落として知られている。下ノ坪遺跡の南面約２㎞の地点に位置している。



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	下ノ坪遺跡	弥生～奈良	11	亀山窯跡	平安	21	宝鏡寺跡	中世
2	北地遺跡	弥生	12	溝渕山古墳	古墳	22	岩村遺跡群	弥生～中世
3	高田遺跡	平安	13	アゴデン白岩窯跡	平安	23	シロイ畠遺跡	古墳～中世
4	下井遺跡	平安・中世	14	大谷城跡	中世	24	石神遺跡	弥生～平安
5	西野遺跡群	弥生･古墳･平安	15	大谷古墳	古墳	25	立田土居城跡	中世
6	深渕遺跡	縄文～近世	16	山下遺跡	平安・中世	26	寺ノ前遺跡	弥生～中世
7	深渕城跡	中世	17	本村遺跡	弥生	27	高添遺跡	弥生～平安
8	西上野遺跡	弥生	18	大崎山古墳	古墳	28	平杭遺跡	弥生・古墳
9	深渕北遺跡	弥生～中世	19	中山田土居城跡	中世	29	カントヲリ遺跡	縄文･古墳~平安
10	母代寺遺跡	平安・中世	20	東野土居遺跡	古墳～平安	30	田村遺跡群	縄文～近世

Fig. 2　下ノ坪遺跡の位置と周辺の遺跡

また、その北部の上流右岸の土佐山田町にはヒビノキ遺跡[1]（弥生時代～古墳前期）、その対岸には林田遺跡[2]（弥生～室町）がある。東部を流れる香宗川流域にも、弥生時代初期の土器が発見されるとともに多量の木器が出土した香我美町の下分遠崎遺跡[3]や十万遺跡[4]がある。

町内にも数多くの遺跡があり、最も古いものには深渕遺跡[5]の縄文晩期までさかのぼる。弥生時代になると遺跡数が飛躍的に増大し町内全域に分布する。特に物部川流域は著しく、下ノ坪遺跡より最も近いものとしては東に北地遺跡が隣接しており、北に西野遺跡、深渕遺跡、深渕北遺跡と広く分布している。また東部には先に述べた香我美町の下分遠崎遺跡と同一遺跡と考えられる曽我遺跡[6]が香宗川流域に広がっており、その北側聞楽山地のふもとにはガラス製の勾玉も出土した弥生中期の高地性集落の性格を持つ本村遺跡[7]がある。聞楽山地には中期末の笹ケ峰遺跡や、土器、貝殻、獣骨、魚骨などが出土した後期末の鬼ケ岩屋洞窟遺跡もある。

古墳時代の遺跡も物部川、香宗川両流域に広がり集落が営まれていたことがうかがえる。古墳も聞楽山地に数多くみられ、特に竹ノ内山（溝渕山）古墳は、当時の原形に最も近い状態で残存している横穴式石室の円墳で青銅環、直刀等が出土している。その他にも２次にわたる埋葬面が確認され金環、馬具等多量の貴重な副葬品が出土した大谷古墳[8]をはじめ、小山谷古墳、大崎山古墳がある。また、町内北部の佐古地区にも日吉山古墳群や父養寺古墳等、そして今は消滅しているが上分古墳の存在により、地方豪族のいたことが推察される。

古代の遺跡としては、下ノ坪遺跡の北約１kmに深渕遺跡がある。深渕遺跡は先にも述べたように縄文時代からの複合遺跡であるが、古代の出土物は二彩陶器、緑釉陶器、墨書土器、硯、鉈尾等が出土している。また深渕遺跡は瓦窯跡の指摘もあり、円面硯や風字硯も発見され、官衙的性格を持つ遺跡であったと考えられる。また佐古地区の亀山にも窯跡があり、そこで作られた瓦は平安京大極殿、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていたことがわかっており、もっぱら中央向けの官窯であったと思われる。その瓦の運輸を考えると下ノ坪遺跡とも深い関係があったと考えられる。このことは、当時の野市町が中央と深いつながりを持ち重要な地であったことを示している。

中世になると、中原秋家、秋道が地頭となり、香宗我部氏と名乗り勢力をふるった。しかし、関ケ原合戦後山内氏入国によりその所領を失い、その後の一国一城制でその居城である香宗城は取り壊された。現在は八幡社と土塁の一部を残すのみである。その南東には菩提寺の宝鏡寺跡と歴代の墓と観音堂がたっている。また、戦国時代の城では佐古地区に前ノ山城、また土佐山田町との境に烏ケ森城がある。

(1) 岡本健児・廣田典夫「高知県ひびのき遺跡」　土佐山田町教育委員会　1997年
(2) 宅間一之・山本哲也・森田尚宏「林田遺跡」　土佐山田町教育委員会　1985年
(3) 高橋啓明・出原恵三「下分遠崎遺跡発掘調査概報」　香我美町教育委員会　1987年
　　高橋啓明・出原恵三「下分遠崎遺跡発掘調査概報」　香我美町教育委員会　1989年
(4) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生「十万遺跡発掘調査報告書」　香我美町教育委員会　1988年
(5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生「深渕遺跡発掘調査報告書」　野市町教育委員会　1989年
(6) 高橋啓明・吉原達生「曽我遺跡発掘調査報告書」　野市町教育委員会　1989年
(7) 坂本憲昭「本村遺跡発掘調査報告書」　野市町教育委員会　1993年
(8) 山本哲也「大谷古墳」　(財)高知県文化財団　1991年

第Ⅲ章　調査の経過及び方法

1．調査の経過

調査は平成７年１月５日から実施し、道路と水路の施工予定部分を中心に４×４ｍを基本とした試掘ピットを10ヶ所設定した。設定できたのは調査対象区（以下対象区）北半であったが、調査の結果その東半全域で良好な遺構と包含層が遺存し、時期も複合していることが判明した。これを受けて関係部局が検討した結果、耕地部分については遺構及び包含層に影響しない工法を採用して、本調査区を道路及び水路予定部分に限定すると共に、対象区中央部以南の調査を次年度に実施することとし、平成６年度にはＡ、Ｂ、Ｄ、Ｅ区の発掘調査を行なった。

平成７年度の調査は６月７日から開始し、Ｃ、Ｆ、Ｇ、Ｈ、Ｊ、Ｋ区の調査を実施した。６月25日にはそれまでの調査成果による第１回現地説明会を行い、続いてＦ区以南の調査を実施した。当時の耕作状況により調査区の設定には一定の制限があったが、調査を進めた結果、Ｆ区西端で古墳時代掘立柱建物や弥生時代竪穴住居、Ｊ区で弥生時代竪穴住居や多量の土器を伴う大溝を検出、Ｈ区では多量の遺物を含む包含層と、古代及び弥生時代の多数の遺構群を検出した。南部は対象区北部とは様相が異なり、遺構・包含層が対象区西端の物部川堤防直下まで遺存することが判明したため、協議の結果調査期間を延長し、Ｌ区以南は８年度に調査することとした。

続く平成８年度の調査は平成８年４月８日から実施し、Ｍ、Ｏ区では弥生時代を中心とした遺構群が検出され、当遺跡の全域に集落が展開することが確認された。またＨ区では、古代の大型掘立柱建物の一部が複数検出されていたため、構造物予定地外へも発掘区を拡張した結果、掘立柱建物群や八稜鏡を検出した。７月14日の第２回現地説明会は、地方紙に大きくとり上げられたこともあって多数の見学者が参加して行なわれた。７月16日に機材を撤収し、発掘調査を終了した。

確認された遺跡全体の面積は約45,000㎡、今次発掘調査対象面積は7,265㎡で、うち6,230㎡について発掘調査を実施した。

出土遺物の整理及び報告書の作成については、各調査区における遺物の出土量や時期的なまとまりを勘案して、Ａ、Ｂ、Ｄ、Ｍ、Ｏ区を平成８年度に「下ノ坪遺跡Ｉ」として刊行した。平成９年度の本報告はＣ区、Ｅ区、Ｆ区、Ｈ区弥生時代、Ｈ区古代掘立柱建物・柵列・土坑、Ｊ区について行い、Ｇ、Ｋ、Ｌ、Ｎ区及びＨ区古代溝、性格不明遺構、包含層出土遺物の大半については次回に行うこととした。

各調査区の面積は下表の通りである。

表１　調査区面積表

調査区	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区	Ｆ区	Ｇ区	Ｈ区	Ｊ区
面積（単位㎡）	102	175	112	250	175	290	194	2,931	552
調査区	Ｋ区	Ｌ区	Ｍ区	Ｎ区	Ｏ区				
面積（単位㎡）	158	138	472.5	81	405				

2．調査の方法

本遺跡の範囲は、物部川の堤防に沿って南北に細長い扇形を呈し、長軸は約550ｍを測る。Fig. 3で示したように調査区は、遺跡東測線をなす段丘斜面下端に沿って延びる南北の道路と、それに直交して延びる道路及び排水路の工事予定部分である。調査にあたっては便宜上東西方向の調査区と、それらによって区切られる南北の調査区に北より順にＡ～Ｏの調査区名を付した。

平成６年度はＡ～Ｆ区の範囲を調査対象とし、試掘ピットを設定すると共に順次本調査を行なった。平成７年度も同様に、Ｆ区以南について調査可能となった部分に随時試掘ピットを設定し、遺構・包含層の広がりを調べると共に本調査を実施した。平成８年度はＨ、Ｌ、Ｍ、Ｎ、Ｏ区の調査を行い、Ｈ区では古代掘立柱建物群についてのみ調査区を拡張しての確認調査を合わせて実施した。

調査の手順としては、耕作土及び旧耕作土を重機を用いて除去した後、包含層掘削、遺構検出、遺構埋土掘削を手作業で進めた。遺物の取上げ、遺構の実測については、各調査区ごとに任意に設定した座標軸に基いて４ｍ方眼をかけ、グリッドNo.を付して地点の記録及び実測を行なった。平面実測及び土層断面図については、20分の１を基本に適宜任意の縮尺を用いた。

現地説明会

Fig. 3　下ノ坪遺跡発掘調査区（$S=\frac{1}{1000}$）

基準点座標		
点名	X	Y
NS-1	61929.145	17357.581
NS-2	61816.006	17339.297
NS-3	61671.587	17332.030
NS-4	61671.353	17341.108
NS-5	61649.906	17428.216
NS-6	61749.770	17463.952
NS-7	61831.516	17481.579
NS-8	61940.553	17468.682
プラ A	61927.341	17415.739
プラ B	61863.506	17420.295
プラ C	61791.690	17425.415
プラ D	61727.848	17429.957
C-13	61916.000	17419.705
D-13	61912.033	17419.200
E-13	61908.064	17418.699
G-13	61900.126	17417.696
J-07北	61854.252	17448.963
J-28北	61871.681	17366.797
M-04	61794.278	17447.197
M-21	61808.781	17380.759
O-02	61733.496	17440.389
O-22	61749.450	17361.956
B 2	62131.530	17413.919
B 7	62124.144	17386.294
D 14	62060.014	17420.466
D 15	62058.652	17408.132
DTP1	62039.518	17419.843
DTP4	62039.153	17414.736
F 4	62002.055	17442.488
F 5	62001.906	17405.284

トラバース座標		
	X	Y
T - 1	61632.3390	17417.4320
T - 2	61651.3580	17423.4750
T - 3	61677.9130	17436.4880
T - 4	61754.6720	17457.7670
T - 5	61865.6970	17473.2870
T - 6	61986.8340	17443.0730
T - 7	62097.9690	17428.9830
T - 8	62141.7800	17420.2560
T - 9	62186.4740	17373.1160
T - 10	62118.7840	17358.8660
T - 11	62014.7750	17361.4170
T - 12	61942.2090	17358.1820
T - 13	61881.5000	17352.1160
T - 14	61795.6580	17334.6240
T - 15	61724.6690	17311.7940
T - 16	61685.0440	17317.9850
T - 17	61673.7840	17328.1100

NS-1　ボックスカルバート天端
NS-2　ボックスカルバート天端
NS-3　国道55号線歩道コンクリート壁
NS-4　国道55号線歩道コンクリート壁
NS-5　国道55号線歩道コンクリート壁
NS-6　コンクリート壁
NS-7　水路壁
NS-8　コンクリート畦畔

第Ⅳ章　調査の成果

1．C・E区

(1)　調査区の概要と基本層準

①　調査区の概要

遺跡の東端、段丘斜面の下端に沿う幅2.5m前後、南北約110mの調査区である。D区との交差部を境にC区、E区と呼称するが、同じ様相を呈するので一括して扱う。遺構は検出されず、自然流路SR 2が存在する。SR 2の幅は調査区より広く、しかも現斜面の下端にほぼ沿っているとみられ、本区はSR 2の埋土を掘り進む形となった。SR 2の規模については、F区との交差部で幅が判明し（Fig. 9・11）、D区との交差部で西肩が検出されている（Fig. 4）。

②　基本層準

C区南端、D区との交差部のセクションを図示した。Ⅲ層は遺跡北半に普遍的に分布するものであり、SR 2－2層に酷似する。先述のように、当地点ではSR 2の西肩が確認できた。C区北端部のⅡ層からは1が出土している。

(2)　自然流路SR 2と出土遺物（Fig. 4～9・11）

遺跡東側の段丘斜面下端に沿うように延びる。F区で確認した幅は6.5～9.2m、深さは75cm前後を測る。セクション図から判るように両肩部は比較的明瞭に立ち上がる。C区北端からF区南端までを全体的に見た場合、底面での明確な比高差は存在しない。遺跡内に普遍的にみられた古代の包含層を切っており、基本的な埋土は四層から成る。2層は砂礫層でC区南～E区北部では人頭大の石を含む。4層も砂礫層で流路幅の中央で層厚を増す。また流路方向でみた場合、C区北半とE区

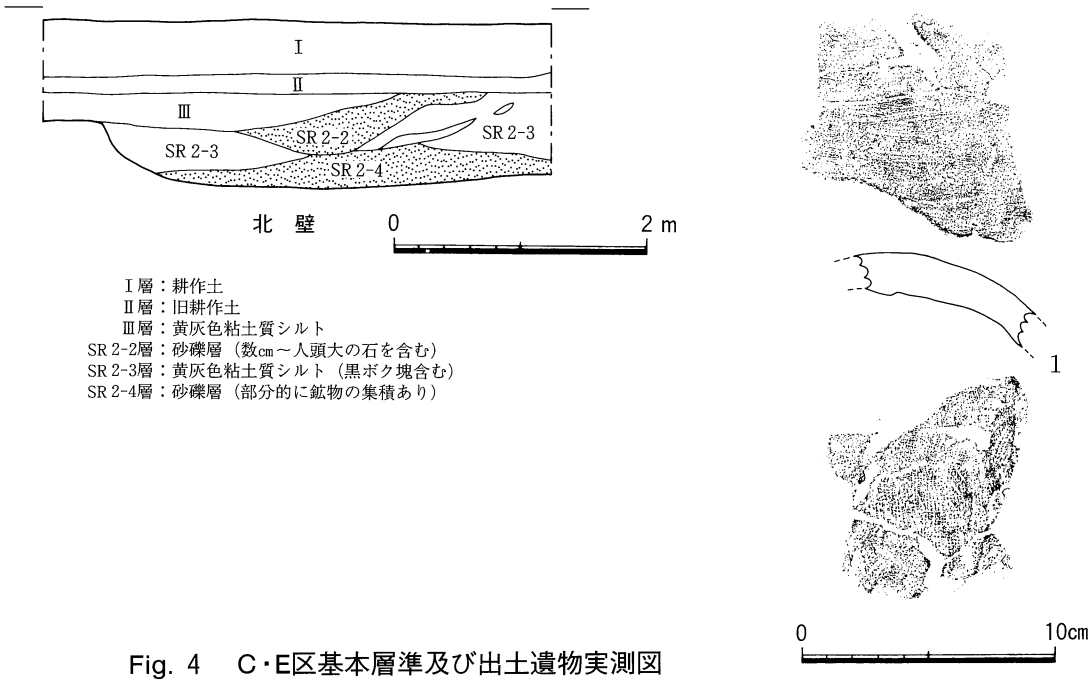


Fig. 4　C・E区基本層準及び出土遺物実測図

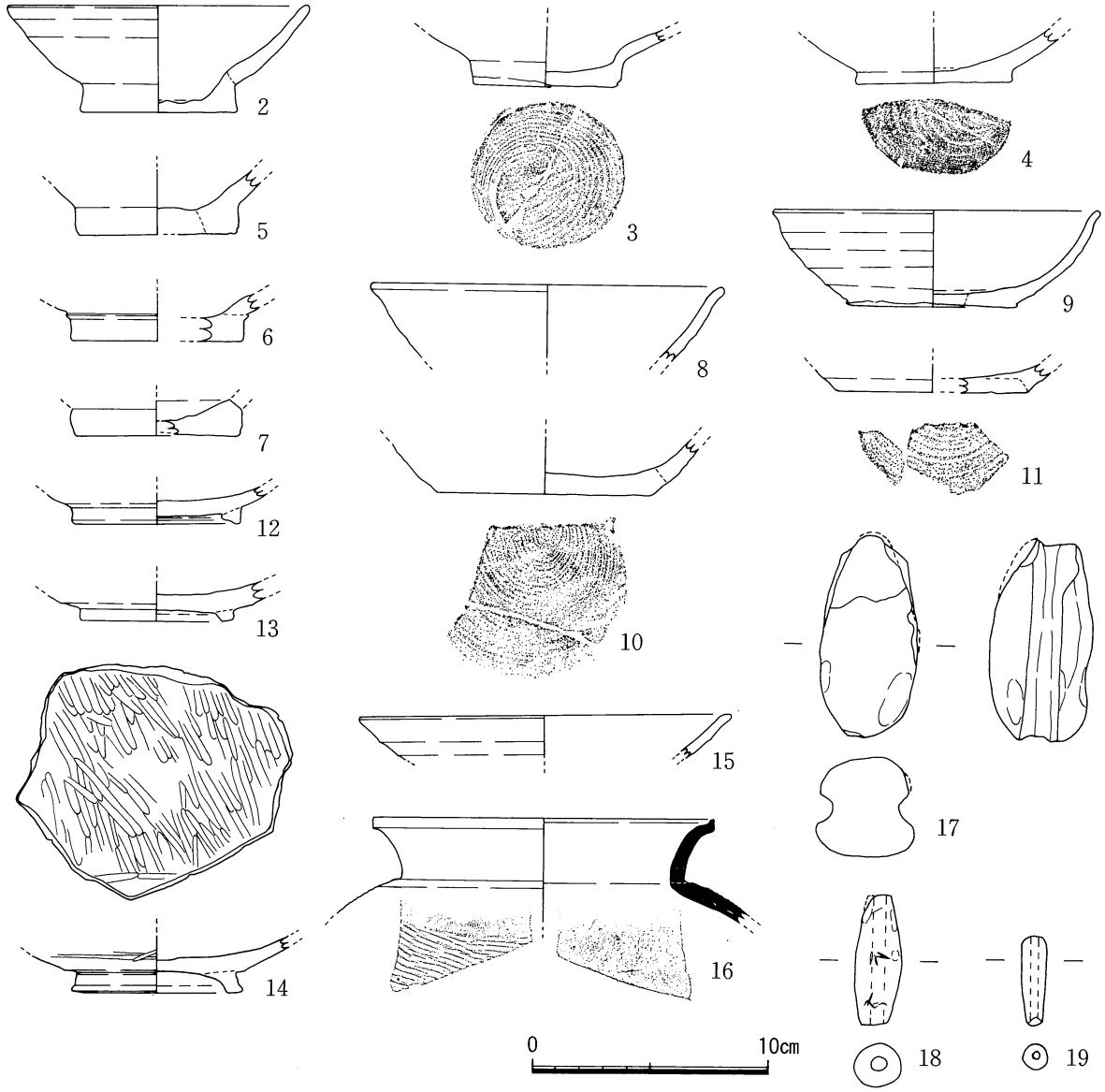


Fig. 5　SR２上層出土遺物実測図（16は縮尺1/4）

で厚さを増していた。３層は弥生中期から古代に至る多量の遺物を包含する。遺物は、２層以上と３層以下で下限の時期に差がみられるため、前者を上層、後者を下層として図示する。平面的にみた上層部は、Ｃ区～Ｅ区北半では幅2.5ｍ、深さ50㎝前後でＣ区中央部以北では調査区外東側へそれて検出できなくなるが、Ｅ区南端では下層部を侵食し幅約７ｍ、深さ65㎝を測る。下層部は、底に複雑な段や窪みを持つ。Ｃ区南部のSR２-２層とＣ区中央部のSR２底よりウマの歯、南部のSR２底よりウマとウシの歯が出土した。ウシの歯は左下顎の第３大臼歯で、３歳前後と見られる。なお、方向や出土遺物から考えて、本流路はＡ区SR１(註)と関連する可能性がある。

(註)「下ノ坪遺跡Ｉ」野市町教育委員会　1997年

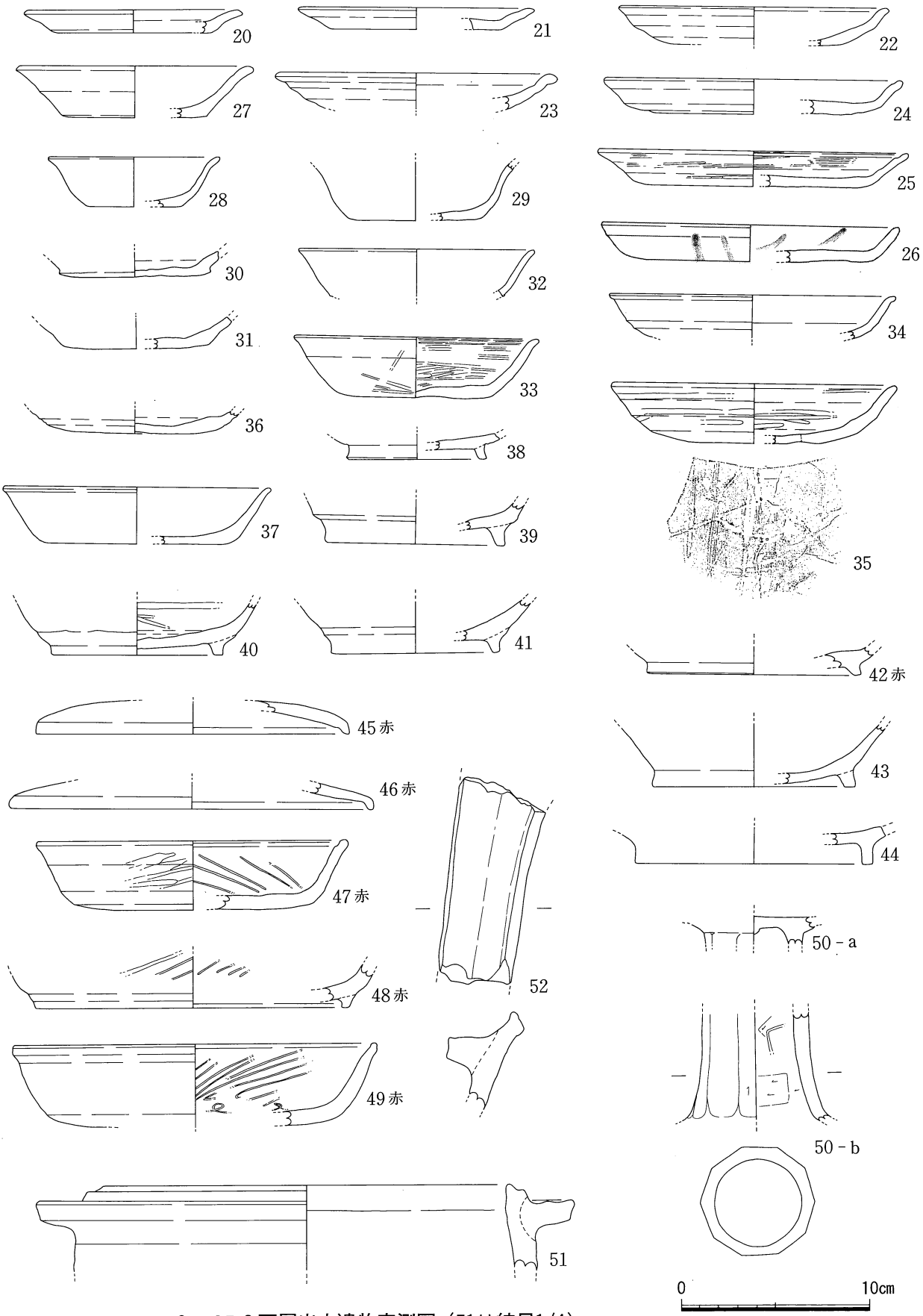


Fig. 6　SR 2 下層出土遺物実測図（51は縮尺1/4）

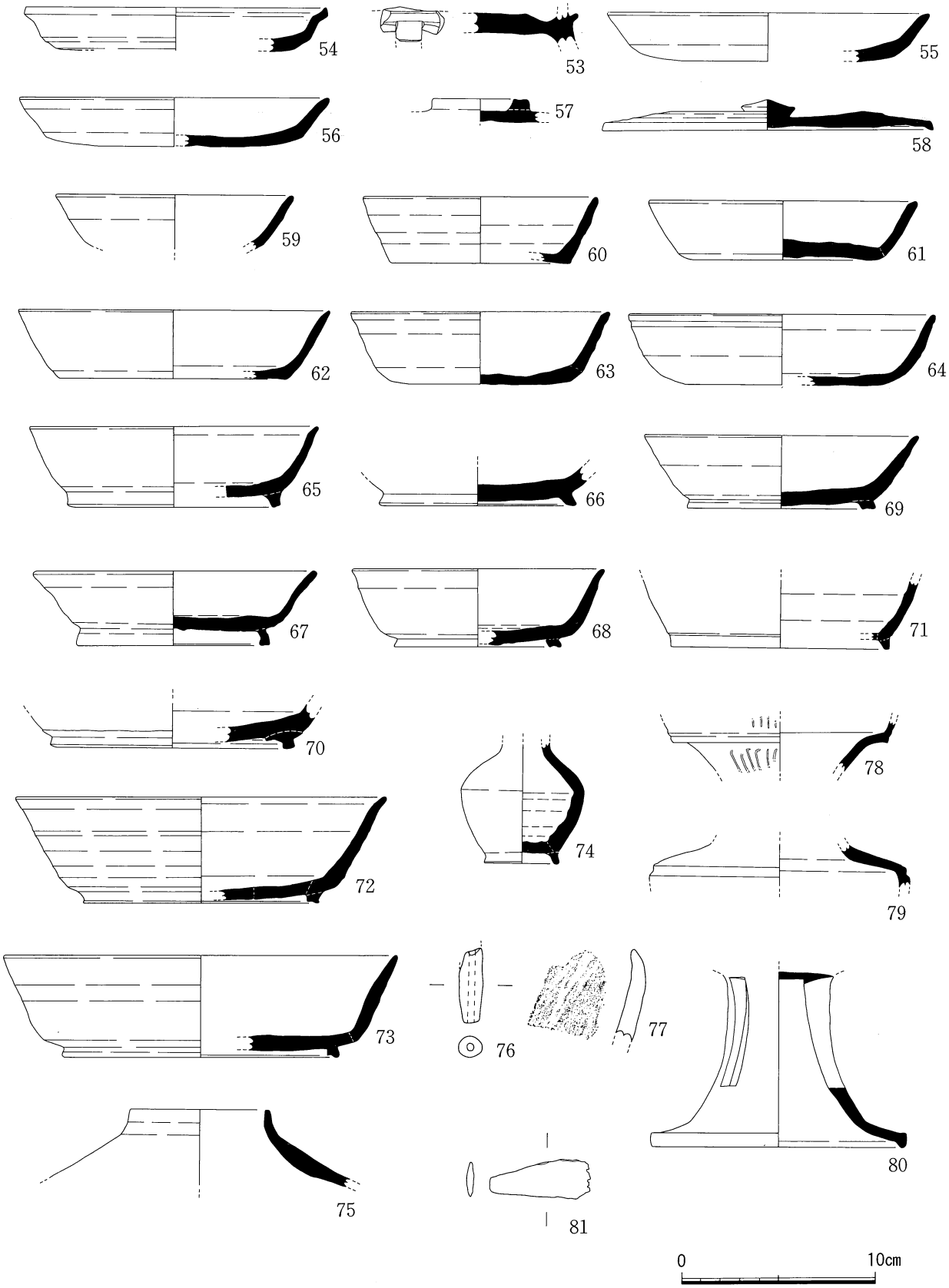


Fig. 7　SR 2 下層出土遺物実測図

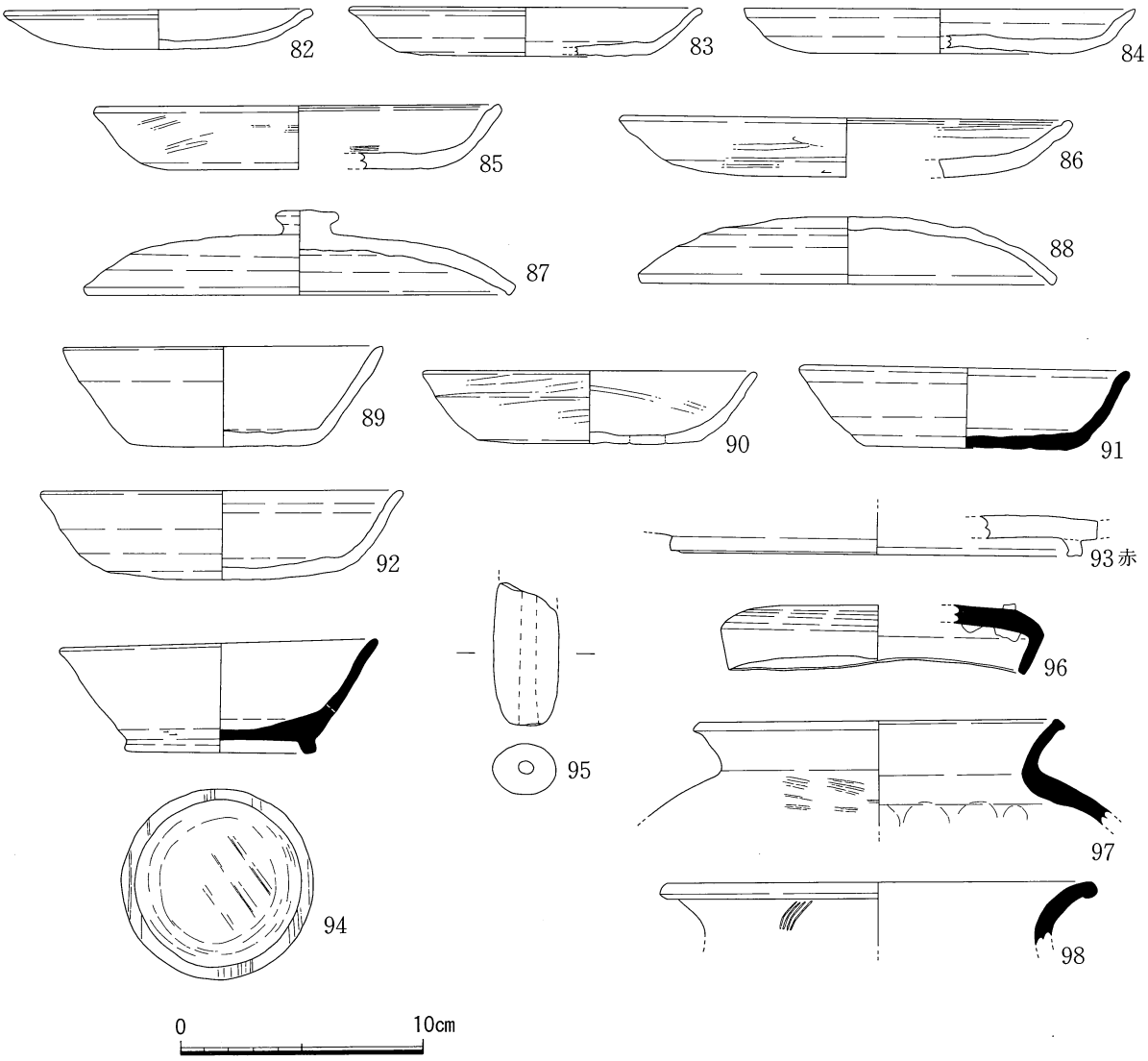


Fig. 8　E区 SR 2 最下層出土遺物実測図（97・98は縮尺1/4）

出土遺物

先述したように、上層と下層に分けて示す。F区で検出した遺物についても、弥生土器集中地点およびSR 2 - 6 層以下の出土遺物を除いてここに示す。また、E区北半の一定の範囲で最下層から出土した遺物については、最下層の項を設ける。

① SR 2 上層出土遺物（Fig. 5）

② SR 2 下層出土遺物（Fig. 6 ・ 7）

出土遺物の属する時期は、図が示すようにかなりの時期幅をもっている。これらの他、弥生・古墳時代の遺物が多量に含まれていた。

③ SR 2 最下層出土遺物（Fig. 8）

E区北半部においてSR 2 の底面ないし数cm上より出土した遺物の中に、比較的良く復元できる約20点の遺物が存在した。それらをここに示すが、明確な遺物集中として捉えたり、「下層」出土遺物全体との層位差を想定できるものではない。

遺物観察表（土器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
4	1	旧耕作土	瓦					チャート細粒砂～小レキ（～4㎜）含む。内面布痕、外面ナデ状痕。	摩耗。
5	2		土師器杯	12.5	4.6		6.5	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙2.5YR6/8。	
〃	3		〃				6.1	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙7.5YR8/6。円盤状高台。底部回転糸切、3㎜前後の平行圧痕を残す、未調整。他は全て擦痕が見える強い回転ナデ。	焼成良好。
〃	4	SR2上層	〃				6.5	チャート、少量の赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。淡黄2.5Y8/4。円盤状高台。回転糸切。	摩耗顕著。
〃	5	〃	〃				6.6	チャート細粗粒砂、赤色風化礫の細粒～小礫、火山ガラスを含む。浅黄橙10YR8/4。円盤状高台。底部糸切。全て強い回転ナデ（回転台右回り）。内底のみ一方向のナデ。	
〃	6	〃	〃				7.2	チャート細粗粒砂を多く、少量の赤色風化礫の細粗粒砂を含む。浅黄橙10YR8/4。円盤状高台。外底糸切。他は全て回転ナデ。	焼成良好。
〃	7	〃	〃				6.7	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙5YR6/8。外底回転糸切。	摩耗顕著。
〃	8	〃	土師器	14.6				胎土精選。チャート細粗粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙7.5YR8/6。回転ナデ。回転台右回り。	
〃	9	〃	土師器椀	13.4	4.1		7.1	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR7/4。底部糸切未調整。体部外面と内底に回転ナデ痕を残す。	焼成良好。
〃	10	〃	土師器杯				9.0	チャート細粗粒砂、火山ガラス、少量の赤色風化礫の細粒砂を含む。浅黄橙7.5YR8/4。外底糸切未調整。他は全て回転ナデ。	焼成良好。
〃	11	〃	〃				8.0	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、比較的多量の火山ガラスを含む。浅黄橙10YR8/4。円盤状底部の上から回転ナデによって体部を接合し、外からも強い回転ナデによって接合部を整える。底部糸切。	
〃	12	〃	土師器底部				7.1	胎土精選。チャート細粗粒砂（～1㎜）、赤色風化礫の細粒砂～小礫（～2㎜）を含む。灰白2.5Y8/2。高台は、粘土紐を強い回転ナデによって外から内へ引き出す。	摩耗顕著。
〃	13	〃	〃				6.4	チャート細粒砂、少量の赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙10YR8/4。底部切離し不明。高台は内から外へ引き出す。高台、体部外面、回転ナデ。内底に回転ナデ痕を残すものの、内面平滑。内面やや灰色。	
〃	14	〃	土師器椀				7.1	胎土精選。火山ガラスを多量に含む。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙5YR6/8。内外とも巾3㎜前後のミガキ。外面下部は連続ミガキ。高台は、内から外へ引出し、強い回転ナデによって端部を突出させる。	
〃	15	〃	土師器皿	15.4				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙7.5YR8/6。回転ナデ。	
〃	16	〃	須恵器甕	19.0				胎土精選。石英、長石の細粒砂～小礫（～2㎜）、少量の赤色風化礫の細粒砂を含む。オリーブ灰2.5GY6/1。口縁部、強い横ナデ。体部外面平行タタキ、内面同心円当具痕を弱いナデで消す。	
6	20	SR2下層	土師器小皿	10.8	1.2		8.1	胎土精選。赤色風化礫の細粗粒砂、少量のチャート細粒砂を含む。底不明。回転ナデ。	
〃	21	〃	土師器皿	11.8	1.1			胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。橙5YR7/8。全て回転ナデ。	
〃	22	〃	〃	13.9	2.0			胎土精選。長石、石英の細粒砂、少量の赤色風化礫の粗粒砂を含む。	摩耗顕著。
〃	23	〃	〃	14.2				胎土精選。少量のチャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。回転ナデ。	
〃	24	〃	土師器皿A	15.4	1.8			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙5YR6/6。体部内外ミガキの可能性あり。外底ヘラ切、他不明。	焼成良好。口縁端部内面に鋭い一条の沈線。摩耗あり。
〃	25	〃	〃	16.2	1.9		12.0	胎土精選。チャート、赤色風化礫の微～粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外底ヘラ切後ナデ。その他全て回転ナデ。内底、体部内外面は連続ミガキ。外底は非常に粗い断続ミガキ。	
〃	26	〃	〃	15.5	2.0		12.8	長石、石英、チャート細粗粒砂（～1.6㎜）を含む。橙7.5YR7/6。体部に強い回転ナデ（これにより、内底周縁が凹む）。回転台右回り。他は回転ナデ。底部ヘラ切。	内外火襷。
〃	27	〃	土師器杯	12.3	2.8		7.6	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙5YR7/6。	摩耗顕著。
〃	28	〃	〃	9.0	2.7		5.0	胎土精選。砂粒を含まず。橙7.5YR7/6。体部回転ナデ。	摩耗顕著。
〃	29	〃	〃				6.9	胎土精選。チャート微細粒砂、少量の赤色風化礫の微細粒を含む。橙7.5YR7/6。	摩耗顕著。
〃	30	〃	〃				8.0	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外底ヘラ切、体部内外回転ナデのち弱いナデ。平行圧痕あり。	
〃	31	〃	〃				7.6	胎土精選。チャート細粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙10YR8/3。底部ヘラ切。全て回転ナデ。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
6	32	SR2 下層	土師器 杯	12.3				石英粗粒、チャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。浅黄橙10YR8/4。回転ナデ。	
〃	33	〃	〃	12.8	3.2		8.0	チャート、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。	
〃	34	〃	土師器 皿	15.0				チャート、黒色粒の細粒砂を含む。橙7.5YR7/6。体部外面と内面は回転ナデ。外底不明。	焼成良好。
〃	35	〃	土師器	14.8	3.2		10.9	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。回転ナデ後、内面と体部外面に巾3～6㎜の粗い回転ミガキ。外底はヘラ切後、ナデ、平行圧痕残す。	
〃	36	〃	土師器 底部				8.8	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外底、ヘラ切後ナデ、中央部に巾3.1㎜の平行圧痕残す。内底中央に一方向のナデ。他は全て回転ナデ。	
〃	37	〃	土師器 杯A	13.9	3.0		10.0	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を若干含む。黄橙7.5YR7/8。摩耗著しいが、回転ナデ後、内面全てにミガキが施されていたと思われる。外底切離し等、不明。	
〃	38	〃	土師器				7.2	極めてきめ細かな胎土。少量のチャート細粒砂を含む。摩耗のため、調整不明。しかし全て丁寧で滑らか、薄手に仕上げられている。高台、回転ナデ。	
〃	39	〃	〃				9.2	きめ細かな胎土。チャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。	焼成良好。
〃	40	〃	〃				9.0	きめ細かな胎土。チャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。黄橙7.5YR8/8。内面巾2.5～4㎜の連続ミガキ。高台は外から内へひき出す。	摩耗顕著。
〃	41	〃	〃				8.8	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙5YR7/6。高台は外から内へひき出す。	摩耗顕著。
〃	42	〃	土師器 杯B				11.2	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。浅黄橙10YR8/3。全て連続ナデ。	摩耗顕著。全面赤彩（外底まで）。
〃	43	〃	土師器				10.6	胎土精選。チャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙7.5YR7/6。内面が極めて平滑。	
〃	44	〃	〃				12.4	胎土精選。少量のチャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。橙7.5YR7/6。全て回転ナデ。	
〃	45	〃	土師器 蓋	16.4	(1.8)			チャート細粗粒砂を含む。明赤褐2.5YR5/8。天井外面擦痕（ケズリと思われる）、外面は摩耗。口縁端部連続ナデ。天井内面は丁寧なナデ。	内外赤彩、Ⅰ群。
〃	46	〃	〃	19.0				胎土精選。石英の細粒砂を含む。橙2.5YR6/6。天井外面は平滑で、ミガキによると思われる（単位不明）。	内外赤彩、Ⅰ群。
〃	47	〃	土師器 杯A	16.2	3.6		12.4	橙7.5YR7/6。内面放射状一段暗文。外面は斜方向の断続ミガキ。体部内外面連続ナデ。外底は断続ケズリ。	内外赤彩、Ⅰ群。
〃	48	〃	土師器				16.4	胎土精選。石英の細粒砂を含む。高台と、体部の内外は連続ナデ。内面は放射状暗文、外面は斜方向断続ミガキ。	内外赤彩。
〃	49	〃	土師器 杯A	19.0			14.1	石英の粗粒砂、チャート、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙2.5YR6/8。外底は摩耗著しく、不明。他は全て連続ナデ。内面は放射状一段、内底は連弧状暗文。	内外赤彩、Ⅰ群。
〃	50a	〃	土師器 高杯					長石の細粒砂、少量の石英細粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙2.5YR6/8。	焼成良好。搬入品。
〃	50b	〃	〃					少量のチャート粗粒砂、長石細粒砂、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙2.5YR6/8。外面は下から上の鋭利なヘラ工具によるケズリ。内面は横方向のケズリ。復元推定10面取り。	同上。
〃	51	〃	土師器 羽釜	21.2				石英、チャートの小礫（0.6～2㎜）多く、少量の赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄2.5Y7/3。内面横ナデ。鍔強い横ナデ。	摩耗顕著、鍔以下調整不明。
〃	52	〃	土師器 カマド					チャート粗粒砂を多量に含む。チャート細粒砂、火山ガラスを含む。内面指頭圧痕残す。内面にタテ方向のケズリの一部確認。	Ⅱ群。内外とも一部煤け。全体に二次被熱。
7	53	〃	円面硯					灰N。内面に回転ナデ痕。圏台には工具の切り込みによって長方形の透し穴を開ける。内堤は持たないものの、海部と陸部は明瞭に分かれる。陸部に擦痕。陸部は使用により平滑。	
〃	54	〃	須恵器 皿A	15.2			12.0	長石細粒砂、チャート、黒色粒（赤色風化礫）の細粗粒砂を含む。灰白2.5Y7/1。	
〃	55	〃	〃	16.4			12.7	チャート、赤色風化礫（黒変）の細粗粒砂を含む。灰白5Y7/1。外底ナデ。	
〃	56	〃	〃	15.7	2.5		13.0	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。灰白5Y7/1。外底ヘラ切後ナデ。内底は多方向ナデ。	胎土、焼成やや不良。
〃	57	〃	須恵器 蓋					灰白2.5Y8/1。輪状摘み。外面に自然釉。内面ナデ仕上。	焼成堅緻。一部火膨れあり。
〃	58	〃	須恵器 蓋	16.8	1.6			チャート細粗粒砂、少量の黒色粒を含む。灰白2.5Y7/1。外面全て回転ナデ。天井部内面多方向ナデ。	一部火膨れあり。
〃	59	〃	須恵器	12.0				胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。灰7.5Y6/1。	
〃	60	〃	須恵器 杯A	11.8	3.4		9.0	胎土精選。赤色風化礫の細粗粒砂、長石細粒砂を含む。灰白5Y7/1。外底周縁部、若干粘土はみ出し。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
7	61	SR2 下層	須恵器 杯A	13.4	3.0		9.8	チャート細粗粒砂を含む。オリーブ灰5GY6/1。外底ヘラ切痕。内外底ナデ。	
〃	62	〃	〃	15.7	3.5		11.4	チャート細粒砂～小礫（～2㎜）、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。灰5Y5/1。	焼成不良。表面は摩耗顕著。
〃	63	〃	〃	13.0	3.7		9.0	赤色風化礫、チャートの細粗粒砂、火山ガラスを含む。灰7.5Y4/1。外底ヘラ切後ナデ。内底に回転ナデ痕残す。口縁部1.3㎝を残し、下方は黒色化。	摩耗あり。
〃	64	〃	〃	15.4	3.6		10.1	胎土精選。黒色粒（赤色風化礫）の細粒を含む。灰白2.5Y7/1。内底ナデ。	
〃	65	〃	須恵器 杯B	14.5	4.1		10.8	チャート細粒砂～小礫（～2.5㎜）を含む。灰白2.5Y8/1。摩耗の為不明。	
〃	66	〃	〃				10.0	チャート細粒砂～小礫（最大7㎜）を含む。灰色。外底は高台貼付前に回転ケズリ。内底は多方向のナデ。	焼成良好。
〃	67	〃	須恵器 杯B	14.1	3.8		9.8	長石細粒砂～小角礫（～3.5㎜）を含む。黒色粒を比較的多く含む。青灰10BG5/1。内外底ナデ。外底粘土紐痕・ヘラ切り痕を残す。他は全て回転ナデ（回転台右回り）。	
〃	68	〃	〃	12.6	4.1		8.4	胎土精選。長石、石英細粒砂を含む。灰白7.5Y7/1。外底ヘラ切痕。高台は外から内へ圧着、回転ナデ。	
〃	69	〃	〃	13.9	3.8		9.4	長石、石英細粒砂～小角礫（～2.5㎜）を含む。内面灰白5Y7/2。外面にぶい黄橙10YR7/3。高台は外へひき出す。	外面やや酸化色。
〃	70	〃	須恵器 底部				12.4	長石、赤色風化礫（黒色粒）の細粗粒砂を含む。灰色。高台は粘土帯を回転ナデしながら圧着。	
〃	71	〃	須恵器 杯B				11.1	胎土精選。長石、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。灰白5Y7/1。回転ナデ。ただし体部外面のみ、ナデ調整によって回転ナデ痕が消されている。	
〃	72	〃	〃	18.7	5.5		11.8	長石、頁岩の細粗粒砂、黒色粒（赤色風化礫）を含む。灰白。内底多方向ナデ、外底巾約1.5㎝の粘土紐痕を残す。高台は内へ向かってひき出す。	外底のみがやや焼成不良。
〃	73	〃	〃	19.8	5.2		13.9	チャート、赤色風化礫の細粒砂～小礫（～2.5㎜）、火山ガラスを含む。オリーブ灰2.5GY6/1。外底、回転ケズリ（回転台右回り）未調整。内底、多方向の擦痕、弱いナデ仕上。他は全て回転ナデ。	
〃	74	〃	須恵器 小壺			6.2	3.8	胎土精選。長石細粒砂～小角礫（～4.5㎜）、少量の黒粒細粗粒砂を含む。内面には強い回転ナデ痕残る。黒褐色の付着物。外面は弱いナデ。自然釉降着。	
〃	75	〃	須恵器 短頸壺	7.1				長石、石英、赤色風化礫の細粒砂を含む。灰色。	
〃	77	〃	製塩土器					泥岩、チャートの小円礫（～2㎜）を含む。橙7.5YR7/6。内面は布圧痕。	
〃	78	〃	須恵器 はそう					胎土精選。砂粒をほとんど含まない。褐灰10YR5/1。外面のみ自然釉が薄くかかる（口縁下に濃い部分あり）。外面の口縁と頸部にタテ方向のヘラ描紋。	焼成良。
〃	79	〃	〃			13.2		長石細粒砂、石英粗粒砂、黒色粒細粗粒砂を含む。灰N6/0。	
〃	80	〃	須恵器 高杯脚				12.8	チャート細粗粒砂を含む。灰黄2.5Y7/2。3方1段透かし。	焼成不良で摩耗顕著。
8	82	SR2 最下層	土師器 皿	12.5	1.6		7.6	胎土精選。赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。明黄褐10YR7/6。体部回転ナデ。他は不明。	
〃	83	〃	土師器 皿A	14.1	2.0		10.4	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR7/4。外底ヘラ切。体部回転ナデ。他は不明。	
〃	84	〃	〃	15.8	1.8		10.3	胎土精選。チャート細粒砂、赤色風化礫の細粒砂～小礫（～1.5㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5YR6/6。内底に擦痕。外底ヘラ切後丁寧なナデ。口縁回転ナデ。	
〃	85	〃	〃	16.4	2.6		13.0	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。端部、かなり退化した沈線。体部回転ナデ。内外面ミガキ。	摩耗顕著。
〃	86	〃	〃	18.1	2.4		14.7	橙7.5YR7/6。回転ナデ後、体部内外に巾約3㎜前後の連続ミガキ。内底回転ナデ。外底連続ケズリ。	
〃	87	〃	土師器 蓋	17.0	3.6			長石細粒砂～小角礫（～2㎜）、赤色風化礫の細粒砂を含む。浅黄橙10YR8/4。内外とも、天井部は多方向のナデ、口縁部は強い回転ナデ。	
〃	88	〃	〃	16.8	2.8			胎土精選。チャート細粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。内面非常に平滑。	摩耗顕著。
〃	89	〃	土師器 杯A	13.0	4.1		7.6	チャート、赤色風化礫の細粒砂～小角礫（～2.5㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外底ヘラ切後ナデ。体部回転ナデ（回転台右回り）。内底不明。	
〃	90	〃	〃	13.5	3.0		9.0	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。体部回転ナデ。内、外面（外底除く）巾1.5～3㎜の粗い連続ミガキ。	
〃	91	〃	須恵器 杯A	13.0	3.3		8.1	長石細粒砂、チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄褐10YR5/4。外底ヘラ切後ナデ。内底中央にひとナデ。	一部酸化色。
〃	92	〃	土師器 杯	14.6	3.7		9.7	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。にぶい黄橙10YR7/4。内底中央にひとナデ。外底ヘラ切痕。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器　種	法　量 (cm)				特　　徴	備　　考
				口径	器高	胴径	底径		
8	93	SR2 最下層	土師器				16.6	チャート細粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい黄橙10YR7/3。外底が極めて平滑。他は不明。	外底まで全面赤彩。Ⅰ群。焼成良好、摩耗顕著。
〃	94	〃	須恵器 杯B	12.8	4.8		7.8	長石細粒砂～小角礫（～4mm）を含む。灰色。立上がり外面に擦痕。	焼成良。
〃	96	〃	須恵器 蓋	12.0	(2.8)			長石、石英の細粗粒砂を含む。灰白7.5Y7/1。天井内面不明。	全体が歪む。内面に厚い自然釉と、降着物。外面に溶着痕。
〃	97	〃	須恵器 甕	19.4				長石、石英、黒色粒（赤色風化礫）の細粒砂～小角礫（～2.5mm）を含む。灰白5Y7/2。外面右下り平行タタキの痕跡。肩部内面より指頭圧痕が規則的に並ぶ。	自然釉が上方より降着。
〃	98	〃	〃	23.0				胎土精選。長石、黒色粒（赤色風化礫）の細粗粒砂を含む。オリーブ黄5Y6/3。	焼成良好。全体に自然釉（上面が厚い）。

※ 底部「糸切」と記したもののうち、静止糸切りと見られるものはない。
※ その他、128ページに準ずる。

遺物観察表（鉄器・土錘）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器　種	法　量 (cm)					特　　徴	備　　考
				全長	全幅	全厚	孔径	重量 (g)		
7	81	SR2 下層	鉄器	(5.1)	2.0	0.3		5.1	欠損。	
5	17	SR2 上層	有溝土錘	8.6	4.0	4.2		131.1	胎土精選。チャート、赤色風化礫の細粒～小礫、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。指頭圧痕を残す。	全体に摩耗、欠損あり。
〃	18	〃	管状土錘	5.5	直径 2.0		0.6	15.3	チャート細粗粒砂、少量の赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。心棒成形。片端が欠損。端部面取り。指頭圧痕を残す。焼成前のキズが多くつく。	
〃	19	〃	〃	3.7	1.1		0.3	3.5	胎土精選。少量のチャート細粒砂と小礫（～2mm）、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。にぶい黄橙10YR7/3。心棒成形。	全体に摩耗。特に両端は欠損、摩耗。
7	76	SR2 下層	〃	3.9	1.2		0.4	4.4	チャート細粗粒砂を含む。にぶい黄橙10YR7/4。端部面取り。一端は欠損。	
8	95	SR2 最下層	〃	5.9	直径 2.7		0.6	34.4	泥岩、チャート、赤色風化礫の細粒砂～小礫（～2mm）、火山ガラスを含む。心棒成形。	全体に摩耗顕著。半分が暗色化。一端欠損。

2．F区

(1) 調査区の概要と基本層準

① 調査区の概要（Fig. 9～11）

遺跡中央やや北寄りに設定された東西方向の調査区で幅2.4～4m、延長62mを測る。東端は本調査に先立つ試掘区と一体となっている。東部で自然流路SR 2が斜交するが、それより西側に向かっても流路による堆積がみられる等、他区とは様相を異にする。また調査区中央部から東半にかけて存在するⅨ層は、シルトの下層に小礫と古墳時代後期の遺物が地山にはりついたような状態で検出され、当該期に付近が流路化したことを示す。西半では地山面がやや高まっており、弥生～古墳時代後期の遺構が検出された。しかし、西端は表土直下から物部川による河川堆積がみられ、ST 8やSB 2は一部が破壊されている。なお、各包含層よりの出土遺物は抽出してFig. 20に示す。

② 基本層準（Fig. 11）

Ⅰ層：耕作土。下層に黄色シルト質粘土層を伴う。

Ⅱ層：旧耕作土。下層に黄色シルト質粘土層を伴う。

Ⅲ層：橙色を含む灰色粘土質シルト。少量の遺物を含む。他区のⅢ層と対応し、遺跡内に安定して堆積している。Ⅲ′層：Ⅲ層に礫を含む。

Ⅳ層：褐灰色粘土質シルトにMn粒を含む。古代を下限とする遺物を含む。Ⅳ′層：灰褐色粘土質シルトにMn粒を含む。

Ⅴ層：黄灰色シルトにMn粒を含む。古代を下限とする遺物を含む。

Ⅵ層：灰褐色粘土質シルトにMn粒を多量に含む。古代を下限とする遺物を含む。他区のⅣ層に対応し、遺跡内に安定して堆積するものとみられる。

Ⅶ層：灰色を含む暗赤褐色粘土質シルト。弥生時代遺物を多く含む。

Ⅷ層：Mn粒を多量に含む灰褐・黒・灰黄色が塊状に混ざる粘土質シルト。調査区中央西寄りでのみ確認できた。

Ⅸ層：灰褐色シルトに数mm大の礫を含む。調査区中央部から東にかけて確認できた。古墳時代後期を下限とする遺物を含む。

Ⅹ層：砂と灰色粘土質シルト・地山土が混ざる。弥生土器片を含む。

Ⅺ層：１層-砂礫層。２層-灰・黒・黄色が塊状に混ざる粘土質シルト。数cm大の礫を含む。
３層-褐灰色粘土質シルトに黄色粘土質シルト・砂が塊状に混ざる。

Ⅻ層：灰色を含む赤褐粘土質シルト。弥生土器片を多量に含む。

地山：にぶい黄褐色シルト質粘土。

(2) 弥生時代の検出遺構と遺物

① 竪穴住居

ST 8（Fig. 12）

調査区西端に位置し、北西部を河川撹乱によって破壊されている。確認範囲が狭いため平面プランは明確でないが、中央ピットが中心にある円形住居と仮定した場合、直径は7.8mとなる。SB 2

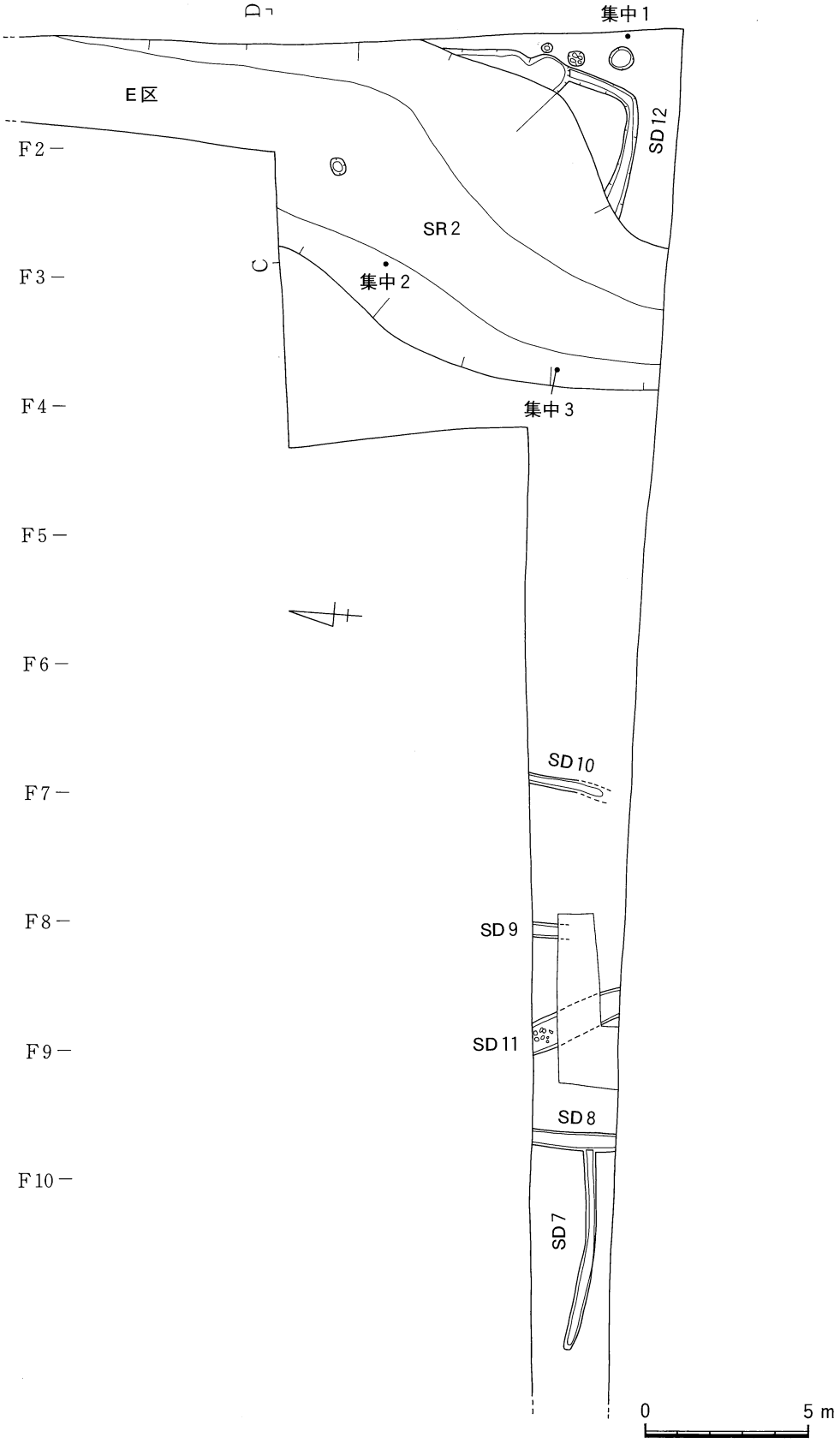


Fig. 9　F区検出遺構全体図（上層）

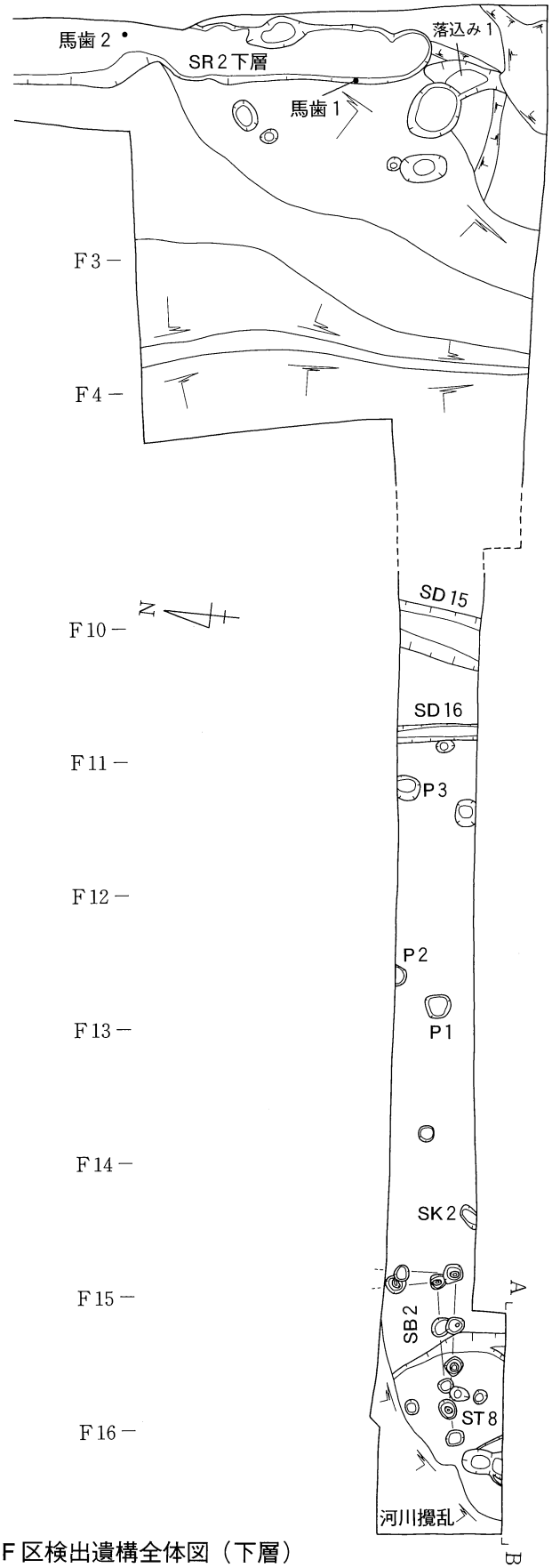


Fig. 10　F 区検出遺構全体図（下層）

0　5 m

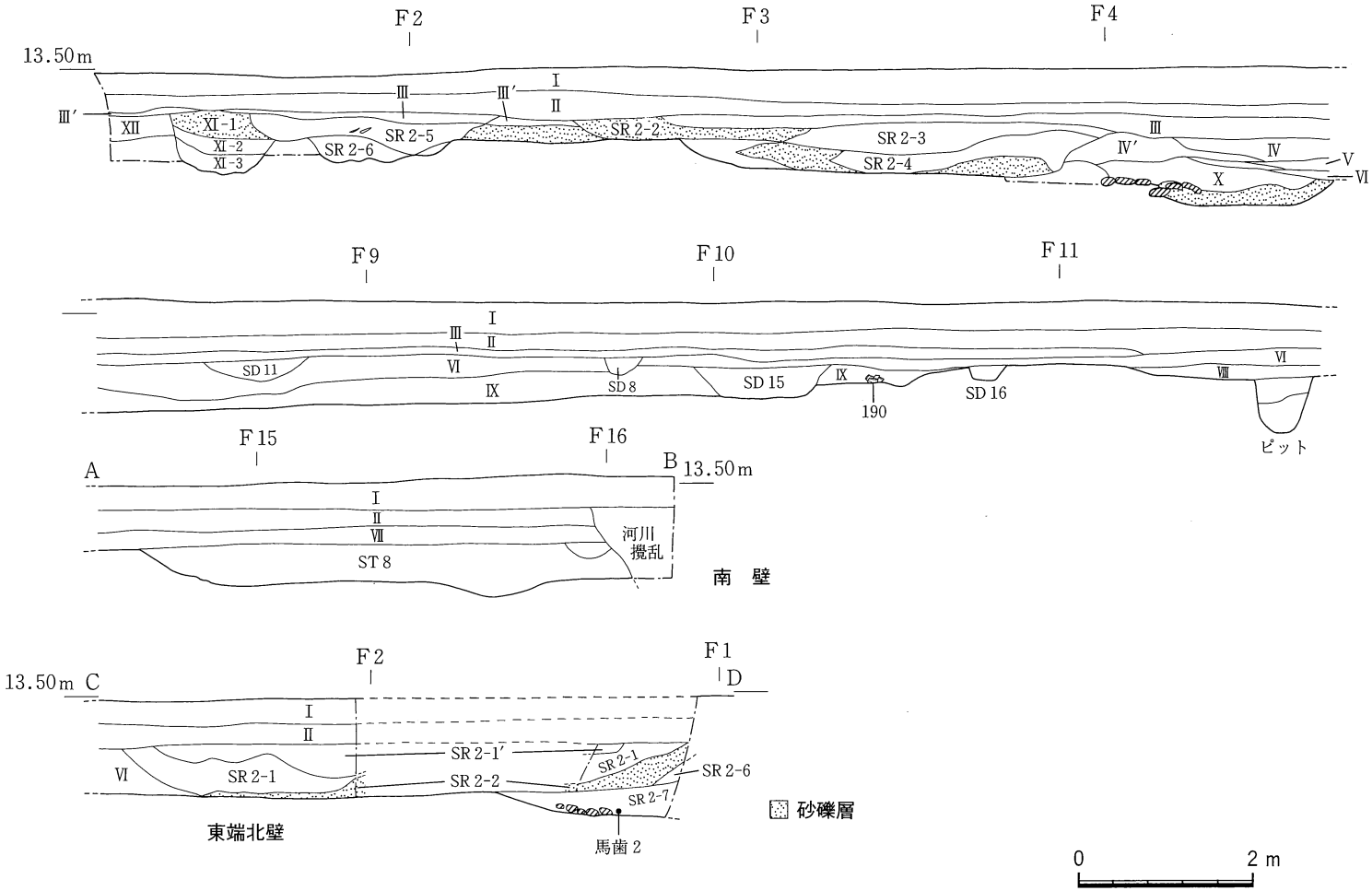


Fig. 11　F 区基本層準

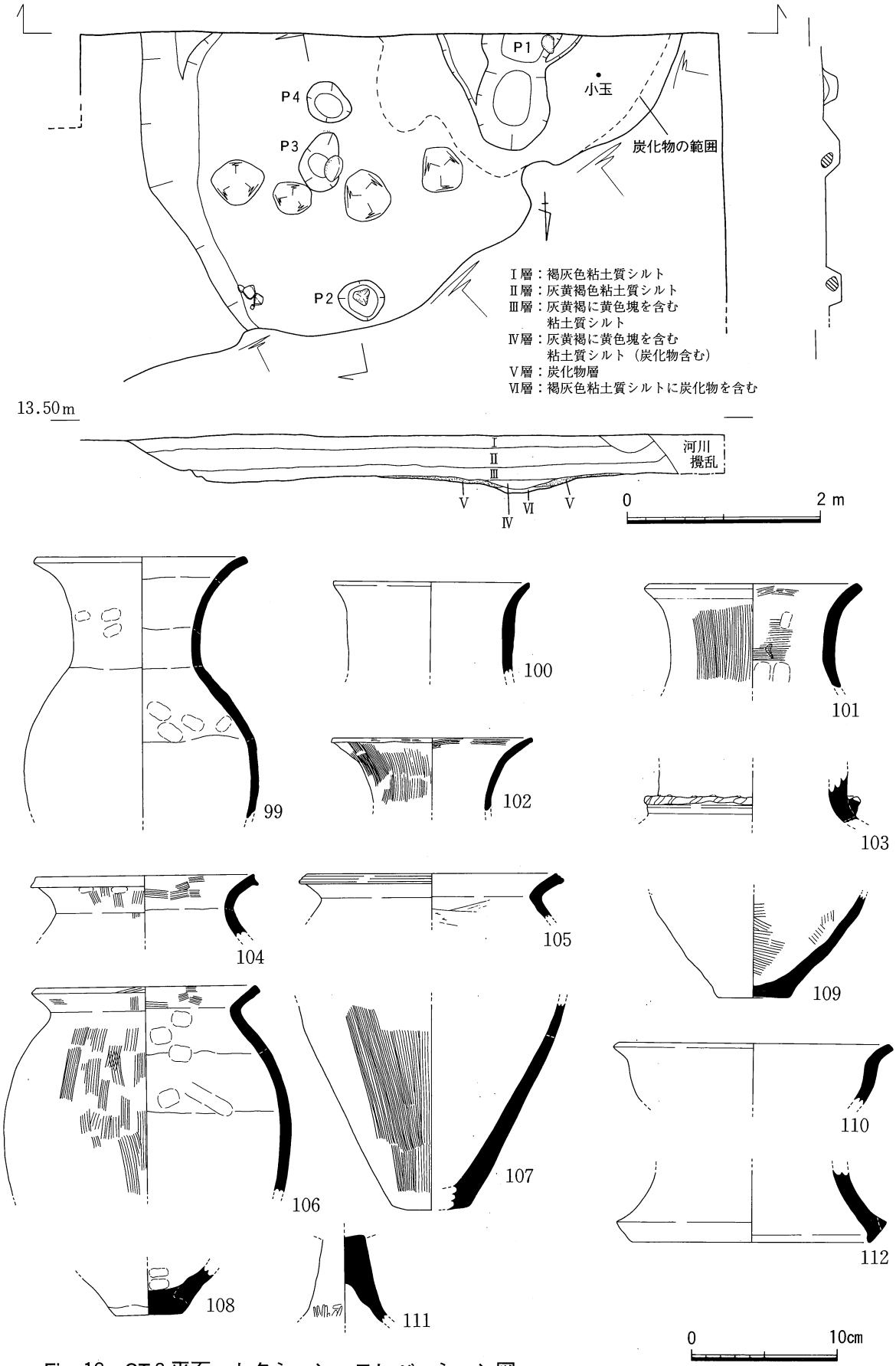


Fig. 12　ST 8 平面・セクション・エレベーション図
及び出土遺物実測図

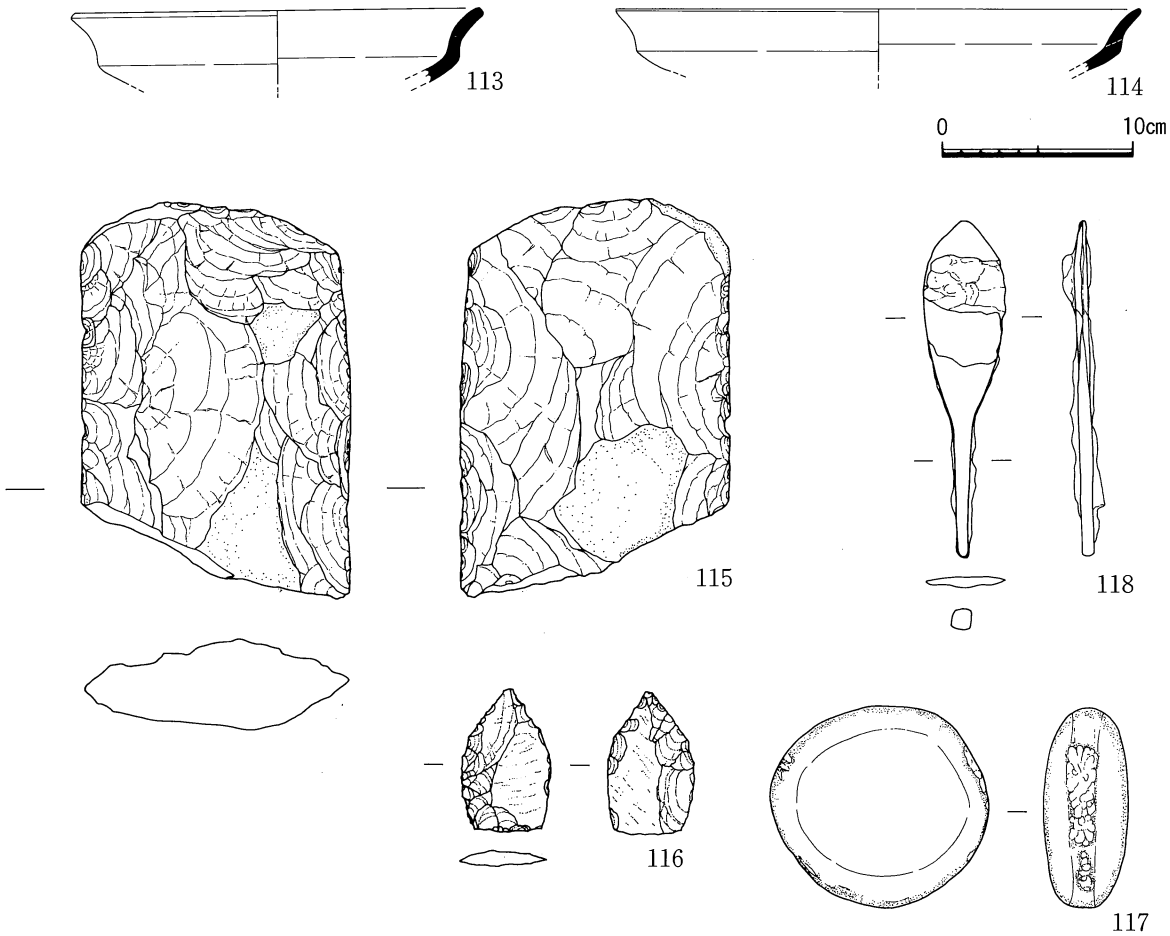


Fig. 13　ST 8 出土遺物実測図（115・118は縮尺1/2、116は2/3、117は1/4）

に切られる。深さは40cm前後を測り、床面はほぼ平坦である。主たる埋土はⅠ～Ⅲ層であり、Ⅳ～Ⅴ層は中央ピットの埋土である。Ｐ１が中央ピットで、楕円形のピットが２つ繋がったような形状を呈す。断面は浅いＵ字型で、深さは16cmと20cmを測る。中央ピットを中心に直径３ｍ余りの範囲で、厚さ５cmまでの炭と焼土の広がりが認められた。Ｐ２、Ｐ３には15～25cm大の川原石が入っていた。Ｐ２からは甕底部（108）が出土している。

出土遺物は甕、壺、鉢、高杯、石鏃、打製石斧、叩き石、鉄鏃、ガラス小玉である。口縁部の点数で見ると甕49点、壺28点、鉢３点、高杯６点と甕が非常に多い。その他に底部50点、高杯脚部５点と多数の遺物が出土しているが、床面より出土した遺物で図示できたものは無く、殆どが埋土中からの出土で、Ⅰ層上層から出土したものも多い。また細片が多く、比較的よく復元できる土器にはⅠ層上層出土のものが多い。さらに殆どの土器には摩耗が見られる。各石器、鉄鏃、ガラス小玉は各１点の出土で、ガラス小玉が中央ピット西側の床面直上、他は全て埋土からの出土である。また、胎土に雲母を含み他地域からの搬入品と考えられる土器片が２点、埋土中より出土している。弥生後期Ⅱ-１期に属する。

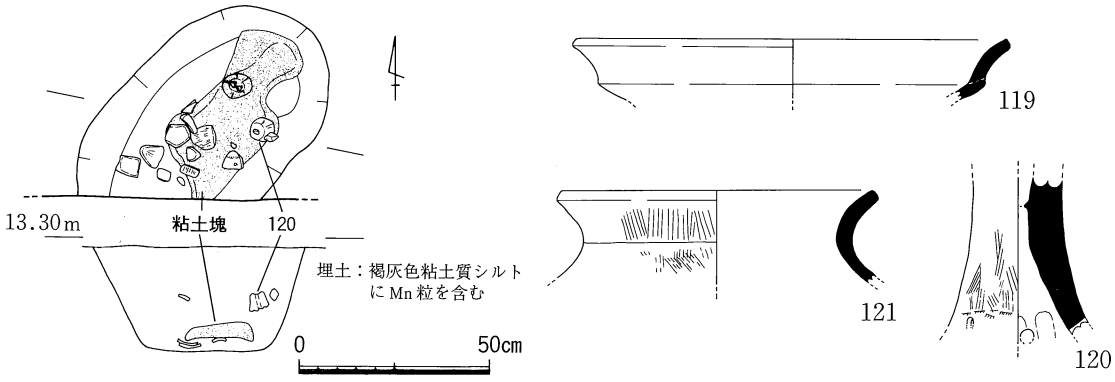


Fig. 14　SK 2 遺物出土状況、セクション図及び出土遺物実測図

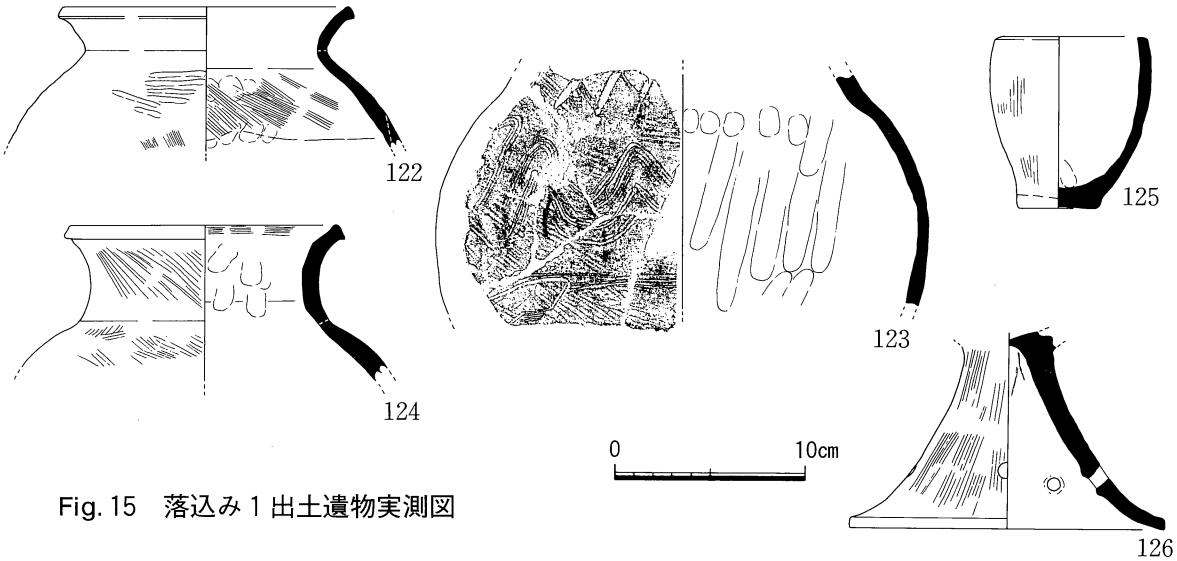


Fig. 15　落込み 1 出土遺物実測図

② 土坑

SK 2 (Fig. 14)

調査区西部の南壁際で検出され、一部は調査区外である。平面形は短軸47㎝、長軸約80㎝の楕円形を呈すと思われ、深さは57㎝、横断面は逆台形である。遺物は甕口縁部 4 点、高杯口縁部 1 点、同脚部 1 点、底部 4 点である。土器片中には、内面にヘラ削りが認められるものが存在する。高杯脚部 (120) は外面から 2 次的に被熱している。また、遺構下層には、厚さ 4 ㎝前後のにぶい黄色粘土塊が認められた。弥生後期Ⅱ期に属する。

③ その他

落込み 1 (Fig. 10・15)

調査区東端に存在した。SD 12、SR 2 に切られ、大きく破壊されており、SR 2 底にみられた窪みの一部である可能性も残るが、弥生土器のみが集中して出土しているので弥生時代の所産として本項で扱う。幅1.4m、深さ26㎝を測り地山に掘り込まれている。埋土は褐灰色粘土質シルト単純一層である。北西側に長軸1.7m、深さ70㎝を測り類似した埋土を持つ円形の落ち込みが接しているが、落込み 1 との切合い関係等性格は不明であった。

(3) 古墳時代後期の検出遺構と遺物

① 掘立柱建物

SB 2 (Fig. 16)

調査区西端で検出した東西棟で、北側は調査区外だが、北西部は物部川によって破壊されていた。西部はST 8に掘り込まれていた。方向をずらせて建替えを行ったとみられ、先行する方をSB 2 - a、後出する方をSB 2 - bとする。

SB 2 - aは梁間1間（1.26m）、桁行3間（4.7m）分が確認でき、棟方向はN－84°－Eである。桁行の柱間寸法は、1.5～1.6mである。柱穴は円形を基調とし、直径36cm～65cm、深さ40～54cmを測る。柱径は十数cmとみることができる。

SB 2 - bは梁間1間（1.6m）、桁行3間（4.0m）分が確認でき、棟方向はN－88°－Wである。P 1、2、3でSB 2 - aを切っている。桁行の柱間寸法は1.26～1.5mである。柱穴は円形を基調とし、直径45cm～62cm、深さは全て約42cmと揃っている。柱痕径は十数cmである。なお、SB 2 - aのピットのセクションでは柱痕は確認されず、SB 2 - bでは半截した全てのピットで柱痕が確認された。

出土遺物は、SB 2 - a－P 5より127、SB 2 - b－P 1より128が出土した。その他、須恵器甕、杯蓋、多数の弥生土器、胎土に角閃石を含む搬入の弥生土器の細片が出土している。

② 溝

SD 15 (Fig. 10・11)

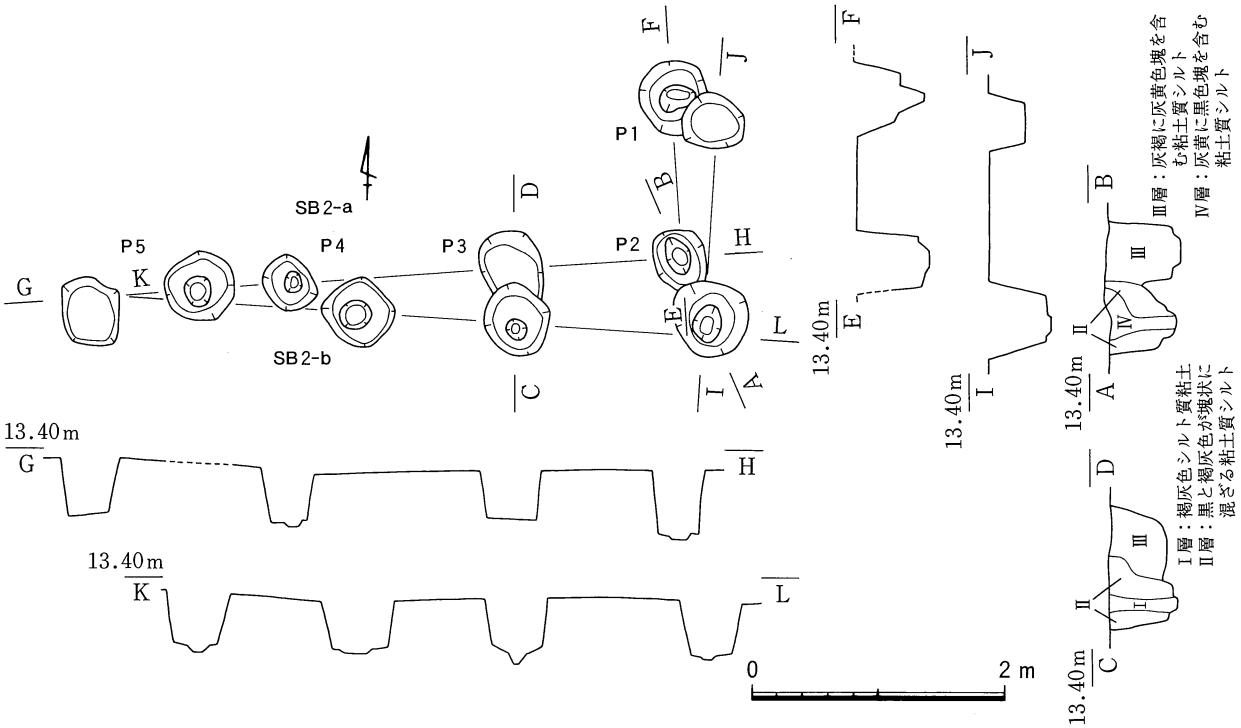
調査区中央部で検出された南北方向（N－11°－E）の溝で、2.5mを確認したが調査区外へ延びる。幅1.5m、深さ36cmを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色粘土質シルト単純一層である。確認範囲内では傾斜方向は判断できない。遺物は須恵器甕や弥生土器片が出土している。古代の須恵器壺の小片が1点出土しているが、甕（131）の存在と遺物の磨耗状態等がSD 16に似ることから、壺1点は混入と考える。

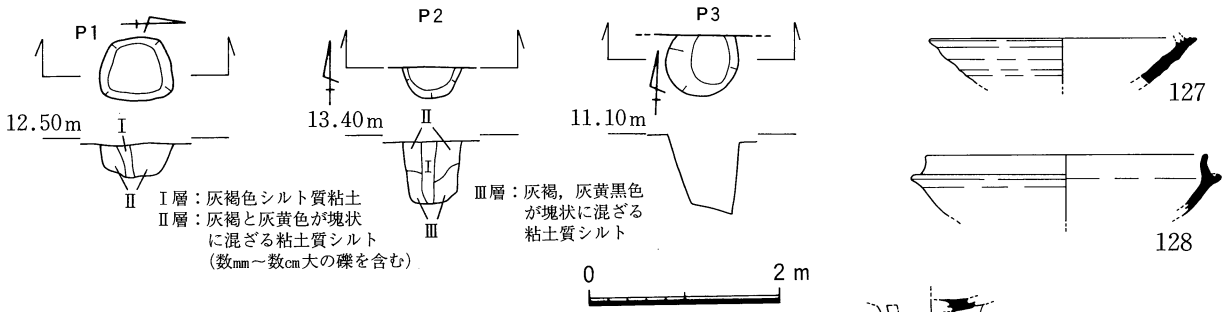
SD 16 (Fig. 10・11)

調査区中央部で検出された南北方向（N－4°30′－W）の溝で、2.36mを確認したが調査区外へ延びる。幅50cm、深さ23cmを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘土質シルトに地山土をブロック状に含む単純一層である。北端底のレベルは南端より約2cm低い。遺物は129・130をはじめ須恵器甕や弥生土器片が出土しており、弥生土器と須恵器甕片には摩耗の著しいものがある。

③ ピット群 (Fig. 16)

調査区西半で6基のピットを検出した。このうちでセクションと出土遺物が良好な3基を抽出し、計測表を示す。出土遺物を図示し得たのはP 3のみで、他からは弥生土器又は土師器の細片のみが出土している。P 3からは須恵器甕片も出土している。なおこれらピット群はいずれもⅧ層除去後に検出され、埋土も互いに類似する。





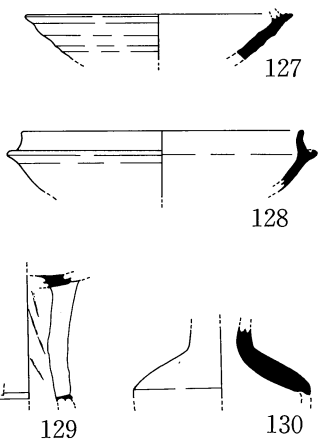


表２　ピット計測表

ピットNo.	平面規模（cm）	深さ（cm）	平面形態
Ｐ１	78×66	34	隅丸方形
Ｐ２	径62	66	楕円又は隅丸方形
Ｐ３	径68	88	円形

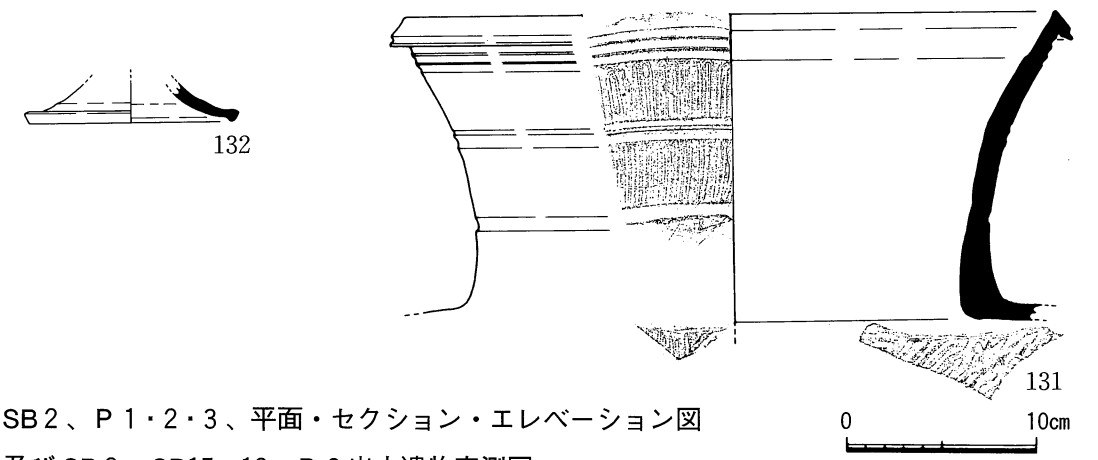


Fig. 16　SB２、Ｐ１・２・３、平面・セクション・エレベーション図
及びSB２、SD15・16、Ｐ３出土遺物実測図

(4) 古代の検出遺構と遺物

① 溝

SD 7 ～10（Fig. 9 ・11）

検出された6条の古代に属する溝のうち、調査区中央部のⅥ層上面で検出されたSD 7 ～10は、その規模、方向、埋土に共通性がみられる。これら4条の規模等は下表に示す。何れも断面形は舟底状を呈し、埋土は黄褐灰色粘土質シルト単純一層である。土師器、須恵器甕、杯Hの破片が出土しているが、図示できるものは僅かである。土器片は摩耗の著しいものが多い。

表3　SD計測表

SD No.	方　　向	幅（cm）	深さ（cm）	確認延長（m）
7	N－92及び95°－W	40	5	6.2
8	真北	60	20	2.1
9	真北	45	13	0.8
10	N－8°45″－E	40	14	2.4

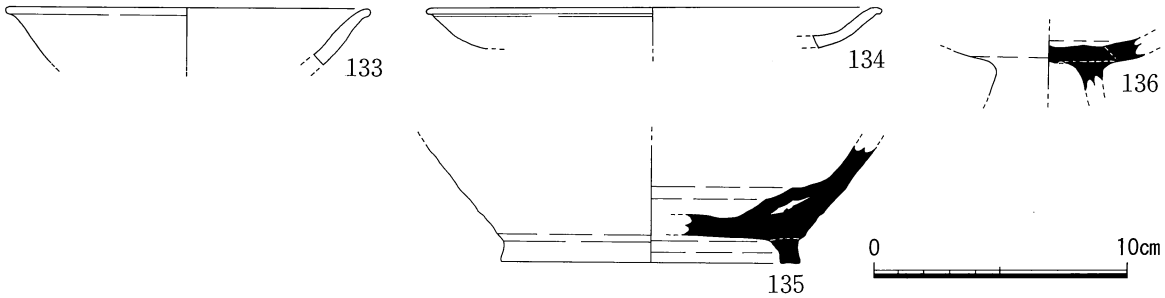


Fig. 17　SD10・11・12出土遺物実測図

SD 11（Fig. 9 ・11）

調査区中央部東寄りで検出され、方向はN－27°－W、幅95cm、深さ26cm、確認延長3 mを測る。断面形は緩やかな舟底状を呈す。埋土は黄褐灰色粘土質シルト単純一層で、北半で10数cm大の石を含む。SD 7 ～10と同じくⅥ層上面で検出した。遺物は須恵器壺、高杯、土師器片が出土しているが図示し得たのは135のみであり、土師器片は摩耗が著しい。

SD 12（Fig. 9 ・11）

調査区東端で検出したL字型に屈曲する溝で、方向はN－16°－E前後である。SR 2に切られる。幅35～60cm、深さ17cm、確認延長5.7mを測り、断面形は舟底状を呈す。埋土は黒色と赤褐灰色が混ざる粘土質シルトで、SR 2 - 6層と区別困難であった。地山上面で検出した。遺物は136の他、若干の弥生土器片が出土しており、その中には高松平野からの搬入品が1点含まれている。

② 自然流路

SR 2（Fig. 9 ・11・20）

C区から本区、さらに南へ続いていると考えられる流路である。規模並びに4層以上の出土遺物

については、C・E区の項に記した。当区では基本層準にみられるごとく、4層よりさらに下層の部分が検出された。5層は灰色粘土質シルト。6層は赤褐色と黒褐色が塊状に混じり、数cm大の石を含む粘土質シルトで、南部で弥生土器片を多量に含む。7層は灰色に赤褐色を含む粘土質シルトに地山土をブロック状に含む。この5～7層に相当する部分は底に複雑な窪みや段を持ち、上層部とはやや方向を違えて当区外南方へ延びる。Fig. 20ではSR 2 - 5 ～ 7層出土遺物を示す。SR 2 - 5 ～ 7層からは弥生時代後期前葉、古墳時代後期、及び少量ながら古代の遺物が出土している。また2ヶ所よりウマの歯が出土しているが、馬歯1では1頭分が整然と揃って出土した。

(5) 遺物集中

① 弥生土器集中（Fig. 9 ・18～19）

調査区南東隅及びSR 2 底で弥生土器の集中が見られた。尚、当地点は先述したように試掘区であった為、遺構の有無について不明確な要素が多い。集中の土器は摩耗度等の状態も比較的良好であることが検出時より看取できた。集中1は調査区南東隅部の地山上面で検出され、高松平野からの搬入品を含む。SR 2 底で検出された集中2は、その後の取り上げ過程において一定量の遺物が深さ約40cmにわたって重なった状態で出土した。つまり取り上げ時には深さ約40cm、幅約1.7m前後を掘り込まねばならなかった。また出土遺物には、残存度や摩耗度において比較的良好なものが多く含まれる。これらのことから、検出できなかったが、落込み或いは何らかの遺構であった可能性もある。これら集中出土遺物は、何れも弥生後期に属する。

(6) 包含層出土遺物（Fig. 20）

各包含層より多量の遺物が出土しており、抽出して示す。

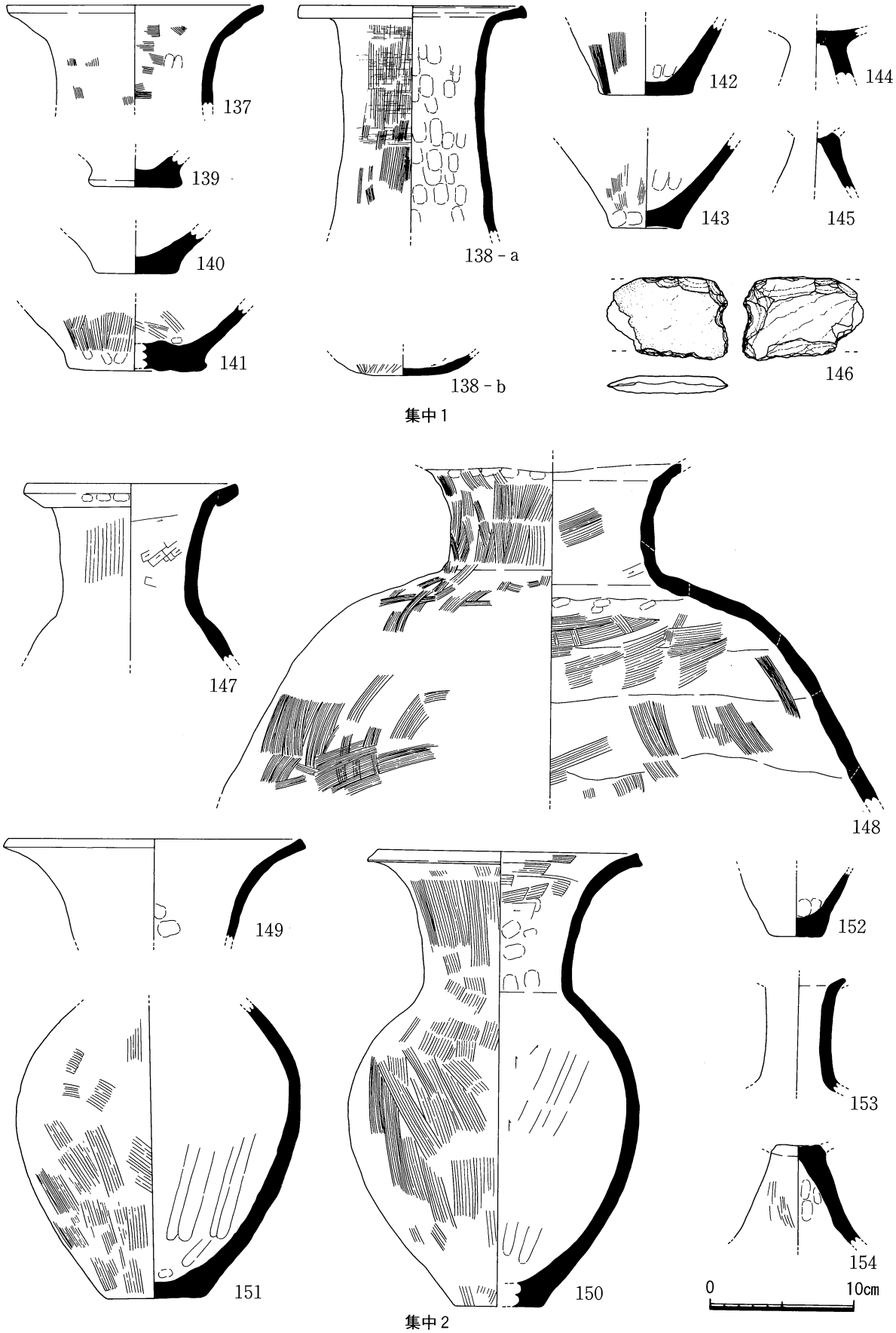


Fig. 18　集中1・2出土遺物実測図（146は縮尺1/3）

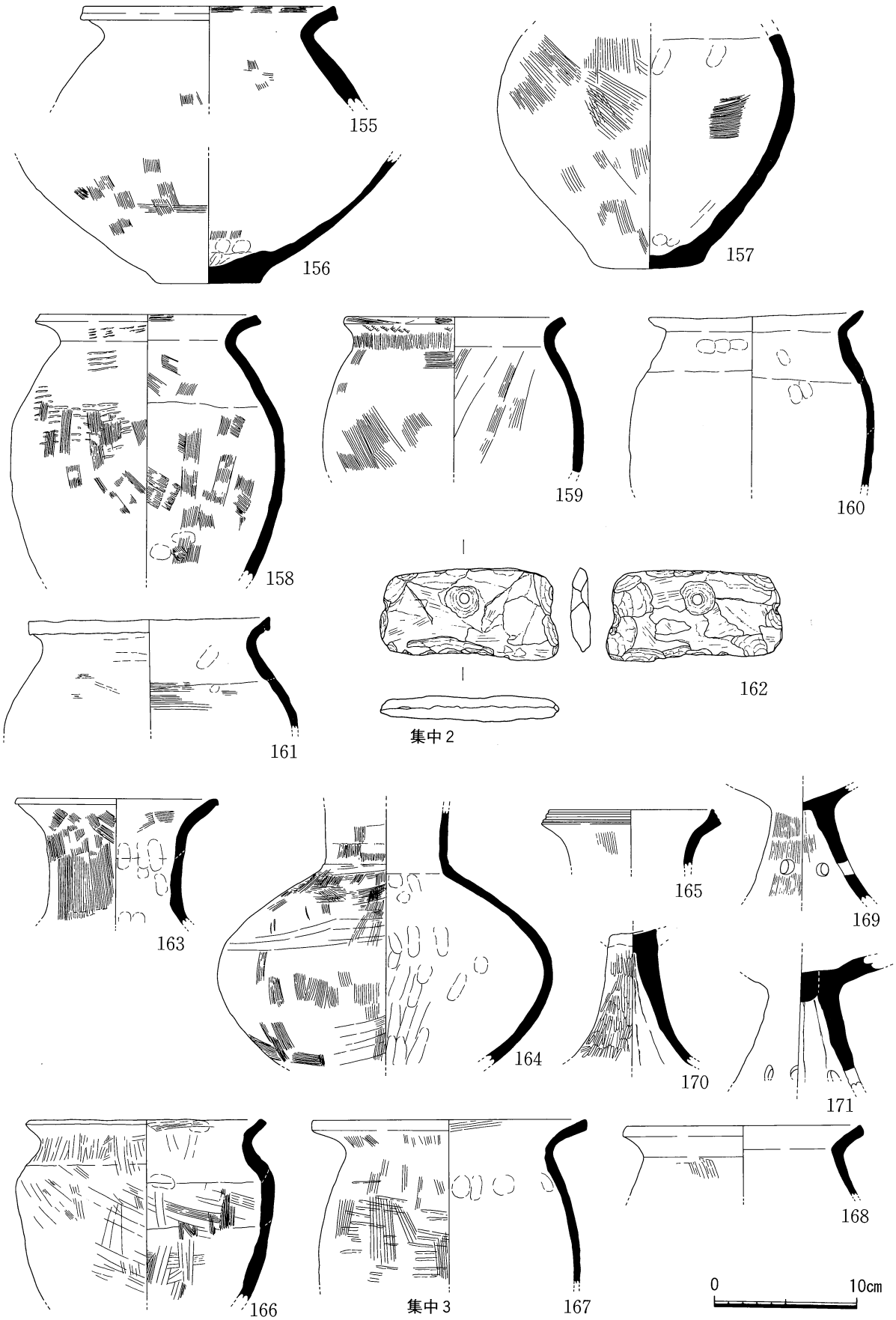


Fig. 19　集中2・3出土遺物実測図（162は縮尺1/3）

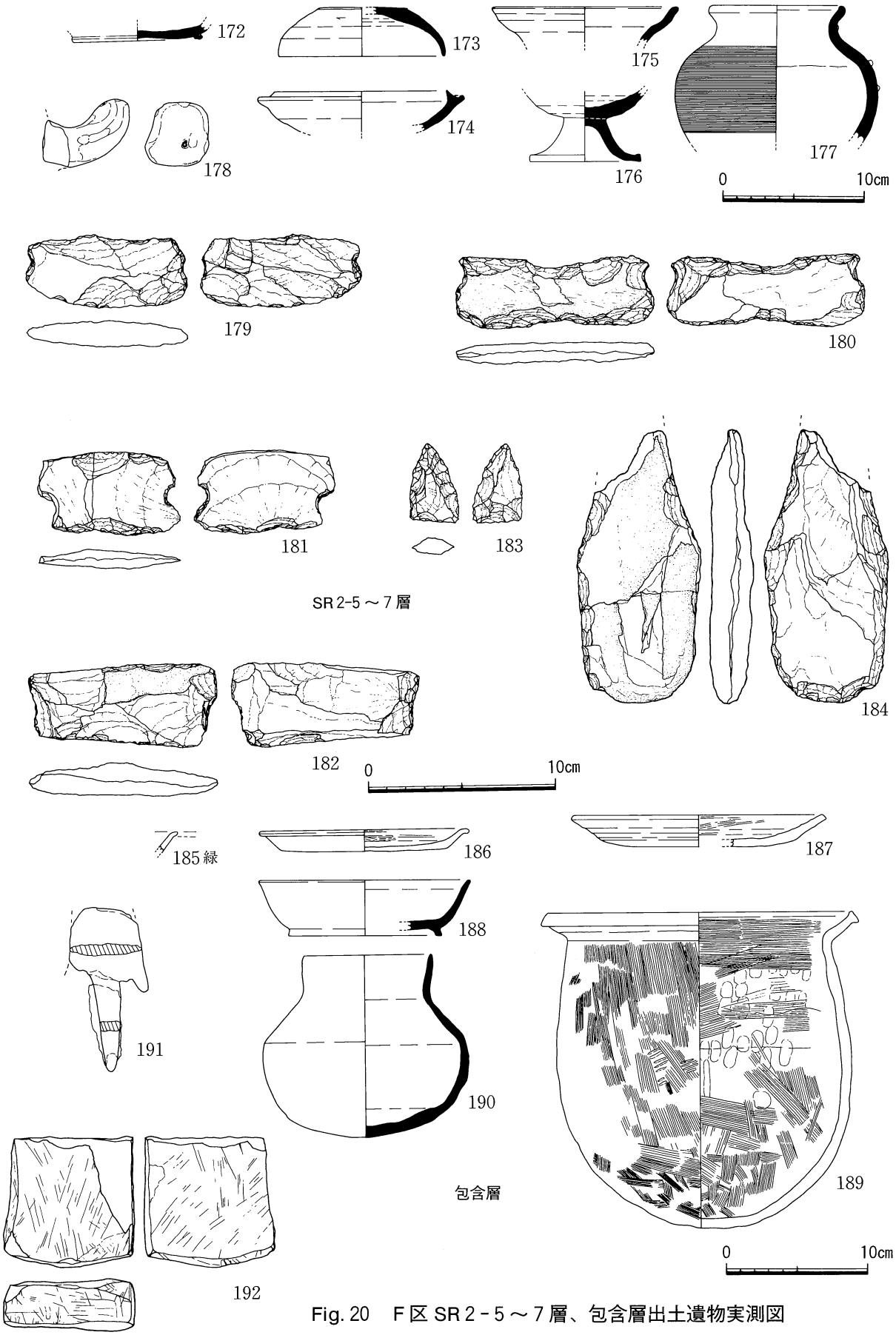


Fig. 20　F 区 SR 2 - 5 ～ 7 層、包含層出土遺物実測図

（縮尺は土器1/4、179～182・184・192は1/3、183・191は1/2）

遺物観察表（土器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
12	99	ST 8	弥生土器 壺	14.2		16.0		チャート粗粒砂、長石細粒砂、赤色風化礫を含む。橙7.5 YR 7/6。全面摩耗、調整観察困難。外面ハケの可能性。	下胴部に煤けのような痕あり。
〃	100	〃	〃	13.3				チャート、赤色風化礫の細粒砂～小礫、火山ガラスを含む。橙7.5 YR 7/6。口縁外面にわずかに横ナデが残るのみ。	摩耗顕著。
〃	101	〃	〃	14.0				チャート、砂岩の小礫（2～3㎜）、赤色風化礫の細粗粒砂（～1.5㎜）、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5 YR 7/4。外面は縦ハケ後、弱くナデ。内面は押圧後、横ハケ。	
〃	102	〃	〃	13.6				チャート、泥岩、赤色風化礫の細粗粒砂（～3㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5 YR 7/6。口縁端はハケ仕上げ。口縁内面横ハケ。外面縦ハケ。	
〃	103	〃	〃					多量のチャート、砂岩、泥岩の小礫（2㎜大）、チャート、砂岩、泥岩、赤色風化礫を含む。橙5 YR 6/6。	内外とも摩耗。
〃	104	〃	弥生土器 甕	14.8				多量のチャート小礫、長石細粒砂、微量の赤色風化礫を含む。橙5 YR 6/6。口縁端部をつまみ出して強く横ハケ。	焼成良好。
〃	105	〃	〃	17.2				多量の石英、雲母の細粒砂（～1.5㎜）、赤色風化礫の細粒砂（～1.5㎜）を含む。明赤褐5 YR 5/6。内面、頸部下までケズリ。	焼成良好。搬入品。
〃	106	〃	〃	15.0		19.5		チャート粗粒砂、長石細粒砂、微量の赤色風化礫を含む。明赤褐2.5 YR 5/6。内面に摩耗あり。ケズリの可能性あり。外面は肩部以外は全て煤け。	
〃	107	〃	弥生土器				5.2	チャート、泥岩の小礫、チャート細粗粒砂、長石細粒砂、火山ガラスを含む。赤褐2.5 YR 4/6。微細な気孔を多くもつ。	焼成良好。
〃	108	ST 8 P 1	〃				4.6	チャート細粒砂～小礫、長石細粒砂を含む。にぶい橙2.5 YR 6/4。内外に接合痕。接合部に内側より押圧。外面は被熱、赤変。	摩耗顕著。
〃	109	ST 8 埋土上層	弥生土器 鉢	(14.6)	7.1		5.0	多量のチャート小礫、長石細粒砂、赤色風化礫を含む。にぶい黄橙10 YR 7/3。内面粗いハケ。	外面器表の摩耗顕著。
〃	110	ST 8	〃	18.3				チャート、砂岩、泥岩の細粒砂～小礫、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5 YR 7/6。	摩耗顕著。
〃	111	〃	弥生土器 高杯		5.9			チャート粗粒砂を含む。灰白5 Y 8/2。分割成形。一部にミガキ残る。	器表の摩耗顕著。
〃	112	〃	〃	16.0				多量のチャート粗粒砂、赤色風化礫、長石の細粒砂少量を含む。橙7.5 YR 7/6。	全面摩耗顕著。
13	113	〃	弥生土器 高杯	21.2				チャート小角礫～細粒砂、砂岩小円礫、赤色風化礫の細粒砂を含む。橙7.5 YR 7/6。	摩耗により、調整観察困難。
〃	114	〃	〃	27.7				チャート、泥岩、砂岩の細粒砂～小礫（～2.5㎜）、赤色風化礫の細粗粒砂（～1㎜）、長石細粒砂を含む。にぶい黄褐10 YR 5/4。	内外摩耗顕著。
14	119	SK 2	〃	22.4				チャート角礫、赤色風化礫の細粗粒砂、長石細粒砂、火山ガラスを含む。にぶい赤褐5 YR 5/4。内面と、口縁部外面に横ナデ。口縁接合部は、断面で非常に明確。	
〃	120	〃	〃					チャート細粒砂～小礫、火山ガラス、少量の赤色風化礫の細粗粒砂を含む。灰白10 YR 8/2。	外部から2次的に被熱。外面の2/3は摩耗顕著。
〃	121	〃	弥生土器 甕	16.3				チャート、砂岩の小円礫、チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、長石の細粒砂、火山ガラスを含む。橙5 YR 7/6。	内面は摩耗顕著。口縁外面煤け。
15	122	落込み1	壺	14.0				チャート小礫（～3.5㎜）、少量の赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙。頸部外面粗いハケ目を斜方向に丁寧に施す。頸部内面指頭圧痕。口縁内面に横ハケ。	
〃	123	〃	〃			25.7		チャート、砂岩、赤色風化礫の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。にぶい黄橙10 YR 7/4。頸部下に鋸歯状文。胴部中位に（ハケ原体による）波状文様のハケ目。内面縦位のナデ。	
〃	124	〃	甕	15.0				チャート、砂岩の小礫（～5㎜）、少量の赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。にぶい黄橙色。肩部、粗いタタキを縦ハケで消す。内面、接合部に指頭圧痕残る、粗い斜方向ハケ。	
〃	125	〃	弥生土器 鉢	7.0	9.0	8.5	4.2	チャート、砂岩の小礫（～3.5㎜）、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙10 YR 7/3。外面弱いハケ痕。内面ナデ。	外面摩耗。
〃	126	〃	弥生土器 高杯				16.4	チャート、砂岩の小礫（～3㎜）、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。橙5 YR 7/8。分割成形。外面縦方向ハケ後ミガキ。内面上部弱いシボリ目。	内外摩耗。
16	127	SB 2-a P 5	須恵器 杯身	12.7				長石、黒色粒の細粗粒砂を含む。灰白N 7/0。	受部径14.0㎝。
〃	128	SB 2-b P 1	〃	14.6				長石、黒色粒の細粒砂を含む。灰白色。受部端を上方へ折り返すように回転ナデ。	
〃	129	SD 16	須恵器 高杯					長石の細粒砂、チャート細粒砂～小礫（～3㎜）、火山ガラスを含む。灰。透かしは2段3方向。脚中央部に凹線2本。内面にシボリ目。杯部内底に一方向のナデ。	焼成堅緻。
〃	130	〃	須恵器 はそう			(9.2)		長石、赤色風化礫（黒変）の細粒砂～小礫（～1.2㎜）を含む。灰白5 Y 8/1。	焼成不良。摩耗顕著。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
16	131	SD 15	須恵器 大甕	34.0				灰N 5/。外面横ナデ後、タテ方向の櫛描文を施す。口縁部から接合部内面に断続横ナデ。端部内面のみ、2段の連続ナデ。体部内面、同心円当具痕を残す。	
〃	132	P 3	須恵器 高杯				10.7	長石、黒色粒の細粒砂を含む。灰白5Y 7/1。	
17	133	SD 10	土師器	13.9				チャート細粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR 7/6。回転ナデと見られる。	摩耗顕著。
〃	134	〃	土師器 皿	17.4	1.6		12.8	極めて精選された軟質の胎土。赤色風化礫の細粗粒砂、チャート細粒砂を含む。橙5YR 6/8。	器表は摩耗顕著。
〃	135	SD 11	須恵器 壺				11.6	長石細粗粒砂、チャート、黒粒細粒砂含む。灰白5Y 7/1。内外回転ナデ。外底平滑。底部に火膨れ。	
〃	136	SD 12	須恵器 高杯					チャート微細粒砂、黒粒細粗粒砂を含む。灰7.5Y 6/1。杯部中央は一定方向のナデ。他は全て回転ナデ。	
18	137	集中1	弥生土器 壺	17.6				チャート角礫（～7㎜）、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR 7/4。頸部外面、縦位のハケをナデ消す。内面横又は斜方向のハケ痕を残す。	
〃	138 a	〃	弥生土器 壺	15.4				多量の角閃石、チャート小角礫（～3㎜）、赤色風化礫の細粗粒砂、少量の金雲母を含む。にぶい黄橙10YR 6/3。頸部、外面丁寧なハケ後弱い横ハケと弱いナデ、内面指頭痕。口縁部横ナデ。頸部亀裂は縦方向。	搬入品。
〃	138 b	〃	〃				6.4	含有鉱物は同上。暗褐10YR 3/3。内面ケズリ。体部下方外面、斜方向ヘラミガキ。	同上。焼成良好。
〃	139	〃	弥生土器 底部				6.4	チャート、砂岩の小礫（～3.5㎜）、火山ガラスを含む。浅黄橙10YR 8/4。	
〃	140	〃	弥生土器 壺				5.7	チャート、砂岩、赤色風化礫の小礫（～4.5㎜）を含む。浅黄橙7.5YR 8/6。外底ナデ。	摩耗。外底に黒斑。
〃	141	〃	〃				9.0	チャート、赤色風化礫の小礫（～7㎜）、多量の火山ガラスを含む。にぶい橙5YR 7/4。外面縦ハケをナデ消す。内面は斜方向の粗いハケ目、内底に指頭圧痕を残す。	
〃	142	〃	弥生土器 底部				6.4	チャート、赤色風化礫の小礫（～3㎜）を多く含む。にぶい橙7.5YR 7/4。外面ハケ。内底指頭圧痕を残す。	
〃	143	〃	弥生土器 甕				4.7	チャート小礫（～5㎜）、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR 7/4。外面弱いハケ痕残す。内面は上方へのナデ。外底に繊維圧痕。	
〃	144	〃	弥生土器 高杯					チャート、砂岩の細粒砂～小角礫（～2.8㎜）、火山ガラスを含む。浅黄橙10YR 8/4。杯部内面ミガキ。	摩耗あり。
〃	145	〃	〃					チャート、砂岩の細粒砂～小礫（～3㎜）、火山ガラスを含む。黄橙7.5YR 7/8。分割成形。	摩耗あり。
〃	147	集中2	弥生土器 壺	14.4				チャート、砂岩、赤色風化礫の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。黄橙7.5YR 8/8。口縁外面指頭圧痕残す。頸部外面に縦ハケ痕残る。頸部内面斜方向のケズリ。	全面摩耗。
〃	148	〃	〃					チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、多量の火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR 6/3。口縁部は接合部より欠損。外面は頸部に縦位の、体部には多方向のハケ。内面はハケ。接合部に指頭圧痕残る。	胴部外面に大きな黒斑と赤斑。
〃	149	〃	〃	20.2				チャート、砂岩の小礫（～3㎜）、赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙7.5YR 8/6。	全面摩耗顕著。
〃	150	〃	〃	18.1	31.8	20.3	6.0	チャート、砂岩の小礫（～3.5㎜）、火山ガラスを含む。橙5YR 7/8。外面ハケ。内面；体部上方への削り後ナデ、頸部は指頭圧痕→横ケズリ→ナデ、口縁は横ハケ→横ナデ。	外面煤け。一部剥離。
〃	151	〃	〃			19.7	6.8	多量のチャート、砂岩の小礫（～8㎜）、火山ガラスを含む。橙5YR 7/6。外面ハケ。内面ナデ。	内外とも摩耗。外面煤け。
〃	152	〃	弥生土器 底部				3.6	チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。橙5YR 6/8。内底に指頭圧痕。	全面摩耗。
〃	153	〃	弥生土器 高杯					チャート、赤色風化礫の小礫（～2.5㎜）、火山ガラスを含む。黄橙7.5YR 8/8。	摩耗顕著。
〃	154	〃	〃					チャートの小礫（～3.5㎜）、多量の火山ガラスを含む。褐灰10YR 5/1。分割成形。外面にハケ痕残す。	
19	155	〃	弥生土器 壺	17.3				チャート、砂岩の小礫（～5㎜）、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR 7/3。口縁外面は横ナデ、内面横ハケ。上胴内外ハケ目をナデ消す。	
〃	156	〃	〃				7.2	チャート、砂岩の小礫（～4.5㎜）、火山ガラスを含む。黄橙10YR 8/6。外面に弱いハケ痕を残す。内底は摩耗。	内外ともに摩耗。
〃	157	〃	〃			20.7	7.5	チャート小礫（～4.5㎜）、火山ガラスを含む。にぶい褐色。外面ハケ仕上げ。内面接合部に指頭圧痕残す。	壺だが、外面煤け。
〃	158	〃	弥生土器 甕	15.0		19.0		チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。橙5YR 7/6。口縁までタタキ。外面、粗いタタキ後細かい縦ハケ。内面は細かいハケ。	外面煤け。
〃	159	〃	〃	19.0		18.1		チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。にぶい黄橙10YR 7/3。外面粗いタタキ後縦ハケ。内面ナデ。	外面煤け。
〃	160	〃	〃	14.7		16.7		チャート、砂岩の小礫（～6㎜）を含む。灰黄褐10YR 6/2。内外とも横又は斜方向のナデ。肩部接合痕顕著。	口縁外面2次被熱赤変。胴部中位以下摩耗・剥離。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
19	161	集中2	弥生土器甕	16.8				チャート、泥岩の小礫（～4㎜）、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙5YR7/6。口縁部横ナデ。上胴部外面は斜方向ハケをナデ消す。上胴部内面は横ハケ痕残す。	
〃	163	集中3	弥生土器壺	13.8				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR7/4。外面ハケ。内面、口縁部ハケ残す。内面頸部ナデ。	
〃	164	〃	〃			23.2		チャート小角礫（～4㎜）、赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙7.5YR6/4。外面縦ハケ後、横方向のハケとナデ。内面は丁寧なナデ。	
〃	165	〃	〃	11.4				チャート、砂岩、赤色風化礫の小礫（～3㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外面縦ハケ残る。	摩耗顕著。
〃	166	〃	弥生土器甕	16.0		17.8		チャート小礫（～2㎜）、赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。赤黒色。胴部外面はコテアテ。胴部内面は横方向のハケ後縦ハケ。頸部外面縦位のナデ痕顕著。口縁部は横ナデ痕認めず。	焼成良。
〃	167	〃	〃	15.0		18.1		チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。にぶい橙色。内外面ハケ。	摩耗。外面煤け。
〃	168	〃	〃	16.3				多量のチャート、砂岩、赤色風化礫の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5YR6/4。	摩耗。口縁外面煤け。
〃	169	〃	弥生土器高杯					多量のチャート、砂岩の小礫（～6㎜）、少量の赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙5YR6/8。一体成形。3孔。外面ハケ痕。内面シボリ目。	摩耗あり。
〃	170	〃	〃					チャート、砂岩の小礫（～3㎜）、赤色風化礫の細粒砂、火山ガラスを含む。黄橙10YR8/6。分割成形。外面ヘラミガキ。内面接合痕とシボリ目。	
〃	171	〃	弥生土器高杯					チャート、砂岩の小礫（～4㎜）、少量の赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙7.5YR8/6。2孔ずつが組になる6孔。脚内面に接合痕とシボリ目。	全面摩耗。
20	172	SR 2 5～7層	須恵器杯B				8.9	チャートの小礫（～2.5㎜）を含む。灰白10Y7/1。内底中央に一定方向ナデ。	
〃	173	〃	須恵器蓋	11.8	3.5			チャート小礫（～4㎜）を含む。灰白5Y7/1。天井外面回転ケズリ後、頂部をナデ。	
〃	174	〃	須恵器杯H身	12.1				長石の粗粒砂を含む。灰5Y6/1。内底多方向ナデ。	受け部径14.6㎝
〃	175	〃	須恵器はそう	12.9				チャートの粗粒砂を含む。灰白7.5Y7/1。	焼成不良、摩耗顕著。
〃	176	〃	須恵器高杯				7.8	杯部と脚部で発色、胎土が異なる。杯部は長石の小礫（～6㎜）、脚部は長石の細粒砂を含む。灰白2.5Y7/1。杯部下部回転ケズリ。	
〃	177	〃	須恵器壺	9.0		14.3		長石の小礫（～2.5㎜）を含む。灰5Y6/1。回転カキ目。	外面降灰付着。
〃	178	〃	土師器甑把手					チャートの小礫（～3.5㎜）、赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外面は指頭圧痕、細かいハケ残る。	外面煤け。
〃	185	包含層	緑釉陶器					胎土精選。石英、長石の細粒砂を含む。灰白5Y8/2。内外に薄緑色の釉。	
〃	186	〃	土師器皿A	14.4	1.7		12.0	長石、赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙7.5YR8/6。口唇部は外へ折り曲げ肥厚させる。体部回転ナデ。内面連続ミガキ。外底ナデ。	
〃	187	〃	〃	17.6	2.3		13.8	赤色風化礫の粗粒砂、火山ガラスを含む。浅黄橙7.5YR8/6。外底ナデ。他は回転ナデ。内面は幅広の連続ミガキ。	
〃	188	〃	須恵器杯B	14.8	4.0		10.8	長石の粗粒砂、火山ガラスを含む。灰白色。内底多方向ナデ。他は全て回転ナデ。	
〃	189	〃	土師器甕	21.6	22.5	20.9		チャート、泥岩、赤色風化礫の小礫（～4㎜）、火山ガラスを含む。橙7.5YR7/6。外面タタキ後、上半縦ハケ、下部多方向ハケ。内面指頭圧痕残る。上半横ハケ。下半多方向ハケ。	Ⅰ群。外面下部煤け、赤変、剝離。内面上半に黒色の付着物。
〃	190	〃	須恵器壺	8.9	13.0	14.5		チャート小礫（～5㎜）、黒色粒を含む。灰白10Y8/1。	焼成不良、摩耗顕著。

遺物観察表（石器・土錘）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）				材　質	特　徴
				全長	全幅	全厚	重量（g）		
13	115	ST 8	打製石斧	(10.5)	7.1	2.4	207.4	頁岩	中央部で折損。両側縁から両面とも加工。
〃	116	〃	石鏃	2.8	1.7	0.3	1.9	サヌカイト	平基式無頸石鏃。両側縁に膨らみ。
〃	117	〃	叩石	10.6	11.3	4.3	750.0	砂岩	一側面に敲打痕。
〃	118	〃	鉄鏃	9.0	2.1	0.5	13.2	鉄	柳葉型で関部を持たない。一部錆が厚いところあり。
18	146	集中 1	石包丁	(6.3)	4.4	0.9	28.0	粘板岩	被熱認む。欠損。表面に自然面残す。端部抉入。
19	162	集中 2	〃	9.3	4.9	1.2	72.3	頁岩	部分的に磨き認む。両側から穿孔。端部抉入。
20	179	SR 2 5～7 層	〃	8.5	3.9	1.4	50.6	頁岩	両長側縁に加工痕残り、ともに摩滅あり。
〃	180	〃	〃	10.4	3.8	1.1	50.9	頁岩	表面に自然面残す。側縁から刃部を作出、両端抉入。両長側縁に 2 次的加工の可能性あり。
〃	181	〃	〃	7.5	4.5	1.0	33.9	サヌカイト	刃部と抉りに加工痕、両端抉入。刃部を形成しない長側縁は折断か。
〃	182	〃	石包丁か	9.9	4.5	1.8	820.0	頁岩	表面に自然面残す。
〃	183	〃	石鏃	2.9	1.8	0.6	2.9	サヌカイト	平基式無頸石鏃。側縁に膨らみ。厚みあり。片面に自然面を僅かに残す。一方の主面に主剝離面が残る。
〃	184	〃	打製石斧	14.6	6.5	2.2	230.8	頁岩	基部欠損。片面に自然面を残す。敲打により端部に刃部作出。側縁も敲打により平行に作出。基部は細く加工。
〃	191	包含層	鉄鏃	5.8	2.9	0.5	5.8	鉄	欠損。逆刺を有す。
〃	192	〃	砥石	(7.0)	6.9	2.8	(223.6)	砂岩	欠損。4 面を使用。若干の擦痕。

※ 語句等はＣ・Ｅ区に準ずる。

3．H区

(1) 調査区の概要と基本層準

① 調査区の概要（Fig. 40）

遺跡中央部に位置する東西方向の調査区である。本来、水路設置に伴うトレンチ状の調査区であるが、検出例としては本県最大級の掘立柱建物の一部が検出されたため、関係機関と協議の上調査区を一部拡張し、掘立柱建物群の検出を行った。以下では全体を調査区と称し、必要に応じ、本来の調査区をH本区、拡張部を拡張区、そのうちH本区北側の拡張区を北拡張区、南側の拡張区を南拡張区と呼ぶ。H本区では弥生時代及び古代の全遺構を精査したが、拡張区では掘立柱建物群の平面的規模を確認することを目的としたため、原則的に弥生時代に属する遺構の全てと古代に属する遺構の一定部分が未検出であり、検出した掘立柱建物も多くは柱痕の確定に留め、完掘していない。H本区は幅4.2m前後、延長109m、南拡張区は東西47m×南北30m、北拡張区は東西62m×南北12mを測る。

弥生時代の住居址には偏在が見られないが、古代においては特に調査区中央部からやや東よりにかけて、各種遺構が高密度で、重複して存在する。この区域では包含層出土遺物も濃密であった。次項でも述べるように古代の包含層は整地層の可能性がある。V層はH本区8グリッドで浅い落ち込み状に南北のラインが検出され、以東7グリッドまで存在した。さらに、南拡張区でも東へ落ち込む南北ラインが掘立柱建物と平行して検出されており、連続するものと思われ、建物群が形成される以前に整地されたものと考えられる。この南拡張区の落ち込み上層からは、鉄滓、製塩土器、土錘、土師器、須恵器が出土した。なお、H本区では下記のごとくV層上面での遺構検出は困難で、除去した後にプランを決定した。

調査区の西端に位置する遺構群は、川原石と土による現堤防の直下で検出されたものであり、以西は物部川の現氾濫原となっていることから、本来遺跡はさらに西方へ展開していたことが確認できた。

② 基本層準（Fig. 22・23）

Ⅳ-1～Ⅶ層は弥生時代から古代までの遺物を包含し、Ⅳ-1、2層は普遍的に堆積していると考えられる。特にⅣ-1層は包含遺物が多く、コンテナケース50箱相当に及んだ。Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層は偏在する。各包含層は比較的薄く土色も似通っていたため、特にH本区での遺構検出は全包含層除去後になったものが多い。また、各層が必ずしも整然と堆積している証左はない。しかし土層断面でこれら層準と遺構との切合い関係が看取できた例や、検出時に水準差があった場合に、これらを各遺構の先後関係についての判断材料の一つとし得た。なお、Ⅳ-1～Ⅶ層は遺構との切合い関係や土質、遺物から考えて、整地層の可能性がある。

H区の地山レベルはA、D区と比較して50～60cm程度低く、H区内では東部～中央部に比して西部が30cm前後低い。地山は東部で10YR 4/4褐色～6/6明黄褐色粘土質シルト、西部で10YR 5/6黄褐色シルト質粘土であるが、6グリッドのST 9やSK 20の直下では数cm～10数cm大の礫面が存在する。また、18～21グリッド付近の地山は砂や10数cm大までの礫からなる堅固な層であり、深さ1mのサブトレンチ以下に続いていた。

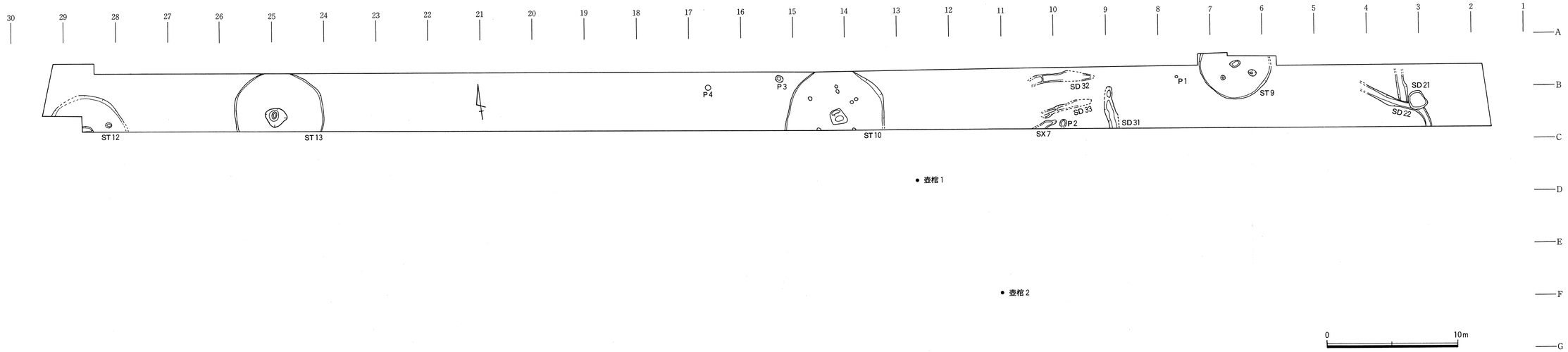


Fig. 21　H区検出遺構全体図（弥生）

Ⅰ層　：耕作土。下層に黄色シルト質粘土層を伴う。

Ⅱ層　：旧耕作土。下層に黄色シルト質粘土層を伴う。

Ⅲ層　：10 YR 4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。下層に10 YR 4/6褐色シルト質粘土層を伴う。西部と北拡張区北壁で確認できるが、中央部には存在しない。

Ⅳ-１層：10 YR 3/3暗褐色粘土質シルトにMn粒を含む。Ⅳ-２層よりMn粒が大きく、最も多量の遺物を包含する。Ⅳ-２層に比して締りの弱い部分あり。

Ⅳ-２層：10 YR 3/2黒褐色粘土質シルトにMn微細粒を含む。

Ⅴ層　：10 YR 5/3にぶい黄褐色粘土質シルトに地山土塊を含む。７～８グリッドで確認でき、南北に広がりを持つと見られる。

Ⅵ層　：10 YR 4/4褐色粘土質シルトにMn粒を含む。中央部に存在した。

Ⅶ層　：10 YR 3/2黒褐色（やや暗め）粘土質シルトに比較的大粒のMn粒を含む。西部に存在した。

(2)　弥生時代の検出遺構と遺物

①　竪穴住居

ST 9　(Fig. 24・25)

調査区の東部にある。直径5.4ｍの円形プランを有する竪穴住居であるが、半分近くが調査区外に出ている。深さは45㎝前後を測るが、中央部分は５～９㎝深く皿状の落込みを呈しており、中央ピットに向かって緩やかに傾斜している。中央ピット（Ｐ１）は、70㎝×50㎝の隅丸長方形をなし深さは７㎝前後と浅い。床面には中央ピットの他に２個の柱穴が掘られている。Ｐ２は、直径40㎝、深さ45㎝を測り径10㎝前後の柱痕跡が確認できた。検出面直下には拳大の河原石が柱痕跡を囲むように配されている。Ｐ３は、長軸60㎝、深さ23㎝の楕円形のピットで、東側の肩部に人頭大の河原石が置かれている。埋土はⅠ層：褐色砂質土層、Ⅱ層：暗褐色砂質土層で、Ⅲ層：褐色粘土層は高床部と低床部の間に部分的に堆積している。そしてⅢ層に一部重なるように中央ピットと低床部に炭化物層の堆積が認められる。

遺物は床面から壺（１・３）、甕（５）、鉢（６・７）、高杯（８・９）、器台（11）、土器底部（12・13・16～18）が、埋土Ⅰ層から磨石（19）、Ⅱ層より壺（２）が出土している。図示し得なかったものも含めてST 9出土の土器組成を口縁部の点数で示すと、壺７点、甕７点、鉢２点、高杯１点である。この他高杯脚部２点、器台脚部１点が出土している。これらの中で壺と甕の口縁部に凹線を有するものは各々３点見られ、凹線紋の比率は42.9％である。後期Ⅰ期の竪穴住居である。

ST 10　(Fig. 26・27)

調査区の中央部にある。直径7.5ｍを測る円形の大型住居である。北側の一部と南側の半分近くが調査区外に出ている。また東部の一部が撹乱を受けており、古代の遺構にも随所で切られている。セクションと床面の柱穴のあり方から明らかに２時期にわたっていることが判るが、面的に両者を掘り分けることができなかった。拡張によるものか切り合い関係による重複であるのかは判断が難しいが、中央ピットを共有していることや柱穴の位置関係からして拡張の可能性が高いものと考えられる。埋土は図示したようにⅠ層～Ⅻ層に分かれるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層が拡張後の新しい住居の埋

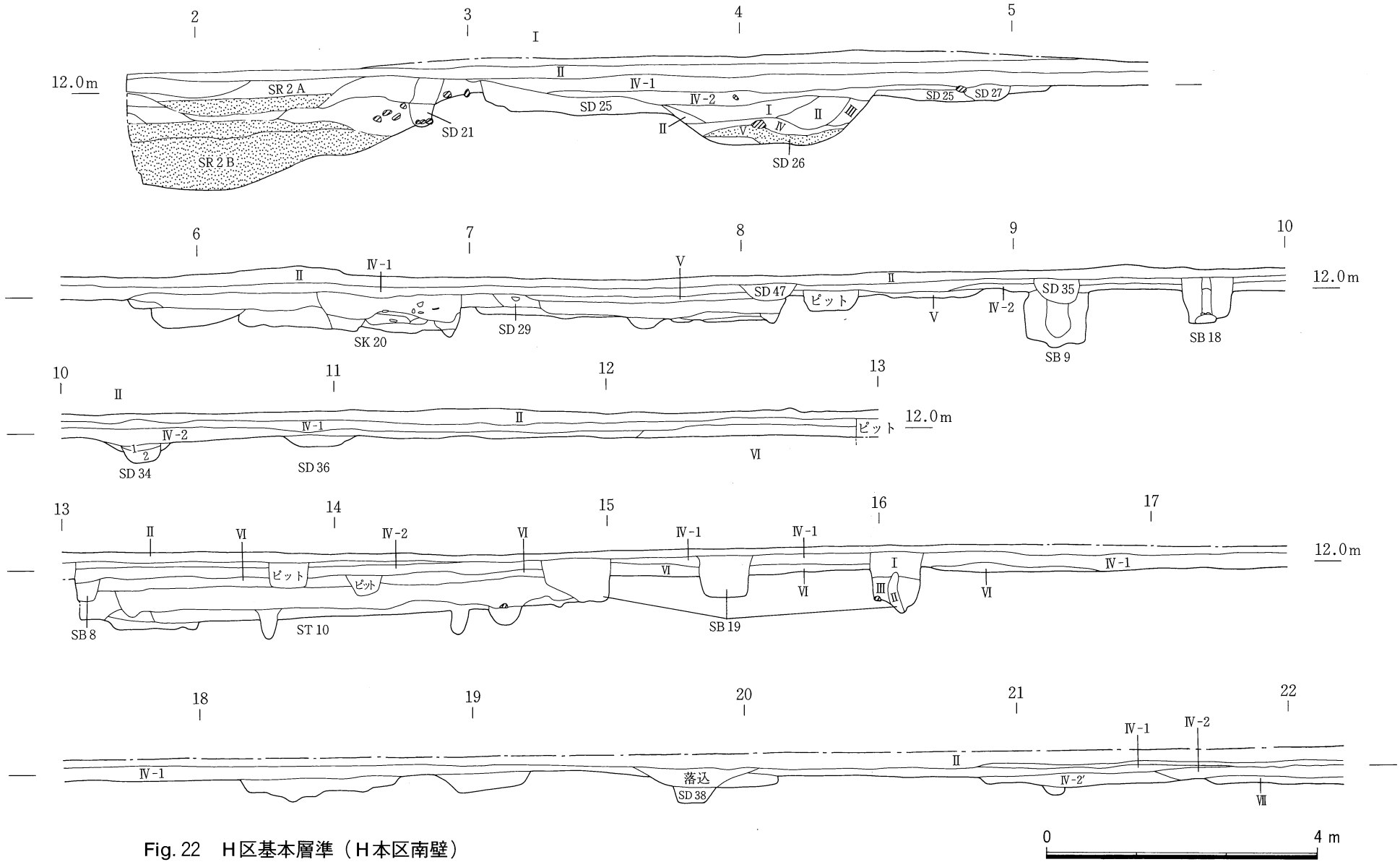
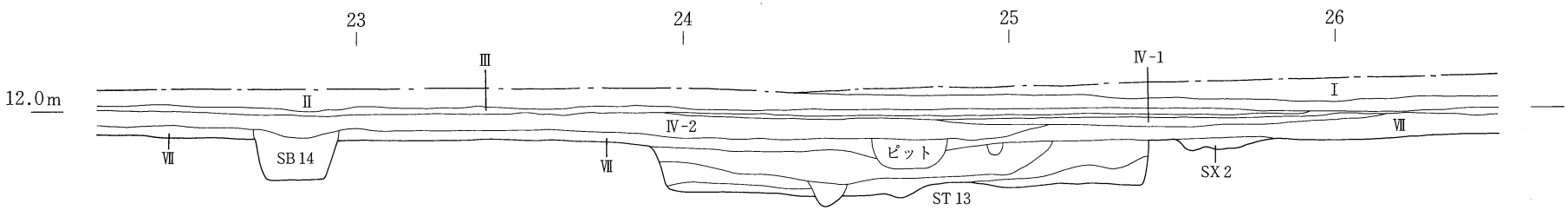
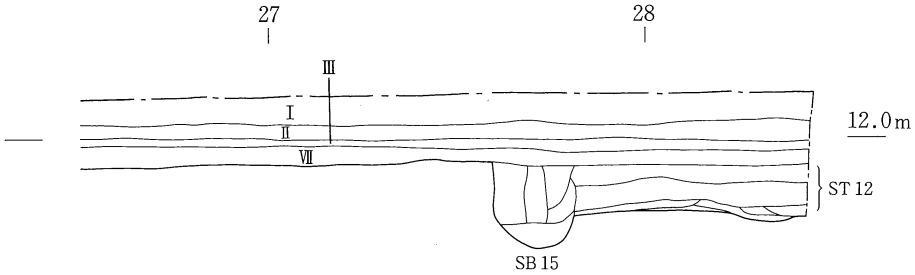


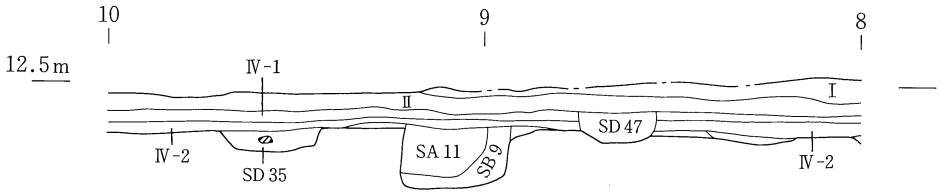
Fig. 22　H区基本層準（H本区南壁）

0　4 m





H本区南壁



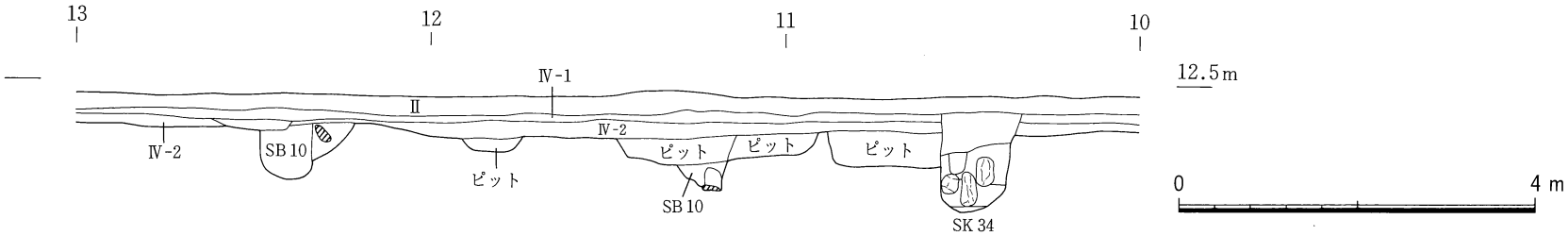


Fig. 23　H区基本層準

H本区北壁

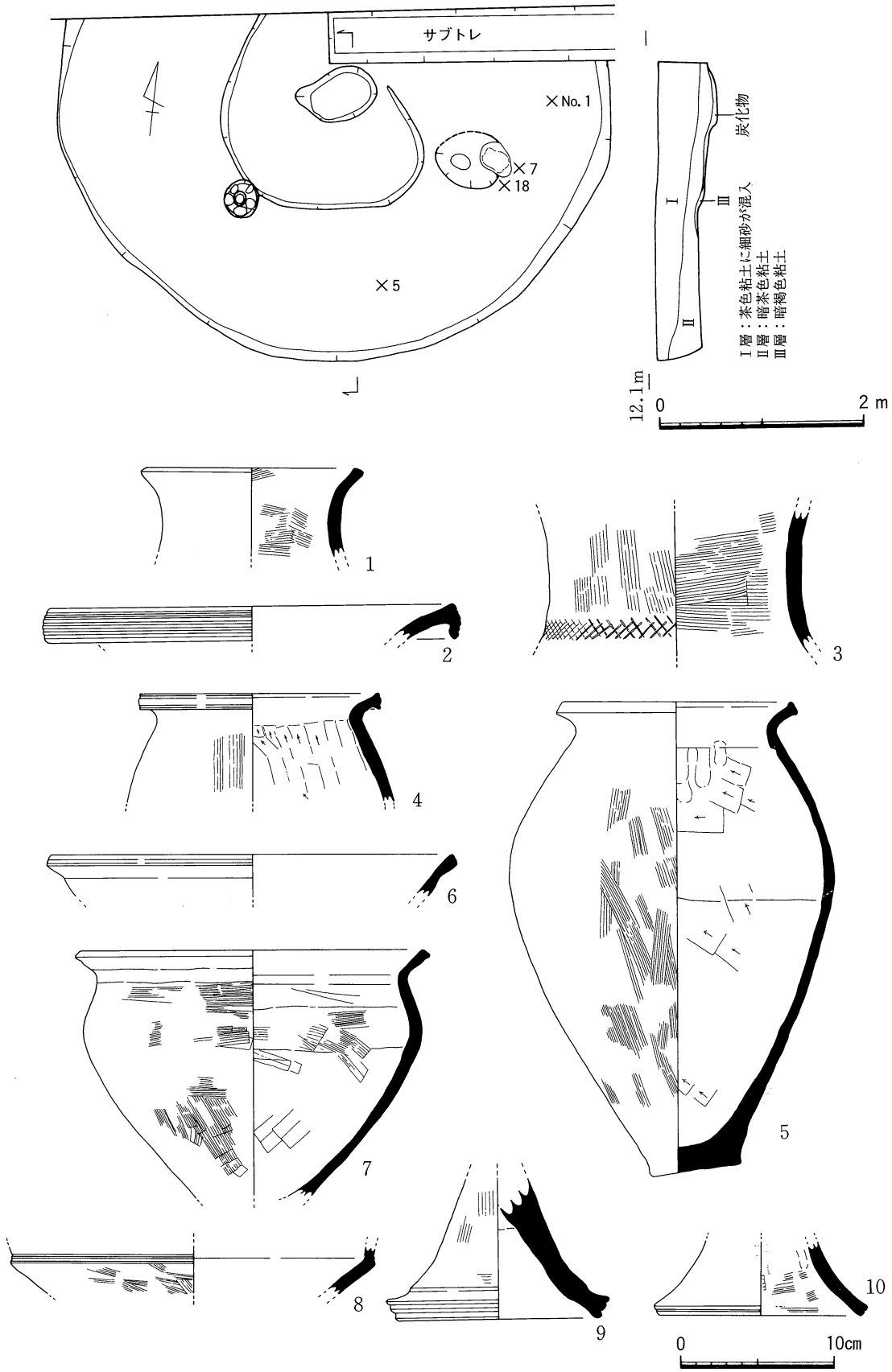


Fig. 24　ST 9 平面・セクション及び出土遺物実測図

壺（1～3）、甕（4・5）、鉢（6・7）、高杯（8～10）

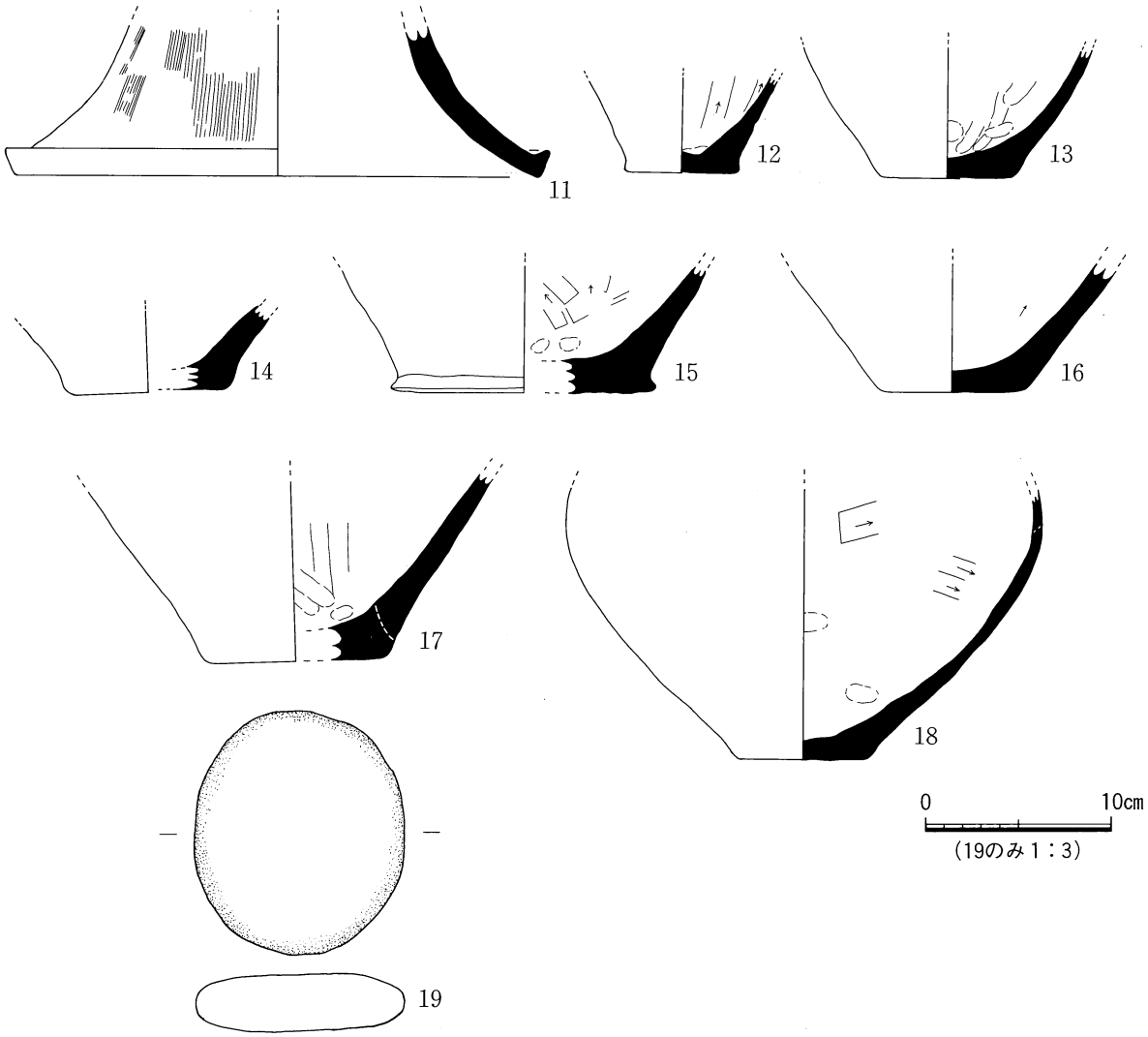


Fig. 25　ST 9 出土遺物実測図

器台（11）、壺底部（13・15・17・18）、甕底部（12・14・16）

土、Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ層などが古い段階の埋土に該当しよう。しかしⅦ層以下は自然堆積によるものではなく拡張に際して意識的に埋められた埋土ということになる。

新住居の床面までの深さは33cm前後、旧住居はそれよりさらに20cmほど深く掘られている。規模は新住居の方（直径7.5m）が一廻り大きく造られている。中央ピット（Ｐ１）は、底辺が1.1m、上底が0.9m、高さ1.2mの台形状のプランを呈し深さ20cmを測る。新住居の東壁には最大幅15cm、深さ７cmの壁溝が設けられている。柱穴は新旧合わせて９個が検出された。径20～30cmの円形または楕円形のプランを有し、深さは20～45cmを測る。Ｐ３・10は旧住居、Ｐ２・５・７は新住居に対応するものであるが、他のピットは何れに所属するのか明らかにできない。柱穴間距離は、Ｐ２－Ｐ10が1.8m、Ｐ９－Ｐ２が2.0m、Ｐ９－Ｐ３が1.4m、Ｐ３－Ｐ５が2.0mである。

遺物は、埋土及び床面から多量の土器、石器、鉄器片、ガラス小玉が出土している。口縁部の点数で土器組成を見ると、壺42点、甕74点、高杯10点、鉢６点である。これらの土器は、新旧何れの

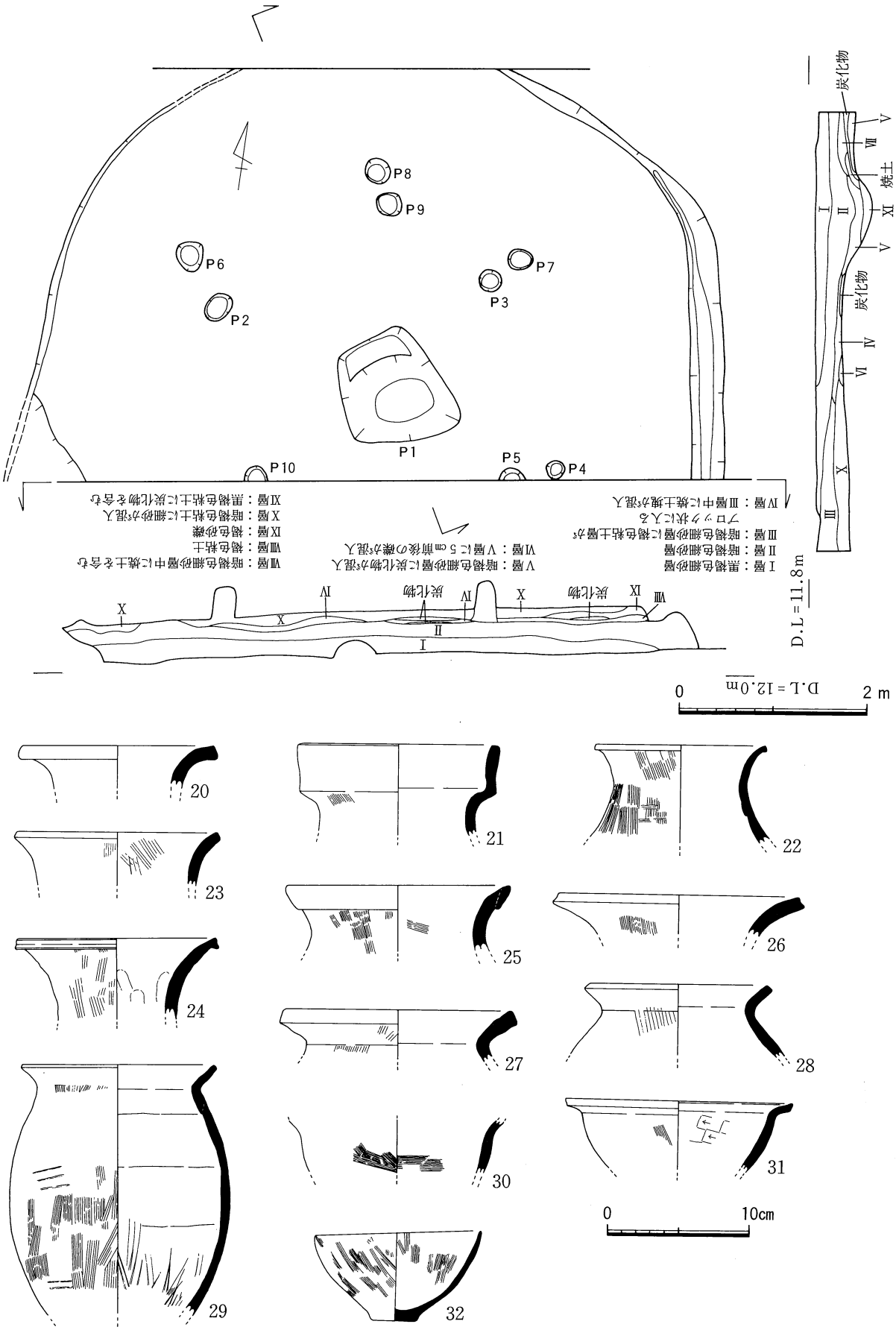


Fig. 26　ST 10平面・セクション及び出土遺物実測図（壺：20～26、甕：27～29、鉢：30～32）

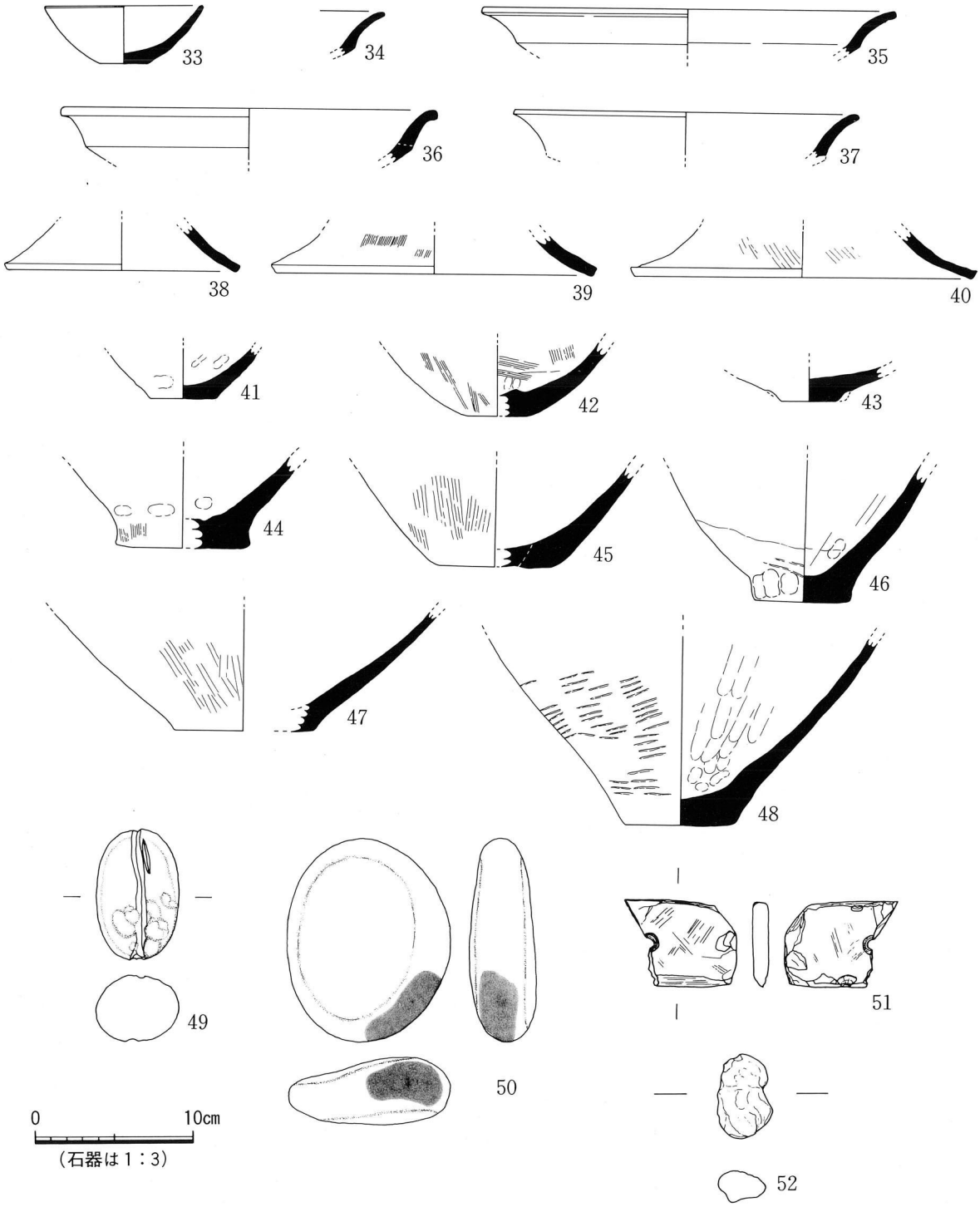


Fig. 27　ST 10出土遺物実測図

（鉢：33、高杯脚部：28～40、底部：41～48、
石包丁：51、石錘：49、磨石：50、鉄片：52）
（50のスクリーントーンは朱付着を示す）

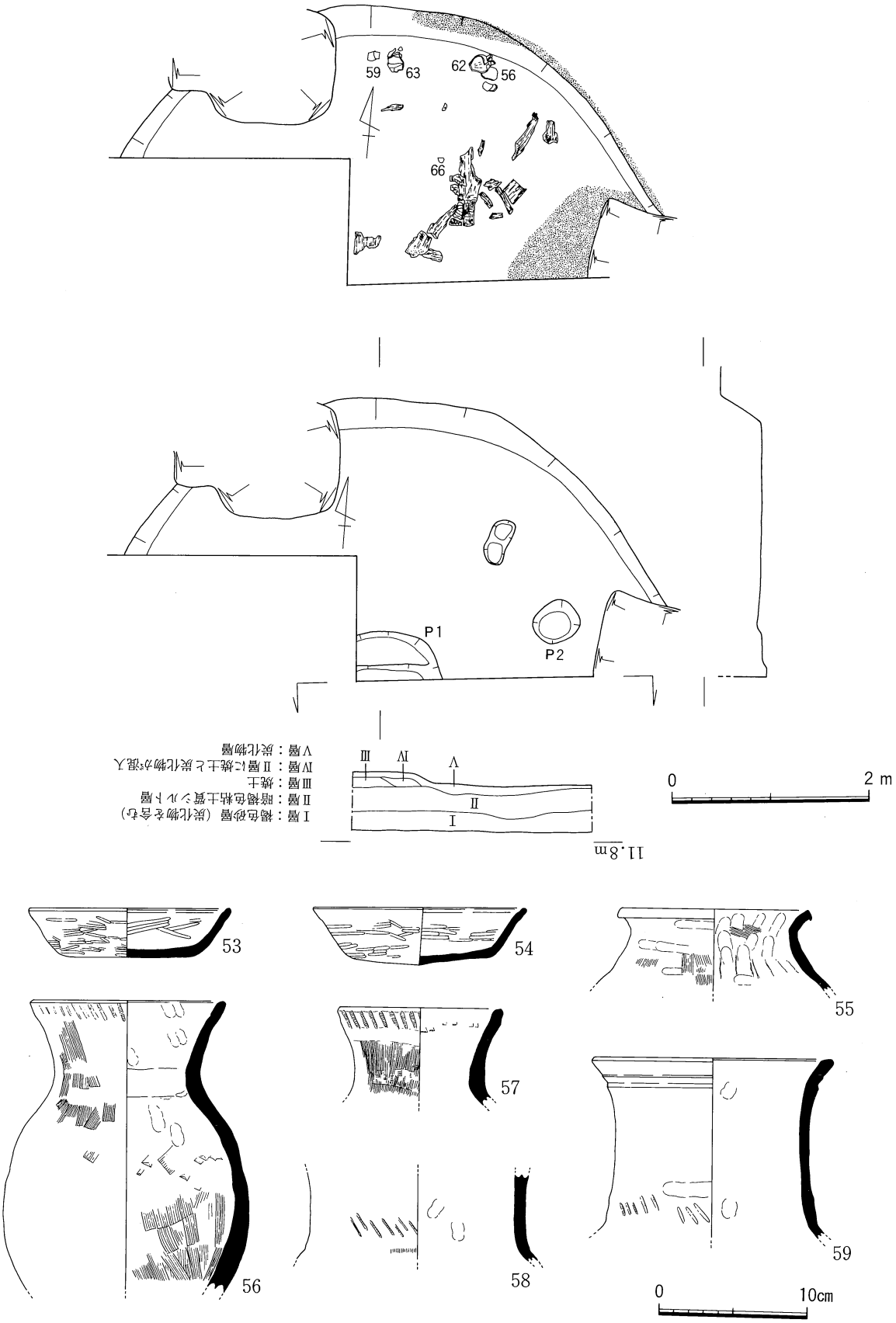


Fig. 28　ST 12床面遺物出土状況、同平面・セクション図及び出土遺物実測図
弥生土器（壺：56～59、甕：55）、土師器杯（53・54）

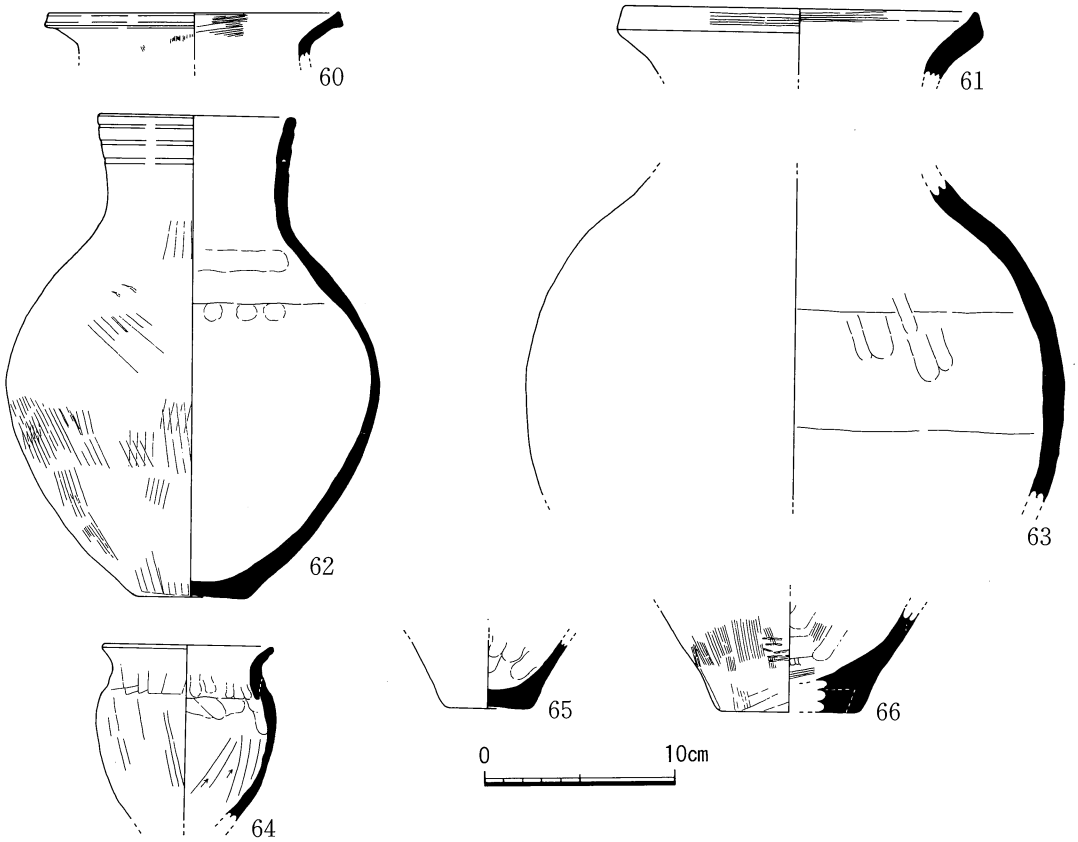


Fig. 29　ST 12出土遺物実測図（壺：60～63、甕：64、底部：65・66）

住居に属するのかについて峻別することが難しいが、出土状況から見てその大半は新住居に伴うものである。壺底部（41・46）、甕底部（48）、鉢（32・33）、石錘（49）は、新住居の床面近くの壁際から、他の多くの土器は新住居の埋土中から出土している。鉄片（52）は検出面直下から、石包丁（51）と朱付着礫（50）は旧住居埋土中から、ガラス小玉は旧住居床面から１点出土している。中央ピットからは多くの土器片が出土しているが図示できるものはない。Ｐ６からは50ｇの粘土塊が出土している。土器の中で凹線紋を施すものは見られない。新住居は後期Ⅱ-３期に属する。

ST 12（Fig. 28・29）

調査区の西端に位置する焼失住居である。南側も半分以上が調査区外に出ており、更に古代の柱穴に大きく切られている。直径６ｍ前後の円形住居で、深さは40cmを測り、壁溝は認められない。中央ピット（Ｐ１）の全体形を明らかにすることはできないが、長軸１ｍ以上の隅丸長方形状を呈するもので、段状に掘り込まれている。柱穴Ｐ２は、長軸50cmの楕円形を呈し深さ20cmを測る。埋土はⅠ層：炭化物を含んだ褐色砂層、Ⅱ層：暗褐色粘土質シルト層、Ⅲ層：焼土、Ⅳ層：Ⅱ層に焼土と炭化物が混入、Ⅴ層：炭化物層である。東側の床面と壁には焼土が広がり、床面のほぼ全面には炭化物が厚く堆積している。また床面には炭化した板状の建築材がみられ、床面の壁際から壺を主体とした土器が出土している。出土土器の組成を口縁部で見ると壺５点、甕３点で、壺のうち３点には凹線紋が施されている。この他古代の土師器杯（53・54）が埋土中より出土している。後期Ⅰ期に属する。

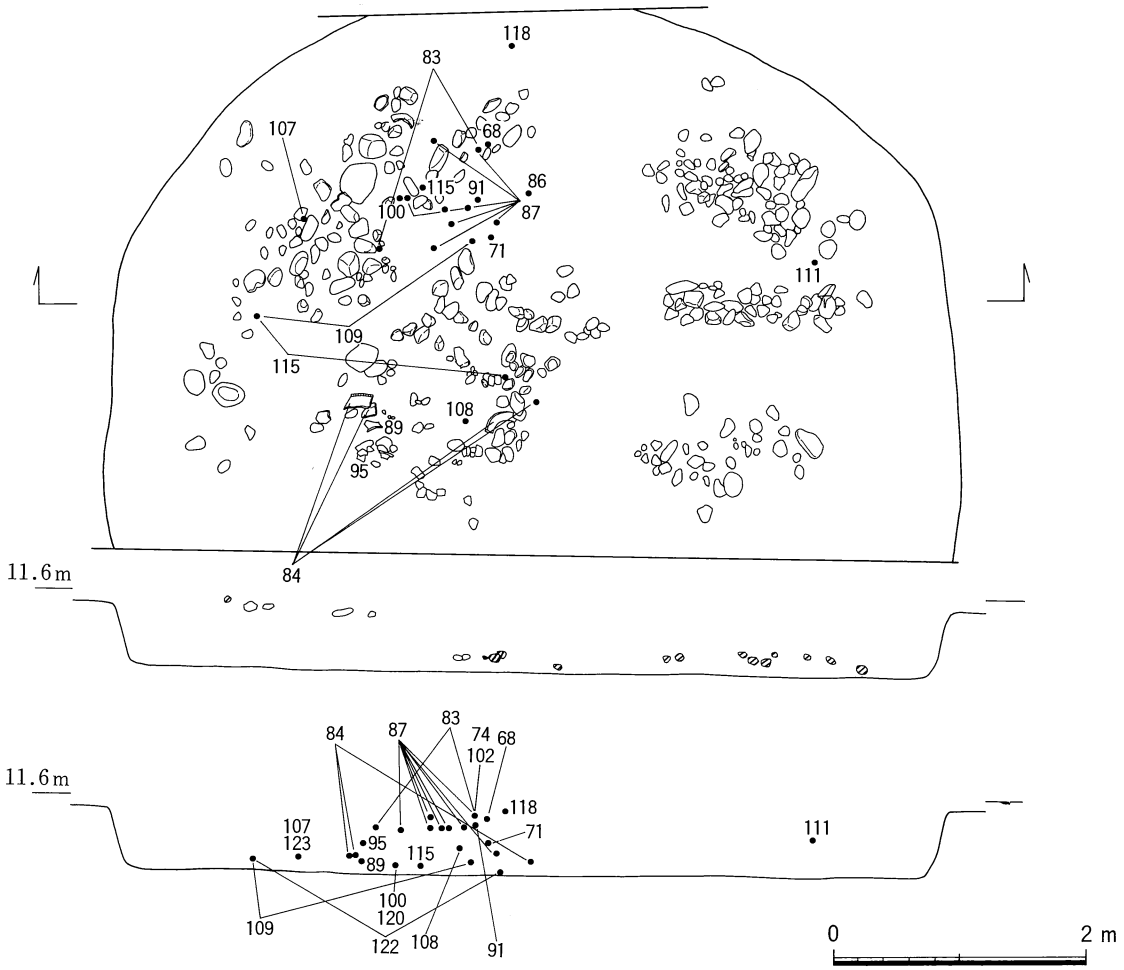
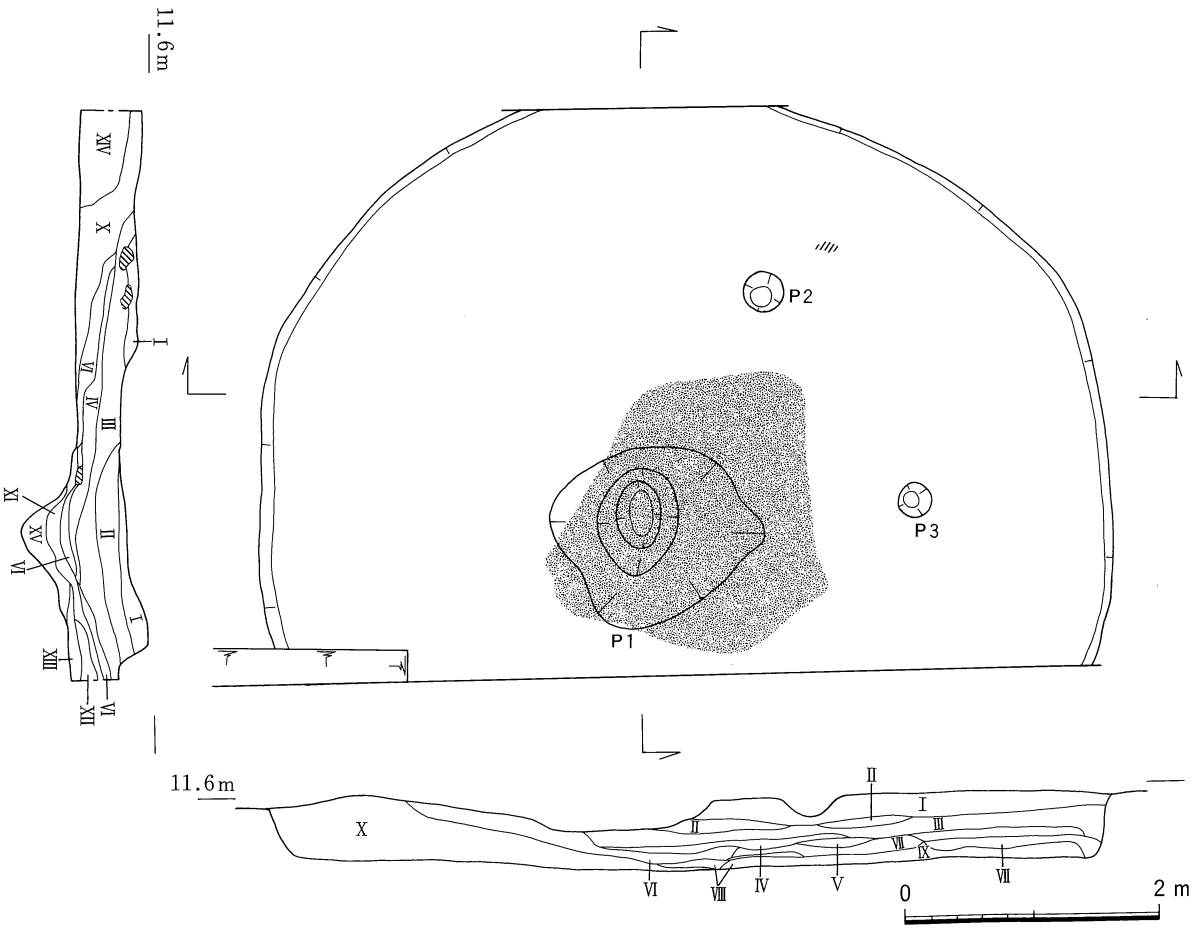


Fig. 30　ST 13河原石・遺物出土状況及び土器接合関係資料

ST 13（Fig. 30～34）

ST 12の東10mにある。南半分と北の一部が調査区外に出ている。直径７m前後の円形プランを有し深さは50cmを測る。中央ピット（Ｐ１）は長軸1.8mの不整形プランを有し段状に掘り込まれ深さ50cmを測る。中央ピット内及びその周辺には焼土の広がりが見られる。柱穴は２個（Ｐ２・３）を確認した共に直径30cm前後を測る円形で、深さはＰ２が30cm、Ｐ３が40cmを測る。両者の間隔は２mである。埋土は図示したようにX層を主体とするが、東側ではかなり細かく分層することができる。そして埋土中には多量の河原石が認められ、しかもこれらの河原石はいくつかのグループに分けることができることから、偶然の混入ではなく意識的な行為によるものと見なければならない。住居の廃棄に際して行われた行為である可能性が高い。

遺物は土器を中心に大量に出土しているが、床面出土のものは壺底部（122）と石包丁（123・124）のみで、他は埋土・礫間から出土している。これらの土器も河原石群のグループの中で接合関係にある傾向が認められることから、住居の廃棄に際して川原石と同様に扱われた可能性が高い。口縁部の点数で土器組成を見ると、壺が33点、甕が32点、鉢が７点、高杯が２点で高杯の脚部は８点出土している。これらの中で凹線紋を有するものは壺で13点（39.4％）、甕で12点（37.5％）、鉢で２



Ⅰ層：黒褐色細砂層
Ⅱ層：Ⅰ層に黄褐色シルト層が混入
Ⅲ層：黒褐色砂層に５～６㎝の礫を含む
Ⅳ層：黒褐色砂層に多くの焼土を含む
Ⅴ層：にぶい黄褐色粘土
Ⅵ層：Ⅴ層に５～15㎝大の礫を含む
Ⅶ層：黒褐色砂層に黄褐色粘土を含む
Ⅷ層：黒褐色粘土に焼土を含む
Ⅸ層：にぶい黄褐色粘土質シルト
Ⅹ層：砂と数mm～15㎝大の礫を含む黄褐色粘土
Ⅺ層：砂に５㎝大の礫を含む
Ⅻ層：にぶい黄褐色粘土に砂と数㎝の礫を含む
XIII層：黄褐色粘土混砂礫層に多量の炭化物を含む
XIV層：にぶい黄褐色粘土
XV層：黄褐色粘土に砂，小礫・15㎝大の礫を含む

Fig. 31　ST 13平面及びセクション図

点（28.5％）、高杯１点（50％）であり、平均38.9％の土器口縁部に凹線紋が施されている。ST 13は後期Ⅰ期に属する。

② 溝

SD 21（Fig. 35）

調査区の東端に位置し、SD 22と切り合っているが先後関係は不明である。確認延長２ｍ、幅70～80㎝、深さ35㎝前後を測る。埋土は暗褐色の砂・シルト層である。埋土中より弥生土器の細片が出土している。

SD 22（Fig. 35）

西を古代の溝に切られている。確認延長5.7ｍ、幅45～60㎝、深さ20～45㎝前後を測る。埋土はSD 21と同様で、埋土中より弥生土器片（127・128・132）が出土している。

SD 31（Fig. 36）

調査区の中央部に位置する南北に延びる溝である。確認延長３ｍ、幅80㎝、深さは30㎝前後を測

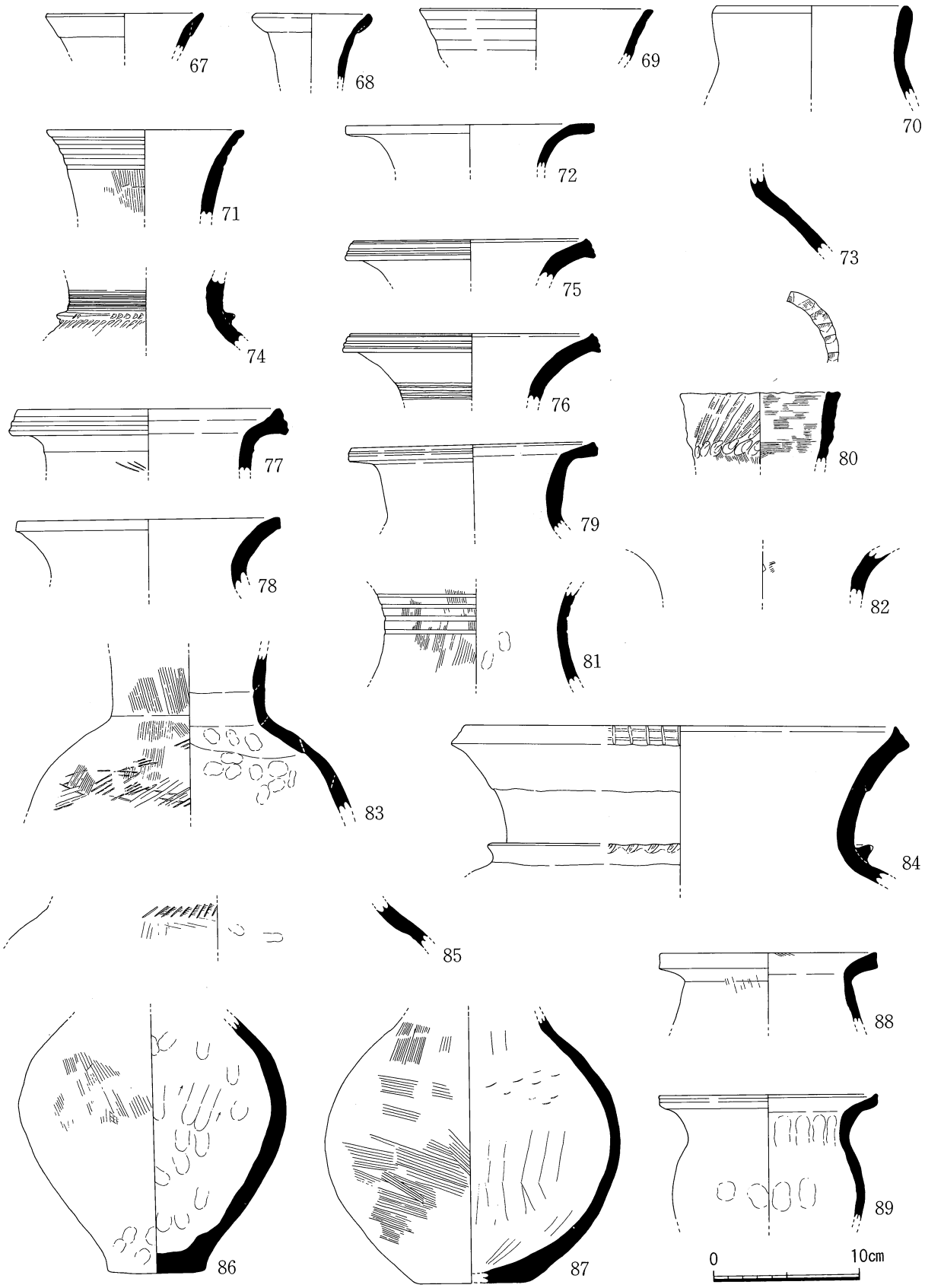


Fig. 32　ST 13出土遺物実測図（壺：67～87、甕：89）

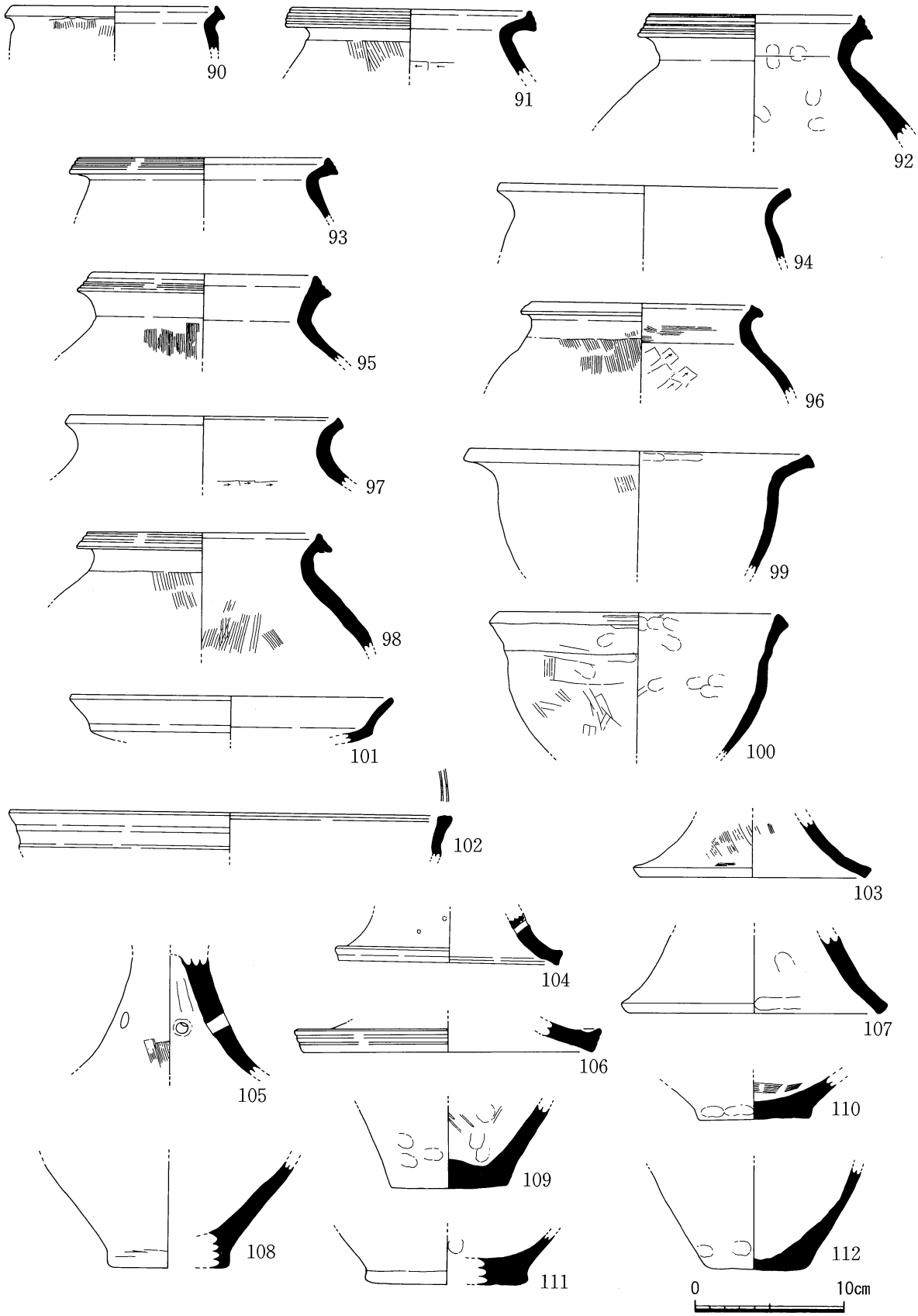


Fig. 33　ST 13出土遺物実測図（甕：90～98、鉢：99・100、高杯杯部：101・102、高杯脚部：103～107、底部：108～112）

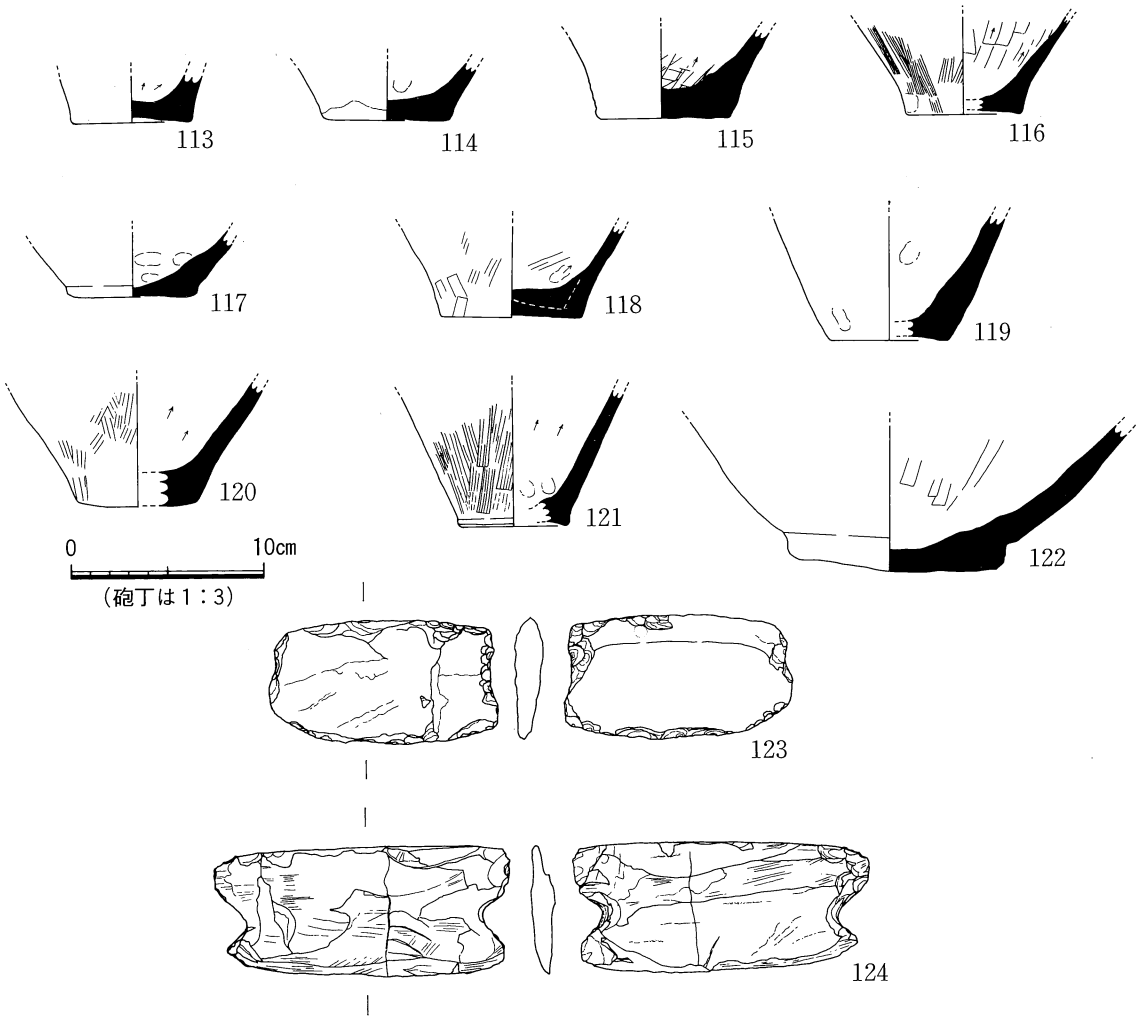


Fig. 34　ST 13出土遺物実測図（底部：113～122、石包丁：123・124）

り断面は台形状をなす。埋土はⅠ層：灰黄褐色粘土層、Ⅱ層：炭化物を含んだ黒褐色粘土層、Ⅲ層：灰黄～黄褐色粘土層、Ⅳ層：黒褐色粘土層で、Ⅰ層の下層から図示したように弥生後期土器の細片が多量に出土しているが図示できるものはない。

SD 32（Fig. 35）

調査区の中央部に位置する東西に延びる溝である。確認延長4.6m、幅60cm前後、深さ15～20cm前後を測る。埋土は暗褐色粘土に粗粒砂が混ざっている。随所で古代の遺構に切られている。遺物は埋土中より弥生後期の甕（129）、同壺（130）が出土し、古代の須恵器杯（133）、同土錘（125・126）が混入している。

SD 33（Fig. 35）

調査区の中央部に位置する東西に延びる溝である。確認延長4.8m、幅45～60cm、深さ15cm前後を測る。東よりの床面より粘土塊が出土している。排土はSD 32と同様で、埋土中より石包丁（135）と弥生後期土器細片が出土し、古代の須恵器鉢（131）・杯（133）・蓋（134）が混入で出土している。

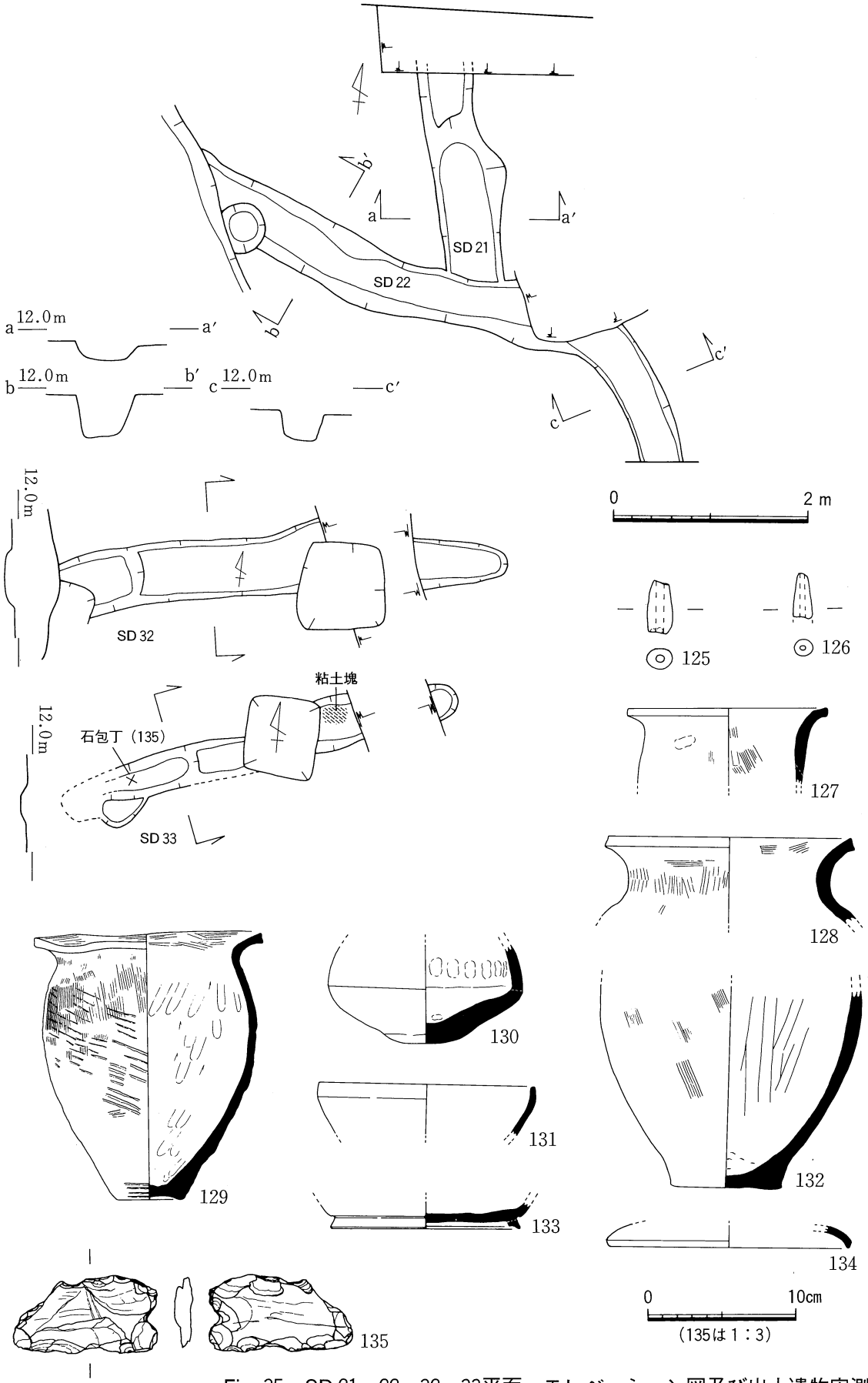


Fig. 35　SD 21・22、32・33平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
SD 22：127・128・132
SD 32：125・126・129・130・133
SD 33：131・134・135

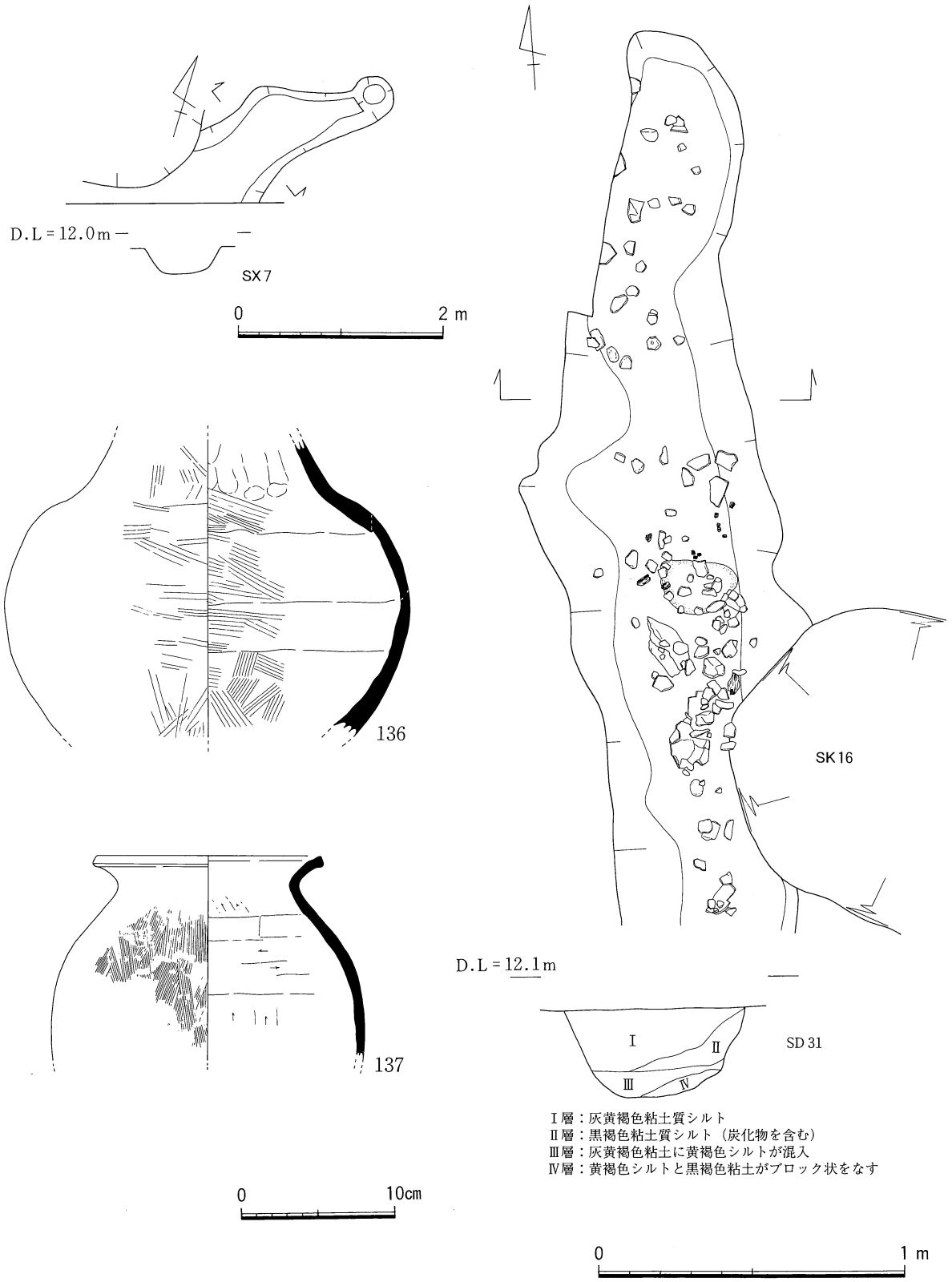


Fig. 36　SD 31・SX 7 平面・セクション・エレベーション図及びSX 7 出土土器実測図

③　ピット（Fig. 37）

Ｐ１

ST９の西にある。長軸25㎝の楕円形のピットで深さ30㎝を測る。埋土は黒褐色粘土で埋土中より弥生後期の高杯脚（139）が出土している。

Ｐ２

SX７の東隣にある。長軸60㎝を測る楕円形のピットである。埋土は黒褐色粘土で埋土中より多量の弥生後期土器片が出土しているが、図示し得たのは甕（140・141）である。同一個体の可能性がある。

Ｐ３

ST 10の西隣にある。長軸１ｍ、短軸34㎝の楕円形のプランを有し、断面は二段に掘り込まれており深さは35～50㎝を測る。壁の一部がオーバーハングしている。埋土はⅠ層：黒褐色粘土質シルト、Ⅱ層：黒褐色粘土質シルトに１㎝前後の小礫を含む。Ⅲ層：褐色粘土である。Ⅲ層中より完形の小型甕が出土している。

Ｐ４

長軸40㎝、短軸35㎝の楕円形プランを呈し深さ63㎝を測る。検出面直下で完形の鉢（144）を検出した。埋土下層では長さ25㎝を測る河原石が立石状に立っている。立石状の河原石や鉢はピットを埋め戻す際に意識的に置かれたものと考えることができる。

④　壺棺墓

拡張区で２基の壺棺墓を検出した。共に掘り形を確認することはできなかった。壺棺１（Fig. 38）は高さ40㎝以上、最大径42㎝の壺（148）を27°の角度で横たえている。底部の穿孔は見られない。北側に壺口縁部（146）が覆い被さるようにして検出された。蓋として使われたものと思われる。壺棺内からは、壺（145・147）が出土している。

壺棺２（Fig. 39）は高さ60㎝以上、最大径42㎝の壺（152）を30°の角度で横たえている。底部の穿孔は見られない。北側に壺底部（149）が覆い被さるようにして検出された。蓋として使われたものと思われる。壺棺内からは、蓋に使われた壺の口縁部と考えられる（150）が、棺外からは壺棺の口縁部（151）が出土した。壺棺１・２ともに後期Ⅰ期に属する。

⑤　性格不明土坑（Fig. 36）

SX７

SD 33の南にある。確認延長2.4ｍ、深さ30㎝前後を測る不整形の土坑である。溝の可能性もあるがここでは性格不明土坑として扱った。埋土は暗褐色の粘土質シルト層で埋土中より弥生後期の壺（136）と甕（137）が出土している。

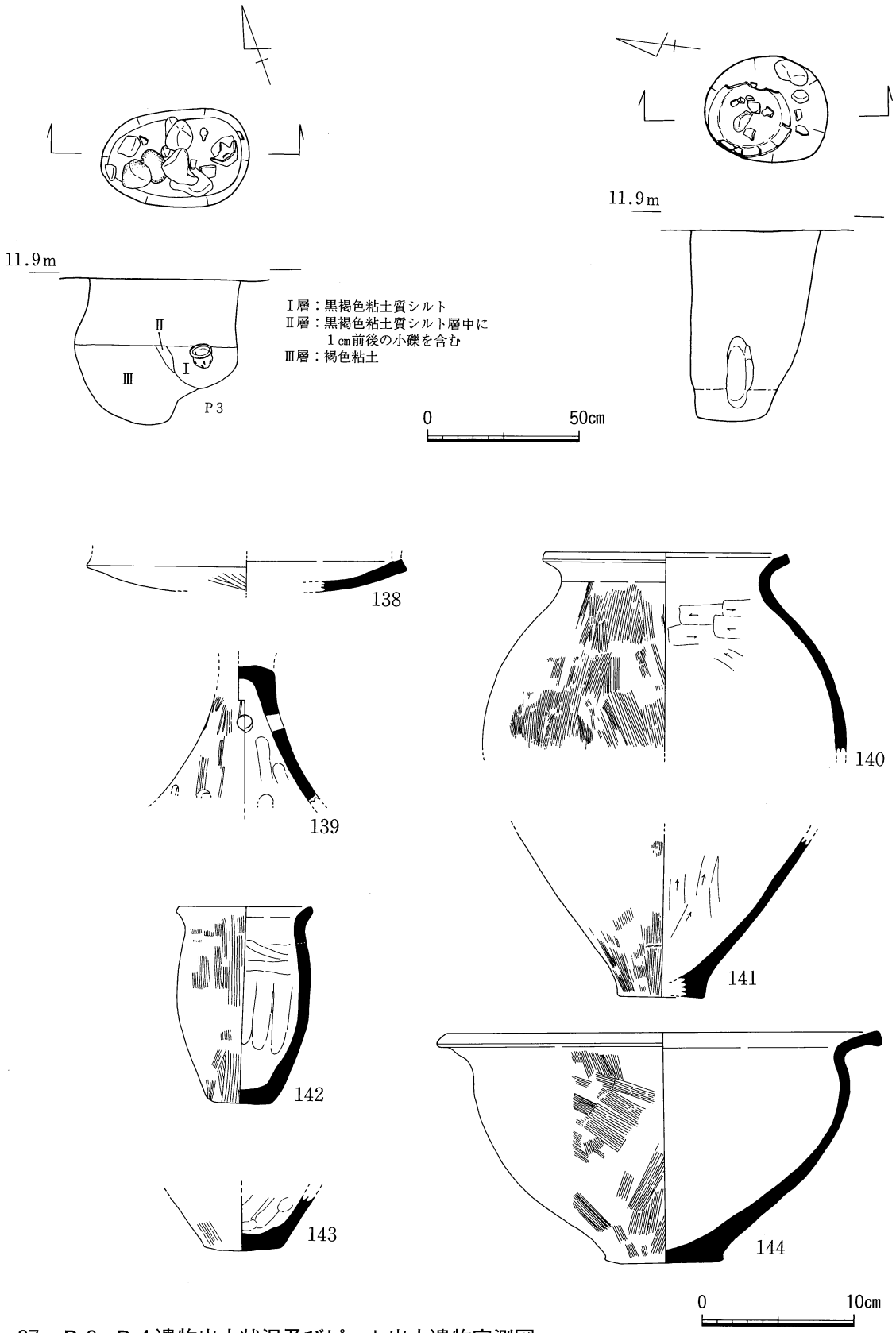


Fig. 37　P 3・P 4 遺物出土状況及びピット出土遺物実測図

P 1 ：139、P 2 ：140・141、P 3 ：138・142・143、P 4 ：144

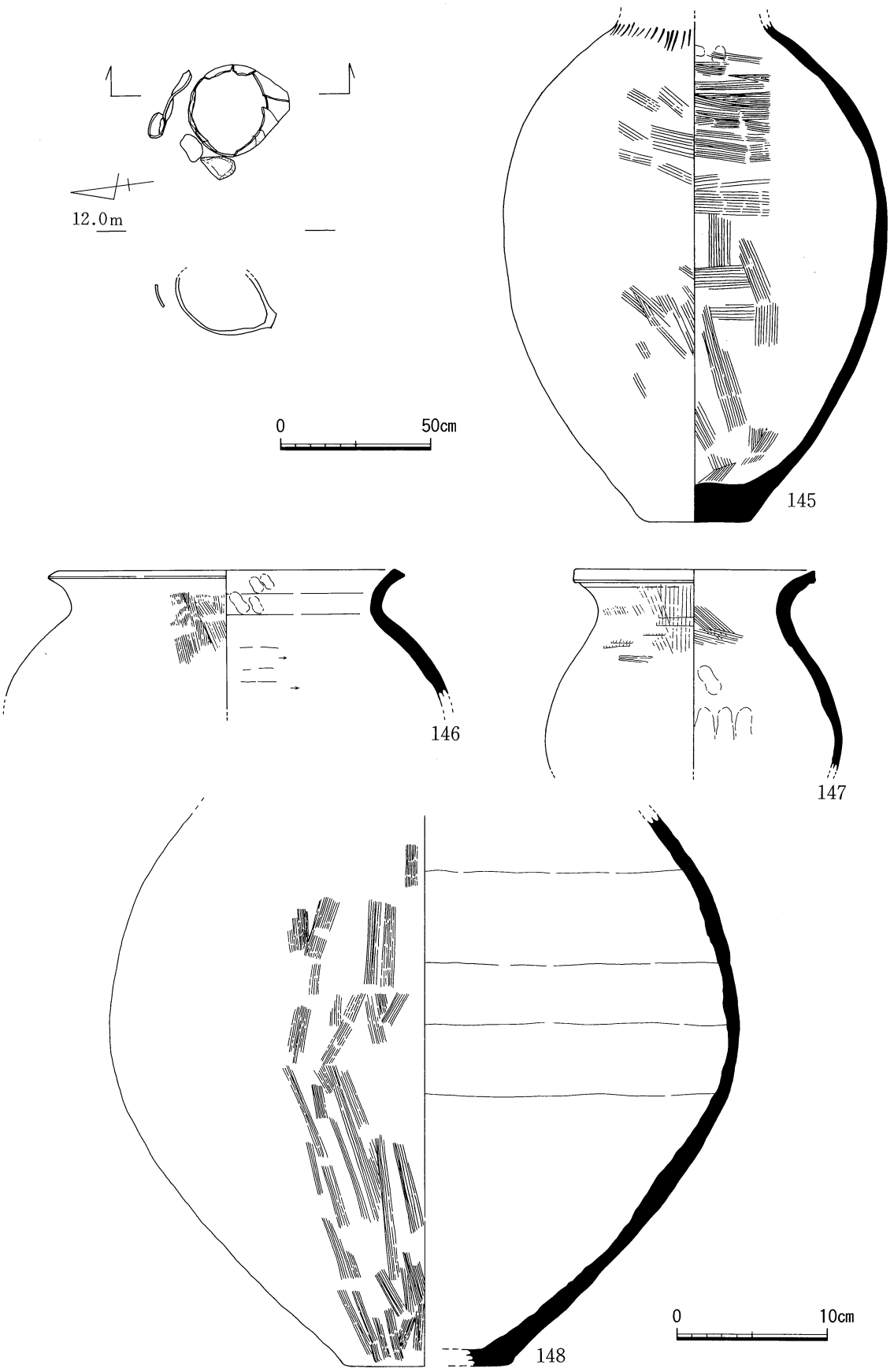


Fig. 38　壺棺1（148）平面・エレベーション図及び壺棺内出土土器実測図

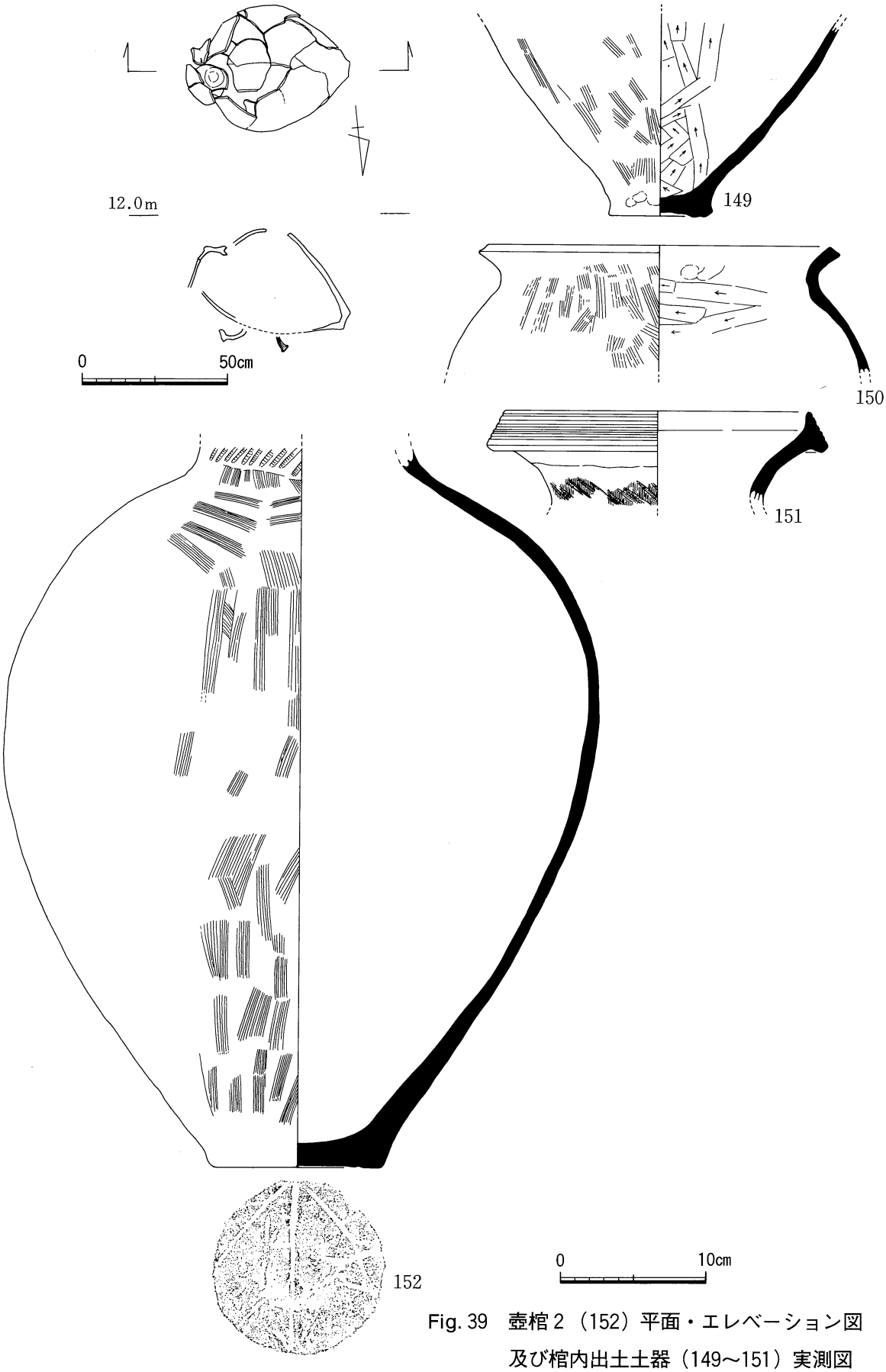


Fig. 39　壺棺2（152）平面・エレベーション図
及び棺内出土土器（149～151）実測図

遺物観察表（土器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
24	1	ST 9	壺	13.6	(5.8)			石英・チャート・その他の砂粒を含む。橙色。外面器面剝離がはげしい。内面ヨコハケ調整。	
〃	2	〃		26.0	(2.3)			チャートの砂粒を含む。にぶい黄橙色。口唇を下垂させ沈線化した凹線文を有する。口縁内面櫛描波状文。	
〃	3	〃	壺		(9.3)			チャートの砂粒を多く含む。灰白色。外面タテハケ調整、内面ヨコハケ調整。頸部下端にハケ原体による格子圧痕を施す。	
〃	4	〃	甕	15.6	(7.1)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。茶色。口唇外面にやや退化した凹線文を有する。胴部外面やや木目の粗いタテハケ調整、胴部内面頸部直下までヘラケズリを施す。	胴部外面に黒斑あり。
〃	5	〃	甕	15.0	30.9		5.6	チャートの小礫を多く含む。黄褐色。口縁部内外面ヨコナデ調整。胴部外面タテハケ調整、内面ヘラケズリ。	被熱赤変。接合痕跡を明瞭にとどめる。
〃	6	〃	鉢	26.0	(2.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。淡橙色。口唇部に沈線化した2条の凹線文を有する。内外面摩耗が激しい。口縁部は直線的に外反する。	
〃	7	〃	鉢	22.2	(16.2)	22.0		チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内面屈曲部より上はハケ調整、屈曲部より下はナデ調整。下地はヘラケズリ。	外面に黒斑あり。
〃	8	〃	高杯					チャートの粗粒砂を多く含む。灰褐色。内外面器表が荒れる。	
〃	9	〃	高杯		(14.2)		13.0	チャートの粗粒を多く含む。浅黄橙色。厚いつくり。	
〃	10	〃	高杯		(4.9)		13.0	チャート・砂岩の小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。内面ヨコハケ調整。端部に沈線化した凹線文を有する。	
25	11	〃	高杯		(8.2)		28.0	チャートの小礫・粗粒砂を含む。浅黄橙色。内面ナデ調整、外面タテハケ調整。	
〃	12	〃	甕		(5.3)		6.1	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内面ヘラケズリ。	被熱赤変。煤ける。
〃	13	〃	壺		(7.1)		7.0	チャートの小礫、細・粗粒砂、赤色風化礫を多く含む。橙色。内外面調整不明。	
〃	14	〃	壺		(4.4)		8.0	チャート・頁岩の小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。	
〃	15	〃	壺		(6.8)		14.2	チャートの小礫を含む。浅黄橙色。内面ヘラケズリ。	
〃	16	〃	壺		(7.0)		8.0	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内外面調整不明。	
〃	17	〃	壺		(4.9)		9.6	チャートの小礫・粗粒砂を含む。浅黄橙色。タテ方向のヘラケズリ、ナデ調整。	外面に黒斑あり。
〃	18	〃	壺	(14.7)			7.0	チャート・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。赤褐色。内面ヘラケズリ、外面ナデ調整。	搬入土器か。
〃	19	〃	磨石	全長 10.0	全幅 8.5	厚さ 2.3	重さ 306 g		砂岩
26	20	ST 10	壺	13.4	(3.0)			チャート・石英の粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面ヘラミガキ調整。	
〃	21	〃	壺	14.2	(6.5)			チャート・赤色粒の粗粒砂、絹雲母を含む。にぶい黄橙色。口唇部は面を成す。内面ナデ、外面タテハケ調整。	
〃	22	〃	壺	12.0	(6.9)			チャートの粗粒砂・赤色風化粒を含む。浅黄橙色。外面叩き後、タテハケ調整。	
〃	23	〃	壺	14.0	(3.8)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ハケ調整。	
〃	24	〃	壺	13.8	(5.8)			チャートの小礫・粗粒砂を含む。灰色。外面タテハケ調整。口唇部下端を摘み、ヨコナデ調整。	
〃	25	〃	壺	15.7	(4.6)			チャートの小礫を多く含む。橙色。貼付口縁。口縁部外面ヨコナデ調整、頸部外面タテハケ調整。内面ヨコナデ調整。	
〃	26	〃	壺	16.8	(2.8)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内面ヨコハケ調整。	
〃	27	〃	甕	16.0	(3.6)			チャートの粗粒砂を含む。灰白色。口唇部はしっかりした面を成す。口縁部内外面ヨコナデ調整。	
〃	28	〃	甕	12.4	5.0			チャートの小礫・粗粒砂を含む。黄橙色。頸部外面タテハケ調整。内面調整不明。	
〃	29	〃	甕	13.5	(17.7)			チャートの小礫・粗粒砂を含む。浅黄橙色。胴部外面に叩き目が残る。外面タテハケ調整。内面下半は木理の粗い原体によるタテハケ調整、上半はナデ消す。内面に粘土帯接合痕を明瞭に留める。	外面煤ける。
〃	30	〃	鉢		(3.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。褐灰色。胴部外面ハケ調整、内面ヨコハケ調整。	
〃	31	〃	鉢	16.0	4.9			長石の細粒、チャートの砂粒を含む。黒色。口縁部内外面ヨコナデ調整。口唇部も強くヨコナデを施し、上方に摘み上げ気味。胴部外面タテハケ調整、内面ヘラケズリ。	
〃	32	〃	鉢	11.6	6.2		3.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面木目の細かいタテハケ調整、ヘラミガキ調整。内面木目の細かいタテハケ調整。	上胴部外面の対照的な位置に黒斑あり。
27	33	〃	鉢	10.0	3.7		3.0	チャートの粗粒砂・赤色風化礫を含む。浅黄橙色。内外面摩耗する。	外面に黒斑あり。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
27	34	ST 10	高杯		(2.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内外面器表の剝離がはげしい。	
〃	35	〃	高杯	26.0	(2.7)			チャートの砂粒を多く含む。浅黄橙色。内外面ヨコナデ調整。	
〃	36	〃	高杯	23.6	(3.2)			石英の細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。端部は強く外反する。内面ヘラミガキ調整。	
〃	37	〃	高杯	21.6	(2.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。内外面調整不明。	
〃	38	〃	蓋	14.4	(3.0)			チャート・赤色風化礫の粗粒砂、金雲母を含む。にぶい橙色。内外面摩耗。	
〃	39	〃	高杯		(2.5)		20.0	チャートの砂粒を含む。にぶい黄橙色。口縁部内外面ヨコナデ調整、外面タテハケ調整。口唇部強いヨコナデ調整。	
〃	40	〃	蓋	21.4	(3.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面木目の粗いハケ調整。端部は強いヨコナデで上端をわずかに摘み出す。	
〃	41	〃	底部		(3.15)		4.2	チャートの小礫を含む。橙色。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	42	〃	壺		(4.7)		4.2	チャートの粗粒砂を含む。雲母を多く含む。にぶい黄橙色、内面ヨコハケ、外面タテハケ調整。	外面黒斑あり。
〃	43	〃	甕		(1.7)		3.5	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい赤褐色。内外面調整不明。	底部外面黒斑あり。
〃	44	〃	壺		(5.9)		8.4	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい赤褐色。内面ナデ、外面タテハケ調整。	
〃	45	〃	壺		(6.4)		8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内面ナデ調整、外面タテハケ調整。	
〃	46	〃	底部		(8.9)		6.3	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。淡黄色。内外面ナデ調整。外面にヒビ割れ状の亀裂が入る。	
〃	47	〃	底部		(7.7)		8.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ調整。	
〃	48	〃	底部		(12.0)		7.0	石英の粗粒砂を多く含み、チャートの粗粒砂を少量含む。浅黄橙色。内面ナデ調整。外面叩き、ナデ調整。底部内面に指頭圧痕が残る。	底部外面に黒斑あり。
〃	49	〃	石錘	全長 6.1	全幅 3.9	厚さ 3.1	重さ 100 g	中央部に幅 3 ㎜、深さ 1 ㎜のV字溝がめぐる。	砂岩
〃	50	〃	磨石	全長 9.6	全幅 7.7	厚さ 3.2	重さ 324 g	一端に朱が付着。	砂岩
〃	51	〃	石包丁	全長 —	全幅 4.5	厚さ 0.8	重さ —	直線刃片刃、孔径 9 ㎜。	千枚岩
〃	52	〃	鉄製品				重さ 5.5 g		
28	53	ST 12	杯	13.5	3.3		9.0	石英・チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内面を摘み上げる。内外面丁寧なヘラミガキ調整。	
〃	54	〃	杯	13.6	3.9		9.5	精選された胎土。橙色。内外面ヘラミガキ調整。底部外面ヘラ切り痕あり。	
〃	55	〃	甕	12.6	(5.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口唇部は強いヨコナデにより面を成し、わずかに下垂する。外面木目の細かい原体によるタテハケ調整。口頸部内面指頭圧痕が顕著に残る。上胴部内面に絞り目あり。	
〃	56	〃	壺	13.0		(19.7)		チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。黄橙色。口縁部外面にハケ原体によるRの圧痕あり。外面上半部・内面下半タテハケ調整。	
〃	57	〃	壺	10.9	(6.1)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部外面ハケ原体によるRの圧痕あり。口縁部外面ヨコナデ調整、頸部外面タテハケ調整。	
〃	58	〃	壺		(5.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。頸部下端に列点文あり。外面タテハケ調整、内面ナデ調整。	
〃	59	〃	壺	16.0	(12.2)			チャートの粗粒砂・赤色風化礫を含む。にぶい黄橙色。口縁部に 2 条の凹線文が巡る。頸部に列点文あり。	
29	60	〃	壺	15.2	(2.5)			チャートの細粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁部内外面横位のハケ調整。	外面煤ける。
〃	61	〃	壺	18.4	(3.5)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁部をわずかに摘み上げる。口縁部内面・口唇部ヨコハケ調整。	
〃	62	〃	壺	10.4	25.3	19.7	5.7	チャート・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。頸部外面に 3 条の弱い凹線文が巡る。内外面器表の荒れがひどい。胴部外面下半にタテ方向を基調とするハケ調整。	
〃	63	〃	壺		(16.9)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ナデ調整。	
〃	64	〃	甕	8.9	(9.2)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。灰黒色。内面ヘラケズリ・ナデ調整。外面タテハケ調整。	外面煤ける。
〃	65	〃	甕		(3.8)		4.3		
〃	66	〃	壺		(5.5)		7.2	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き後、タテハケ調整。底部外面付近ナデ調整。底部外面ヘラケズリ。内面ハケ調整、ナデ調整。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
32	67	ST 13	壺	10.6	(2.6)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。	
〃	68	〃	壺	7.7	(4.8)			長石の粗粒砂、チャートの粗粒砂を含む。明黄褐色。調整不明。	
〃	69	〃	有段口縁壺	15.9	(4.55)			チャート・赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。口縁部外面に弱い凹線文が4条巡る。内外面調整不明。	
〃	70	〃	壺	13.0	(6.5)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。内外面の器表の荒れが激しい。	
〃	71	〃	壺	13.4	(6.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。口縁部外面に4条の凹線文が巡る。頸部外面タテハケ調整、内面ヨコナデ調整。	
〃	72	〃	壺	17.0	(3.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。黄橙色。内外面ナデ調整。	
〃	73	〃	壺		(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。褐灰色。外面有軸羽状文をヘラ描きする。	
〃	74	〃	壺		(4.7)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。頸部下端に断面三角形突帯を貼付する。突帯頂部に刻目を施し、その下に列点文を施す。突帯の上には櫛描直線文を巡らす。	
〃	75	〃	壺	6.0	(2.85)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。口縁を上下に拡張し、口唇部に沈線化した凹線文を3条巡らせる。口縁部内外面ヨコナデ調整。	
〃	76	〃	壺	16.4	(4.7)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。口縁を上下に拡張し、口唇部に3条の凹線文を巡らせる。頸部に櫛描直線文を施す。	
〃	77	〃	壺	17.9	(4.3)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁部に強いヨコナデを施し、水平に強く屈曲させる。口縁部を上下に拡張し、口唇部にしっかりした凹線文を2条巡らせる。口頸部外面に列点文を施す。	
〃	78	〃	壺	18.0	(4.9)			チャートの小礫・粗粒砂、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。	
〃	79	〃	壺	16.6	(6.1)			チャートの小礫・粗粒砂、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。淡黄色。口唇部に擬凹線文を巡らす。	
〃	80	〃	壺	10.8	(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。幅広い口縁上面にハケ原体による圧痕を施す。外面に幅の広い列点文、内面ヨコハケ調整。	
〃	81	〃	壺		(6.6)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。頸部に4条のヘラ描沈線文を巡らせる。外面タテハケ調整。	
〃	82	〃	壺		(3.3)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面に綾杉の列点文を施す。	
〃	83	〃	壺		(11.3)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。頸部外面タテハケ調整、胴部外面叩き後、タテハケ調整。胴部内面指頭圧痕が顕著に残る。内面・断面に粘土接合痕が認められる。	
〃	84	〃	壺	29.5	(10.8)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄色。口縁部を上方に拡張し、口唇部にRの刻目を施す。口縁部外面に幅4cmの粘土帯を貼付する。頸部に断面三角形の刻目突帯を貼付する。	
〃	85	〃	壺		(3.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。上胴部に列点文を施す。	
〃	86	〃	壺		(17.8)		6.7	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ調整。内面ヘラケズリ・ナデ調整。	外面被熱赤変、煤ける。
〃	87	〃	壺		(18.5)		8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。黄橙色。外面ハケ調整。内面上位爪圧痕が顕著に残る。	
〃	88	〃	甕	14.8	(5.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁部内外面ヨコナデ調整。	口縁部外面激しく煤ける。
〃	89	〃	甕	15.0	(8.8)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。口唇部は強いヨコナデにより凹み、端部は上方に摘み上げる。頸部・胴部内面指頭圧痕が顕著に残る。外面ヨコナデ調整。	外面激しく煤ける。
33	90	〃	甕	13.8	(3.1)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。口縁部を上下に拡張し、ヨコナデ調整。外面ハケ・ナデ調整。	外面煤ける。
〃	91	〃	甕	16.0	(4.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。口唇部を上方に拡張し、3条の弱い凹線文を巡らせる。口縁部内外面ヨコナデ調整。体部内面ヘラケズリ。体部外面タテハケ調整。	口縁部外面煤ける。
〃	92	〃	壺	14.2	(8.4)			チャートの小礫・粗粒砂、赤色風化礫を多く含む。浅黄橙色。口縁部を上下に拡張し、口唇部に4条の沈線化した凹線文を巡らせる。胴部内面タテハケ・ナデ調整。	
〃	93	〃	甕	16.7	(4.1)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい赤褐色。口縁部を上下に拡張し、口唇部に3条の凹線文を巡らせる。	外面煤ける。
〃	94	〃	甕	19.4	(5.0)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内外面の器表の荒れがひどい。	内外面煤ける。
〃	95	〃	甕	15.0	(5.8)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁部を上下に拡張し、弱い凹線を3条巡らせる。	
〃	96	〃	甕	14.8	(6.1)			長石・雲母・角閃石を含む。にぶい橙色。口縁端部を上方に摘みあげ、強いヨコナデを施す。口縁部下端は下垂させる。内面は頸部直下より下はヘラケズリ。	搬入品。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
33	97	ST 13	甕	18.0	(4.6)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁端部を上方へ摘み上げ、ヨコナデ調整を施す。内面は頸部直下までヘラケズリを施す。外面タテハケ調整。	外面煤ける。
〃	98	〃	甕	15.5	(8.0)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。浅黄色。口唇部を上下に拡張させ、2条の弱い凹線文を施す。胴部内外面タテハケ調整。	
〃	99	〃	鉢	22.8	(8.2)			チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。口縁部は丁寧に面取りを行い角張る。内外面の器表の剝離が激しく調整観察不能。	
〃	100	〃	鉢	18.7	(9.6)			チャートの小礫を多く含む。にぶい黄褐色。内面指頭圧痕が顕著に残る。外面ハケ・ナデ調整。	外面煤ける。
〃	101	〃	高杯	21.6	(3.1)			チャート・赤色風化礫を含む。橙色。内外面ヨコナデ調整。	
〃	102	〃	高杯	30.0	(2.8)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。口縁端部を内側にわずかに肥厚させる。口唇部に弱い凹線文が2条巡る。	
〃	103	〃	高杯		(3.9)		15.2	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面タテハケ調整。裾部外面を強くヨコナデする。	
〃	104	〃	器台		(3.0)		15.0	チャート・結晶片岩の粗粒砂を多く含む。橙色。径5㎜の円孔を2つまで認められる。	
〃	105	〃	高杯		(8.1)			チャートの粗粒砂を含む。灰白色。外面タテハケ調整。径1㎝の円孔あり。	
〃	106	〃	高杯		(2.05)		19.4	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。脚端部に強いヨコナデを施す。脚端面に2条の弱い凹線文を巡らせる。内面ナデ調整。	
〃	107	〃	高杯		(5.3)		16.8	チャートの粗粒砂、雲母を含む。橙色。内外面調整不明。	
〃	108	〃	壺		(7.2)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色。内外面調整不明。	
〃	109	〃	底部		(5.7)		7.8	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。	外面被熱赤変。
〃	110	〃	底部		(2.8)		7.5	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。	外面煤ける。
〃	111	〃	壺		(3.4)		11.0	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面ナデ調整。	
〃	112	〃	壺		(7.0)		6.5	風化礫・石英・長石・雲母を含む。にぶい赤褐色。	搬入土器。
34	113	〃	甕		(2.5)		6.3	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内面ヘラケズリ。上底。	底部外面付近黒斑あり。
〃	114	〃	甕		(3.1)		6.6	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面ナデ調整。	底部外面～下胴部に大きな黒斑あり。
〃	115	〃	甕		(4.6)		6.7	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面器表の剝離が激しい。内面ヘラケズリ・ナデ調整。	
〃	116	〃	甕		(5.05)		6.0	チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内面ヘラケズリ・外面タテハケ調整。上底。	外面煤ける。
〃	117	〃	壺		(3.5)		6.8	チャート・結晶片岩の小礫を含む。橙色。内外面の器表の荒れが激しい。	
〃	118	〃	甕		(4.85)		7.3	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。内面ヘラケズリ。	外面煤ける。
〃	119	〃	底部		(6.5)		6.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内面ナデ、外面タテハケ調整。	
〃	120	〃	底部		(6.45)		6.2	長石・石英・チャートの粗・細粒砂を含む。橙色。内面ヘラケズリ、外面タテハケ調整。	被熱赤変。外面煤ける。
〃	121	〃	甕		(7.1)		4.5	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内面ヘラケズリ、ナデ調整。外面タテハケ調整。上底。	内面底部付近黒斑あり。
〃	122	〃	壺		(7.7)		11.3	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。	
〃	123	〃	石包丁	全長 9.0	全幅 4.9	厚さ 1.1	重さ 63.6 g	両側縁に弱い択り。	千枚岩
〃	124	〃	石包丁	全長 10.6	全幅 5.2	厚さ 0.9	重さ 80.9 g	両側縁にしっかりした択り、片刃。	千枚岩
35	125	SD 32	土錘	全長 3.7	全幅 1.75	径 0.5	重さ 7.3 g	赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。	
〃	126	〃	土錘	全長 (2.2)	全幅 (1.3)	径 (0.4)	重さ (3.3) g	チャート・その他の細粒砂を含む。にぶい橙色。	
〃	127	SD 22	甕	13.3	(5.2)			チャートの小礫を多く含む。にぶい橙色。内外面タテハケ調整。断面に外傾接合痕を明瞭にとどめる。	外面煤ける。
〃	128	〃	甕	16.35	(5.8)			チャートの小礫を多く含む。にぶい黄橙色。頸胴部外面タテハケ調整。口縁部内外面ヨコハケ調整。	外面煤ける。
〃	129	SD 32	甕	15.4	18.0		4.7	チャートの小礫を多く含む。にぶい黄橙色。胴部外面叩き成形後、上半部はハケ調整。内面ヘラケズリ・指ナデ調整。	
〃	130	〃	壺		(6.7)		2.4	チャート・赤色粗粒砂を含む。浅黄橙色。内面指頭圧痕が顕著に残る。外面調整不明。	被熱赤変。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
35	131	SD 33	須恵器鉢	14.6	(3.5)			精選された胎土。灰白色。内外面ヨコナデ調整。	
〃	132	SD 22	甕		(13.7)		7.5	チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内面ナデ、外面タテハケ調整、下地に叩き。底部内面に爪圧痕あり。	
〃	133	SD 32	須恵器杯		(1.85)		12.8	精選された胎土。灰色。丁寧なつくり。しっかりとしたハ字状の高台がつく。高台脇が段状を成す。内外面ヨコナデ調整。底部外面ヘラ切り後、ヘラケズリ・ナデ調整。	
〃	134	SD 33	須恵器蓋	16.0	(1.55)			精選された胎土。灰色。口縁端部は丁寧な面取り。内外面ヨコナデ調整。	
〃	135	〃	石包丁	全長 —	全幅 4.0	厚さ 0.9	重さ —	打製、側縁に抉り。	頁岩
36	136	SX 7	壺		(19.6)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。胴部外面下半タテハケ、上半ヨコハケ調整。頸部外面縦を基調とするハケ調整。胴部内面横方向を基調とするハケ調整。頸部内面指頭圧痕、ナデ調整の痕跡が顕著に残る。内面に粘土接合部を明瞭にとどめる。	外面下半に大きな黒斑あり。
〃	137	〃	甕	14.7	(13.6)	20.5		チャート・その他の細・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。口頸部内外面ヨコナデ調整。胴部外面タテハケ調整、上部はハケ・ヨコナデ調整。胴部内面下半縦方向のヘラケズリ、上半横方向のヘラケズリ。	外面煤ける。
37	138	P 3	高杯		(2.2)			チャートの粗・細粒砂を含む。淡黄色。杯部の立ち上がり部より剝離。外面ハケ調整。	
〃	139	〃	高杯		(9.3)			チャートの粗・細粒砂を多く含む。橙色。内面ナデ調整。外面タテハケ調整・縦方向のヘラミガキ調整。脚上部と下部に4個づつの円孔を穿つ。	
〃	140	P 2	甕	16.0	(13.3)	24.0		チャート・その他の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁部内外面を強くヨコナデする。口唇部を面取りする。胴部外面タテハケ調整。胴部内面上位は横方向のヘラケズリ、中位はヘラケズリ・ナデ調整か。	外面煤ける。
〃	141	P 4	鉢	28.8	15.2		7.7	チャートの細・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁端部は下方に肥厚させ、口唇部を面取りする。口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面ハケ調整。	上胴部と下胴部に対照的な位置に黒斑あり。完形。
〃	142	P 3	甕	8.8	13.1		4.2	チャートを中心とする粗粒砂を含む。淡黄色。口縁部内面ヨコハケ調整。体部外面タテハケ調整。内面ナデ調整。	口縁部と底部付近に黒斑あり。完形。
〃	143	〃	底部		(3.7)		5.1	チャート・頁岩の粗粒砂とシャーモットを含む。淡いピンク色。内面指頭によるナデ調整。外面タテハケ調整。	
〃	144	P 2	鉢		(10.9)		5.5	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。内面ヘラケズリ。外面タテハケ調整、下地に叩き。	外面、底部以外の内面煤ける。
38	145	壺棺1内			(33.5)		6.9	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。浅黄色。内面ハケ調整。頸部にハケ原体による列点文を施す。胴部外面タテハケ・ナデ調整。	胴部の上部と下半の対照的な位置に大きな黒斑あり。
〃	146	〃	甕	22.5	(9.3)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁端部を摘み出し横方向に強くナデる。内面横方向のヘラケズリ・ナデ調整。外面タテハケ調整。	
〃	147	〃	壺	16.0	(14.5)	19.8		チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁端部をわずかに上方に摘み上げ、横方向にナデる。頸部・口縁部内面ヨコハケ調整。胴部内面指ナデ調整。口縁部内外面ヨコナデ調整。外面は頸部・上胴部は縦方向、中位は横方向を基調とするハケ調整。	
〃	148	壺棺1	壺		(37.1)	42.0	11.3	チャートの粗・細粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面タテハケ調整。内面に粘土帯の接合痕跡を認める。	
39	149	壺棺2内	甕		(13.5)		6.4	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。上底風。内面粗いヘラケズリ。外面タテハケ調整。	
〃	150	〃	甕	23.5	(8.8)			チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁端部を摘み出し、横方向に強くナデる。内面頸部直下まで横方向のヘラケズリ。外面タテハケ調整。	
〃	151	〃	壺	20.9	(6.6)			チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。口唇部を上下に拡張し、5条の沈線化した凹線を巡らせる。頸部にハケ原体によるRの列点文を施す。頸部外面ヨコナデ調整。内面剝離が激しい。	
〃	152	壺棺2			(49.7)		11.4	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。頸部下端にハケ原体による列点文を施す。胴部外面タテハケ調整。	上胴部と下胴部に大きな黒斑あり。

(3) 古代の検出遺構と遺物

Ⅲ章に述べた如く、今次は掘立柱建物、土坑、ピットを中心に報告し、その他は一部を抽出した。以下の記述のうち、建物の規模に関する比較的な表現は、今次調査成果の中での相対的なものである。尚、主な遺構の計測値、出土遺物については後掲の表にまとめた。

① 掘立柱建物

SB 8 (Fig. 41)

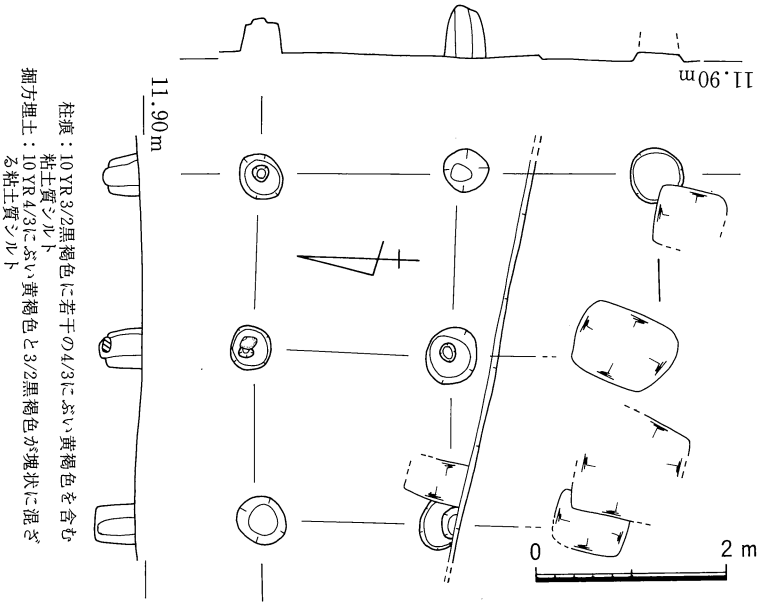


Fig. 41 SB 8 遺構平面・セクション図

調査区中央部で検出した円形ピットからなる2×2間の南北棟の総柱建物で、遺物から時期を決定することは困難だが、ここで扱う。南妻側は南拡張区に属す。切合い関係はST 10を西側で切り、複数の方形ピットに切られる。方形ピットを持つ建物群とは棟方向に明らかな相違がある。出土した弥生土器片は内面ヘラ削り、外面ハケ調整が認められるが、細片のため図示していない。

SB 9 (Fig. 42・43)

中央部東で検出した3×7間の南北棟で、H本区に該当したのは南部の一部のみである。Ⅳ-2層下に存在する。SA 11、SK 33・34をはじめ、本遺構と切合い関係を確認できる古代の遺構のうちでは、最も先行する。全体規模はSB 20と並んで本遺跡検出建物中最大で、柱穴規模も大型である。側柱の掘方側線及び柱痕から復元する柱筋は良く揃っている。完掘したP 6、P12、P13の掘方埋土は何れも互層をなす。埋土の各土層は、褐灰色粘土質シルトと地山土（灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト）がブロック状に混ざることを基調としてその混合状態が少しずつ異なる。P12、P13では柱痕下層に粘土が認められる。P 2に掘り込まれているSA 11の境界部より、赤彩土師器(417～423)が出土している。P12は断面で切合いがあるが、平面プランが連続しているため同時に扱う。S 1は砂岩の川原石が打割されており、長さ21cmを測る。全面内部まで著しく被熱・赤変しており、本来の自然面では全面に敲打によると見られる摩滅が認められる。また、表面は熱のため脆弱化し、部分的に剝離している。

SB 10 (Fig. 44)

調査区中央部で3×4間分を検出した南北棟であるが、北拡張区に属する北端側は確定することができなかった。検出面がⅣ-2層下であること、他遺構が切り合うことが原因と考えられる。南側は南拡張区に属する。SD 40とSB 20の庇北端の柱穴に切られる。完掘したピットの全てで礎盤として用いた石を確認した。P 12′はSB 9－P12に準じてここで扱うが、他遺構の可能性がある。P 12′からは黒色土器杯口縁部（181）が出土した。

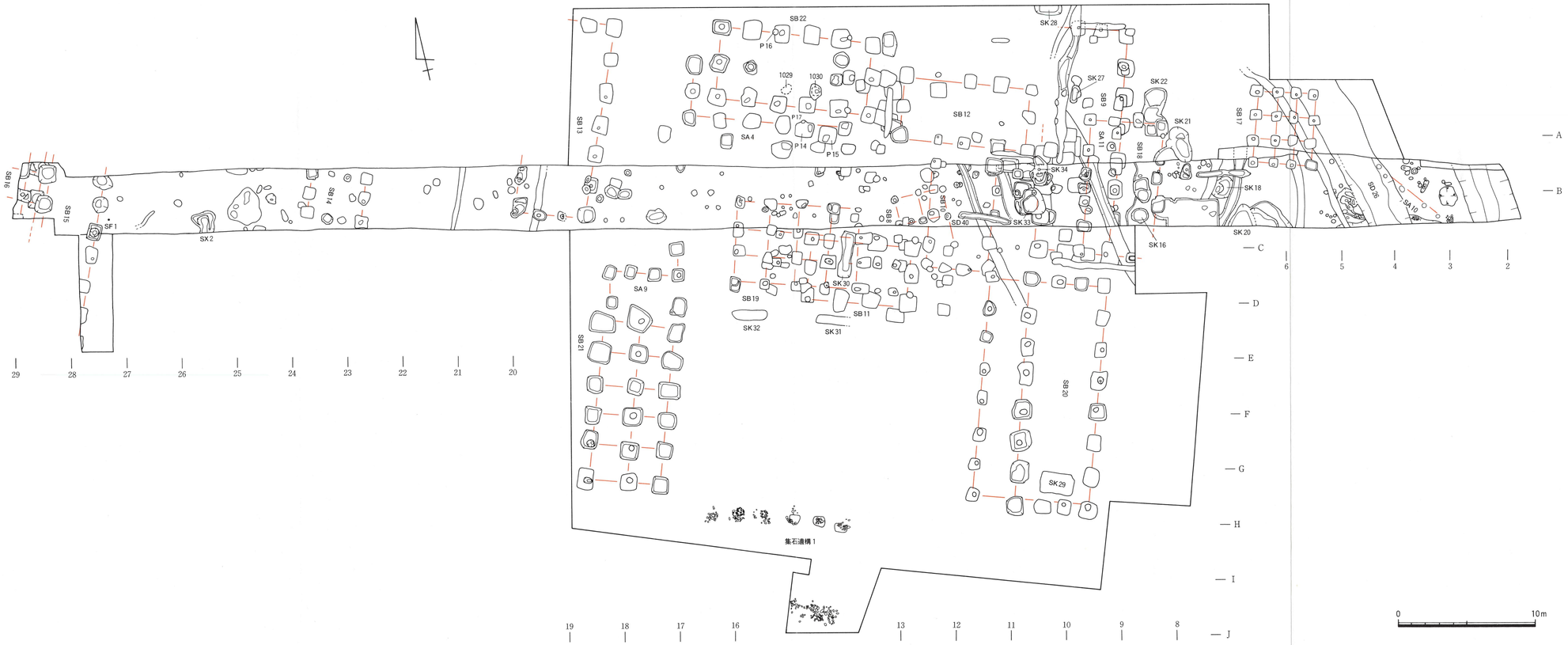


Fig. 40　H区検出遺構全体図（古代）

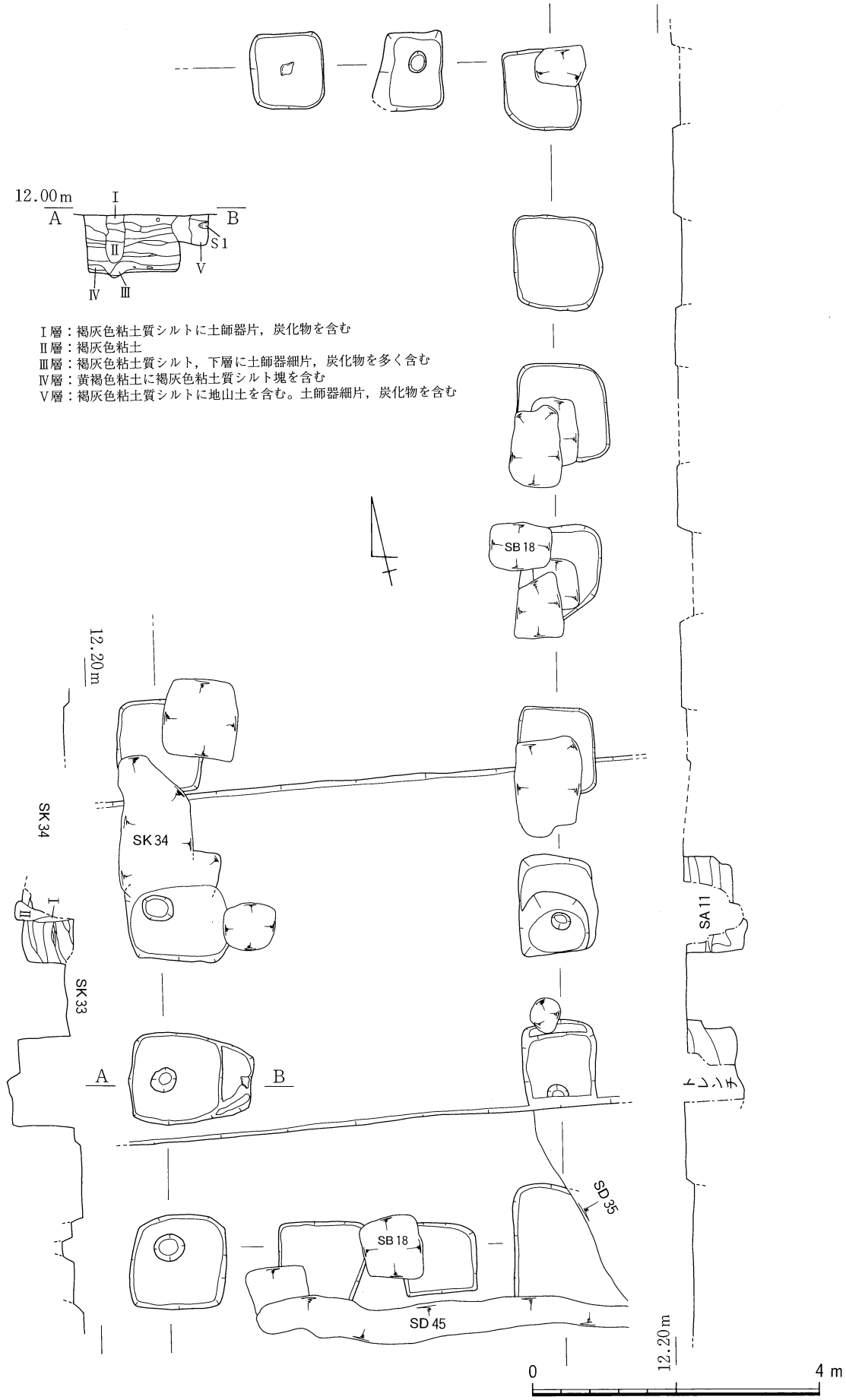


Fig. 42　SB 9 遺構平面・セクション・エレベーション図

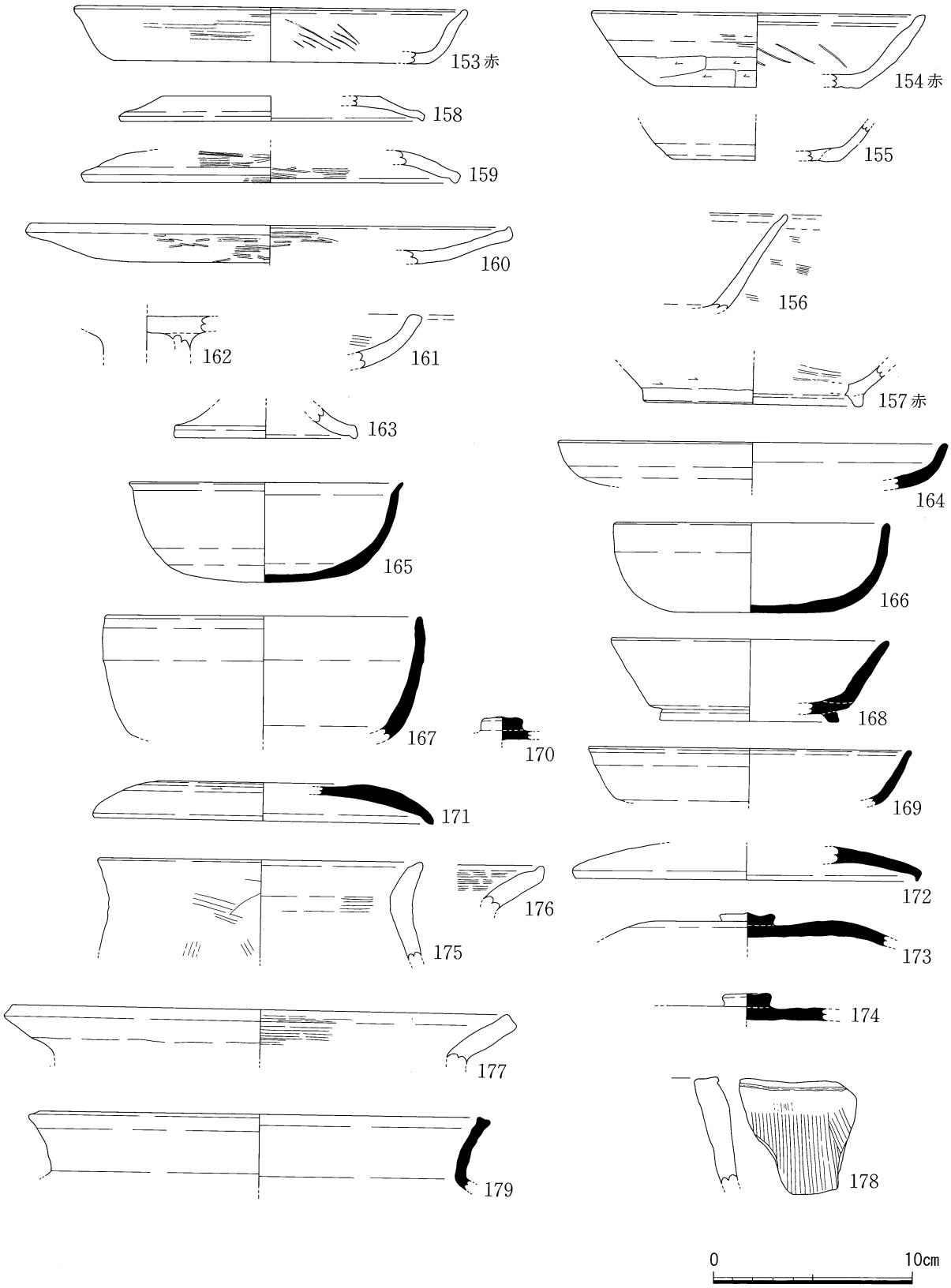


Fig. 43　SB 9 出土遺物実測図（179は縮尺1/4）

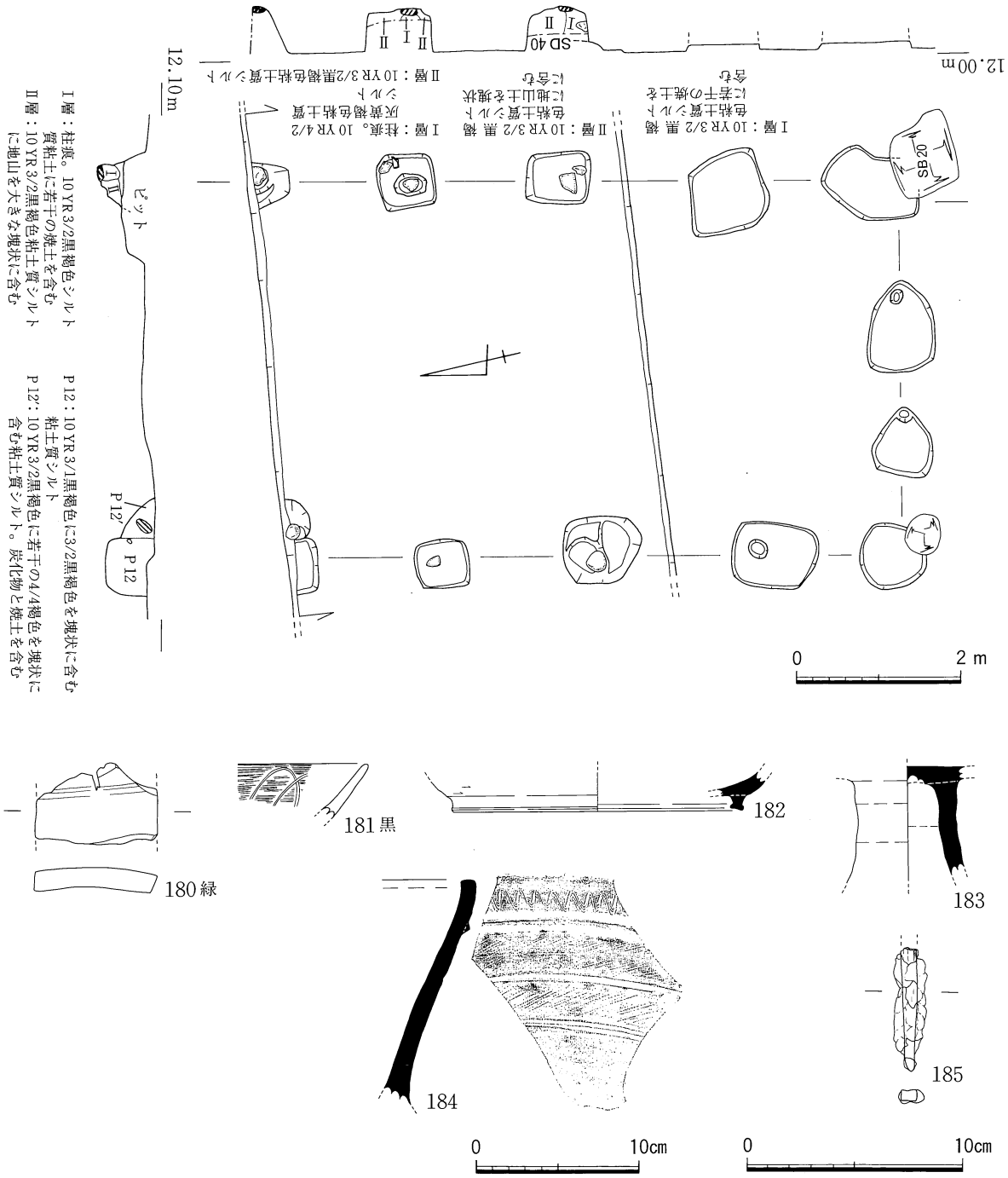


Fig. 44　SB 10遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図（184は縮尺1/4）

SB 11（Fig. 45）

2 × 3 間の東西棟で、南拡張区に位置するため、埋土は僅かしか掘削していない。SB 19や SK 30に切られる。大型の柱穴を含み、柱間距離も広い。4 つの柱穴で柱痕を検出することができた。

SB 12（Fig. 40・46）

2 × 4 間の東西棟で、北拡張区に位置するため30㎝弱程度を掘削したのみである。梁間が 2 間であり他の 3 間の建物よりも柱間距離が長いが、SB 22との比較ではほぼ全ての数値において下回る。

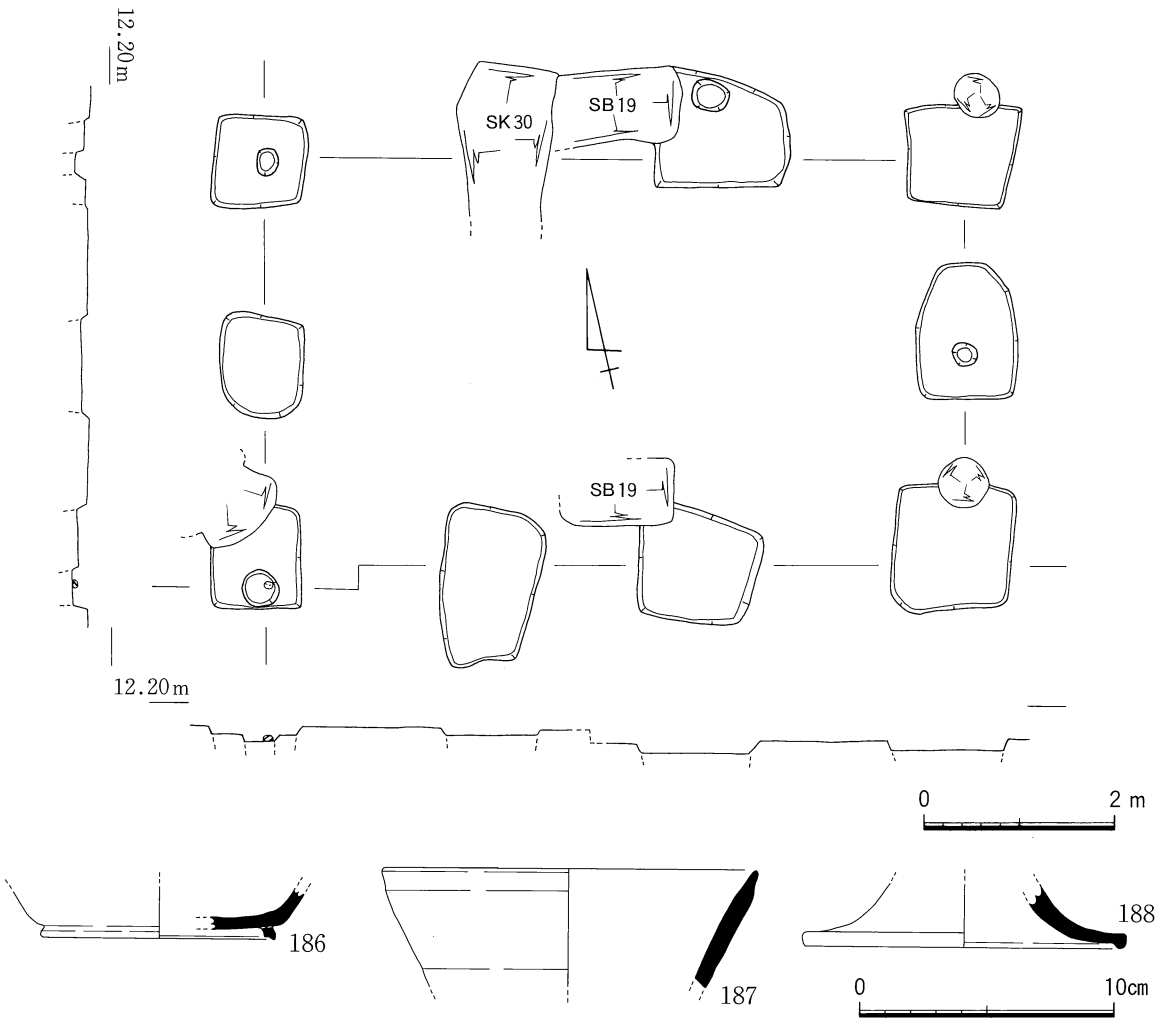


Fig. 45　SB 11遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

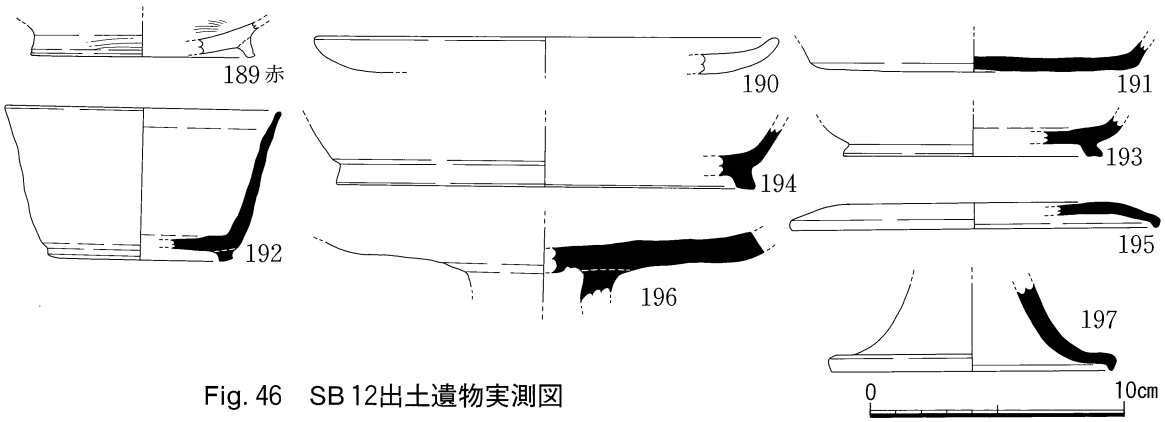
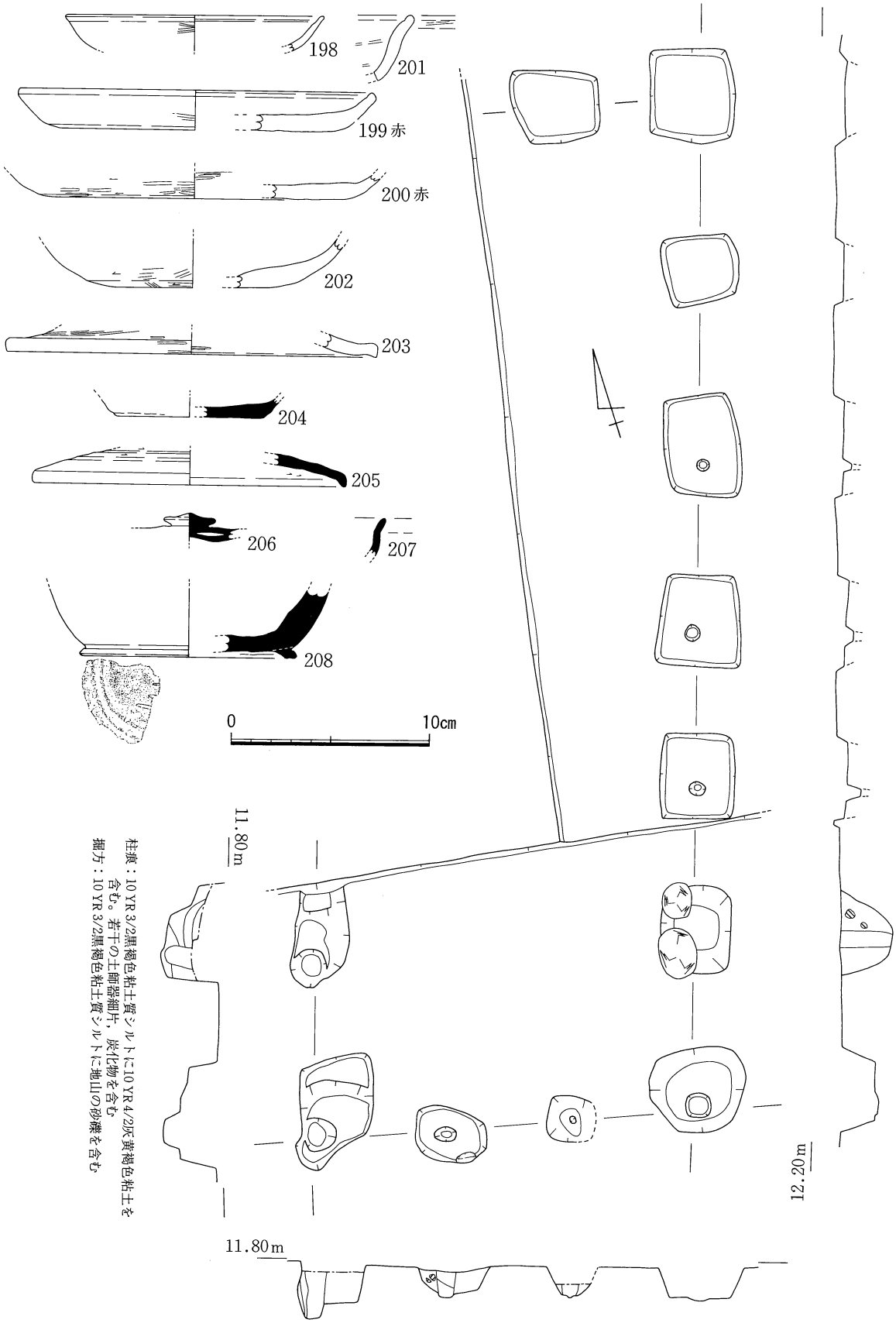


Fig. 46　SB 12出土遺物実測図

SB 13（Fig. 47）

中央部西で検出した3×6間の南北棟で、南側がH本区に属し、北西部は調査区外である。基本層準Ⅳ-2層下の遺構であり、SD 38を切っている。柱間距離が長く、多くの柱穴で柱痕を確認できた。周辺の地山は基本層準の項で述べた通り、堅固な砂礫層となっており、本遺構はそれに掘り込まれている。



柱痕：10YR3/2黒褐色粘土質シルトに10YR4/2灰黄褐色粘土を含む。若干の土師器細片，炭化物を含む
掘方：10YR3/2黒褐色粘土質シルトに地山の砂礫を含む

Fig. 47　SB13遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

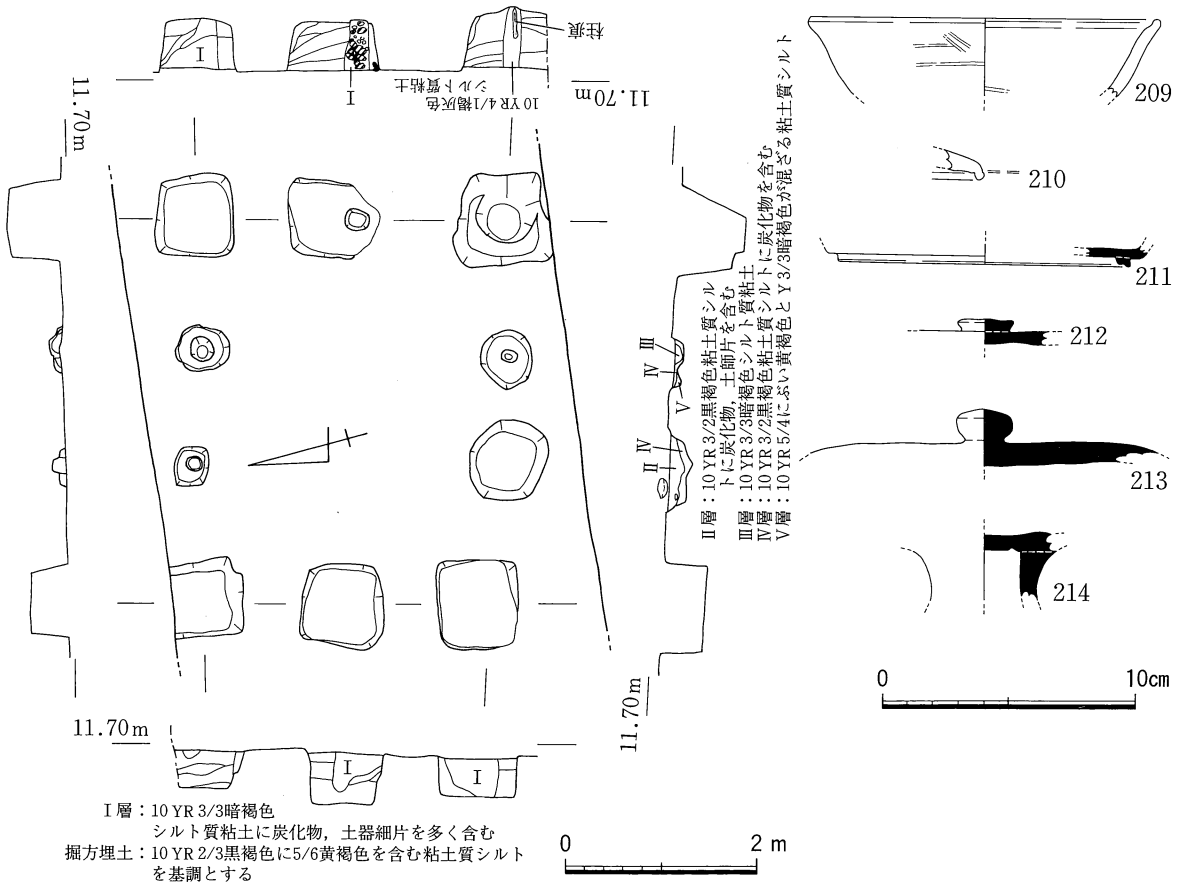


Fig. 48　SB 14遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

SB 14（Fig. 48）

Ｈ本区西部で３×２間分を検出した南北棟で、基本層準Ⅳ-２層下に存在し、Ⅶ層に掘り込まれていた。Ｐ４、Ｐ５、Ｐ９、Ｐ10は他の柱穴と相違が大きく、妻柱に相当するか否かは不明である。今次検出の他の建物と比較して、柱間距離が短い。Ｐ１、Ｐ６、Ｐ７で柱を抜き取ったことを示す土層が観察され、Ｐ２の柱痕部からは拳大の川原石が多数出土した。また、Ｐ３には柱根の一部が残っていた。

SB 15（Fig. 49）

調査区西端で桁行６間分を検出した南北棟で、両妻側は不明である。北部がＨ本区に属する。基本層準Ⅶ層下に存在し、西側柱はSB 16に切られる。Ｐ２、Ｐ９では検出面で20～30㎝前後の川原石の集中が見られた。Ｓ１は長さ30㎝を測る砂岩の川原石で、両端と両面、特に検出時に裏側であった面に敲打痕がある。Ｐ３掘方上層より出土の（219）は残存率が高い。

SB 16（Fig. 51）

大部分が調査区外であり、全容については不明であるが、総柱の掘立柱建物として扱う。Ｈ本区西端で１×２間分を検出したが、当調査区の概要で述べたとおり、当該部は現堤防直下であり、西側は物部川によって破壊されている。Ｐイ２、Ｐイ３、Ｐロ２、Ｐロ３でSB 15を切っていること

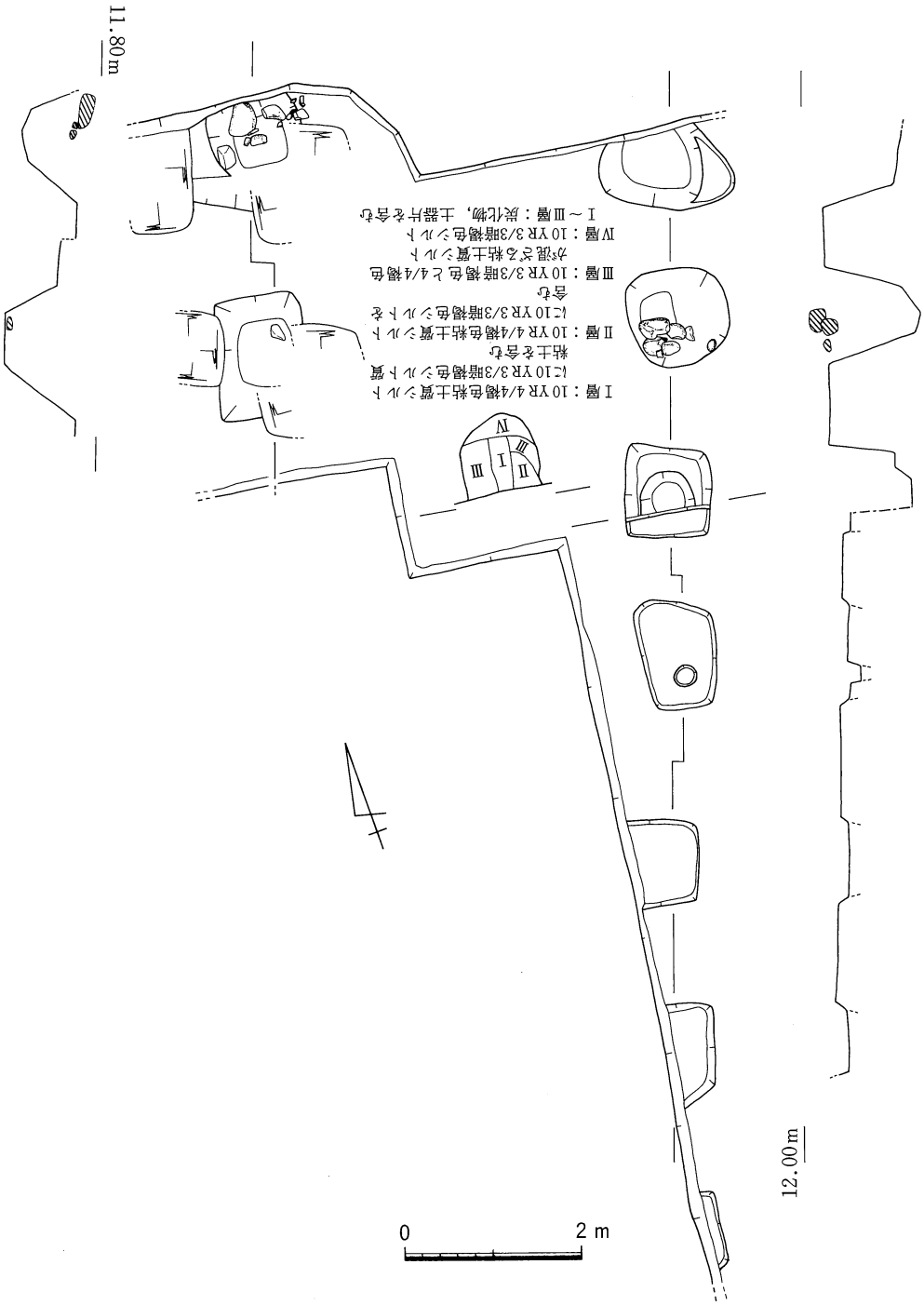


Fig. 49　SB 15遺構平面・セクション・エレベーション図

を断面で確認したが、Ｐロ２、Ｐロ３では平面的な切合いの確定が遅れた。Ｐイ１は南壁セクションでのみ確認した。他の建物と比較して柱間距離が短い。４つの柱穴で柱痕が確認され、Ｐロ２底からは扁平な石が出土した。Ｐロ３では検出時から平面で柱痕が検出でき、その中ほどの深さで柱痕部分に落ち込んだような状態で、重ねられた４個の完形の土師器杯（248～251）が出土した。なお、この様な状態は、SB 15東側の SF１と類似する。

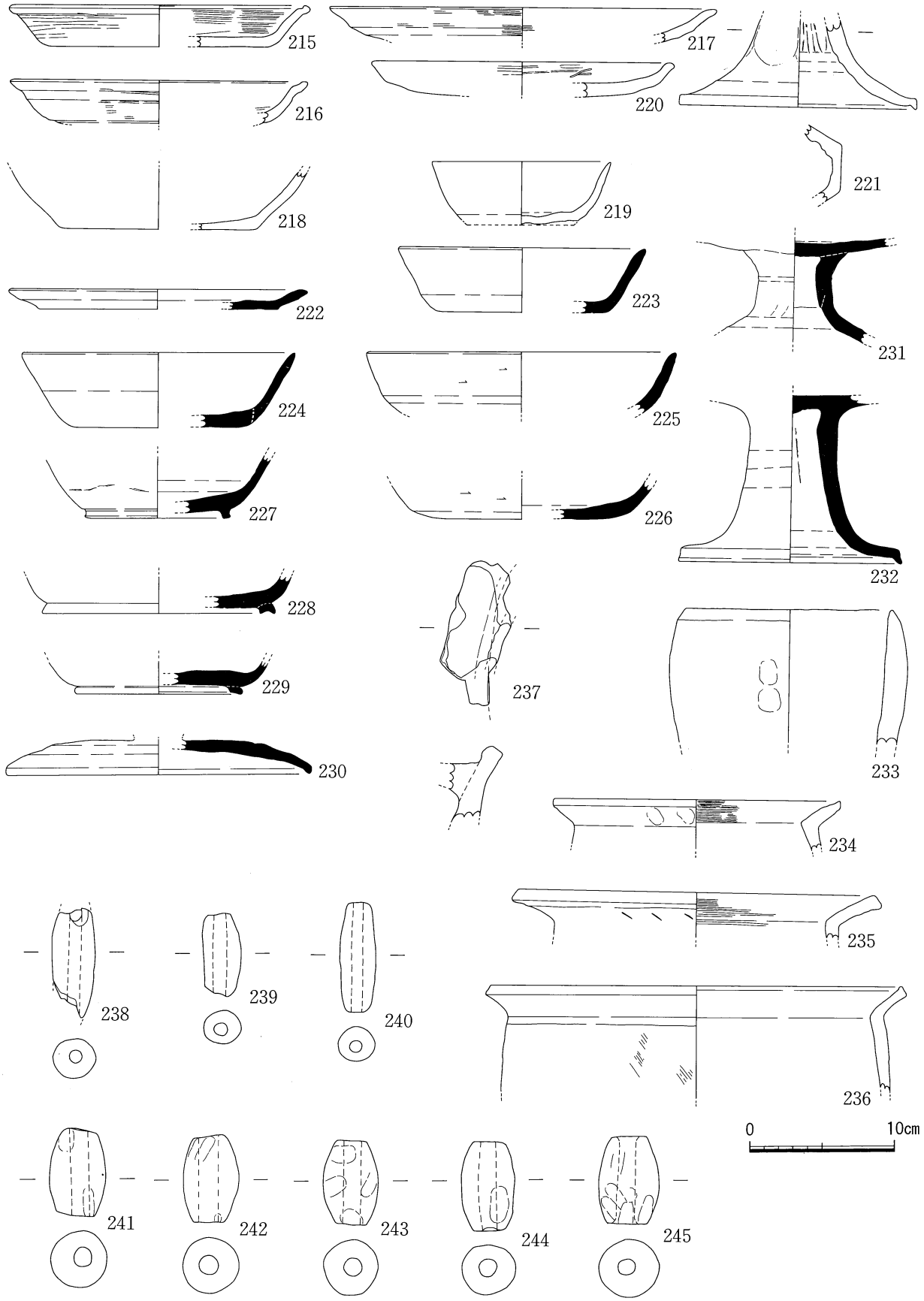


Fig. 50　SB 15出土遺物実測図（234～236は縮尺1/4）

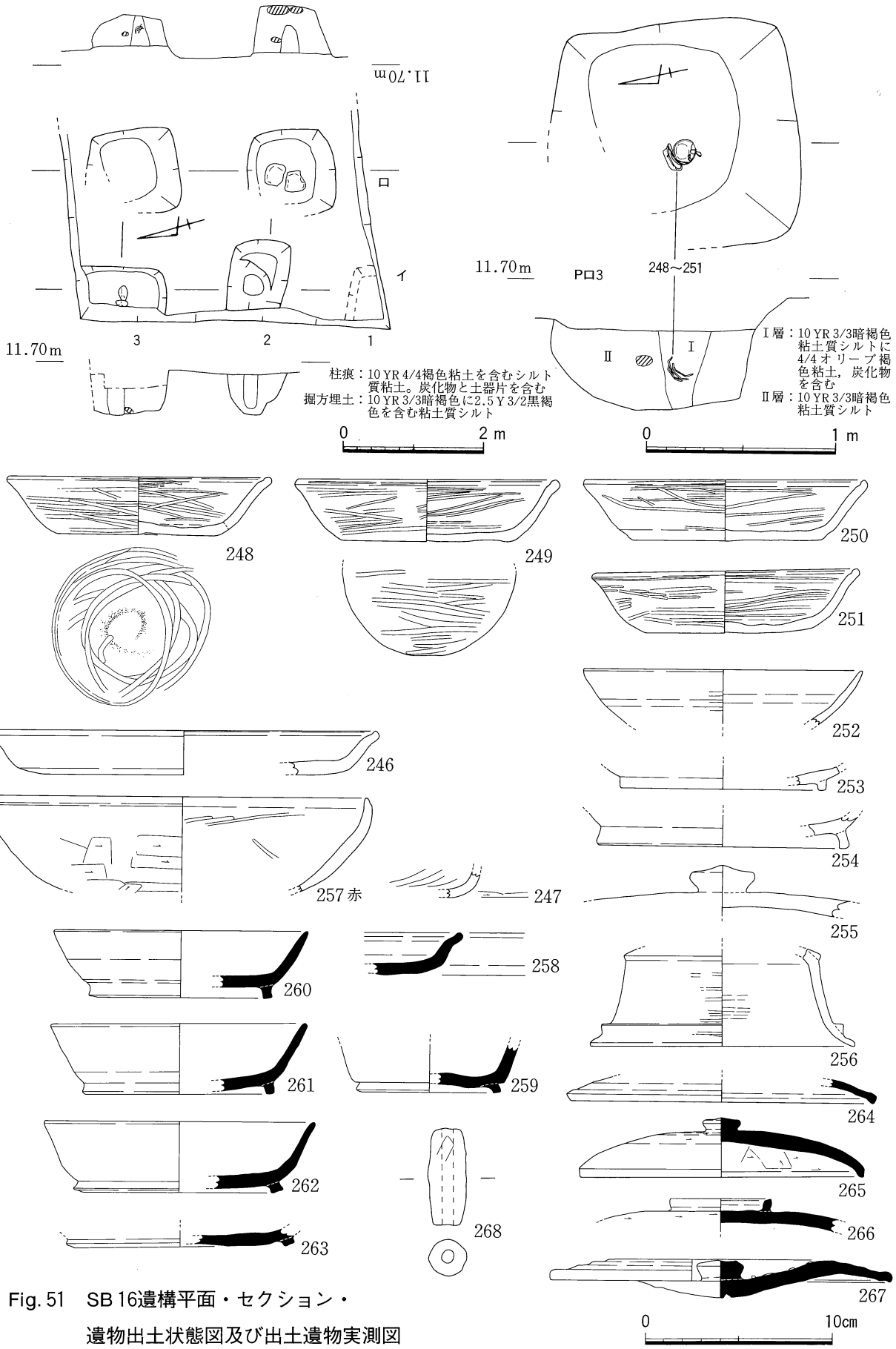


Fig. 51　SB 16遺構平面・セクション・
遺物出土状態図及び出土遺物実測図

SB 17（Fig. 52）

東部で検出した３×３間の総柱の南北棟で、南端柱列のみがＨ本区に属する。SD 26、SD 27、SD 28を切る。総じて柱間距離が短い方を梁間とした。柱穴規模は他の建物と比較するとやや小さい。ほとんどの柱穴で柱痕が確認でき、柱痕部付近に礫が検出されるものもあった。Ｐイ１では底面に敷かれたように川原石が検出された。

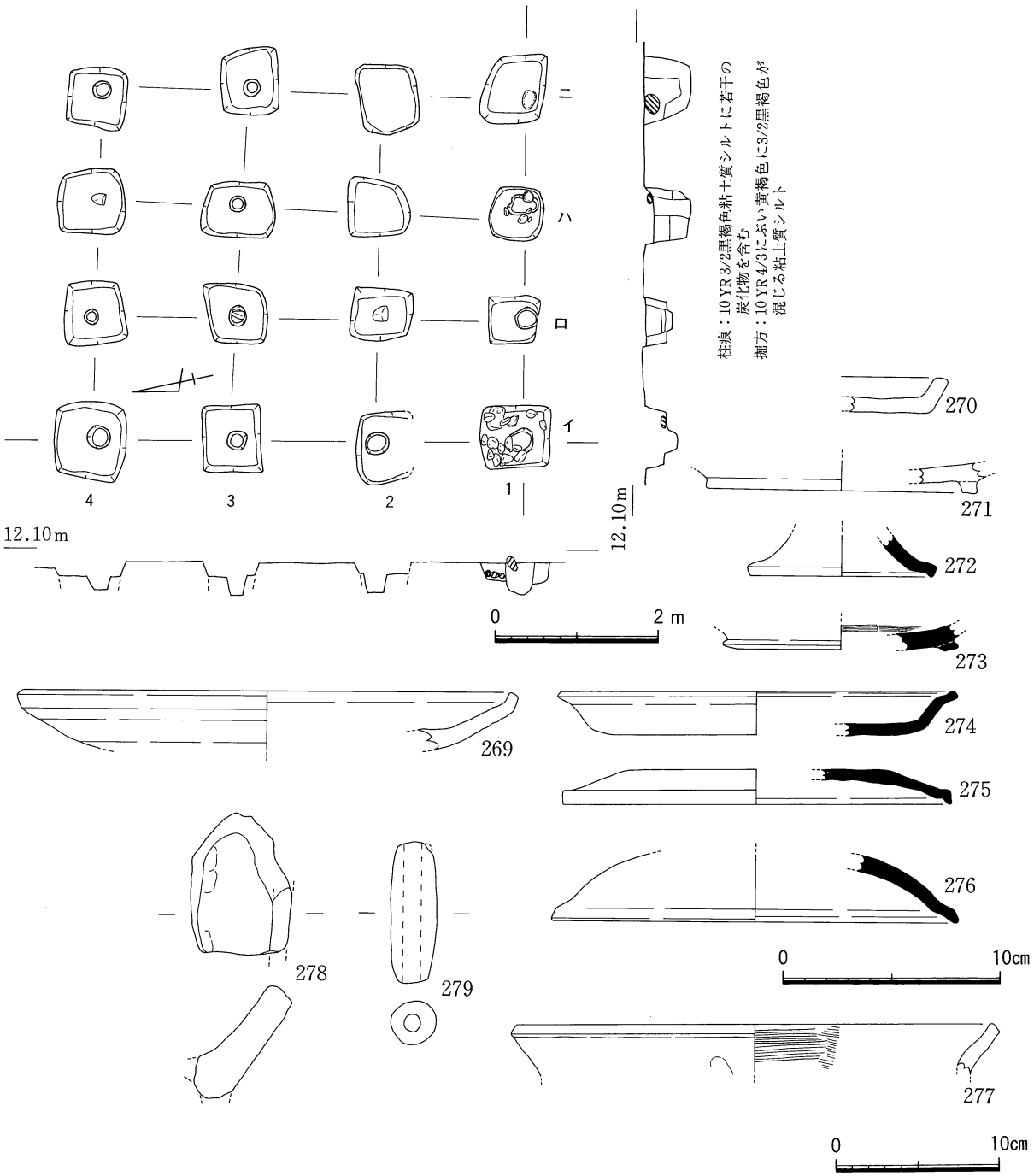


Fig. 52　SB 17遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図（277は縮尺1/4）

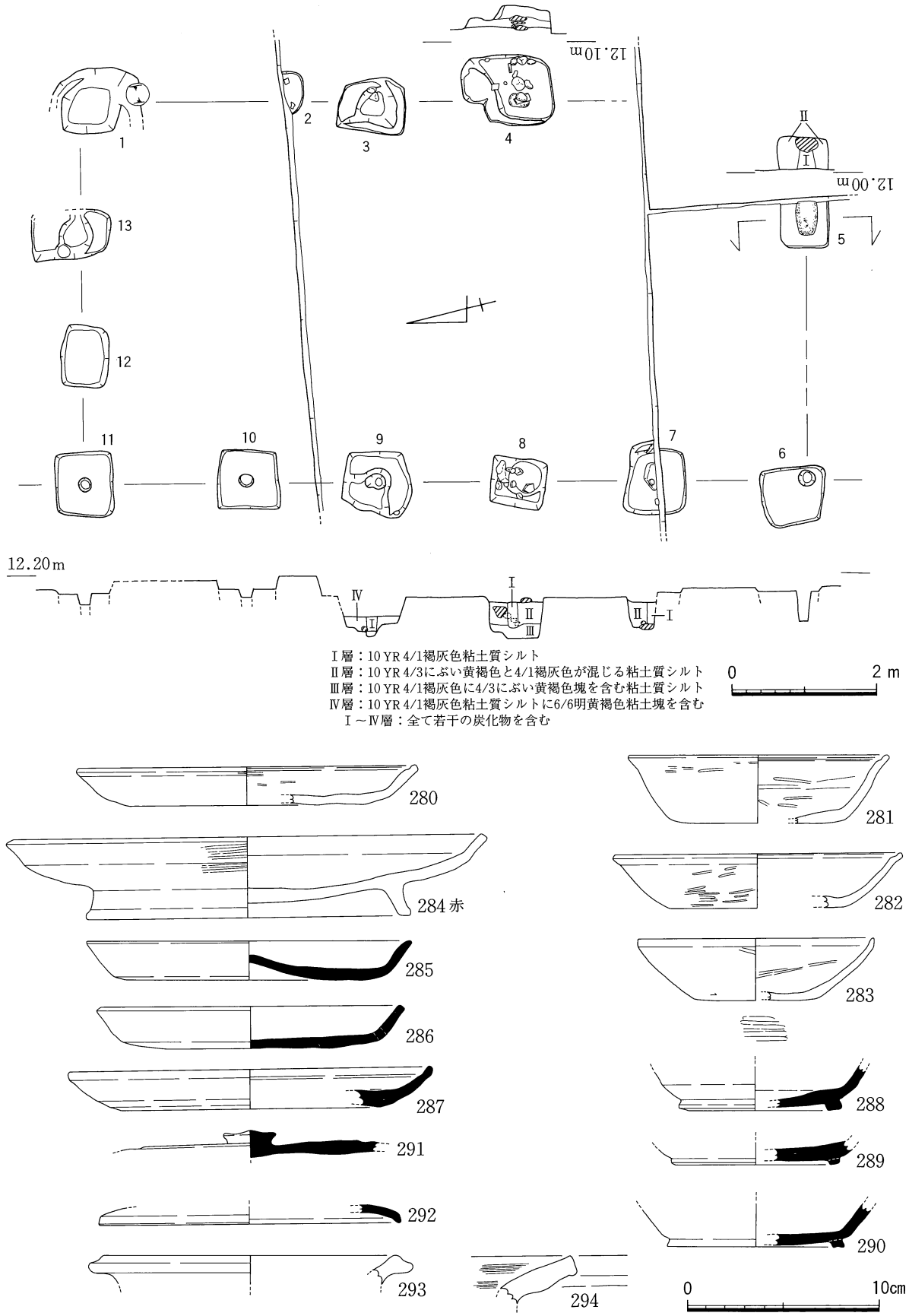


Fig. 53　SB 18遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

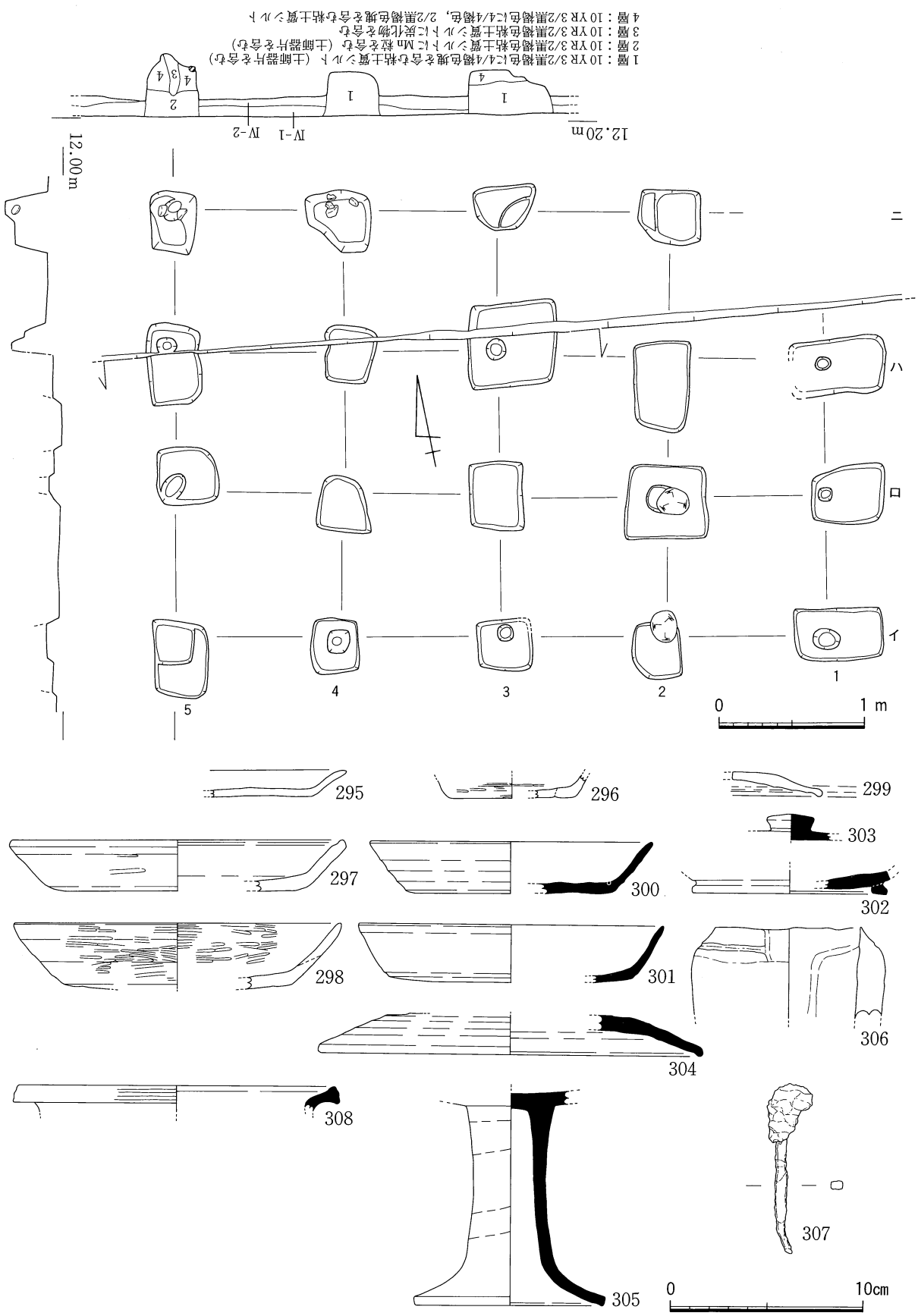


Fig. 54　SB 19遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

SB 18（Fig. 53）

中央部東寄りで検出した３×５間の南北棟で、建物中央部がＨ本区にかかる。SB ９、SX ５、SD 35、SK 22、及び基本層準Ⅳ-１層を切る。Ｐ１はSK 22と同時に掘削してしまったため平面プランが確定できない。Ｐ５～Ｐ11で柱痕が良く確認できた。礎盤として用いられた石がＰ５、Ｐ７より出土、Ｐ８では10～32㎝の石が柱痕を取り巻いて螺旋状に存在した。Ｐ７、Ｐ９からは鉄滓各１個が、Ｐ４からは付近に存在しない板状の粘板岩が出土した。

SB 19（Fig. 54）

中央部で検出した３×４間の総柱の東西棟で、北側のみがＨ本区に属する。基本層準Ⅳ-１層及びSB 11を切る。柱穴規模は他の建物と比較するとやや小さいものがある。梁間の柱間距離は桁行のそれより20～40㎝短い。Ｐハ５をはじめ、約半数の柱穴で柱痕を確認した。

SB 20（Fig. 55・56・57）

中央部東の南拡張区で検出した３×７間の南北棟である。西側に同じ７間のやや小振りの柱列が沿う。身舎の柱穴埋土は近辺の柱穴埋土と共通性がありほぼ暗褐色粘土質シルトであるが、この西側に沿う柱列の埋土には土師器片や焼土粒が比較的多く含まれていた。しかし、身舎と長さ・間数ともに一致すること、柱痕位置も身舎側と良く対応することからこの柱列をSB 20の庇と考える。埋土の相違については様々に考えられようが、SB 20は未確認の遺構を多数切っていること、身舎の西側柱穴列の検出は東側に較べ困難であったことも考慮される。

本遺構は南拡張区に位置するため、検出・確認に留めた。検出面は断面で確認していないが、北端部においてSB 9南端部との検出水準面の若干の比高差があり、SB 9より後出し、基本層準Ⅳ-１又はⅣ-２層上より掘り込まれたものと考えられる。また、SB 10、SD 36、SD 37を切っている。身舎の全体規模はSB 9と並んで今次検出建物中最大で、柱穴規模も大型であり、柱痕から推測する柱径は大きく、柱筋は良く揃っている。桁行のうち、中央のＰ14とＰ15間が2.9ｍと大きく開いている。身舎と庇の柱間は2.8～3.1ｍである。なお、身舎内南端にSK 29が位置する。

八稜鏡はＰ２の中央部やや南東寄りの遺構検出面より出土した。腹面を上、残存する外縁部を外側（東側）に向けた状態であった。鏡周辺の遺構埋土は影響を受けて灰オリーブ色に変色していた。その他、Ｐ12、Ｐ23からは、比較的残存率の高い遺物が出土している。

SB 21（Fig. 58・59）

南拡張区西部で検出した南北棟で、全体図でわかるように北側がやや複雑な状態であったが、２×５間の総柱建物として扱い、北側のやや小型のピット群をSA 9とする。拡張区に位置するので、完掘していない。今次検出の建物の中で柱間距離はほぼ最大、柱穴規模も最大級で、柱径も揃って大きい。梁間と桁行で柱間距離の差が認められず、掘方でみれば中央の柱列がややふれている。本遺構周辺は基本層準の項で述べた通り、堅固な砂礫層が地山面となっている。

遺物はＰロ３柱痕付近とＰイ４より比較的残存率の高い土器が、また、Ｐイ２柱痕部より有溝土錘が複数出土している。

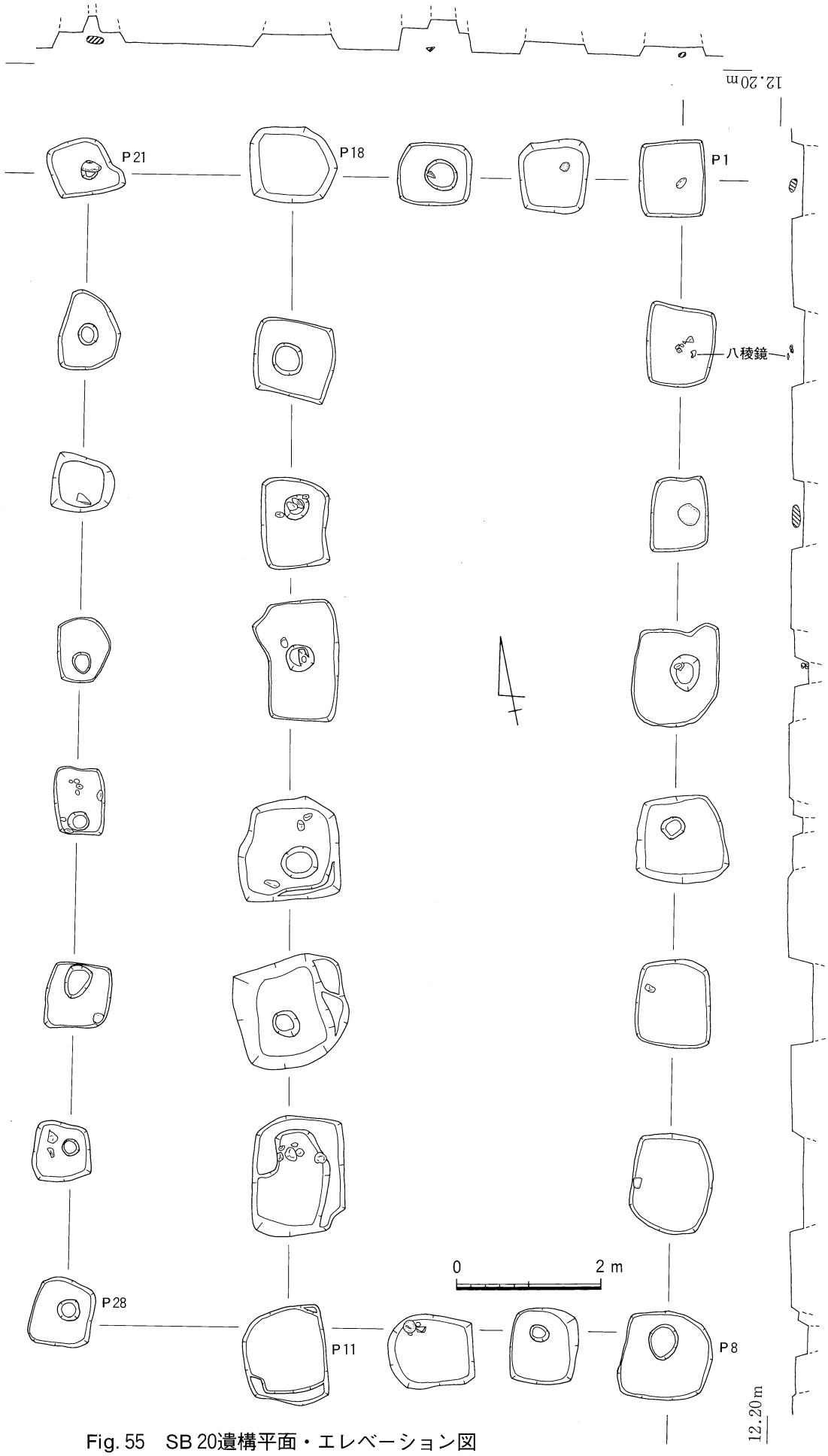


Fig. 55　SB 20遺構平面・エレベーション図

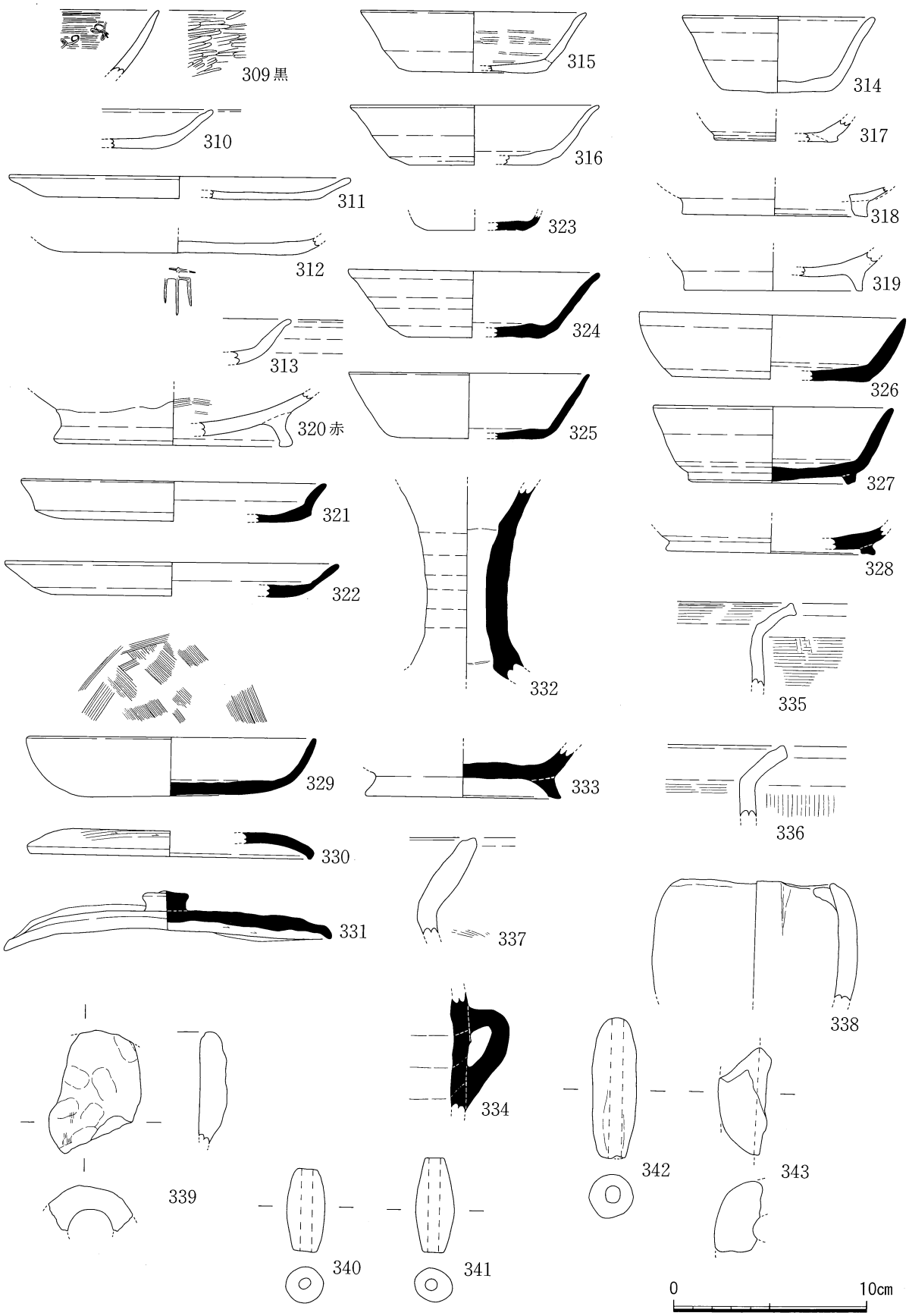


Fig. 56　SB 20出土遺物実測図

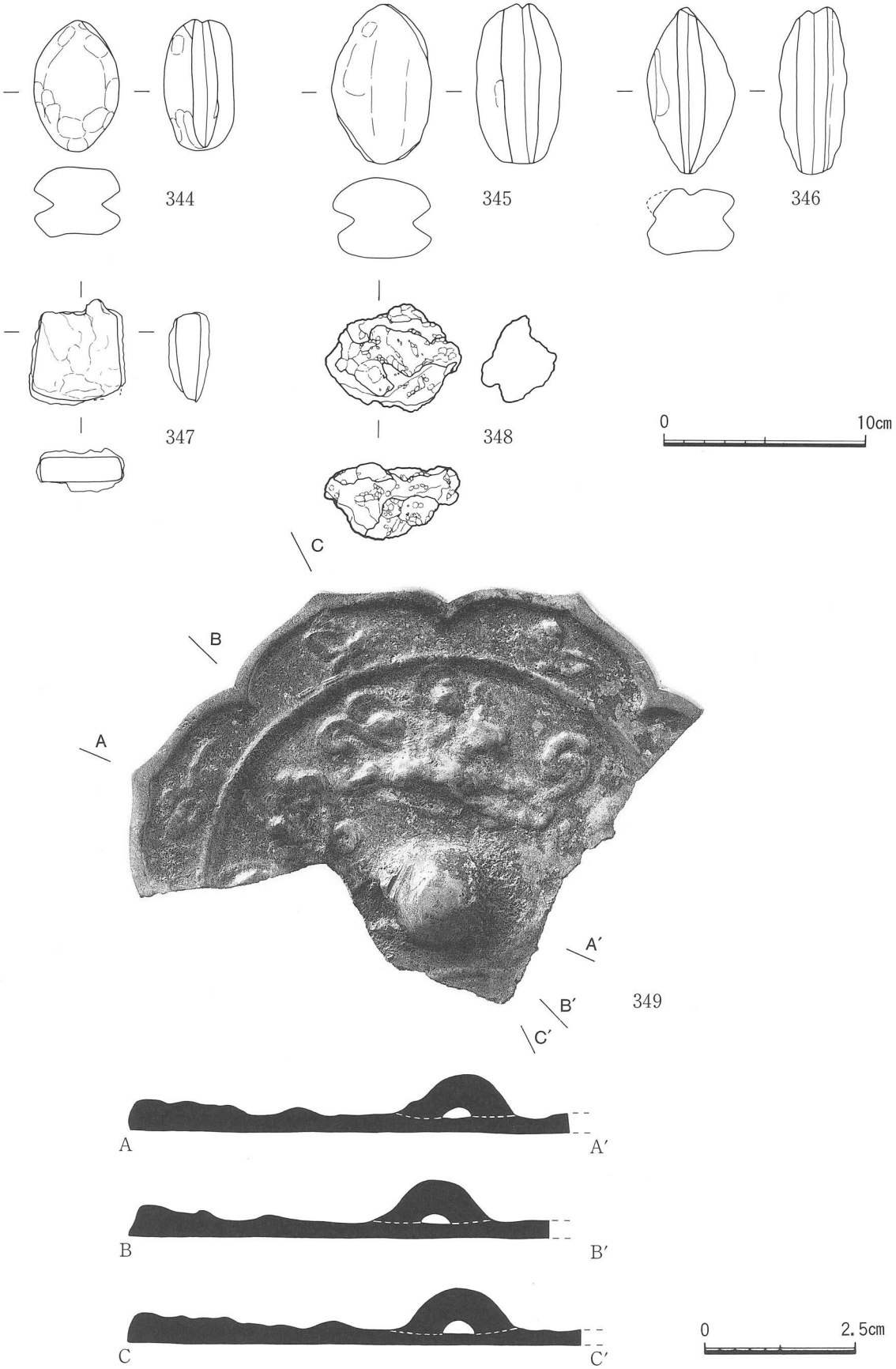


Fig. 57　SB 20出土遺物実測図及び写真（349は実寸）

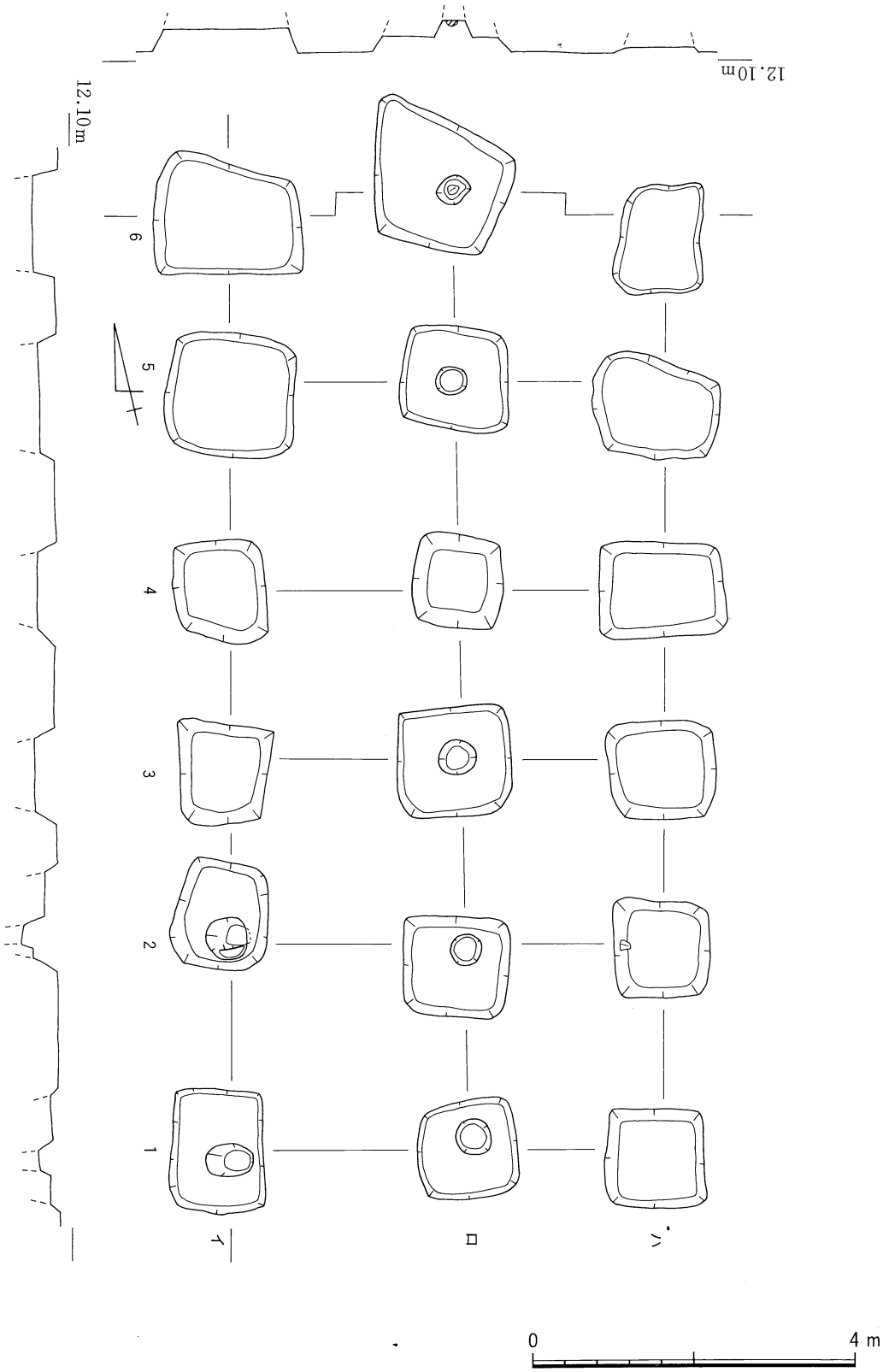


Fig. 58　SB 21遺構平面・エレベーション図

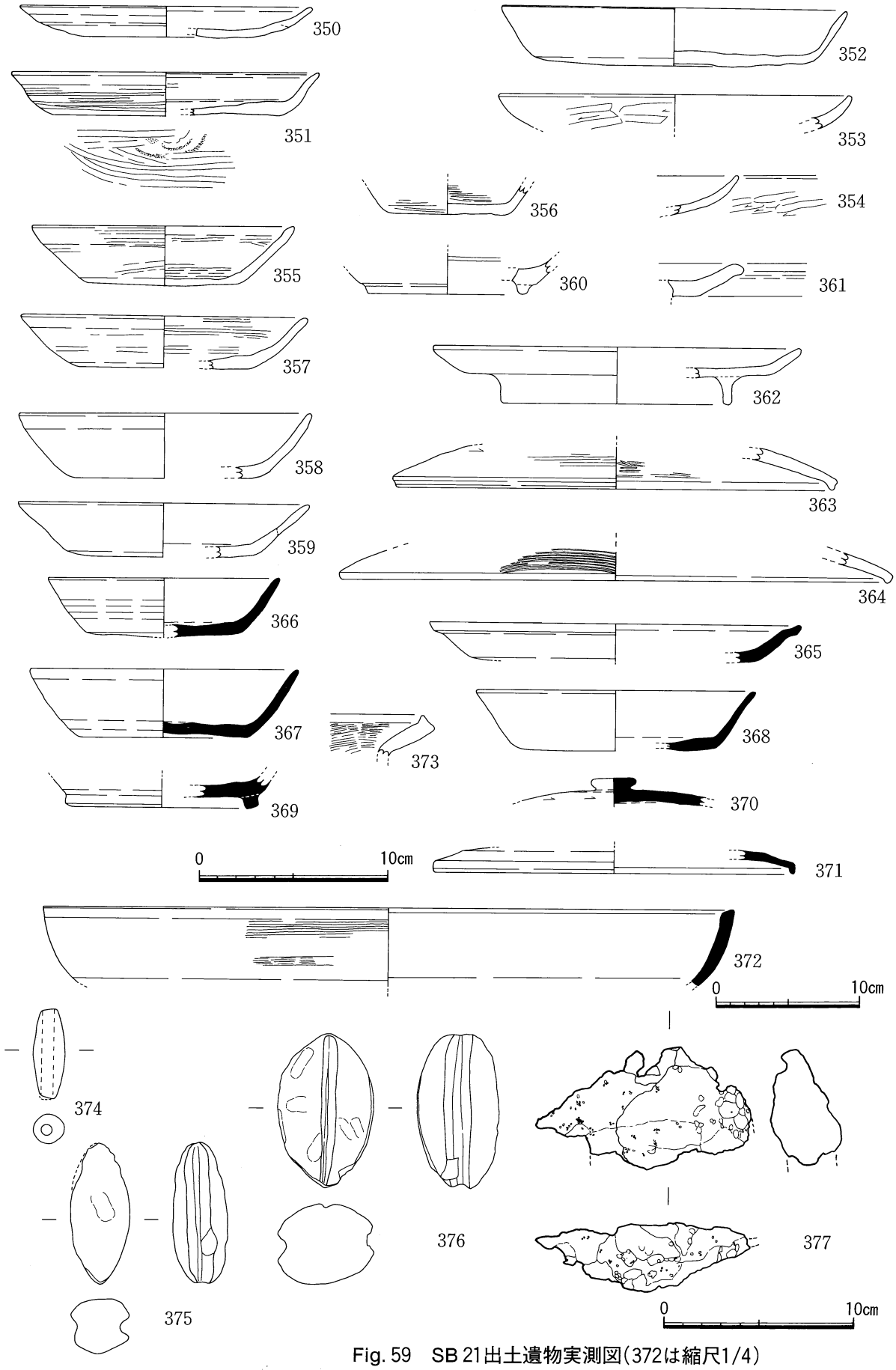


Fig. 59　SB 21出土遺物実測図(372は縮尺1/4)

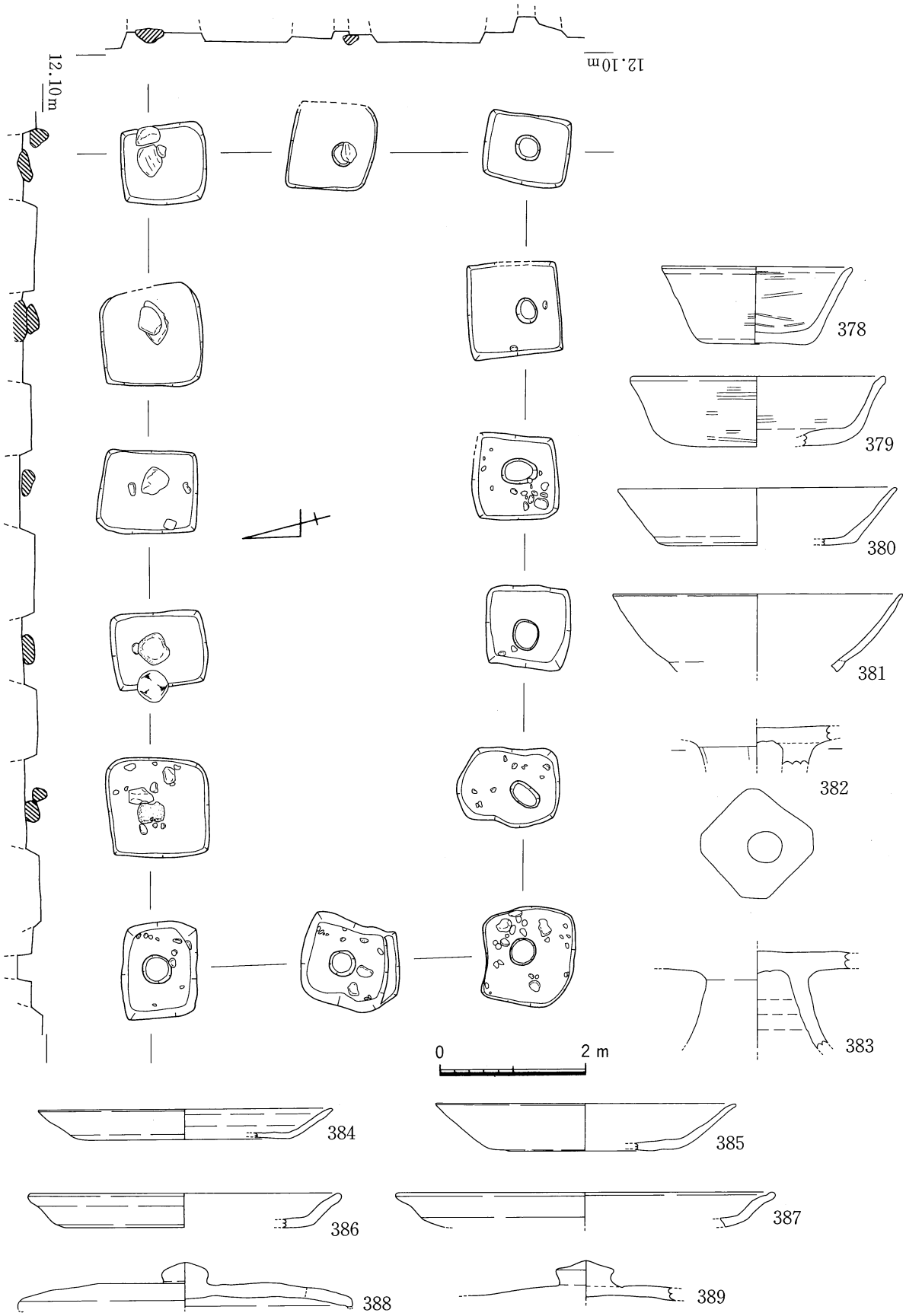


Fig. 60　SB 22遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

0　10cm

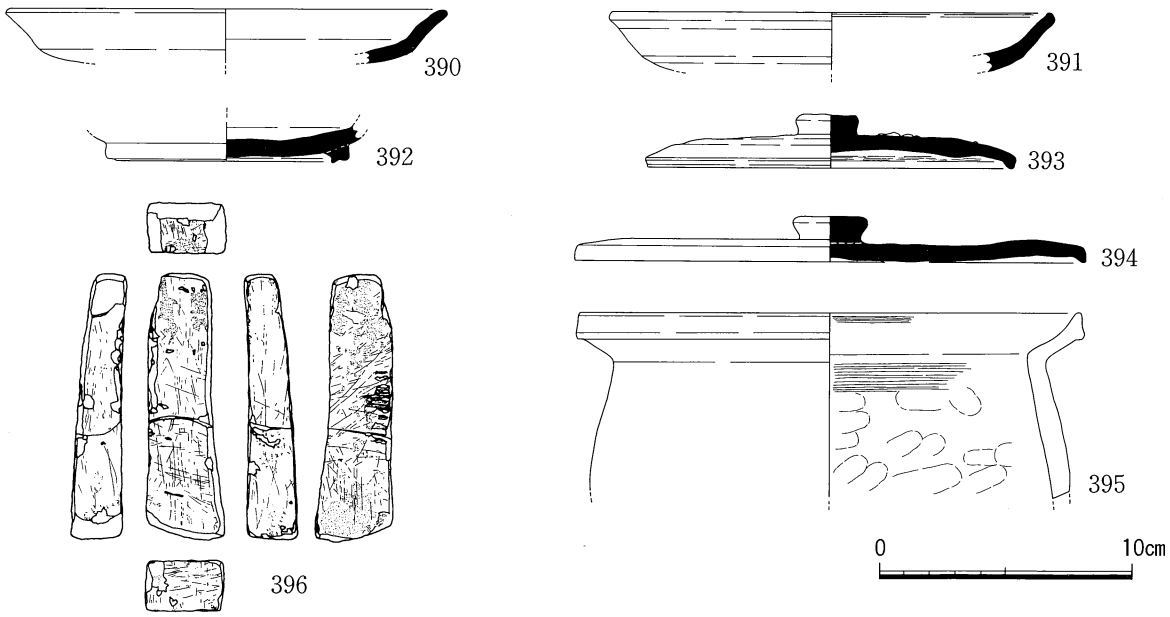


Fig. 61　SB 22出土遺物実測図

SB 22（Fig. 60・61）

中央部北拡張区で検出した２×５間の東西棟で、旧耕作土下の基本層準Ⅳ-１層上面より掘り込まれる。拡張区に位置するため検出・確認に留めた。東端で大型のピットを切り、Ｐ５、Ｐ12でピットに切られる。柱穴規模は大型で、平面形と規模が揃っている。梁間は２間で柱間距離が広い。埋土は暗褐色に褐色塊を含む粘土質シルトを主とし、西端部では褐灰色を呈し、礫を含むものが多い。北側のＰ11～Ｐ２では柱痕に相当する位置の上面で30～60㎝大の石を検出した。Ｐ９は柱痕部を掘削できたこともあってか、完形を含む一定量の遺物が出土している。尚、南側中央部で、２基の須恵器大甕（1029・1030）が遺構とほぼ同時に検出された。

②　柵列

SA 4（Fig. 62）

SB 22の南西に沿うが、柱掘方はSB 22に比してやや小振りで、形状も異なる。北拡張区に位置するため確認に留めた。北端から順にＰ１～Ｐ７の番号を付した。褐灰色粘土質シルトの埋土中に数～20㎝前後の礫を含むが、Ｐ６とＰ７間に位置するピットＰ14、Ｐ15ではそのような礫を含まないという差異が認められる。Ｐ４から比較的多くの遺物が出土した。

SA 9（Fig. 63）

SB 21北側に位置するクランク状の柵列として報告する。拡張区であるため確認に留めた。北端から順にＰ１～Ｐ６の番号を付した。

SA 10（Fig. 63）

Ｈ本区東端で３間分を検出した。円形の柱穴からなり、方形柱穴を持つ遺構群とは明らかに方向が異なる。各柱穴に北からＰ１～Ｐ４の番号を付した。Ｐ１はSD 26埋土に掘り込まれる。Ｐ２より半完形の土師器杯（413）が正立して出土した。

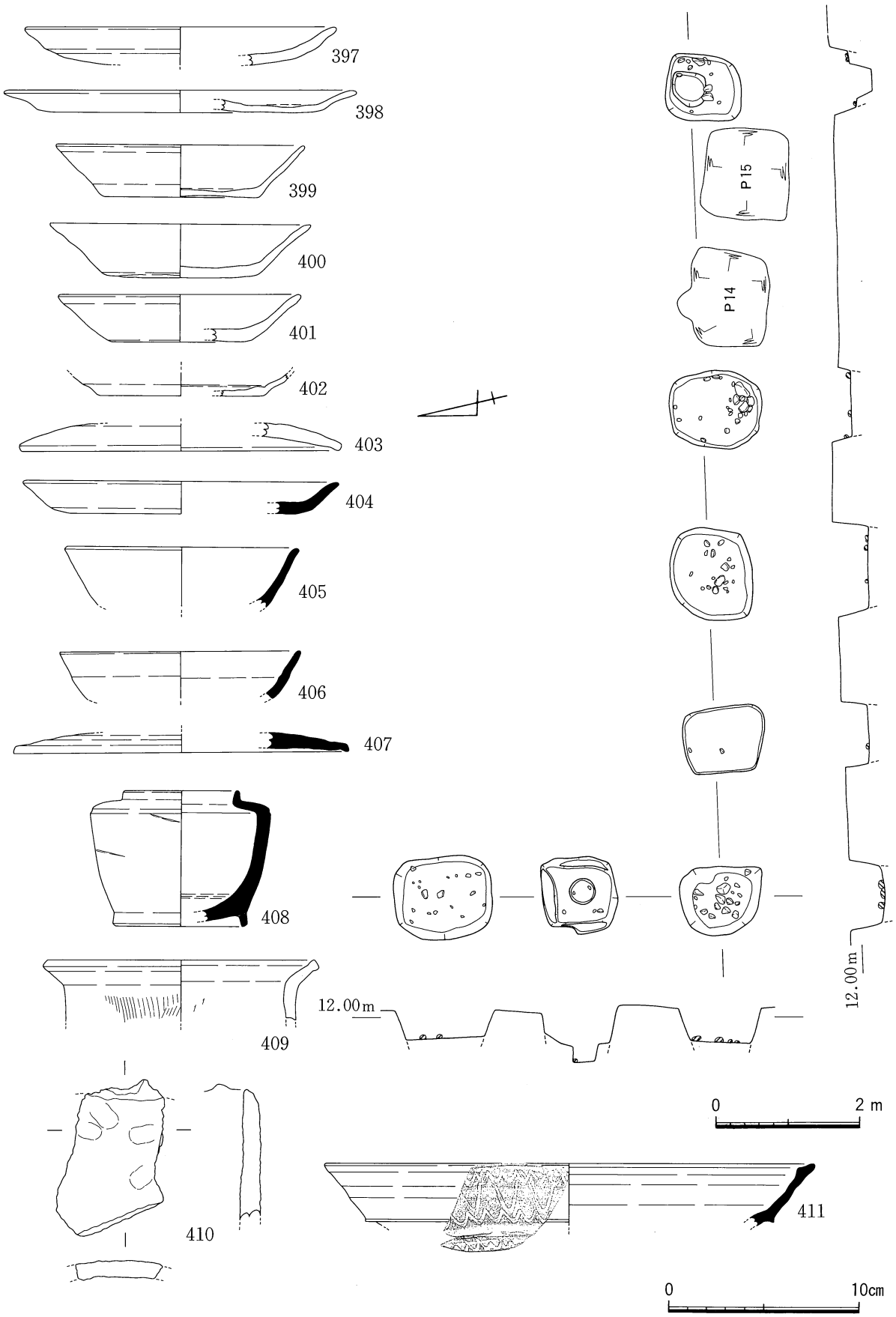


Fig. 62　SA 4 遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（411は縮尺1/4）

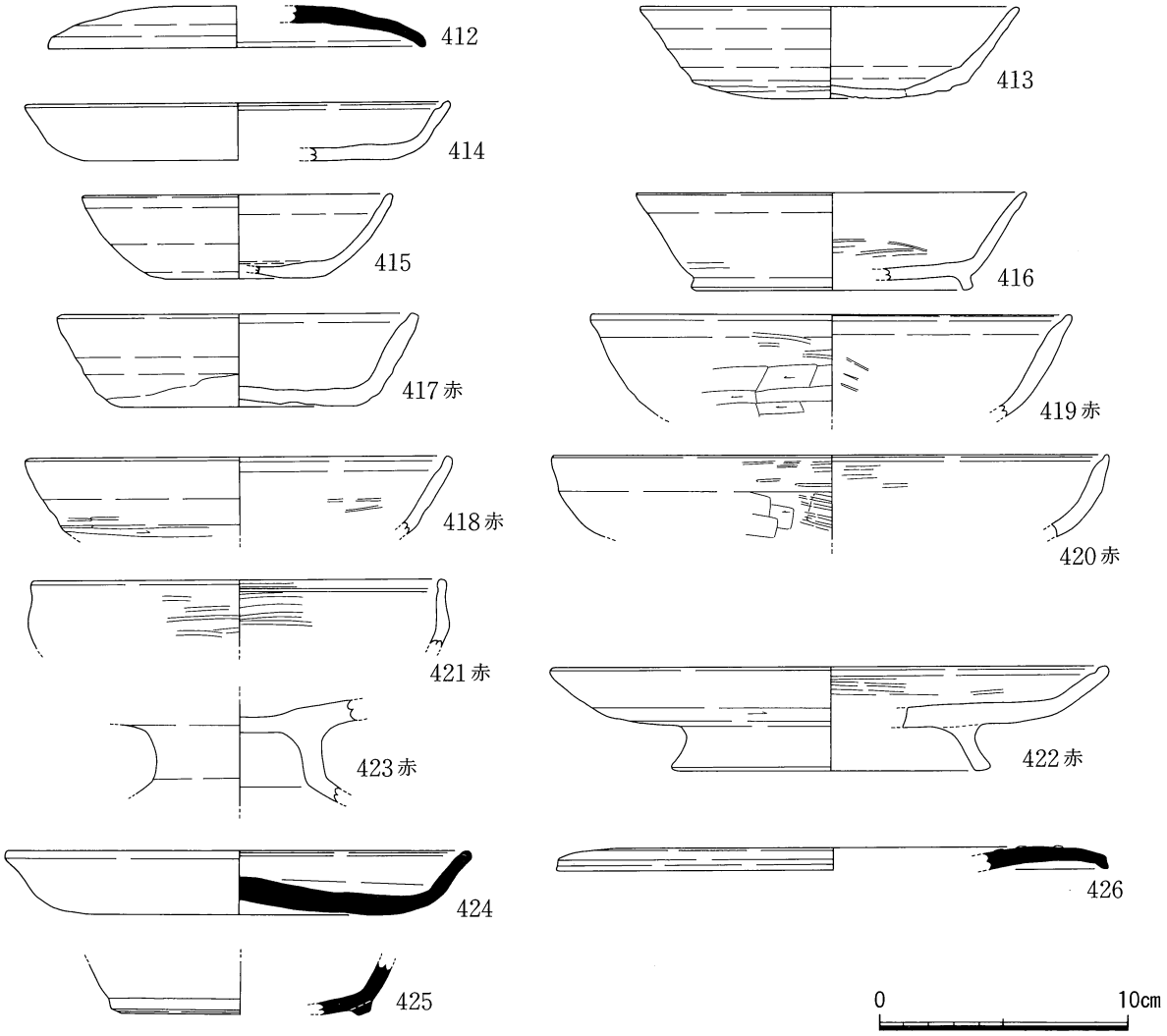


Fig. 63　SA 9 ・10・11出土遺物実測図

SA 11（Fig. 63）

多くはSB 9に掘り込まれており、H本区北壁セクションではⅣ-2層下に存在する。P 2では柱痕部下層で20㎝大の礫を検出、P 7では底に被熱・打割された18㎝大の礫が、P 5では4個の20数㎝大の礫と、板状の粘板岩が焼土塊と共に認められ、石のなかには被熱赤変しているものもあった。

③　集石遺構1（Fig. 64）

南拡張区南部で4～30㎝の礫からなる7つの集石部を確認したが、検出したのみで精査していない。その為不明要素が多いものの、形状や並び方からみて何らかの建物跡と仮定して図示・計測した。集石5は径約60㎝の整った円形で、断面は浅い擂鉢状を呈す。集石1～3で隅丸方形の掘方が検出されたことや、SB 14・SB 16での柱痕部に礫を配した例から考えると、掘立柱建物であった可能性もある。遺物は集石6からの製塩土器をはじめ細片が出土しているが、図示できるものは無い。

④　土坑

以下に報告する土坑については、拡張区に存在するものも性格を把握するために完掘した。

SK 16（Fig. 65・66）

H本区東部で検出した1.02×1.24ｍの円形の土坑で、南側で切れる不明瞭な段部を持つ。V層除

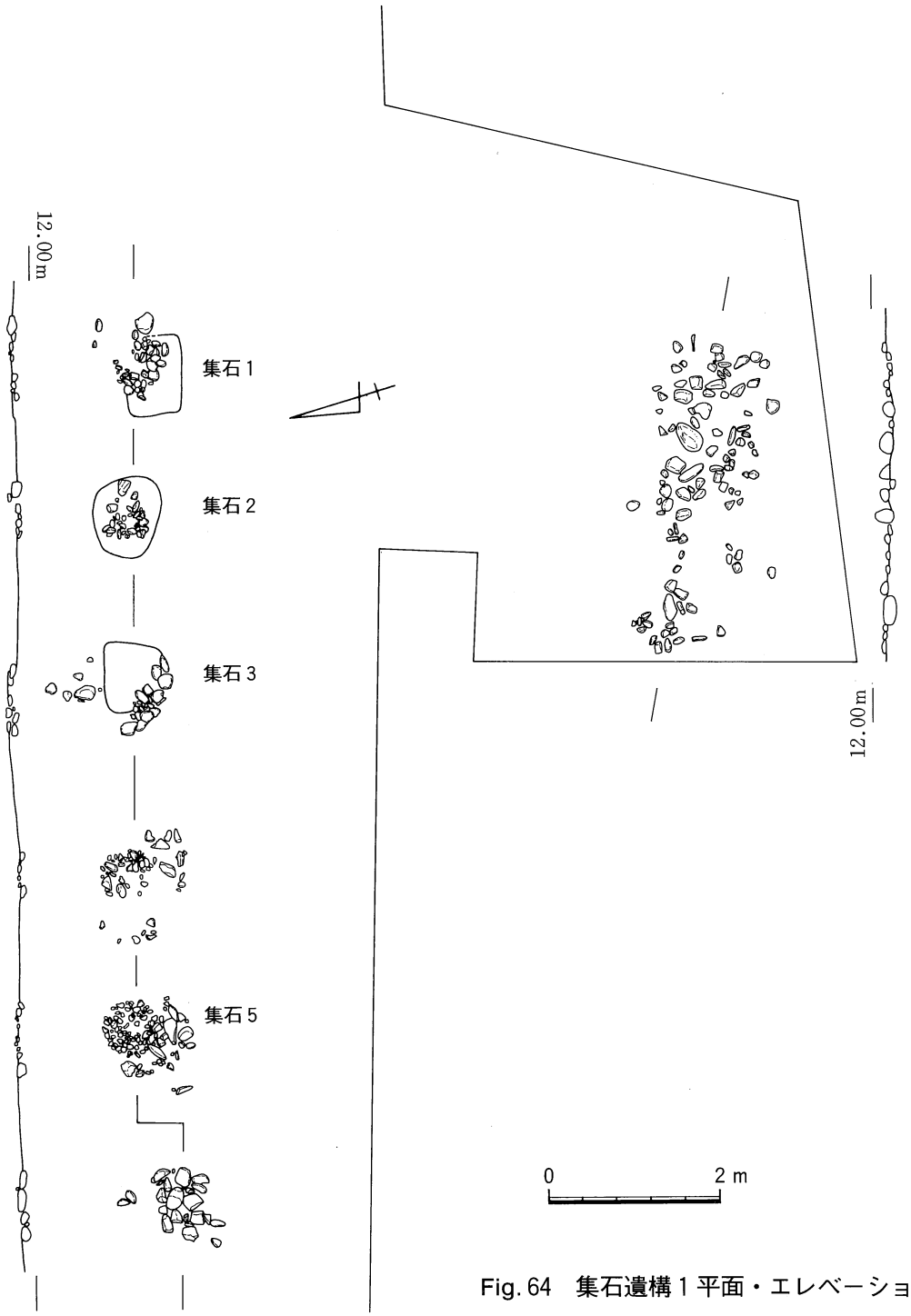


Fig. 64　集石遺構1平面・エレベーション図

去後に検出したが、各基本層準との切合い関係は明確にし得なかった。底部に粘土塊を含み締りのあるⅡ層が存在し、Ⅱ層除去後の底はピット状になる。いずれの面にも被熱痕は確認できず、明確な焼土も含まれないが、埋土Ⅰ層より土器とともに出土した大小の石の中には、被熱、打割されたものが含まれていた。(443) は長さ40㎝、重さ35㎏を測り、被熱赤変している片面の側縁付近が敲打されている。この被熱面を下にⅡ層直上より出土した。中央南東寄りの須恵器甕片下のⅠ層下層からは、鞴羽口片1片 (441) が出土した。

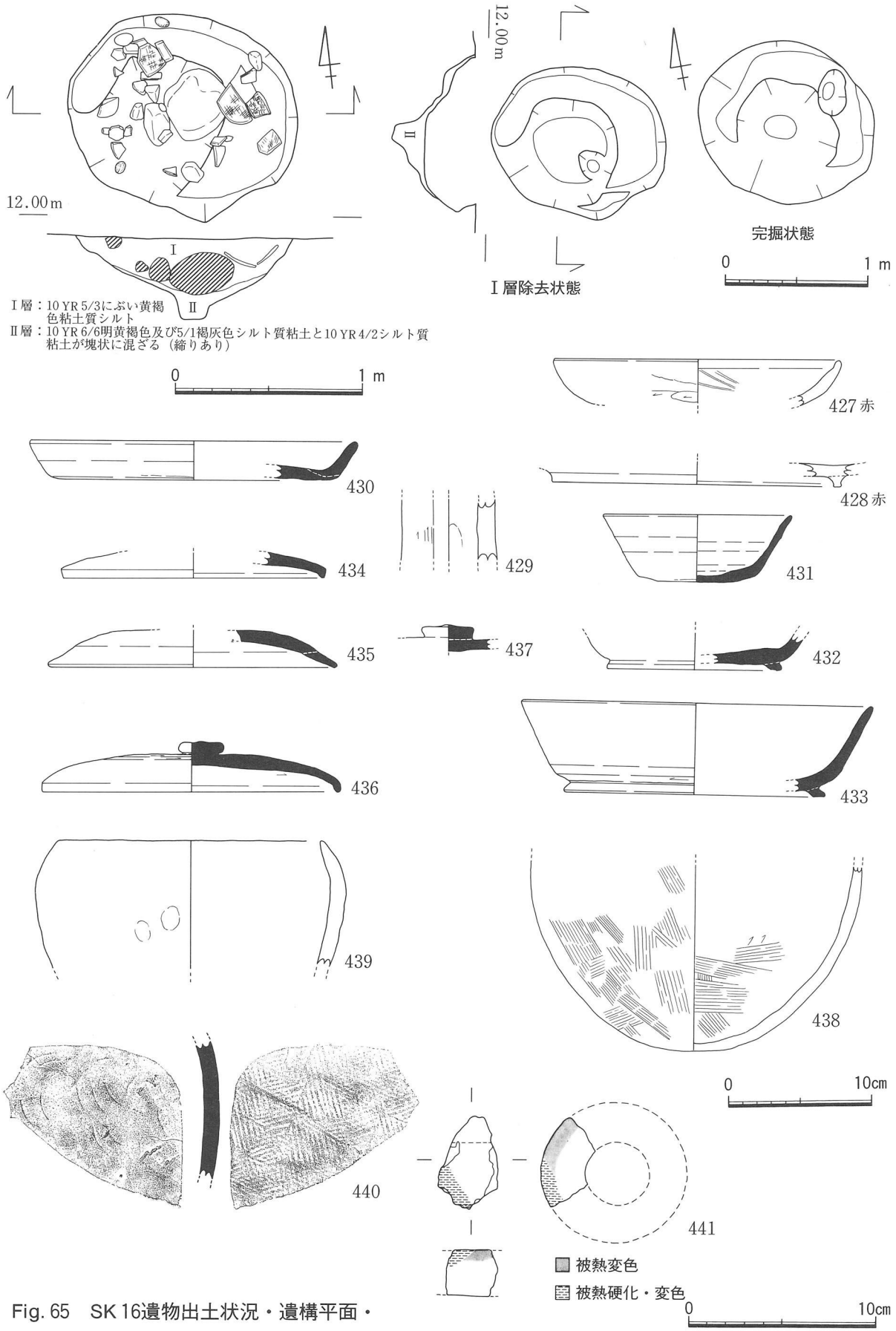


Fig. 65　SK 16遺物出土状況・遺構平面・
セクション図及び出土遺物実測図（438は縮尺1/4）

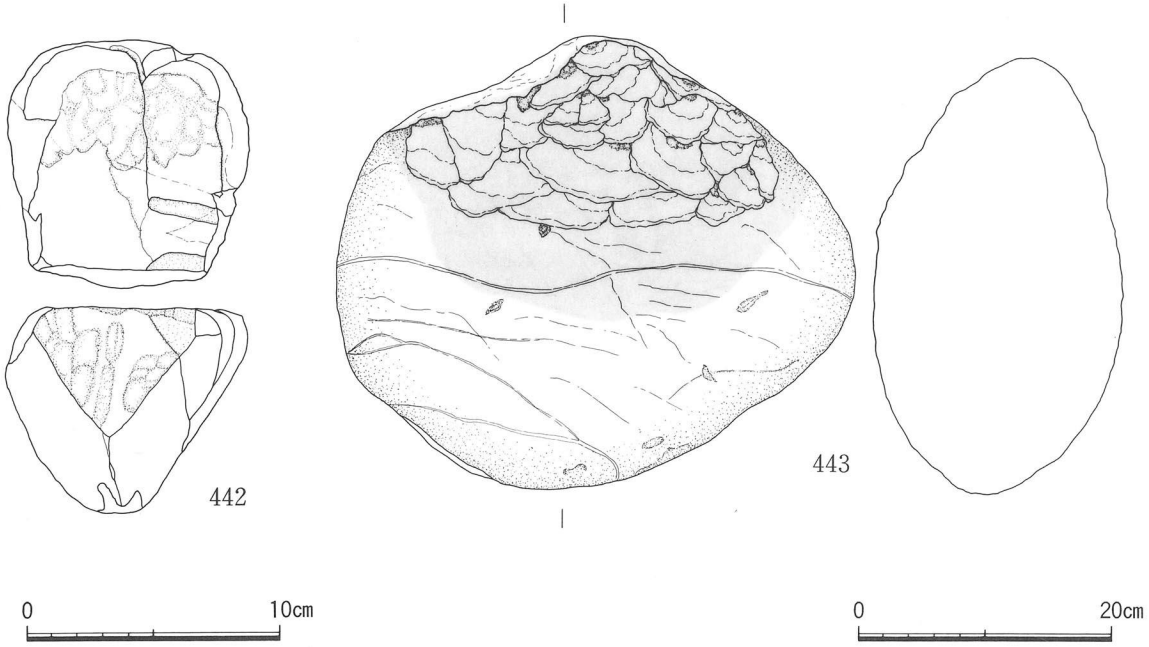


Fig. 66　SK 16出土遺物実測図

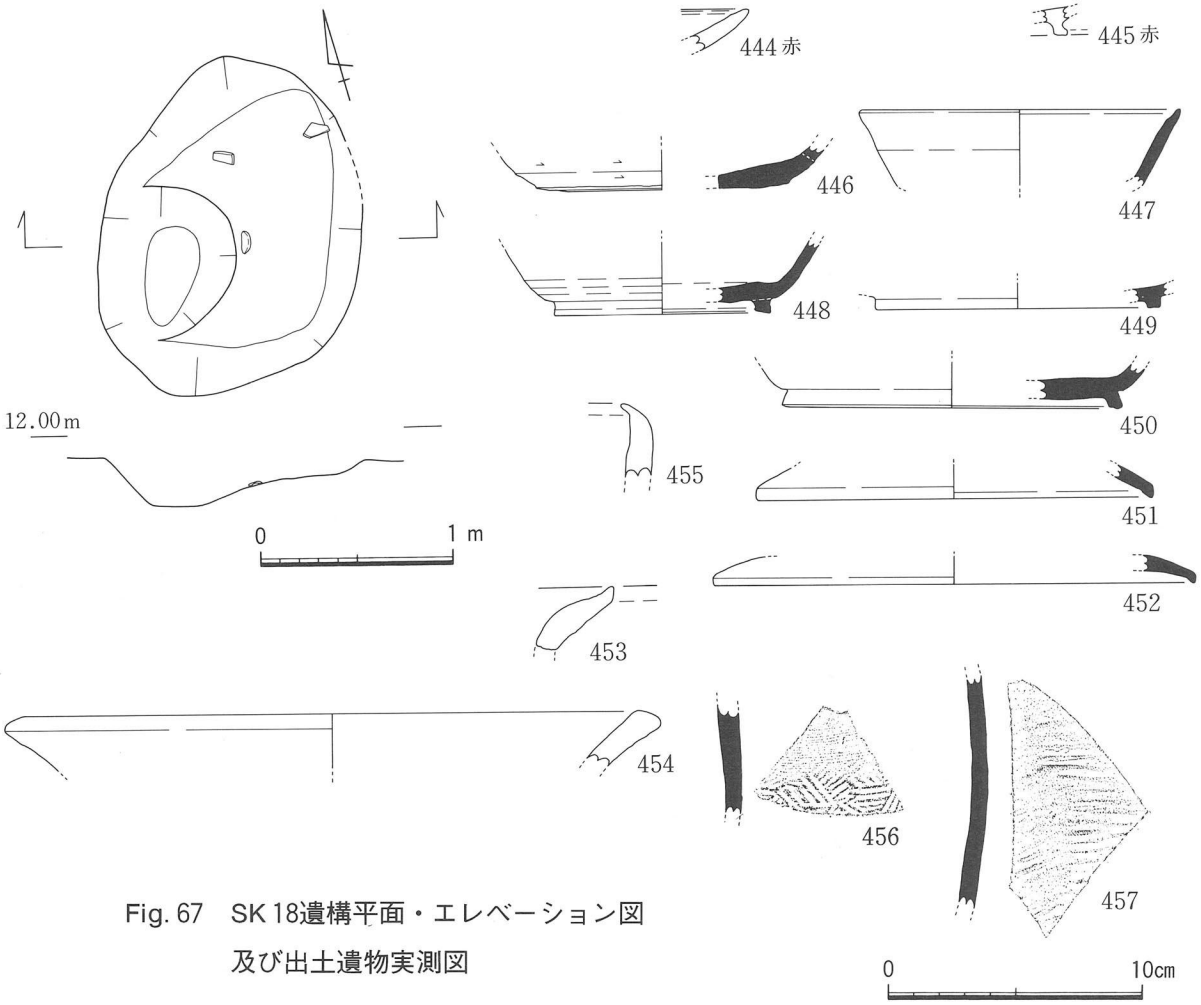


Fig. 67　SK 18遺構平面・エレベーション図
及び出土遺物実測図

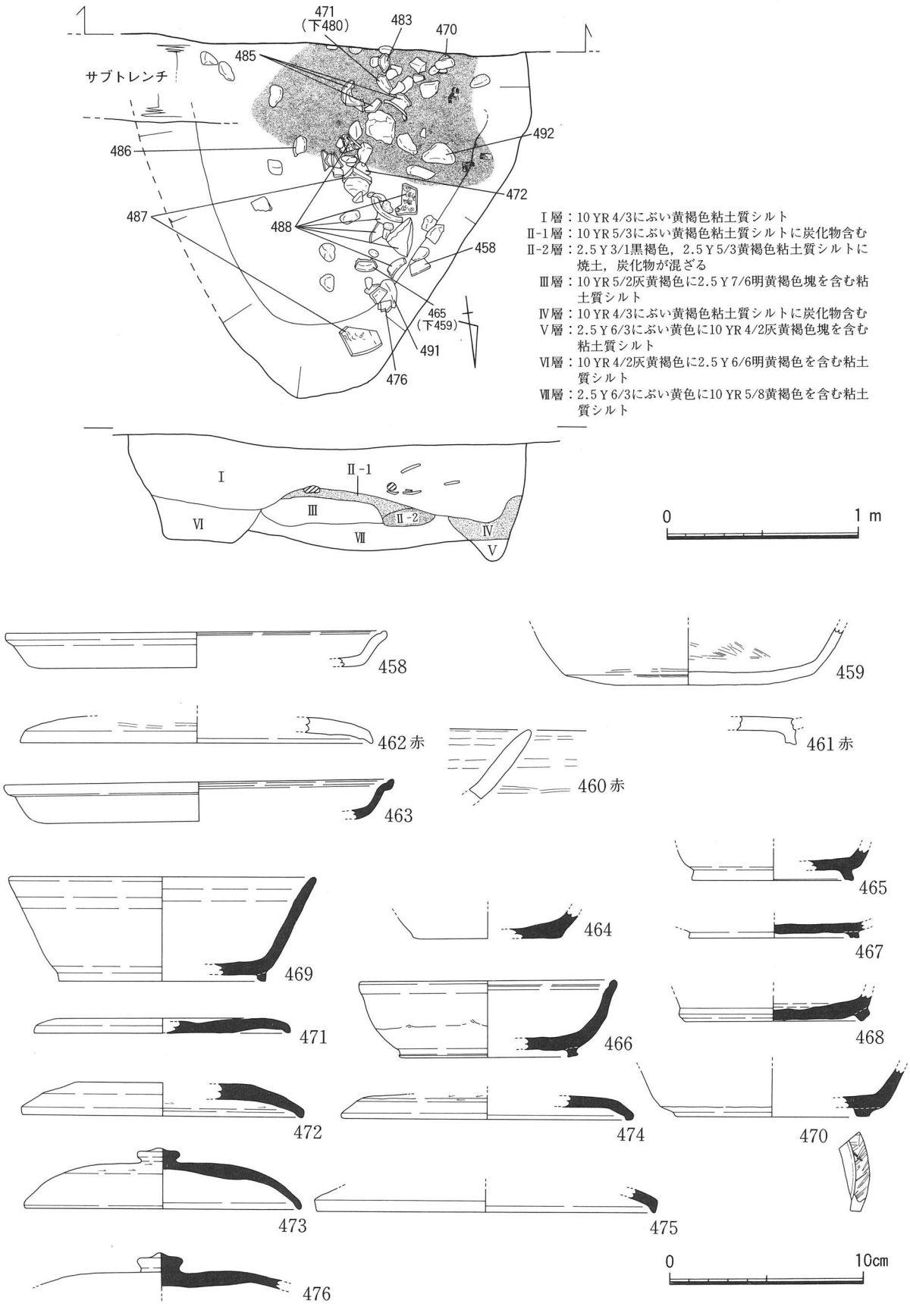


Fig. 68　SK 20遺物出土状況・セクション図及び出土遺物実測図

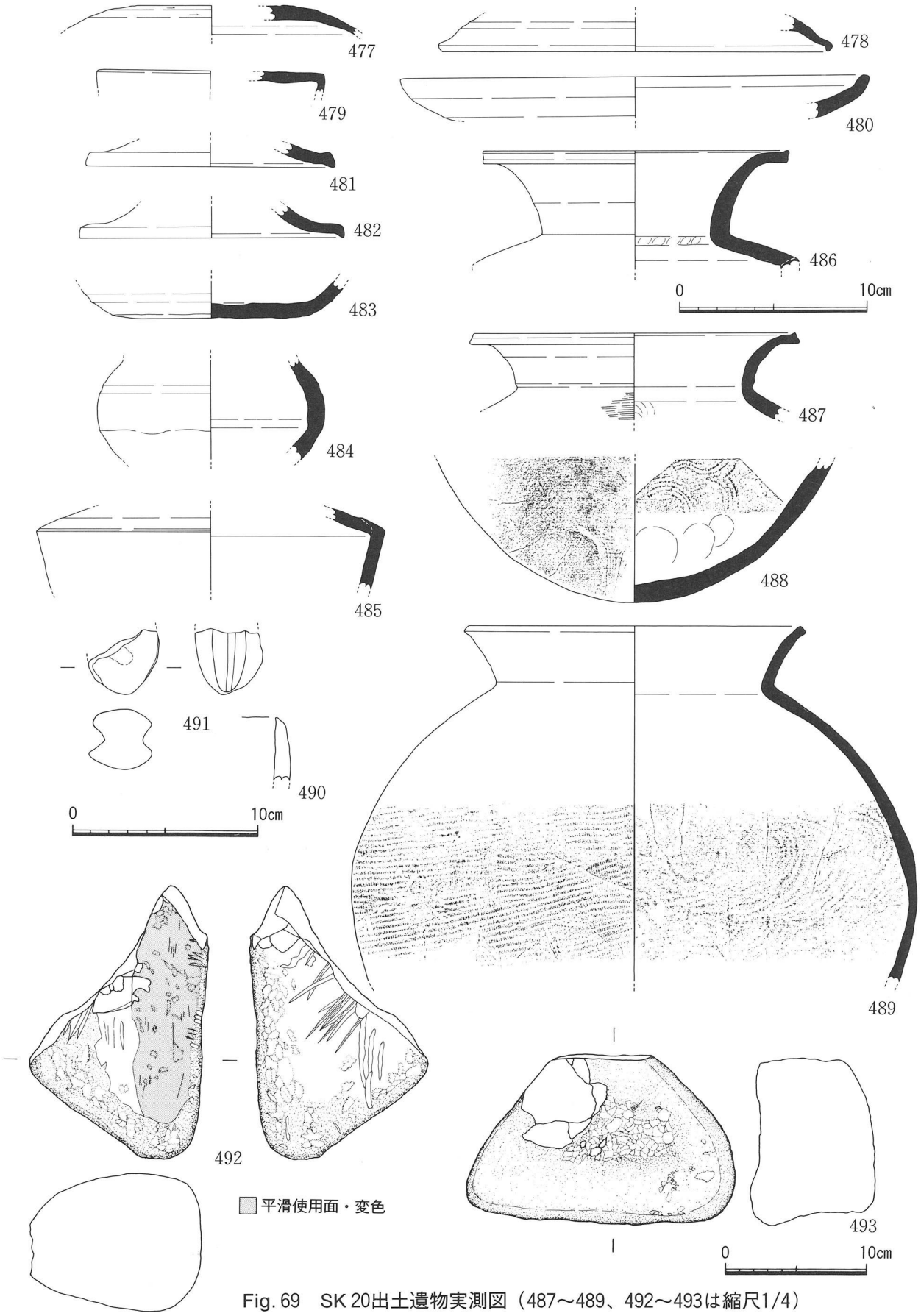


Fig. 69　SK 20出土遺物実測図（487～489、492～493は縮尺1/4）

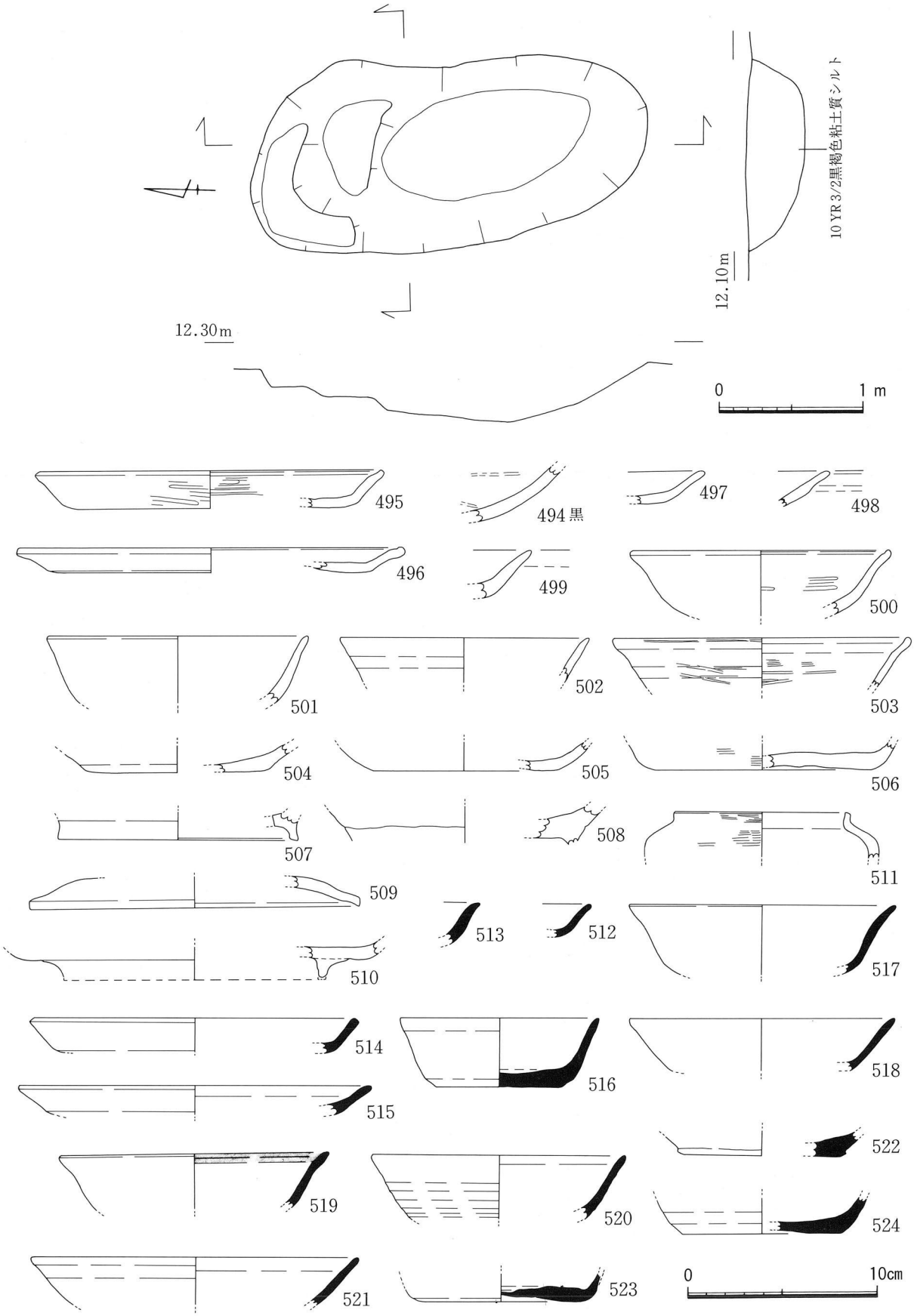


Fig. 70　SK 21遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

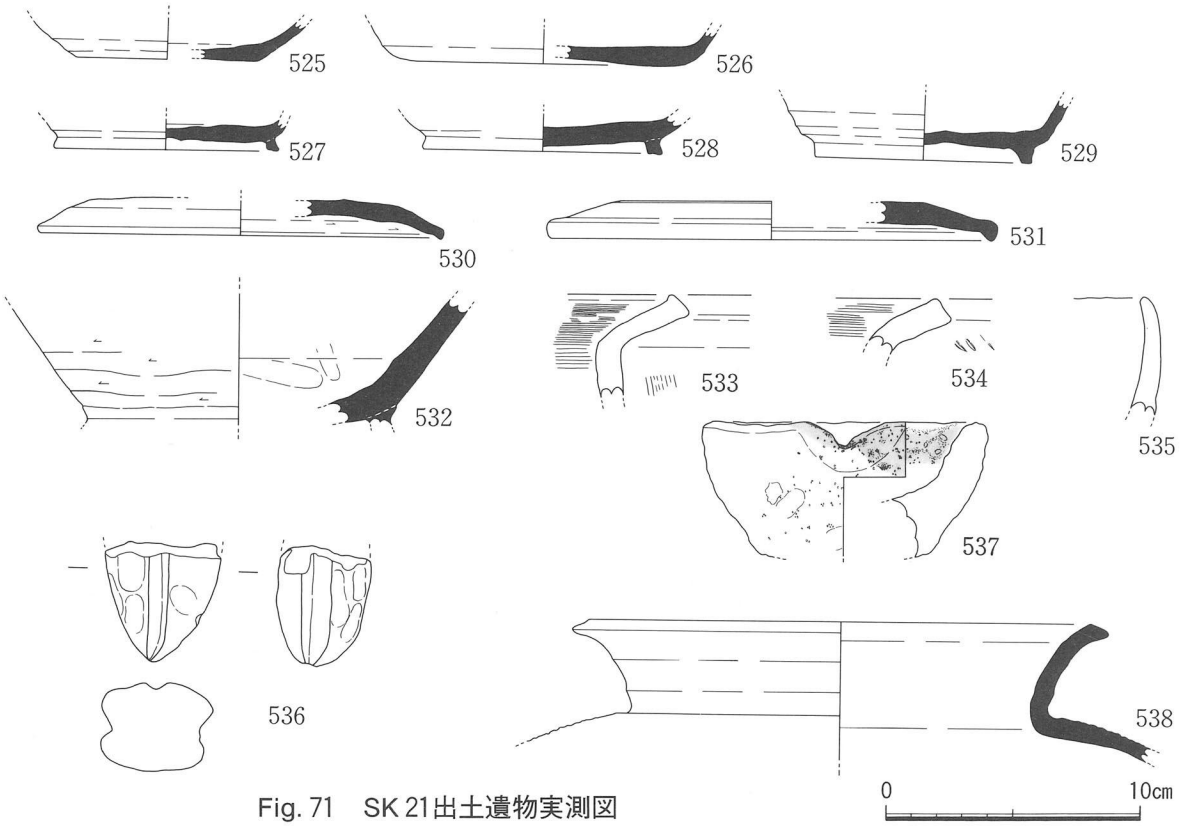


Fig. 71　SK 21出土遺物実測図

SK 18（Fig. 67）

H本区東部で検出した1.82×1.36ｍの楕円形の土坑で、SD 29、SD 30に切られる。基本層準との関係は確認できなかったが、検出は近隣の遺構より遅れ、Ⅴ層下の遺構であったと思われる。鞴羽口先片１片も出土した。

SK 20（Fig. 68・69）

H本区東部南壁際で一部を検出した。検出部分は2.08×1.86ｍで、楕円形の一部のような形状を呈する。南壁側西寄りに炭化物と焼土層の広がりがあり、遺物のほとんどはその上から出土した。大小の石には被熱したり、打割されたものがあり、砥石も含まれる。鞴羽口先小片も１片出土した。断面では東西両側が落ち込むが、平面で確認することができなかった。また、全埋土を除去すると数cm～数十cmの川原石が一面に広がっていた。この様な状態は本遺構周辺で特異なものであるが、礫面は遺構外へ続き、ST 9 直下ではやや似た様相も見られたので、基盤層の局所的な状態の一つと考えられる。

SK 21（Fig. 70・71）

北拡張区東部で検出した1.38×2.83ｍの楕円形の土坑で、主軸方向は大型建物群とは異なる。西側で方形ピットを切っていると思われる。北側に浅い段を有し、横断面は平らな舟底形を呈する。被熱痕等は見られなかった。

SK 22（Fig. 72・73・74）

北拡張区東部で検出した遺構で、SB 18に切られる。また、南部でもう１基の方形大型ピットと

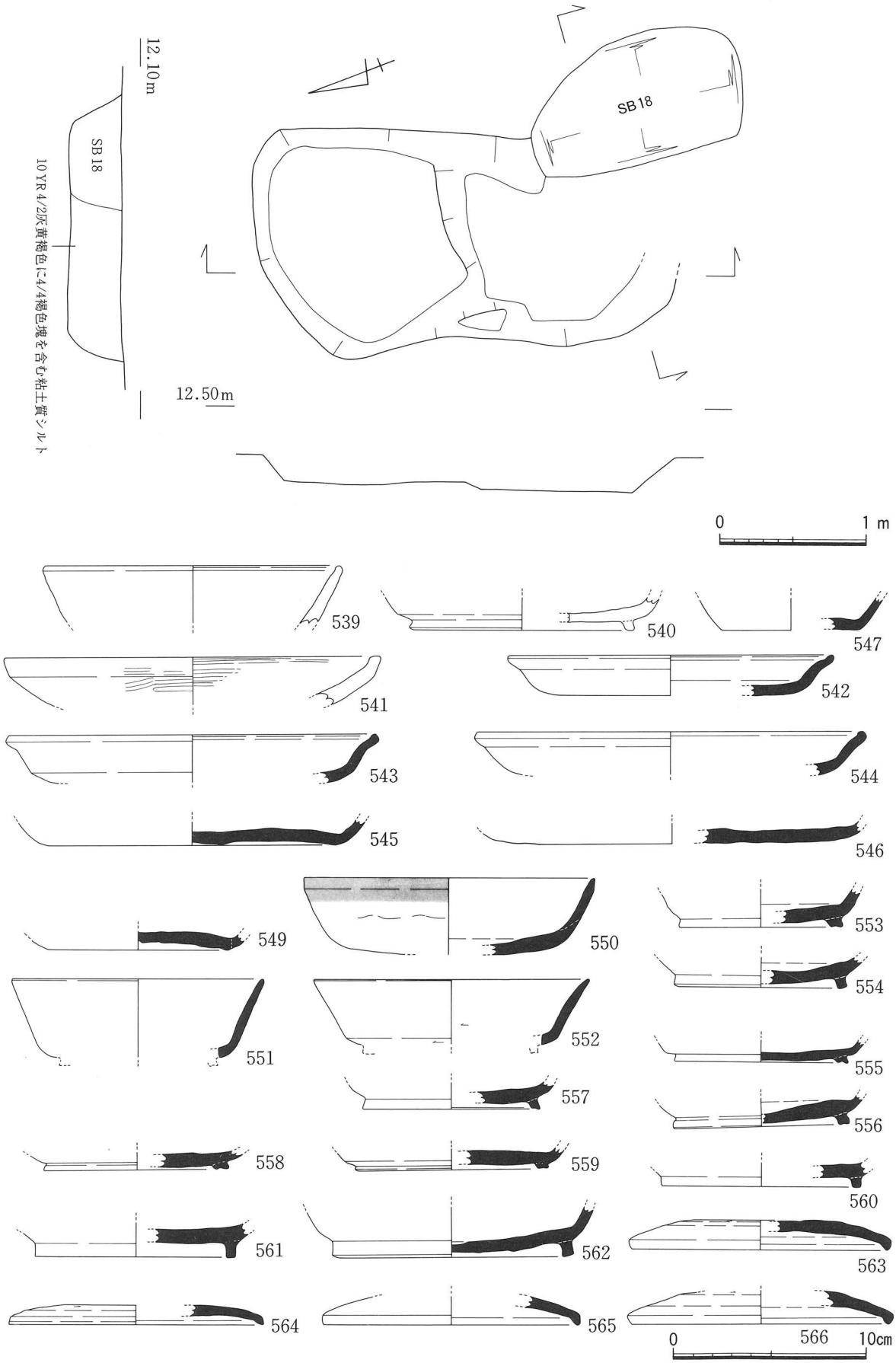


Fig. 72　SK 22遺構平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

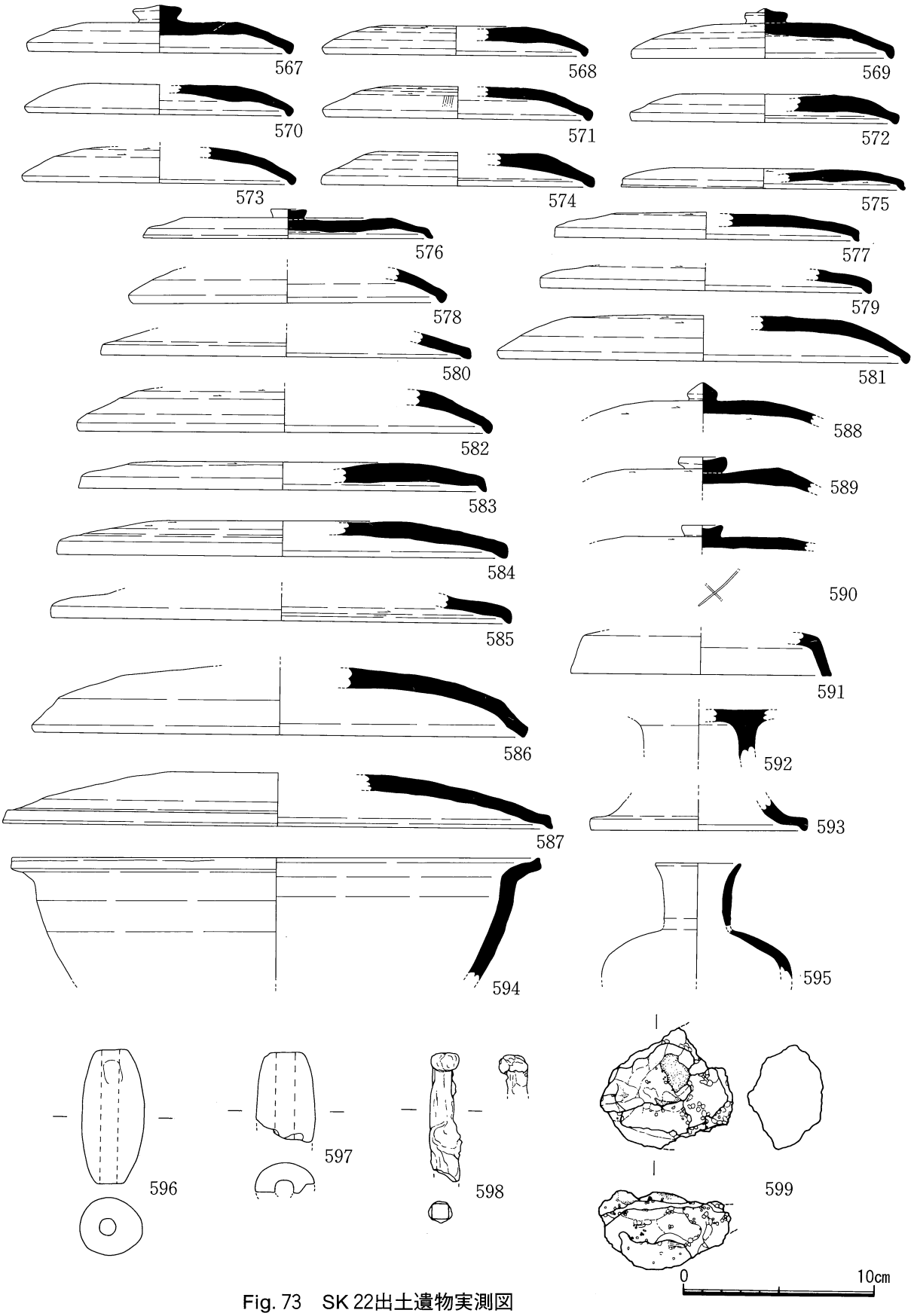


Fig. 73　SK 22出土遺物実測図

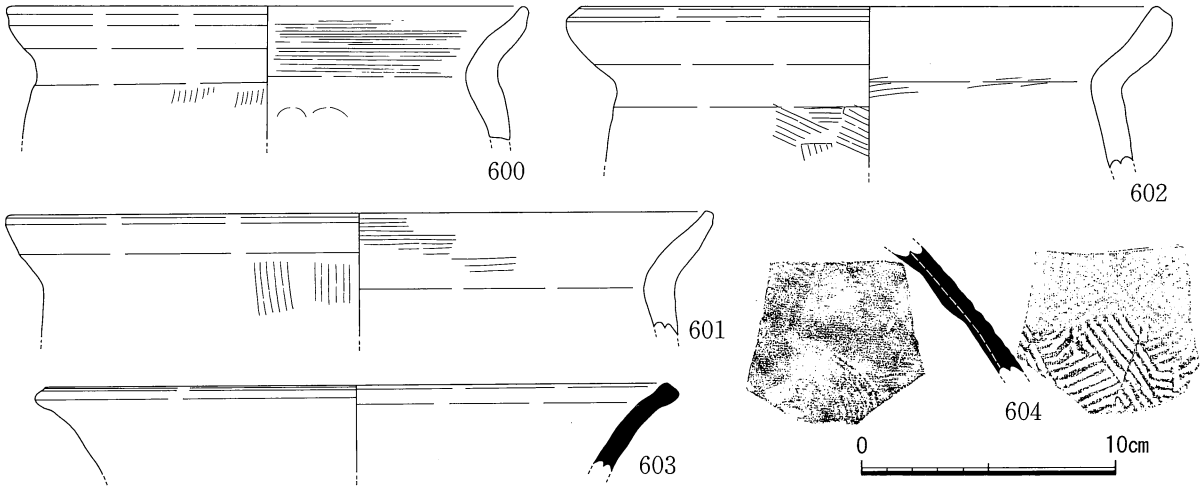


Fig. 74　SK 22出土遺物実測図

切合いを持つものと考えたが、これについては遺構掘削後に判断したものである。このように全容については不明確な要素が残るが、1.6×2.9mの長方形の土坑として扱う。主軸方向は大型建物群と同様である。

SK 27（Fig. 75）

北拡張区東部で検出し、0.96×2.1mを測る。形状より2遺構が切り合っている可能性もあるが、下層出土の遺物は少なく、また上層と下層で接合した遺物がある。上層に土師器片が多かった。搬入の黒色土器A類杯の破片が出土している。

SK 28（Fig. 76・77）

北拡張区北壁際で全容は不明であるが、楕円又は隅丸方形の一部のような2.06×0.6m分を検出した。基本層準Ⅳ-1、Ⅳ-2層を切る。下半には製塩土器を主とする土器が詰まり、上層の特に下半には焼土塊を多く含む。しかし、床面の被熱や出土供膳具の二次被熱は確認できない。出土遺物では製塩土器の総重量が8.75kgに達すること、土師器供膳具と須恵器貯蔵具本体が確認できないことが特異である。

SK 29（Fig. 78）

南拡張区、SB 20内の南端で検出し、1.48×2.46mの長方形を呈する。深さは浅く、床面は平坦である。床面中央南西寄りに炭化物層が検出され、隣接して半完形の須恵器壺蓋（672）が出土した。炭化物層からは骨片も検出されている。搬入の黒色土器A類杯口縁部（665）が出土している。

SK 30（Fig. 79・80・81・82・83）

中央部の南拡張区で検出され、0.93×3.40mの長方形を呈す。SB 11の柱穴を破壊していると見られる。両端の段部を除くと0.79×2.93mとなり、遺物は主にこの中の埋土中より出土した。完形を含む残存率の高い土器が面的に出土しており、一括廃棄性の高さが窺える。出土した大小の砂岩やチャートの川原石には、被熱や打割されたものがある。なお、本遺構出土遺物においては細片の比率が比較的であるが明らかに少なく、遺物実測図には原則的に残存度の良好な一括性の高い遺物を掲げた。

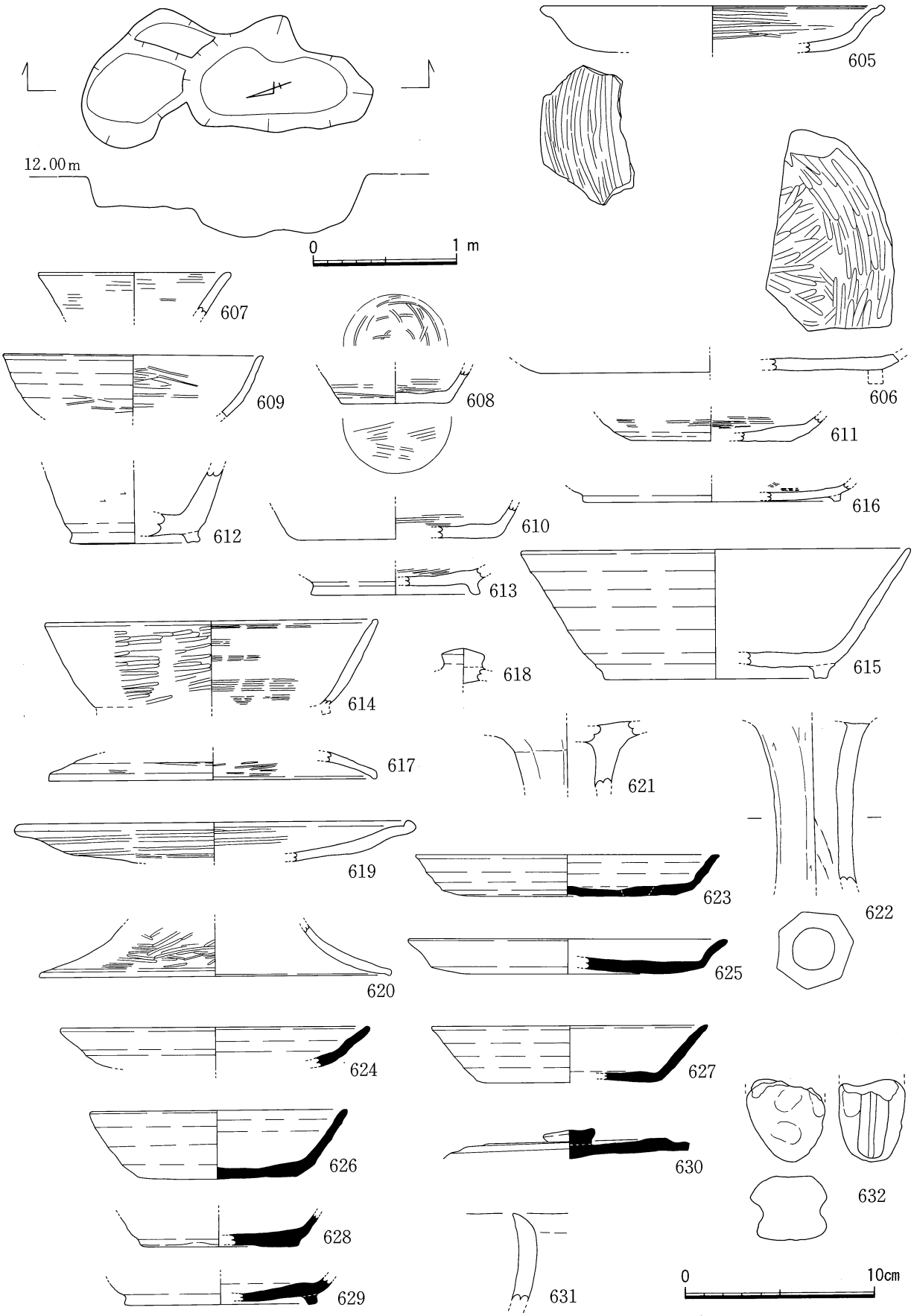


Fig. 75　SK 27遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

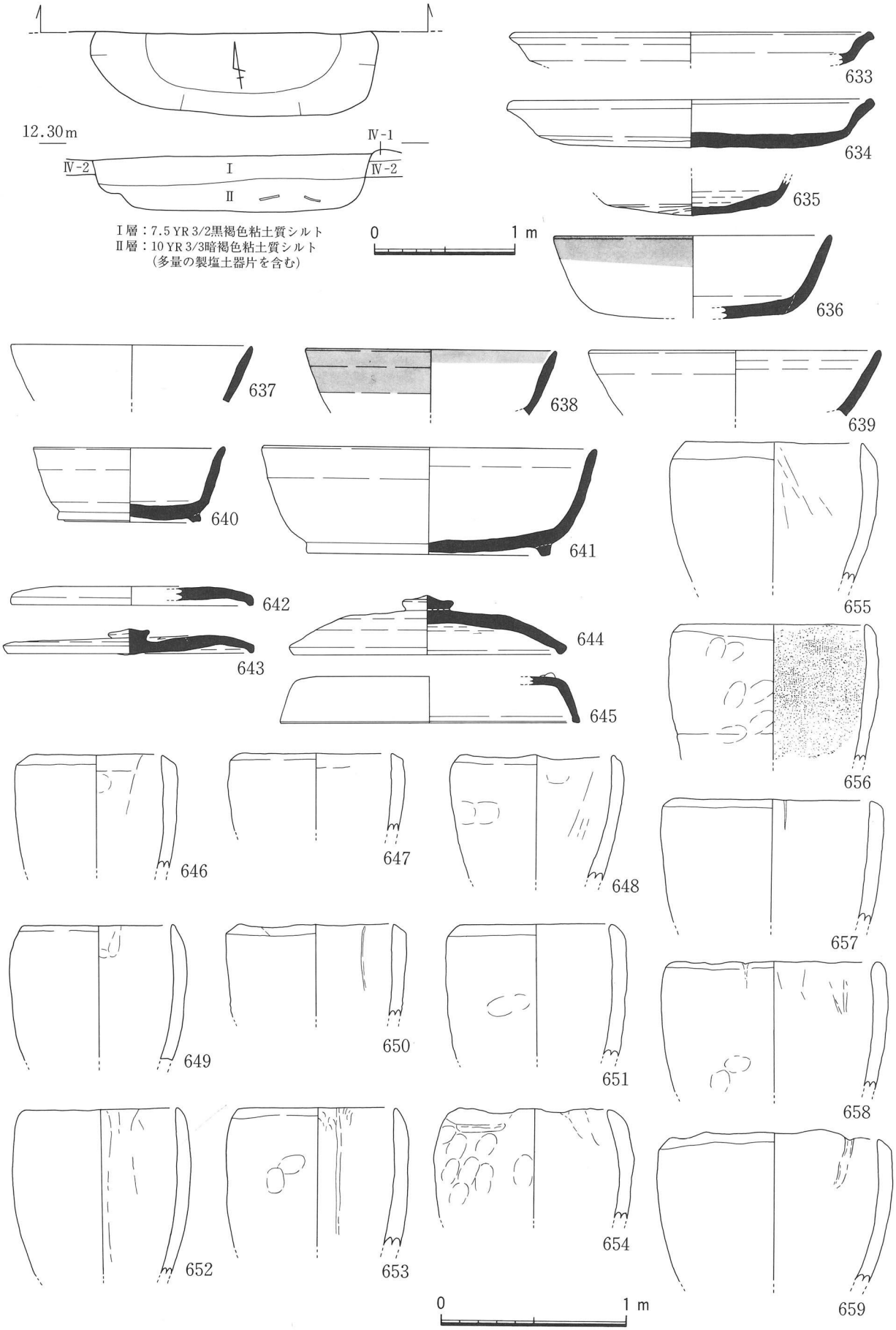


Fig. 76　SK 28遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図

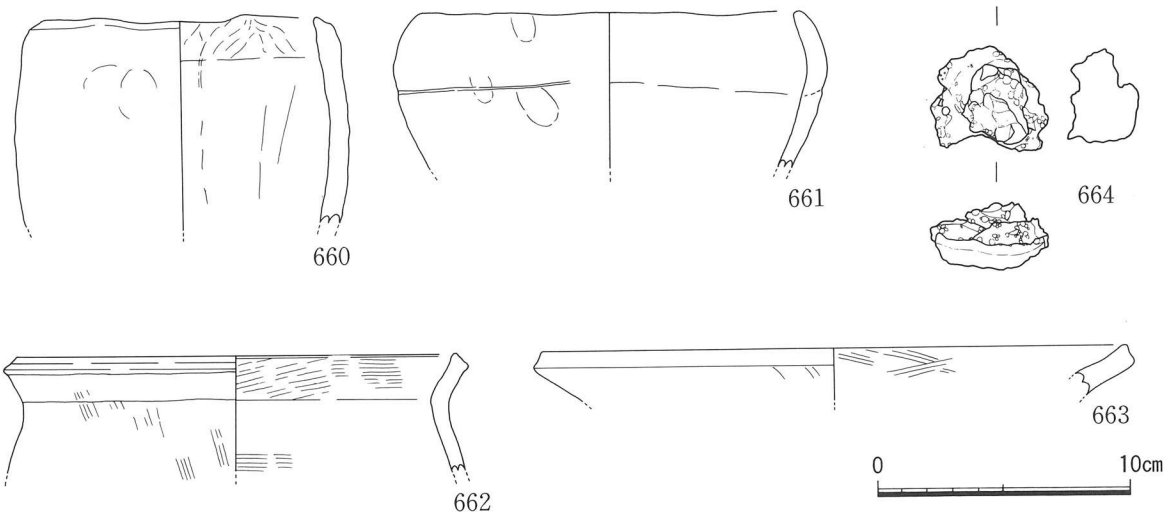


Fig. 77　SK 28出土遺物実測図

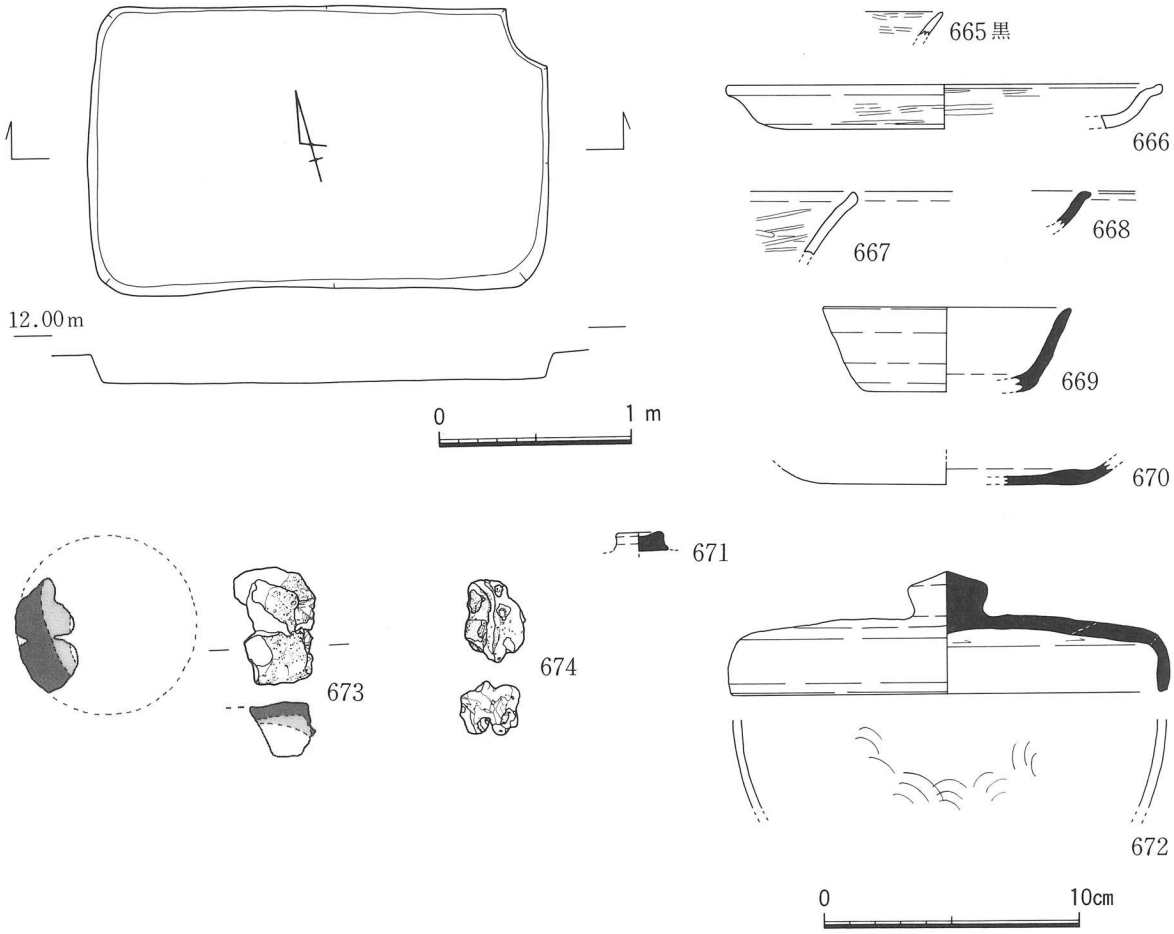


Fig. 78　SK 29遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

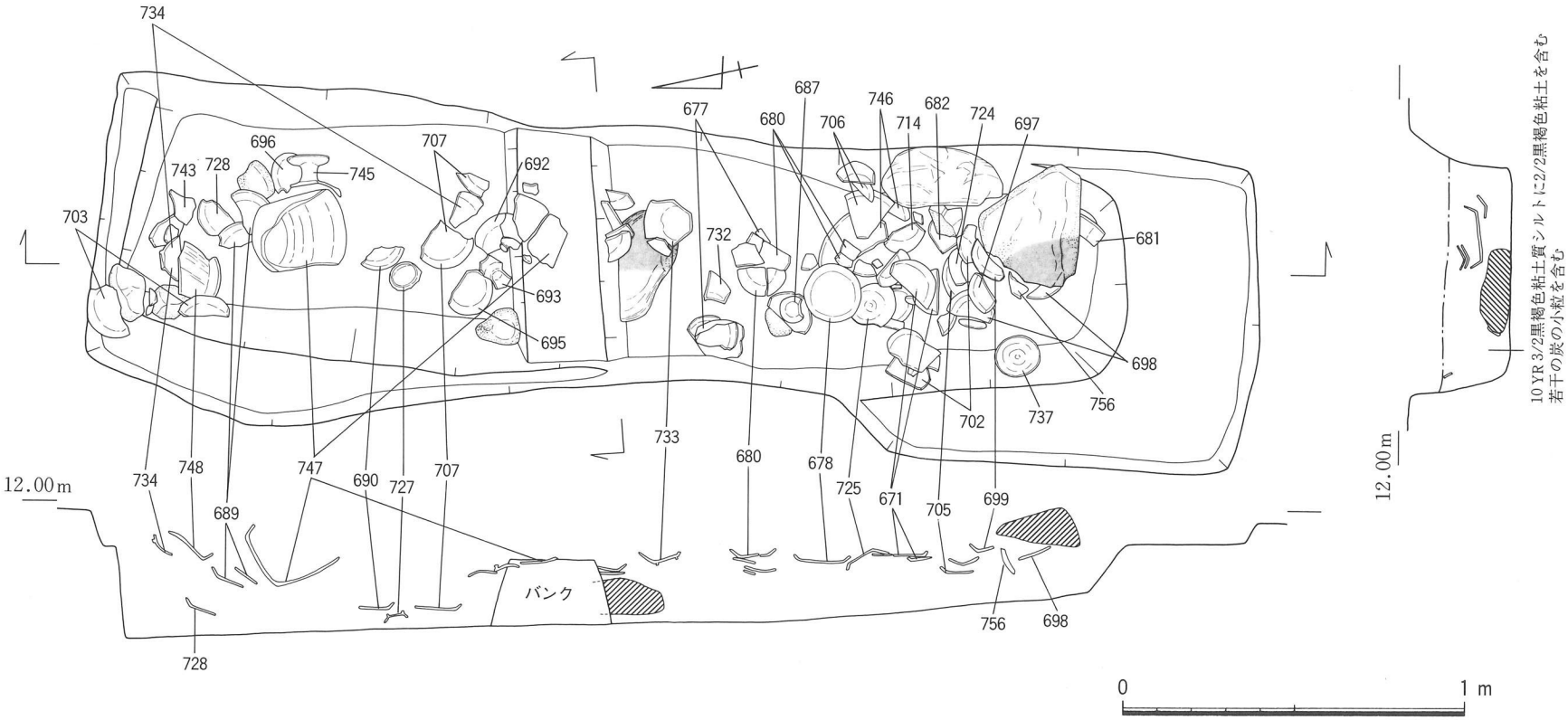


Fig. 79　SK 30遺物出土状況・セクション・エレベーション図

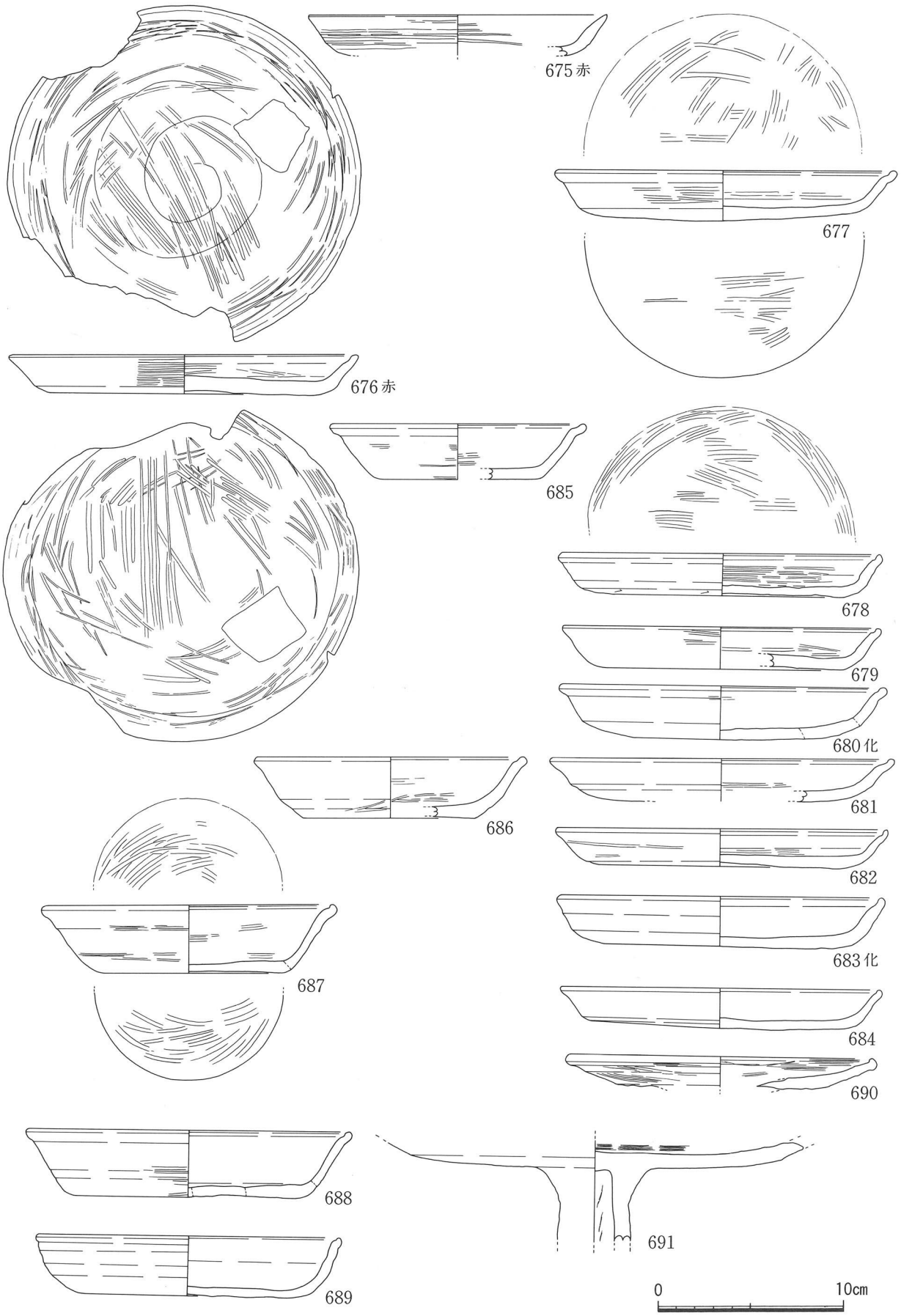


Fig. 80　SK 30出土遺物実測図

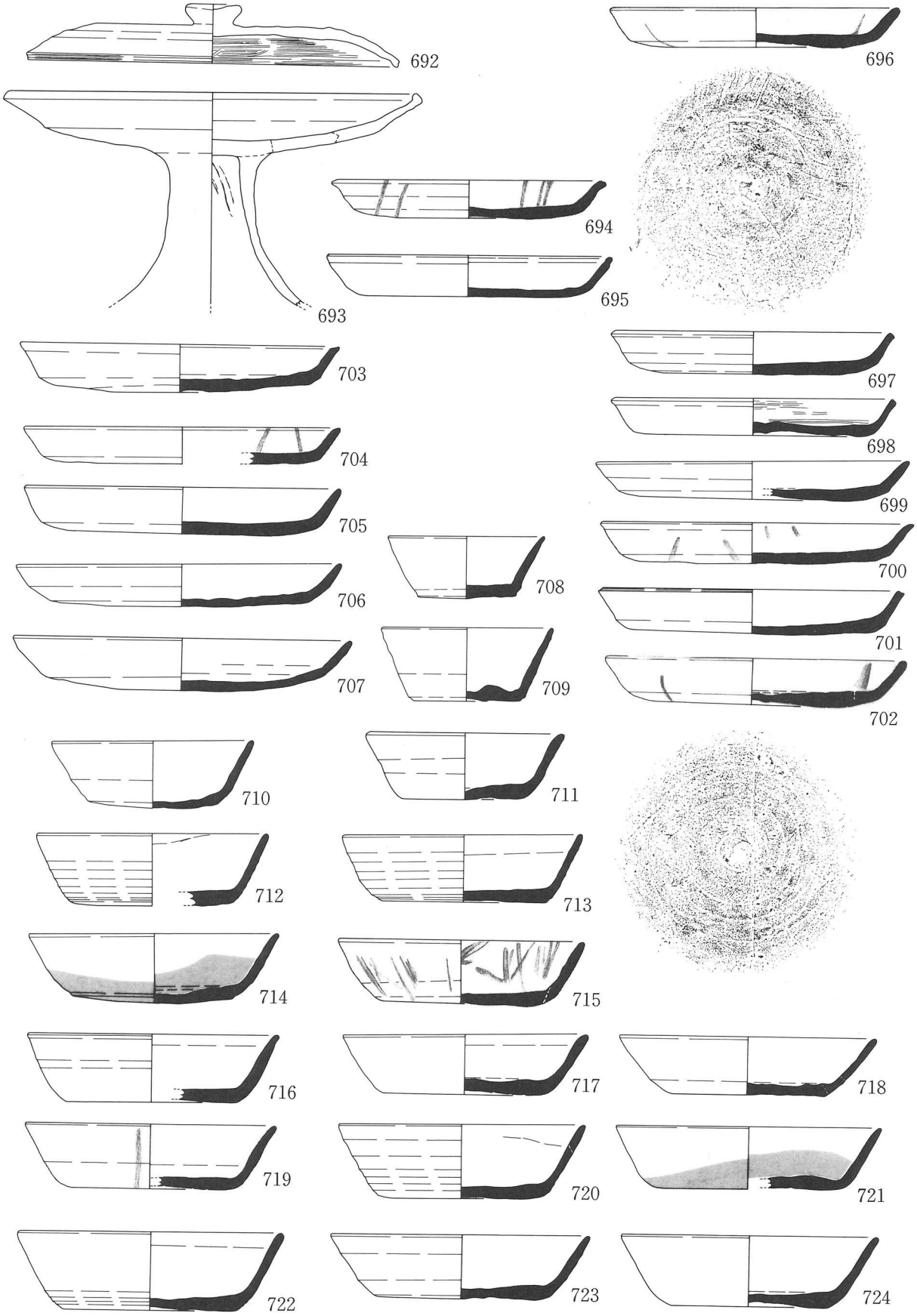


Fig. 81　SK 30出土遺物実測図

0　10cm

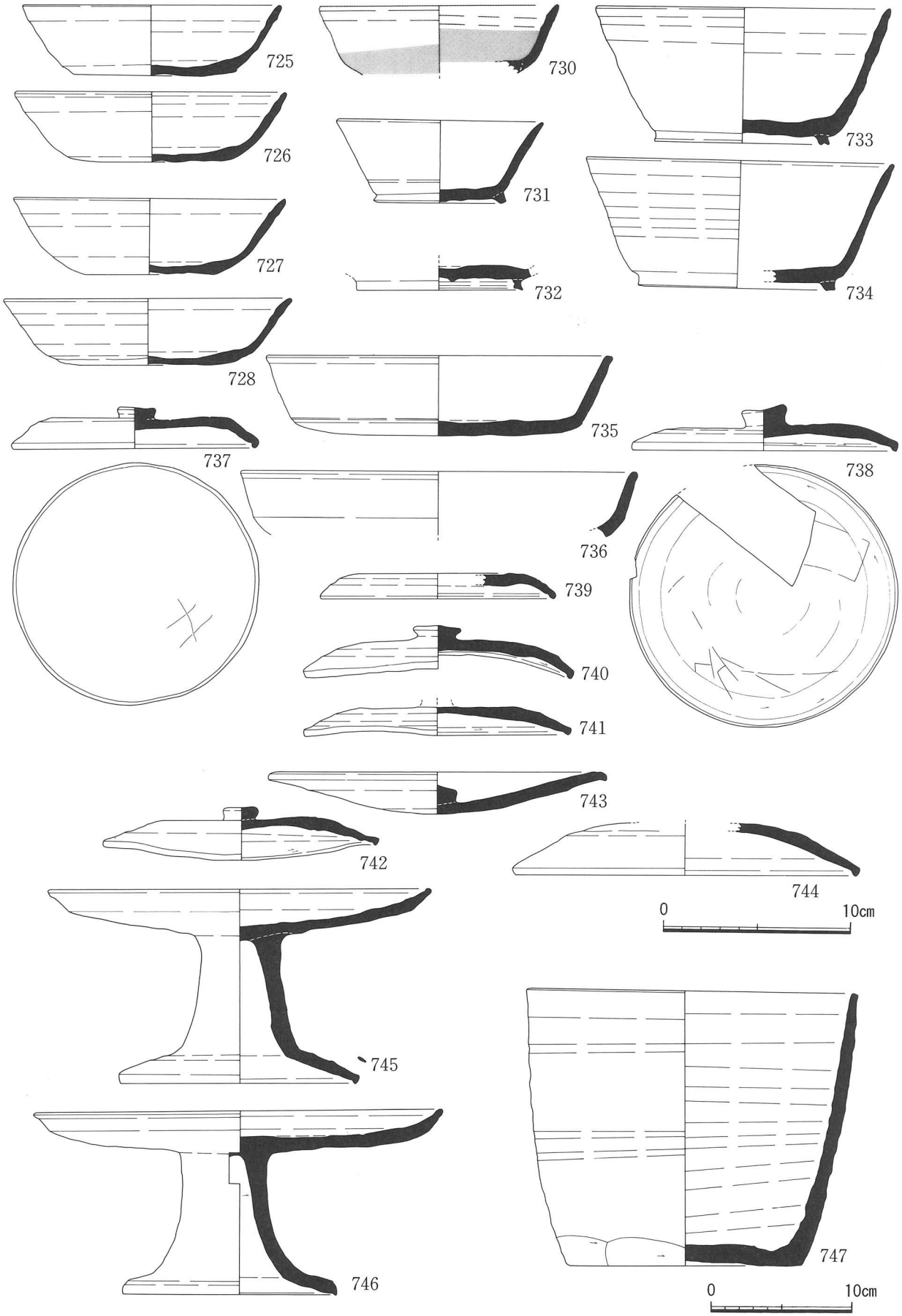


Fig. 82　SK 30出土遺物実測図(747は縮尺1/4)

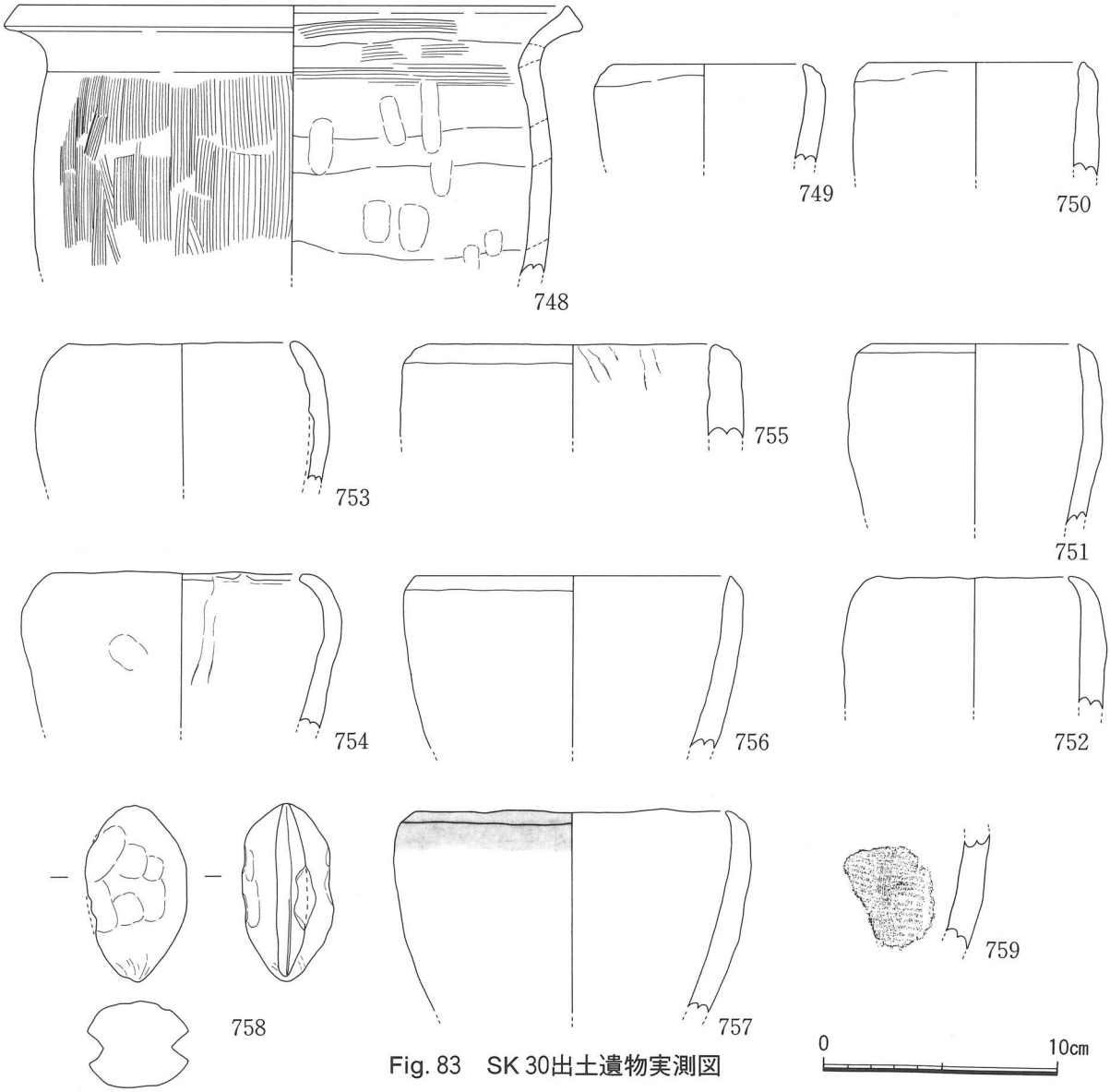


Fig. 83　SK 30出土遺物実測図

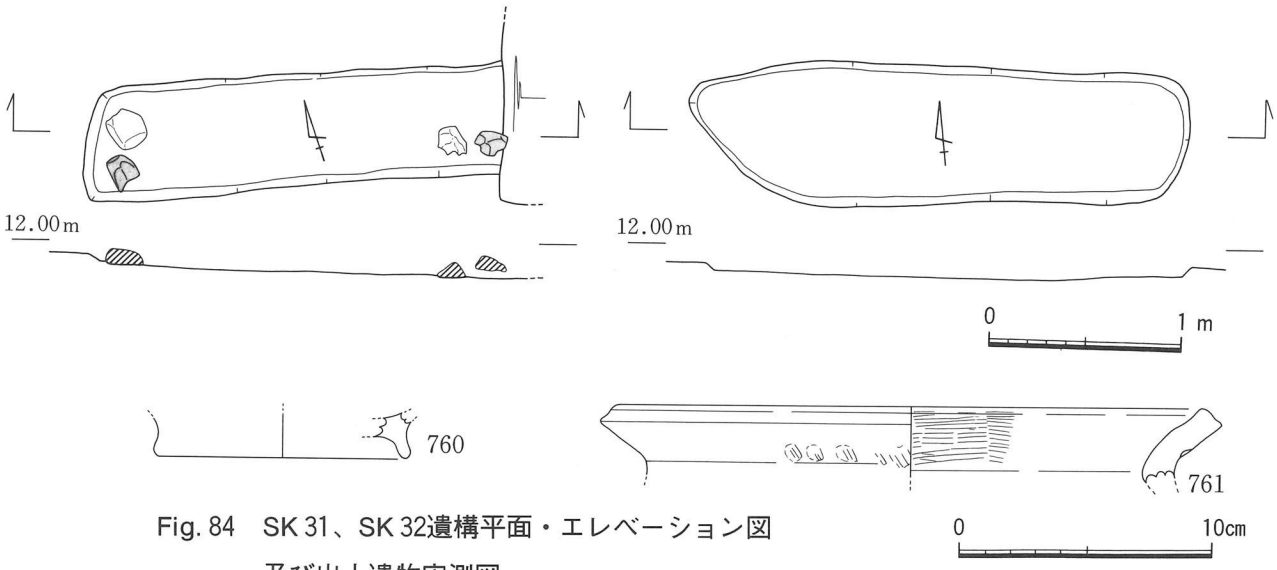


Fig. 84　SK 31、SK 32遺構平面・エレベーション図
及び出土遺物実測図

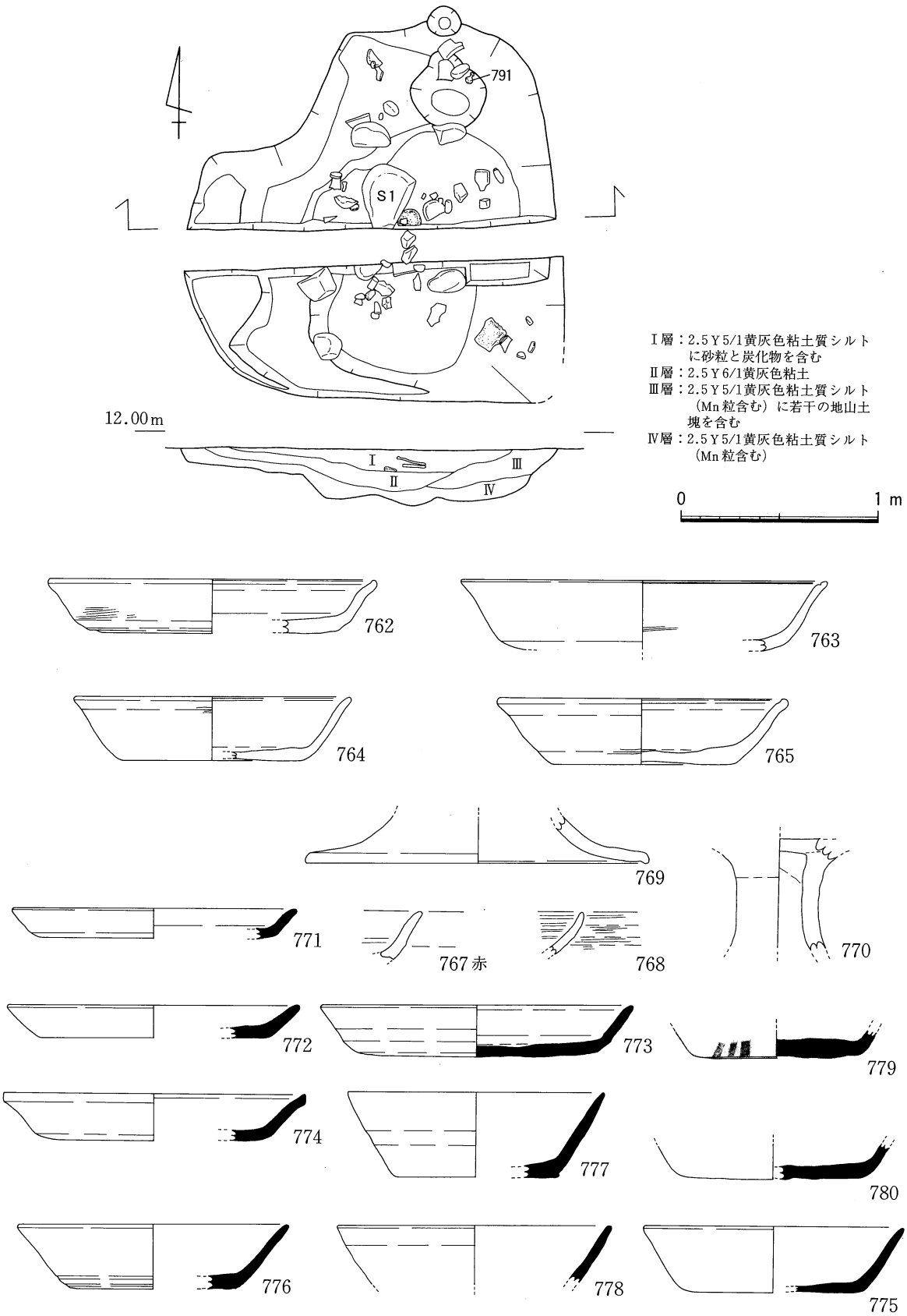


Fig. 85　SK 33遺物出土状況・セクション図及び出土遺物実測図

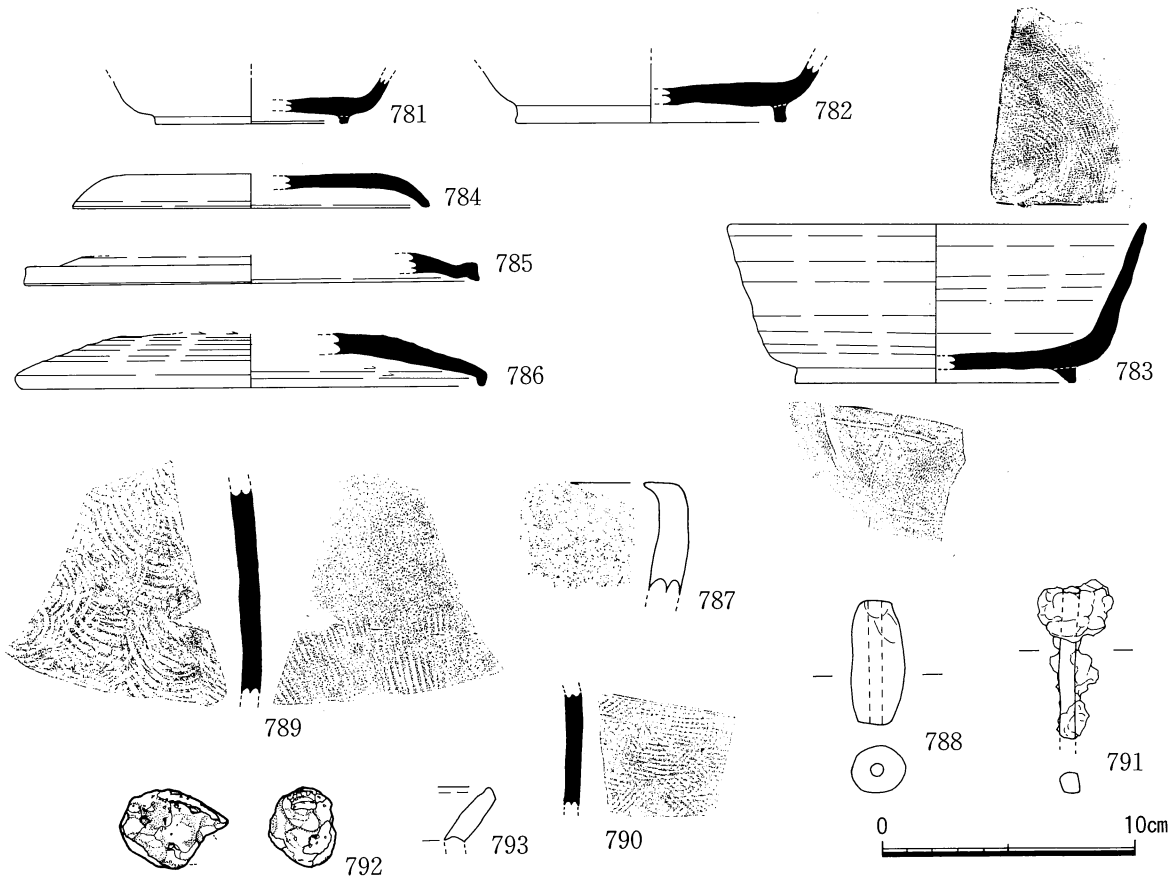


Fig. 86　SK 33出土遺物実測図（789・790・793は縮尺1/4）

SK 31、SK 32（Fig. 84）

南拡張区中央、SB 19南側で検出し、埋土は7.5 YR 4/2粘土質シルトである。両遺構とも同じ埋土で互いの延長上にあり、溝の底部である可能性もあるが、土坑として扱う。SK 31は東部を撹乱によって破壊されており、長さ2.22mを検出した。出土した石には被熱赤変・打割されたものがある。両土坑の方位は大型建物群に同調しているが、上記の埋土はSB 19などとはやや異なる。

SK 33（Fig. 85・86）

H本区中央東寄りで検出した1.90×1.90mを測る遺構である。検出時に埋土が他の遺構と異なり、SK 34と同様、早期に比較的容易に検出できた。またSB 9をはじめ重複する遺構を全て切ることから、基本層準Ⅳ-1層を切っていた可能性が高い。本遺構の埋土色は2.5 Y 5/1付近を示し、当調査区の遺構埋土としては例外的である。出土遺物には土器の他、3点の小鉄製品と小型の鉄滓、打割されたものを含む川原石等がある。S 1は砂岩で平坦な下面が被熱している。

SK 34（87・88・89・90）

H本区中央東寄りで検出した1.02×2.32mを測る遺構で、北拡張区に属する北端部はH本区側調査終了後に調査、完掘したが、段を持つ構造となった。近隣の遺構とはやや埋土が異なり、検出が比較的容易であった点はSK 33に似るが、その埋土は同じではない。SB 9をはじめ重複する全ての遺構を切り、H本区北壁断面でⅣ-1層を切っていることが確認できる。上層で礫群を挟んで南側

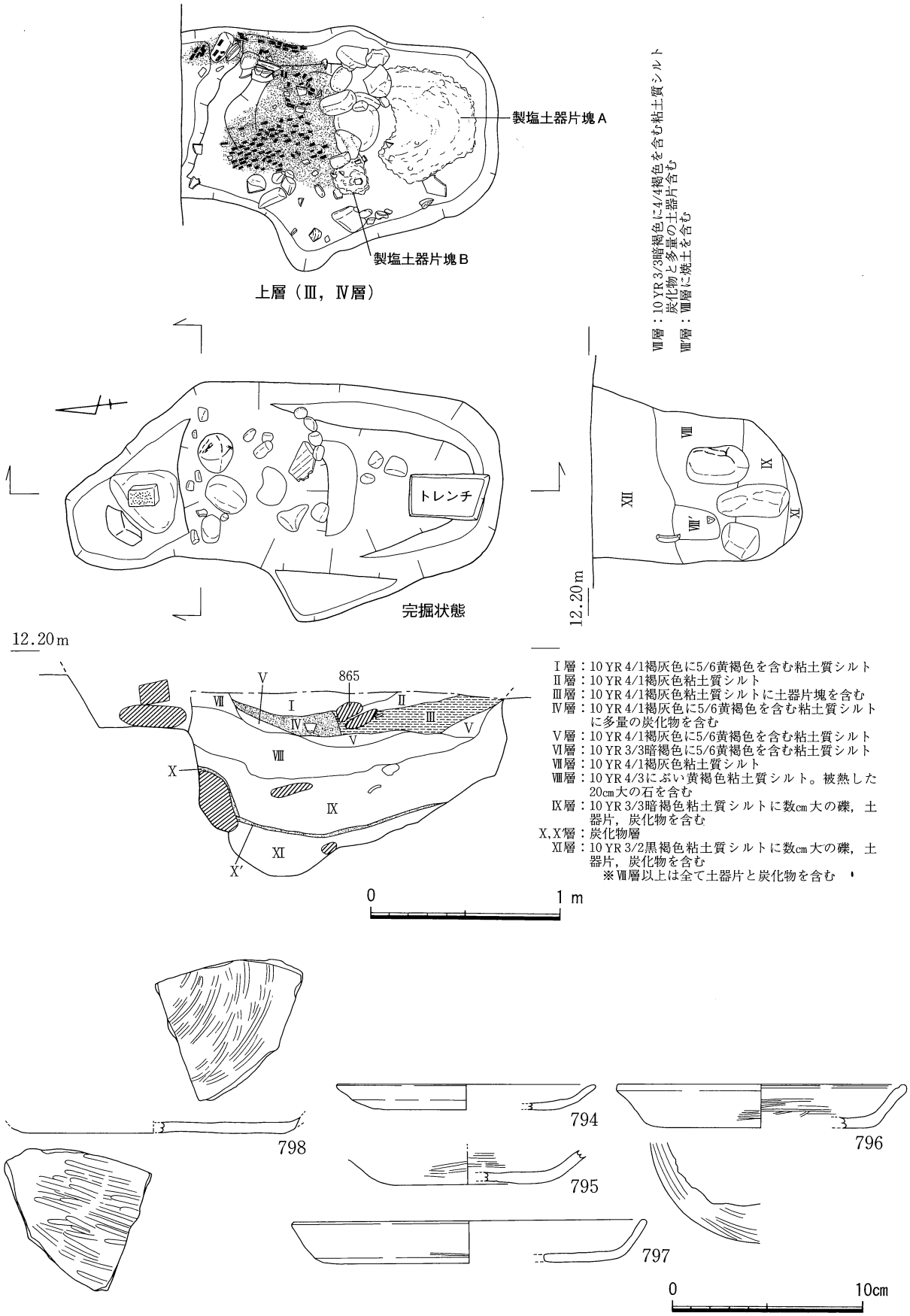


Fig. 87　SK 34遺構平面・セクション図及び出土遺物実測図

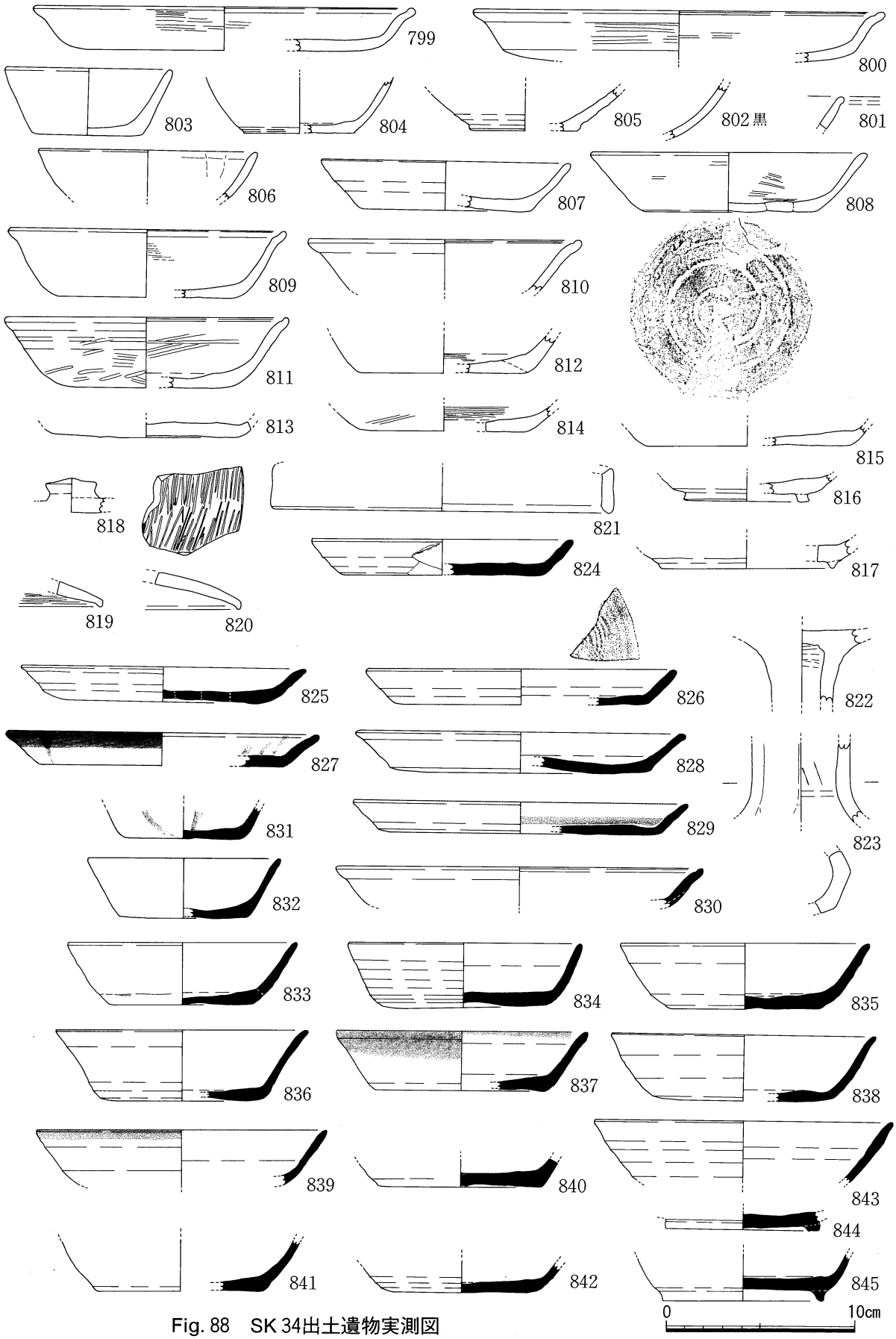


Fig. 88　SK 34出土遺物実測図

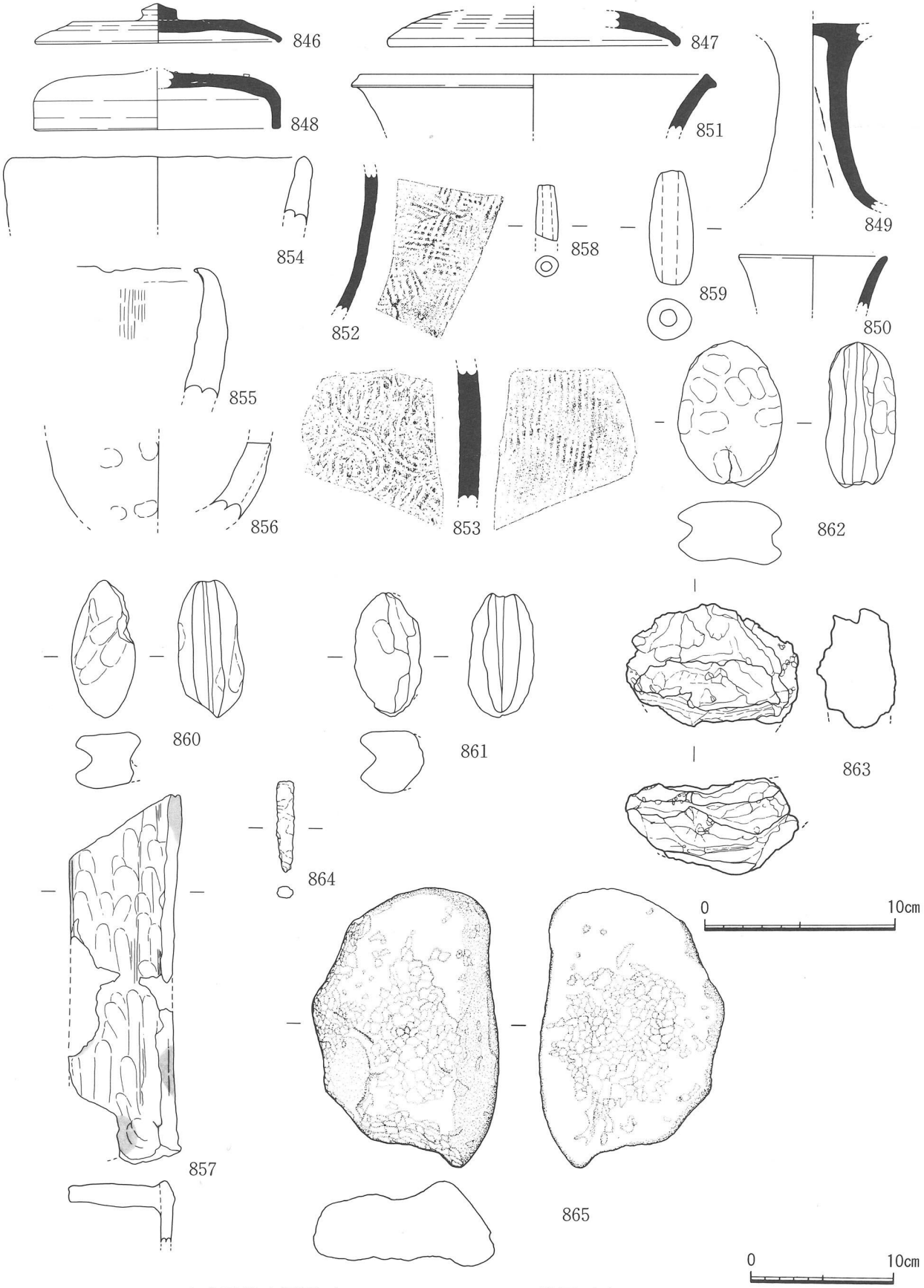


Fig. 89　SK 34出土遺物実測図（852・853・857・865は縮尺1/4）

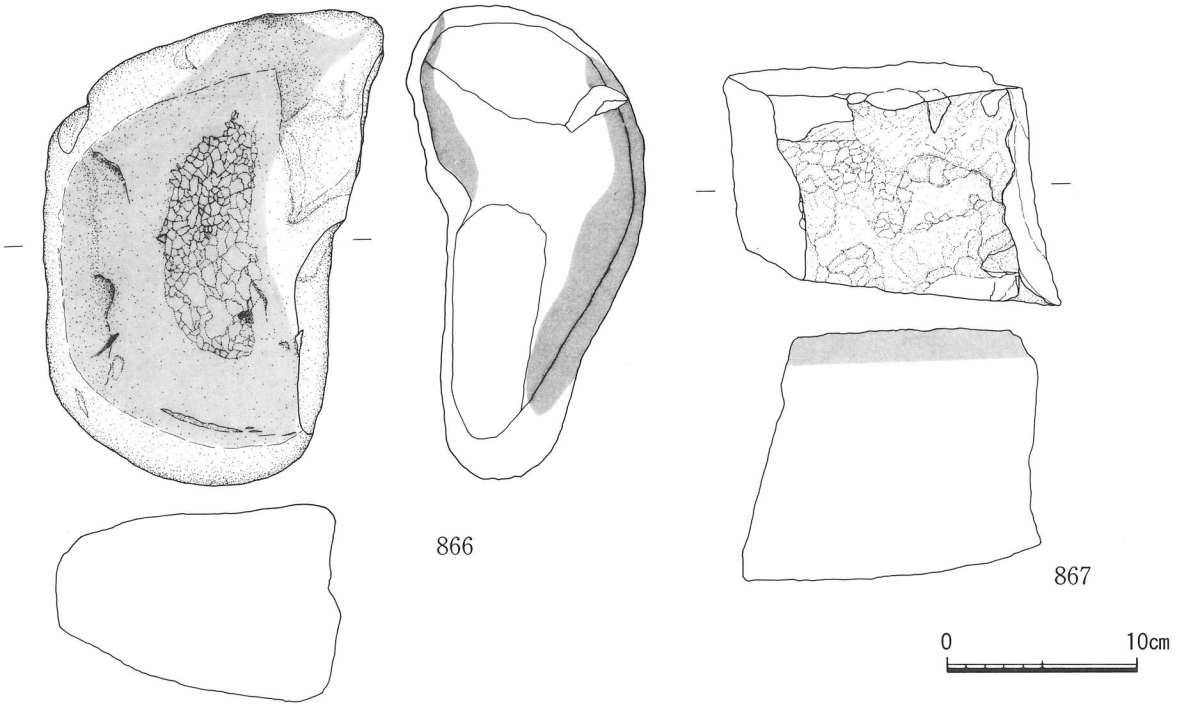


Fig. 90　SK 34出土遺物実測図

に製塩土器片塊、北側に炭化物が検出され、セクションでは各々Ⅲ層、Ⅳ層に相当する。層位別の出土製塩土器量はⅠ層72ｇ、Ⅱ層32ｇ、Ⅲ層5,123ｇ（A群3,603ｇ、B群70ｇ、その他1,450ｇ）、Ⅳ層10ｇ（1片）、Ⅴ層360ｇ、Ⅵ層32ｇ、Ⅶ層38ｇ（3片）、Ⅸ層250ｇ、Ⅹ層23ｇ（2片）、Ⅺ層840ｇ、層位不明だが上層1,710ｇ、下層1,000ｇ、計9,490ｇである。Ⅷ層以下は埋土層も厚く、一部被熱した大きな川原石が壁面に位置する。Ⅹ・Ⅹ′層の炭層は、薄いが全面に広がる。鉄滓は863の他に小片がそれぞれ製塩土器片塊A群、Ⅹ層、下層より少量出土している。またⅪ層より若干の小木片が出土している。

⑤　溝

SD 26（Fig. 91・92）

東部で検出した南北方向の溝跡で、北拡張区の検出分を合わせ長さ12ｍを確認した。方位N－20°－W、幅2.75～3.14ｍ、深さ76㎝を測る。基本層準Ⅳ-２層下にあり、SB 17、SA 10、SX 3に切られる。以下は完掘したH本区内の記述であるが、Ⅱ、Ⅱ′層がシルト、Ⅳ層が粘土質シルトに砂利、20㎝大の礫を含み、Ⅴ層が砂礫層である。南壁と北壁でほぼ同様の堆積が観察された。遺物はⅣ層の上層より出土したものが多いが、897、898はⅣ層とⅠ、Ⅱ層のものが接合している。基本層準Ⅳ-２層は本遺構上でやや落ち込み、南部では加熱、打割された石や、若干の炭を含む。また、遺構北部のⅢ層底には西側から落ち込んだように約15～25㎝の石があり、そのうちの約10個は加熱、打割されていた。出土遺物において特徴的なこととしては、製塩土器、土錘がほぼ認められないこと、土師器供膳具が僅少であることが挙げられる。製塩土器は摩耗した細片が５点のみ出土しているが、遺構規模に対する出土量の少なさは本調査区において特異である。また、南部のⅣ層上層より数十片の馬歯片が出土している。崩壊しているが、最長で7.4㎝のエナメル高を測る。

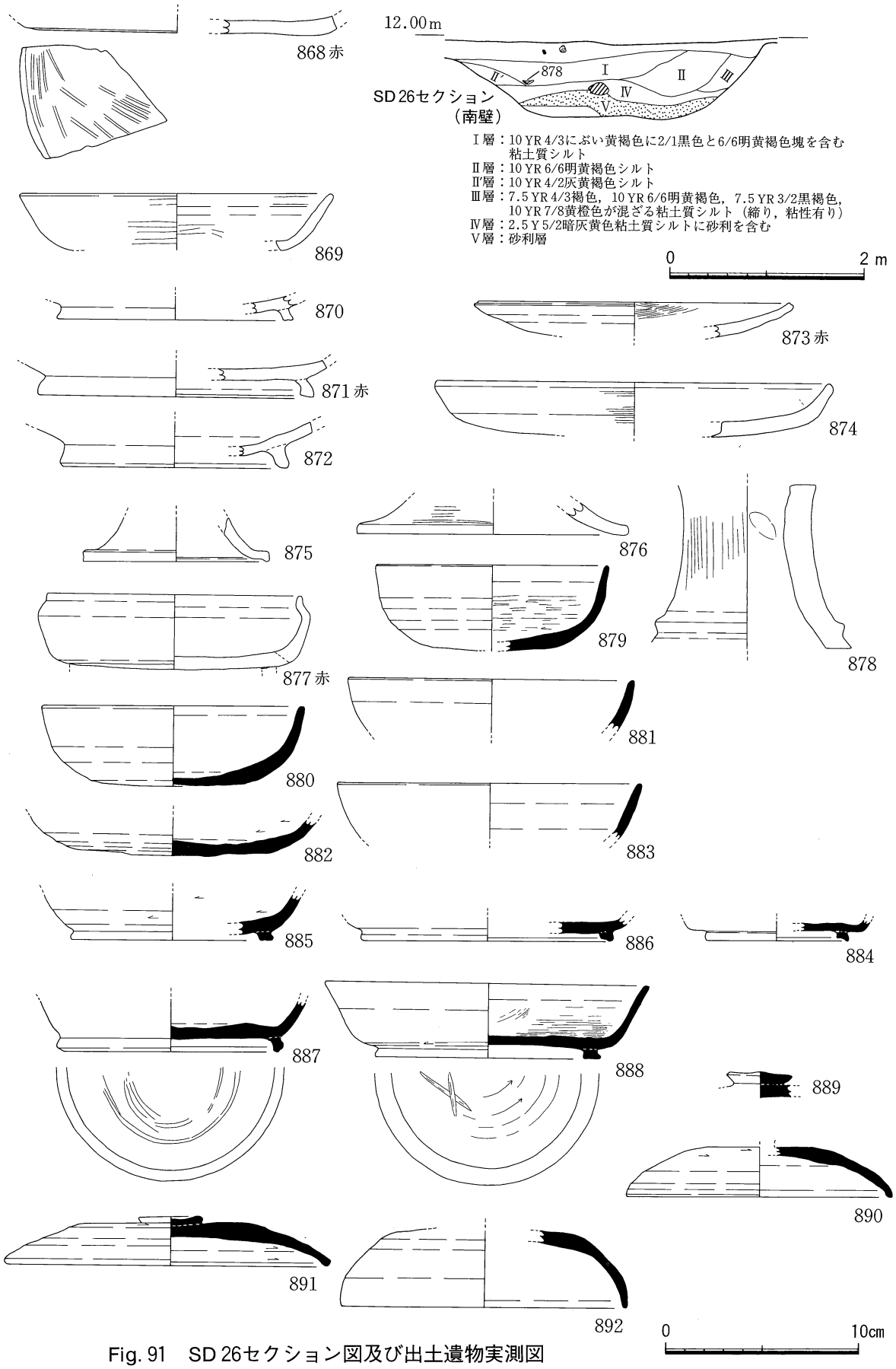


Fig. 91　SD 26セクション図及び出土遺物実測図

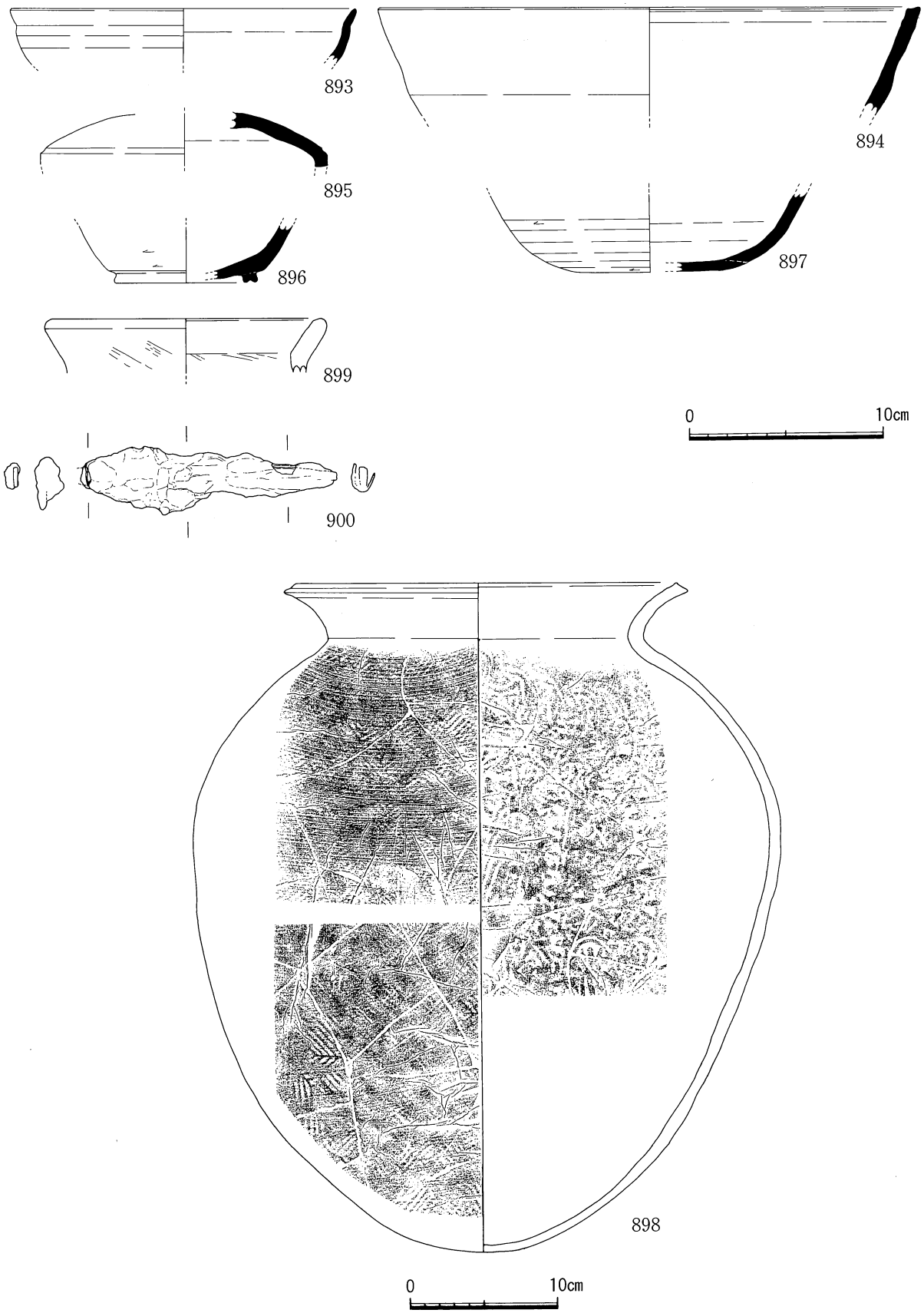


Fig. 92　SD 26出土遺物実測図（898は縮尺1/4）

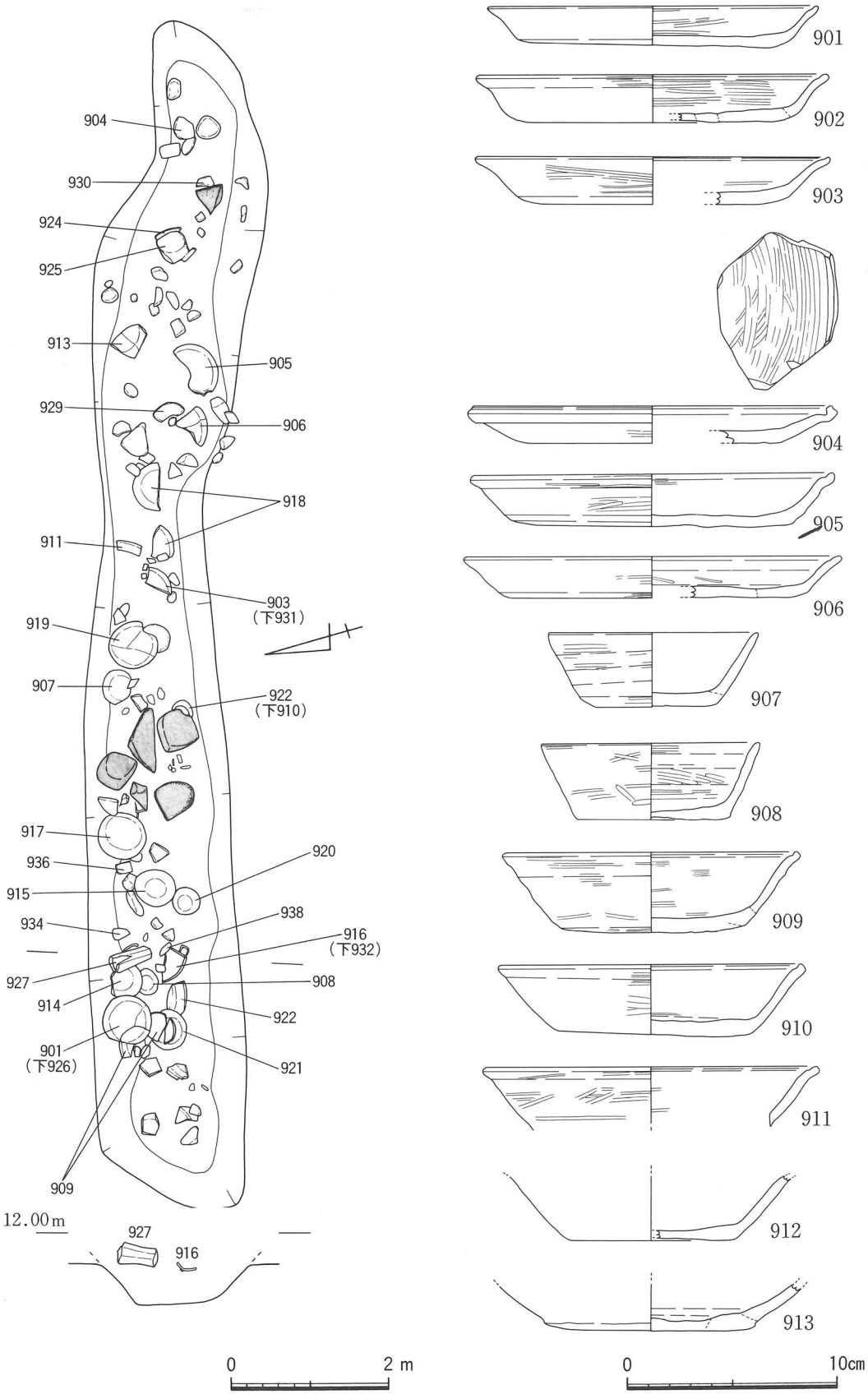


Fig. 93　SD 40遺物出土状況・エレベーション図及び出土遺物実測図

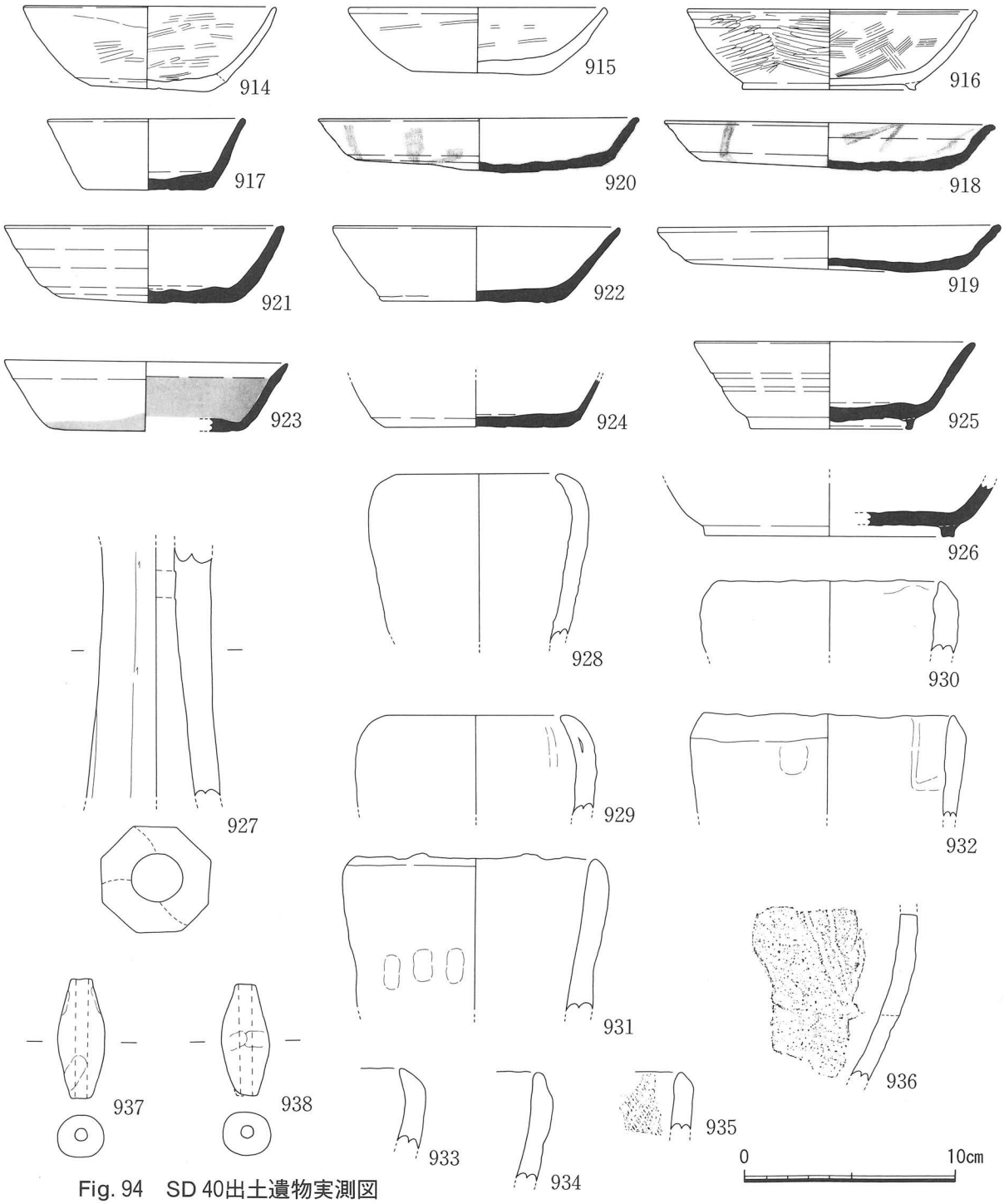


Fig. 94　SD 40出土遺物実測図

SD 40（Fig. 93・94）

H本区中央部で検出した東西方向の溝で幅0.49m、長さ3.88m、深さ16cmを測る。方向はN－73°－Wで大型建物群と同調しており、埋土は10 YR 3/3暗褐色粘土質シルトである。プラン確定が地山面付近であったのはH本区の他の遺構と同じであるが、その時点で遺構内の遺物の一部が検出されており、Ⅳ-1又はⅣ-2層上面より掘り込まれていた可能性が十分考えられる。また、SB 10を切る。一見して判るが、残存率の高い遺物が多い。911・916・927は搬入品である。出土した川原石には被熱したり、打割されているものがあった。

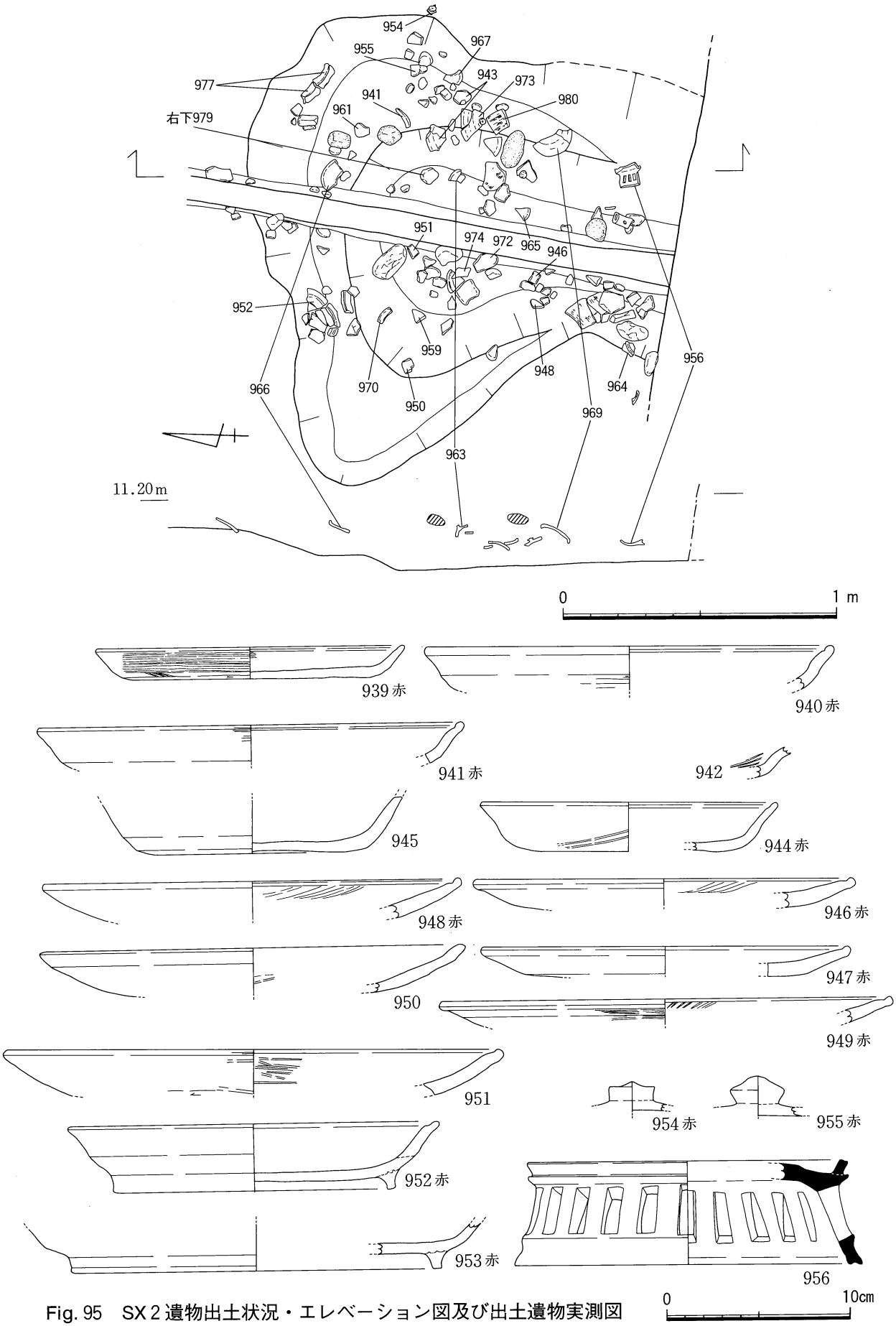


Fig. 95　SX 2 遺物出土状況・エレベーション図及び出土遺物実測図

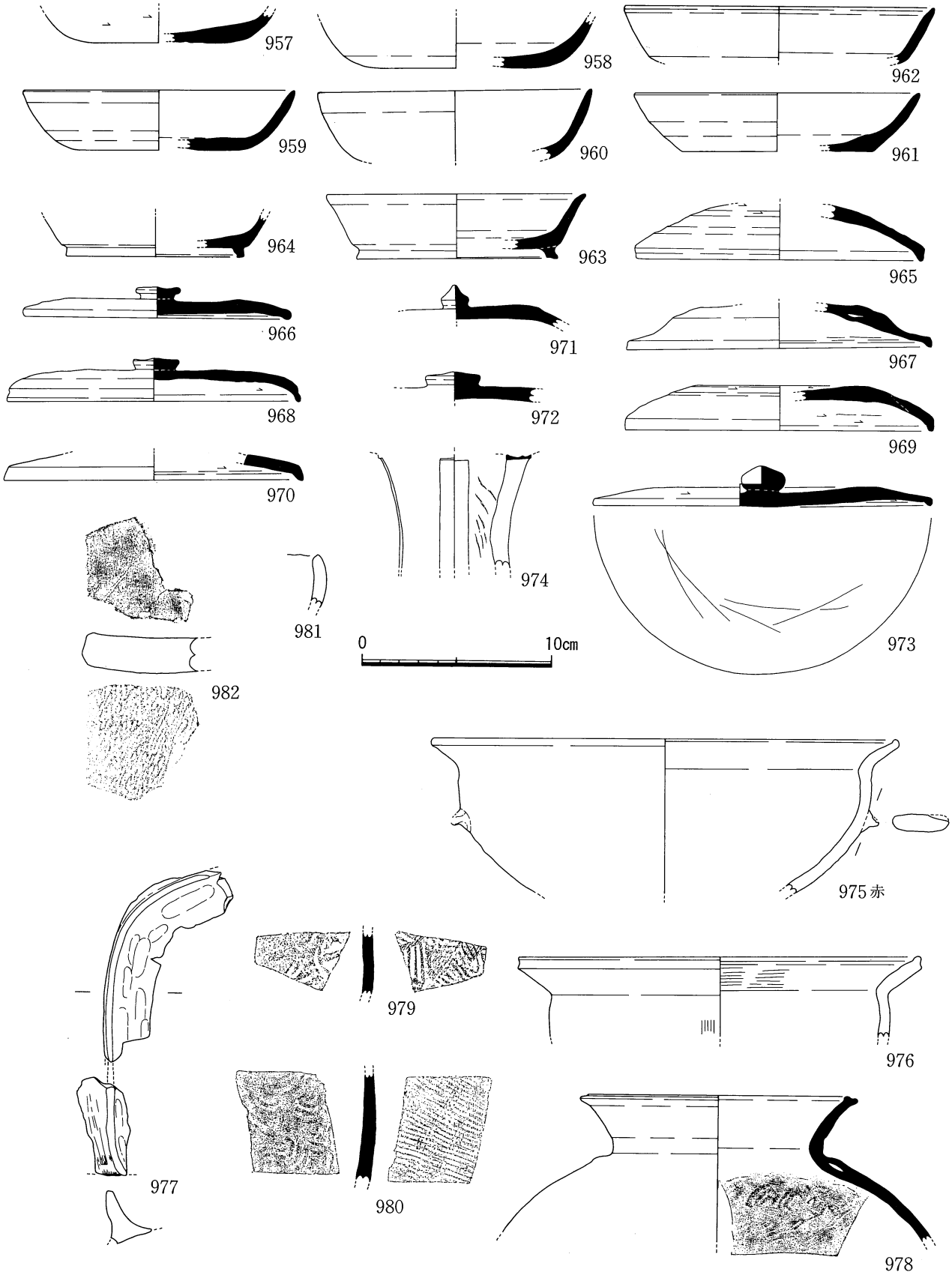


Fig. 96　SX 2 出土遺物実測図（975～980は縮尺1/4）

⑥　性格不明遺構

SX 2　(Fig. 95・96)

西部で検出した幅1.73mの不整形な遺構で、南部は調査区外である。Ⅵ層下に存在することが南壁で確認できる。残存度の比較的良好なものを含む遺物及び川原石が、床面より数cm～十数cm上方を中心に出土した。川原石は5～15cmを測り、出土位置は総じて土器より上方にあるとみられる。

⑦　ピット

P14、15 (Fig. 97・98)

北拡張区のSA 4のP 6とP 7間で検出した方形のピットでP14は1.34×1.08m、P15は1.28×1.20mを測り、各々深さ40cm、50cmまで掘削した。規模、形態、埋土、出土遺物について類似性が強いと考え、まとめて扱う。埋土は灰褐色粘土質シルトに炭化物・土師器細片を含むもので、礫を含まない点でSA 4等と異なる。出土した土師器杯、皿には残存度の良好なものがある。それに比して、少量出土している須恵器供膳具は1003・1004を含めて全て細片で、磨耗もみられる。

P16 (Fig. 99)

北拡張区のSB 22－P12の西辺を切る径41cmの円形のピットで、深さ40cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトである。土師器杯 (1017) が出土した。

P17 (Fig. 99)

北拡張区のSA 4－P 7検出時にその北辺を切る状態で検出した。径約43cmの円形を呈するが完掘していない。埋土は褐灰色粘土質シルトである。検出時に直上より黒色土器A類杯口縁部 (1018) が出土した。

⑧　遺物集中

SF 1　(Fig. 100)

SB 15東側より3点の土師器杯が重なって出土した。様相はSB 16柱根部と類似する。しかし、付近を精査したにも関わらず遺構は検出できなかった。

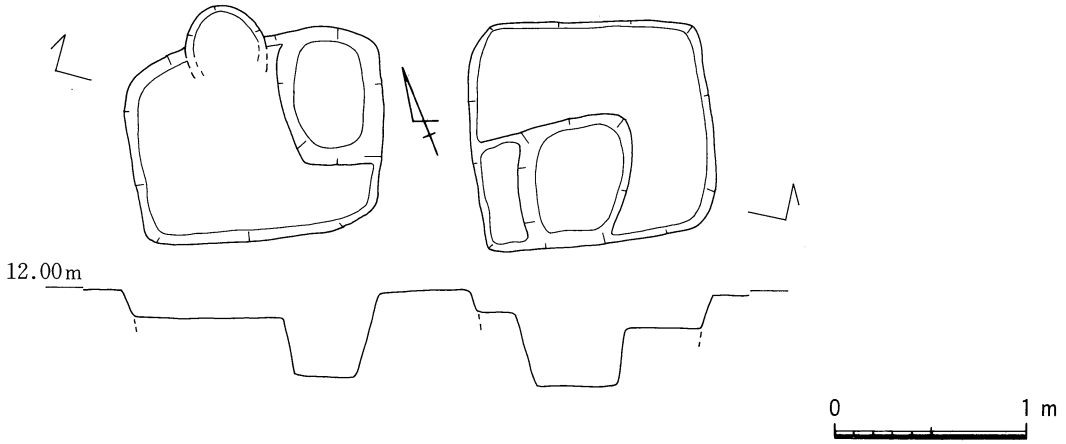


Fig. 97　P14、P15遺構平面・エレベーション図

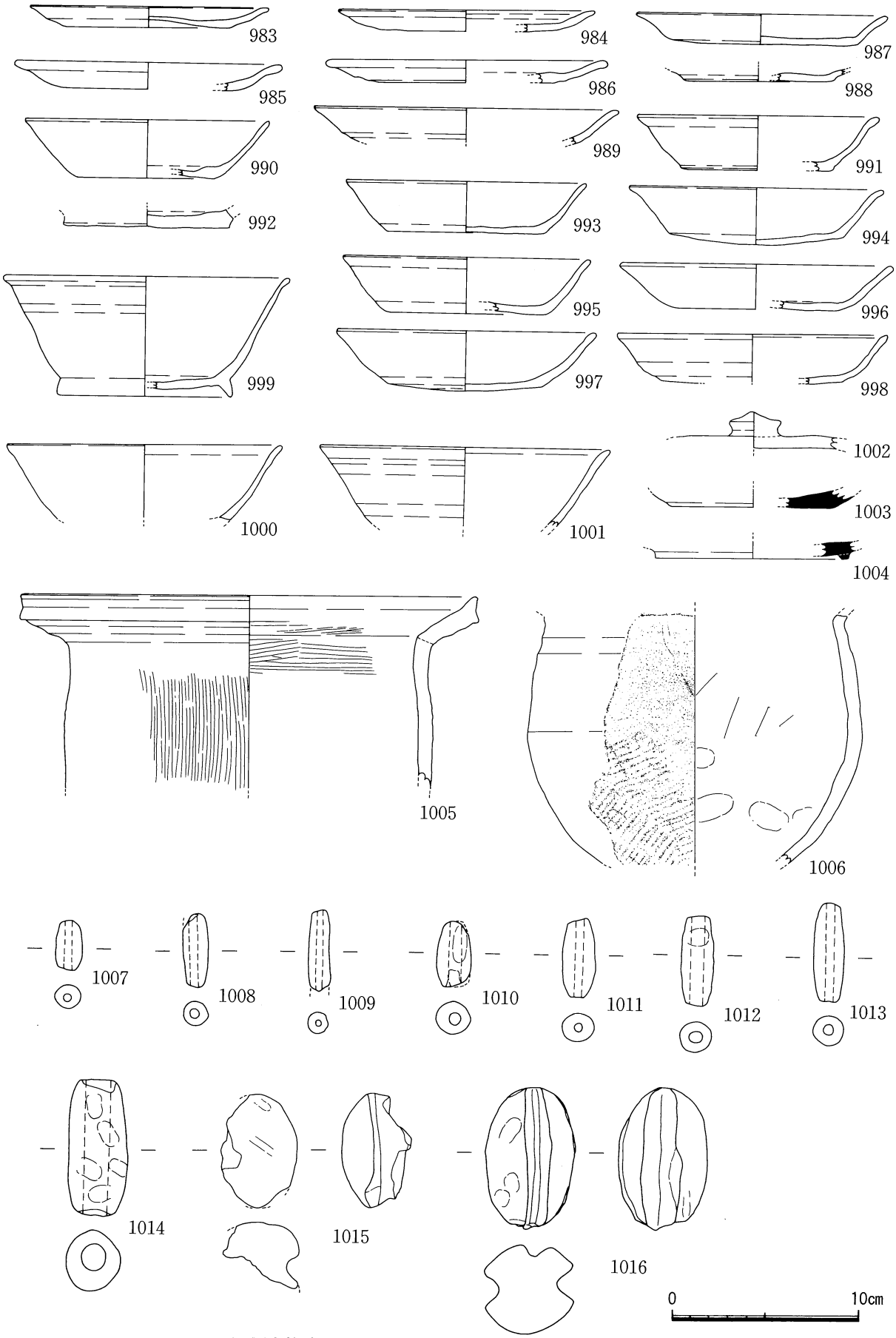


Fig. 98　P14、P15出土遺物実測図

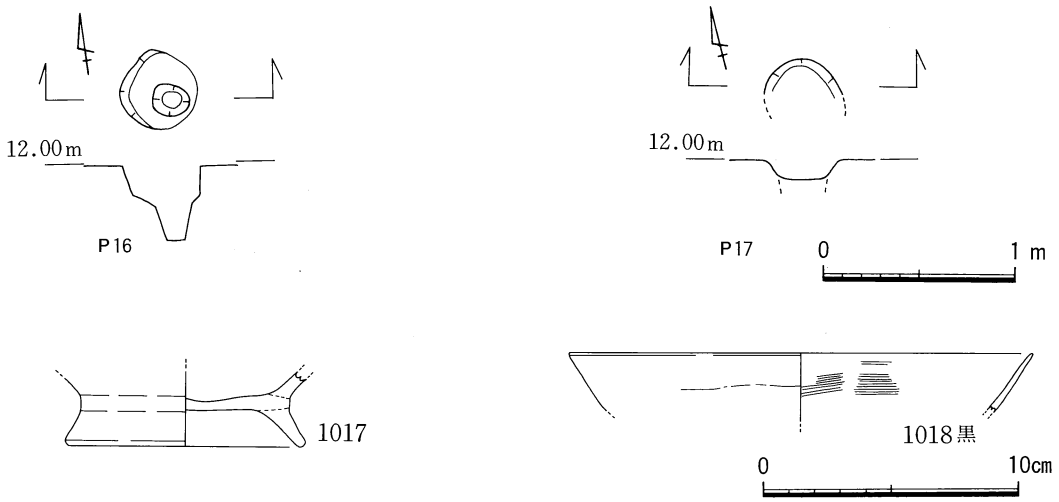


Fig. 99　P16、P17遺構平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

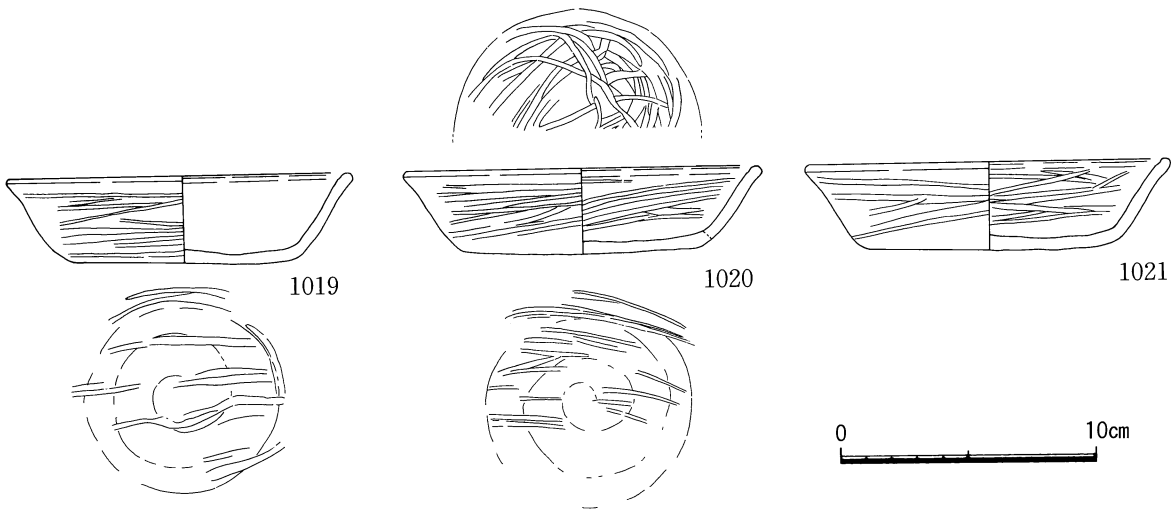


Fig. 100　SF1 出土遺物実測図

⑨　包含層出土遺物（Fig. 101）

各包含層より多量に出土している遺物から、抽出した一部を示す。

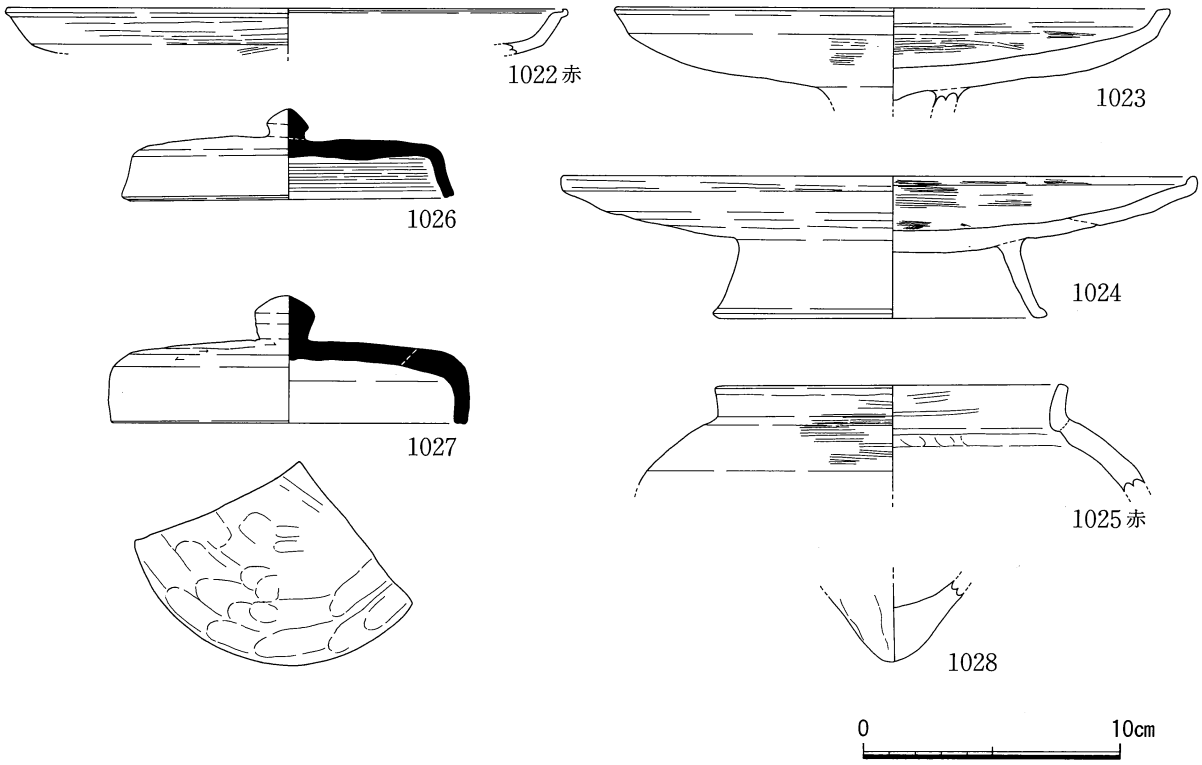
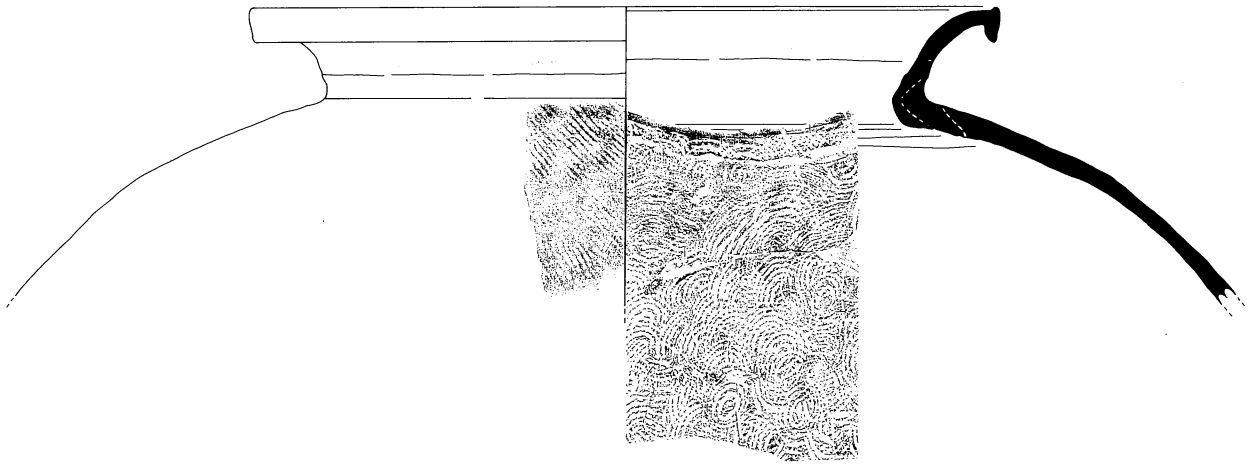
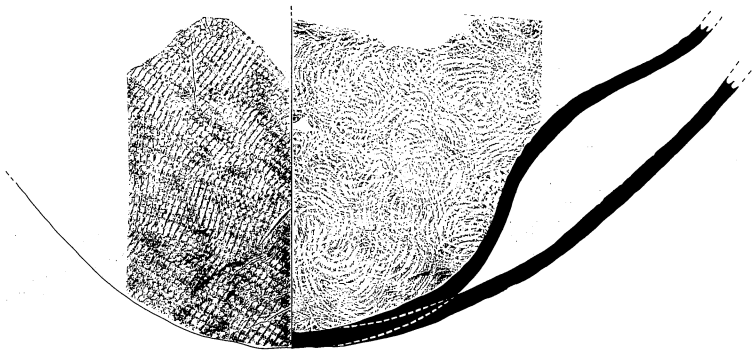
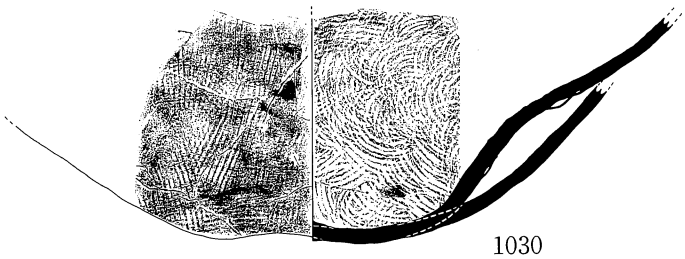


Fig. 101　包含層出土遺物実測図



1029





1030

0 20cm

Fig. 102　SB 22内出土遺物実測図

表4　古代建物規模一覧表

遺構名	規模		方向	柱間距離(m)		柱穴(cm)			
	形態	梁間×桁行(m)		梁間	桁行	平面形	規模	柱痕径	深さ
SB 8		4.2×4.7	N－4°－W	1.8	2.1	円形	48～60	18～21	36～54
SB 9		6.6×17.5	N－12°－E	1.8	2.4	方形	100～160	25～29	84～88
SB 10		5.4×8.2	N－14°－E	1.47	1.95	方～不整方形	66～120	21～24	54～60
SB 11		5.4×8.5	N－78°－W	2.25	2.25～2.7	方形	96～174	30～39	(12～24)
SB 12		5.6×10.2	N－75°－W	2.0～2.4	2.4	方形	80～120	24	(27)
SB 13		6.1×14.8	N－17°－E	1.8	2.2～2.6	方形	48～152	24～28	40～80
SB 14		5.1×(4.1)	N－15°－E	1.2～1.5	1	方形・円形	42～96	15～21	15～66
SB 15		4.6×(12.15)	N－18°－E	—	2.03	方形・隅丸方形	111～135	24	60～105
SB 16		(2.7×4.4)	N－75°－E	1.7	1.95～2.1	方形	126～135	21～30	60～75
SB 17		5.3×6.1	N－12°－E	1.3～1.5	1.65～1.8	方形	60～99	24～36	39～60
SB 18		6.2×10.7	N－12°－E	1.8	1.86～2.25	方形	75～123	21	21～60
SB 19		7.1×10.2	N－77°－W	2	2.2～2.4	方形	80～124	20～24	60～88
SB 20		6.6×18	N－13°－E	1.6～2.0	1.8～2.9	方形	108～172	24～44	(12～48)
SB 21		6.9×13.8	N－13°－E	2.8～2.9	2.4～2.8	方形	112～188	40	(8～32)
SB 22		6.3×12.4	N－76°－W	2.6	2.2	方形	120～140	24～40	(16～36)
SA 4		5.2×11.4	N－75°－W	SN－2	EW－1.2～1.4	方形	110～136	32～48	42～50
SA 9		4.9×5.9	N－82°－W	SN－2.2	EW－1.8	方形	88～104	26	30
SA 10		5.0	N－45°－W	—	1.3～2.0	円形	18～32	20～30	12～30
SA 11		5.0×12.3	N－10°－E	EW－2.2	SN－2.2～2.4	方形	80～110	16～18	60
集石遺構1		10.3	N－75°－W	—	EW－1.8～2.2	隅丸方形	96	—	—

表5　古代土坑等一覧表

遺構名	平面形態	規模			方向	埋土の特徴
		幅(m)	長さ(m)	深さ(cm)		
SK 16	円形	1.02	1.2	62	—	粘土を含む張り床
SK 18	楕円形	1.36	1.8	26	N－32°－E	—
SK 20	不明	2.08	1.9	66	—	焼土、炭層
SK 21	不整楕円形	1.38	2.8	42	N－7°－W	10 YR 3/2 粘土質シルト
SK 22	隅丸長方形	1.60	2.90	24	N－21°－E	10 YR 4/2に4/4塊を含む粘土質シルト
SK 27	不整楕円形	0.96	2.10	45	N－17°－E	—
SK 28	楕円形か	(0.60)	2.06	42	N－79°－W	焼土、製塩土器塊
SK 29	隅丸長方形	2.46	1.5	14	N－77°－W	床面の一部に炭層
SK 30	長方形	0.93	3.40	74	N－11°－E	粘土と若干の炭粒含む
SK 31	溝状	0.60	2.2	4	N－73°－W	7.5 YR 4/2粘土質シルト
SK 32	溝状	0.78	2.6	8	N－83°－W	7.5 YR 4/2粘土質シルト
SK 33	不整方形	1.90	1.90	28	N－0°－W	2.5Y5/1粘土質シルト
SK 34	不整隅丸方形	1.02	2.3	108	N－84°－W	炭層、製塩土器片塊
SX 2	—	1.7	(1.6)	17	—	10 YR 2/3黒褐色粘土質シルトに若干の炭を含む

表6　古代遺構出土遺物一覧表

遺構名	供膳具																				貯蔵具		煮炊具	製塩土器	漁労具		鍛冶関連	その他・備考
	土師器												黒色土器	須恵器							須恵器		土師器		土錘			
				(底部)					(赤彩土師器)							(底部)												
	皿	杯	椀	杯A	杯B	皿B	蓋	高杯	皿	杯椀	蓋	高杯	杯	皿	杯	杯A	杯B	杯C	蓋	高杯	壺	甕	甕	(g)	管状	有溝		
SB 8																												弥生土器細片
SB 9	7	15		1	2	1	6	2	1	4	1			6	22	2	6	3	10	2	1	2	7	1000				カマド1、砥石1
SB 10		1			1		2			1			1	1		2	1		1					80				緑釉陶器火舎1
SB 11				1			1								1	3	1			1				325		1		
SB 12	4			1	1	1		1							3	2	3		8	2			2	290	1			
SB 13	2	3						1	1							1			3		1	2	1	184				
SB 14	1	3		1	2	1	2	1					1		2	3	2		8	1	1	1		433	1		羽口片1	搬入蓋1。土師器供膳具片の約半数が赤彩。
SB 15	7	8		15	4		3	1			1			2	18	7	9		13	2	1	6	3	300	8			カマド2
SB 16※	1	5		4	2		1							1	3		5		3					700	1			搬入皿、甕
SB 17	2			1	1			1						2	1	1	1		5	1	1	1	4	110	1			カマド1
SB 18	5	12	2	6	2	1	6		1					6	6	10	3		7		1		4	1050		1	椀状滓2	粘板岩
SB 19	7	10	1	18	1		6							5	29	11	4		11	1			1	4250	1	1	羽口片1	釘2、讃岐産弥生土器
SB 20	10	16		35	7		6	3		1			2	3	17	16	6		19	3	2	4	12	3050	6	5	椀状滓1	八稜鏡1、搬入甕3・同土錘1、鉄斧1、讃岐産弥生土器片、粘板岩
SB 21	10	11		19	3	1	9	1					1	1	11	7	2		5				2	1250	10	16	椀状滓1	搬入皿2・蓋1、赤彩皆無
SB 22	4	10		18	1		7	3						3	9	7	4		13	1		1	2	500				被熱粘土塊片多数、小型砥石1、砥石1、赤彩皆無
SA 4	6	7		3			3							4	3				7		1	1	1	96				被熱粘土塊片3片、赤彩皆無
SA 9																			1									
SA 10		1		2			1																	67				
SA 11	2	2	1	2	4		2							4	2		7		21			2	3	500		1		
SK 16	1	1				1	2		1		1			2	7	4	5		3				1	780			羽口片1	砥石1、鉄砧石1
SK 18	1	1			1		3	1		1	1				6	3	3		11	1	1		2	200			羽口先片1	搬入皿1・甕
SK 20	2	4		1	3		4	2		1	3	1		2	3	4	6		13	4	1	4		240		1	羽口先片1	

遺構名	供膳具																					貯蔵具		煮炊具	製塩土器	漁労具		鍛冶関連	その他・備考
	土師器												黒色土器	須恵器								須恵器		土師器		土錘			
	皿	杯	椀	(底部)			蓋	高杯	(赤彩土師器)				杯	皿	杯	(底部)			蓋	高杯		壺	甕	甕	(g)	管状	有溝		
				杯A	杯B	皿B			皿	杯椀	蓋	高杯				杯A	杯B	杯C											
SK 21	14	13		15	7	1	9	1					1	15	25	24	4		23			2	2	5	2400		1	坩堝1、小鉄滓2	スラグ状物質付着製塩土器片1、赤彩皆無
SK 22	4	7		2	8		6	2			1			15	50	25	17		100	7		2	5	8	1450	5		鉄滓1	搬入供膳具1
SK 27	6	19		16	4		10	5					1	5	12	8	1		5						1800		1		赤彩皆無。搬入杯2。
SK 28														6	12	2	5		11					2	8750			鉄滓1	
SK 29	2	1		2			2						1		3	1			1					1	142			羽口先片1、鉄滓3	砥石1
SK 30	18	16		7			3	3	4	1				21	44	21	4		11	5	1	2	2	2	1550		1		残存率高い遺物多数。
SK 31					1																				64				
SK 32																								2	190				
SK 33	6	9		3			1	2		1				7	13	6	4		4	2	1		1	1	750	2		鉄滓少量	鉄釘。総じて土師器と須恵器はほぼ同量。
SK 34	13	19		19	5		8	2					1	17	26	17	2		15	3	1	1	2	2	9490	2	3	椀状滓1	搬入杯B1・蓋1、カマド1、砥石1、鉄砧石2、小木片
SD 26	4	1		1	3	2		2	3	1					18		5	10	29		1	3	4		36				カマド1、馬歯
SD 40	11	10	2	8	1		2	2						3	13	5	2		1						2300	2			残存率高い遺物目立つ。赤彩皆無。搬入杯2。
SX 2	13	3		2		1	3	4	12	3	3	4			11	9	2	2	12			1	3		210				円面硯1、カマド1、瓦1、搬入皿1
P 14	11	42		26	1		2						1						2				2		51	5	2		被熱粘土塊片5、赤彩皆無
P 15	6	25		13	1		1									1	2		2						13	9	1		赤彩皆無

※1．原則として口縁部でカウントした。
2．(底部)、(赤彩土師器)は独自のカウント数である。従って(赤彩土師器)は土師器の該当器種に、(底部)も口縁部まで残存する個体は該当器種に重複して数えている。
3．製塩土器は総重量で示した。
4．SB 16では原則的に実測図に示すことのできた遺物数を示した。
5．須恵器の搬入についての検討は行っていない。

H区　古代遺物観察表凡例

摩耗：△は摩耗があることを、×は摩耗が顕著で、器表の観察も著しく困難なことを示す。

手法的特徴：「内外」は内外面を示す。調整等の不明箇所により、「全面」と表現できない場合等にも使用した。「外底」は底部外面。

須恵器供膳具の回転ナデ痕や、処理されたヘラ切り痕は原則として省略した。特に触れたものは痕跡が顕著であったり、ナデなどによる処理が弱いことが看取できたものである。土師器については、これらの痕跡は観察できる限りにおいて記載した。

須恵器蓋等の内面について、「平ら」は丁寧な調整で平坦に仕上げられていることを、「平滑」はさらに滑らかな面に仕上げられていることを示す。

含有鉱物

粒度：「細」は細粒の意で、概ね0.4mm未満である。

種類：チ＝チャート、英＝石英、長＝長石、赤＝赤色風化礫、黒＝黒色粒、ガ＝火山ガラス、砂＝砂岩、泥＝泥岩、雲＝雲母（金雲＝金雲母、白雲＝白雲母、黒雲＝黒雲母）、閃＝角閃石。円＝ローリングを受けた粒、角＝ローリングを受けていない粒。砂岩・泥岩粒については記載がない場合は「円」、その他の砂粒について記載のない場合は「角」とする。またこれらの種類は、含有量の多い順に並べた。最も多く含まれる粒の粒度は、概ね「普遍」欄に示されていることになる。

焼成：空欄は平均的な焼成度にあることを示す。

残存率：復元全周に対する残存率を、可能な限り口径について示した。底部や天井部径によるものはその旨補足している。また「完」は完形、「準完」はほぼ完形と考えてよいもの、「半完」はそれにやや及ばないものを示す。

「製塩」土器：今次はこの名称で報告する。内面の最大径を、口径欄に記した。

※その他、第Ⅴ章の３に従う。

遺物観察表（土器）

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SB9	P10	153	ⅢA	19.6	2.7	16.5	△	内外赤彩、内面暗文、外面ミガキ。体部連続ナデ、外底断続ケズリ。	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗	並	細	0.5	英チ赤	Ⅰ	素地2.5Y8/2		1/11
	〃		154	杯A	16.4	3.7	10.2	△	全面赤彩。内面放射暗文。口縁回転ナデ。外面下半断続ケズリ。外底平行圧痕。	2.5Y5/8 明赤褐	並	多	細	0.5	英チガ	Ⅰ	素地10YR8/2		1/15
	〃	P8Ⅳ層	155	杯A			8.4	△		7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	やや多	細	1.0	チ赤				底 1/4
	〃	P8下層	156	杯				△	内外赤彩。外面ミガキ。その他不明。	5YR7/8橙	密	並	0.5	0.5	赤チ			軟	断片
	〃	P7上層	157	杯B			11.0	△	内外赤彩。内面ミガキ、外面擦痕。	2.5YR6/6 橙	やや粗	やや多	0.5	2.0	英チ赤	Ⅰ	素地10YR8/2	硬	底 1/9
	〃	P8柱痕	158	蓋	15.1			△	調整不明。	5YR7/8橙	並	並	細	1.5	赤チ			軟	1/9
	〃	P10	159	蓋	18.2				内外断続ミガキ。	5YR6/6橙	並	やや多	細	細	チ赤			やや硬	1/15
	〃	P1	160	高杯	23.6				内外断続ミガキ。	5YR6/6橙	密	並	細	細	チ赤		素地7.5YR7/6	やや硬	1/12
	〃	P8 Ⅴ層	161					△	内面ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	0.5	4.0	チ赤				
	〃	P8下層	162	高杯B				△	調整不明。	5YR6/8橙	密	少	1.0	1.5	チ赤泥	Ⅱ		軟	
	〃	P5上層 P8下層	163	高杯			9.0		連続ナデ。	2.5Y7/8橙	並	並	細	1.0	長チ赤			硬	1/4 強
須恵器	〃	P8	164	Ⅲ	19.2				外底回転ケズリ（回転台右回り）。	5Y7/2灰白	並	並	細	1.0	チ				1/10
	〃	P2上層	165	杯CⅡ	13.5	5.0		×		5Y7/2灰白	やや粗	並	0.5	1.2	チ黒泥			軟	1/8 強
	〃	P10	166	杯CⅡ	13.5	4.5	8.2		内・外底ナデ仕上。	2.5Y8/2 灰白	密	並	細	1.0	英長黒				1/4
	〃	P9 最下層	167	杯CⅠ	15.4					2.5Y8/2 灰白	並	多	0.5	1.0	英チ	Ⅰ		やや軟	1/10
	〃	P9 XXI層	168	杯BⅢ	13.6	4.1	8.8		高台接合部外面擦痕。	2.5Y7/2 灰黄	並	やや多	0.5	1.0	英長赤	Ⅰ			底 1/7
	〃	P2	169	杯	15.8			×		2.5Y7/2 灰黄	粗	やや多	0.5	5.5	チ黒			軟	1/7 弱
	〃	P2上層	170	蓋						5Y5/1灰	密	並	細	2.0	チ			硬	
	〃	P3	171	蓋	17.0	2.0		△	天井外面の3/4に回転ケズリ。	5Y8/1灰白	粗	多	0.5	1.0	英長	Ⅰ		軟	1/9
	〃	P7上層	172	蓋	16.9					5Y8/1灰白	密	少	0.5	2.0	チ黒				1/6
	〃	P9Ⅹ層	173	蓋					外面調整不明。	2.5Y7/1 灰白	並	多	1.0	2.0	英長		外面自然釉。	硬	
	〃	P8柱痕	174	蓋					調整不明。	N6/灰	並	多	0.5	3.0	チ			硬	
土師器	〃	P8Ⅴ、Ⅶ層	175	甕	16.0			△	口縁内面暗く変色。	5YR5/6 明赤褐	粗	多	0.6	3.5	英長チ			硬	1/10
	〃	P9Ⅰ層	176	甕					口縁内面ハケ。	7.5YR8/4 浅黄橙	やや粗	多	2.0	3.0	チ(円)砂ガ	Ⅰ			断片
	〃	P8柱痕	177	甕	24.4				口縁内面ハケ。	7.5YR5/6 明褐	やや粗	多	1.0	4.0	チ赤	Ⅱ		硬	
	〃	P8柱痕	178	カマド					外面ハケ。内面ナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙	並	多	0.5	0.5	チ	Ⅱ		硬	
須恵器	〃	P3下層	179	甕	29.2				口縁端部は強い横ナデにより内外に拡張。	5Y7/1灰白	並	やや多	細	細	英長黒	Ⅰ		やや軟	
緑釉陶器	SB10	P12	180	火舎				△	外面１条又は２条の弱い凹線。内面連続ナデ。	2.5Y8/2 灰白	密	少	1.0	1.0	英雲赤		内面ススケ。搬入品。	軟	
黒色土器	〃	P12′	181	杯					内外、緻密な横位のミガキ。内面暗文。	10YR6/3 にぶい黄橙	並	並	細	1.0	閃金雲長		搬入品。	極硬	口縁断片
須恵器	〃	P9上層	182	杯BⅠ			13.2		体部下半回転ケズリ。	N5/1灰	密	やや少	細	0.5	長黒			硬	1/8 弱
	〃	P12 Ⅰ層	183	高杯						10YR8/4 浅黄橙	並	並	細	2.0	長黒			軟	
	〃	P6	184	甕					口縁外面、櫛描波状文・櫛状原体による圧痕文。	5Y5/1灰	密	やや少	細	1.0	長			硬	
須恵器	SB11	P4上層	186	杯BⅢ			9.0		外底回転ケズリか。	7.5Y7/1 灰白	並	並	細	1.0	チ黒				底 1/12
	〃	P5上層	187		14.6			△		N7/灰白	並	並	細	1.0	チ黒			やや軟	
	〃	P5上層	188	高杯			12.2	△		5Y8/2灰白	粗	多	細	1.0	英チ	Ⅰ		軟	

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SB12	P2上層	189	杯B			8.6		全面赤彩。ミガキ。	5YR6/6橙	やや密	やや少	細	細	英長ガ		素地7.5YR7/4高台と、それ以外の胎土異なる。		底1/4
	〃	P9	190		17.8			△	詳細不明。	7.5YR7/6橙	密	少	1.0	1.0	赤チ			軟	1/10
須恵器	〃	P8	191				12.7	△		5Y6/1灰	やや粗	並	0.5	1.0	チ赤			やや軟	1/7弱
	〃	P7	192	杯B	10.6	6.0	7.2			N7/0灰	並	並	細	3.0	長				1/4強
	〃	P8	193	杯B			10.0			N7/灰白	並	並	細	2.0	チ黒				底1/10
	〃	P9	194				16.2		内底ナデ。	7.5Y6/1灰白	並	やや少	細	2.0	長英			硬	底1/6
	〃	P9	195	蓋	14.0				天井、外面回転ケズリ後ナデ、内面ナデ。	N6/0灰	並	並	1.0	2.0	チ				1/4強
	〃	P2上層	196	高杯				△		2.5Y8/2灰白	粗	多	1.0	2.0	英長			軟	
	〃	P8	197	高杯			10.8			7.5Y6/1杯灰	並	少	細	1.0	長黒				1/4強
土師器	SB13	P10	198	皿A	12.8				内外ミガキ。	5YR6/8橙	やや粗	並	細	細	チ赤ガ			軟	1/12
	〃	P11掘方	199		18.0	2.0	13.8	△	全面赤彩。ミガキ。	5YR7/8橙	密	少	細	1.0	チ赤ガ	Ⅱ		軟	底1/7
	〃	P10柱痕	200	皿A			15.2	△	内外赤彩。内外底、密な断続ミガキ。	2.5YR5/6明赤褐	やや粗	多	細	6.0	英チ赤	Ⅰ	素地10YR8/2	硬	底1/7
	〃	P11	201	杯				△	内外ミガキ。外面下半擦痕か。	5YR6/6橙	並	やや少	細	0.8	チ赤ガ				断片
	〃	P11Ⅱ層	202				10.6	△	底部ケズリ、ハケ。	7.5YR7/6橙	やや粗	並	1.0	2.0	チ赤ガ				底1/4
	〃	P8	203	高杯脚			18.4	△	連続ナデ後、内外ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	0.5	1.5	チ赤ガ				
須恵器	〃	P4	204	杯A			7.4	△		7.5Y6/1灰	並	並	細	3.0	黒長			やや軟	底1/5
	〃	P10Ⅰ層柱痕	205	蓋	15.6				外面、回転ナデ後、逆方向の回転ケズリ。内面周縁部擦痕。	N7/0灰白	並	並	細	1.0	チ				1/12
	〃	P10Ⅱ層	206	蓋						N6/0灰	並	やや少	細	細	英黒			硬	
	〃	P6	207							2.5Y7/2灰黄	並	少	細	細	英長				断片
	〃	P10Ⅱ層	208	壺			10.9			2.5Y6/1黄灰	並	並	細	細	黒チ		内底に自然釉。外底に線刻。	硬	底1/6弱
土師器	SB14	P3	209	杯	13.7			△	連続ナデ後、内外ミガキ。	10YR8/4浅黄橙	並	並	細	細	チガ				1/9
	〃	P5	210	蓋						5YR6/6橙	密	並	細	0.7	長英赤		搬入品。	硬	
須恵器	〃		211	杯BⅡ			11.2			N7/0灰	密	並	細	細	チ黒			硬	底1/8
	〃	P7	212	蓋						N6/灰	やや密	並	細	0.5	黒英長			硬	
	〃	P3	213	蓋					外面回転ナデ、内面ナデ共に丁寧。特に内面中央は平滑。	N7/灰白	密	少	細	0.8	長黒			硬	
	〃	P6	214	高杯				△		5Y7/1灰白	やや粗	やや多	細	1.5	英長黒	Ⅰ		やや軟	
土師器	SB15	P4上層	215	皿A	15.6	2.2	11.5	底△	内面及体部外面ミガキ。	2.5YR5/8明赤褐	並	並	細	1.0	チ赤			硬	底1/7
	〃	P1	216	皿A	15.4			△	口縁部外面に回転ナデ痕残る。体部内外ミガキ。	5YR7/6橙	並	並	細	細	チ赤ガ				底1/9
	〃	P2上層	217		20.0			△	口縁部強い回転ナデ後、内外、連続と見られる粗いミガキ。	10YR7/4にぶい黄橙	並	並	細	細	チ赤ガ				1/10
	〃	P3下層	218	杯A			10.0	×		10YR8/4浅黄橙	並	少	細	細	チ赤				底1/7
	〃	P3	219	杯AⅣ	9.2	3.4	5.7	×	回転ナデ痕有り。	2.5YR5/6明赤褐	やや密	並	細	1.0	チ赤ガ		底部剥離。		半完
	〃	P3下層	220		15.6			外底△	内面及び口縁部外面ミガキ残る。	5YR5/6明赤褐	密	並	細	細	チ赤ガ				1/8弱
	〃	P2中層	221	高杯A			12.3	△	脚内面にシボリ目。	5YR6/6橙	密	やや少	細	2.0	チガ			軟	

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SB15	P2下層	222	ⅢA	15.4	1.0	12.3		外底ナデ。	10Y6/1灰	やや密	並	細	細	チ				1/10
	〃	P2下層	223	杯AⅢ	12.7	3.4	8.7	△	底部のみ還元色。	10YR6/4 にぶい黄橙	粗	やや多	0.5	2.0	チ赤			軟	底 1/2
	〃	P6上層	224	杯AⅡ	14.1	3.9	8.6	△		2.5Y7/2 灰黄	並	並	細	細	チ黒			軟	底 1/4
	〃	P2上層	225	杯	16.0				外面擦痕。	5Y7/1灰白	やや粗	多	細	2.0	チ				1/4 弱
	〃	P2下層	226	杯D			10.4		立上り外面に擦痕、内外底ナデ。	5Y7/1灰白	並	やや多	細	0.5	チ				底 1/5
	〃	P3上層	227	杯B			7.6		外底ナデ。外面接合痕。	5Y4/1灰	並	並	細	2.0	長黒		内外発色差。	硬	底 1/4
	〃	P3上層	228	杯B			11.9		内底ナデ。	7.5Y6/1灰	並	並	細	1.0	チ黒				底 1/8
	〃	P3中層	229	杯BⅢ			8.6		外底ナデ。	7.5Y7/1 灰白	並	並	細	細	英黒			硬	底 1/2
	〃	P1中・下層	230	蓋	15.6				天井内外面ナデ。	7.5Y6/1灰	並	並	0.5	3.0	長チ黒			硬	天井 1/4
	〃	P8	231	高杯				△		5Y8/2灰白	やや粗	多	0.5	2.0	英長チ	Ⅰ		軟	
	〃	P3上層	232	高杯			11.5	△	脚内面弱いシボリ目。	5Y7/1灰白	やや粗	多	0.5	2.0	チ黒			軟	
製塩土器	〃	P3下層	233		10.2					2.5Y7/2 灰黄	粗	多	2.0	6.0	チ砂		外面ススケ。		口縁下 1/7
土師器	〃	P3下層	234	甕	19.8				口縁内面ヨコハケ。	にぶい黄橙	並	多	1.0	3.0	砂チ赤ガ	Ⅰ			1/10
	〃	P3下層	235	甕	24.8				口縁・頸部内面粗いハケ。	5YR7/8橙	粗	多	1.5	5.0	砂チ	Ⅰ			1/11
	〃	P1上層	236	甕	28.6			△	詳細不明。	2.5Y6/2 灰黄	粗	多	1.0	10.0	チ			軟	1/9 弱
	〃	P2下層	237	カマド					ツバ部ナデ。内面及焚口端部オサエとナデ。	10YR5/2 褐灰	やや粗	多	1.0	3.0	チ砂ガ	Ⅰ			
土師器	SB16	Pロ2	246	ⅢAⅠ	20.4	2.4	17.3	△		7.5YR6/6 橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/6
	〃	Pロ1 下層	247						内面放射暗文。外底ケズリ。	5YR6/6橙	密	並	細	細	長チ		一定粒度の長石細粒を主に含む搬入品。	硬	断片
	〃	Pハ1 柱痕	248	杯AⅢ	13.6	3.1	8.6		回転ナデ後、全面粗いミガキ。外底ヘラ切痕僅かに残る。外面立上りに接合痕。	10YR8/6 黄橙	並	並	細	2.0	チガ		口縁部赤斑。		完
	〃	Pハ1 柱痕	249	杯AⅢ	13.6	3.4	8.9		体部回転ナデ後、全面粗い断続ミガキ。外底、ヘラ切→ナデ→ミガキ。	5YR7/6橙	並	やや多	細	2.0	チ赤ガ		内面重ね焼斑。		完
	〃	Pハ1 柱痕	250	杯AⅡ	14.6	3.3	10.0		全面粗いミガキ。内底回転ナデ痕。	5YR6/6橙	やや密	並	細	細	チ赤ガ		外面下半に重ね焼斑。		完
	〃	Pハ1 柱痕	251	杯AⅢ	13.6	3.3	8.5		回転ナデ後、全面粗いミガキ。外底ヘラ切痕、平行圧痕僅かに残る。	5YR6/6橙	並	並	細	細	チ赤ガ		内面・外底はにぶい黄橙色。		完
	〃	Pロ2	252	杯	14.6			△	外面ミガキ認む。内外回転ナデ痕。	5YR6/6橙	密	やや少	細	1.0	チ赤ガ				1/6
	〃	Pロ1	253	杯B			10.8	△		7.5YR8/6 浅黄橙	やや密	少	細	細	赤チ				底 1/10
	〃	Pハ2 上層	254	杯B			12.8			5YR6/6橙	やや密	並	細	1.5	赤チガ				底 1/4
	〃	Pロ1	255	蓋				△		7.5YR7/6 橙	並	やや少	細	細	チ赤ガ				
	〃	Pロ2	256		14.0			△	内外ミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙	密	並	細	細	チガ				1/7
	〃	Pハ1 上層	257	椀	19.6			△	内外赤彩。内面粗いミガキ。外面下半断続ケズリ。	2.5YR6/8 橙	並	並	0.5	1.0	チガ				1/7
須恵器	〃	Pロ2	258	ⅢA		2.3		△		7.5Y6/1灰	並	並	細	細	長チ黒			やや軟	
	〃	Pロ1	259	杯B			7.6		内底ナデ、外底ヘラ切痕残る。	N6/0灰	やや粗	並	細	1.5	長			硬	底 1/2 弱
	〃	Pハ2 上層	260	杯BⅢ	13.2	3.6	9.6		外底ナデ。	N6/灰	並	並	0.5	2.0	長チ黒				1/4 弱
	〃	Pロ2	261	杯BⅢ	13.2	3.8	10.0		内底丁寧なナデ。外底ヘラ切痕残る。	5Y7/1灰白	密	やや少	0.5	2.5	長黒			外底やや軟	底 1/4

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SB16	Pハ1	262	杯B	14.1	3.8	11.0		外底ナデ、内底丁寧なナデ。	N7/0灰白	並	並	細	0.7	長黒				底1/4強
	〃	Pロ1上層	263	杯B			12.0		内外底ナデ。	10YR7/4にぶい黄橙	粗	多	0.5	2.0	チ黒		内面還元色。	軟	底1/7
	〃	Pハ1上層	264	蓋	15.8					N7/灰白	密	少	0.4	2.5	チ黒				1/9
	〃	P1・P5上層	265	蓋	14.8	3.2			天井外面の2/3に回転ケズリ。内面、周縁部に回転板ナデ後、全面に断続板ナデ。	7.5Y7/1灰白	並	やや多	0.5	3.0	英長チ	Ⅰ			1/2強
	〃	Pロ1	266	蓋					天井外面回転ケズリ。内面ナデ。	2.5Y7/1灰白	並	多	細	2.0	長黒				
	〃	Pロ1上層柱痕横	267	蓋	18.0	2.0			内面ナデ。	10YR6/1褐灰	並	並	細	2.0	長黒チ		外面自然釉。	硬	1/3
土師器	SB17	P13	269		22.1			△	外面回転ナデ後の調整不明。	7.5YR6/4にぶい橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/11
	〃	P13	270			1.6		△	調整不明。	7.5YR7/6橙	やや粗	並	0.5	2.0	チ赤				断片
	〃	P1	271				12.2			2.5Y8/3淡黄	並	並	細	細	チ			硬	底1/5
須恵器	〃	P2	272	高杯			8.2			5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	英長黒				1/6
	〃	P1	273	杯B			10.7		内底細目の断続ハケ。	5Y1/7灰	やや粗	多	細	1.0	英長				底1/7
	〃	P14	274	ⅢA	17.7	2.0	15.0	△		5Y8/1灰白	やや粗	並	細	2.5	チ			軟	底1/7
	〃	P1	275	蓋	17.5	1.6				N6/灰	密	並	細	4.0	チ黒		口縁外面が幅9㎜で暗色。		天井1/7
	〃	P6	276	蓋	18.2					5Y6/1灰	並	並	細	2.0	チ黒		外面自然釉。	硬	1/12
土師器	〃	P13	277	甕	29.2				口縁内面粗いハケ。	7.5YR6/4にぶい橙	やや粗	多	1.0	2.0	チ	Ⅱ		硬	1/14
	〃	P14	278	カマド					ツバ部ナデ。	2.5Y8/2灰白	並	やや多	0.6	2.2	チ砂(円・角)	Ⅰ′			
土師器	SB18	P9	280	ⅢAⅡ	17.1	2.0	12.0	△	内外ミガキ。	7.5YR7/6橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/4
	〃	P5	281	杯AⅢ	13.2	3.6	8.8		内外ミガキ。	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	やや多	細	1.0	チ赤ガ				1/5弱
	〃	P12	282	杯AⅢ	14.6	2.8	8.8	△	外面ミガキ。	7.5YR8/6浅黄橙	密	並	細	細	赤チガ				底1/4
	〃	P5	283	椀A	12.0	3.2	6.3	△	全面ミガキ。立上り外面擦痕、断続ケズリか。	5YR6/6橙	並	並	細	1.5	チ赤ガ				1/4
	〃	P4Ⅱ・上層	284	ⅢB-2	23.9	4.2	16.6	△	全面赤彩。Ⅲ部内外ミガキと思われる。	10YR8/4浅黄橙	並	並	細	細	チガ赤				底1/3
須恵器	〃	P4上層	285	ⅢAⅢ	16.6	2.0	13.8		外底ナデ。	7.5Y6/1灰	やや粗	多	細	1.5	チ黒			やや軟	1/7
	〃	P3	286	ⅢAⅢ	15.2	2.2	11.2	△		体部5Y8/1灰白・底部7.5Y6/1	並	やや少	細	1.0	長黒			軟	底1/2
	〃	P3	287	ⅢA	18.6	2.1	13.2	△		2.5Y7/3浅黄	やや密	並	1.0	1.0	赤			軟	1/12
	〃	P1	288	杯BⅢ			8.4		外底ナデ。	5Y7/1灰白	並	並	細	1.5	チ				底1/5
	〃	P8	289	杯BⅢ			8.6	△		7.5Y7/1灰白	やや粗	多	細	2.0	チ黒				底1/2弱
	〃	P12	290	杯BⅡ			9.0		内外底ナデ。	N7/灰白	並	並	細	細	チ黒			硬	底1/3
	〃	P12	291	蓋		1.4			天井内外ナデ。	N6/灰	並	多	1.0	3.0	チ黒				
	〃	P3	292	蓋	15.4					N7/灰白	並	並	細	細	チ		外面自然釉。	硬	1/10
土師器	〃	P3	293	甕	15.0					7.5YR5/4にぶい褐	粗	多	0.8	2.5	チ雲	Ⅲ	外面赤変。	硬	1/8
	〃	P5上層	294	甕				△	口縁内面ハケ。	5YR6/6橙	粗	多	1.5	3.0	チ砂	Ⅰ			断片
土師器	SB19	Pイ6上層	295	ⅢA		1.4		△	調整不明。	5YR6/8橙	並	並	細	0.5	チ赤				断片
	〃	Pイ2上層	296	杯AⅣ			6.4	△	内外ミガキ。	10YR7/4にぶい黄橙	やや密	やや少	細	1.0	チガ		内面暗色5Y4/1。		底1/4弱
	〃	Pハ2上層	297	ⅢA	17.0	2.7	12.2	△	全面ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	2.0	チガ			硬	底1/6
	〃	Pイ2上層	298		16.8		11.7		全面ミガキ。	5YR6/6橙	密	並	細	1.8	赤チガ				1/4
	〃	Pハ1上層	299	蓋				△	調整不明。	7.5YR7/6橙	やや粗	やや多	細	6.0	チ赤ガ			軟	

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SB19	Pロ5 上層	300	杯AⅡ	14.4	2.7	10.8	△		7.5Y7/1 灰白	並	多	0.8	2.5	長黒			やや軟	1/4
	〃	Pロ2	301	杯AⅠ	15.6	3.0	12.5	△		5Y6/1灰	密	やや少	細	1.0	チ黒			やや軟	1/7
	〃	Pハ3	302	杯BⅡ			10.0	△		2.5Y8/2 灰白	並	多	細	1.5	英チ	Ⅰ		軟	底 1/6
	〃	Pハ2 上層	303	蓋					内面ナデ。	N6/灰	密	やや少	細	3.0	チ黒			硬	
	〃	Pロ2 上層	304	蓋	19.6					外面5Y6/1 灰	並	並	細	1.5	チ黒		内面N8/0 灰白。	硬	1/9
	〃	Pハ1 上層	305	高杯			9.8	△	内外回転ナデ。	2.5Y7/1 灰白	並	多	0.5	1.0	チ黒				
製塩土器	〃	Pイ5 上層	306		7.4			△	口縁外面ソギ取り。内面圧痕。	7.5YR7/6 橙	並	多	1.0	5.0	泥赤チ (角・円)				1/6
弥生土器	〃	Pイ5 上層	308	甕	16.1				口唇部外面ハケ。	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗	多	細	1.8	チ閃		搬入品。	硬	1/18
黒色土器	SB20	P26 上層	309	杯					内外緻密なミガキ、内面暗文。	10YR5/3 にぶい黄褐	密	少	細	細	雲英閃		外面口縁下15mmまで黒色。	極硬	断片
土師器	〃	P12	310	ⅢA		2.1		△	調整不明。	10YR7/2 にぶい黄橙	並	多	細	細	チガ		体部外面 5Y4/1灰。		
	〃	P12	311	ⅢA	17.3	1.2	14.4	△	調整不明。	5YR7/6橙	密	少	細	1.3	チ赤			軟	底 1/4
	〃	P10	312	ⅢA			11.2	△		7.5YR7/6 橙	並	やや少	細	細	チ赤		外底に線刻。		底 1/4
	〃	P25	313	Ⅲ				△	外面回転ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	並	細	1.0	チ		底部が 2.5Y4/1。	硬	断片
	〃	P21	314	杯AⅣ	9.6	4.0	5.8	△	回転ナデ後、粗いミガキの可能性。	5Y7/8橙	並	並	細	1.0	赤長ガ			軟	1/4
	〃	P25	315	杯AⅢ	11.5	3.1	7.6	△	回転ナデ後、内外ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	2.0	チ赤ガ				1/2 弱
	〃	P16	316	杯AⅢ	12.8	3.1	6.6	△	内外回転ナデ、特に口縁外面に強い回転ナデ。その後の調整不明。	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	並	細	2.0	チ赤ガ		内外に黒斑。		1/3
	〃		317	杯AⅣ			6.4	×		5Y7/1灰白	並	並	細	0.9	チ赤				底 1/5
	〃	P10	318	杯B			9.4		調整不明。	5YR6/8橙	並	やや少	細	3.0	赤長ガ				底 1/8
	〃	P7	319	杯B			9.1	△	調整不明。	7.5YR7/8 黄橙	やや密	並	細	1.0	チ赤			軟	底 1/7
	〃	P20	320	杯B			12.2	△	全面赤彩。内面ミガキ。	5YR4/6 赤褐	並	並	細	細	英チ赤	Ⅰ′	素地10YR8/3。		底 1/4 強
須恵器	〃	P5	321	ⅢA	15.4	2.1	14.1		底部は平滑。特に外底は極平滑。体部強い回転ナデ。	5Y7/1灰白	極密	少	細	細	黒チ			硬	底 1/13
	〃	P22	322	ⅢA	16.9	1.8	14.2		体部に強めの回転ナデ。	5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	チ黒			やや軟	底 1/6 弱
	〃	P23	323	杯AⅤ			4.8	△	外底ヘラ切未調整。	5Y6/1灰	やや粗	並	0.5	0.5	赤長			軟	底 1/4 強
	〃	P25 上層	324	杯AⅢ	12.8	3.5	6.8	△		2.5Y8/2 灰白	やや粗	並	0.5	2.0	チ赤			軟	1/6
	〃	P22	325	杯AⅢ	12.2	3.4	7.5	△		2.5Y7/1 灰白	並	やや多	0.5	5.0	黒チ		下半が暗色 (N5/0)	軟	1/6
	〃	P12 上層	326	杯AⅡ	13.6	3.4	10.2		内外底ナデ。	N7/灰白	やや粗	やや多	細	1.0	英チ	Ⅰ			底 1/2 弱
	〃	P3	327	杯BⅢ	12.3	4.0	8.6		内底ナデ、外底ヘラ切痕。	5Y6/1灰	密	やや少	0.8	0.8	黒長			硬	1/6
	〃	P13	328	杯BⅡ			10.7			5Y7/1灰白	並	並	細	0.8	チ黒				底 1/8
	〃	P12 上層	329	杯	14.5	3.1	10.7	△	内底ハケ。	10Y8/1 灰白	並	並	細	1.5	英チ	Ⅰ		軟	2/3
	〃	P19	330	蓋	14.3				天井外面断続ケズリ。	5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	チ			やや軟	1/4
	〃	P23 上層	331	蓋	16.7	2.0			天井外面接合・ヘラ切痕残る。内面、周縁部擦痕、他はナデ。	7.5Y5/1灰	並	多	細	3.0	長チ				完
	〃	P13 掘方	332	長頸壺					内面、接合痕、ナデ痕あり。	7.5Y5/1灰	並	やや多	0.6	1.0	チ黒		外面の一側方に自然釉。		

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SB20	P12 上層	333	壺			10.2		内底中央ナデ。	N8/灰白	並	並	0.4	1.5	長チ			やや硬	底 1/1
	〃	P12	334	壺					内面、接合痕と横ナデ。耳はケズリ。	N5/0灰白	並	並	0.5	0.8	チ黒			硬	
土師器	〃	P12	335	甕					口縁内面粗めのハケ。体部外面横ハケ。	7.5YR6/4 にぶい橙	並	並	0.8	2.5	チ砂赤	I			
	〃	P19	336	甕				△	体部外面粗めの縦ハケ。	7.5YR7/4 にぶい橙	並	多	2.0	3.0	チ(円) 砂ガ	I			断片
	〃	P12	337	甕					口縁上端面が凹。	7.5YR5/4 にぶい褐	やや粗	多	1.0	4.0	長英チ			硬	断片
製塩土器	〃		338		8.6					7.5YR7/6 橙	やや粗	多	1.0	8.0	泥赤				1/7
土師器	SB21	Pイ4 底	350	Ⅲ A Ⅱ	15.0	1.6		△	口縁下、強い回転ナデ。外底ヘラ切痕。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	多	細	0.7	チ赤ガ		黒斑。		1/4
	〃	Pイ4	351	Ⅲ A Ⅱ	15.8	2.3	12.0	△	全面ミガキ（内面磨耗か）。体部連続ミガキ。外底ヘラ切痕残る。	5YR6/6橙	並	並	細	0.5	赤チガ			軟	1/4 弱
	〃	Pハ2	352	杯 A Ⅰ	17.4	3.0	14.6	△		5YR6/8	並	多	0.5	2.0	チ赤			軟	底 1/6
	〃	Pイ4	353	Ⅲ A	18.0				口縁連続ナデ、外面ケズリ。	7.5YR8/6 黄橙	やや密	やや少	細	細	赤ガチ		搬入品。	硬	1/8
	〃	Pハ6	354	Ⅲ A					口縁連続ナデ、外面下半ケズリ。	7.5YR7/6 橙	密	少	細	1.0	赤チ雲		搬入品。	硬	断片
	〃	Pロ3	355		13.7	3.2	7.7		回転ナデ後、粗い連続ミガキ。内外立上り部に弱い段。	7.5YR7/6 橙	密	並	細	細	チ赤ガ				1/4
	〃	Pイ4	356	杯 A Ⅳ			6.2		全面ミガキ（外底含む。）	10YR8/4 浅黄橙	並	並	0.6	6.0	チガ				底 9/10
	〃	Pロ3	357		14.5	2.7	8.8	やや△	回転ナデ痕残す。内外粗い連続ミガキ。外面中位幅広の連続ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	少	細	細	赤チガ		断面10YR8/4 浅黄橙。		1/4
	〃	Pハ5	358	杯 A Ⅱ	15.0	3.5	9.7	×	磨耗・剝離により、調整不明。	2.5YR6/8 橙	密	やや少	細	0.8	チ長赤ガ				1/6
	〃	Pロ1	359	杯 A Ⅱ	15.0	2.9	9.4	△	外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	やや密	並	細	1.0	チ赤ガ				底 1/7 弱
	〃	Pハ3	360	杯 B			8.2	△	内面ミガキ。	7.5YR7/6 橙	やや密	並	細	細	チ赤ガ			硬	底 5/6 強
	〃	Pハ3	361	Ⅲ B		1.8		△		5YR6/6橙	密	並	細	細	赤チガ				断片
	〃	Pロ5	362	Ⅲ B-2	19.1	3.0	12.0	×		5YR7/8橙	密	並	細	1.5	赤チガ			軟	底 1/7
	〃	Pハ6	363	蓋	22.5			△	天井外面回転ケズリ。内外ミガキ。	5YR6/6橙	密	並	細	1.0	チ赤ガ			硬	1/9
	〃	Pハ3	364	蓋	28.6				外面ケズリ後、分割ミガキ。	5YR7/6橙	密	並	細	1.2	チ雲赤		搬入品。	硬	1/10
須恵器	〃		365	Ⅲ A Ⅰ	19.2	2.0			外底ナデ。	2.5Y7/1 灰白	並	並	細	1.0	チ赤				底 1/9
	〃	Pハ6	366	杯 A Ⅲ	11.9	3.1	10.0		内底中央ナデ。外底ナデ、平行圧痕。	7.5Y6/1灰	並	並	細	1.2	長チ黒		内外火襷。		底 1/2 弱
	〃	Pイ4	367	杯 A Ⅱ	14.0	3.6	8.7	△	内底回転ナデ痕、外底ヘラ切痕。	5Y7/2灰白	並	やや多	細	1.1	チ赤			軟	1/3
	〃	Pイ4	368	杯 A Ⅱ	14.4	3.2	10.4	△		2.5Y6/3 にぶい黄	並	多	細	1.0	チ赤			軟	底 1/12
	〃	Pイ4	369	杯 B Ⅱ			10.0		外底ナデ。	N6/0灰	並	やや多	細	4.5	長黒				底 1/4
	〃	Pハ5 掘方床	370	蓋					天井外面回転ケズリ。内面ナデ。	N7/0灰白	並	並	0.7	1.2	チ黒				
	〃	Pハ5	371	蓋	18.6					N7/0灰白	密	並	細	細	チ黒				1/13
	〃	Pイ5	372	鉢	28.0			△	外面回転カキ目残る。口縁端部強い回転ナデ。	2.5Y8/1 灰白	並	多	細	1.5	チ			軟	1/6 強
土師器	〃	Pヘ3	373	甕					口縁内面粗い横ハケ。	10YR7/4 にぶい黄橙	密	多	0.5	1.1	英チ			硬	断片
土師器	SB22	P9	378	杯 A Ⅳ	9.6	4.0	5.2	△	内外回転ナデ後、ミガキ。	5YR6/6橙	並	多	0.5	1.5	チガ赤			硬	1/4
	〃	P9	379	杯 A Ⅲ	12.8	3.7	10.1	×	内外ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	多	細	3.0	チ赤ガ				底 1/5
	〃	P9	380	杯 A Ⅱ	14.2	3.0	10.1	△		10YR8/4 浅黄橙	並	並	0.8	2.0	チ赤ガ				1/6
	〃	P8	381		14.8					10YR7/3 にぶい黄橙	密	多	細	細	チガ		外面と口縁内面黒変。		1/4

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SB22	P9	382	高杯A				×	脚部面取り。	7.5YR7/6 橙	密	やや少	0.6	1.5	チ赤			やや軟	
	〃	P12	383	高杯B				△	杯部内面ミガキ。	7.5YR6/6 橙	並	多	細	1.2	チ赤ガ				
	〃	P8	384	Ⅲ A Ⅱ	14.9	1.6	10.5		体部回転ナデ。外底ナデ。	10YR7/2 にぶい黄橙	密	並	細	1.0	チ赤				底 1/6
	〃	P5	385	杯A	13.2	2.5	10.0	×	外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	密	少	細	細	チ赤				底 1/5
	〃	P11	386	Ⅲ A	15.8	1.8	13.1		体部外面ミガキ。	5YR6/6橙	密	並	細	0.7	チ赤ガ		内面10YR7/4。	硬	1/10 強
	〃	P9柱痕	387	Ⅲ A	19.3			△		5YR7/8橙	密	少	細	細	チ赤			軟	1/10
	〃	P9	388	蓋	17.0	2.4				5YR6/6橙	並	多	0.5	5.0	チ赤				1/2
	〃	P12	389	蓋				×		10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	多	細	細	チガ赤				
須恵器	〃	P13	390	Ⅲ A	17.2	2.2		△		2.5Y7/3 浅黄	やや粗	並	0.5	2.2	チ赤			軟	1/12
	〃	P13	391	Ⅲ A	17.5				外底ナデ。	7.5Y灰白	並	やや多	細	0.8	チ				1/8 強
	〃	P12	392	杯B Ⅲ			9.4	△	内外底ナデ。	7.5Y6/1 灰白	やや粗	並	細	1.0	長				底 1/3
	〃	P9	393	蓋	14.1	2.1			外面粘土紐痕。内面は、周縁部回転板ナデ、他はナデにより平ら。	N7/灰白	並	並	細	2.0	長黒		外面降灰。		完
	〃	P9	394	蓋	19.8	1.8			内面周縁部擦痕。	7.5Y7/1 灰白	並	多	細	5.0	チ黒				1/2
土師器	〃	P11	395	甕	19.5				外面胴部タタキ、頸部に細かい横ハケ。内面胴部圧痕、口縁～頸部細かい横ハケ。	2.5Y7/4 浅黄	並	やや多	1.0	5.0	泥砂チ(円)ガ	Ⅰ	被熱、外面剝離。		1/6
土師器	SA4	P7	397	Ⅲ A	16.1			×		7.5YR7/8 黄橙	密	並	細	1.1	チ赤			軟	1/3
	〃	P4	398	Ⅲ A	18.2	1.2	15.0	△	口縁部と内底に回転ナデ痕。	5YR7/6橙	密	並	細	2.1	チ赤ガ				底 1/6 弱
	〃	P4	399	杯A	12.3	2.8	8.2	△	体部回転ナデ痕。	5YR7/6橙	密	やや少	細	1.0	チ赤				底 1/2
	〃	P4	400	杯A	13.6	2.8	8.2	△	外底ヘラ切痕。	7.5YR6/6 橙	並	やや多	細	2.0	チ赤ガ				半完
	〃	P4	401	杯A	12.5	2.5	7.6	△	体部回転ナデ痕。	5YR7/6橙	密	並	細	細	チ赤				底 1/5
	〃	P4	402	杯A			8.8		外底ナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	0.5	チ赤ガ				底 1/6 弱
	〃	P4	403	蓋	16.4			△		10YR8/4 浅黄橙	並	並	細	0.5	チガ				1/8
須恵器	〃	P4	404	Ⅲ A	16.4	1.7	13.4	△		10YR8/4 浅黄橙	粗	多	0.8	3.0	チ赤			軟	1/7
	〃	P4	405	杯	12.0					5Y6/1灰	並	並	細	細	チ		外面自然釉。		1/7
	〃	P7	406	杯	12.4			×		7.5YR8/6 浅黄橙	並	多	細	1.2	長チ赤		底部はやや還元色。	軟	
	〃	P4	407	蓋	17.4				天井内面ナデ。	N6/灰	並	多	細	8.0	長英チ		やや歪み。内面は口縁部のみ濃色。	硬	1/7
	〃	P4柱痕	408	壺	5.8	7.2	7.0	外面△		N7/灰白	並	多	0.5	5.0	長英黒チ		内面にも降灰。		1/2
土師器	〃	P4	409	甕	14.4				体部外面粗目の縦ハケ。口縁部横ナデ。頸部内面に上方への擦痕。	10YR6/4 にぶい黄橙	並	多	0.7	1.5	チ	Ⅱ		硬	1/7
製塩土器	〃	P4	410							5YR7/4 にぶい橙	やや粗	極多	1.0	10.0	泥砂チ		外面変色。		
須恵器	〃	P4	411	甕	34.0				口縁部外面に片刃彫状の文様。	N7/灰白	並	並	細	0.5	長チ				1/15
須恵器	SA9	P3	412	蓋	14.8				外面の1/2強に回転ケズリ。内面、周縁部回転板ナデ、天井部ナデ。	5Y7/1灰白	粗	多	0.5	0.9	英長	Ⅰ			1/5
土師器	SA10	P2	413	杯A	15.0	3.7	11.0	△	内外回転ナデ仕上。外底ヘラ切痕。	7.5YR8/6 黄橙	密	並	細	1.3	チ赤ガ				1/2
土師器	SA11	P7	414	Ⅲ A	16.8	2.3	12.1	×	全面ミガキとみられる。	7.5YR6/6 橙	並	やや多	細	1.0	チガ				1/8
	〃	P6下層	415	碗A	12.2	3.4	6.7	×	内外回転ナデ。ミガキの可能性。	7.5YR6/4 にぶい橙	並	多	細	2.0	チガ赤				1/7

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SA11	P5	416	杯B	15.4	4.0	11.2	×	内外ミガキ。	5YR7/6橙	密	並	細	1.0	チ赤ガ				底1/9
	〃	P5	417	杯A	14.4	3.7	9.2	×	全面赤彩。内底指頭圧痕。体部外面、連続ナデ、下方接合痕。	2.5YR6/8橙	粗	多	0.4	2.0	英長チ	Ⅰ	素地10YR7/4。		1/5
	〃	P2	418	杯	17.0			△	内外赤彩、ミガキ。外面下部ケズリ。	2.5YR5/6明赤褐	並	並	細	0.8	英長	Ⅰ	素地10YR8/3。	硬	1/7
	〃	P2	419	杯C	19.0			△	内外赤彩、ミガキ。外面下半断続ケズリ。	5YR6/6橙	並	やや多	0.4	1.8	英長チガ	Ⅰ	素地10YR7/4。	やや硬	1/13
	〃	P2	420	杯C	22.2			△	内外赤彩、ミガキ。外面下半断続ケズリ。	2.5YR5/6明赤褐	並	並	細	1.5	英チ	Ⅰ	素地10YR8/1。	硬	1/18
	〃	P2	421	杯	16.4			△	内外赤彩、ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	1.7	英チ赤	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	1/12
	〃	P2	422	Ⅲ B-2	22.0	4.2	12.7	×	内外赤彩。杯部内面ミガキ。杯部外底回転ケズリ。	10YR7/3にぶい黄橙	並	並	細	0.8	英長ガ	Ⅰ	素地10YR8/2。		底1/4強
	〃	P2	423	高杯				×	全面赤彩(脚内面上方除く)。	2.5YR5/8明赤褐	やや粗	やや多	細	4.0	英長チガ	Ⅰ	素地10YR8/2。		
須恵器	〃	P6	424	Ⅲ A	18.4	2.8	14.8		内外底ナデ。外底繊維圧痕。	7.5Y6/1灰	並	やや多	細	1.0	チ赤		内面やや酸化色。全体に歪み。		底1/2
	〃	P6	425	杯B			10.3	△		5Y6/1灰	やや粗	やや多	細	1.0	長チ赤				底1/7
	〃	P1	426	蓋	21.8				内面周縁部回転ケズリ。	5Y6/1灰	並	並	細	細	チ黒		外面自然釉。	硬	1/7
土師器	SK16		427	杯C	14.8				全面赤彩。内面に放射暗文。外面断続ケズリ。体部外面に接合痕。	2.5YR4/6赤褐	やや粗	やや多	0.4	2.0	英長ガ	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	1/9
	〃	下層	428	Ⅲ B-1			15.0		全面赤彩。	2.5YR5/6明赤褐	やや粗	やや多	細	1.5	英長ガ	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	底1/8弱
	〃		429	高杯A					外面ケズリ痕。	10YR7/3にぶい黄橙	並	並	細	1.5	赤チガ				
須恵器	〃		430	Ⅲ A	17.0	2.1	15.0		外底ナデ。	7.5Y6/1灰	並	並	細	2.0	長チ黒				1/10
	〃		431	杯A Ⅳ	9.8	3.6	6.2	△		7.5Y6/1灰	やや粗	多	0.5	4.0	黒チ				口縁1/7 底1/3
	〃		432	杯B Ⅲ			9.0			N7/灰白	粗	多	細	0.8	英長黒	Ⅰ		硬	底1/4
	〃	下層	433	杯B Ⅰ	18.4	4.9	13.7		内底板ナデ後、ナデ。外底ケズリか。	5Y8/2灰白	並	並	0.5	1.0	チ黒				底1/8
	〃		434	蓋	14.0					10Y5/1灰	粗	多	0.5	0.5	英長黒		外面自然釉。	硬	
	〃		435	蓋	14.9			△		5Y6/1灰	やや粗	やや多	0.5	0.8	チ			軟	
	〃		436	蓋	15.4	2.6			天井外面2/3弱に回転ケズリ。内面、周縁部擦痕、天井ナデ。	7.5Y7/1灰白	並	やや多	0.5	1.5	英チ	Ⅰ			1/4
	〃		437	蓋					内面ナデ。	7.5Y7/1灰白	密	並	0.5	2.0	長黒			硬	
土師器	〃		438	甕					内面ケズリ後ハケ。	7.5YR6/4にぶい橙	粗	多	1.0	2.0	チ		外面赤変、ス。	硬	
製塩土器	〃		439		14.4			△	外面指頭圧痕。	10YR7/2にぶい黄橙	粗	多	1.5	4.0	泥チ(円)				1/9
須恵器	〃		440	甕					内面、同心円痕をナデ消す。	N6/灰	並	並	細	5.0	長				
土師器	SK18		444	Ⅲ				△	内外赤彩。	5YR6/6橙	並	やや多	0.5	1.0	英チ赤	Ⅰ	素地7.5YR8/2。		断片
	〃	上層	445	杯B					全面赤彩。	5YR6/6橙	並	並	細	細	英チ	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	断片
	〃		446	杯			9.8		外面立ち上りに擦痕。内外底ナデ。	N7/灰白	並	多	0.5	1.0	英チ赤	Ⅰ		やや軟	底1/3
	〃		447	杯	12.4					5Y7/1灰白	やや密	やや少	細	2.0	チ			硬	1/9強
	〃		448	杯B Ⅲ			8.4		外底ナデ。	5Y7/1灰白	並	並	細	5.0	チ黒				底1/2弱
	〃		449	杯B Ⅱ			11.0			2.5Y7/1灰白	並	やや多	細	2.0	チ				底1/10
	〃		450	杯B Ⅰ			13.2		外底ナデ。	7.5Y6/1灰	並	並	0.5	0.5	チ			硬	底1/5
	〃		451	蓋	15.2					5Y7/2灰白	やや粗	多	細	1.0	英チ	Ⅰ			1/13
	〃		452	蓋	18.6			△		5Y8/1灰白	並	少	細	1.0	チ			軟	1/16

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SK18		453	甕				△		10YR8/3 浅黄橙	並	多	細	4.0	英(角)砂・チ(円)	Ⅰ			断片
	〃	上層	454	甕	23.6			△		10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	多	1.0	5.0	英チ雲	Ⅲ	搬入品。	硬	
製塩土器	〃		455					△		7.5YR7/6 橙	並	多	1.0	2.0	チ砂赤				断片
須恵器	〃		456	甕					外面タタキ後、一部回転カキ目。内面当具痕をナデ消す。	5Y7/1灰白	やや粗	並	細	1.0	英長チ				破片
	〃		457	甕					外面平行タタキ後、弱いナデ。	N6/灰	密	並	細	2.0	長チ			硬	破片
土師器	SK20		458	ⅢA	19.4	1.9	17.1	△		5YR7/6橙	密	少	細	1.5	チ赤			硬	底 1/11
	〃		459	杯A			12.7	△	全面ミガキ。	2.5Y8/3 淡黄	並	多	細	細	チ赤				底 1/3
	〃		460	杯	20.1				内外赤彩、幅広のミガキ。	2.5YR6/6 橙	並	多	0.5	1.0	チガ		素地10YR8/2 灰白。	硬	
	〃	Ⅰ層	461	杯B				△	内面赤彩、ミガキ残る。	5YR5/6 明赤褐	並	並	細	0.8	チ		素地5YR7/8。	軟	
	〃	Ⅱ層下	462	蓋	18.0			△	内外赤彩。外面ミガキ残る。	2.5YR6/6 橙	並	多	0.5	2.0	チ	Ⅰ	素地10YR8/2。		1/8
須恵器	〃		463	Ⅲ	20.0	2.0		△		5Y8/1灰白	やや密	並	細	1.0	英チ			軟	1/9
	〃		464	杯A			7.6	△		5Y7/1灰白	密	やや少	細	1.0	チ黒			軟	底 1/6
	〃		465	杯BⅣ			8.2			5Y8/1灰白	並	やや多	細	細	英チ	Ⅰ		やや軟	底 1/4 弱
	〃		466	杯BⅢ	12.9	4.0	9.2		外底断続ケズリ後、ナデ。体部外面接合痕。	N6/灰	並	並	細	1.5	長英黒		外面暗色、光沢。	硬	1/4 強
	〃	Ⅱ層下	467	杯BⅢ			8.7		内外底ナデ。	7.5Y6/1灰	密	並	細	細	英長			硬	底 1/11
	〃		468	杯B			9.0		外底ナデ。	7.5Y6/1灰	極密	少	細	細	チ黒			硬	底 1/8
	〃		469	杯BⅡ	15.6	5.5	10.6	△		5Y6/1灰	やや密	並	細	2.0	赤長英		内面5YR5/4 にぶい赤褐		1/4
	〃		470	杯BⅡ			10.0		接地面に繊維圧痕。	5Y6/1灰	並	並	細	1.5	チ			硬	底 1/8
	〃		471	蓋	13.0				天井外面1/2に回転ケズリ。内面、周縁部擦痕、天井部ナデ。	N7/灰白	並	多	0.5	2.0	黒チ			硬	1/3
	〃		472	蓋	14.4			△	内面、周縁部擦痕、天井部平坦。	7.5Y7/1 灰白	やや粗	多	細	1.0	英チ	Ⅰ		やや軟	1/4 強
	〃		473	蓋	14.0	3.2			天井外面回転ケズリ、内面ナデ。調整丁寧。	N6/灰	密	並	0.5	1.0	長英				1/5
	〃	上層	474	蓋	15.0				天井外周外面に断続ケズリ。カエリは貼付。	5Y8/1灰白	密	並	0.7	0.7	英長				1/8
	〃		475	蓋	17.3				内外丁寧な回転ナデ仕上。	N7/灰白	密	並	細	0.5	英長			硬	1/9
	〃		476	蓋					内面平滑。	7.5Y7/1 灰白	密	並	細	1.0	黒長			硬	
	〃		477	蓋					天井外面回転ケズリ。内面周縁部擦痕。	7.5Y7/1 灰白	並	やや多	細	1.0	英チ	Ⅰ			
	〃	下層	478	蓋	20.4				天井内面ナデ。	N6/灰	並	並	細	細	チ黒			硬	1/9
	〃		479	蓋					天井外面ケズリ。	2.5Y6/1 黄灰	密	少	細	細	英長		内外自然釉。	硬	1/4
	〃		480		24.6			△		5Y8/1灰白	並	並	細	1.5	チ赤			軟	
	〃		481	高杯			13.0		裾端部に強い回転ナデ。	2.5Y8/3 淡黄	密	やや多	細	1.0	英チ	Ⅰ			底 1/7
	〃	上層	482	高杯			14.0			5Y7/1灰白	密	多	細	1.0	英チ	Ⅰ			底 1/4
	〃		483				10.6	△		5Y8/1灰白	並	多	0.5	0.5	英	Ⅰ		やや軟	底 1/8
	〃		484						上胴部に凹線。	N7/灰白	密	少	細	細	黒長		胴径12.0cm。	硬	胴 1/4
	〃		485	壺						N8/灰白	並	並	細	1.5	チ黒		胴径18.4cm。		
	〃		486	壺	16.1				内外とも整美な回転ナデ。	N7/灰白	並	並	細	2.5	チ黒		肩部内面銀色化。肩部接合部で剥離。		
	〃		487	甕	22.8				上胴部外面細目のタタキ痕。	2.5Y7/1 灰白	並	並	細	細	黒チ		全ての上面に自然釉。		

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK20		488	甕					外面タタキ→ナデ→連続横ハケ。内面、当具痕をナデ消す。	N7/灰白	密	並	細	4.0	チ				
	〃	Ⅱ層・下層	489	甕	23.6				外面タタキ→連続横ハケ。内面当具痕→弱いナデ。	7.5Y6/1灰	密	やや少	細	4.0	チ		胴径40.2cm。		頸2/3
製塩土器	〃	Ⅱ層・下層	490					△		5Y8/1灰白	並	多	1.0	2.5	砂チ				断片
黒色土器	SK21		494					△	内面ミガキ。	10YR8/4 浅黄橙	並	並	細	細	チ赤ガ		内面黒色。断面褐灰色。		
	〃		495	Ⅲ A	17.6	2.0	15.0	△	全面ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	並	細	細	チ赤				底1/9
	〃		496	Ⅲ A	19.7	1.3	16.8	△		7.5YR8/6 浅黄橙	並	並	細	細	赤チ				1/11
	〃		497	Ⅲ A		1.4		△		10YR7/4 明黄褐	並	少	細	細	赤チガ			軟	断片
	〃		498	Ⅲ A				△		7.5YR7/8 黄橙	密	少	細	細	長赤			軟	断片
	〃		499	Ⅲ A				△		2.5YR6/6 橙	密	少	細	細	赤チ			軟	断片
	〃		500	杯A	13.4			△	内面ミガキ残る。	5YR6/6橙	並	並	細	1.0	チ赤				1/12
	〃		501	杯	13.4			△		5YR7/6橙	密	並	細	0.8	チ赤		口縁部のみ明色。	軟	1/9
	〃		502	杯	12.8			△	外面回転ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/8強
	〃		503	杯	15.2				内外粗いミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙	密	並	細	細	チ				1/9
	〃		504	杯A			9.6	△		10YR8/4 浅黄橙	並	並	細	細	チ赤				底1/8
	〃		505	杯A			9.8	△		7.5YR8/4 浅黄橙	並	並	細	1.0	赤チ				底1/6
	〃		506	杯A			11.5	△	全面ミガキ。	10YR8/3 浅黄橙	並	並	細	3.0	チ赤ガ				底1/8
	〃		507	杯B			12.4			7.5YR7/6 橙	並	並	細	0.5	チ				底1/8
	〃		508	杯B						7.5YR7/6 橙	密	少	細	細	赤チガ				底1/8
	〃		509	蓋	16.9			△		2.5YR6/8 橙	密	並	細	1.0	チ赤ガ			軟	1/9
	〃		510	Ⅲ B			13.5	△		10YR8/3 浅黄橙	密	少	細	細	チ赤ガ			軟	底1/11
	〃		511	壺	9.1			△	外面ミガキ。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	やや多	細	細	チガ		黒斑。	硬	1/9
須恵器	〃		512	Ⅲ A						N6/灰	並	並	細	0.5	チ黒			硬	断片
	〃		513	Ⅲ A				△		2.5Y8/2 灰白	並	並	細	1.0	チ赤			軟	断片
	〃		514	Ⅲ A	16.5	1.9	14.0			2.5Y7/4 浅黄	密	並	細	細	チ		口縁端部が焼成不良。		1/14
	〃		515	Ⅲ A	18.0			△		2.5Y8/2 灰白	やや粗	並	細	細	チ			軟	1/9
	〃		516	杯AⅣ	10.2	3.6	6.4	△		10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	3.0	チ赤			特に上方軟	底1/1
	〃		517	杯	13.7			△		2.5Y7/2 灰黄	並	少	細	細	チ赤			軟	1/11
	〃		518	杯	13.6					N6/灰	密	並	細	細	チ黒		口縁のみセピア色。	硬	1/9
	〃		519	杯	13.7			△		5Y7/1灰白	密	やや少	細	細	チ黒		口縁部内面がやや暗色。	軟	1/9
	〃		520	杯	13.0					5Y7/1灰白	密	少	細	細	チ黒		口縁のみ濃色。		1/11
	〃		521	杯	16.8				口縁部の回転ナデが強い。	10YR7/4 にぶい黄橙	密	少	細	細	チ赤			特に口縁軟	1/8弱
	〃		522	杯AⅢ			8.7	△		2.5Y7/1 灰白	密	少	細	細	チ赤			軟	底1/8
	〃		523	杯A			9.2	△		7.5Y6/1灰	並	並	細	2.0	チガ			軟	底1/4
	〃		524	杯AⅢ			8.2		内外底ナデ。	2.5Y7/1 灰白	並	やや多	0.5	2.0	英チ黒	Ⅰ		やや軟	底1/7
	〃		525	杯AⅢ			7.0		外底ナデ。	N5/灰	密	やや少	細	1.0	チ黒		518と同様の胎土・焼成。	硬	底1/2弱

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK21		526	杯AⅡ			11.0		内外底ナデ。内底平滑。	7.5Y6/1灰	極密	極少	細	細	長黒			硬	底1/7
	〃		527	杯BⅢ			8.7		内外底ナデ。	N6/灰	並	並	細	2.0	チ赤			硬	底1/8
	〃		528	杯B			9.2		内外底ナデ。	N6/灰	並	やや多	0.5	3.0	英チ黒	Ⅰ			底1/5
	〃		529	杯BⅢ			8.4		外底ナデ。	10Y6/1灰	やや密	並	細	4.0	長チ		内外発色差あり。	硬	底1/2弱
	〃		530	蓋	15.6				天井外面ナデ、内面周縁部擦痕。	N5/灰白	やや密	並	細	2.0	長黒				1/7
	〃		531	蓋	17.1				天井外面は幅広の回転ケズリ。内面ナデ。	7.5Y7/1灰白	密	並	細	4.0	チ				天井1/9
	〃		532	壺					下胴部外面回転ケズリ。	10Y4/灰	並	やや多	0.7	4.0	チ			硬	底1/4
土師器	〃		533	甕				外面△	内面、体部外面に粗く強い横ハケ。	10YR7/4にぶい黄橙	並	やや多	1.0	3.5	チ砂ガ	Ⅰ			断片
	〃		534	甕	25.2				口縁内面横ハケ。	10YR6/4にぶい黄橙	やや粗	多	0.5	1.5	チ	Ⅱ		硬	断片
製塩土器	〃		535							5Y7/1灰白	並	多	1.0	3.0	砂チ(円・角)				断片
	〃		537	坩堝	10.2				外面指頭圧痕、内面比較的平滑。胎土にスサ混入。		粗	多	1.0	2.0	英長チ		口縁部内面及び外面の一部に黒～黄色のカラミが付着。注口部付近はにぶい赤色。カラミに気泡。内面と口縁部は熱により硬化、灰白色。外面下半は脆弱化、黄灰色。断面暗灰色。		1/2
須恵器	〃		538	甕	19.4				外面平行タタキ、内面当具痕をナデ消す。	10Y4/1灰	密	並	細	5.0	チ赤		外面自然釉。	硬	1/5
土師器	SK22		539	杯	15.0			△		7.5YR7/6橙	やや粗	やや多	細	1.0	チ赤				1/12
	〃		540	杯B			11.4	△		7.5YR7/4にぶい橙	やや密	やや少	細	細	チ赤			軟	底1/7
	〃		541		19.2				内外ミガキ。	5YR6/6橙	やや密	やや少	細	細	チ赤				1/13
須恵器	〃		542	ⅢAⅡ	16.5	2.1	12.0	△		10YR6/3にぶい黄橙	密	やや多	細	1.0	チ赤			軟	1/4
	〃		543	ⅢAⅠ	18.7		16.0	△		5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	チ			軟	1/14
	〃		544	ⅢAⅠ	19.5		16.3	△		7.5Y8/1灰白	並	やや多	細	細	チ黒			軟	1/10
	〃		545	ⅢAⅠ			15.6			2.5Y7/2灰黄	やや粗	多	0.5	1.0	英長チ	Ⅰ		やや軟	底1/3
	〃		546	ⅢA			18.3	△		5Y7/1灰白	やや粗	並	細	4.0	チ黒			軟	底1/2
	〃		547	杯A			6.9	△		5Y6/1灰	密	並	細	0.6	チ黒			軟	底1/5
	〃		548	欠番															
	〃		549	杯A			9.2		外底ヘラ切未調整。	10Y7/1灰白	並	並	細	細	チ黒		底部が円盤状に剝離。		底3/4
	〃		550	杯AⅡ	14.8	4.0	10.8	△	口縁部に強い回転ナデ。外底ナデ。体部接合痕。	5Y5/1灰	並	多	細	2.0	チ		口縁外面暗色。	軟	1/4弱
	〃		551	杯BⅢ	12.8					2.5Y6/2灰黄	やや粗	並	細	2.0	英チ	Ⅰ			1/5
	〃		552	杯BⅢ	14.0				内面回転板ナデ風。	5Y7/1灰白	やや粗	多	0.5	1.5	英長チ	Ⅰ			底1/8
	〃		553	杯B			8.4	△		2.5Y8/3灰白	やや粗	やや多	細	0.5	英チ黒	Ⅰ		軟	底1/5
	〃		554	杯BⅢ			8.8		内外底ナデ。	2.5Y7/1灰白	やや密	並	細	細	チ黒				底1/4
	〃		555	杯BⅢ			8.7		内外底ナデ。低いが整美な高台。調整丁寧。	N7/灰白	並	並	細	細	英黒		胎土はややガラス化。	硬	底3/4
	〃		556	杯BⅢ			9.0		外底弱いナデ。	10Y6/1灰	密	少	細	0.5	チ黒				底1/3強
	〃		557	杯BⅢ			9.0	△		2.5Y8/1灰白	やや粗	並	細	1.0	英	Ⅰ		軟	底1/7

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK22		558	杯BⅢ			9.4		外底回転ケズリ。	7.5Y7/1 灰白	並	多	細	0.5	英チ	Ⅰ			底 1/4 強
	〃		559	杯B			9.8	△		5Y7/1灰白	やや粗	多	0.5	2.0	英長	Ⅰ		やや軟	底 1/4
	〃		560	杯BⅡ			10.1	△		2.5Y7/2 灰黄	やや粗	並	0.5	0.5	チ赤		内面生焼け。	軟	底 1/7
	〃		561	杯BⅡ			10.2	△		5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	チ赤			軟	底 1/9
	〃		562	杯BⅠ			12.4	△	内底極めて丁寧なナデにより平滑。	2.5Y8/2 灰白	並	並	細	3.0	チ赤			軟	底 1/1
	〃		563	蓋Ⅲ	13.0			△	天井外面ヘラ切痕、外面の1/2強に回転ケズリ。	5Y7/1灰白	並	並	細	3.2	チ黒			軟	1/10
	〃		564	蓋Ⅲ	13.0				外面の4/5に回転ケズリ。	N7/灰白	並	やや多	0.5	2.0	英チ黒	Ⅰ			1/8
	〃		565	蓋Ⅲ	13.0				内面周縁部に擦痕。	2.5Y7/1 灰白	粗	多	0.5	1.0	英チ			硬	1/8
	〃		566	蓋Ⅲ	13.0			×	天井外面回転ケズリ。	2.5Y7/2 灰黄	並	並	細	1.0	チ			軟	1/5
	〃		567	蓋Ⅲ	13.5	2.5			天井内外面ナデ。	N7/灰白	並	やや多	0.5	5.0	長黒チ				半完
	〃		568	蓋Ⅲ	13.3				外面の3/4に回転ケズリ。	5Y6/1灰	並	並	0.5	1.8	チ黒			内面のみ軟	1/5
	〃		569	蓋Ⅲ	13.3	2.6			天井内外粘土紐痕。外面の1/2に回転ケズリ。	2.5Y6/1灰	やや粗	並	0.5	4.0	チ黒				半完
	〃		570	蓋Ⅲ	13.4			×		2.5Y7/2 灰黄	並	並	0.6	2.0	チ赤			極軟	1/8
	〃		571	蓋Ⅲ	13.6			△	天井外面ヘラ切後、2/3に回転ケズリ。天井内面ナデ。	5Y7/1灰白	並	並	細	1.4	チ黒			やや軟	1/7
	〃		572	蓋Ⅲ	13.6			△		2.5Y7/1 灰白	並	並	細	1.2	長チ黒				1/8 弱
	〃		573	蓋Ⅲ	13.7				天井外面ヘラ切後、回転ケズリ。	2.5Y7/2 灰黄	密	並	細	1.5	チ			軟	1/7
	〃		574	蓋Ⅲ	14.0			△		2.5Y8/2 灰白	並	並	細	1.4	チ		内面中央のみ円形に暗色。	軟	1/2
	〃		575	蓋Ⅲ	14.5				外面1/2弱及び内面に回転ケズリ。	N6/灰	並	並	細	0.8	長英黒				1/2
	〃		576	蓋Ⅲ	14.8	1.5			天井外面ヘラ切痕。	N6/灰	並	並	細	1.5	チ黒				1/6
	〃		577	蓋	15.6				外面の1/2に回転ケズリ。天井内面ナデ。	N7/灰白	並	並	細	1.2	チ黒		外面若干の降灰。		1/4
	〃		578	蓋	15.8			△		2.5Y6/1 黄灰	並	並	細	1.0	チ黒			やや軟	1/9
	〃		579	蓋Ⅱ	16.8				天井部、外面回転ケズリ、内面ナデ。	N7/灰白	やや粗	並	細	0.6	黒英チ				1/9
	〃		580	蓋	19.0			△		7.5Y8/1 灰白	粗	多	0.6	1.0	英チ黒	Ⅰ		軟	1/10
	〃		581	蓋Ⅰ	20.9				外面の2/3に回転ケズリ。天井内面平滑。	2.5Y7/2 灰黄	並	並	細	1.0	チ黒			やや軟 特に天井内面	1/9
	〃		582	蓋Ⅰ	21.0				外面の3/4に回転ケズリ。	2.5Y8/2 灰白	並	やや多	細	細	チ赤			軟	1/5
	〃		583	蓋Ⅰ	21.0			△	外面の3/4に回転ケズリ。内面周縁部擦痕。	N6/灰	並	多	0.5	2.1	英長チ黒	Ⅰ	一部胎土が異なる。		1/9
	〃		584	蓋	23.0			△	天井外面回転ケズリ。	5Y7/1灰白	やや粗	多	0.8	1.4	英チ	Ⅰ			1/14
	〃		585	蓋	23.6			△	内面周縁部回転ケズリ。	5Y7/1灰白	やや粗	多	0.4	0.8	英チ黒	Ⅰ		やや軟	1/9
	〃		586	蓋	25.4			×		2.5Y7/2 灰黄	並	やや多	0.5	2.0	英チ			軟	1/9
	〃		587	蓋	28.4			×		5Y7/2灰白	並	多	0.6	3.5	英チ	Ⅰ		軟	1/7
	〃		588	蓋					天井外面回転ケズリ。内面周縁部擦痕、中央部ナデ。	2.5Y7/1 灰白	並	多	0.5	1.5	チ		外面若干自然釉。	やや硬	
	〃		589	蓋				△	天井、外面回転ケズリ、内面ナデ。	5Y7/1灰白	粗	多	0.6	2.0	英チ	Ⅰ		軟	
	〃		590	蓋					天井、外面回転ケズリ、内面ナデにより平ら。	5Y7/1灰白	並	やや多	0.4	1.2	英チ		内面中央ヘラ記号。	やや軟	
	〃		591	蓋	13.4					2.5Y6/1 黄灰	並	並	細	細	英チ			硬	1/10

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK22		592	高杯				△		2.5Y8/3 淡黄	密	やや少	細	細	チ			軟	
	〃		593	高杯			11.0	△		2.5Y8/1 灰白	粗	多	0.5	2.1	英チ	Ⅰ		やや軟	底 1/8
	〃		594	鉢	27.0				内面及び口縁部、整美な仕上げ。	5Y6/1灰	並	並	細	2.0	チ黒				1/8
	〃		595	壺	4.4					N6/灰	並	並	0.5	1.0	長チ		頸部接合部で剝離。		頸 2/3
土師器	〃		600	甕	20.2			△	上胴部外面、口縁部内面に粗いハケ痕。	7.5YR7/4 にぶい橙	並	多	0.7	4.0	チ(円・角)赤ガ	Ⅰ′	外面と上胴部の一部にススケ。		1/7
	〃		601	甕	27.2			×	上胴部、口縁内面に粗いハケ痕。	5YR6/4 にぶい橙	やや粗	多	0.5	2.0	チ(角・円)赤	Ⅰ′	口縁内面赤変。		頸 1/7
	〃		602	甕	22.2				上胴部外面、頸部内面に非常に粗く強いハケ目。口縁部内面から頸部外面まで横ナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐	粗	多	細～1	7.0	英長チ金雲	Ⅲ	搬入品。	硬	1/7
須恵器	〃		603	甕	24.2			△		5Y7/2灰白	並	多	細	1.5	チ			軟	1/15
	〃		604	甕				△	外面タタキ、内面同心円当具痕を消す。	5Y8/1灰白	並	並	細	0.6	チ黒			軟	
土師器	SK27	上層	605	Ⅲ A	17.6				全面連続ミガキ。	5YR6/6橙	密	やや少	細	0.7	チ赤ガ				1/16
	〃	下層	606	Ⅲ B			18.0		内底、中心からほぼ放射状と周縁に沿う断続ミガキ。	5YR7/6橙	並	並	細	1.1	チ赤ガ		断面10YR7/3。		底 1/5
	〃	上層	607	杯	10.0			△	回転ナデ後、幅広の粗い連続ミガキ。	7.5YR8/6 黄橙	並	並	細	1.2	チ赤ガ				1/7
	〃	上層	608	杯A Ⅳ			5.5	△	全面ミガキ、体部連続ミガキ。	7.5YR8/4 浅黄橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				底 1/1
	〃	下層	609		13.8			外面△	内外、回転ナデ後、粗い連続ミガキ。	7.5YR6/6 橙	やや密	並	細	細	チ赤ガ				1/9
	〃	上層	610	杯A			10.5	△	内面ミガキ認む。	5YR6/6橙	並	並	細	1.2	チ赤ガ		化粧土か(一部剝離)。素地10YR8/4。		底 1/5
	〃	下層	611	杯A			8.4		体部、粗い連続ミガキ。外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	やや密	並	細	1.3	チ赤ガ				底 1/8
	〃	上層	612	壺			6.8	×	外底ヘラ切痕。外面擦痕。	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	やや多	細	1.0	チ赤ガ				底 1/3
	〃	下層	613	杯B			8.8	△	内底ミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	細	チ赤ガ				底 1/8
	〃	下層	614	杯B	17.4				体部外面分割ミガキ、内面ハケ痕残る。	5YR7/6橙	密	並	細	1.0	チ金雲赤		搬入品。		1/9
	〃	上層	615	杯B	20.2	6.9	11.4	×	体部外面、回転ナデ後ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	並	0.5	2.7	チ赤ガ				底 1/3
	〃	下層	616	杯B			13.4		内底周縁に押圧痕。内面僅かにハケ痕残る。	7.5YR7/6 橙	密	並	細	0.7	チ金雲閃赤		搬入品。	硬	底 1/6
	〃	上層	617	蓋	17.1			△	内外ミガキ。	7.5YR6/6 橙	並	並	細	細	チガ赤				1/15
	〃	上層	618	蓋				△		7.5YR6/6 橙	並	並	細	1.2	チ赤				
	〃	下層	619	高杯	20.2			△	杯部内外幅広の連続ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	やや多	細	1.0	チ赤ガ				1/8
	〃	上層	620	高杯			18.3		裾部ミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/8
	〃	上層	621	高杯A				△	脚部外面面取り。	10YR7/4 にぶい黄橙	密	並	細	細	チ赤ガ				
	〃	上層	622	高杯A					脚部外面上方へのケズリ、内面シボリ目。	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	並	細	2.5	チ赤ガ				
須恵器	〃	上層	623	Ⅲ A Ⅱ	15.9	2.2	13.0		内外回転ナデ痕顕著。内外底ナデ。	5Y6/1灰	並	並	0.4	4.0	チ黒		口縁外面のみ焼成良好。	やや軟	1/3
	〃	上層	624	Ⅲ A Ⅱ	16.0				外底ナデ。口縁は一度屈曲して開く。端部内面に弱い沈線。	N6/灰	並	並	細	1.0	チ黒				1/11
	〃	上層	625	Ⅲ A Ⅱ	16.7	1.9	14.2	△		5Y7/2灰白	並	やや多	細	1.0	チ赤			軟	1/8
	〃	下層	626	杯A Ⅲ	13.3	3.7	8.4	×	外底ヘラ切痕。	5Y8/1灰白	やや粗	多	細	3.0	チ			軟	半完
	〃	下層	627	杯A	14.4	3.0	9.5	×		5Y8/1灰白	やや粗	並	細	1.9	チ黒		底部暗色。	軟	1/9
	〃	上層	628	杯A Ⅲ			8.2	×		10YR7/3 にぶい黄橙	密	並	細	1.0	チ赤		体部は酸化色。	軟	底 1/6
	〃	下層	629	杯B Ⅱ			10.0	△		10YR6/2灰黄褐	粗	多	0.4	1.0	チ赤			軟	底 1/5
	〃	上層	630	蓋					内面、周縁部擦痕、天井ナデ、滑らか。	N6/灰	密	少	細	1.1	チ黒		外面降灰。		天井 2/3

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
製塩土器	SK27	上層	631							7.5YR7/6 橙	やや粗	多	1.0	3.5	砂泥				口縁片
須恵器	SK28		633	ⅢＡⅠ	18.8			×		5Y7/2灰白	並	多	細	細	チ黒			軟	1/9
	〃		634	ⅢＡⅠ	18.9	2.6	16.2	×	外底ヘラ切痕。	7.5Y7/1 灰白	やや粗	並	細	1.1	チ黒			軟	準完
	〃		635	杯ＡⅢ			8.8	×		7.5Y6/1灰	並	多	細	1.0	チ赤			軟	底1/1
	〃		636	杯ＡⅡ	14.8	4.5		×		5Y7/2灰白	粗	やや多	細	1.0	チ		口縁外面のみ酸化色強し。	軟	1/4
	〃		637	杯	12.7			×		2.5Y8/2 灰白	並	並	0.4	1.5	チ赤			軟	1/9
	〃		638	杯	13.2			×		2.5Y4/1 黄灰	密	並	細	2.0	チ赤		口縁部内外が酸化色。		1/4
	〃		639	杯	15.4			△		5Y8/2灰白	並	やや多	0.4	1.1	チ			軟	1/4
	〃		640	杯ＢⅣ	10.2	4.0	7.6		内外底ナデ。各調整は、丁寧で、仕上がりは整美。	N7/灰白	やや粗	多	細	1.0	チ黒		外面の一部に降灰。		半完
	〃		641	杯ＢⅠ	17.8	5.8	13.0	×		5Y8/2灰白	やや粗	多	細	1.5	英チ黒	Ⅰ		軟	1/2
	〃		642	蓋Ⅲ	12.8			△	外面の2/3に回転ケズリ。内面周縁部擦痕。	5Y7/1灰白	やや粗	多	細	1,3	英チ黒	Ⅰ		軟	1/5
	〃		643	蓋Ⅲ	13.0	1.4			外面の2/3に回転ケズリ。天井内面ナデ、滑らか。	N6/灰	並	並	細	1.0	長チ黒				半完
	〃		644	蓋Ⅲ	14.3	3.2			内面回転板ナデ、天井内外ナデ、内面平滑。	7.5Y6/1灰	並	並	細	1.0	チ黒				1/2
	〃		645	蓋	16.0					N7/灰白	並	多	細	2.0	英チ		外面降灰。	硬	1/8
製塩土器	〃		646		7.2				口縁内面圧痕。	2.5Y8/2 灰白	やや粗	多	1.0	3.5	チ砂(円・角)				1/4
	〃		647		8.0					5Y5/1灰	やや粗	多	0.8	3.0	チ砂(円・角)赤ガ		外面変色。		1/6
	〃		648		8.1				内面口縁より16mm下に凹み。	2.5Y7/4 浅黄	やや粗	多	1.5	4.5	チ砂(円・角)赤				1/5
	〃		649		8.0				口縁端より16mm以下は内面平滑。	2.5Y7/2 灰黄	粗	多	1.0	4.0	チ砂(円・角)赤		内外に植物繊維痕。		1/7
	〃		650		8.2					7.5Y6/1灰	粗	多	1.0	4.0	チ砂(円・角)赤				1/6
	〃		651		8.2					10YR8/3 浅黄橙	やや粗	多	1.0	2.5	チ砂赤		外面ススケ。		1/7
	〃		652		8.1				内面圧痕。	10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	多	0.9	3.5	チ砂(円・角)				1/6
	〃		653		8.4				内面、溝状圧痕、口縁端より16mm以下は平滑。	2.5Y8/2 灰白	並	多	0.8	4.0	チ砂(円・角)黒				1/7
	〃		654		9.2				内面布目。	7.5YR6/4 にぶい橙	粗	多	1.0	12.0	砂チ(円・角)		外面変色。		1/4
	〃		655		9.4				内面圧痕、外面繊維痕。	2.5Y7/2 灰黄	やや粗	多	1.2	3.0	チ砂(円・角)赤				1/5
	〃		656		9.8				内面布目。	10YR7/3 にぶい黄橙	粗	多	0.7	3.5	チ砂(円・角)赤		外面黒斑。		1/5
	〃		657		10.5					10YR8/4 浅黄橙	やや粗	多	1.0	2.5	チ砂(円・角)赤				1/9
	〃		658		10.8					10YR8/3 浅黄橙	やや粗	多	1.2	2.2	チ砂(円・角)		外面一部変色。		1/6
	〃		659		11.2				内面布目。	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	多	0.5	3.5	チ砂(円・角)赤		外面変色あり。		1/5
	〃		660		11.5				内面圧痕、口縁端より16mm以下は平滑。	2.5Y7/3 浅黄	並	多	0.9	4.0	チ砂赤ガ				1/8
	〃		661		15.2				接合痕。	10YR7/6 明黄褐	粗	多	0.7	4.0	チ砂(円・角)赤ガ		外面一部赤変。		1/6
土師器	〃		662	甕	17.1				内外、粗目のハケ。	7.5YR4/3 褐	やや粗	多	1.0	7.0	英チ		外面、赤変、一部ススケ。内面頸部黒色付着物。	硬	1/11

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SK28		663	甕	22.7				口縁内面粗目のハケ。	5YR5/6 明赤褐	並	多	0.5	1.5	英チ赤	Ⅱ		硬	1/21
黒色土器	SK29	床	665	杯					内黒。内面ミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙	やや密	並	細	細	チ金雲閃赤		搬入品。	硬	断片
土師器	〃	〃	666	ⅢA	16.8	1.8	14.0	△	内外連続ミガキ。	7.5YR7/6 橙	やや密	並	細	1.0	赤チ				底 1/10
	〃	〃	667	杯				△	内外回転ナデ後、内面連続ミガキ。	10YR8/3 浅黄橙	やや密	やや少	細	細	チガ			硬	断片
須恵器	〃	〃	668	皿						7.5YR6/3 にぶい褐	並	やや多	細	細	長チ赤			やや軟	断片
	〃	〃	669	杯AⅣ	9.6	3.3	6.5			2.5Y8/4 浅黄	並	やや多	細	1.5	チ			軟	1/6
	〃	〃	670				10.5	×		2.5Y7/2 灰黄	密	並	細	細	赤長			軟	底 1/8
	〃	〃	671	蓋				△		2.5Y8/3 淡黄	密	やや少	細	細	赤チ			軟	断片
	〃	〃	672	蓋	16.9	4.8			天井内面、同心円当具痕をナデ消す、周縁部回転ケズリ。外面に接合痕。	5Y7/1灰白	並	並	細	1.0	チ黒		外面降灰。		半完
土師器	SK30		675	ⅢA	15.8		12.8		全面赤彩。体部回転ナデ後、粗い連続ミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐	並	並	細	細	チガ		素地10YR8/4。		1/3
	〃		676	ⅢAⅠ	18.4	2.1	16.1	△	全面赤彩。回転ナデ。体部外面、密な連続ミガキ。内外底断続ミガキ。内外底、僅かな接合痕又は回転ナデ・ヘラ切痕観察可能。	2.5YR6/8 橙	密	並	細	1.2	英チガ		一部黒斑。素地10YR8/3。		半完
	〃		677	ⅢAⅡ	17.7	2.7	15.1	△	全面ミガキ。体部回転ナデ後、連続ミガキ。	5YR7/8橙	並	並	細	1.5	チ赤		素地10YR7/4。		準完
	〃		678	ⅢAⅡ	16.8	2.3	14.6	△	内面連続ミガキ。内底中央断続ミガキ。	7.5YR7/6 橙	やや密	並	細	1.1	チガ赤		素地2.5Y8/3。		完
	〃	中層	679	ⅢAⅡ	16.7	2.3	14.0	×	全面ミガキ。体部連続ミガキ。外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	やや粗	多	細	2.0	チ赤ガ				1/3
	〃		680	ⅢAⅡ	17.0	3.0	14.7	△	器表は平滑で、ミガキと思われる。外底約4回転のヘラ切痕残す。	5YR6/8橙	密	並	細	2.0	チ赤ガ		螺旋状の粘土紐接合部で剥離。		準完
	〃		681	ⅢAⅡ	18.0	2.3	15.1	×	体部回転ナデ、内面連続ミガキ。外底平行圧痕。	5YR7/6橙	並	並	細	細	チガ		表面は外面と同色化。断面2.5Y8/3。	硬	1/4
	〃		682	ⅢAⅡ	17.7	2.0	14.0	△	全面ミガキ。体部回転ナデ後、粗い連続ミガキ。外底ヘラ切、粘土紐接合痕。	7.5YR7/6 橙	並	多	細	2.0	チ赤ガ			硬	1/3
	〃		683	ⅢAⅡ	17.2	2.7	15.5	△	全面化粧土(又は赤彩)。回転ナデ、外底ヘラ切後、全面ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	細	チ赤		素地2.5Y8/3。部分的に化粧土(赤色風化礫の微細粒含む)垂れる。		完
	〃		684	ⅢAⅡ	16.9	2.3	14.6	×		2.5YR5/8 明赤褐	並	やや多	細	1.5	チ赤ガ		化粧土(石英の揃った微細粒含む)残る。素地7.5YR7/6。	軟	半完
	〃	上層	685	杯AⅢ	13.5	3.0	8.8	△	全面ミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙	並	並	細	2.0	チ赤			やや硬	底 1/4
	〃	上層	686	杯AⅢ	14.0	3.3	9.0	△	体部内外面、連続ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	4.0	チガ		器表のみ橙色化。	硬	1/3
	〃		687	杯AⅡ	15.1	3.7	10.2	△	全面ミガキ。回転ナデ。体部、内底連続ミガキ。外底僅かなヘラ切痕残す。	5YR6/6橙	並	やや多	細	1.2	チ赤				完
	〃	上層	688	杯AⅠ	17.0	3.6	13.7	△	全面ミガキ。体部、内底連続ミガキ。	5YR6/6橙	やや密	並	0.5	1.6	チ赤				1/11
	〃		689	杯A	16.0	3.3	12.2	△	体部回転ナデ。非ミガキ。外底、接合部に押圧、ナデ。	10YR8/4 浅黄橙	並	やや多	0.5	3.0	チ赤		赤斑。黒斑。	硬	準完
	〃		690		16.0			△	杯部内外、連続ミガキ。杯部底ヘラ切。	7.5YR6/4 にぶい橙	やや密	並	0.5	2.5	チ赤ガ		脚接合部より剥離。		1/3
	〃		691	高杯B				×	杯部内面ミガキ、若干ハケ目残る。	7.5YR6/6 橙	粗	並	0.5	4.0	チガ			やや軟	
	〃		692	蓋	19.0	3.1		×	内面連続ミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	並	細	2.9	チガ		剥離顕著。黒色、赤色の変色部あり。		1/3
	〃		693	高杯B	20.9			△	杯部内面ミガキ。脚部シボリ目。	10YR8/4 浅黄橙	密	並	細	2.5	赤チガ				1/10

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK30	中層	694	ⅢAⅢ	13.6	2.0	11.8		内底押圧痕、外底ナデ、平行圧痕。	N5/灰	並	やや多	0.5	3.0	長チ黒		内外火襷。	硬	1/5
	〃		695	ⅢAⅢ	14.5	2.2	11.2	×	外底ヘラ切痕。	5Y8/2灰白	粗	並	0.6	3.5	チ赤			軟	完
	〃		696	ⅢAⅢ	14.6	2.1	12.5		外底ヘラ切痕、平行圧痕、周縁ナデ。	N4/灰	並	並	細	1.8	長チ		内外火襷。	硬	準完
	〃		697	ⅢAⅢ	14.2	2.2	12.6	×		7.5Y7/1 灰白	密	並	細	2.0	長黒		底部中央暗色。	軟	1/2
	〃		698	ⅢAⅢ	14.2	1.9	12.5		体部内面回転横ハケ状痕、内底ナデ。外底ヘラ切→ナデ→平行圧痕。	N6/灰	並	並	細	1.7	長黒				準完
	〃		699	ⅢAⅡ	16.0	2.0	13.8	×	外底ヘラ切痕。	7.5Y6/1灰	やや粗	多	0.7	3.5	長チ赤			軟	1/2
	〃	中層	700	ⅢAⅡ	15.8	2.1	13.5	△	内底ナデ。	7.5Y6/1灰	やや粗	並	細	1.0	長黒		内外火襷。	軟	準完
	〃		701	ⅢAⅡ	15.2	2.5	12.8		外底、ナデ、平行圧痕。	N6/灰	並	やや多	0.5	6.0	長黒				準完
	〃		702	ⅢAⅡ	15.4	2.5	13.0		外底、ヘラ切、平行圧痕。内底粘土紐接合痕。	N4/灰	並	やや多	細	2.0	チ		内外火襷。	硬	準完
	〃		703	ⅢAⅡ	16.1	2.5	14.4		内外底ナデ。	7.5Y5/1灰	並	やや多	細	1.2	長チ黒				準完
	〃		704	ⅢAⅡ	16.0	2.0	14.2	×		7.5Y6/1灰	やや密	並	細	1.0	黒長		内外火襷。	軟	1/7
	〃		705	ⅢAⅡ	16.2	2.6	14.0	×		5Y4/1灰	粗	多	細	1.5	チ		口縁部のみ灰色。内外火襷。	軟	完
	〃		706	ⅢAⅡ	16.7	2.4	13.5	×		5Y7/1灰白	やや粗	並	細	3.0	チガ		外底火襷。	軟	準完
	〃		707	ⅢA	17.4	2.7	12.8	×		7.5Y8/1 灰白	粗	やや多	細	3.0	チ		底部暗色、火襷。	軟	完
	〃		708	杯AⅥ	7.9	3.4	4.9		外底ヘラ切後ナデ、平行圧痕。	10Y5/1灰	並	多	細	3.0	長チ			硬	準完
	〃	中層	709	杯AⅤ	8.6	3.9	5.4		外底中央ヘラ切未調整。回転ナデが口縁上方へ逃げる(回転台右回り)。	N6/灰	密	並	細	1.0	チ黒		口縁外面のみ暗色。		1/2
	〃	上層	710	杯AⅣ	10.4	3.6	6.6		内外底ナデ。	N6/灰	並	やや多	細	1.2	長チ黒			硬	半完
	〃	下層	711	杯AⅣ	10.1	3.5	6.6		内底ナデ、外底中央ヘラ切未調整。	N6/灰	並	多	0.5	3.0	長チ		口縁外面のみ濃色。		1/2
	〃	中層	712	杯AⅢ	11.8	3.8	8.0		内底ナデ、外底ヘラ切後ナデ、口縁内面に接合痕。	N6/灰	並	やや少	細	1.0	黒長		口縁端部外面のみ暗色。		1/2
	〃	中層	713	杯AⅢ	12.2	3.5	8.4		内外底ナデ。	N6/灰	やや密	少	細	2.5	黒長				準完
	〃		714	杯AⅢ	12.8	3.8	8.0	×		N6/灰	並	やや少	細	2.0	黒長			下半のみ軟	準完
	〃		715	杯AⅢ	12.5	4.4	8.8	△	外底ヘラ切後ナデ。	N6/灰	やや粗	多	細	3.0	長チ黒		口縁外面のみ暗色。火襷顕著。	軟	準完
	〃		716	杯AⅢ	12.9	3.6	8.6		底部平坦、外面ヘラ切後丁寧なナデ、平行圧痕。	N5/灰	並	多	細	2.0	長黒チ		火襷。口縁外面のみ暗色。	硬	1/3
	〃		717	杯AⅢ	12.5	3.3	8.4	△	外底中央ヘラ切未調整。	5Y7/1灰白	並	並	細	細	長黒			軟	準完
	〃	上層	718	杯AⅢ	13.0	3.0	8.0	△		7.5Y7/1 灰白	やや粗	多	細	1.5	チ黒			軟	底1/1
	〃	上層	719	杯AⅢ	12.9	3.4	8.9	△	外底ヘラ切後ナデ。	5Y6/2灰オリーブ	やや粗	多	0.5	1.1	長赤チ		外面火襷。	やや軟	1/2
	〃		720	杯AⅢ	12.6	3.9	8.6		内底ナデ。外底ヘラ切後弱いナデ。内面に接合痕。回転ナデが口縁上方へ逃げる(回転台右回り)。	5Y6/1灰	並	並	細	0.9	黒長		口縁のみ暗色。		1/2
	〃	上層	721	杯AⅡ	13.6	3.3	9.4	△		7.5Y6/1灰	並	並	0.5	2.0	長黒		特に下半が暗色、軟質。	軟	1/3
	〃	中層	722	杯AⅡ	13.4	4.1	9.0		外底ヘラ切後ナデ。	N6/灰	並	並	細	0.5	長黒		口縁外面のみ暗色。		1/2
	〃	中層	723	杯AⅡ	13.4	3.4	9.0	×		10YR7/3 にぶい黄橙	やや粗	多	0.5	2.0	長チ赤		下半のみ還元色。	軟	完
	〃		724	杯AⅡ	13.4	3.7	8.0	×		2.5Y7/2 灰黄	粗	多	0.8	2.5	チ赤		下半はやや還元色。	軟	準完
	〃		725	杯AⅡ	13.6	3.8	8.5	×		7.5Y7/1 灰白	並	並	0.5	1.0	黒長			軟	完
	〃		726	杯AⅡ	14.2	3.8	8.8	×		7.5Y6/1灰	並	並	0.5	1.6	黒長			軟	準完
	〃		727	杯AⅡ	14.2	4.2	7.0	×		10Y6/1灰	密	並	細	1.0	黒長チ			軟	半完

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK30		728	杯AⅡ	15.0	3.6	9.7	×		5Y6/1灰	並	並	細	1.2	黒長チ			軟	1/4
	〃		729	欠番															
	〃	上層	730	杯	13.0			△		7.5Y6/1灰	粗	多	0.4	5.0	長赤		体部上半は生焼け。	軟	1/6
	〃		731	杯BⅣ	10.7	4.5	7.0		外面下部に調整に伴う一条の凹線。外底中央にヘラ切痕残す。	N6/灰	密	少	細	1.5	長			やや硬	準完
	〃		732	杯BⅢ			8.8	△	外底中央にヘラ切痕残す。	2.5Y7/2 灰黄	並	多	0.6	1.1	チ赤			軟	底 1/1
	〃		733	杯BⅡ	15.5	7.3	9.2	やや△	外底中央にヘラ切痕残す。	5Y6/1灰	やや粗	多	0.4	2.0	長英チ赤		内面生焼け。		半完
	〃		734	杯BⅡ	16.2	6.9	10.4			5Y7/1灰白	やや粗	多	0.6	3.5	チ黒		特に内面が生焼け。	軟	1/3
	〃		735	杯AⅠ	18.0	4.4	14.6	×		5Y7/1灰	並	並	0.9	2.1	長チ			軟	半完
	〃		736		21.0			×		2.5Y8/2 灰白	並	やや多	細	1.5	赤長チ		外面一部剝離。	軟	1/5
	〃		737	蓋Ⅲ	12.7	2.2			天井外面接合痕、ナデ。内面、極めて平滑、墨痕なし、周縁部回転ケズリ。	N7/灰白	密	少	細	1.5	長黒		内面ヘラ記号。		完
	〃		738	蓋Ⅲ	14.0	2.5			内面、板ナデ・丁寧な断続ナデ後、周縁に回転ケズリ。中央は特に平滑。	N6/灰	並	やや多	0.8	3.0	黒長チ		外面降灰。		半完
	〃	上層	739	蓋	12.4				天井外面ナデ。	7.5Y7/1 灰白	並	極少	細	細	黒長				1/4
	〃		740	蓋Ⅲ	14.0				天井外面粗いナデ。内面、周縁部回転ケズリ、他は丁寧なナデ。	N6/灰	密	やや多	細	2.2	黒チ長		内外で発色差。	やや硬	完
	〃	上層	741	蓋Ⅲ	14.0				内面、周縁部回転ケズリ、他はナデ。	N7/灰白	並	やや多	0.5	1.7	長黒		外面自然釉。		1/3
	〃		742	蓋Ⅲ	14.4				外面、ナデ、平行圧痕。内面、周縁部2～3段の回転ケズリ、中央部平滑。	10Y5/1灰	並	やや多	0.4	4.5	長		一部酸化色。		完
	〃		743	蓋Ⅱ	17.8				天井内面中央は平滑。	N6/灰	密	少	0.5	1.2	長				1/2
	〃	上層	744	蓋Ⅱ	18.0					7.5Y6/1灰	並	多	細	3.2	長		外面、口縁部より13mm以内は明色でやや軟質。	やや軟	1/5
	〃		745	高杯	20.0	10.5	12.6	×	脚部内面746と同様か。	2.5Y7/1 灰白	並	やや多	細	1.2	チ黒			軟	口 1/7 脚完
	〃		746	高杯	21.5	10.1	11.2	×	脚部内面上方横方向ケズリ。	2.5Y7/2 灰黄	並	並	細	1.1	チ赤			軟	半完
	〃		747	鉢	23.6	20.2	16.6		外面、下胴部回転ケズリ、底部、外底断続ケズリ。内底押圧。	5Y5/1灰	並	多	0.6	4.0	チ		外面の3/4のみ還元、他は酸化色、軟・磨耗顕著。	一部軟	半完
土師器	〃		748	甕	23.1				口縁～頸部内面、胴部外面ハケ。胴部内面、ナデ、接合痕。	10YR6/4 にぶい黄橙	粗	多	0.9	6.0	チ砂	Ⅰ	外面下半、若干ススケ、変色。胴径21.8cm。	やや硬	1/7
製塩土器	〃	上層	749		8.6					2.5Y6/2 灰黄	粗	多	0.9	8.0	チ泥			硬	1/7
	〃	上層	750		9.0				内面布目。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	やや多	1.2	4.5	チ(円)泥			やや軟	1/8
	〃		751		9.0					10YR7/3 にぶい黄橙	並	並	1.1	7.5	泥砂チガ			軟	1/13
	〃	上層	752		9.0				内面布目。	10YR7/4 にぶい黄橙	粗	多	細	6.5	チ赤泥			硬	1/6
	〃	上層	753		10.8					10YR7/4 にぶい黄橙	粗	多	1.0	4.0	チ(円・角)泥				1/7
	〃	上層	754		12.0					10YR7/3 にぶい黄橙	粗	多	0.9	3.5	砂チ(円・角)			やや軟	1/5
	〃	中層	755		12.0					10YR8/2 灰白	粗	極多	0.6	6.0	チ赤			硬	1/9
	〃		756		13.2				内面布目。	5Y4/1灰	粗	多	0.7	5.0	赤チ			硬	1/7
	〃		757		13.4					7.5YR7/6 橙	やや粗	多	1.1	10.0	泥チ(円)		口縁外面のみやや磨耗度が低く、暗色。	やや軟	1/5
	〃		759						内面布目、外面、指頭圧痕。	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗	多	細	4.5	チ赤泥			硬	断片

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SK31	上層	760	杯B			10.0	△		10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	並	0.5	1.5	チ赤ガ		高台２次被熱。		底 1/9
土師器	SK32	上層	761	甕	22.8				口縁内面粗目の横ハケ。頸部外面に、ハケ状工具の先端による規則的圧痕。	10YR7/4 にぶい黄橙	粗	多	0.7	1.1	英チ	Ⅱ		硬	1/16
土師器	SK33	下層	762	ⅢAⅡ	16.4	2.8	12.8	×	体部外面ミガキ残る。	7.5YR6/6 橙	やや密	並	細	2.0	チ赤ガ			軟	1/7
	〃	Ⅱ層	763	杯AⅠ	18.4			×		5YR6/6橙	並	並	細	3.0	英長チ赤ガ			軟	1/8
	〃	上層	764	杯AⅢ	13.8	3.3	9.0	×	体部内外にミガキ残る。	2.5YR6/6 橙	並	並	細	2.0	チ赤			軟	1/2
	〃		765	杯AⅢ	14.2	3.4	9.0	△	回転ナデ。外面に粗いミガキ残る。	10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	1.5	英チ赤ガ				底 2/3
	〃		766	欠番															
	〃	上層	767	Ⅲ				△	内外赤彩。内面、粗いミガキ残る。	5YR6/6橙	並	並	細	0.6	英チ赤	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	断片
	〃		768						回転ナデ、粗い連続ミガキ。	5YR6/6橙	密	極少	細	0.9	チ赤ガ			硬	断片
	〃		769	高杯			16.9	×		7.5YR6/6 橙	並	並	細	4.0	チ赤ガ閃			硬	裾 1/3
	〃		770	高杯B				△	脚外面連続ナデ、杯部内面断続ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	5.0	長チ赤ガ				
須恵器	〃		771	ⅢA	14.2	1.5	11.5			2.5Y7/1 灰白	密	やや少	細	0.8	長				1/14
	〃		772	ⅢAⅢ	14.4	1.7	11.4		外底ナデ。	N5/灰	並	多	細	1.1	長黒				1/4
	〃		773	ⅢAⅡ	15.4	2.6	11.6	△		5Y7/1灰白	並	やや多	細	1.5	長黒			軟	1/3
	〃		774	ⅢAⅡ	15.0	2.4				2.5Y7/1 灰白	やや密	並	細	0.8	英黒チ				1/8
	〃		775	杯AⅢ	12.9	3.4	9.0	△		7.5Y7/1 灰白	並	やや多	細	3.0	長黒		外面火襷。		底 1/4
	〃	上層	776	杯AⅢ	13.4	3.3	8.2		内外底ナデ。	5Y5/1灰	密	少	細	1.0	長黒				底 1/8
	〃		777	杯AⅢ	12.8	4.3	8.0	×		2.5Y7/1 灰白	並	並	細	3.0	長		底部のみ暗色。	軟	底 1/4
	〃		778	杯	13.6			×		7.5YR7/6 橙	並	並	細	1.2	長チ赤			軟	1/9
	〃		779	杯A			8.0		外底ナデ。	N5/灰	並	多	細	2.0	長黒		内外火襷。		底 2/3
	〃	Ⅱ層	780	杯AⅢ			8.8	×	内底断続ハケ痕。	10YR8/2 灰白	粗	多	細	細	長赤ガ			軟	底 1/5
	〃		781	杯BⅢ			7.4		内外底ナデ。	N5/灰	密	並	細	1.0	長			硬	底 1/3
	〃		782	杯BⅡ			10.4		内外底ナデ。	5Y5/1灰	並	やや多	細	5.5	長チ			硬	底 1/2
	〃		783	杯BⅡ	16.1	6.3	10.8		体部回転ナデ痕顕著、内底ハケ目をナデ消す。	2.5Y7/1 灰白	並	多	細	0.8	英長黒		外底ヘラ記号。	やや軟	底 1/5
	〃	Ⅱ層	784	蓋	14.0					2.5Y7/1 灰白	並	やや多	細	1.2	長英		外面降灰。	やや硬	1/5
	〃		785	蓋	17.6					N5/灰	密	極少	細	細	長黒				1/9
	〃		786	蓋Ⅱ	17.7				外面の2/5と、内面周縁部に回転ケズリ。	N7/灰白	やや粗	多	細	7.0	長チ				1/5
製塩土器	〃		787						内面布目。	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	多	1.0	6.0	英(円)赤チガ		外面一部ススケ。	硬	断片
須恵器	〃		789	甕					外面、太目の平行タタキ。内面、当具痕未調整。	N7/灰白	密	並	細	3.0	長		外面自然釉。	硬	破片
	〃		790	甕					内面、同心円当具痕をナデ消す。	N5/灰	密	少	細	0.9	長黒			硬	破片
土師器	〃		793	甕				△		10YR8/4 浅黄橙	並	並	1.5	6.0	チ(円)砂	Ⅰ			断片
土師器	SK34	上層	794	ⅢAⅢ	13.6	1.4	9.0	×		7.5YR6/6 橙	密	極少	細	1.5	チ赤ガ			軟	1/9
	〃	Ⅸ層	795				8.0	△	全面ミガキ。	10Y7/4 にぶい黄橙	密	少	細	細	英チ赤ガ				底 1/9
	〃	Ⅸ層	796	杯A	14.8	2.3	11.6		全面幅広の連続ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	0.8	チ赤ガ		内底中央が黒色化。	硬	底 1/5
	〃	Ⅺ層	797	ⅢA	18.0	2.3	15.4	×		5YR7/8橙	密	並	細	0.6	チ長赤ガ			軟	1/16

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SK34	Ⅸ層	798	ⅢA			13.6		内底連続、外底断続ミガキ。	7.5YR6/6 橙	並	並	細	細	長チ赤ガ		内底中央が黒色化。	硬	底 1/5
	〃	Ⅳ層	799	ⅢA	19.5	2.3	14.4	×	体部内外、連続ミガキ。	5YR6/6橙	やや密	並	細	3.0	長チ赤ガ				1/8
	〃	上層	800	ⅢA	21.4			△	内外連続ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	2.0	チ赤ガ			軟	底 1/9
	〃	Ⅺ層	801					△		5YR6/6橙	やや密	並	細	0.9	英チ赤			硬	断片
黒色土器	〃	上層	802	杯				×		7.5YR6/4 にぶい橙	並	並	細	0.5	白・金雲英長		内面黒色。搬入品。		断片
土師器	〃	Ⅸ層	803	杯AⅣ	8.5	3.6	5.7	×		5YR7/8橙	並	並	細	4.0	チ赤ガ			軟	2/3
	〃	Ⅸ層	804	杯AⅣ			5.7	△		7.5YR6/4 にぶい橙	やや密	並	細	1.0	英赤ガチ		黒斑。		底 2/3
	〃	下層	805	杯A			5.7	×	回転ナデ顕著。	7.5YR7/6 橙	並	やや少	細	1.0	チガ			軟	底 1/4 弱
	〃	Ⅸ層	806		11.4			△		7.5YR8/6 黄橙	密	並	細	1.2	チ赤ガ			軟	1/8 強
	〃		807	杯AⅢ	12.8	2.6	8.8	△	回転ナデ。ミガキ痕認めず。	10YR7/6 明黄褐	並	多	細	1.5	英長チガ			やや硬	底 1/4
	〃		808	杯AⅡ	14.2	3.2	9.0	×	全面ミガキ。内面連続ミガキ、内底中央断続ミガキ。	5YR6/8橙	密	やや少	細	細	長チ赤ガ			軟	1/3
	〃		809	杯AⅡ	14.2	3.6	9.2	×	内面ミガキ残る。	7.5YR7/6 橙	密	並	細	1.2	チ赤ガ			軟	底 1/4
	〃	Ⅹ層	810	杯AⅡ	14.0			△		10YR7/4 にぶい黄橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ				1/8
	〃		811	杯AⅡ	14.6	3.7	9.0	△	体部内面ミガキ、外面断続ミガキ。	10YR8/4 浅黄橙	並	並	細	細	チ赤ガ				1/7
	〃	Ⅸ層	812	杯A			8.6	外面△	内面ミガキ。	5YR7/6橙	やや密	並	細	1.6	チ赤ガ				底 1/4
	〃	Ⅹ層	813	杯A			9.8	△		10YR7/4 にぶい黄橙	やや密	並	細	2.5	チガ			やや硬	底 1/1
	〃	Ⅸ層	814	杯A			8.8		全面ミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙	密	少	細	細	長赤ガ			硬	底 1/4
	〃	Ⅸ層	815	杯A			10.4	×		5YR7/8橙	並	並	細	2.0	チ赤ガ			軟	底 1/4
	〃	Ⅺ層	816	杯B			6.5	△		5YR5/6 明赤褐	並	並	細	3.5	チ赤ガ				底 1/8
	〃	Ⅸ層	817	杯B			9.0	×		7.5YR8/6 浅黄橙	並	並	細	1.2	チ赤ガ			軟	底 1/8
	〃		818	蓋				△		7.5YR7/6 橙	密	並	細	細	赤ガ長			硬	
	〃	Ⅵ層	819	蓋					内外ミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙	密	並	細	細	チ赤ガ				断片
	〃	Ⅳ層	820	蓋					外面分割ミガキ。内面連続ナデ。	5YR6/6橙	並	並	細	0.9	金・白雲英チ赤		搬入品。	硬	断片
	〃		821	蓋	17.4			×		7.5YR8/6 浅黄橙	並	並	細	2.5	英長チ赤				1/7
	〃		822	高杯B				×		5YR6/6橙	並	並	0.4	5.0	英チ赤ガ				
	〃		823	高杯A				×	内面弱いシボリ目。	7.5YR6/6 橙	並	並	細	1.3	英長チガ				
須恵器	〃	Ⅷ層	824	ⅢAⅢ	13.6	1.9	10.4		内外底ナデ。外面の一部削り取り。	7.5Y6/1灰	並	多	細	2.0	長チ黒				1/4 強
	〃	Ⅸ層	825	ⅢAⅡ	15.0	1.9	10.2	△		7.5YR6/6 橙	並	やや多	細	2.0	赤長英チ		底部還元色。	軟	半完
	〃	Ⅸ層	826	ⅢA	16.2	1.9	13.2		内面同心円当具痕。外底ナデ。	5Y6/1灰	並	やや少	細	0.6	長チ黒				1/11
	〃	Ⅸ層	827	ⅢA	16.1	1.8	12.8		内外底ナデ。	N5/灰	並	やや多	0.6	2.0	長黒		内外火襷。口縁外面が暗色。	硬	1/8
	〃		828	ⅢA	17.2	2.2	13.5	△		5Y6/1灰	並	多	細	2.5	長黒チ			軟	底 1/4
	〃	上層	829	ⅢA	17.3	1.7	14.9	×		5Y7/1灰白	並	並	細	0.6	長英赤		口縁内面と外面は酸化色。	軟	底 1/6
	〃	Ⅶ層	830	ⅢA	19.0			△		5Y8/2灰白	並	並	細	3.0	長英チ			軟	1/13
	〃		831	杯AⅣ			6.0		外底周縁部ナデ。	N5/灰	やや密	やや多	細	2.0	長チ黒		内外火襷。	硬	底 1/3
	〃		832	杯AⅣ	10.0	3.2	6.6	×		5Y8/1灰白	並	並	0.4	1.0	長英赤			軟	1/7
	〃	Ⅷ層	833	杯AⅢ	11.9	3.3	7.5		外面に、底部と体部の接合痕。	2.5Y6/1 黄灰	やや粗	やや多	細	2.0	長チ赤			やや軟	底 1/4

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SK34	Ⅵ層	834	杯AⅢ	12.1	5.5	8.6		内外底比較的丁寧なナデ。	オリーブ灰	密	密	細	1.0	長黒		歪みあり。外底酸化色。		2/3
	〃	Ⅸ層	835	杯AⅢ	12.8	3.6	7.9		外底ナデ。	N6/灰	密	並	細	5.0	長チ黒			口縁のみ硬	底1/2
	〃	Ⅷ層	836	杯AⅢ	13.0	3.8	8.5		外底は丁寧なナデ。	7.5Y6/1灰	並	やや多	0.4	2.0	長チ黒		口縁部は暗色。		1/7
	〃	Ⅸ層	837	杯AⅢ	13.0	3.2	8.8	△		5Y7/1灰白	並	多	細	0.9	長チ赤		口縁酸化色。	軟	1/4弱
	〃	上層・Ⅺ層	838	杯AⅡ	13.8	3.5	9.5	×		5Y7/1灰白	やや粗	多	細	2.0	英長黒			軟	1/2
	〃	Ⅸ層	839	杯	15.2					5Y5/1灰	並	やや多	細	1.0	長チ黒		口縁部のみ暗色。		1/8
	〃		840	杯AⅢ			8.6	×	外底ヘラ切痕明瞭。	5Y6/1灰	密	やや多	細	4.0	長チ黒			軟	底1/1
	〃	下層	841	杯AⅢ			8.6	×		7.5Y7/1灰白	密	少	細	細	長黒ガ			軟	底1/6
	〃	Ⅸ層	842	杯AⅢ			8.0		内外底ナデ。外底平行圧痕。	N6/灰	密	やや少	細	0.6	長黒				底1/2
	〃		843	杯	15.4			×		7.5Y7/1灰白	密	並	細	細	黒長			軟	1/11
	〃	Ⅺ層	844	杯BⅢ			8.0			5Y7/1灰白	粗	多	細	1.0	英長チ	Ⅰ			底1/7
	〃		845	杯BⅢ			8.4	△		5Y7/1灰白	やや粗	多	細	2.0	英長黒	Ⅰ		軟	底1/4弱
	〃	Ⅸ層	846	蓋	12.9	2.1			天井内外ナデ。	N7/灰白	やや粗	やや多	細	4.0	長黒チ				1/2
	〃		847	蓋	15.0					N6/灰	並	並	細	8.0	長チ				1/11
	〃		848	蓋	12.9				天井内面ナデ。	7.5Y5/1灰	密	少	細	0.6	長		外面降灰顕著。火膨れ。	硬	1/2
	〃	Ⅸ層	849	高杯				△	内面シボリ目。	5Y7/1灰白	並	並	細	細	長チ			軟	
	〃	Ⅸ層	850	壺	7.6					N7/灰白	並	やや多	細	1.5	英長黒				1/3
	〃	Ⅸ層	851	甕	18.0					2.5Y7/1灰白	並	多	0.5	1.0	英長チ		外面自然釉。	硬	1/9
	〃	Ⅰ層	852	甕					外面タタキ、内面同心円当具痕にナデ。	N5/灰	並	やや多	細	4.0	チ長		内面はやや明色。	硬	破片
	〃	Ⅷ層	853	甕					外面平行タタキ後、細目のハケ、内面同心円当具痕未調整。	N5/灰	並	やや多	細	3.0	長チ黒		内面はやや明色。	硬	破片
製塩土器	〃		854		14.4				内面布目。	2.5Y8/3淡黄	並	やや多	0.7	3.0	砂チ			やや硬	
	〃	Ⅲ層	855							2.5Y8/3淡黄	並	多	1.1	3.0	砂泥チ(円)赤		一部灰色に変色。		
	〃		856						外面、指頭圧痕。	2.5Y8/1灰白	並	多	1.0	3.5	砂泥チ		外面一部黒色。	やや硬	
土師器	〃	Ⅸ層	857	カマド	(26.3)	(8.1)	(4.5)		鍔部は、指頭圧痕、粗めの縦ハケ後ナデ。焚口端部は面取り。体部粗めの縦ハケ。	7.5YR7/6橙	粗	多	0.8	2.0	英チ金雲閃		被熱、変色あり。搬入品。	硬	
土師器	SD26	Ⅳ層上	868	ⅢA			15.6	△	内外赤彩。丁寧なミガキ。立上り外面は稜をなして屈曲。	2.5YR5/8明赤褐	密	並	細	2.5	チ英赤	Ⅱ	素地7.5YR8/4。	やや軟	底1/9
	〃	Ⅳ層	869	杯A	16.0				内外ミガキ。	5YR7/6橙	やや密	並	細	細	英長チ赤			硬	底1/9
	〃	Ⅳ層	870				12.2			7.5YR7/4にぶい橙	密	やや少	細	1.0	赤英長			硬	底1/12
	〃	Ⅳ層上	871				14.2	△	全面赤彩。内底ミガキ。	5YR7/6橙	密	少	細	1.6	チ(円・角)赤		素地10YR8/3。	硬	底1/7
	〃	Ⅰ層	872				11.6	×		10YR8/6黄橙	粗	多	細	0.6	英チ				底1/8
	〃	Ⅰ層	873		16.0			△	内外赤彩。内面ミガキ。	2.5YR5/6明赤褐	並	やや多	細	0.9	英長赤	Ⅰ	素地10YR8/2。塗膜より微量の赤鉄鉱検出。	硬	1/18
	〃	Ⅳ層上	874	Ⅲ	20.2			△	外面ミガキ残る。	5YR7/6橙	密	やや少	細	0.7	赤チ	Ⅱ		やや軟	1/17
	〃	Ⅱ層	875	高杯			9.6		裾端部、強い回転ナデ。	2.5YR6/6橙	並	やや多	細	1.5	英チ赤ガ		素地10YR8/3。		裾1/7
	〃	Ⅳ層上	876	高杯			14.0	△	外面ミガキ残る。	5YR7/6橙	密	やや少	細	細	赤長チガ	Ⅱ		やや軟	裾1/8
	〃	Ⅳ層上	877	壺	13.0			×	内外赤彩。	2.5YR5/8明赤褐	密	並	0.5	3.0	赤チガ	Ⅱ	素地7.5YR7/6。高台剥離。	やや軟	1/2強
	〃	Ⅳ層上	878					△	外面タテ方向ミガキ、内面上方指頭圧痕。	5YR6/6橙	並	多	0.5	1.0	英チ赤ガ			硬	

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
須恵器	SD26	Ⅳ層上	879	杯C	12.0	4.5			内面体部下半回転ハケ、内底丁寧なナデ。	N7/灰白	並	並	0.4	3.0	英長チ				1/2
	〃	Ⅳ層上	880	杯C	13.4	4.2	8.6		内外底ナデ、外底平行圧痕。	N7/灰白	並	やや少	0.4	1.0	英長黒				1/3
	〃		881	杯	14.6			△		2.5Y8/2灰白	やや粗	やや多	細	1.0	英チ黒	Ⅰ			1/8
	〃	Ⅳ層	882				10.2		内面下方回転板ナデ。内底ナデ。	N7/灰白	並	並	細	0.8	英長黒				底1/3
	〃	Ⅱ層	883	杯	15.6				丁寧な回転ナデ。外面接合痕。	N7/灰白	やや密	極少	細	細	黒長				1/6
	〃	Ⅳ層	884	杯BⅣ			7.2		内外底ナデ。調整丁寧。	N7/灰白	密	少	細	0.4	黒チ				底1/3
	〃	Ⅱ層	885	杯BⅢ			10.4	△	外面下部回転ケズリ。	5Y7/1灰白	粗	多	0.4	2.2	英長黒	Ⅰ		やや軟	底1/5
	〃	Ⅳ層	886	杯BⅡ			12.8		内底周縁部は弧状の断続ナデ、外底ナデ。調整丁寧。	N7/灰白	密	極少	細	細	黒長				底1/8
	〃	Ⅳ層上	887	杯B			11.0		内底、弧状の断続ナデ、中央は一定方向ナデ。外底連続ミガキ。	N7/灰白	密	やや少	0.5	4.0	英長黒				1/2
	〃	Ⅰ・Ⅳ層	888	杯BⅡ	16.7	3.7	11.5		体部内面、回転ヨコハケ後、回転ナデ。内底、周縁に弧状の断続ナデ、中央は一定方向ナデ。外底回転ケズリ(ロクロ右回り)。調整丁寧。	N7/灰白	密	極少	細	0.9	黒長		外面の一部に自然釉。外底ヘラ記号。		半完
	〃	Ⅳ層上	889	蓋				×		5Y8/1灰白	やや粗	多	細	1.0	英長黒	Ⅰ		軟	
	〃	Ⅰ層	890	蓋	13.6			やや△	外面の3/5に回転ケズリ。天井内面ナデ。調整丁寧。	N6/灰	粗	多	細	1.2	英長黒	Ⅰ			1/7
	〃	Ⅳ層上	891	蓋	16.6	2.6			外面の2/3に回転ケズリ、口縁内面回転板ナデ。	10YR6/1褐灰	並	やや多	0.4	2.2	チ		内面7.5YR5/2。		1/2
	〃	Ⅳ層	892	蓋	14.7				天井内外面ナデ。	7.5Y7/1灰白	密	並	細	3.5	黒長英				天井1/4
	〃	Ⅳ層上	893		17.6					N7/灰白	並	少	細	細	黒英				1/15
	〃	Ⅳ層上	894		27.4			×		5Y8/1灰白	並	やや多	0.4	0.9	英長黒			軟	1/14
	〃	Ⅳ層上	895							5Y8/1灰白	密	並	細	2.0	長黒				肩1/6
	〃	Ⅳ層	896	壺			7.3		外面下部回転ケズリ、内底、雑なナデ。	5Y5/1灰	密	やや多	細	1.5	英黒長		内面2.5Y7/1。	硬	底1/3
	〃	Ⅰ・Ⅳ層	897	壺			9.0		外底回転ケズリ、内底ナデ。	5Y8/1灰白	並	並	細	1.0	黒長英チ				底1/4
	〃	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層	898	甕	26.0	46.2		△	外面タタキ後、粗目の回転横ハケ。内面当具痕を弱くナデ消す。	7.5Y6/1灰	並	並	細	1.1	長チ黒		胴径40.0cm。		
土師器	〃	Ⅳ層	899	甕	13.8				口縁～頸部、粗目のハケ。	5YR6/4にぶい橙	並	多	0.5	1.5	英長赤		内面、黒色付着物。	硬	1/6
土師器	SD40		901	ⅢAⅢ	15.5	1.9	12.3	×	内面、ミガキ残る。	5YR6/8橙	やや粗	並	細	2.5	チ赤			軟	準完
	〃		902	ⅢAⅡ	16.4	2.3	12.3	△	体部連続ミガキ。	7.5YR7/6橙	並	並	細	1.0	英チ赤ガ				1/2
	〃		903	ⅢAⅡ	16.6	2.3	12.8	△	体部内外面連続ミガキ。化粧土か。	5YR6/6橙	やや粗	並	細	1.0	チ赤ガ				1/4
	〃		904		17.0	1.8		外面×	内面密な連続ミガキ。	2.5YR6/8橙	並	やや多	細	1.0	チ赤			硬	1/14
	〃		905	ⅢAⅡ	17.0	2.5	13.0	×	内外連続ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	0.5	1.5	英チ赤ガ				口・底1/2強
	〃		906	ⅢAⅡ	17.6	2.0	13.4	×	内外ミガキ残る。	5YR7/6橙	並	並	細	1.0	英チ赤ガ				1/4
	〃		907	杯AⅣ	9.8	3.6	5.6	△	回転ナデ、外面に粗い連続ミガキ残る。	5YR6/6橙	並	やや多	細	4.5	英チ赤ガ				半完底1/1
	〃		908	杯AⅣ	10.2	3.7	7.0	△	回転ナデ後、ミガキ。外底ヘラ切、平行圧痕。	5YR7/6橙	並	並	細	1.1	チ赤ガ				半完
	〃		909	杯AⅢ	13.6	3.9	9.0	△	全面ミガキ。外底平行圧痕→ミガキ。	10YR8/4浅黄橙	やや密	やや多	細	3.0	英チガ		内底暗色。	やや硬	底1/1
	〃		910	杯AⅢ	14.2	3.7	9.2	×	全面ミガキ。外底ヘラ切痕残す。	5YR6/6橙	並	並	細	2.5	チ赤ガ				半完

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SD40		911	杯	15.6			△	内外ミガキ。	7.5YR7/6 橙	並	やや多	細	2.0	白雲英チ赤ガ		接合部で剥離。搬入品。	やや硬	1/6
	〃		912	杯A			7.6	×		7.5YR7/6 橙	並	並	0.7	1.1	チ赤ガ				底 1/6
	〃		913				10.0	△	内面回転ナデ。立上り部外面に粘土はみ出す。外底は丁寧。	5YR6/6橙	並	並	細	2.5	英チ赤				底 1/2
	〃		914	椀A	11.6	4.0	5.7	△	外底及び立上り部外面回転ケズリ(回転台右回り)、全面ミガキ。体部断続ミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙	並	並	細	1.5	チ赤ガ				準完
	〃		915	椀A	11.8	3.1	5.6	×	内外ミガキ。	5YR5/8 明赤褐	並	並	0.5	2.0	長英チ赤ガ				準完
	〃		916	杯B	13.4	3.8	8.0		体部外面、左上りケズリ後、5分割ミガキ。内面ハケ痕をナデ消す。	5YR7/6橙	密	並	細	1.9	英チ赤ガ金雲		搬入品。	硬	半完
須恵器	〃		917	杯AV	9.0	3.4	6.0		外底弱いナデ。	5Y6/1灰	並	やや多	1.0	2.5	長黒チ			底軟	完
	〃		918	ⅢAⅡ	15.4	2.2	12.5	△		5Y6/1灰	やや密	やや多	0.5	2.0	長赤		内外火襷。	一部を除き軟	完
	〃		919	ⅢAⅡ	15.8	2.3	12.0	△		5Y6/1灰	並	やや多	細	2.5	長黒			一部軟	半完
	〃		920	ⅢAⅡ	15.0	2.6			内底ナデ。外底ナデ、平行圧痕。	5Y6/1灰	密	並	細	2.0	長チ黒		外面火襷。	硬	完
	〃		921	杯AⅢ	13.0	3.8	8.5	△		7.5Y7/1 灰白	並	やや多	0.5	2.0	英長黒		厚手。	軟	完
	〃		922	杯AⅢ	13.3	3.6	8.2	△		N7/灰白	やや粗	多	細	3.0	長チ黒			軟	半完
	〃		923	杯AⅢ	13.0	3.3	9.0	×		5Y4/1灰	やや密	やや多	細	1.1	赤長チ		口縁部のみ2.5Y7/3。	軟	1/3
	〃		924	杯AⅢ			8.5	×		2.5Y7/4 浅黄	並	多	細	3.0	長チ赤		内面暗色。	軟	底 1/1
	〃		925	杯BⅢ	12.9	4.2	7.5	△	外底ヘラ切未調整。	5Y8/2灰白	やや密	並	0.4	3.5	英長チ黒			軟	底 1/1
	〃		926	杯B			11.6		内底ナデ。	N6/灰	並	並	細	1.1	長チ赤		内底、一条の線刻。	硬	底 1/3
土師器	〃		927	高杯A					心棒成形。外面、上方へのケズリ、表面は平滑。	5YR7/6橙	密	少	細	1.0	白金雲赤チ		搬入品。	極硬	
製塩土器	〃		928		8.6				内面布目。	10YR8/3 浅黄橙	やや密	多	0.8	3.5	チ(円)英砂赤			硬	1/6
	〃		929		9.2				内面布圧痕。	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	多	1.0	3.5	泥砂英長(円)		外面一部ススケ。	硬	1/5
	〃		930		10.2					10YR7/4 にぶい黄橙	密	多	1.0	2.2	チ(円)泥赤ガ				1/6
	〃		931		10.6					10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	多	細	4.5	泥砂長英赤			硬	1/6
	〃		932		11.7					7.5YR7/6 橙	粗	多	1.0	5.0	泥砂チ赤ガ			硬	1/6
	〃		933							2.5Y7/3 浅黄	並	並	1.0	5.5	砂泥チ赤				断片
	〃		934							10YR7/4 にぶい黄橙	密	多	1.1	2.5	チ(円)砂泥赤ガ			軟	断片
	〃		935						内面布目。	5Y7/1灰白	並	並	1.1	3.0	砂泥				断片
	〃		936						内面布圧痕。	7.5Y8/6橙	並	多	1.5	10.0	泥砂英赤ガ		外面一部ススケ。		断片
土師器	SX2		939	ⅢA	17.0	1.7	14.4	△	全面赤彩、ミガキ。外底、断続ケズリ後、不定方向ミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐	やや粗	多	0.4	1.3	英長チ	Ⅰ	素地10YR8/2。塗膜より微量の赤鉄鉱検出。		1/4
	〃	中・上層	940	Ⅲ	22.0			×	内外赤彩。外面連続ミガキか。	2.5YR5/8 明赤褐	やや粗	多	細	0.9	英チガ	Ⅰ	素地2.5Y8/2。		1/8 弱
	〃		941	Ⅲ	22.9			×	内外赤彩。外面連続ミガキか。	2.5YR5/8 明赤褐	並	多	細	1.0	英チガ	Ⅰ	素地2.5Y8/2。		1/8
	〃		942	Ⅲ					内面暗文。	5YR6/6橙	密	並	細	2.0	長チ赤		搬入品。	硬	断片
	〃		943	欠番															
	〃		944	杯A	16.3	2.7	11.3	×	全面赤彩、ミガキ残る。外底回転ケズリ後、丁寧なミガキ。	2.5YR4/8 赤褐	粗	多	細	1.0	英チガ	Ⅰ	素地10YR8/2。	やや硬	1/10
	〃	中・上層	945	杯A			12.5	×		7.5YR7/6 橙	粗	多	細	1.5	英チ赤				底 1/5
	〃		946	高杯	20.5			△	内外赤彩。杯部内面、放射状暗文(細幅)。	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗	多	0.4	1.1	英チガ	Ⅰ	素地10YR8/2。	硬	1/12

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SX2	中・上層	947	高杯	20.2			×	内外赤彩。	2.5YR5/6 明赤褐	粗	多	0.6	1.1	英チガ	Ⅰ	素地10YR8/2。		1/10
	〃	中・上層	948	高杯	22.5			△	内外赤彩。杯部内面、放射状暗文(細幅)。	2.5YR5/6 明赤褐	粗	多	細	1.0	英チ	Ⅰ	素地10YR8/2。		1/8
	〃		949	高杯	24.8			×	内外赤彩。内面放射状暗文(細幅)、外面ミガキ。	10YR8/3 浅黄橙	やや粗	やや多	細	1.0	英チ	Ⅰ	素地10YR8/2。塗膜より微量の赤鉄鉱検出。		1/6
	〃		950		22.4			×	内面ミガキ。外面下半擦痕。	5YR5/6 明赤褐	並	並	細	細	英チ赤			硬	1/19
	〃		951		26.6			外面△	杯部、内外ミガキ、外面下半回転ケズリ。	5YR5/6 明赤褐	並	並	細	0.9	英チ赤ガ			硬	1/18
	〃		952	皿B-1	20.4	3.7	15.6	×	全面赤彩。内面及び体部はミガキ。下半外面(外底含む)、断続ケズリ。高台接合部に2条の溝を切って接合。	2.5YR4/6 赤褐	並	やや多	0.4	2.5	チ(角・円) 英赤		胎土非Ⅰ群。素地10YR8/3。塗膜より微量の赤鉄鉱検出。		1/5
	〃	中・上層	953	皿B-1			20.1	×	全面赤彩。外底断続ケズリ。高台接合部体部側に3条の溝を切る。	2.5YR5/6 明赤褐	並	並	0.5	1.5	チ英砂ガ赤	Ⅰ	素地10YR8/2。外底2次被熱、赤変。		底1/10
	〃		954	蓋				×	赤彩。	10YR5/6 明赤褐	やや粗	やや多	0.6	1.5	英チ	Ⅰ	素地10YR8/2。		
	〃		955	蓋				×	赤彩。	2.5YR5/8 明赤褐	並	並	0.5	0.7	英チガ	Ⅰ	素地2.5Y8/2。		
須恵器	〃		956	円面硯	17.0	5.7	19.0		陸部と海部の境で屈曲、上面の外堤より内側は平滑。外堤と圏台の各端部は凹面をなす。	5Y6/1灰	密	やや少	細	1.0	英長黒		陸部以外の上面に降灰。陸部の一部に赤色付着物。		1/6
	〃	中・上層	957	杯C					体部外面下方回転ケズリ、内外底、丁寧なナデ。	5Y7/1灰白	並	多	細	0.6	英チ	Ⅰ			底1/5
	〃		958	杯C				×		5Y7/1灰白	並	やや多	0.4	1.3	英長チ赤			軟	底1/5
	〃		959	杯	14.0	3.2	9.0	×		N6/灰	並	やや多	0.5	1.5	チ赤ガ			軟	1/10
	〃	中・上層	960	杯C	14.2			×		2.5Y7/1 灰白	やや粗	多	細	1.0	チ			軟	1/3
	〃		961	杯A	14.6	3.1	9.8	×		2.5Y7/3 浅黄	粗	やや多	0.5	1.1	英チ赤			軟	底1/6
	〃		962	杯	16.1				外底ナデ。調整丁寧。	N7/灰白	密	やや少	細	0.5	長黒				1/8
	〃		963	杯B	13.5	3.4	10.5	△	調整丁寧。	5Y6/1灰	並	やや多	細	0.8	長赤英チ		特に外底、内面は酸化色。		1/7
	〃		964	杯B			9.2		外面、底部及び体部下方擦痕。内外底ナデ。各調整丁寧。	N7/灰白	密	並	細	1.5	長			やや硬	底1/4
	〃		965	蓋	14.6				外面の1/2強に回転ケズリ。	7.5Y7/1 灰白	密	少	細	0.5	長黒				1/9
	〃		966	蓋	13.8	1.6			内面ナデ。	5Y4/1灰	密	少	細	0.9	黒チ		外面降灰、内面明色。		1/2
	〃		967	蓋	15.8				内面ナデ。	5Y6/1灰	並	並	細	3.5	長黒英チ		外面自然釉。火膨れ。	やや硬	1/8
	〃		968	蓋	15.2	2.3			外面、断続ケズリ後、回転ケズリ。内面、周縁擦痕、周縁以外ナデ。調整丁寧。	5Y5/1灰	並	やや多	細	1.3	長黒英チ				1/2
	〃		969	蓋	16.0				外面の2/3と内面周縁部回転ケズリ。内面天井部丁寧なナデ。	7.5YR6/3 にぶい褐	並	多	細	3.0	英長チ	Ⅰ	断面灰色。		1/2弱
	〃		970	蓋	15.5				内面周縁回転ケズリ、後ナデ。	5Y5/1灰	やや粗	多	細	0.5	チ長				1/7
	〃		971	蓋					調整丁寧。内面中央部は極めて平滑。	N7/灰白	極密	やや少	細	0.6	長黒		胎土がガラス化。	硬	
	〃		972	蓋					内面中央部は極めて平滑。	5Y5/1灰	やや粗	やや多	細	1.1	英チ黒	Ⅰ	外面降灰。		
	〃		973	蓋	17.5	2.2			外面の6/7に回転ケズリ。内面、周縁部に擦痕、天井部板ナデ痕。各調整丁寧。	N8/灰白	密	並	細	1.0	長黒チ				半完
	〃		974	高杯					四方に長方形の透かし。内面シボリ目。	5Y6/1灰	並	多	細	1.8	英長チ				
土師器	〃		975	把手付鍋	32.2			×	全面赤彩。	2.5YR5/6 明赤褐	やや粗	多	0.4	1.3	英チガ	Ⅰ	素地10YR8/2。口縁2次被熱、赤変。	やや硬	頸1/3
	〃	中・上層	976	甕	28.0			×	口縁内面と体部外面に粗目のハケ。	10YR8/2 灰白	並	多	細	4.0	英チ砂チ(円) 赤	Ⅰ			1/14

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SX2		977	カマド				×	鍔部にナデ、押圧、裾外側に強い粗目のハケ。	10YR7/2 にぶい黄橙	並	多	細	3.5	英チ砂チ(円)赤	Ⅰ	剝離した鍔部。		
須恵器	〃	中・上層	978	甕	18.2				肩部外面回転ヨコハケ。胴部内面、当具痕をナデ消す。	N7/灰白	密	やや少	細	0.8	黒長		上面自然釉。内面灰白色。	硬	1/8
	〃		979	甕					外面、タタキ後弱い細目のハケ。内面、当具痕を弱く消す。	N7/灰白	並	やや多	細	細	チ黒			硬	断片
	〃		980	甕					外面、格子タタキ、部分的にハケ。内面、同心円当具痕を弱く消す。	7.5Y6/1灰	並	並	細	細	チ黒		外面若干の自然釉。	硬	断片
製塩土器	〃		981							10YR8/4 浅黄橙	並	多	1.0	5.0	泥砂チ				断片
土師器	P14		983	Ⅲ A	12.5	1.1	8.8	△	内外回転ナデ痕。	10YR7/4 にぶい黄橙	やや粗	多	0.5	2.0	チ赤				完
	P15		984	Ⅲ A	13.4	1.2	9.5	△	口縁回転ナデ、屈曲外反させる。	7.5YR7/6 橙	粗	やや多	細	1.0	チ赤				1/4 強
	P14		985	Ⅲ A	13.8	1.4	10.2	△		10YR8/3 浅黄橙	やや粗	多	細	2.5	チ赤			やや硬	底 1/5
	〃		986	Ⅲ A	14.8	1.2	9.2	△	外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	やや粗	やや多	細	1.2	チ赤ガ				1/9
	〃		987	Ⅲ A	13.1	1.7	10.0	△	外底ヘラ切痕、ナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗	多	細	1.0	チ赤ガ				半完
	〃		988				7.9	△	外底ヘラ切痕。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	多	細	細	チ赤				底 1/6
	〃		989	Ⅲ A	16.0			△	体部回転ナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙	粗	やや多	細	1.2	チ			やや硬	1/10
	P15		990	杯 A	12.8	3.1	7.2	△	外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	並	並	細	細	チガ赤				1/8
	P14		991	杯 A	12.6	2.9	8.0	△	体部回転ナデ。	10YR8/4 浅黄橙	並	やや多	細	2.5	チ赤				底 1/3
	〃		992	杯 A			8.6	△	内底回転ナデ、外底ヘラ切痕。	7.5YR6/4 にぶい橙	並	やや多	細	2.0	チ赤		接合部より剝離。		底 1/1
	〃		993	杯 A	12.6	2.8	8.3	×	外底ヘラ切痕。	7.5YR7/6 橙	やや粗	やや多	細	2.0	チ赤		多画一部が黒色。		半完
	P15		994	杯 A	13.3	3.1	9.1	△	体部回転ナデ。外底ヘラ切後ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	並	細	細	チ赤ガ				半完
	〃		995	杯 A	13.2	3.0	8.6	△	体部回転ナデ。外底ヘラ切後ナデ。	7.5YR6/6 橙	やや密	並	細	2.0	チ赤				1/4
	P14		996	杯 A	14.0	2.4	8.6	△	内底、回転ナデ痕。	10YR8/4 浅黄橙	並	やや多	細	0.6	チ赤				底 1/3 強
	〃		997	杯 A	13.4	3.2	8.0	×	外底ヘラ切痕。	2.5Y8/4 淡黄	粗	やや多	細	1.3	チガ			やや硬	半完
	〃		998	杯 A	14.2	2.6	9.5	△	体部回転ナデ、特に口縁部に2段の強い回転ナデ。外底ナデ。	10YR8/4 浅黄橙	並	やや多	細	0.5	チ赤ガ			やや硬	1/8
	〃		999	杯 B	15.0	6.4	9.2	×		7.5YR7/6 橙	やや粗	やや多	細	0.5	チガ			軟	1/7
	P15		1000	杯	14.4			△		5YR6/6橙	並	並	細	1.5	チ		底部は接合部で剝離。	軟	1/5
	〃		1001	杯	15.2			△	体部外面回転ナデ痕。	7.5YR7/4 にぶい橙	並	多	細	1.1	チ赤		外面黒褐色。		1/4
	〃		1002	蓋				△	内面ミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙	密	並	細	1.8	チ赤ガ				
須恵器	〃		1003	杯 A			8.5	×		5Y8/2灰白	やや粗	並	0.5	1.8	チ赤			軟	底 1/6
	〃		1004	杯 B			10.2	×		5Y7/1灰白	粗	やや多	細	1.2	チ			やや軟	底 1/10
土師器	P14		1005	甕	23.8				胴部外面、内面口縁～頸部粗目のハケ。口縁部横ナデ。	10YR5/2 灰黄褐	並	多	0.6	3.5	チ	Ⅱ	胴径19.3cm。	硬	1/6
	〃		1006	甕				△	外面下半格子タタキ。内面下半指頭圧痕。	10YR7/2 にぶい黄橙	やや粗	やや多	1.5	4.0	チ泥(角・円)	Ⅰ	外面上半赤変、底部ススケ。胴径17.6cm。		
土師器	P16		1017				9.0		内底ヘラ切痕。	10YR7/3 にぶい黄橙	並	やや多	細	1.5	チ赤				底 1/1
黒色土器	P 17		1018	杯	18.0				内面、緻密な横位のミガキと見られる。	10YR5/3 にぶい黄褐	並	並	細	0.8	金雲英長		搬入品。	極硬	1/14

種類	出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 量	粒度 普遍	最大	種類	群	備考	焼成	残存率
土師器	SF1		1019	杯AⅢ	13.4	3.6	9.0	特に内面△	内外面連続ミガキ。外底ヘラ切→丁寧なナデ→粗い断続ミガキ。	5YR7/6橙	並	やや多	細	7.0	チ赤ガ			やや硬	準完
土師器	〃		1020	杯AⅢ	13.7	3.3	9.4		全面ミガキ。外底、粗い断続ミガキ、ヘラ切、粘土紐痕残す。	5YR7/6橙	並	やや多	細	1.0	チ赤ガ		底部と体部は接合部で剝離。	やや硬	完
土師器	〃		1021	杯AⅢ	14.0	3.7	9.5		内外面連続ミガキ。外底、粗い断続ミガキ、粘土紐痕残す。	5YR7/6橙	並	並	細	1.0	チ赤ガ		全体を2分して、一方が橙、他方が浅黄橙色。	硬	完
土師器	包含層	北拡張区	1022	ⅢA	21.8			△	全面赤彩。外底断続ケズリ、体部外面ミガキ。	2.5YR5/8明赤褐	並	並	細	細	英長ガ赤	Ⅰ	素地10YR8/2。	やや硬	1/10
土師器	〃	Z8	1023	高杯B	21.7				杯部内外ミガキ。	5YR6/6橙	並	並	細	1.5	英チ赤				1/5
土師器	〃	A28	1024	ⅢB-3	24.9	5.6	13.0	△	内面ミガキ、口縁部外面連続ナデ痕。杯部外面接合痕。連続ナデ。	5YR6/6橙	やや密	並	細	3.0	赤長チ				1/2
土師器	〃	B7 Ⅳ-1層	1025	壺	13.8				外面と口縁内面に赤彩、ミガキ。	2.5YR5/6明赤褐	並	並	0.5	3.0	チ英ガ		素地10YR8/2。	やや硬	1/9
須恵器	〃	北拡張区	1026	蓋	13.0	3.6			内面回転ハケ。	5Y7/1灰白	並	並	細	0.9	英長黒		外面自然釉。		2/3
須恵器	〃	北拡張区 Ⅳ-1層	1027	蓋	13.9	5.0			天井外面全面回転ケズリ。天井内面ナデ痕。	7.5Y6/1灰	並	やや多	細	5.0	長黒チ				1/2
製塩土器	〃	北拡張区 Ⅳ-1層	1028					×	縦位の接合痕。	10YR8/2灰白	やや粗	並	0.7	3.0	泥英チ赤		底部。		断片
須恵器		北拡張区 Z16 甕1	1029	大甕	58.4				胴部、外面格子タタキ、内面同心円当具痕未調整。口縁部ヨコナデ。内面、断面に接合痕。	N5/灰	並	やや多	細	3.0	チ長		底部焼成不良。底部は焼成時に窯内安置具接触部分が凹み、同部に径約10cmの不整円形の痕跡が並ぶ。底1/1。	底軟	頸1/2
須恵器		北拡張区 Z15 甕2	1030	大甕					外面タタキ。内面同心円当具痕未調整。	N4/灰	やや密	並	細	2.5	チ長		底部は焼成時に窯内安置具接触部分が凹み、同部に径14～17cmの不整円形の痕跡が並ぶ。断面セピア色。	硬	底1/1

遺物観察表（土錘）

出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 全長	全幅	全厚	孔径	重量(g)	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 種類	量	粒度 普遍	最大	群	備考	焼成	残存率
SB15	P8	238	管状土錘	5.8	2.2		0.7	23.0	△		10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	チ赤砂ガ	多	細	細		欠損。		
〃	P3下層	239	管状土錘	4.3	2.0		0.7	12.9	△		7.5YR7/6橙	粗	チ赤ガ	多	細	1.0				完
〃	P3下層	240	管状土錘	5.8	1.9		0.6	17.4	△		7.5YR7/6橙	並	チ赤ガ	並	細	細				完
〃	P5	241	管状土錘	4.6	2.9		0.9	36.4	△	両端面取。	10YR7/2にぶい黄橙	密	チ赤ガ	並	細	細		大黒斑。		完
〃	P3下層	242	管状土錘	4.6	2.9		1.0	33.2	△	両端面取。	10YR6/2灰黄褐	密	チ赤ガ	やや少	細	細			硬	完
〃	P5	243	管状土錘	4.4	2.8		0.9	33.1		両端面取。	2.5Y3/1黒褐	密	チガ	少	細	細				完
〃	P5	244	管状土錘	4.2	2.7		0.9	32.8	△	両端面取。	2.5Y6/1黄灰	密	チ赤ガ	少	細	細		約2/3が黒色。	硬	完
〃	P9上層	245	管状土錘	4.6	3.1		0.9	41.0	△	両端面取、条痕。	10YR5/2灰黄褐	密	長ガ	少	細	細			硬	完
SB16	Pロ2	268	管状土錘	5.2	2.0		0.6	18.7	△	両端面取。	7.5YR6/6橙	やや密	チガ赤	並	細	0.5				
SB17	P1	279	管状土錘	6.5	2.1		0.8	26.1	△		2.5Y8/3淡黄	やや粗	チ(円・角)	多	0.5	4.0				完
SB20	P26	339	管状土錘				2.3	〈46.0〉		ハケ状痕残る。指頭圧痕。	5YR5/6明赤褐	やや粗	英チ雲閃	多	0.4	3.0		搬入品。		約1/3
〃	P25	340	管状土錘	4.3	2.0		0.6	13.3	△	端部面取り。	7.5YR6/4にぶい橙	密	チ赤	並	細	1.5				準完

出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 全長	全幅	全厚	孔径	重量(g)	磨耗	手法的特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 種類	量	粒度 普遍	最大	群	備考	焼成	残存率
SB20	P23	341	管状土錘	4.9	2.0		0.6	14.4	△	両端面取り。	7.5YR7/0 橙	密	チ赤	並	細	1.1				完
〃	P13	342	管状土錘	7.3	2.2		0.9	34.6	両端×	端部付近指オサエ。	10YR8/4 浅黄橙	やや粗	チ砂赤ガ	多	細	4.5	Ⅲ	欠け。		完
〃	P27	343	管状土錘					〈37.0〉		胎土中に籾痕。	10YR8/3 浅黄橙	並	チ赤砂ガ	並	細	2.0			硬	約1/4
〃	P23	344	有溝土錘	6.5	4.2	3.4		87.0	△		10YR8/3 浅黄橙	並	英チ赤	並	細	2.0		籾圧痕。	硬	完
〃	P23	345	有溝土錘	8.0	4.8	4.0		141.7	△		2.5Y8/3 淡黄	並	英チ赤	並	細	3.0		若干欠け。	硬	完
〃		346	有溝土錘	8.3	4.2	3.2		92.3	△	3方に溝。	7.5YR7/6 橙	並	チ赤ガ	並	0.5	5.0		若干欠け。		準完
SB21	Pロ1	374	管状土錘	4.7	1.7		0.6	9.0	△		7.5YR6/6 橙	密	チガ赤	少	細	0.8	Ⅰ		軟	完
〃	Pハ2	375	有溝土錘	7.4	3.1	2.8		57.9	×		7.5YR7/4 にぶい橙	粗	チ砂赤	多	0.5	8.0		若干欠け。		準完
〃	Pイ2	376	有溝土錘	8.1	5.0	4.2		159.9	△		2.5Y4/1 黄灰	並	英チガ	やや多	0.4	2.0		若干欠け。	硬	完
SK20		491	有溝土錘						△		10YR7/4 にぶい黄橙	並	赤チ砂	多	0.5	2.5		欠け。		
SK21		536	有溝土錘			3.5					10YR6/4 にぶい黄橙	やや粗	チ	やや多	1.0	5.0		欠け。		
SK22		596	管状土錘	7.1	3.2		0.9	62.7	△	両端面取。	10YR4/1 褐灰	密	チ	少	細	0.6		一端、若干欠損。		完
〃		597	管状土錘		3.1		1.0		△		2.5Y8/3 淡黄	密	チ	少	細	1.0			硬	約1/4
SK27	上層	632	有溝土錘			3.4					7.5YR7/4 にぶい橙	粗	チ砂(角・円)	多	1.0	5.0				
SK30	上層	758	有溝土錘	7.5	4.2	3.7		110.3		一端にシボリ目。	2.5Y8/2 灰白	やや粗	チ赤ガ	多	0.6	4.2		若干欠け。黒斑。	硬	準完
SK33	上層	788	管状土錘	4.9	2.1		0.5	20.3		両端面取。	10YR8/2 灰白	やや粗	英チ赤ガ	やや多	細	細			硬	完
SK34	Ⅺ層	858	管状土錘	3.0	1.2		0.5	2.8	△		2.5Y7/3 浅黄	並	英チ	並	細	3.0		欠損。		
〃	Ⅵ層	859	管状土錘	6.1	2.3		0.8	23.9			2.5Y8/4 淡黄	並	長英チ	並	細	1.0			やや硬	完
〃		860	有溝土錘	7.3	3.3	2.8		〈66.0〉	△		7.5YR6/6 橙	密	チ赤ガ	多	0.5	1.5			硬	3/4
〃		861	有溝土錘	6.6		3.3		〈66.0〉	△		10YR6/3 にぶい黄橙	並	チ赤ガ	並	0.5	2.0		1/3は欠損。	硬	約2/3
〃	Ⅹ層直上	862	有溝土錘	7.8	5.4	3.2		142.4	△	一端にシボリ目、大きな指頭圧痕。	2.5Y6/3 にぶい黄	並	ガチ赤砂	並	0.5	2.0			硬	完
SD40		937	管状土錘	5.7	2.2		0.5	19.7		両端面取。	10YR7/3 にぶい黄橙	やや密	英チガ	並	細	2.0			硬	完
〃		938	管状土錘	5.3	2.2		0.6	19.0		両端面取。	5Y2/1黒	やや密	長チガ	並	細	細		一端、若干の欠け。	硬	完
P15		1007	管状土錘	2.7	1.9		0.4	4.1	△		7.5YR8/6 浅黄橙	密	チ赤ガ	並	細	細				完
〃		1008	管状土錘	3.9	1.3		0.5	5.4	△		7.5YR8/6 浅黄橙	並	チ砂ガ	やや多	細	1.5		欠損。	やや硬	
〃		1009	管状土錘	4.3	1.2		0.3	4.3	△		2.5Y7/3 浅黄	粗	チ砂	多	細	1.8		欠損。黒斑。		
〃		1010	管状土錘	3.5	1.8		0.6	8.5	△		7.5YR8/6 浅黄橙	並	英チ(円)ガ	並	細	2.0		欠け。黒斑。	やや硬	半完
P14		1011	管状土錘	4.2	1.7		0.4	9.4			5YR7/6橙	並	チガ	並	細	0.5		一端、若干欠損。	硬	準完
〃		1012	管状土錘	4.8	1.7		0.7	10.0	△		5YR6/8橙	密	チ赤	やや少	0.5	1.4			軟	完
P15		1013	管状土錘	5.3	1.6		0.5	12.4	△		7.5YR7/6 橙	やや密	チガ	並	細	細		端部、若干の欠け。	やや硬	完
〃		1014	管状土錘	7.2	3.0		1.3	65.3	△		2.5Y7/3 浅黄	粗	チガ	多	0.5	4.0		黒斑。		完
〃		1015	有溝土錘	6.1	4.0			〈53.9〉	△		7.5YR7/6 橙	並	チ赤	やや多	0.6	7.0		欠け。		1/2強
P14		1016	有溝土錘	7.6	4.7	4.7		154.3		3方に溝。	10YR6/2 灰黄褐	並	チ	やや多	0.4	1.1		若干の欠損、半面は暗色。	硬	完

遺物観察表（金属製品・石器）

出土地点		挿図番号	器種	法量(cm) 全長	全幅	全厚	重量(g)	特徴
SB 10	P 1	185	鉄釘	5.7	1.2	0.6	9.7	断面矩形。
SB 19	Pハ4	307	鉄釘	8.8	2.3	0.4	16.3	
SB 20	P 12	347	鉄斧	5.2	4.8	1.2	101.9	
〃	P 20	348	鉄滓	5.3	6.7	3.6	121.1	
〃		349	青銅鏡	〈11.4〉		1.0	〈102.7〉	約1/3。
SB 21	Pイ4	377	鉄滓	6.0	11.2	3.6	222.4	
SB 22	P 9	396	小型砥石	10.4	3.1	2.0	99.6	粘板岩。全面使用。両主面、両側面は平滑、細かい擦痕あり。両主面には斜方向の切込み状使用痕。両端面にも切込み状使用痕。
SK 16		442	砥石	9.4	9.5	8.1	750.0	砂岩。磨耗あり。使用面は3面で、平滑。微かな凹線状の使用痕も見られる。
〃		443	台石	41.0	35.4	19.6	35.0kg	チャートの川原石。打滅部が赤変。
SK 20		492	砥石	19.5	12.1	9.9	3.0kg	砂岩。一主面に平滑な使用痕、黒～赤褐色に変色。各端部に敲打痕。両主面と稜部に切込み状使用痕。大きく欠損。
〃		493	台石	19.2	12.1	8.8	2.5kg	砂岩。一面に敲打痕。3ヶ所欠損。
SK 22		598	鉄釘		1.2	1.1		欠損。
〃		599	鉄滓	6.8	6.4	3.8	148.0	
SK 28		664	鉄滓	3.6	4.6	2.6	32.2	底部に炉壁又は器肉の一部が付着。
SK 29	床	674	鉄滓	3.2	2.4	2.1	8.5	
SK 33		791	鉄釘	〈 6.3〉	0.8	0.7	〈 19.8〉	やや曲がる。欠損。
〃		792	鉄滓	4.1	3.0	2.6	29.4	
SK 34	Ⅶ層	863	鉄滓	9.1	6.5	4.2	262.8	
〃	Ⅹ層	864	鉄製品	4.8	0.9	0.6	3.2	
〃		865	台石	19.9	13.0	6.0	1.5kg	
〃		866	台石	25.1	18.0	12.5	6.0kg	
〃		867	台石	17.2	13.0	13.3	4.2kg	砂岩。使用面は打滅、剝離。四方を打割。
SD 26		900	鉄製品	13.0	3.5	0.4	66.5	

遺物観察表（瓦）

出土地点		挿図番号	器種	磨耗	特徴	表面色調	胎土 素地	含有鉱物 種類	量	粒度 普遍	最大	焼成	残存率
SX 2	中層	982	瓦	やや△	厚さ1.9cm。凸面に縄目、凹面は平滑、端面ケズリ。	N7/灰白	やや粗	黒英長チ	並	細	1.5	やや軟	断片

遺物観察表（羽口）

出土地点		挿図番号	法量(cm) 外径	孔径	残存長	特徴	色調	胎土 素地	含有鉱物 種類	量	粒度 普遍	最大	残存率
SK 16		441	〈 7.6〉	〈 3.3〉	3.1	胎土中に繊維痕。断面5YR6/6。表面被熱変色。一部硬化。先端に近い部分か。	2.5Y7/3 にぶい黄橙	並	英チ砂	多	細	4.0	断片
SK 29	床	673	〈 7.2〉		3.2	先端は溶融或いは欠損していると思われるが、被熱、付着物の状態から見て、先端付近。素地5YR6/6。	2.5Y6/1 黄灰	やや密	チ	並	0.5	3.2	断片

4．J区

(1) 調査区の概要と基本層準

① 調査区の概要（Fig. 103）

J区は、調査対象地の中央南寄りで南から3本目の調査区である。東西方向に長い調査区で延長約116m、幅4～4.3m、面積552m²を測り、長軸の方向はN－258°1′27″である。現地表面の標高は東端で12.2m、西端で11.9m前後を測る。調査にあたっては、東端から4m毎にJ1、J2、J3とJ30までグリッドを設定し、遺物の取り上げや層準観察の目安とした。ただしJ1、J2は溝の中であり後のK区の調査区に組み入れた。J区からは竪穴住居1棟を中心に、溝、土坑、ピット等弥生時代後期に属する遺構を検出した。また少数ではあるが古代の遺構も検出することができた。

② 基本層準（Fig. 104）

J2～J8

Ⅰ層：現在の耕作土である。

Ⅱ層：旧耕作土と考えられる。

Ⅲ層：灰赤色（2.5YR 6/2）に極暗赤褐色（5YR 2/4）粒を含む粘土質シルト層。層厚10～26cmを測る。西方に寄るにしたがいにぶい黄褐色（10YR 4/3）に近くなる。中央付近でⅢ層、西方ではⅣ層に相当するもので、J区に普遍的に存在する層。少量の土器片を含む。

Ⅳ層：暗褐色（10YR 3/3）粘土質シルト層。層厚8～20cmを測る。

Ⅴ層：褐灰色（10YR 5/1）と褐色（7.5YR 4/4）が混ざる。層厚0～17cmを測る。ST 11の上方にのみ認められる。

Ⅵ層：褐灰色（10YR 4/1）に褐色（7.5YR 4/6）粘土質シルトに砂と数mm～数cm大の礫を多量に含む。層厚0～26cmを測る。K区のSRの最上層に相当するものでSRの末期的な層であると考えられる。J2付近にしか見られない。

Ⅵ′層：灰色砂礫層。

Ⅶ層：にぶい黄褐色（10YR 4/3）粘土質シルトに砂礫を多量に含む。層厚0～16cmを測る。

Ⅷ層：砂礫に黒褐色（10YR 2/2）粘土質シルトを含む。層厚0～6cmを測る。ST 11の上で浅い落ちこみとして検出される。

J13～J16

Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：旧耕作土。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10YR 4/3）に褐色（10YR 4/6）が混ざり黒褐色（7.5YR 2/2）粒を若干含む粘土質シルト層。層厚7～36cmを測る。J区を貫く層で、西のⅣ層、東のⅢ層に相当するものである。

Ⅳ層：暗褐色（10YR 3/4）に灰色を含む粘土質シルト層。層厚0～34cmを測る。中央トレンチ固有で、東西にはない。褐灰色粘質土。

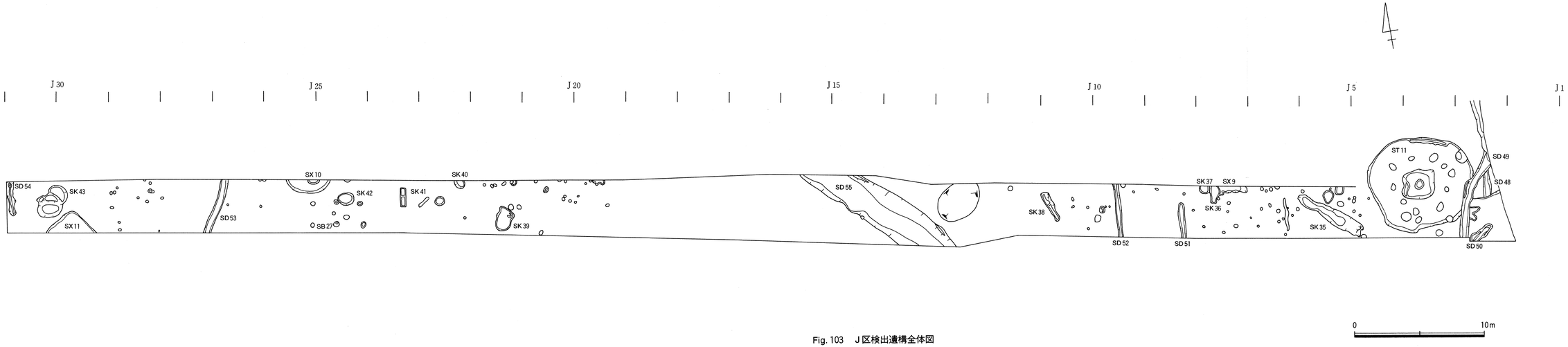


Fig. 103　J区検出遺構全体図

Ｊ24～Ｊ26

Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：旧耕作土。下層に床土がある。

Ⅲ層：黒褐色（2.5Ｙ3/2）粘土質シルト層。層厚４～10cmを測る。Ⅲ′層とともに旧耕作土か。

Ⅲ′層：オリーブ褐色（2.5Ｙ4/6）粘土質シルト層。層厚４～８cmを測る。

Ⅳ層：暗褐色（10YR3/4）に黒褐色（7.5YR2/2）が小さくブロック状に含まれる粘土質シルト層。層厚６～14cmを測る。

Ｊ29～調査区終点

Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：旧耕作土。

Ⅱ′層：オリーブ褐色（2.5Ｙ4/6）粘土質シルト層。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）に黒褐色（7.5YR2/2）粒を含む粘土質シルト層。

Ⅳ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）と少量の褐色（10YR4/6）が混ざり黒褐色（7.5YR2/2）粒を含む粘土質シルト層。東方のⅢ層に相当する。

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）に多量の褐色（10YR4/6）を含む粘土質シルトに若干の黒褐色（7.5YR2/2）粒を含む粘土質シルト層。Ｊ27付近で消滅している。

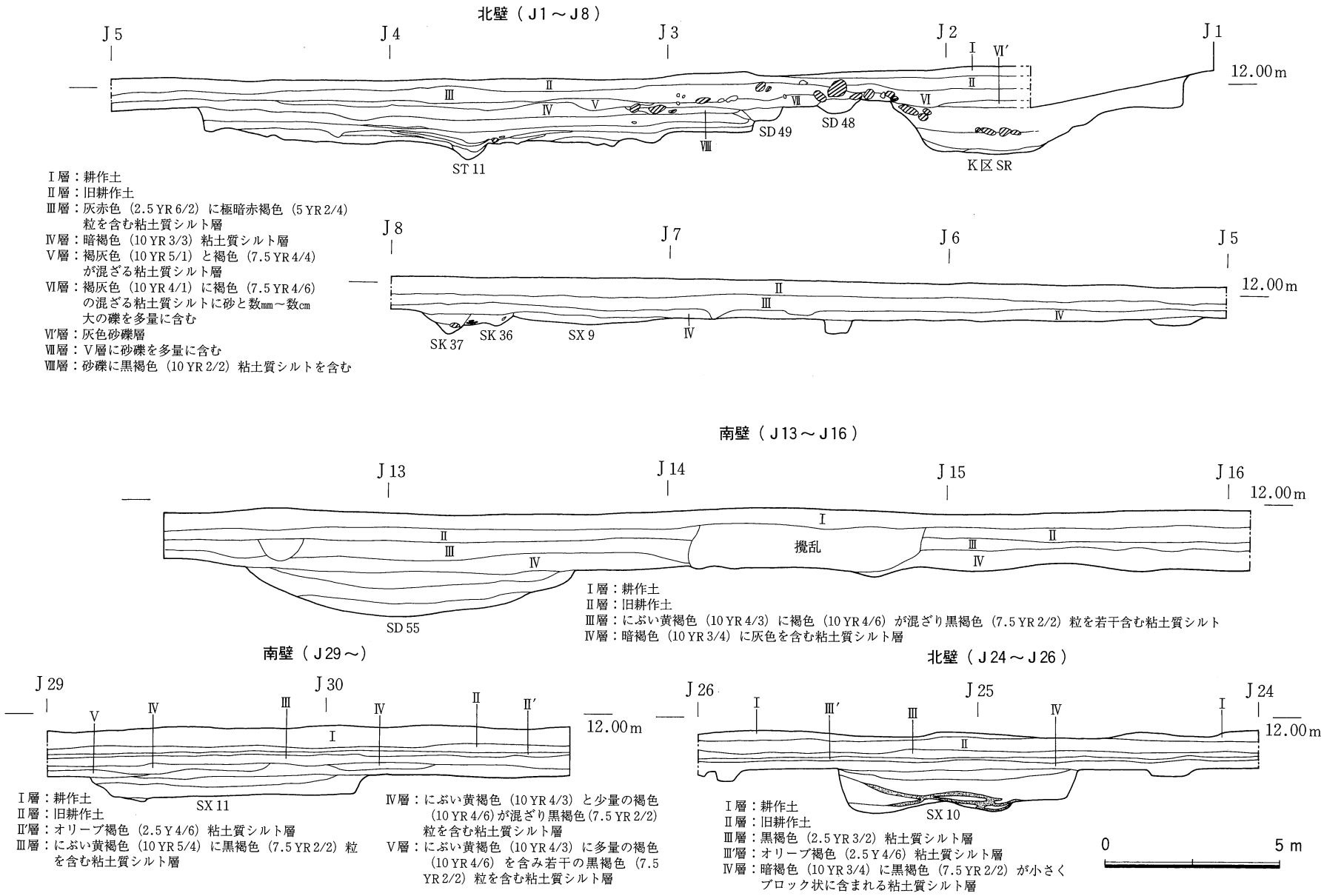


Fig. 104　J区北壁及び南壁基本層準

(2) 検出遺構と遺物

① 竪穴住居

ST 11（Fig. 105～108）

調査区東端に位置している。住居の東部はSD 49に切られている。遺構は基本層準のⅣ層を除去したところで検出した。

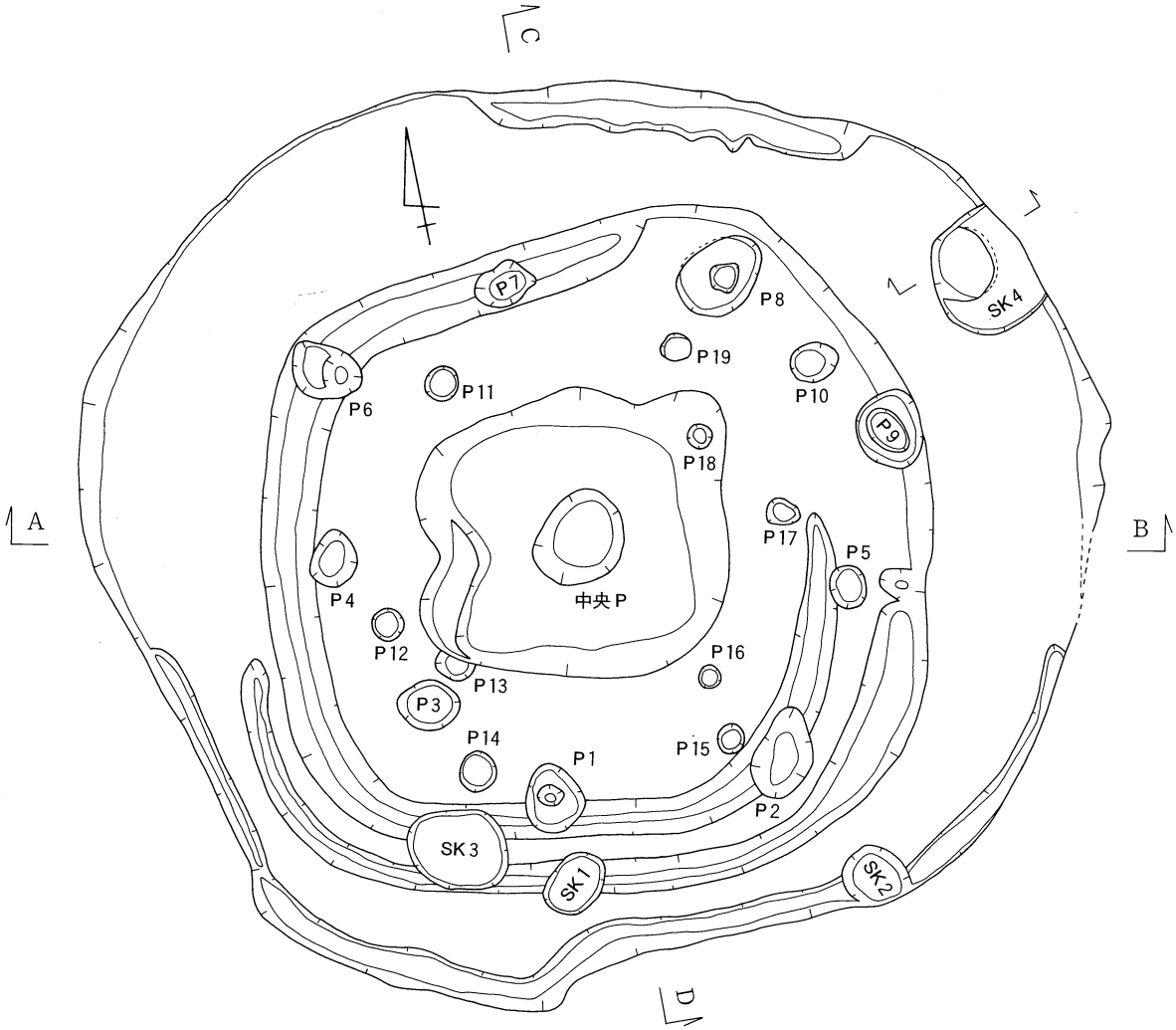
この住居は、２度以上建てかえられたものであると思われ、Ⅱ層及びⅢ′層を除去すると古い柱穴を確認することができた。その古い住居から述べると、新しい住居跡の検出面から約40㎝の深さで検出できた。東西約5.4ｍ、南北約5.3ｍを測る不整な円形の竪穴住居である。１回目と２回目の住居のレベルはほぼ同じであったと思われ、それぞれのプランは明確には出なかったが、２つの住居の壁溝が重なるような形で、渦巻状に検出された。埋土はⅢ層で地山土が多く含まれ、新しい住居の床面となっている。床面はほぼ水平であったと思われ、中央ピットは新しい住居の中央ピットに破壊されている。

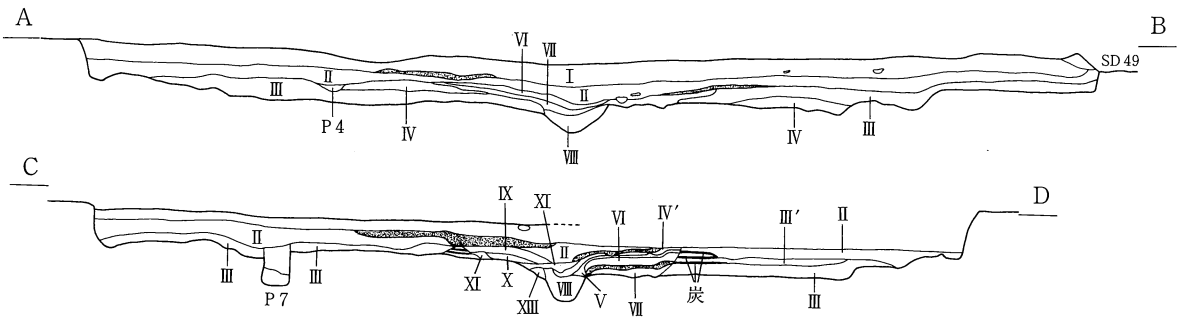
柱穴はＰ11～Ｐ19の９個が確認でき、最も古い住居の主柱穴がＰ13、Ｐ16、Ｐ18で、柱間距離はＰ13～Ｐ16が2.04ｍ、Ｐ16～Ｐ18が1.9ｍである。その他の柱穴は２回目の住居の主柱穴で、その柱間距離はＰ11～Ｐ12が1.96ｍ、Ｐ12～Ｐ14が1.36ｍ、Ｐ14～Ｐ15が2.04ｍ、Ｐ15～Ｐ17が1.84ｍ、Ｐ17～P19が1.44ｍ、Ｐ19～Ｐ11が1.88ｍである。（後の住居の建て換え時の削平によるものか）遺物はほとんど認められなかった。

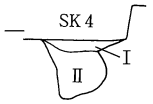
一番新しい住居は、短軸が南北７ｍ、長軸は確認できるところで東西7.8ｍを測るが、その東端をSD 49に切られていることを考慮すると８ｍを超えるものと思われる。南南西には40㎝の張出しがあり、その部分を含める南半分弱と、北北東に壁溝の跡がある。埋土はⅠ、Ⅱ′層の暗褐色（10 YR 3/4）粘土質シルトが主であり、中央北西部は炭化物が多く含まれていた。床面はほぼ水平で、中央ピット周辺には炭が広がり、その炭の上に朱が認められる範囲があった。（Fig. 105・106）中央ピットは住居のほぼ中央に配され、ピットの内部には一段のテラス状の落ち込みが認められる。東西約2.4ｍ、南北2.28ｍの隅丸方形で床面からの深さ82㎝前後を測り、炭化物がテラス状上部から中央部に落ち込むように堆積している。ピットはＰ１～Ｐ10とSK１～SK４までが確認できた。主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ９、Ｐ８、Ｐ７、Ｐ６、Ｐ４であると考えられ、Ｐ５、Ｐ10、Ｐ３は補助柱と思われる。また、SK４は貯蔵穴で、一段のテラス状になっており、その南部には10㎝と15～20㎝大の石が置かれており蓋をしていた可能性がある。柱間距離はＰ１～Ｐ２が1.88ｍ、Ｐ２～Ｐ９が2.76ｍ、Ｐ９～Ｐ８が1.8ｍ、Ｐ８～Ｐ７が1.72ｍ、Ｐ７～Ｐ６が1.5ｍ、Ｐ６～Ｐ４が1.48ｍ、Ｐ４～Ｐ１が2.56ｍである。

遺物は、埋土及び床面より壺（１～13、15、16）、甕（14、17～25）、高杯（26～42）、鉢（43、44）、石鏃（54～56）、鉄鏃（58－a）、鉋（57）、鉄斧（59）、銅鏃の基部（58－b）、ガラス小玉である。口縁部の出土点数は壺52、甕59、高杯15、鉢３である。ガラス小玉は80点出土しており、その分布状況（Fig. 106）に示すように床面より不規則に出土している。ただし３点古い住居より出土している。

ST 11は後期Ⅱ期に属する。







SK4
Ⅰ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）に若干の褐色（10YR4/4）と黒褐色（10YR2/3）を含む粘土質シルト
Ⅱ層：褐色（10YR4/4）とにぶい黄褐色（10YR4/3）と黒褐色（10YR2/3）が混ざる粘土質シルト

炭化物　0　2 m

Ⅰ層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト
Ⅱ層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト（暗め）
Ⅲ層：黄褐色（10YR5/6）と暗褐色（10YR3/3）と褐色（10YR4/6）がブロック状に混ざる粘土質シルト
Ⅲ′層：褐色（10YR4/4）に暗褐色（10YR3/4）がブロック状に混ざる粘土質シルト
Ⅳ層：Ⅲ層に黄褐色（10YR5/6）を多く含む粘土質シルト
Ⅳ′層：暗褐色（10YR3/3）と褐色（10YR4/4）がブロック状に混ざる粘土質シルト
Ⅴ層：褐色（10YR4/4）粘土質シルトに炭化物が混ざる
Ⅵ層：褐色（10YR4/4）粘土質シルト
Ⅶ層：Ⅵ層に多量の炭化物が混ざり若干の焼土を含む
Ⅷ層：炭化物に褐色（10YR4/4）粘土質シルトがブロック状に混ざる
Ⅸ層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトに炭化物と焼土を含む
Ⅹ層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルトに若干の炭化物を含む
Ⅺ層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルトに焼土を含む
Ⅻ層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトと炭化物が混ざる
XIII層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルトに若干の炭化物と焼土を含む

Fig. 105　ST 11平面図及びセクション図

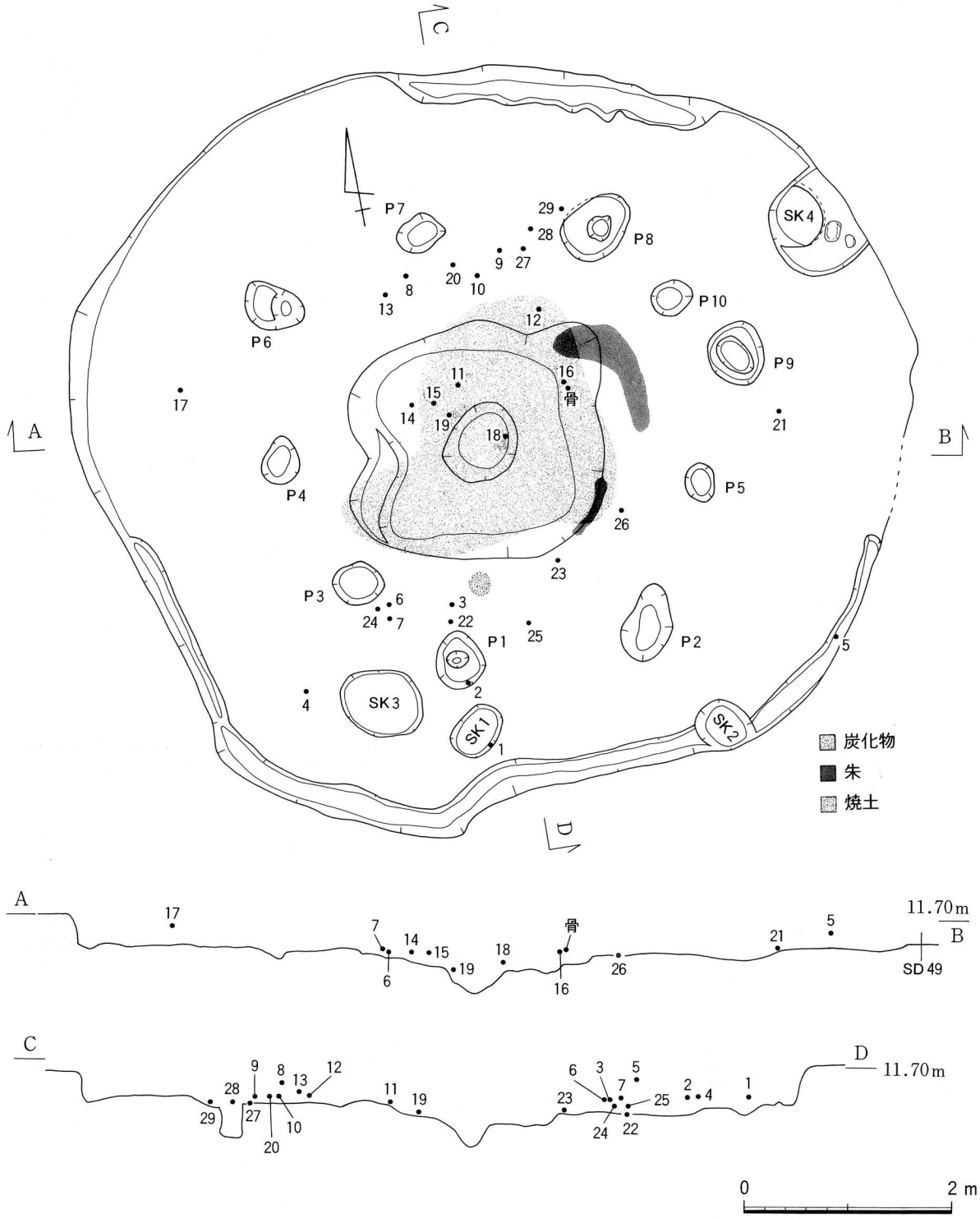


Fig. 106　ST 11平面・エレベーション図及びガラス小玉・朱・炭・焼土出土状況図

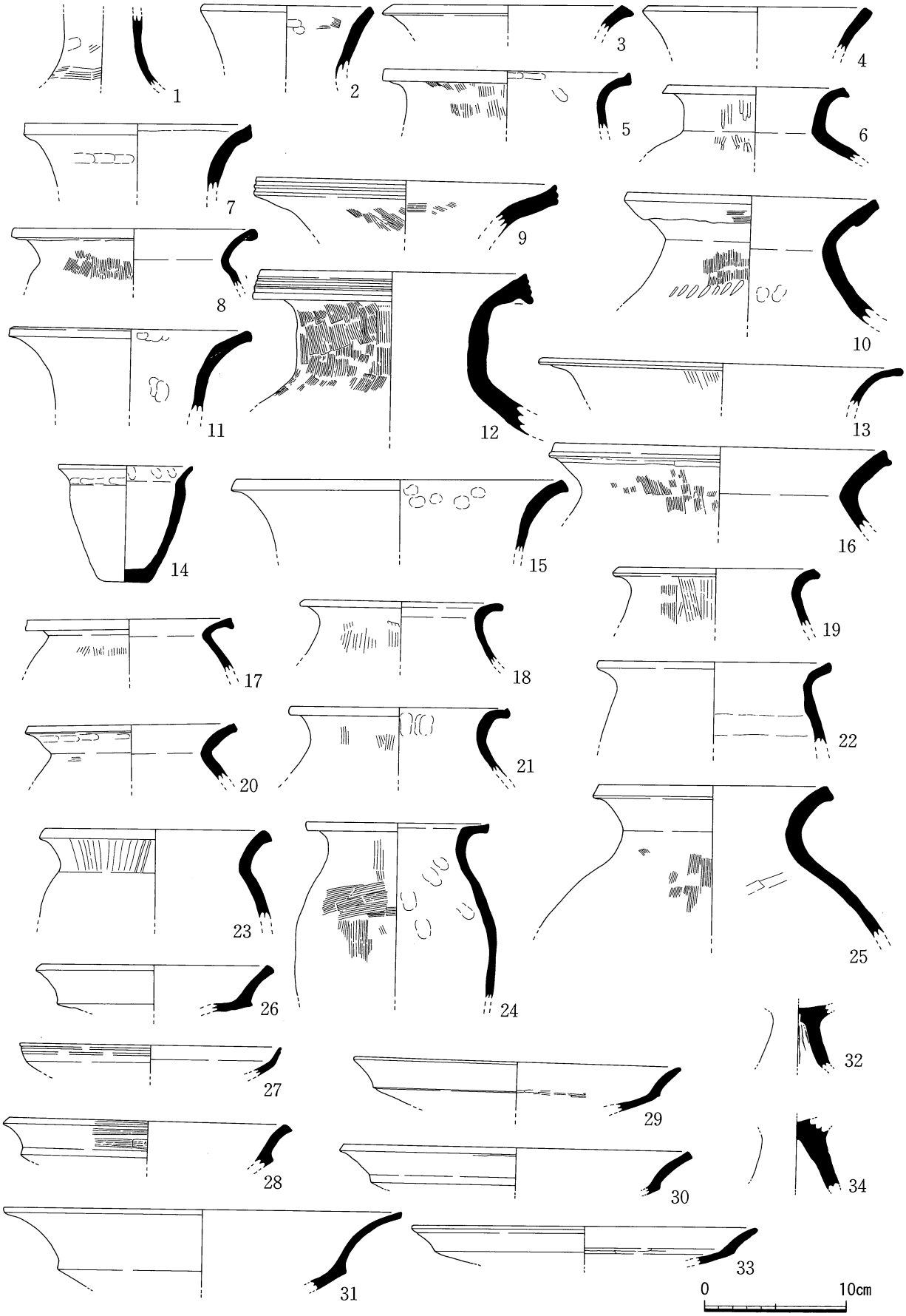


Fig. 107　ST 11出土遺物実測図（壺：1～13・15・16、甕：14・17～25、高杯：26～34）

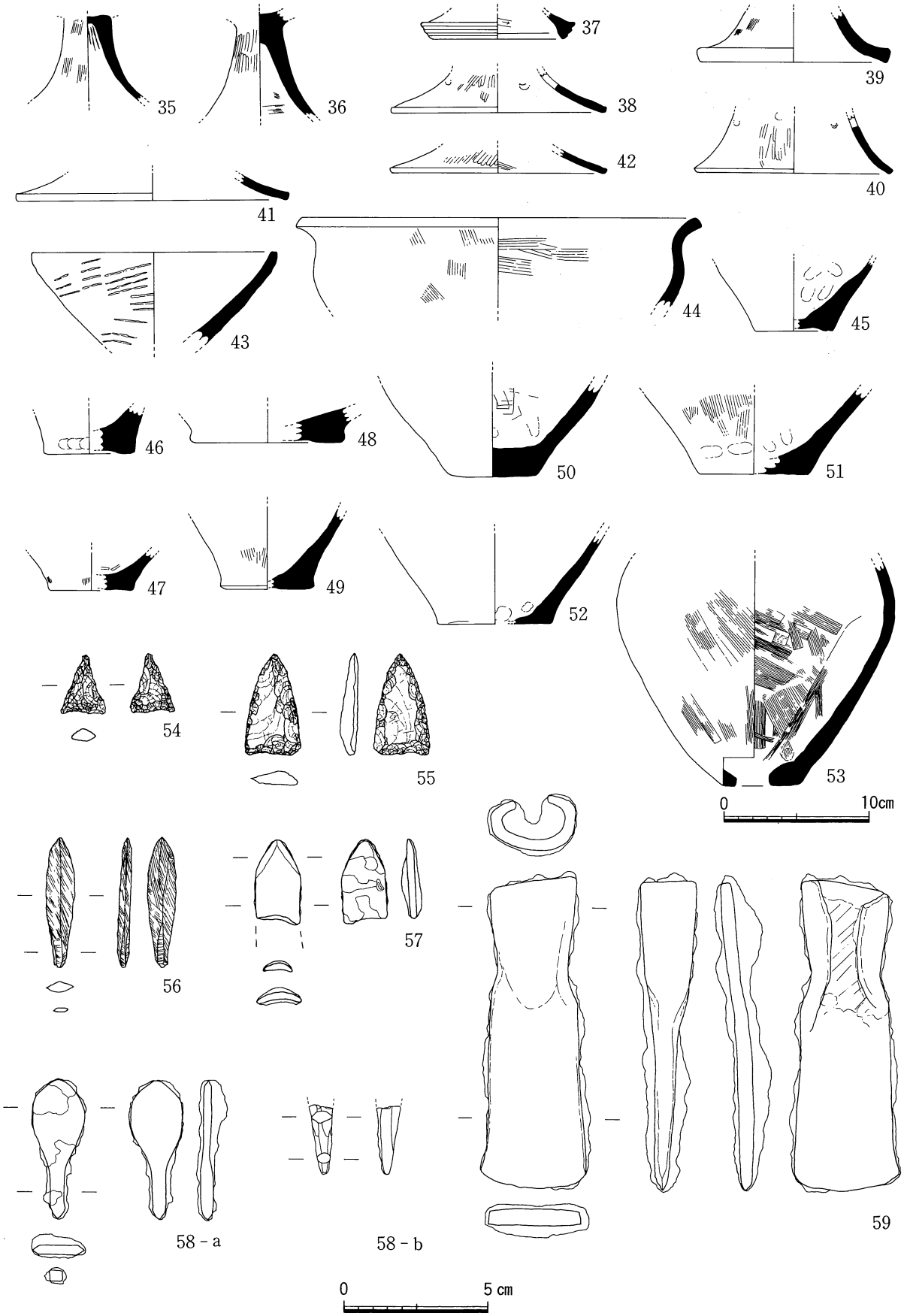


Fig. 108　ST 11出土遺物実測図（高杯：35～42、鉢：43・44、石鏃：54～56、
鉇：57、鉄鏃：58 - a、銅鏃：58 - b、鉄斧：59）

表７　ST 11ピット・土坑計測表

遺構 No.	平面規模(cm)	深さ(cm)	遺構 No.	平面規模(cm)	深さ(cm)
P 1	54×43	23	P 13	32×28	40
P 2	74×46	19	P 14	32×28	48
P 3	50×40	7	P 15	24×22	49
P 4	44×34	19	P 16	18×18	36
P 5	36×28	9	P 17	28×20	44
P 6	58×42	63	P 18	22×20	33
P 7	50×32	36	P 19	26×22	31
P 8	72×52	64			
P 9	60×42	64	SK 1	54×40	20
P 10	38×30	17	SK 2	50×48	32
P 11	28×26	24	SK 3	84×69	30
P 12	26×26	48	SK 4	80×94	81

②　掘立柱建物

SB 27（Fig. 109）

調査区西寄りに位置し、SK 42、SK 10と近接する。確認部は１間×２間である。柱間距離はＰ１～Ｐ２が1.84m、Ｐ２～Ｐ３が1.78m、Ｐ３～Ｐ４が1.6m、Ｐ４～Ｐ５が2.1m、Ｐ５～Ｐ６が1.9m、Ｐ６～Ｐ１が1.64mである。北側の柱穴Ｐ１～Ｐ３の埋土は暗褐色（10 YR 3/3）に褐色（10 YR 4/4）をブロック状に含む粘土質シルトで、南側のＰ４～Ｐ６の埋土は黒褐色（10 YR 2/3）ににぶい褐色（10 YR 4/3）をブロック状に含む粘土質シルトである。

遺物は、Ｐ２以外は少量の土器片を含んでいたが、図示できるものはない。

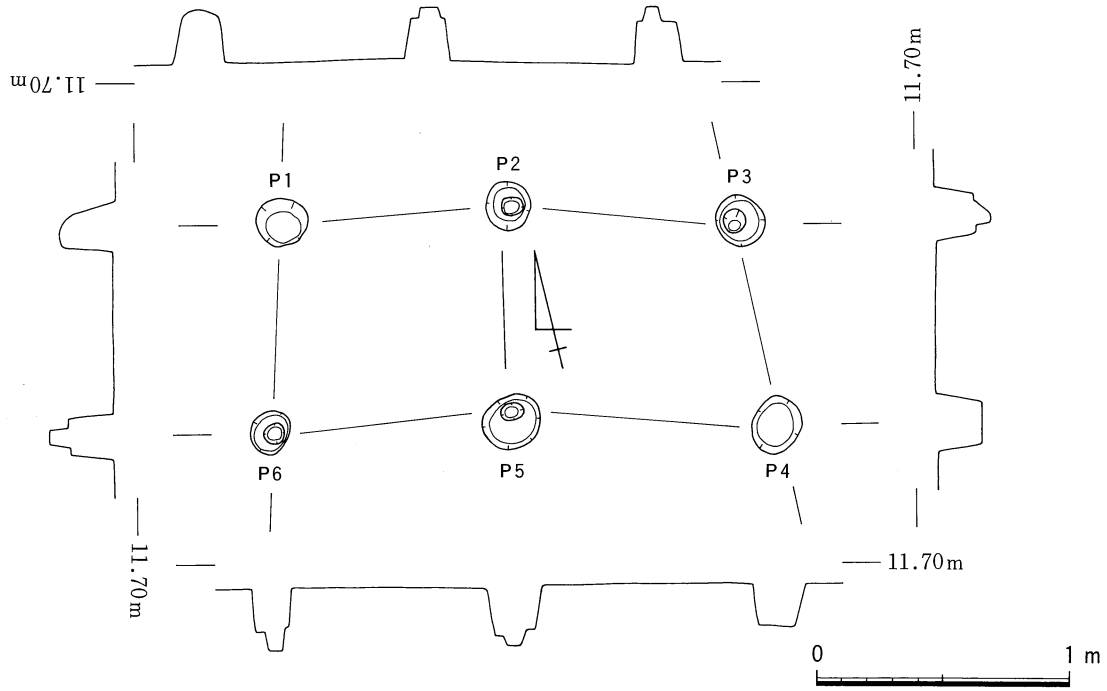


Fig. 109　SB 27平面及びエレベーション図

③　土坑

SK 35（Fig. 110）

調査区東端に位置し、東にST 11と隣接し、北部に多数のピットと近接する。南西方向に細長く長軸は5.72mで、短軸は中央部で1.12mを測る。底部はゆるく窪んだ面を成し、壁は南部が急に立ち上がるが、他はゆるやかに立ち上がり深さは37cmを測る。埋土はⅠ層：褐灰色粘土質シルトと褐色粘土質シルトが混ざる。Ⅱ層：灰黄褐色粘土質シルト、Ⅲ層：にぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅳ層：Ⅲ層より明るいにぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅴ層：Ⅲ層より明るくⅣ層より暗いにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は壺（60、61）、甕（62～64）、高杯（67、68）、器台（65）、鉢（70）、砥石（71）である。口縁部数は壺４、甕23、高杯７である。また、出土状況はそのほとんどが埋土上～中層である。後期Ⅱ-１期に属する。

SK 36（Fig. 111）

調査区東寄りに位置し、東部はSX 9を切っている。北部は調査区外に出ており、西部はSK 37に切られており全体の規模は把握できないが、確認部分での長軸は南北に1.42m、短軸は東西に84cmを測り、深さは18cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり一段のテラス状の落ち込みを有する。東部には直径17cm、深さ20cmのピットも認められる。埋土は暗褐色（10 YR 3/3）に極暗褐色（7.5 YR 2/3）を含む粘土質シルトの単純Ⅰ層である。

出土遺物は壺（72、75）、甕（73、74、76、77）、高杯（78、79）、口縁部数は壺２、甕７である。また図示していないが砥石も出土している。土器は器表の荒れが激しく、煤けや被熱赤変したものが目立った。後期Ⅱ-１期に属する。

SK 37（Fig. 111）

調査区の中央東よりに位置し、東部でSK 36を切っている古代の土坑である。北部の半分ほどが調査区外に出ており、その規模は不明であるが確認部分での平面形は半不整円形であり、南北2.5m、東西1.58mを測る。内部には一段の落ち込みがあり、深さ28cmを測る。埋土は落ち込み部に暗褐色（10 YR 3/3）に褐色（10 YR 4/6）をブロック状に含む粘土質シルトが堆積しており（Ⅱ層）、それより上部は灰黄褐色（10 YR 4/2）に褐色（7.5 YR 4/4）を含む粘土質シルトで微量の炭を含む（Ⅰ層）。遺物で図示できたものは土師器杯（81）、須恵器甕（82）である。SK 37は古代に属する。

SK 38（Fig. 112）

調査区中央東寄りに位置する。南北方向に長く長軸2.5m、短軸52cm前後を測る。北部から南部にむけてテラス状の落ち込みを有する。遺物は甕（83）、高杯（84）が出土しており、口縁部数は甕１である。細片が多く図示できるものは少ない。

SK 39（Fig. 113）

調査区の中央部西寄りに位置する。周囲にP 24、P 25が近接し、その北側にも多数のピット群が並んでいる。不整方形の平面形を有し、長軸1.86m、短軸1.2m、深さ８cmを測る。北東部隅にコの字型の落ち込みが確認でき、底面からの深さは５cmを測る。遺物は細片が少量出土しているだけで図示できるものはない。

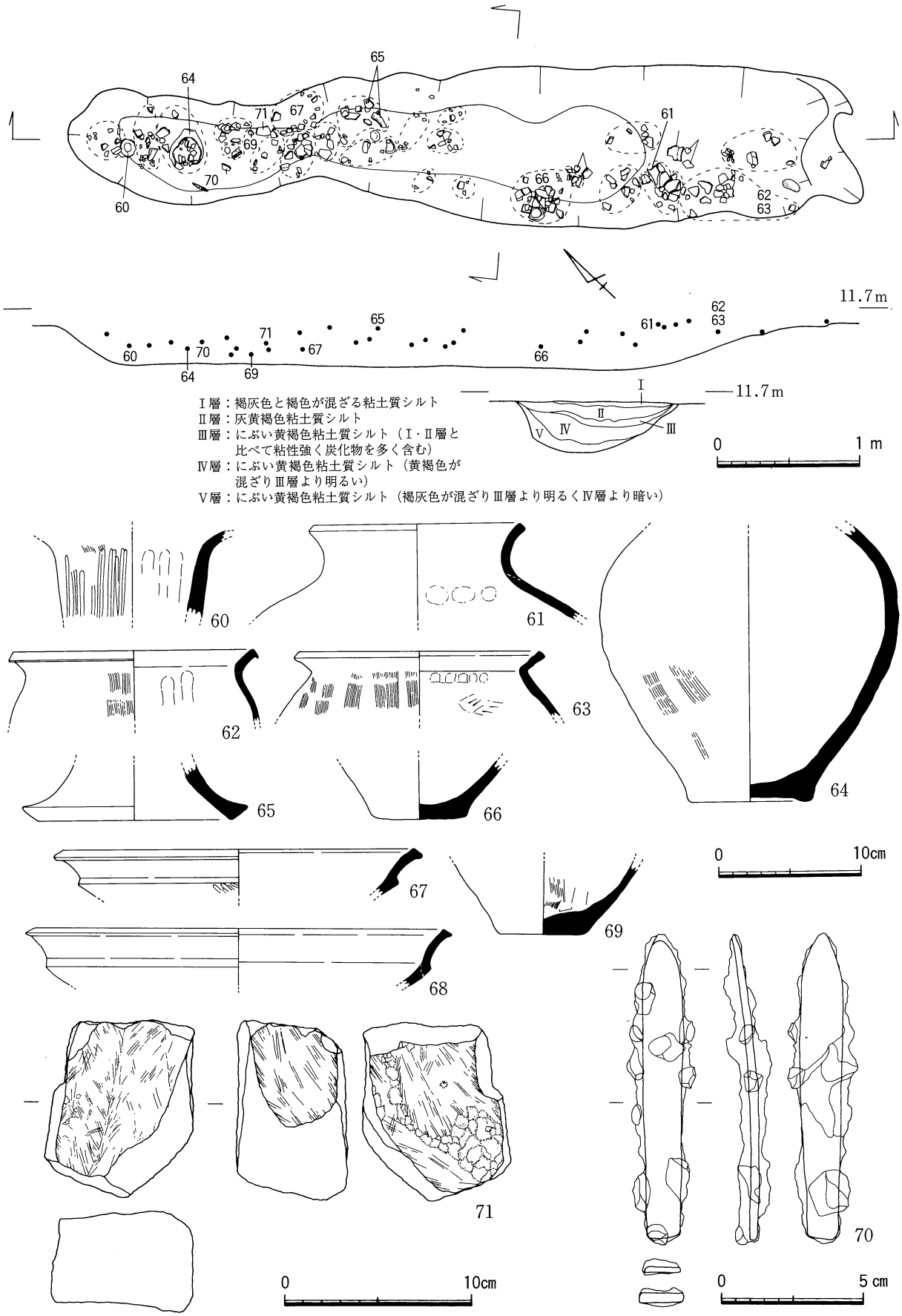


Fig. 110　SK 35遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：60・61、甕：62～64、高杯：67・68、器台：65、叩石：71、鉈：70）

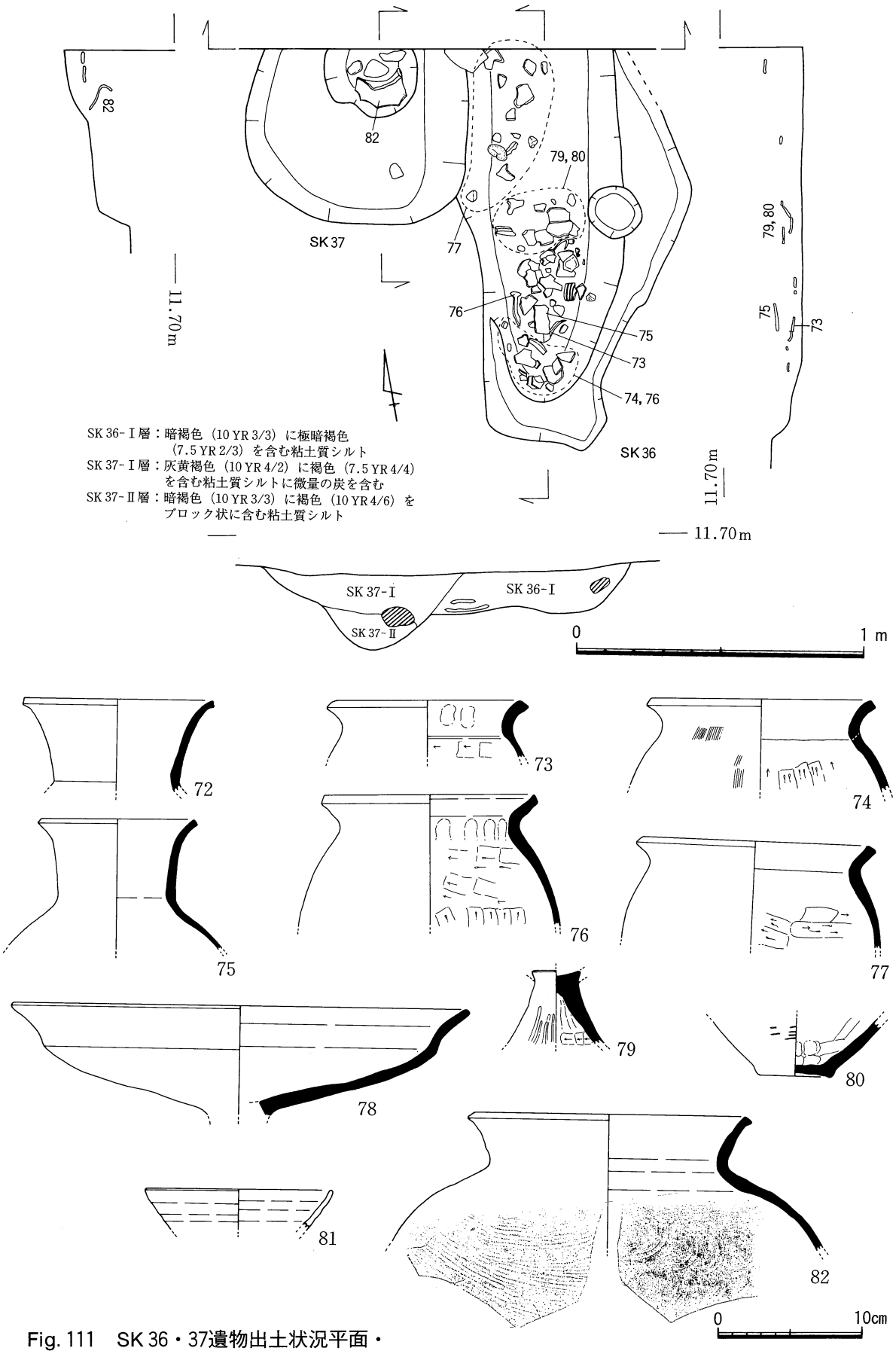


Fig. 111　SK 36・37遺物出土状況平面・
セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：72・75、甕：73・74・76・77、高杯：78・79、須恵器甕：82、土師器杯：81）

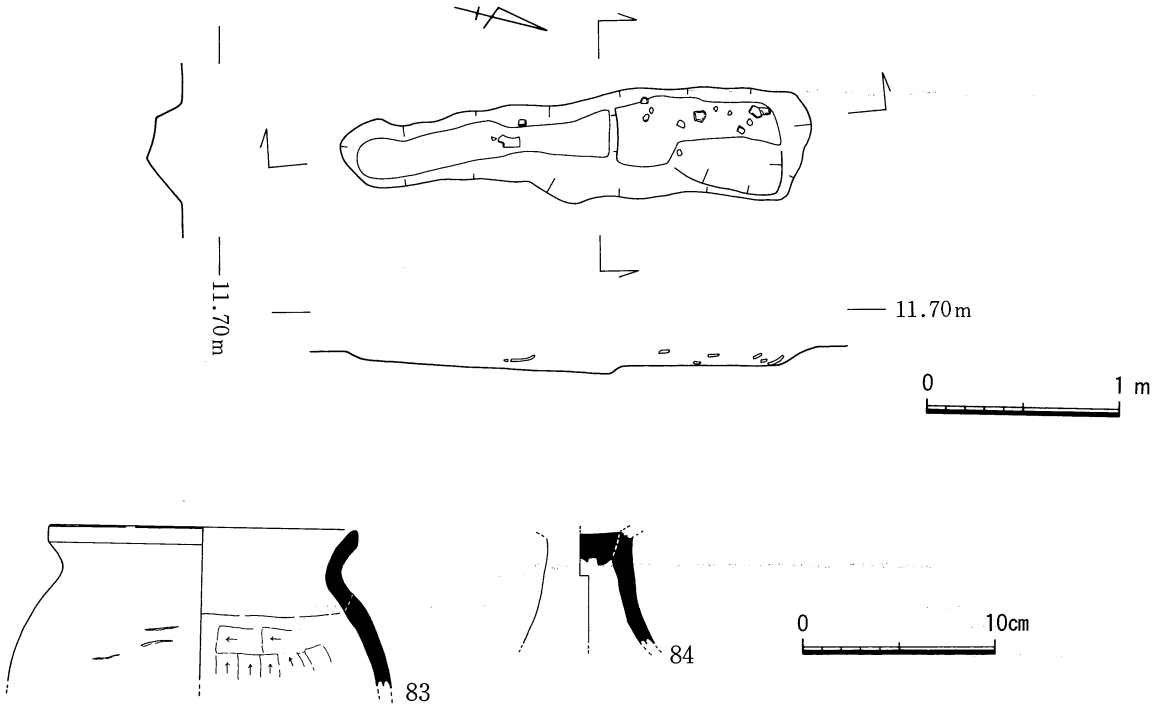


Fig. 112　SK 38遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（甕：83、高杯：84）

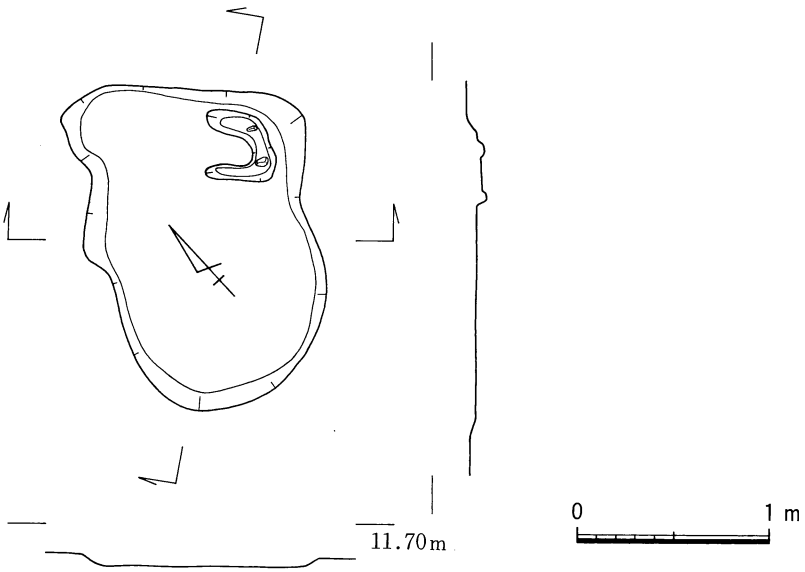


Fig. 113　SK 39平面及びエレベーション図

SK 40（Fig. 114）

調査区中央西寄りに位置し、北部が調査区外に出ており全体の規模は把握できないが、確認部分では東西80cm、南北56cm前後を測り半楕円形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、深さ22cm前後を測る。出土遺物はない。

SK 41（Fig. 114）

調査区中央東寄りに位置し、東側にP 32が近接する。北東方向に長く、長軸1.06m、短軸は19cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底面までの深さ6cmを測る。出土遺物はない。

SK 42（Fig. 115）

調査区西寄りに位置し、南部にSB 27が近接する。東西方向に長い楕円形の平面形を有し、長軸1.16m、短軸93cmを測る。壁は南部と東部はゆるやかに立ち上がるが、西部と北部は急に立ち上がり底面までの深さは18cmを測る。

SK 43（Fig. 116）

調査区西端に位置し、南部にSX 11が近接し、西部にSD 54が隣接する。北東に長い不整楕円形の平面形を有し、北東部から南西部に向かって2段のテラス状の落ち込みを有する。長軸は2.82m、短軸は1.6mを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、床面までの深さは50cmを測る。遺物は土器が出土しているが、細片が多く図示できるものはない。

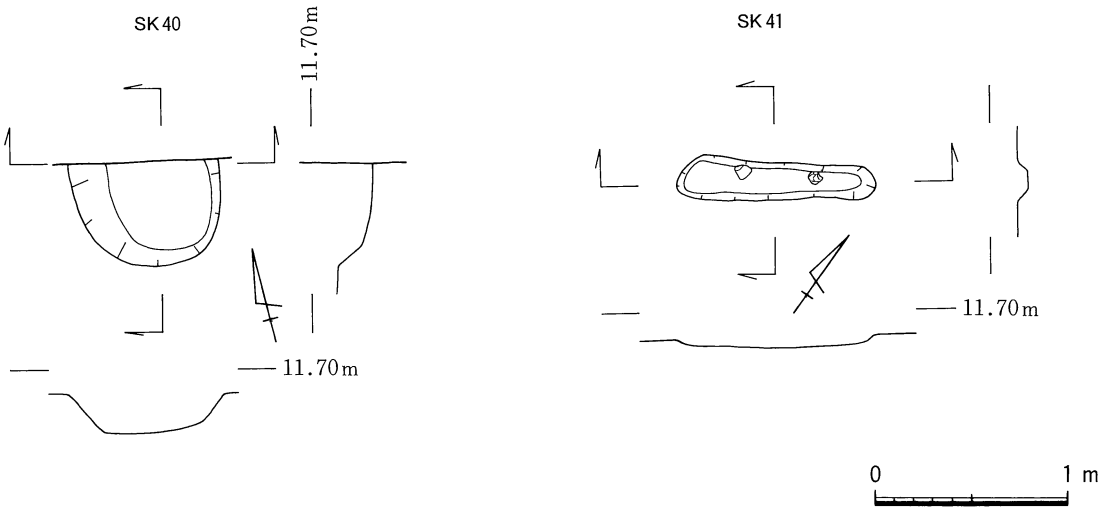


Fig. 114　SK 40・41平面及びエレベーション図

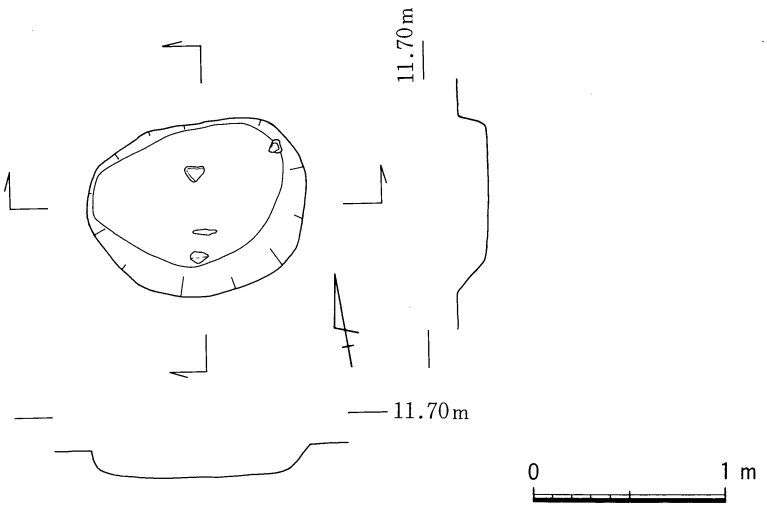


Fig. 115　SK 42平面及びエレベーション図

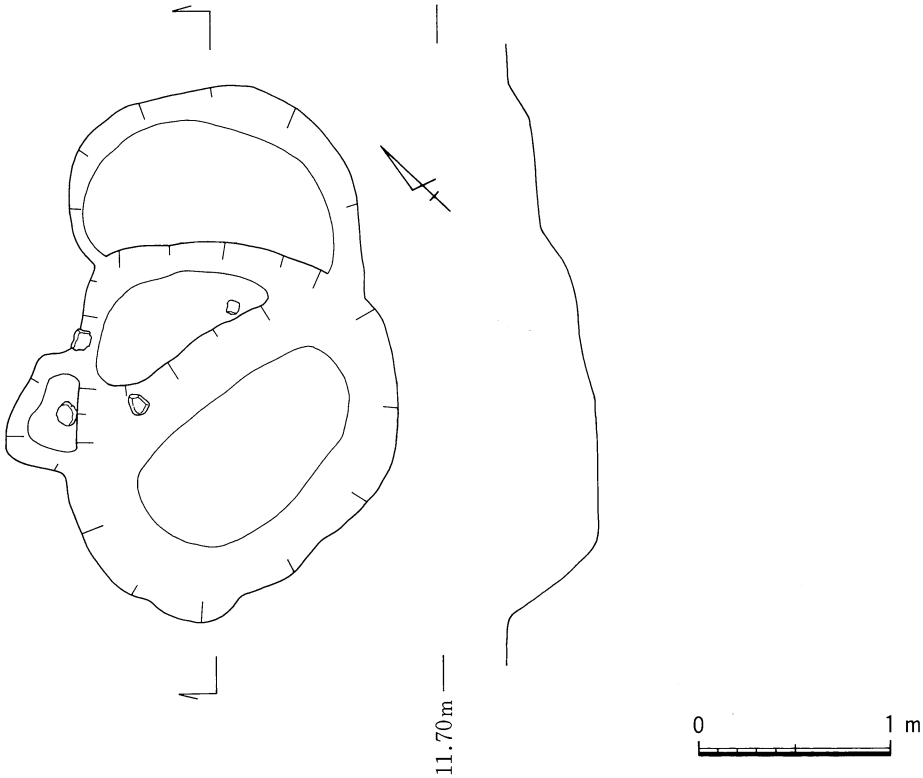


Fig. 116　SK 43平面及びエレベーション図

④　溝

SD 48（Fig. 117）

調査区東端に位置し、ST 11、SD 49が西部に隣接する。北部はSD 49、南部もその後の溝によって切られているため全体の規模は把握できないが、南北に長く確認部の最大幅は60㎝前後である。深さは10㎝ほどで出土遺物は細片だけで図示できるものはない。

SD 49（Fig. 118）

調査区東端に位置し、南東方向にやや屈曲している。北部でK区の溝に切られ、南部は調査区外に出ているため、全体の規模は不明である。東部でST 11を、西部でSD 48を切り、SD 50と近接する。確認部の長さは6.5m、幅72㎝前後である。断面は逆台形で床面はほぼ水平である。埋土はⅠ層：砂に若干の黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルト、Ⅱ層：砂に黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルト、Ⅲ層：黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルトである。

出土遺物は数個の弥生土器が含まれていたが、図示できるものはない。

SD 50（Fig. 117）

調査区西端に位置し、SD 49と隣接する。南部が調査区外に出ているため、全体の規模は不明であるが、南東方向に長く、確認部の長さは2.06m、幅70㎝前後である。全体に一段のテラスを有し、

深さは15cmを測る。埋土はⅠ層：砂礫層、Ⅱ層：黒色（7.5YR2/1）と灰黄色（2.5Y7/2）が混ざる粘土質シルトである。

出土遺物は数個の弥生土器が含まれていたが、図示できるものはない。

SD 51（Fig. 119）

調査区中央東に位置し、SK 36・37が北東にある。基本層準Ⅳ層下で検出したが、南部が調査区外に出ており全体の規模は不明である。南北に長く、確認部分は長さ1.37m、幅23cm前後である。底部形態は船底型を呈し、深さは北部で20cmで南部は12cm前後と浅くなっている。

遺物は壺（85、87、90）、高杯（88）が出土している。出土状況は、図示してあるもの全て上層から出土している。

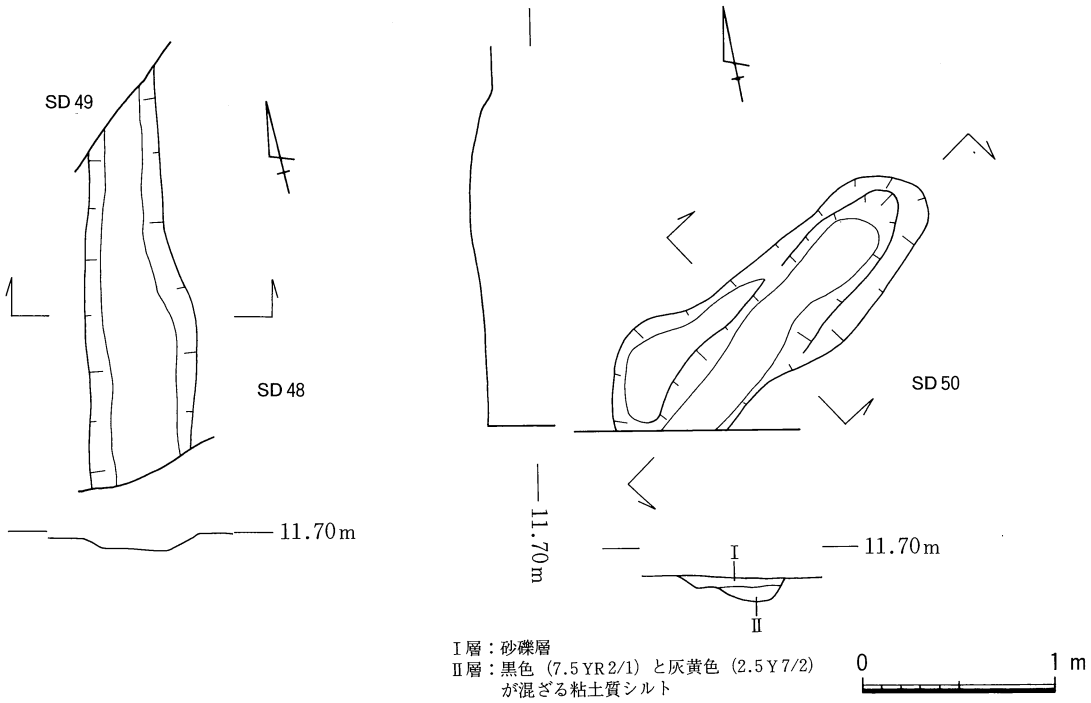


Fig. 117　SD 48・50平面・セクション及びエレベーション図

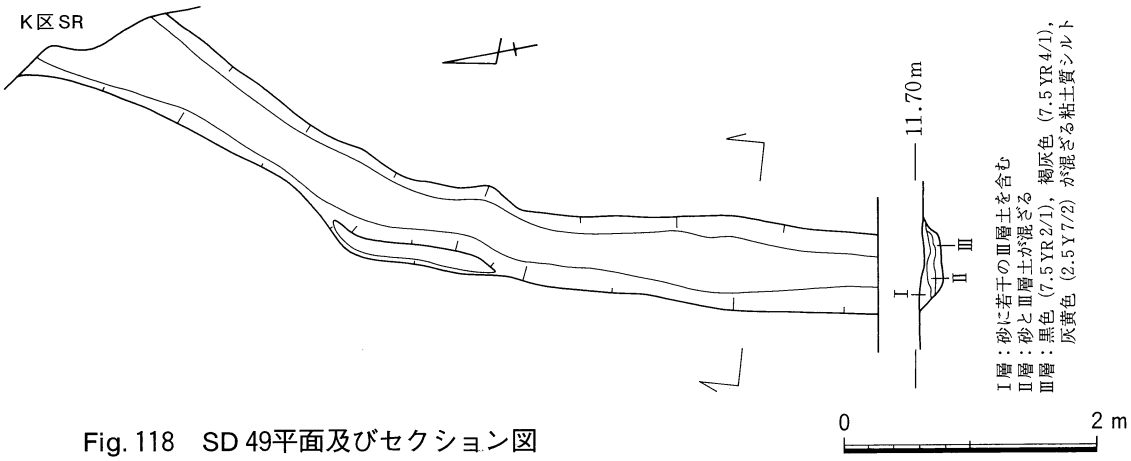


Fig. 118　SD 49平面及びセクション図

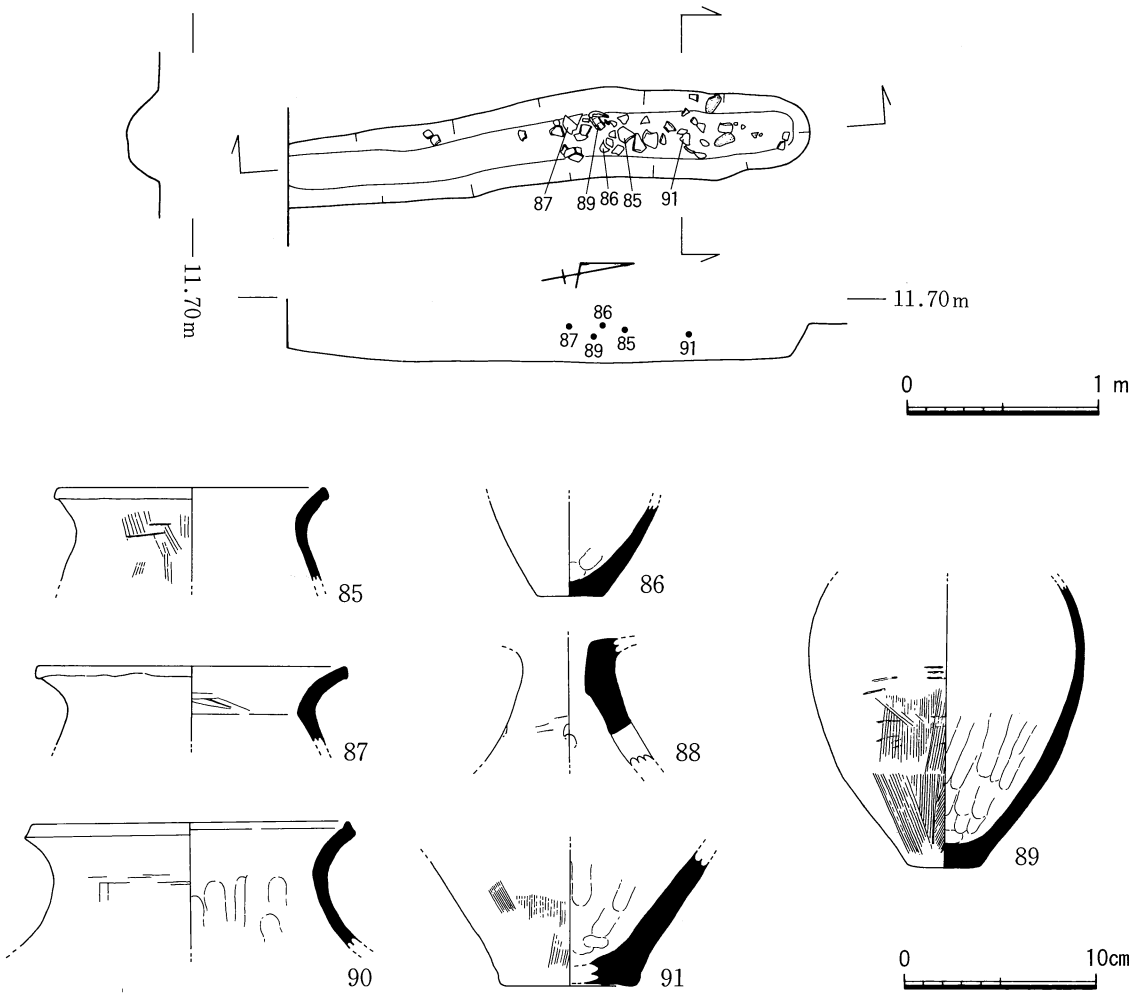


Fig. 119　SD 51遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：85・87・90、高杯：88）

SD 52（Fig. 120）

調査区中央東寄りに位置し、南北に長い幅40cm前後の溝である。南北が調査区外に出ており、その規模は不明であるが確認部の長さは4.1mで、深さは4cm前後と浅い。

遺物は弥生後期の細片が多量に出土しているが、図示できるのは甕（92）のみである。

SD 53（Fig. 121）

調査区西部に位置する。北東方向に延びるが、南北ともに調査区外に出ているため全体の規模はわからないが、確認部の長さは約4.26m、幅50cm前後を測る。断面は逆台形で深さは18cmを測る。埋土は褐色（10 YR 4/4）と黒褐色（10 YR 2/3）が混ざる粘土質シルトである。

遺物は細片だけで図示できるものはない。

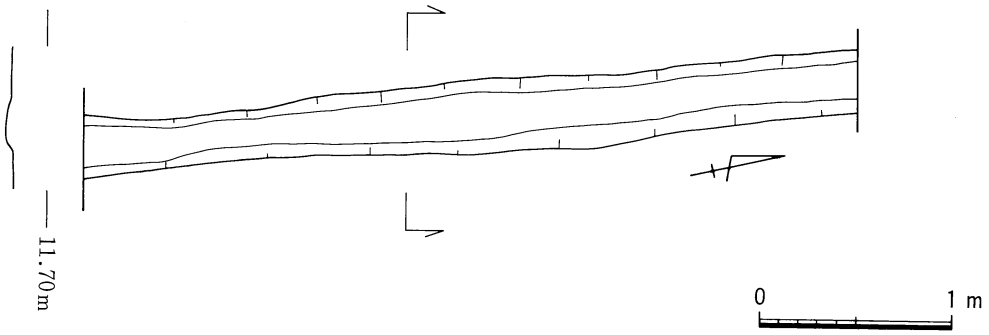
SD 54（Fig. 123）

調査区西端に位置し、西部と東部が調査区外に出ている。東にSK 43、SX 11がある。南北に長いプランで、確認部分は長さ2.66m、幅3.5～5.5m前後を測る。断面は逆台形で深さ22cmを測る。北部には26～34cmの楕円形のピットがあり底面からの深さ12cmを測る。

遺物は壺（93、95、96）、甕（94、97、98）、高杯（99）、鉢（101）が出土している。これらはほとんど埋土上層から出土している。

SD 55（Fig. 122～128）

調査区中央部に位置する。西北西方向に延びる幅約３ｍの大規模な溝である。南北ともに調査区外に出ているため全体の規模は把握できない。遺構は基本層準のⅣ層を除去したところで検出でき、確認部の長さは9.36ｍを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、北壁ではテラス状の段が一部みられ、深さ66㎝前後を測る。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土に黄褐色粘質土を若干含む、Ⅱ層：にぶい黄褐色粘質土、Ⅲ層：オリーブ褐色粘質土である。Ⅱ層以下は地山土との判別が困難であり、Ⅲ層の中央部から南東部にかけては焼土、炭化物、被熱石が入っていたため水が流れていたものではないと考



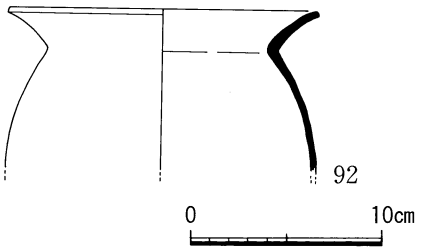


Fig. 120　SD 52平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（甕：92）

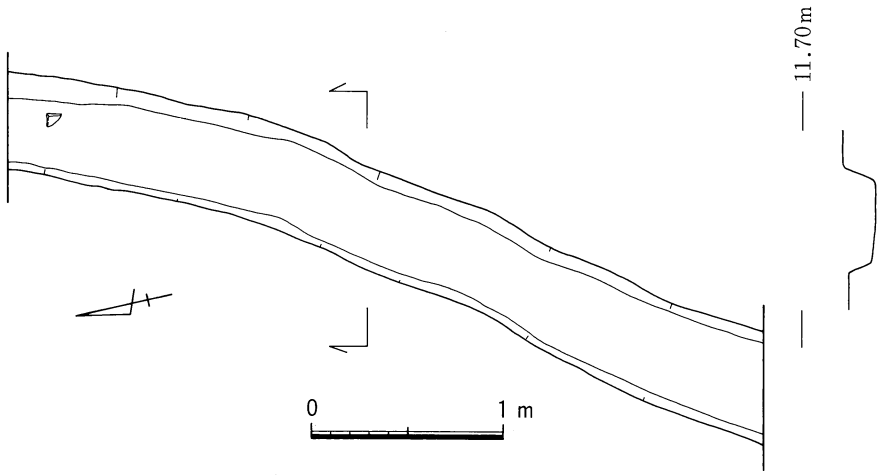


Fig. 121　SD 53平面及びエレベーション図

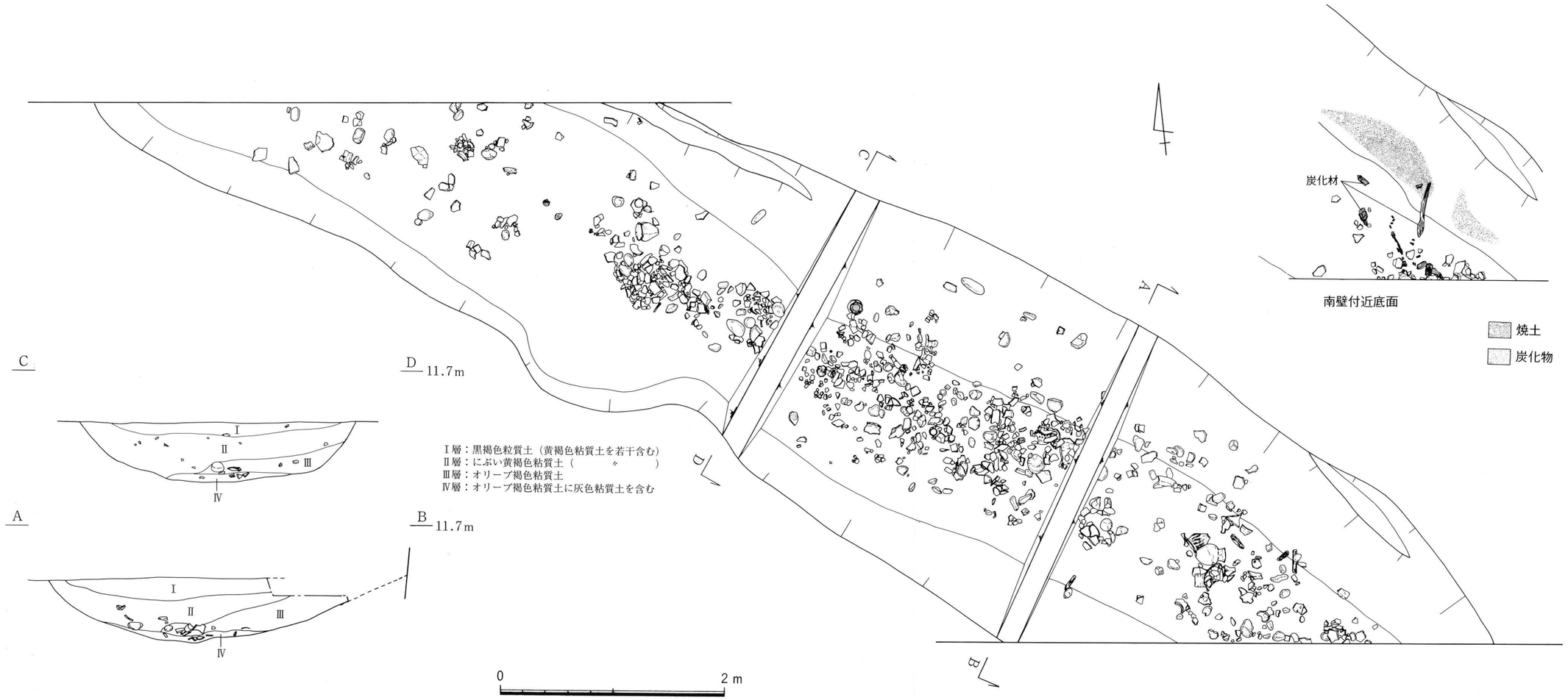


Fig. 122　SD 55遺物出土状況平面・セクション図

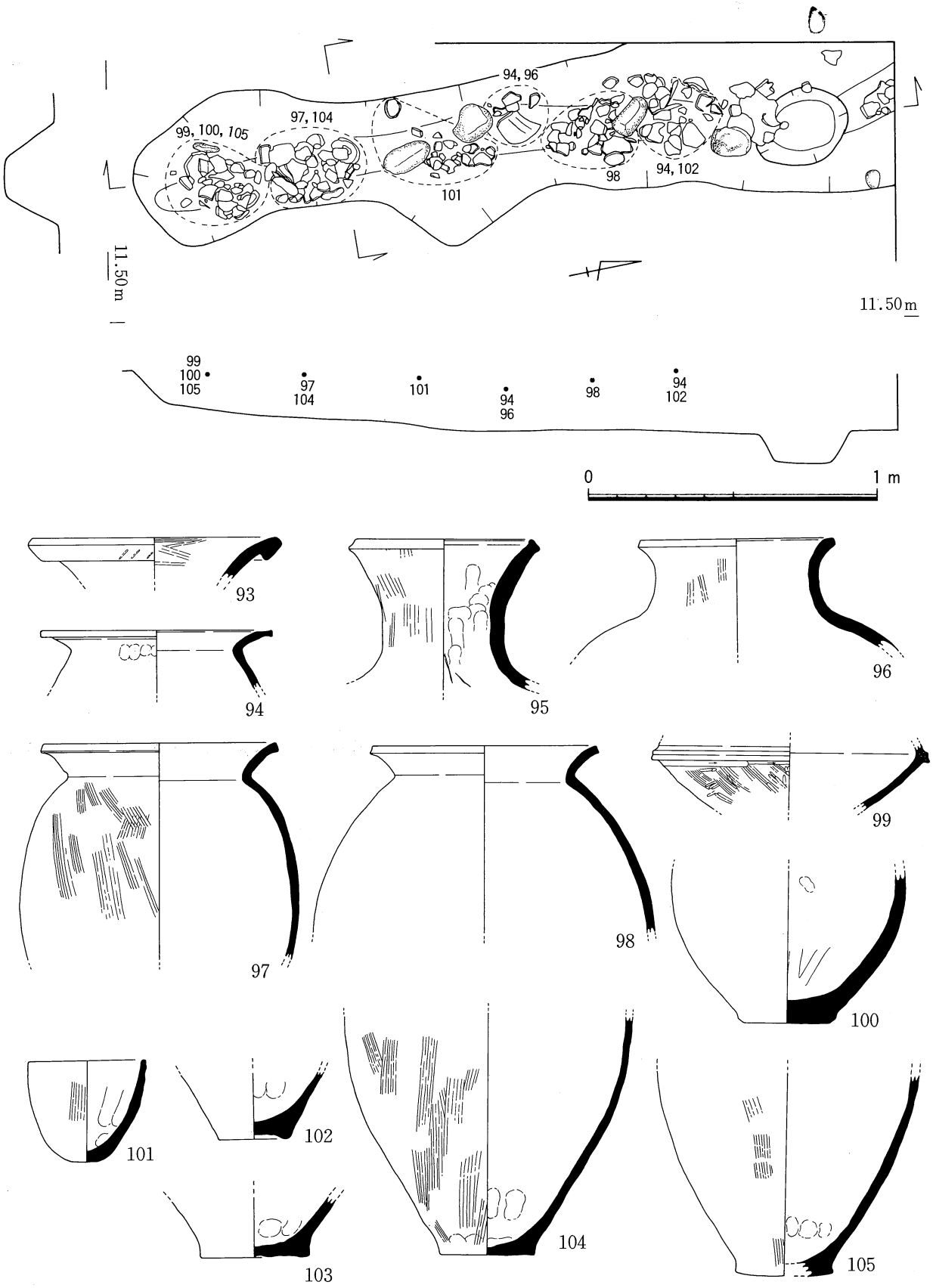


Fig. 123　SD 54遺物出土状況平面・エレベーション図
及び出土遺物実測図（壺：93・95・96、
甕：94・97・98、高杯：99、鉢：101）

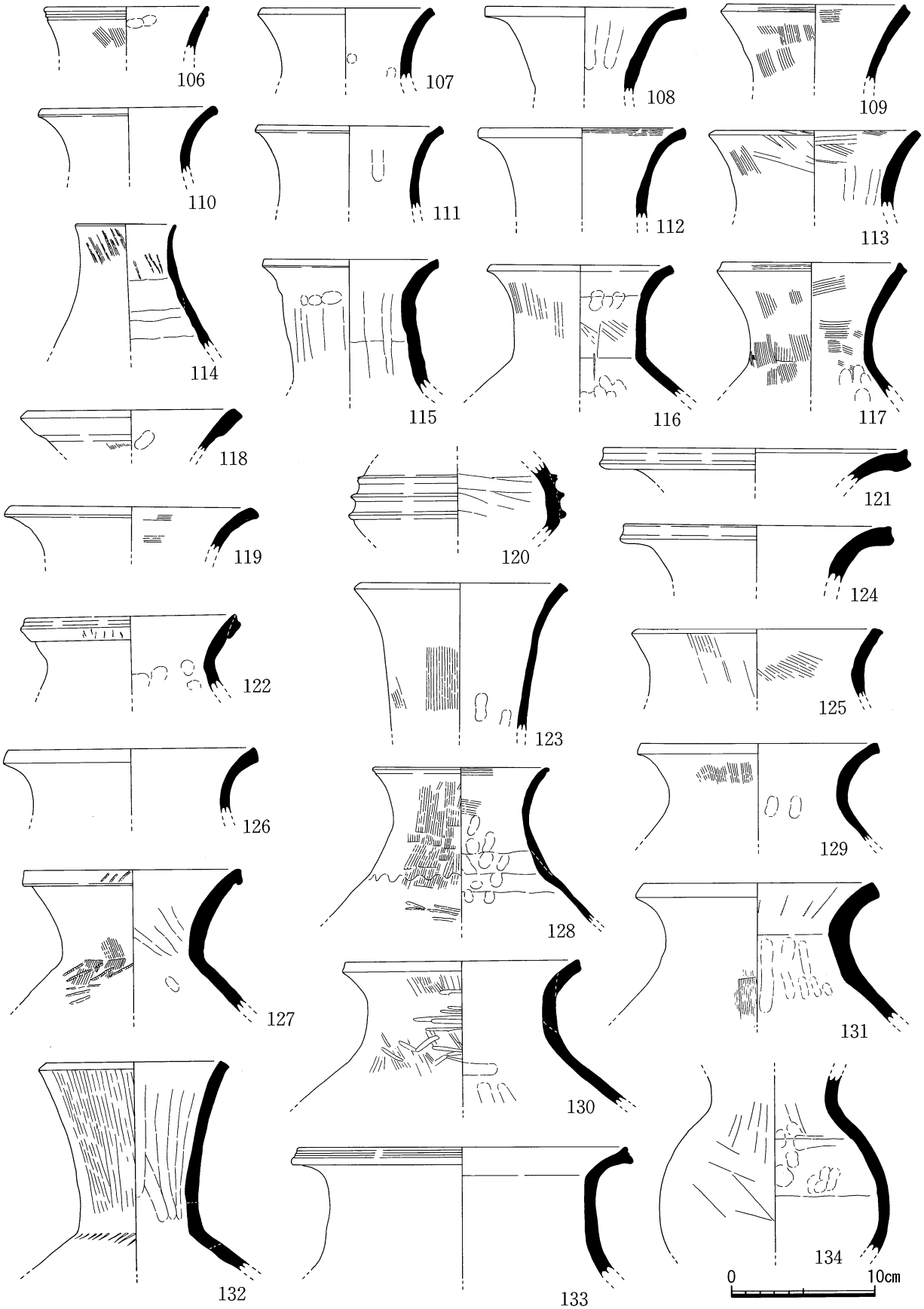


Fig. 124　SD 55出土遺物実測図（壺：106～134）

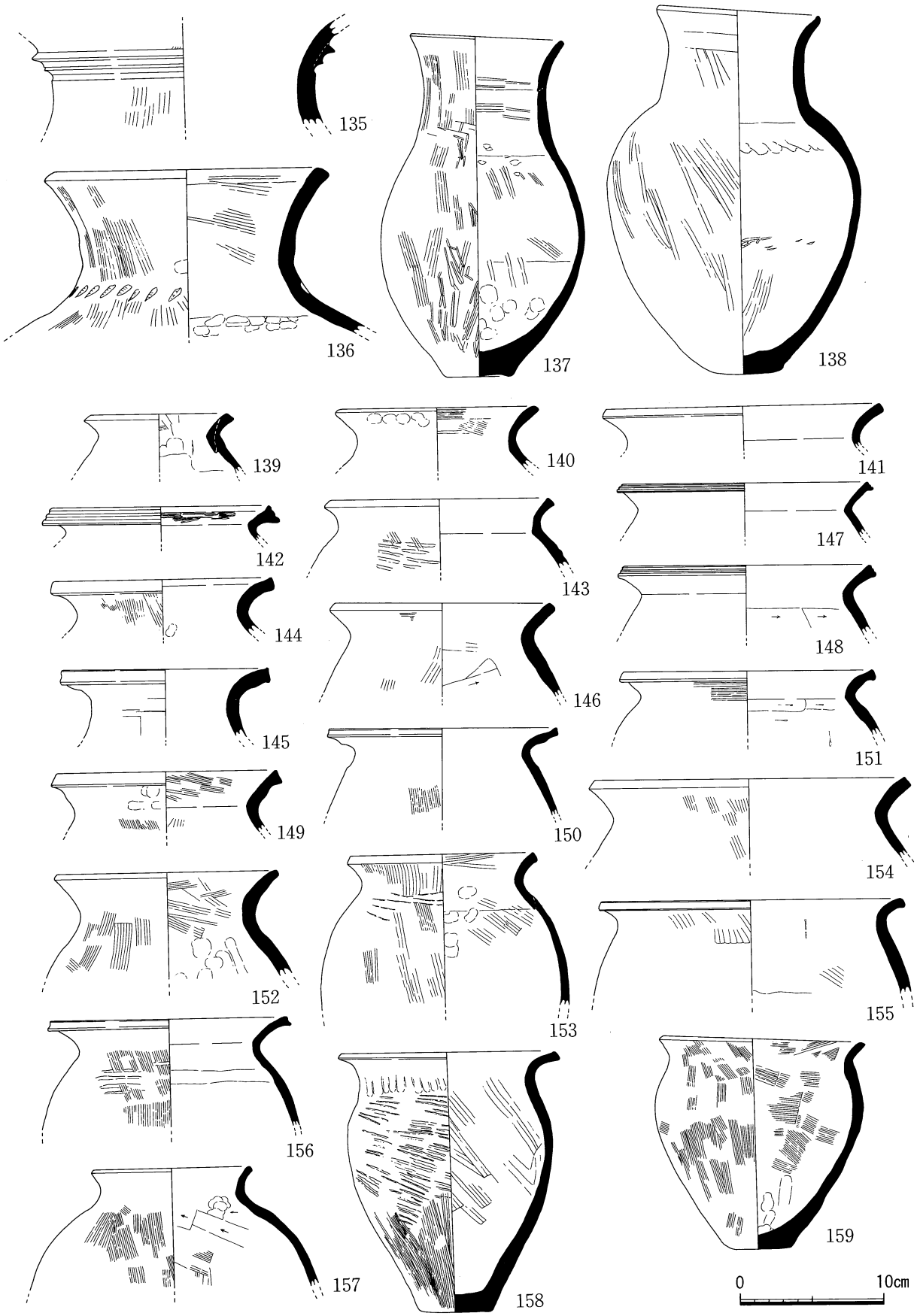


Fig. 125　SD 55出土遺物実測図（壺：135～138・145・149・152、甕：139～144・146～148・150・151・153～159）

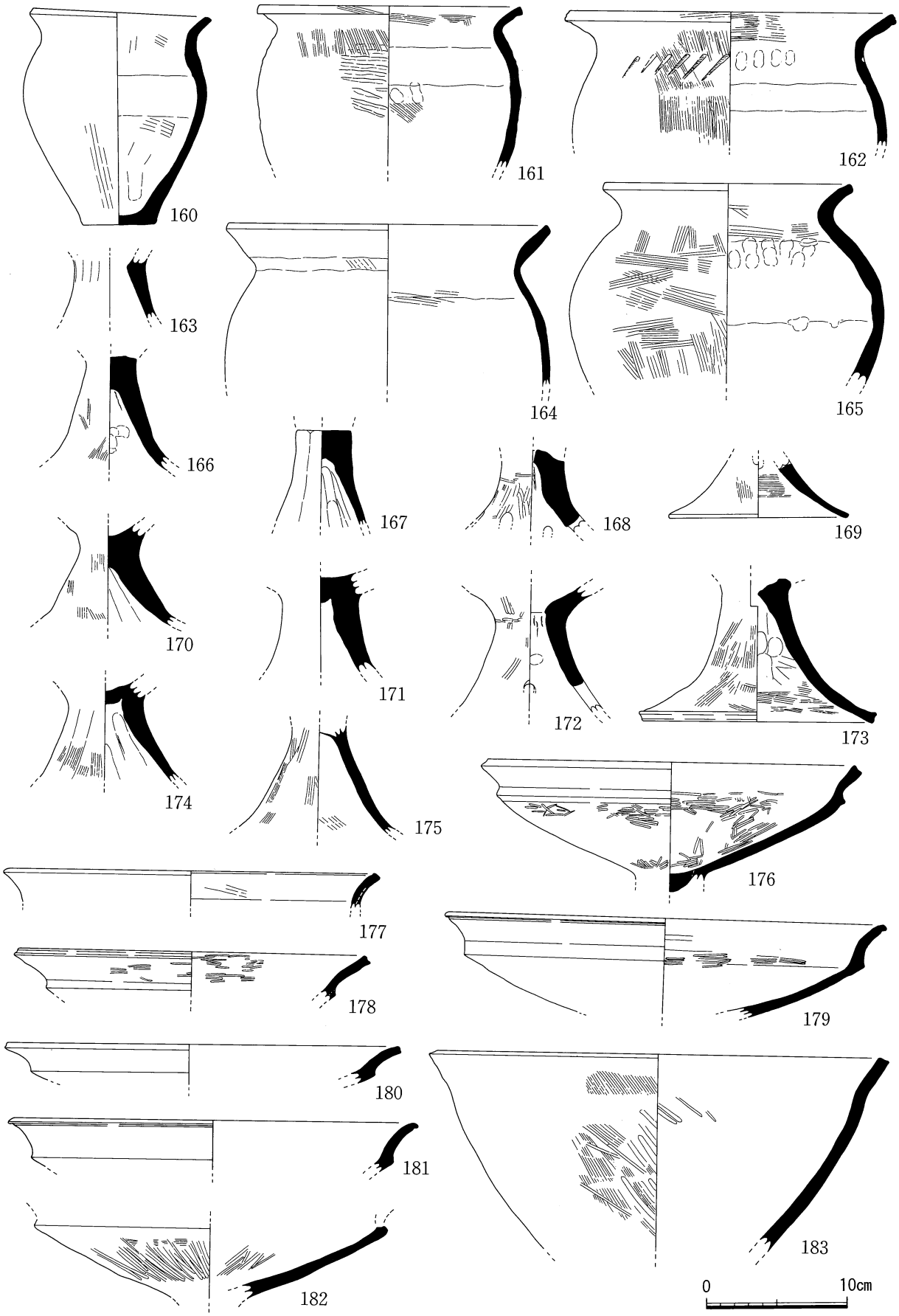


Fig. 126　SD 55出土遺物実測図（甕：160～162・164・165、高杯：163・166～182、鉢：183）

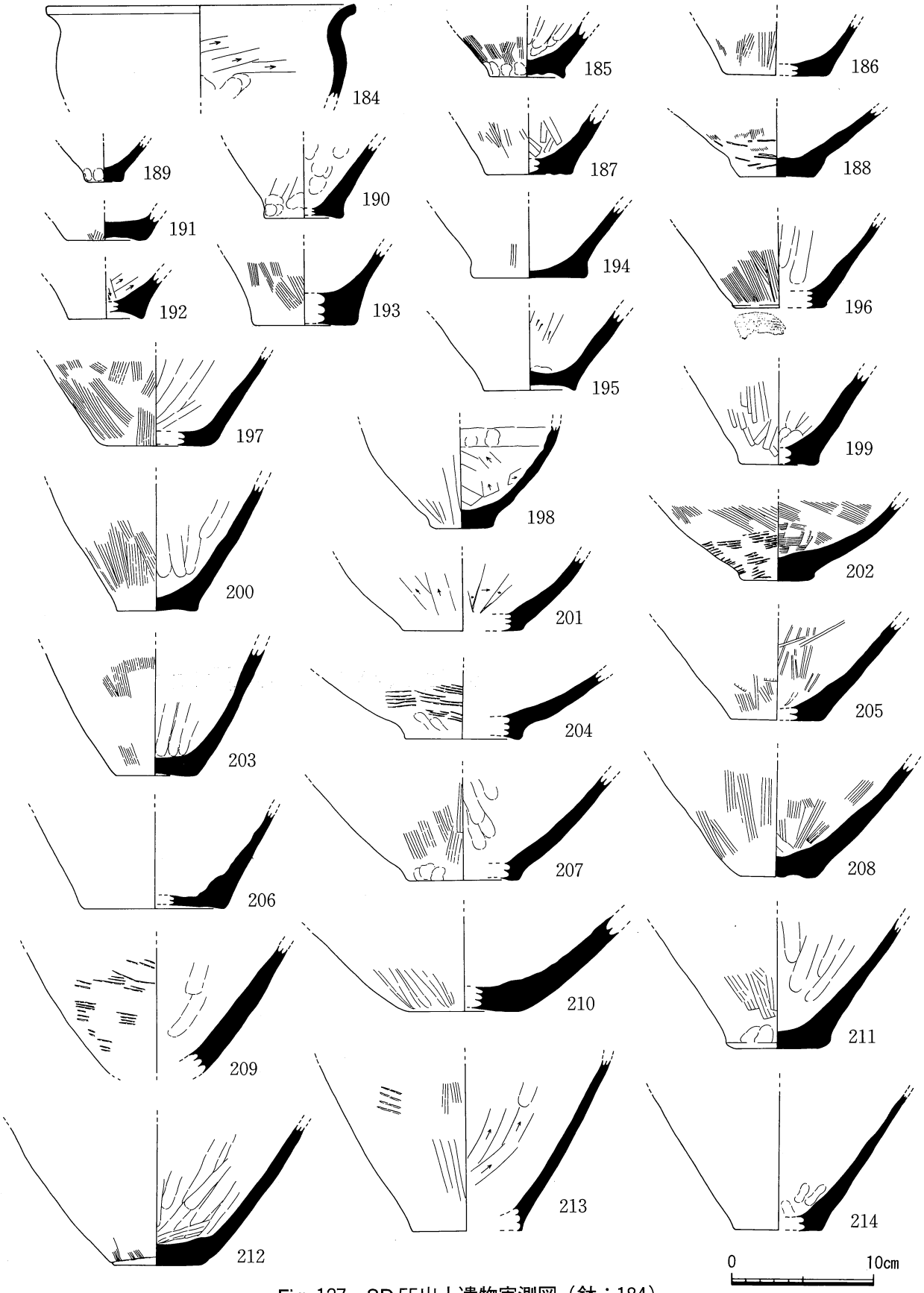


Fig. 127　SD 55出土遺物実測図（鉢：184）

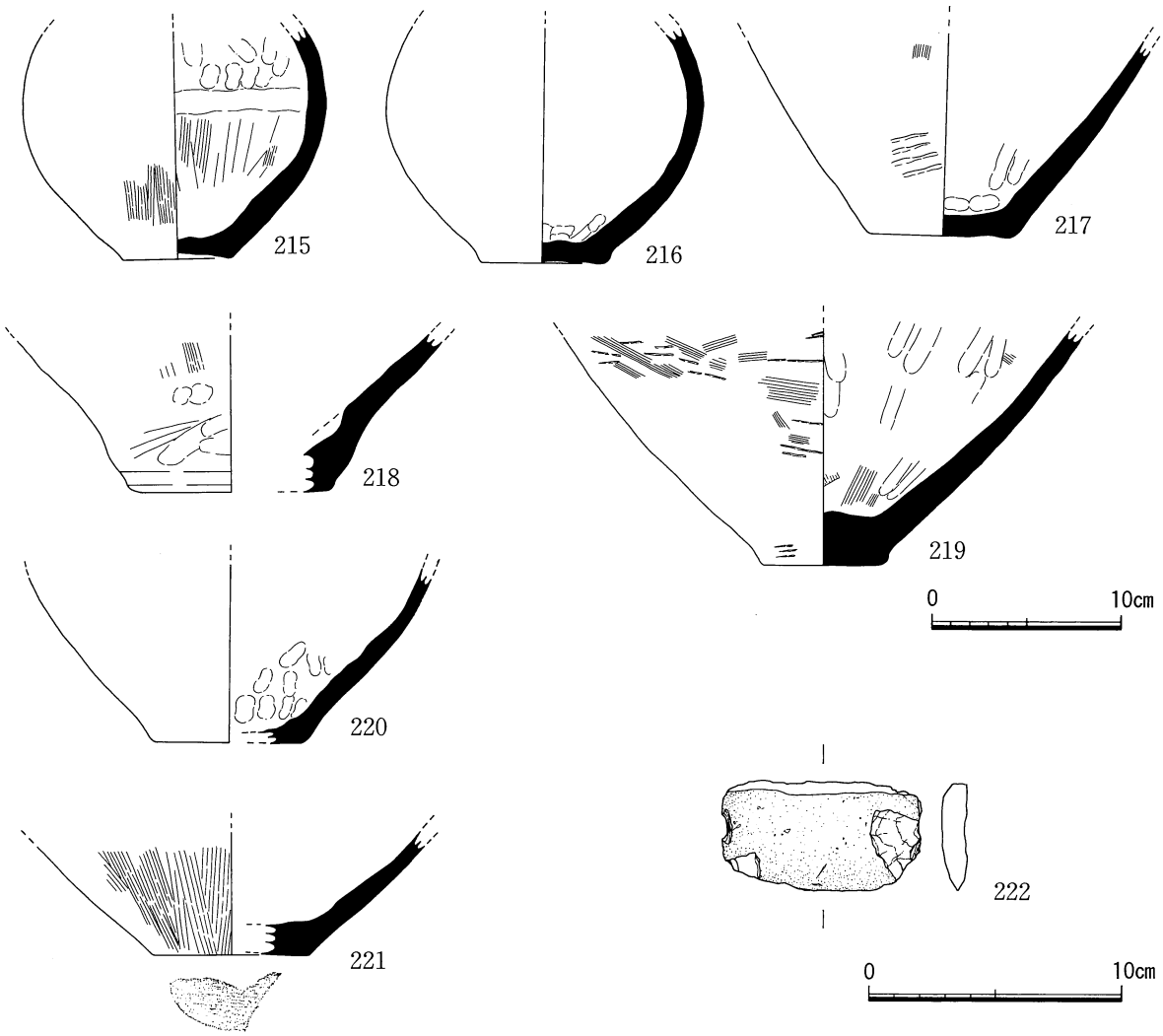


Fig. 128　SD 55出土遺物実測図（石包丁：222）

えられる。また、中央南壁にピットがあり、その埋土は灰色粘質土に暗赤褐色粘土粒を含むものであった。遺物は壺（106～138、145、149、152）、甕（139～144、146～148、150、151、153～162、164、165）、高杯（163、166～182）、鉢（183、184）、石包丁（222）が出土している。出土状況は、全層にわたり多量に検出されているが、上層は細片が多く下層に至るにしたがい残存率の高い良好な遺物が検出された。しかし、遺物の全出土量からすると復元図示できるものは比較的少なかったといえる。

⑤　性格不明遺構

SX 9（Fig. 129）

調査区東寄りに位置し、北は調査区外、西はSK 36に切られている。確認長は東西に4.24m、最大幅は南北に1.4mを測る。基本層準Ⅳ層を除去したところで検出できた。埋土は黒褐色（7.5 YR 3/2）、褐色（7.5 YR 4/3）、にぶい黄褐色（10 YR 4/3）が混ざる粘土質シルトの単純一層で、深さは12cmと浅い。

遺物は細片はあったが図示できるものはない。

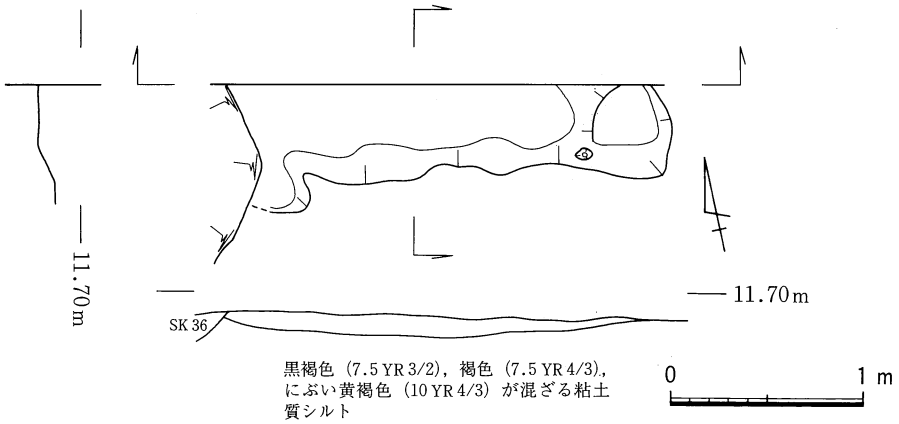


Fig. 129　SX 9平面及びエレベーション図

SX 10（Fig. 130・131）

調査区西寄りに位置し、南にSK 42とSB 27が隣接する。

埋土はⅠ層：黒褐色（10 YR 2/3）粘土質シルトに土器を含む、Ⅱ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルト、Ⅲ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭と焼土を多く含む、Ⅳ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭を含む、Ⅴ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭を多く含む、Ⅵ層：Ⅳ層と同じ、Ⅶ層：にぶい黄褐色（10 YR 4/3）粘土質シルトである。

遺物は壺（223、225～227、229）、甕（224、228）、高杯（230～237）が出土しているが、そのほとんどが上層より出土している。

SX 11（Fig. 132・133）

調査区西端に位置し、北西部にSK 43が隣接する。南部が調査区外に出ており全体の規模は不明であるが、確認部は直角二等辺三角形の平面形を呈し、確認長は北西方向に2.5m、北東方向に2.68mを測る。埋土はⅠ層：褐色（10 YR 4/4）とにぶい黄褐色（10 YR 4/3）が混ざり暗褐色（10 YR 3/4）を小さなブロック状に含む粘土質シルトで土器片を含む、Ⅱ層：褐色（10 YR 4/4）とにぶい黄褐色（10 YR 4/3）と暗褐色（10 YR 3/3）が混ざり暗褐色（10 YR 3/4）を小さなブロック状に含む粘土質シルトで土器片を含むものである。底面は水平で壁はゆるやかに立ち上がり、底面までの深さは15cmを測る。

遺物は、壺（241、243、244）、甕（242、245、246、251）、高杯（247～250、252、254）、蓋が出土している。弥生後期後半を中心とする土器片が多く、細片ではあるが讃岐の土器片も確認できた。

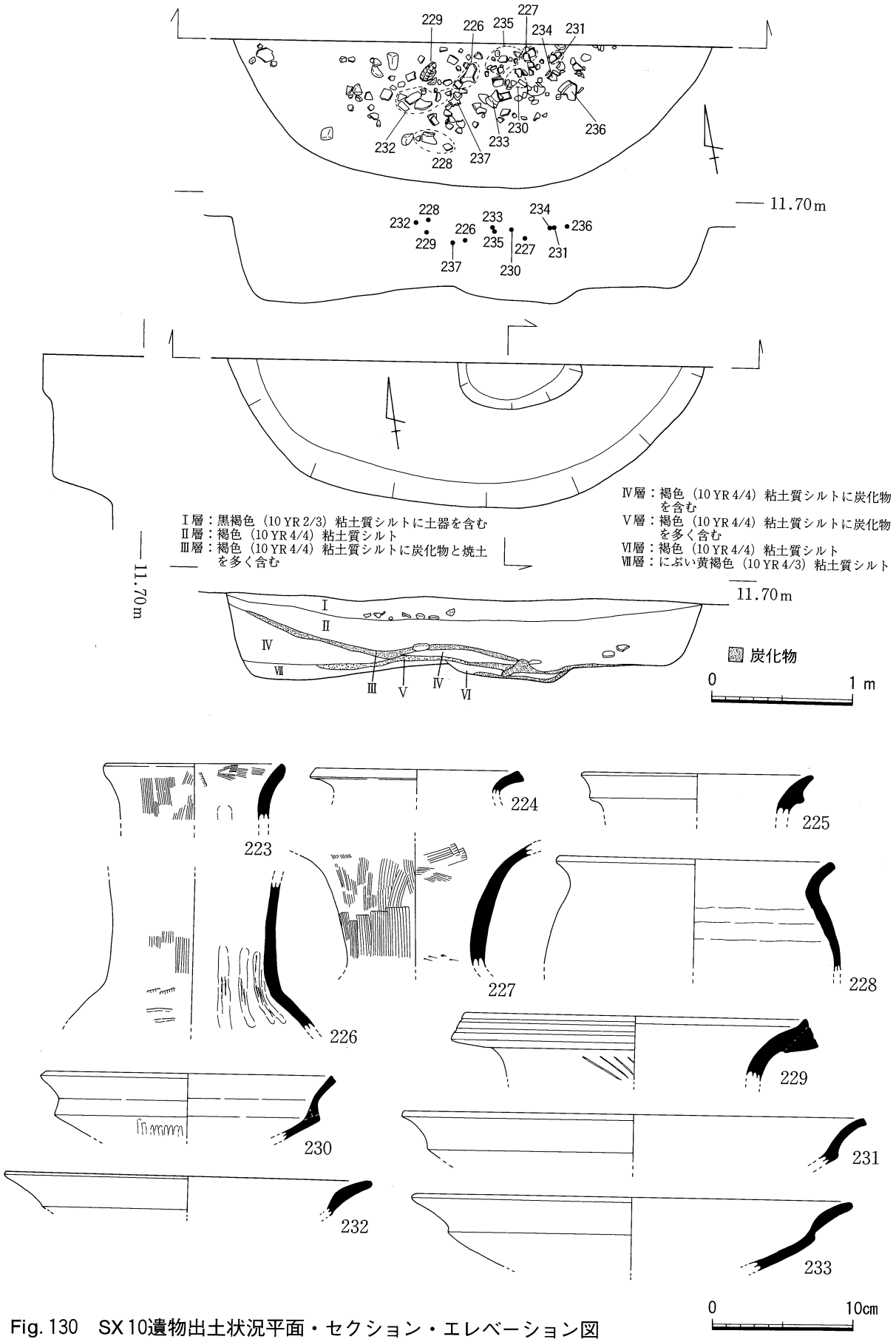


Fig. 130　SX 10遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図
及び出土遺物実測図（壺：223・225～227・229、甕：224・228、高杯：230～233）

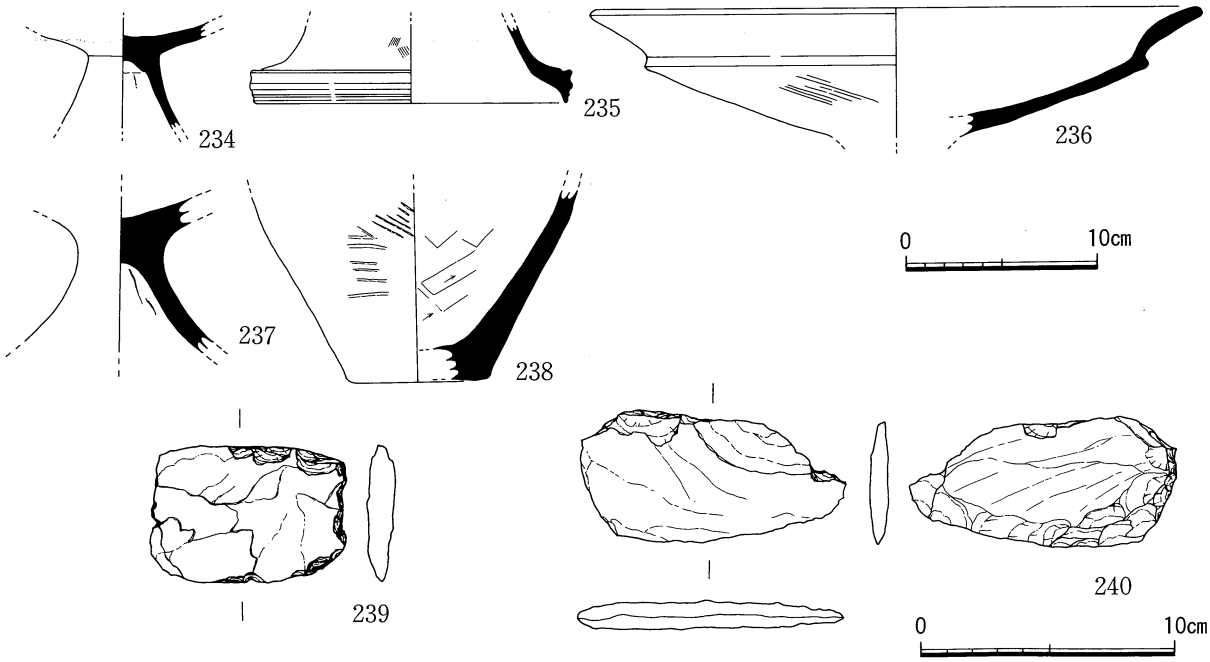


Fig. 131　SX 10出土遺物実測図（高杯：234～237、石包丁：239・240）

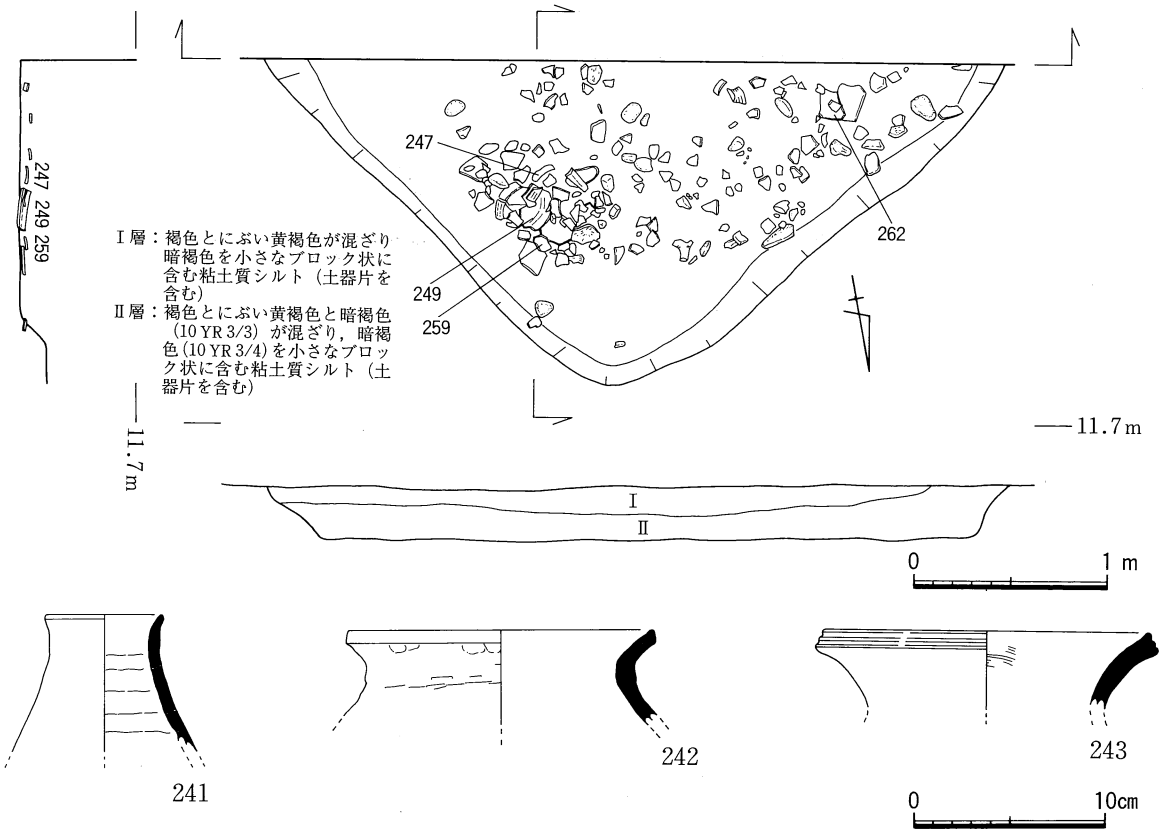


Fig. 132　SX 11遺物出土状況平面・セクション図及び出土遺物実測図（壺：241・243、甕：242）

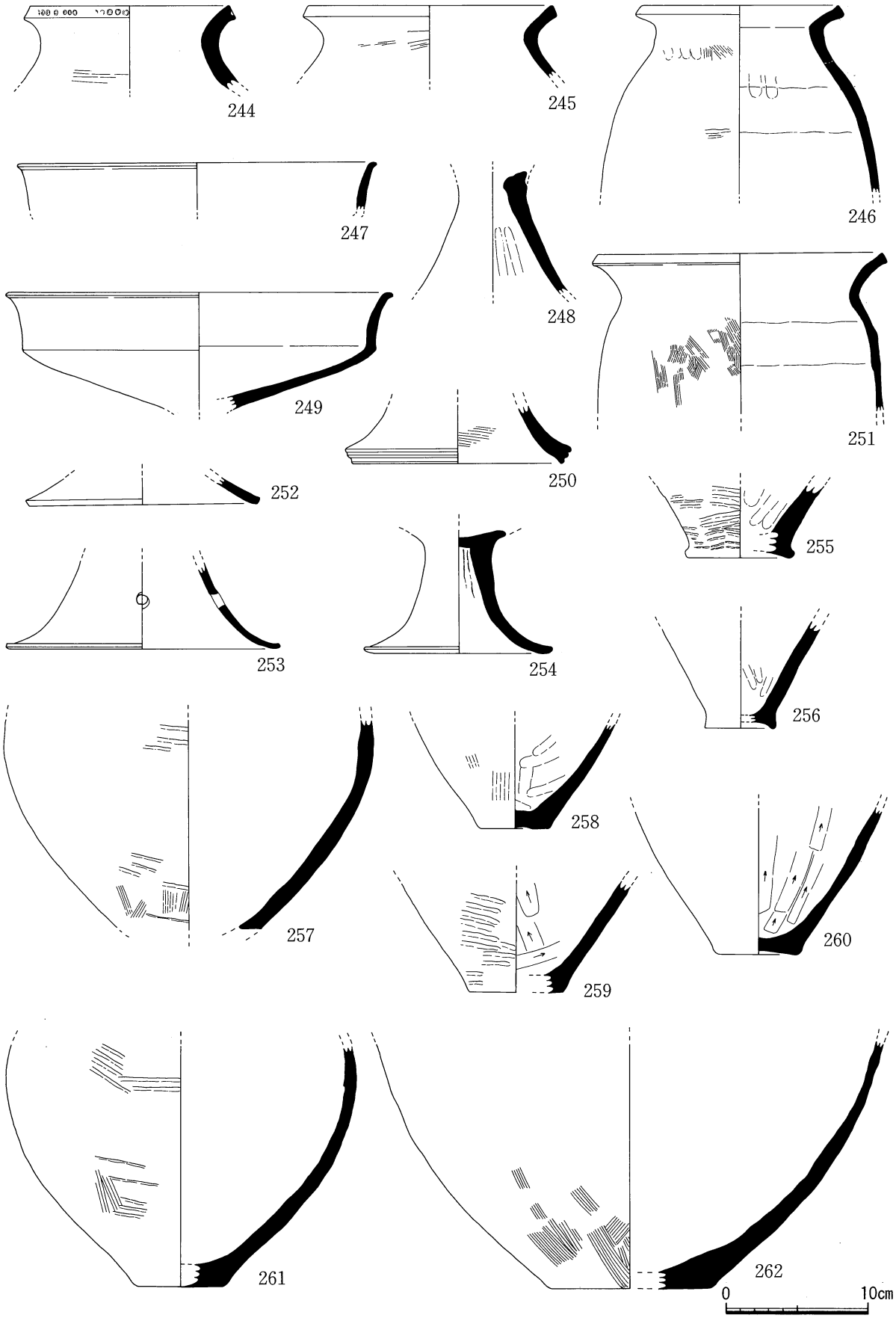


Fig. 133　SX 11出土遺物実測図（壺：244、甕：245・246・251、高杯：247～250・252～254）

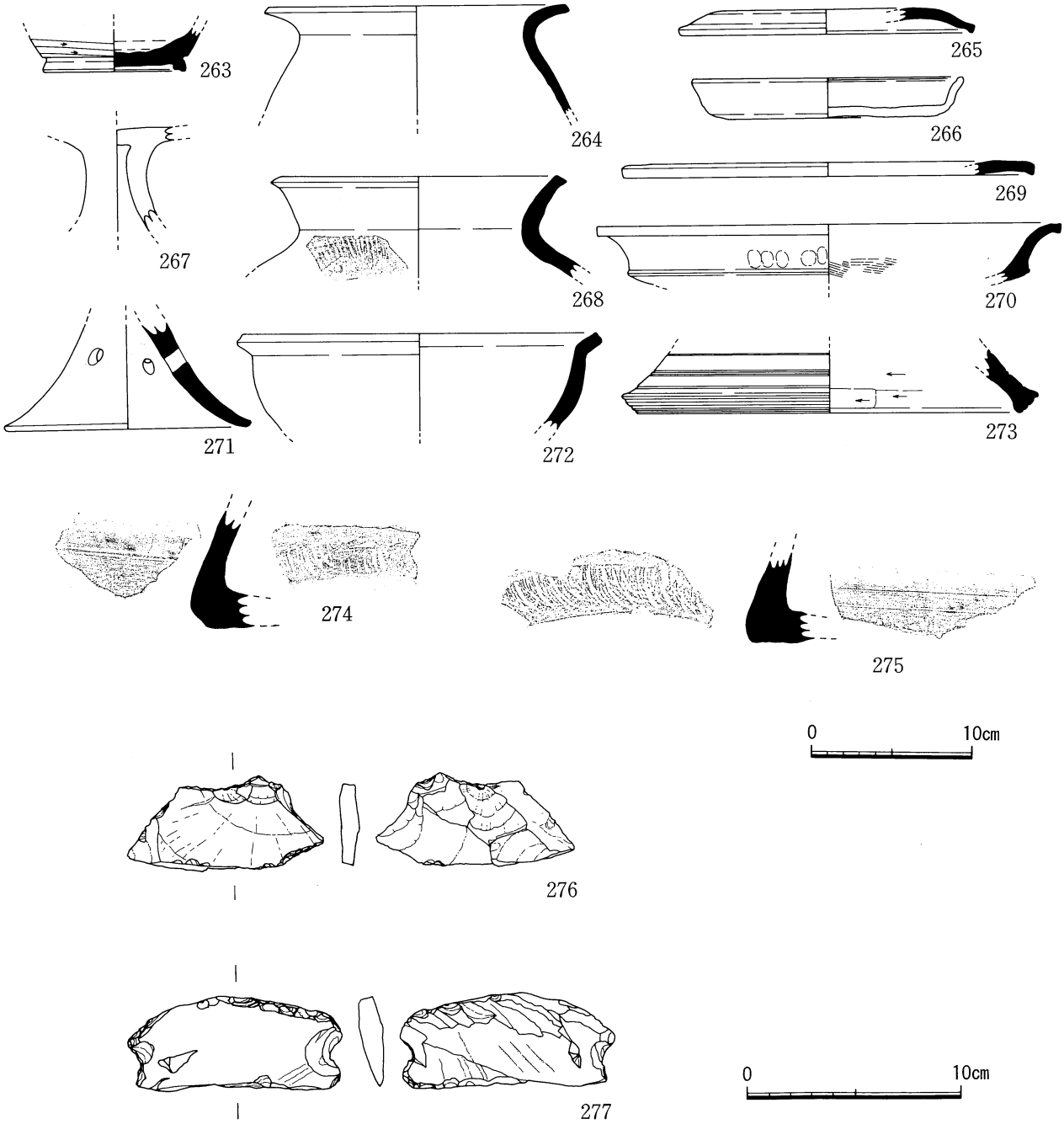


Fig. 134　表土及び包含層出土遺物実測図（須恵器壺：263・268、須恵器甕：274・275、須恵器蓋：265・269、須恵器鉢：272、土師器高杯：267、土師器皿：266、甕：264、高杯：270・271・273、石包丁：276・277）

遺物観察表（土器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
107	1	ST 11	壺		(5.0)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面肩部横ハケ。器表の荒れが激しい。	
〃	2	〃	壺	11.8	(4.2)			チャート。頁岩の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。口縁部内面、指頭圧痕、横ハケ。	
〃	3	〃	壺	16.0	(1.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部つまみ出し、横ナデ。内面横ナデ。	
〃	4	〃	壺	15.4	(3.2)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面横ナデか。口唇部面取り。	
〃	5	〃	壺	17.3	(4.0)			チャートの細粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内面横ナデ。口縁部外面横ナデ＋縦ハケ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	6	〃	壺	12.4	(5.1)			チャートの粗粒砂含む。明黄橙色。外面横ナデ＋ヘラ磨き。口唇部横ナデし下端部を拡張。	
〃	7	〃	壺	16.0	(4.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内外面横ナデ。口唇部上方にわずかにつまみ出し強い横ナデ。	
〃	8	〃	壺	17.0	(4.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内面ナデ。頸部～肩部縦ハケ（上→下）。口縁部幅８～10㎜の粘土帯を添付し、口唇部強い横ナデ。	
〃	9	〃	壺	21.1	(4.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ＋ハケ。口唇部は拡張し、２条の凹線文を有する。	
〃	10	〃	壺	17.4	(8.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケ、肩部に列点文を有する。口縁部外面に幅２㎝程の粘土帯を添付する。器表の荒れが激しい。	
〃	11	〃	壺	16.7	(5.8)			チャートの粗粒砂を含む。灰黒色。外面横ナデか。内面指頭圧痕。口唇部面取り。	
〃	12	〃	壺	18.8	(11.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口唇部強い横ナデで下垂し、３条の沈線化した凹線文を有する。	
〃	13	〃	壺	24.8	(2.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ＋縦ハケ。口縁部強い横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	14	〃	甕	9.4	(8.3)			チャートの小礫、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。頸部外面強い横ナデ。口縁部内面指頭圧痕。	底部に黒斑。
〃	15	〃	壺	23.0	(5.2)			チャート、結晶片岩、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面横ナデ。内面指頭圧痕を顕著に認める。口唇部は面をなす。	
〃	16	〃	壺	23.4	(5.9)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。明黄橙色。口縁部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデをし下端をつまみ出す。頸部外面縦ハケ。	
〃	17	〃	甕	14.4	(3.8)			チャートの粗粒砂を含む。灰黄褐色。口縁部外面強い横ナデ。肩部縦ハケ。内面横ナデ。口唇部に強い横ナデをし下端部をつまみ出す。肩部にヘラ状原体の圧痕が残る。	
〃	18	〃	甕	14.4	(4.3)			チャートの小礫～粗粒砂を含む。橙色。口縁部内外面強い横ナデ。胴部縦ハケ。	
〃	19	〃	甕	14.0	(4.2)			チャートの粗粒砂を多く含み赤色風化礫をわずかに含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口縁部内外面横ナデ。口唇部横ナデ。	外面煤ける。
〃	20	〃	甕	14.6	(4.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。口縁部内外面横ナデ。口唇部横ナデで拡張しわずかに下垂する。	外面煤ける。
〃	21	〃	甕	15.2	(4.9)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面強い横ナデ＋縦ハケ。口唇部上端部をわずかにつまみ出し横ナデ。内面指頭圧痕。	外面煤ける。
〃	22	〃	甕	16.1	(5.8)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面横ナデか。内面横ナデ痕顕著。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。口縁部煤ける。
〃	23	〃	甕	15.4	(6.4)			チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。頸部に強い横ナデ、口縁部ヘラ状原体の圧痕がわずかに残る。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	24	〃	甕	12.8	(12.5)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。明黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ、指頭圧痕あり。口唇部上方にわずかにつまみ出し、横ナデ。	胴部に黒斑。
〃	25	〃	甕	16.0	(10.8)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ＋ナデ。内面削り＋ナデ。口唇部強い横ナデで面をなし一部下垂する。	
〃	26	〃	高杯	16.0	(2.3)			チャートの細粗粒～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面ナデか。屈曲部はするどい稜を有する。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	27	〃	高杯	18.4	(2.0)			チャートその他の粗粒を含む。口縁部外面に横ナデ風の凹線文２条を有する。口縁部内面横ナデ。	
〃	28	〃	高杯	19.4	(3.1)			チャート。雲母の細粗粒砂を含む。にぶい褐灰色。内外面、口唇部横ハケ。屈曲部は強い稜を有する。	
〃	29	〃	高杯	23.1	(3.3)			チャートの細粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデで屈曲部は稜を有する。内面ヘラ磨き。	口縁部に黒斑。
〃	30	〃	高杯	24.3	(3.1)			チャートの細粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面強い横ナデ、屈曲部は稜を有する。口唇部横ナデで面を取る。	口縁部黒斑。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器　種	法　量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特　徴	備　考
107	31	ST 11	高杯	28.0	(5.6)			チャートの細粗粒～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面横ナデで屈曲部は稜を有する。	口縁部に黒斑。
〃	32	〃	高杯脚		(4.5)			チャートの細粗粒砂を含む。明赤褐色。杯底部に直径3㎜程度の刺突痕あり。脚上部内面に搾り目顕著。	
〃	33	〃	高杯	24.3	(2.7)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面横ナデ。内面横ナデ＋横ヘラ磨き。	
〃	34	〃	高杯脚		(4.9)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。明橙色。外面ナデ。内面ハケか。	
108	35	〃	高杯脚		(6.0)			チャート、赤色風化礫を含む。明橙色。外面縦方向にハケ。脚上部内面に搾り目。	
〃	36	〃	高杯脚		(7.3)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。外面縦方向にヘラ磨き。内面横方向にハケ。器表の剝離が激しい。	
〃	37	〃	高杯脚		(1.8)		9.0	チャートの細粗粒砂を含む。橙色。外面強い横ナデ。内面ヘラ削り（左←右方向）。口唇部強い横ナデの後上端をつまみ出し、2条の凹線文を認める。	
〃	38	〃	高杯脚		(2.8)		15.0	チャートの細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヘラ磨き。脚部に径7～8㎜の小孔。	
〃	39	〃	高杯脚		(3.6)		12.8	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケがわずかに残る。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	40	〃	高杯脚		(4.2)		13.4	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ヘラ磨き＋ナデ。裾部に径4～6㎜の小孔。	
〃	41	〃	高杯脚		(1.8)		18.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。裾端部外面強い横ナデ。内面ナデ。	
〃	42	〃	高杯脚		(1.7)		14.7	チャートの細粗粒砂を含む。にぶい灰黄褐色。裾部外面横ナデ。脚部外面縦ヘラ磨き。	
〃	43	〃	鉢	17.0	(6.5)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。外面叩き＋ナデ。内面ナデ。	外面被熱赤変。
〃	44	〃	鉢	27.4	(6.3)			チャートの粗粒砂、細粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ハケ。口唇部面取り。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。
〃	45	〃	甕底部		(5.0)		5.3	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい桃色。内外面ナデ。内面指頭圧痕。	外面被熱赤変。
〃	46	〃	甕底部		(3.2)		6.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含み、結晶片岩の小礫を少し含む。明黄橙色。外面横ナデ。上げ底。	
〃	47	〃	底部		(2.7)		5.7	チャートの細粗粒砂を含む。灰茶褐色。外面に縦ハケ。内面削り＋ナデ。	
〃	48	〃	底部		(2.5)		10.2	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内外面ナデ。	外面被熱赤変。
〃	49	〃	底部		(5.6)		6.5	チャートの粗粒砂を含む。明黄褐色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ。	
〃	50	〃	底部		(6.5)		6.0	チャートの小礫を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。	底部に黒斑。
〃	51	〃	底部		(5.9)		7.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄褐色。外面縦ハケ後ナデ。内面ナデ。	底部に黒斑。
〃	52	〃	底部		(6.2)		7.9	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。底部内面指頭圧痕。	
〃	53	〃	底部		(15.8)	19.3	5.7	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。胴部内外面ハケ。	
110	60	SK 35	壺		(6.2)			チャートの小礫粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ＋ヘラ磨き。口縁部内面付近にハケ。以下指ナデ。	
〃	61	〃	壺	14.5	(6.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外器表の荒れが激しい。	外面全面煤けるが口縁、胴部外面が激しい。
〃	62	〃	甕	16.3	(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。口縁部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	63	〃	甕	16.9	(4.4)			チャートの細粗粒砂を多く含む。黄褐色。胴部外面縦ハケ。内面ヘラ削り＋ナデ。口縁部内外横方向ナデ。	
〃	64	〃	甕		(19.1)		8.8	チャートの粗粒砂を極めて多く含む。明黄色。外面わずかにハケ痕残る。内外面器表の荒れが激しく、剝離も激しい。	
〃	65	〃	器台		(4.0)		13.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。灰黄色。内外ナデか。	
〃	66	〃	底部		(4.2)		6.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。器表の荒れが激しい。	
〃	67	〃	高杯	24.9	(3.3)			チャートの粗粒砂を含む。黒褐色。外面横ナデ＋ヘラ磨き。屈曲部は稜をなす。口唇部下端を強い横ナデで拡張し面を取る。	
〃	68	〃	高杯	28.9	(4.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。黄茶色。口唇部はつまみ出して横ナデ。全面器表剝離。	
〃	69	〃	底部		(5.4)		5.9	チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ハケ＋ナデ。ハケ状原体の圧痕あり。	
111	72	SK 36	壺	13.1	(6.5)			チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。暗茶色。口唇部強い面取り。器表の荒れが激しい。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
111	73	SK 36	甕	12.7	(4.0)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫を含む。黄褐色。胴部内面頸部直下より左←右にヘラ削り＋ナデ。内外面器表の荒れが激しい。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	74	〃	甕	15.1	(6.4)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。口縁部内外横ナデ。口唇部面取り。胴部外面縦ハケ、内面上胴部以下、下→上方向のヘラ削り＋ナデ。	口唇部、胴部外面煤ける。
〃	75	〃	壺	10.6	(9.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部面取り。内外器表の荒れが激しい。	外面、被熱赤変。
〃	76	〃	甕	14.4	(9.2)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。内面胴上部、左←右方向の荒いヘラ削り、中位、下→上のヘラ削り。口唇部面取り、内面わずかにつまみ上げ。外面器表の荒れが激しい。	胴部外面に大きな黒斑。口唇部、胴部煤けと、被熱赤変。
〃	77	〃	甕	15.7	(7.2)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。黄茶色。口縁部内外面横ナデ。胴部内面ヘラ削り（右⇔左）。外面ナデか。	外面及び口縁部内面煤ける。
〃	78	〃	高杯	31.8	(7.7)			チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。橙色。屈曲部は弱い稜をなす。脚部との接合部で剝離。内外面器表の荒れが激しく調整不明。	
〃	79	〃	高杯脚		(5.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。柱状部外面縦ヘラ磨き。内面左←右のヘラ削り。接合部で剝離。	
〃	80	〃	甕底部		(4.2)		5.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄褐色。外面叩きの後ナデ。内面ナデ、指頭圧痕。底部つまみ出し。上げ底。	底部被熱赤変。
〃	81	SK 37	土師器杯	12.9	(2.9)			赤色風化礫、チャートの細粗粒砂をわずかに含む。橙色。内外面回転ナデ跡顕著。	
〃	82	〃	須恵器甕	18.8	(9.4)			チャート、黒色粒砂をわずかに含む。灰色。胴部外面叩きの後わずかにすり消す。内面青海波文をわずかにすり消す。頸部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	
112	83	SK 38	甕	16.0	(8.4)			チャートの粒砂を多く含む。橙色。外面叩き＋ナデ。叩き目はほとんど消えている。胴部内面ヘラ削り。口縁部内外横ナデ。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	84	〃	高杯脚		(5.8)			チャートの細粗粒砂、雲母を含む。明黄色。充填部下方から径5㎜の刺突あり。外面は縦ヘラ磨きであったと思うが、摩耗のため単位を認めることができない。	
119	85	SD 51	壺	14.0	(4.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋横ナデ。内面ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面を取る。	
〃	86	〃	底部		(5.0)		3.5	チャートの小礫～粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内面底部に指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	87	〃	壺	16.1	(4.2)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙～暗灰黄色。外面横ナデか。内面ヘラ調整がわずかに残る。口唇部強い横ナデで面を取る。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	88	〃	高杯脚		(6.7)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヘラ磨きをしたかもしれないが剝離が激しく認められない。径8㎜程の小孔を2つ認める。杯との接合部で剝離。	
〃	89	〃	底部		(15.0)	14.4	3.8	チャートの小礫～粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ＋叩き。内面ナデ。	裾部に黒斑。
〃	90	〃	壺	16.5	(6.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面摩耗が激しいが頸部ハケの痕跡を残す。内面指頭圧痕顕著。口唇部面を取る。	
〃	91	〃	底部		(6.7)		7.0	チャートの小礫～細粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。黄灰色。外面縦ハケ＋ナデ。内面ナデ。上げ底風。	外面被熱赤変。
120	92	SD 52	甕	16.1	(8.5)			チャートの粗粒砂を多く含む。黄褐色。内面横ナデか。器表の荒れが激しい。	
123	93	SD 54	壺	17.0	(2.9)			チャートの小礫を多く含む。灰黒色。内面横ハケ。口縁部に幅1.5㎝、厚さ0.5㎝の粘土帯を貼付け、列点文を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	94	〃	甕	16.0	(4.1)			チャートの小礫を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。内外面横ナデ。外面頸部指頭圧痕顕著。口唇部横ナデしわずかに拡張。	
〃	95	〃	壺	12.0	(10.6)			チャートの粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ後横ナデ。内面横ナデ、指頭圧痕顕著。内面頸部搾り目。口縁部横ナデ。口唇部上方につまみ上げ強い横ナデで面を取る。	
〃	96	〃	壺	13.2	(8.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。	
〃	97	〃	甕	16.0	(15.1)			チャートの粗粒砂を多く含み赤色風化礫を少量含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。頸部強い横ナデ。口唇部横ナデし拡張。	胴部外面煤ける。No. 119と同一個体か。
〃	98	〃	甕	15.4	(13.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。オリーブ黒色。口唇部面を取る。器表の荒れが激しい。	
〃	99	〃	高杯		(4.7)			チャートの粗粒砂を多く含み、火山ガラスの細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面縦、斜めにハケ＋ヘラ磨き。内面横ナデ。稜部に幅0.5㎝程の粘土帯を貼付け強く横ナデ。稜部上下とも強い横ナデ。	外面大きな黒斑。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
123	100	SD 54	底部		(10.7)		5.8	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい褐色。内面ナデ。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	101	〃	鉢	8.1	7.1		2.3	チャートの粗粒砂を含み赤色風化礫の細粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ＋縦ハケ。内面ナデ痕。口縁部ナデ。	胴部に黒斑。
〃	102	〃	甕底部		(4.7)		4.7	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。内面横ナデ。底部つまみ出すように上げ底。	底端部、被熱赤変。
〃	103	〃	底部		(4.2)		7.5	チャートの粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。灰褐色。器表の荒れが激しい。	底部に被熱赤変。
〃	104	〃	底部		(16.6)		6.3	チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。底部内面指頭圧痕。	外面煤ける。底部被熱赤変。No. 220と同一個体の可能性あり。
〃	105	〃	底部		(14.3)		6.6	チャートの粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。赤褐色。外面縦ハケ。底部外側につまみ出し横ナデ。	
124	106	SD 55	壺	11.2	(3.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面縦ハケ。口縁部に2条の凹線文を有する。内面に指頭圧痕。	
〃	107	〃	壺	13.6	(5.1)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面横ナデか。口唇部横ナデで面取り。頸部内面指頭圧痕顕著。	
〃	108	〃	壺	13.9	(6.2)			チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ。内面縦ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面取り。	
〃	109	〃	壺	12.2	(5.5)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。外面縦ハケ。内面横ハケ。口縁部横ナデ。口唇部ハケで面をとる。	
〃	110	〃	壺	12.0	(4.8)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。口唇部下にわずかに拡張し面をなす。	
〃	111	〃	壺	12.7	(5.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内外面横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	112	〃	壺	14.1	(6.4)			チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ。口縁端部内面のみ横ハケ。	
〃	113	〃	壺	14.0	(5.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。ハケ状原体の圧痕らしきものが残る。口縁部内面ハケ。頸部内面ナデ。口唇部は面をなす。	
〃	114	〃	壺	6.9	(9.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面ナデ。内面搾り目と接合痕顕著。	
〃	115	〃	壺	12.0	(9.5)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ。指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	116	〃	壺	12.4	(9.3)			チャートの小礫～粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ、口縁部横ナデ。内面ハケ＋ナデ、指頭圧痕多数。口唇部強い横ナデで下に拡張。接合痕顕著。	
〃	117	〃	壺	12.3	(9.4)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ、口縁部横ナデ。内面横ハケ、頸部下に指頭圧痕顕著、口唇部ハケ。	
〃	118	〃	壺	14.4	(3.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ＋縦ハケ。肥厚した口縁。	
〃	119	〃	壺	16.7	(3.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。内面ハケ後ナデ。	口縁部に黒斑。
〃	120	〃	壺		(5.1)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい褐色。断面三角形の突帯を3条貼付けた後強いナデ。内面ナデ。	
〃	121	〃	壺	20.8	(2.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデか。口縁部はわずかに肥厚する。口唇部上につまみ上げ横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	122	〃	壺	14.4	(5.4)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂。幅1.5cm前後の貼付口縁で口唇部を強く横ナデする。頸部内面下に指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	123	〃	壺	14.9	(10.4)			チャートの粗粒砂を含む。暗灰黄色。外面、上←下方向のハケ。内面指頭圧痕。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	124	〃	壺	18.4	(4.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	125	〃	壺	16.5	(4.8)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。外面縦ハケ。内面右下がりのハケ＋横ナデ。口唇部下にわずかに拡張し面をなす。	
〃	126	〃	壺	17.0	(4.6)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	127	〃	壺	15.0	(10.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。胴部外面叩き＋ハケ後ハケ状原体で列点文を入れる。内面ナデ。口唇部強い横ナデで下垂し面をなす。列点文がわずかに残る。	胴部に黒斑。
〃	128	〃	壺	12.2	(11.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面上←下方向にハケ、胴部に叩き、肩部に上→下方向に撫でた接合痕。口縁部ハケ。内面ナデ。頸部内面に多数の指頭圧痕顕著。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
124	129	SD 55	壺	16.4	(6.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面縦ハケがわずかに残る。内面横ナデ。口唇部強い横ナデで下端部を拡張。器表の荒れが激しい。	
〃	130	〃	壺	16.2	(10.2)			チャートの小礫を多く含む。橙色。外面頸部ハケ後ヘラ磨き。口縁部縦ハケ。内面剝離が激しい。	
〃	131	〃	壺	16.0	(9.9)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面ナデ、ハケ状原体の圧痕が顕著に残る。器表の荒れが激しい。	
〃	132	〃	壺	12.1	(14.7)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。外面頸部縦ハケ、肩部にハケ状原体の列点文を有する。内面ナデ＋横ハケ。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	133	〃	壺	22.6	(9.3)			チャート、赤色風化礫の小礫を含む。明黄橙色。内面ナデか。口唇部凹線文風。器表の荒れが激しい。	
〃	134	〃	壺		(12.5)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ状原体の圧痕が残る。肩部木目の粗いハケ。内面ナデ。指頭圧痕、接合痕顕著。	胴部煤ける。
125	135	〃	壺		(7.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。断面が三角形の貼付突帯を２条有する。	
〃	136	〃	壺	18.2	(11.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面縦ハケ、頸部に横ナデ痕と列点文を有する。内面横ハケ＋横ナデ。頸部内面指頭圧痕顕著。口唇部横ナデし面を取る。	
〃	137	〃	壺	10.4	28.8	14.2	4.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ＋ヘラ磨き。肩部ハケ状原体の圧痕が多数残る。内面ハケ、底部に指頭圧痕顕著。上げ底風。	外面肩部に黒斑、胴下半部周りが帯状に煤ける。胴底部被熱赤変。
〃	138	〃	壺	11.1	25.4	17.7	5.2	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。内面頸部指頭圧痕。底部内面ハケ状原体の圧痕。器表の荒れが激しい。	胴部周りが帯状に煤ける。底部に黒斑。
〃	139	〃	甕	9.5	(4.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙黄色。外面ナデ。内面ハケ＋ナデ、搾り目と指頭圧痕あり。口唇部強い横ナデで面を取る。	
〃	140	〃	甕	13.6	(4.6)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。内面ハケ＋ナデ。外面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	141	〃	甕	19.0	(3.1)			チャート、赤色風化礫の小礫～細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面ナデ。口唇部強い横ナデで面取り。	外面煤ける。
〃	142	〃	甕	15.0	(2.5)			チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい黄褐色。内外面横ナデ。口縁部内面ヘラ磨き。口唇部上下に拡張し２条の凹線文を有する。器表に炭化物が付着。	外面煤ける。
〃	143	〃	甕	15.2	(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き＋ハケ後ナデ。口唇部強い横ナデで上下に拡張、その後口縁部横ナデ。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	144	〃	甕	15.1	(4.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部強い横ナデで上下にわずかに拡張。	
〃	145	〃	壺	14.2	(4.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。外面横ナデ、ハケ状原体の圧痕が残る。内面ナデ。口縁部幅１㎝程わずかに膨らむ。口唇部強い横ナデで下に拡張。器表の荒れが激しい。	
〃	146	〃	甕	15.0	(6.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。	
〃	147	〃	甕	17.1	(3.9)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。口唇部強い横ナデで下端部は下垂し２条の凹線文がわずかに残る。器表の荒れが激しい。	
〃	148	〃	甕	17.0	(5.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面頸部下左→右の削り。口唇部強い横ナデで拡張し沈線化した凹線文を２条有する。	外面煤ける。
〃	149	〃	壺	15.2	(4.3)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋横ナデ。内面横ハケ。口唇部強い横ナデで下に拡張。	外面煤ける。
〃	150	〃	甕	15.8	(6.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面縦ハケ、頸部強い横ナデ。口縁部横ナデしわずかに肥厚。内面ナデ。口唇部横ナデ。	外面煤ける。
〃	151	〃	甕	17.1	(4.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ハケ。内面頸部下部左←右方向にヘラ削り。口唇部強い横ナデで下端部を拡張。	
〃	152	〃	壺	15.1	(7.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ。口縁部～頸部内面横ハケ。胴部内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	
〃	153	〃	甕	12.8	(10.7)			チャートの粗粒砂を含む。橙黄色。外面叩き＋ハケ、叩きは頸部にしか見られない。内面ハケ。指頭圧痕、接合痕顕著。口唇部面取り。器表の荒れが激しい。	
〃	154	〃	甕	21.6	(5.7)			チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。内面横ナデ。口唇部強い横ナデで面をとる。器表の荒れが激しい。	
〃	155	〃	甕	21.0	(6.8)			チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。橙色。外面頸部にハケ、その後横ナデ。内面ハケ＋ナデ。接合痕あり。	胴部煤ける。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
125	156	SD 55	甕	16.4	(7.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄橙色。外面叩き＋縦ハケ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。頸部内面接合痕顕著。口唇部強い横ナデで拡張、下端部をつまみ出す。	外面煤ける。
〃	157	〃	甕	11.0	(8.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明橙色。外面縦ハケ。内面左←右方向のヘラ削り＋ハケ。口縁部外面強い横ナデ。	外面煤ける。
〃	158	〃	甕	14.9	18.3	14.3	5.1	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。外面上半部叩き目、後に下半部下→上方向にハケ。頸部下→上へのナデ。口縁部丁寧な横ナデ。頸部縦ナデ痕顕著。口唇部ナデ。内面下→上方向にハケ調整。	
〃	159	〃	甕	13.7	15.2	14.5	4.6	チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ヘラ削り＋ハケ＋ナデ。底部に指頭圧痕。	胴部外面煤ける。被熱赤変。胴部内面黒斑。
126	160	〃	甕	12.3	15.2	13.0	5.1	チャートの粗粒砂～小礫を含む。にぶい橙色。内外面ナデ＋ハケ。	外面煤ける。胴部に黒斑。
〃	161	〃	甕	18.6	(11.5)	18.8		チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。外面叩き＋ハケ。内面横ナデ＋ハケ。肩部内面は特に強い横ナデ。指頭圧痕顕著。口唇部強い横ナデ。	外面煤ける。
〃	162	〃	甕	23.0	(9.5)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂～小礫を含む。明黄橙色。外面縦ハケ、頸部下部に列点文を有する。内面強い横ナデ＋横ハケ。頸部内面指頭圧痕。口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	163	〃	高杯脚		(4.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ。	
〃	164	〃	甕	22.7	(11.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面強い横ナデ＋ハケ。内面ハケ＋ナデ。頸部内面接合痕顕著。	
〃	165	〃	甕	17.4	(14.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。外面ハケ＋横ナデ。内面横ナデ＋横ハケ。接合痕、指頭圧痕顕著。	外面煤ける。
〃	166	〃	高杯脚		(8.2)			チャート、赤色風化礫、泥岩の粗粒砂を含む。橙色。外面縦ヘラ磨き＋縦ハケ。内面ナデ。搾り目をナデ消す。指頭圧痕顕著。	
〃	167	〃	高杯脚		(6.7)			チャートの粗粒砂を少量含み、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ＋ナデ。内面縦ナデ痕顕著。製造時の指紋痕を認める。	
〃	168	〃	高杯脚		(5.9)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面縦方向にハケ＋ナデ＋ヘラ磨き。ハケ状原体の圧痕が残る。内面搾り目。径８～９㎜の小孔を外→内に２つ穿つ。選練された胎土。丁寧なつくり。	
〃	169	〃	高杯脚		(4.2)		12.6	チャートの細粗粒砂を少量含む。橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。内面横ハケ＋横ナデ。裾部に小孔を穿つ。	裾部に黒斑。
〃	170	〃	高杯脚		(7.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。脚部に充填痕顕著。器表の剝離が激しい。	
〃	171	〃	高杯脚		(11.8)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。脚部に充填痕。内外面観察不可能。	
〃	172	〃	高杯脚		(8.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を少量含む。明黄橙色。外面ヘラ磨き。ハケ痕わずかに残る。内面搾り目。指頭圧痕顕著。裾部に小孔。	
〃	173	〃	高杯脚		(9.8)		16.2	チャート、赤色風化礫、泥岩の粗粒砂を含む。橙色。内外面ハケ＋ナデ、一部にヘラ磨き。端部強い横ナデをしつまみ出す。接合部で剝離。	
〃	174	〃	高杯脚		(7.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ナデ＋縦ハケ。内面縦ナデ。搾り目を有する。	脚部被熱赤変。
〃	175	〃	高杯脚		(7.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ。内面接合部付近横ナデ、以下縦ナデ＋ハケ。	脚上部に黒斑。
〃	176	〃	高杯	26.0	(9.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面ヘラ磨き＋横ナデ。口縁部つまみ出し後、強い横ナデで鋭い稜を有する。分割形成。脚部との接合部で剝離。	
〃	177	〃	高杯	26.0	(2.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内面ハケ＋横ナデ。口唇部面とり。	
〃	178	〃	高杯	24.6	(2.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ヘラ磨きがわずかに残る。体部の屈曲部は稜をなす。内面ヘラ磨き。口唇部強い横ナデで面をなす。	
〃	179	〃	高杯	31.0	(6.9)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面凹線文風の凹を有する。強い横ナデ。内面屈曲部ヘラ磨き、他ナデ。外面屈曲部は稜をなす。接合部で剝離。	
〃	180	〃	高杯	27.8	(2.6)			チャートの粗粒砂を含む。明黄白色。体部に稜を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	181	〃	高杯	28.6	(3.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。屈曲部は稜をなす。口縁部に１条の凹線文風の凹を有する。	
〃	182	〃	高杯		(5.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面縦方向のヘラ磨き＋ハケ。内面ヘラ磨き。屈曲部で上部と剝離。接合部は横ナデ。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
126	183	SD 55	鉢	31.2	(14.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ＋ヘラ磨き。内面ヘラ磨き＋ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面をなす。	外面に大きな黒斑。
127	184	〃	鉢	21.6	(6.6)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	
〃	185	〃	甕底部		(4.2)		5.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面上←下のハケ、その後底部周縁つまみ出す。内面ナデ。底部つまみ出し時の指頭圧痕及び指紋が顕著に残る。	
〃	186	〃	底部		(3.8)		6.6	チャートの粗粒砂を含む。黄色。外面ハケ。	
〃	187	〃	底部		(4.3)		5.8	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ＋ヘラ磨きがわずかに残る。内面上←下方向のヘラ削り。	
〃	188	〃	底部		(4.8)		5.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄灰色。外面叩き＋ハケ。	
〃	189	〃	底部		(3.7)		2.2	チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。底部外面指頭圧痕。	
〃	190	〃	甕底部		(5.3)		5.5	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。橙色。内面上←下方向のヘラ削り。内外面指頭圧痕顕著。上げ底。器表の荒れが激しい。	外面煤け、被熱赤変。
〃	191	〃	甕底部		(2.0)		5.5	チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。外面ハケ。上げ底。	
〃	192	〃	甕底部		(3.2)		5.1	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄色。外面横ナデ。内面ヘラ削り。上げ底。	底部に黒斑。
〃	193	〃	底部		(5.4)		7.4	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面ナデ＋ハケ。内面器表の荒れが激しい。	
〃	194	〃	底部		(5.0)		8.2	チャートの小礫を多く含む。橙色。外面ハケ痕をわずかに認める。器表の荒れが激しい。	
〃	195	〃	甕底部		(5.6)		6.4	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。内面上←下のヘラ削り＋ナデ。底部指頭圧痕。底部つまみ出し、上げ底。	
〃	196	〃	底部		(6.0)		6.6	チャート、泥岩の粗粒砂を含む。黄褐色。外面ハケ。内面ナデ。	底部に黒斑。
〃	197	〃	底部		(6.2)		8.3	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面ハケ。内面ナデ。	内面底部に黒斑。
〃	198	〃	底部		(7.3)		4.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。内面接合痕、指頭圧痕。	
〃	199	〃	底部		(6.6)		5.6	チャートの小礫をわずかに含む。にぶい灰黄色。外面ヘラ磨きの跡が残る。内面ナデ、選練された胎土。上げ底風。	
〃	200	〃	底部		(9.0)		5.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄色。外面縦ハケ。内面縦ナデ。上げ底風。	胴底部煤けと被熱赤変。
〃	201	〃	底部		(5.4)		8.4	チャートの粗粒砂を含む。褐色。外面削り。内面ヘラ状原体を縦にし、横方向に削り調整。その圧痕が顕著。	
〃	202	〃	底部		(5.7)		5.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面底部のみ叩き。胴部ハケ。内面ハケ。	
〃	203	〃	底部		(9.0)		5.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。黄色。外面ハケ。内面ナデ。上げ底風。器表の荒れが激しい。	内面底部周縁煤ける。
〃	204	〃	甕底部		(4.8)		7.8	チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面叩き＋ナデ。ナデ痕、指頭圧痕顕著。内面ナデ。上げ底。	
〃	205	〃	底部		(7.2)		6.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。内面木目の荒いハケ。外面胴部に炭化物付着。	
〃	206	〃	底部		(6.9)		10.0	チャート、泥岩の小礫～粗粒砂を含む。橙色。外面ナデか。内面剝離が激しく観察不能。上げ底風。器表の荒れが激しい。	
〃	207	〃	底部		(7.3)		8.0	チャートの粗粒砂をわずかに含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ。外面底部に指頭圧痕。	
〃	208	〃	底部		(8.3)		5.1	チャート、赤色風化礫を含む。にぶい黄橙色。内外面ハケ。	
〃	209	〃	胴部		(9.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩きの後丁寧なナデ。内面下←上方向のナデ。	胴部に黒斑。
〃	210	〃	底部		(6.8)		8.2	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ナデ。内面剝離が激しく観察不可能。上げ底風。	
〃	211	〃	底部		(9.2)		7.1	チャートの小礫を多く含む。にぶい橙色。外面木目の粗いハケ＋ナデ。内面ナデ。	
〃	212	〃	底部		(10.0)		8.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。底部に接合痕を認める。内面強い横ナデでナデ痕顕著。	底部に黒斑。
〃	213	〃	底部		(12.1)		7.6	チャート、赤色風化礫を多く含む。にぶい黄橙色。外面叩き＋ハケ。内面下→上の削り。	底部に黒斑。
〃	214	〃	底部		(9.7)		6.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内面ナデ。器表の荒れが激しい。内面に炭化物付着。	底部に被熱赤変、黒斑。
128	215	〃	甕底部		(10.3)	16.0	5.6	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ハケ。内面指頭圧痕顕著。上げ底。胴部外面炭化物付着。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
128	216	SD 55	底部		(13.7)	16.7	6.8	チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。底部内面ナデ。指頭圧痕顕著。上げ底風。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。
〃	217	〃	底部		(10.8)		7.0	チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。明赤褐色。外面叩き＋ハケ。内面ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	218	〃	底部		(8.4)		10.8	チャートの粗粒砂を含む。明黄色。外面ハケ＋強いナデ、指頭圧痕。内面剝離が激しく観察不可能。	
〃	219	〃	底部		(12.6)		6.6	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き＋ハケ＋ナデ。内面ハケ後ナデ。底部内面製造時の指頭圧痕と指紋が顕著に残る。	
〃	220	〃	底部		(9.4)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	底部に黒斑。
〃	221	〃	底部		(6.7)		8.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。外面縦ハケ。内面剝離が激しい。	底部に黒斑。
130	223	SX 10	壺	12.4	(4.0)			チャート、砂岩の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口縁部内面横ハケ。頸部ナデ。	
〃	224	〃	甕	14.3	(1.8)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。灰褐色。内外面丁寧な横ナデ。口唇部面をなす。	
〃	225	〃	壺	16.0	(2.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデか。口唇部に幅1㎝程の凸帯を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	226	〃	壺		(10.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内面指ナデ、頸部付近搾り目。頸部外面縦ハケ。胴部外面叩き＋ハケ。外面摩耗。	
〃	227	〃	壺		(8.8)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケ。内面頸部下端に左←右の削り。口縁部内面横ハケ＋ナデ。	内外煤ける。
〃	228	〃	甕	19.3	(7.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ナデ。	
〃	229	〃	壺	24.1	(4.5)			チャートの粗粒を多く含む。橙色。頸部外面ヘラ状原体による圧痕。口縁は断面三角の粘土帯を貼付、口唇に2条の弱い凹線。	
〃	230	〃	高杯	20.2	(4.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。杯底部外面ヘラ磨き、内面器表の荒れが激しい。口縁部内外面横ナデ。屈曲部稜をなす。	
〃	231	〃	高杯	32.5	(3.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内外面ナデ。口唇部は面をなす。屈曲部は稜をなす。	口縁部外面に黒斑。
〃	232	〃	高杯		(2.2)		25.9	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。明黄橙色。器表の荒れが激しい。	
〃	233	〃	高杯		(5.1)		30.6	チャート、赤色風化礫の小礫を含む。明黄橙色。屈曲部は稜をなす。器表の荒れが激しい。	
131	234	〃	高杯		(5.6)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。接合部ナデるも接合痕顕著。	
〃	235	〃	高杯脚		(4.2)		16.3	チャートの小礫、粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。脚端部は上下につまみ出し3条の凹線を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	236	〃	高杯		(6.8)		31.4	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。外面ハケ＋ナデ。屈曲部は強い横ナデでするどい稜をなす。内面横ナデ。器表の剝離が激しい。	内面黒斑。
〃	237	〃	高杯脚		(8.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。搾り目顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	238	〃	底部		(10.0)		7.5	チャートの粗粒砂を含む。黄灰色。外面叩き。内面上←下方向のヘラ削り＋ナデ。上げ底風。	
132	241	SX 11	壺	6.2	(7.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面接合痕顕著。	
〃	242	〃	甕	15.8	(5.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面ハケ状原体の圧痕が残る。口唇部わずかにつまみ上げ横ナデ。	外面煤ける。No.245と同一個体か。
〃	243	〃	壺	17.0	(4.1)			チャートの粗粒砂を含む。灰黄褐色。外面横ナデ。内面横ハケ。口唇部2条の沈線化した凹線文が入る。	
133	244	〃	壺	14.0	(5.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面ハケ。口唇部上下につまみ出し横ナデで拡張し、径3㎜程の刺突が施される。	
〃	245	〃	甕	17.0	(5.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。外面頸部にハケ状原体の圧痕。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部は面をなす。	外面煤ける。No.242と同一か。
〃	246	〃	甕	13.8	(13.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩きわずかに残る。頸部に指頭圧痕とハケ。内面ナデ。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	外面煤ける。
〃	247	〃	高杯	25.0	(3.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面横ナデ。口唇部端部短く外反する。	
〃	248	〃	高杯脚		(8.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ナデ。内面はナデの圧痕が残る。接合部で剝離。	
〃	249	〃	高杯		(8.3)		26.8	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。接合部で剝離。器表の荒れが激しい。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
133	250	SX 11	高杯脚		(4.1)		14.7	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内外面横ナデ。内面わずかにハケが残る。口唇部は2条の凹線を有する。	
〃	251	〃	甕	20.0	(11.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面胴部ハケ。頸部より上強い横ナデ。内面左←右方向にナデ。口唇部横ナデで面をなす。外面器表の剝離が激しい。	外面煤ける。
〃	252	〃	高杯脚		(1.9)		16.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。器表の荒れが激しく観察不可能。	
〃	253	〃	高杯脚		(6.3)		18.8	チャートの粗粒～細粗粒砂を含む。灰黄色。外面ナデ。口縁部強い横ナデ。裾部に径1㎝程の小孔を穿つ。	外面裾部に黒斑。
〃	254	〃	高杯脚		(8.7)		13.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面ナデか。裾部は強い横ナデ。内面搾り目あり。接合部で剝離。器表の剝離が激しい。	外面被熱赤変。
〃	255	〃	甕底部		(5.2)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き後ナデ。内面ナデ。上げ底。	底部に黒斑。
〃	256	〃	甕底部		(7.6)		5.0	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。内面ナデ。底部は端部をつまみ出し、上げ底。器表の荒れが激しい。	
〃	257	〃	胴部		(14.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面叩き＋ハケがわずかに残る。器表の剝離が激しい。	胴下部に黒斑。
〃	258	〃	底部		(7.5)		4.9	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。外面縦ハケ＋ナデ。内面ナデ。上げ底風。	底部に黒斑。
〃	259	〃	底部		(7.9)		6.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き。内面上←下方向のヘラ削り。	
〃	260	〃	甕底部		(10.4)		5.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。内面上←下方向のヘラ削り。上げ底。	外面煤ける。
〃	261	〃	底部		(17.0)		6.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。明黄灰色。外面叩きとハケがわずかに残る。内面下→上方向に石は動いているが調整は不明。器表の剝離が激しい。	底部に黒斑。
〃	262	〃	底部		(17.4)		11.1	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面ハケ。内面器表の剝離が激しく観察不可能。	胴部に黒斑。
134	263	包含層	須恵器壺底部		(2.7)		8.7	精選された胎土に黒色細粗粒砂を含む。灰色。内面強い横ナデ。外面左→右に横ナデし磨く。高台部は強い横ナデ。内面底部と外面胴下部～高台に自然釉。	
〃	264	〃	甕	18.4	(6.8)			チャート、赤色風化礫を含む。橙色。口縁部外面横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	265	〃	須恵器蓋	18.0	(1.6)			長石、黒色細粗粒砂をわずかに含む。灰色。内外面横ナデ。口縁部強く横ナデし端部下に稜を有する。精選された胎土。	
〃	266	〃	土師器皿	16.8	2.5		14.6	砂粒をほとんど含まない。にぶい黄橙色。口縁部端部を内側に折り曲げる。内外面ともに器表の荒れが激しい。	内面に黒斑。
〃	267	〃	土師器高杯脚		(6.4)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。内外面丁寧な横ナデ。精選された胎土。	
〃	268	〃	須恵器壺	17.2	(6.4)			長石、チャートの粗粒砂、黒色粗粒砂を含む。灰色。外面横ナデ＋叩き。内面頸部より上は横ナデし、下は同心円文状の当具痕。口唇部横ナデで下垂し面をなす。	
〃	269	〃	須恵器蓋		(0.9)		25.4	長石、黒色粗粒砂を含む。灰色。内外面横ナデ。口唇部強く横ナデし端部下に稜を有する。精選された胎土。	
〃	270	〃	高杯	28.9	(3.6)			チャートの細粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。指頭圧痕顕著。強い稜を有する。内面横ナデ＋横ハケ。口唇部下端部をつまみ出し強い横ナデで拡張し面をなす。	
〃	271	〃	高杯脚		(6.6)		15.0	チャート、赤色風化礫の粗粒～細粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面裾部横ナデ。裾部に直径7～8㎜の小孔2個認める。	裾部に黒斑。
〃	272	〃	須恵器鉢	22.0	(6.1)			チャートと泥岩の細粒砂を含む。灰白色。内外面横ナデ。口唇部横ナデし内面わずかにつまみ上げる。	
〃	273	〃	高杯脚		(3.9)		24.0	チャートの細粒砂～粗粗粒を含む。橙色。内面左←右方向のヘラ削り。外面横ナデ、裾部に4条の凹線文を認める。裾端部は拡張し上部、下部につまみ出し3条の凹線文を有する。	
〃	274	〃	須恵器甕		(7.3)			黒色細粗粒砂を含む。灰白色。頸部口縁部外面格子状叩きの後強い横ナデ。頸部内面は同心円文状のあて具痕。	
〃	275	表採	須恵器甕		(5.6)			チャート、黒色細粗粒砂を含む。灰白色。頸部口縁部外面、格子状叩きの後強い横ナデ。頸部内面同心円文状の当具痕。	

遺物観察表（石器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm） 全長	全幅	全厚	重量（g）	材質	特徴
108	54	ST 11	石鏃	2.0	0.8	0.4	0.9	サヌカイト	片方の主面に自然を残す。平基式。刃部両面から調整剥離。
〃	55	〃	石鏃	3.5	1.7	0.4	3.3	サヌカイト	わずかに凹基。両面に主剥離面を残すが、断面三角を程す。片方の主面刃部の調整剥離が大きくなっている。
〃	56	〃	石鏃	4.6	1.0	0.4	1.9	頁岩	身からゆるやかに茎部に移行。最大幅身中位に有す。身断面ひし形。基部断面、不整六角形。
110	71	SK 35	砥石	9.2	7.5	4.7	588.0	石英粗面岩	使用は２面。
128	222	SD 55	石包丁	8.0	4.4	1.3	59.9	頁岩	一方の主面に自然面を残す。両側縁に弱い抉り。刃部の調整剥離なし。
131	239	SX 10	石包丁	5.3	7.7	1.2	64.2	頁岩	両長側縁自然剥離。短側縁の一方に抉り、片方は直線的。残る一方にせんこう具による半円孔。（一端は欠損の可能性あり）各調整は両面より行う。背部はわずかに内湾ぎみ。刃部はわずかに外湾する。
〃	240	〃	石包丁	10.2	5.1	1.1	59.7	頁岩	一方の主面に自然面を残す。一方の側縁が欠損。刃部に調整剥離はみられない。
134	276	包含層	刃器	4.5	9.2	0.9	43.0	サヌカイト	長側縁の一端に、片方から押圧によって刃部をつくり出している。
〃	277	〃	石包丁	9.9	4.5	1.1	63.4	頁岩	両端に抉り。背部敲打。刃部にコーングロス。

遺物観察表（金属器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）	特徴
108	57	ST 11	鉈	現存長 約3.0 身幅 約1.6 厚み 約0.25	断面三日月状を呈す。刃部の背面には鎬がみられる。サビの付着により身の厚みは２倍近くに膨れ上がっている。
〃	58-a	〃	鉄鏃	全長 4.9 鏃身 幅 1.8 厚み〈推定〉 0.3前後 長さ 約3.2 茎部推定 幅 0.5前後 厚み 0.4前後 長さ 2.7	錆化が著しく、鏃身の厚みが２倍以上に膨らんでいる。鏃身から茎にかけて変換点がある（縦断面）。茎の横断面形は、ほぼ正方形に近いものと思われるが、若干平面側が幅のある横長の長方形になるように思われる。
〃	58-b	〃	青銅製品	現存長 2.5 幅 0.9 厚み 0.44	折損。全面に研磨によるとみられる面を持つ。
〃	59	〃	袋状鉄斧	全長 11.1 刃幅 3.7 袋幅 3.1 最小幅 2.5	鉄板の厚みは錆ぶくれにより8.5cm～1.2cm程になっているが、観察し得る側面部の厚みより約0.4cm～0.6cm程度であったと推測される。袋部を展開すると端部で約７cm、腰部で約６cmとなる。
110	70	SK 35	鉈	全長 錆含む 11.1 推定 10.9 基部幅 最小部推定 1.2 最大部推定 1.4 刃部幅 1.2 厚み 基部〈推定〉 0.3 刃部〈推定〉 0.2	側面形は、刃部が先端へ向かうに従って次第に反っている。基部、刃部ともにウラスキは見られなく、木質や繊維質のものも見られない。全体的に錆化が著しい。

第Ⅴ章　考　　察

1．下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落

出　原　恵　三

1　はじめに

下ノ坪遺跡の弥生集落は、3万m²以上の広がりを有するものと考えられる。今次調査は、水路と農道部分を主な対象として約6,000m²の発掘調査を実施した。この調査は、各調査区の位置からして、集落址内に東西7本、南北1本のトレンチを入れたことになる。その結果竪穴住居址15棟、土坑15基、溝、壺棺等を検出した。単純計算をすれば、各遺構ともにこの5倍以上の存在が考えられる。すでに既報告の『下ノ坪遺跡Ⅰ』[(1)]に示したように、弥生時代の遺構・遺物は、前期末・中期のものを極少量含むものの、そのほとんどは後期に属するものである。今回新たに報告したものも全く同様である。高知平野の弥生後期土器編年は、Ⅰ～Ⅲ期に大きく時期区分することができるが、下ノ坪遺跡の諸遺構は、後期の中でもⅠ・Ⅱ期に限定することができる。すなわち短期間に消長した集落遺跡と言うことができよう。このことは、弥生後期の諸遺構にほとんど切り合い関係が認められないことからも窺うことができる。短命な遺跡ではあるが、100点以上のガラス小玉や鉄器の出土、多量の搬入土器など重要な資料を数多く含んでいる。このような集落がⅢ期まで続かず、何故突然に終焉を迎えることになるのか、興味深い問題である。

ここでは、前回の報告で示し得なかったⅠ期の土器について触れた後、搬入土器の問題、集落の位置付けについて所見を述べるものである。

2　後期Ⅰ期の土器

Ⅰ期は後期初頭に位置付けることができる。Ⅰ期の特徴は、組成上の特徴として中期を通して存在した南四国独特の土佐型甕[(2)]の消失や西部地域からの搬入土器の欠如を挙げることができる。手法上の変化としては、壺・甕の口縁部に見られた粘度帯貼付手法の消失を指摘できよう[(3)]。一方、中期から継続する要素も認められる。すなわち、中期末（Ⅳ期）に至ると高知平野は凹線文や内面ヘラ削り、列点文など中部瀬戸内からの影響を強く受けるようになるが、この傾向はそのまま踏襲されている。しかし、中期末の中部瀬戸内系の土器胎土に見られた平均的な細かな砂粒の混入は認められない。内面ヘラ削りが頸部直下にまで及ぶ点も中期末には見られない特徴である。

下ノ坪遺跡では、今回報告したST 9・12とST 13出土の主要な土器を該当させることができる。

ST 9からは、広口壺、甕、鉢、高杯が出土している。甕（4）は、水平に近く折り曲げた口縁に凹線文を有し、内面は頸部直下にまでヘラ削りが施されている。5は「く」字状口縁の甕であるが、やはり頸部直下までヘラ削りがみられる。高杯は破片であるが、杯部が垂直に立ち上がるタイプであり、Ⅰ期に属するものである。

ST 12からは、壺5点と甕3点が見られる。壺は広口壺4点（56・57・59・61）と直口壺1点（62）が出土している。広口壺には刷毛状原体による列点文が多く見られ（56・57・59）、直口壺（62）と広口壺（59）の口縁部には凹線文が施されている。甕の1点（64）は小型甕である。小型甕は、

後期初頭の指標とされるものであり、これまで田村遺跡 Loc.34A の ST 4[(4)]や下ノ坪遺跡 ST 19から出土している。田村遺跡例は、内面ヘラ削りが丁寧になされているが、本例はかなり粗雑になされており、寧ろⅡ-1期とした下ノ坪遺跡 ST 19のものに近い。出土量は十分とは言えないが、壺：甕＝5：3で壺が多く長頸壺が出土していないことからⅠ期とした。

ST 13からは多量の土器が出土しており、明らかに混入と思われるものがあるが、多くはⅠ期の土器と見て良い。壺は、広口壺（72～78・84）、細頸壺（68・71）、直口壺（70）、段状壺（80）がある。図示し得なかったものも含めて33点出土しているが、この内13点に凹線文が認められる。バリエーションが多いことも中期末に直結する要素である。74・84に見られる断面三角突帯は、Ⅱ-1期のもの（前回報告の ST 15の36、ST 16の91）よりもしっかりしている。ただ67・68・84の口縁部は、粘土帯貼付手法が一部後期初頭まで残ることを示しており、今後注目していかなければならない。甕は24点のうち12点に凹線文が見られる。また89のように土佐型甕のようなタイプも1例ではあるが存在する。高杯は垂直口縁（102）と段部を有するタイプ（101）がある。この他、壺棺1・2もⅠ期に属する。これまでⅠ期の資料は、田村遺跡 Loc.34A の ST 4、同 Loc.44の ST 1[(5)]、同 Loc.49の ST 13[(6)]に求めてきたが、これらはすべて拠点集落の資料であり、周辺部では今回の例が初めてのものである。粘土帯貼付口縁部や土佐型タイプが認められたことは、土器型式の変化が拠点集落に比べて漸進的に行なわれていることを示す事例として注目しなければならない。

表8　竪穴住居出土の土器組成

遺構	壺	甕	鉢	高杯	他	計	時期
ST 5	11点(50.0)	8点(36.4)	2点(9.1)	1点(4.5)		22点	Ⅱ-1
ST 6	11点(47.8)	11点(47.8)		1点(4.3)		23点	Ⅱ
ST 7	6点(11.5)	38点(73.1)	4点(7.7)	3点(5.8)	1点(1.9)	52点	Ⅱ-1
ST 8	28点(30.8)	49点(53.8)	8点(8.8)	6点(6.6)		91点	Ⅱ-1
ST 9	7点(43.8)	7点(43.8)	2点(12.5)			16点	Ⅰ
ST 10	49点(35.3)	74点(53.2)	6点(4.3)	10点(7.2)		139点	Ⅱ-3
ST 11	52点(40.3)	59点(45.7)	3点(2.3)	15点(11.6)		129点	Ⅱ
ST 12	5点(62.5)	3点(37.5)				8点	Ⅰ
ST 13	33点(44.6)	32点(43.2)	7点(9.5)	2点(2.7)		74点	Ⅰ
ST 14	15点(26.3)	30点(52.6)	6点(10.5)	6点(10.5)		57点	Ⅱ-3
ST 15	60点(62.5)	21点(21.9)	4点(4.2)	11点(11.5)		96点	Ⅱ-1
ST 16	34点(44.7)	30点(39.5)	3点(3.9)	8点(10.5)	1点(1.3)	76点	Ⅱ-1
ST 17	13点(32.5)	21点(52.5)	1点(2.5)	4点(10.0)	1点(2.5)	40点	Ⅱ-1
ST 19	30点(31.6)	49点(51.6)	7点(7.4)	8点(8.4)	1点(1.0)	95点	Ⅱ-1

3　搬入土器について

『下ノ坪遺跡Ⅰ』でも触れたように、下ノ坪遺跡の後期Ⅱ-1期を中心とする遺構からは讃岐産の土器が出土している。当遺跡から物部川を隔てた西方5㎞の地点には、南四国最大の拠点的集落田村遺跡があるが、ここにおいても同様の現象が見られる。ここでは田村遺跡の土器も含めて搬入土器について若干の考察を試みるものである。これらの搬入土器は、彼我の交流や土器の時間的併行関係を知る上で重要な資料となることは言うまでもないが、それ以上に弥生時代社会の構造的変化に根差した歴史的意味があるのではないだろうか。

これらの搬入土器は、すべて高松平野のもので後期後半以降に特徴的な展開を示すことで著名になった下川津B類土器[7]と同様の特徴的な胎土を有するものである。最近、後期初頭に属するものとして上天神遺跡[8]等で多量に出土しており、『胎土1類』土器と呼ばれているものである[9]。角閃石を含んだ茶褐色の特徴的な胎土は、細片でも容易に識別可能である。『胎土1類』土器の生産については、「意図的な粘土・砂礫の選別ないしは調合の産物」、「単純に自然的要因によって決せられるのではなく、土器製作に当たって一定の規範を共有する[10]」との解釈がなされている。したがって『胎土1類』土器は、弥生土器の伝統的な製作とは異なった過程を採用したものであり、この点からも「プレB類土器」として位置付けられるべき性格の土器である。

下ノ坪遺跡からは、壺・甕・高杯が見られ図示し得たものは10点であるが、細片を含めると100点以上が出土している。これらのうちFig. 136に再掲載した9点は、すべて後期Ⅱ-1期の遺構出土のものであり、おおよそ上天神遺跡の後期初頭に併行関係を求めることができる。またF区集中1出土の長頸壺（Fig. 18-138 a, 138 b）は、明らかに時期が降り林・坊城遺跡SX 03[11]か空港跡地遺跡SK 01[12]等に時期比定されるものである。田村遺跡からは、壺1点、甕3点、高杯4点が確認されている（Fig. 135）。Loc.34Aの竪穴住居ST 4の甕（1・2）は後期Ⅰ期に、Loc.36Bの竪穴住居ST 1の高杯（6）は後期Ⅱ-1期に属するものである。また甕（3）、壺底部（4）、高杯（5・7・8）は、後期Ⅱ-1期の土器を多く包含したLoc.45の溝SD 1からの出土である。田村遺跡の例も形態的な特徴から上天神遺跡の後期初頭に併行関係を求めることができよう。以上のように両遺跡共に後期Ⅱ-1期を中心とする時期に高松平野からの搬入土器が認められる。これらの搬入土器は、全体から見れば極少量に過ぎないが、中期を通して認められなかった現象であり、当該期の土器のあり方の特徴として捉えることはできよう。高知平野から直線距離で200㎞、四国山地を隔てた高松平野の土器が、当該期に限って搬入される背景はなんであろうか。

高知平野の中心部においては、前期末頃から中期を通して、南四国西部（仁淀川以西）に分布の中心を持つと考えられる土器が、頻繁に出土している。通称「薄手式土器[13]」と呼ばれている西部の土器と、高知平野中心部の土器との正確な比率を把握するには至っていないが、竪穴住居址などからの出土で見ると多い時には2割程度が認められる。この土器の移動は、南四国と言う共有の地域空間の中で生じる土器を介した日常的な人や物の移動、いわば「地域完結型」の交流に伴った現象として位置付けることができよう。しかしながら、高松平野からの200㎞を隔てた土器の搬入は、日常的な交流の中から生じた現象としては捉え難い。勿論中期の南四国が孤立していたわけではなく、縄文時代以来、石器石材としてのサヌカイトは中期を通して瀬戸内側から入ってきているので

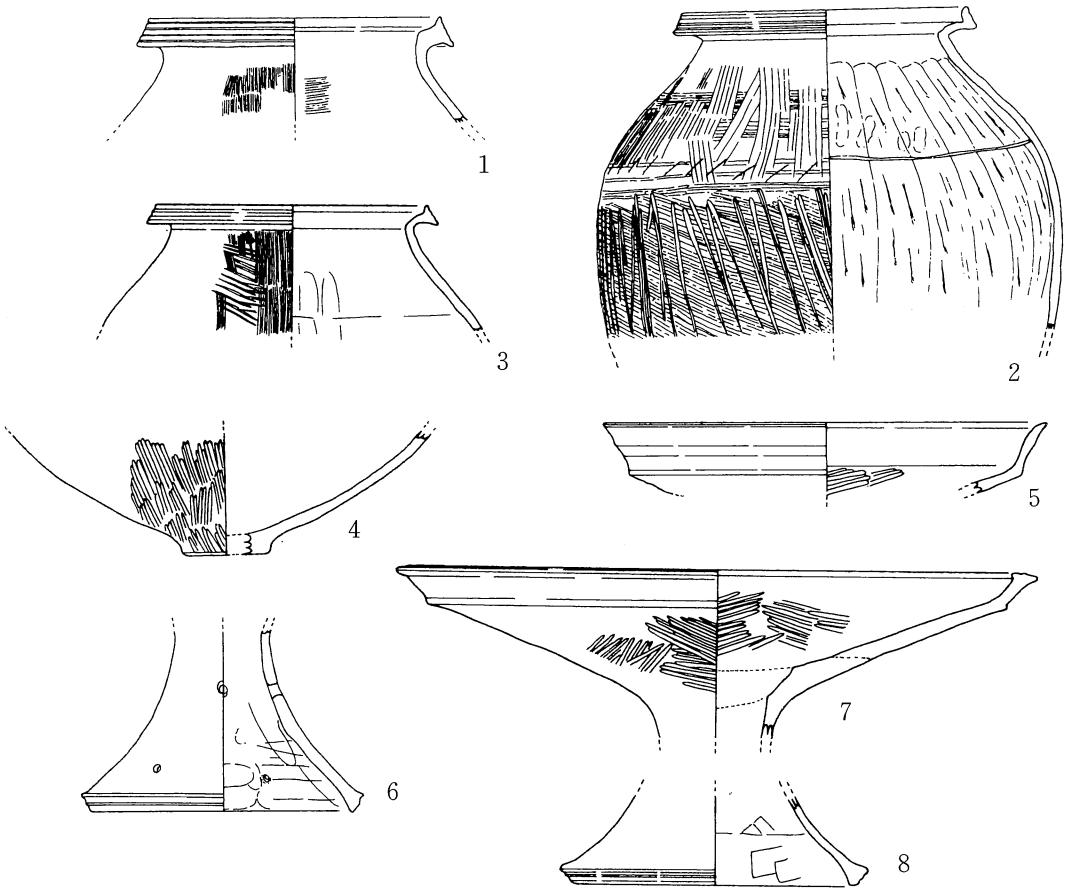


Fig. 135　田村遺跡出土の搬入土器
1・2（Loc. 34A ST 4）、3～5・7・8（Loc. 45 SD 1）、
6（Loc. 36B ST 1）S＝1/4

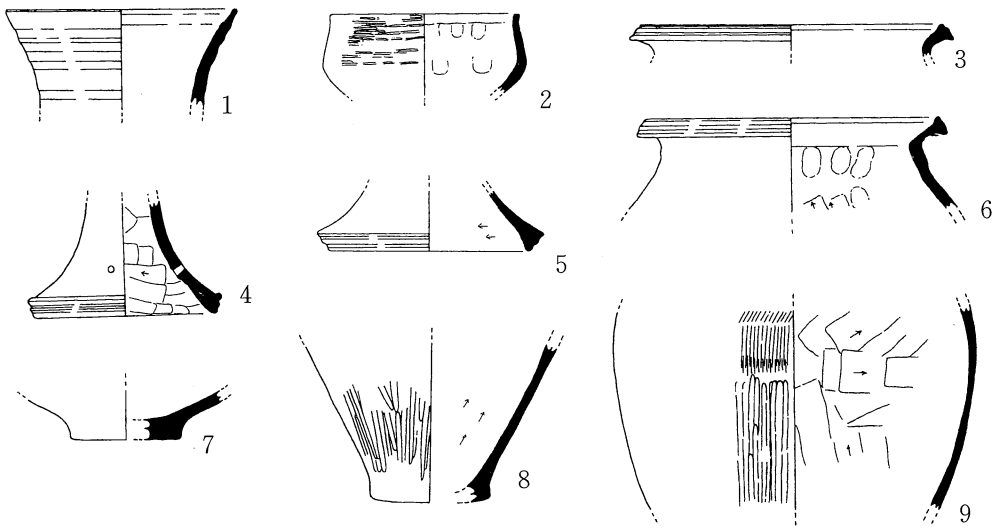


Fig. 136　『下ノ坪遺跡Ⅰ』報告の搬入土器
1・3・7（ST 16）、2（ST 7）、4・6（ST 15）、
5・8（ST 19）、9（SK 7）

ある。後期Ⅱ-1期を中心に見られる搬入土器は、日常的な交流を越えた彼我の関係の上に生じたものと見なければならないだろう。

遠隔地間の土器の移動は、弥生時代終末から古墳時代初めにかけて、下川津B類土器、東阿波型土器、吉備型甕、庄内甕などに見られる現象であり、その生産のあり方と移動は古墳時代社会の出現と密接に関係している。[14] 凹線紋土器の出現に象徴される中期後半・末は、西日本各地において集落遺跡が増加、その規模も拡大し、弥生時代社会の一大画期をなす時期である。中期前半の地域社会相互のバランスは大きく崩れ、再編成が進行していくなかで、政治的社会の新たな段階が到来したことが考えられる。しかしこの動向は、後期前半を頂点として再び地域性の濃厚な社会へと転じ、直線的に古墳時代へ進むことはない。古墳時代への飛躍は、倭国大乱を経なくてはならない。前述したように「胎土1類」土器の生産は、下川津B類のそれに通じる歴史的性格を有するものであり、その胎内に古墳時代的な生産関係を蔵している。「胎土1類」土器は、先に列挙した遠隔地移動型土器の先駆的形態、すなわち弥生後期初めにあって、古墳時代社会への胎動を告げる一つの現象として位置付けることができよう。

4　遺構

下ノ坪遺跡で検出した弥生時代の遺構は全て後期Ⅰ・Ⅱ期に属するものであり、その内訳は竪穴住居15棟、土坑16基、溝11条、壺棺墓2基、ピットである。これらの遺構の全てについて細かな時期比定をすることはできないが、可能な限り細分すると下のようになる。

後期Ⅰ期

　　竪穴住居：ST 9 ・12・13

　　壺棺墓：1 ・ 2

後期Ⅱ-1期

　　竪穴住居：ST 5 ・ 7 ・ 8 ・15・16・17・19

　　土坑：SK 7 ・10・11・35・36

後期Ⅱ-2期

　　土坑：SK 4 ・ 8 ・ 9 ・12

後期Ⅱ-3期

　　竪穴住居：ST 10・14

竪穴住居ST 11と溝の多くは、出土遺物から所属時期を細分することができない。後期Ⅱ期の中で捉えなければならない。以下遺構毎に考察を試みる。

①　竪穴住居

各調査区トレンチ状の調査であった為に、竪穴住居を完掘できたのはST 11のみである。従って規模や平面形態を正確に把握することは難しいが、調査部分から推定すると、平面形態は、円形7棟（ST 5 ・ 8 ・ 9 ・10・12・13・19）、楕円形3棟（ST 6 ・15・16）、隅丸方形2棟（14・17）、張出部を有するもの2棟（ST 7 ・11）の4種類からなる。床面積は、40㎡以上の大型が3棟（ST 8 ・10・11）、30㎡台の中型が5棟（ST 7 ・12・13・16・19）、20㎡台或いはそれ以下の小型が6棟（ST

5・6・9・14・15・17）である。高知平野の弥生前期から後期Ⅱ期までの竪穴住居址は、円形プランを基調とするが、中期に楕円形と隅丸方形プランのものが登場して、比較的小型の竪穴住居に採用される傾向がある。下ノ坪遺跡の諸例にもそのような傾向が窺われる。今回の調査で注目すべき竪穴住居は、張出部を有する2例である。ST 7は、円形住居の東側に0.6m×2mの張出部が設けられているが、その製作手法は特異である。すでに担当者が詳細に述べているように、張出部を竪穴住居床面よりも深く掘り下げ、その部分に床面形成の土とは異なる土で、版築状に固めテラス状に成形して、壁溝も巡らしている。一方、ST 11は、南側に0.4m×2.6mの台形状の張出部を持つ。張出部に壁溝は巡るが、床面は住居の高床部につながり、ST 7で見たような成形方法は採っていない。このような張出部を持つ竪穴住居の検出例は、南四国では初めてのことである。中期末に南九州で盛行する花弁型住居との関連があるのだろうか。出現の背景については今後の課題である。

それでは、張出部の機能はどのようなことが考えられるのであろうか。ST 7は、一般的な中型住居に属しているが、出土遺物としては他の住居から出土例のない石製の勾玉が床面出土している。このことから、司祭者的人物の住居であることを推測することが可能であり、祭祀関連の空間として理解することができるかもしれない。一方、ST 11は、大型住居であり、ガラス小玉80点や鉄斧の出土など他を抜きん出ており、特別な役割を果した住居であったことは想像に難くない。従って張出部を持った住居は、現状では一般的な住居とは性格を異にする特別な機能を有していたとすることができよう。

② 土坑

土坑は16基検出したが、出土遺物が少なく詳細な時期比定をすることのできないものも多い。平面形態もさまざまで、その機能を十分に明らかにすることはできないが、一つの傾向を指摘することはできる。それは、細長い溝状のプランを有する土坑が比較的多く見られることである。SK 4・5・6・12・35・36・37・38を類例として挙げることができる。これらの中には、遺物をほとんど含まないものもあるが、SK 4・5・35・36のように多量の遺物を含んでいるものもある。溝状土坑の規模は、最大のもので長さ5.7m、幅1.2m、深さ0.4m前後を測り、規模の小さなものでは、長さ2.8m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。長軸断面は船底状、短軸断面はU字形を呈する。

このようなプランと遺物のあり方を示す例は、田村遺跡のLoc.45・49の中期後葉の集落址に多く見られる。後期に属する当集落は、田村遺跡の例を踏襲したものとして理解することができよう。ただ今回の溝状土坑には、竪穴住居との間に対応関係を求めることができるところに特徴がある。即ち両者は最短距離で1～2mの間隔を保って位置しており、一対の関係にあることを指摘できる。類例としてST 11とSK 35、ST 15とSK 12、ST 16とSK 5、ST 17とSK 11を挙げることができる。それぞれの両者の関係は時間的にも矛盾しない。なかでもST 11と対を為すSK 35は、鉈の優品と多量の土器が出土しており最もふさわしい対応関係を示している。これらの溝状土坑は、竪穴住居に付属した施設として理解することができよう。今後、田村遺跡等においても対応関係の追究が必要である。弥生時代前期初頭の集落には、田村遺跡や津島遺跡では掘立柱住居と並行する溝状土坑の存在が知られているが、同様の性格の遺構として位置付けることができよう。高知平野においては、中期前半を通して住居に付属した溝状土坑は認められなかったが、中期後葉に至って復活し後

期Ⅰ・Ⅱ期に採用されることが明らかとなった。

5　高知平野における弥生集落と下ノ坪遺跡

高知平野の弥生時代社会の展開は、前期初頭から後期に至るまで一貫して拠点集落として機能してきた田村遺跡とその周辺部の遺跡との関係として捉えることができる。下ノ坪遺跡が成立する後期Ⅰ・Ⅱ期は、田村遺跡がその規模を最も拡大し、竪穴住居の数も全体を通して最も多く営まれた時期である。すでに周知のように、田村遺跡は前期初頭に、松菊里型住居５棟、掘立柱建物十数棟で構成される集落として出発し、やがて環濠集落を形成するなど前期を通して拡大傾向を示す[15]。ところが中期を迎えると一端急速に衰微傾向を示し、中期前半（Ⅱ・Ⅲ期）には、竪穴住居６棟、土坑数基という小規模な状況に陥る。しかしながら凹線文土器が一般化し始める中期末（Ⅳ期）に至ると状況は一変し、俄に活況を呈するようになる。竪穴住居はⅣ期だけで15棟を数える。この背景には、在地における自生的発展だけでなく凹線文土器の浸透に見られるように、中部瀬戸内からの強力なインパクトがあったことは明白である。吉備を中心とした中部瀬戸内文化の浸透によって達成されたのである。この傾向は後期に入ってさらに加速され、集落の規模は益々拡大され、土器においては、すでに触れたように中期までの在地色を大きく払拭してしまう。後漢鏡片２点もこのような中で持ち込まれたものであろう。高松平野からの搬入土器は、新たな段階の到来を告げるものであった。

このような盛況期の中で、周辺部には下ノ坪遺跡や小籠遺跡[16]、東崎遺跡、岩村遺跡[17]、拝原遺跡[18]などが次々と登場し新たな集落が営まれるのである。これらの言わば後期新興集落は、下ノ坪遺跡で明らかとなったように、農・工具類の鉄器を保有していた。また溝状土坑に見られるように田村遺跡の特徴的な遺構も踏襲していたのである。後期Ⅰ・Ⅱ期の高知平野には、田村遺跡を核として周辺部に新興集落が展開するという地域社会の新たな構図が描かれ、さらに中部瀬戸内との強固な関係で結ばれていたのである。下ノ坪遺跡は、高知平野の弥生社会の盛行期に新興集落として登場し、遺跡の範囲から推定して75棟前後の竪穴住居を容していたのである。

しかしながら、後期Ⅲ期を待たずに下ノ坪遺跡は突然消滅し、田村遺跡もまた同様の運命を辿るのは何故か。このことを明らかにするには、下ノ坪遺跡の最後の状態を詳しく知る必要がある。下ノ坪遺跡は、古代の掘立柱建物が集中するＨ区の標高が最も高く南に下がるにつれて少しづつ低くなっている。Ｈ区の遺構検出面は、おおよそ標高11.6ｍであるが、南のＭ・Ｏ区は、11.2～11.3ｍであることによっても明らかであろう。これらの調査区の遺物包含層（Ｍ区）には砂礫、砂層、シルト層の堆積が見られ、竪穴住居址の埋土にも同様の傾向が見られる。このようなことから、西を流れる物部川の洪水に襲われ大きな打撃を被り、集落が廃絶されたものと思われる。一方の田村遺跡においても同様の状況証拠が認められる。Loc.45で検出した大溝ＳＤ１は、後期Ⅱ期を中心とした遺物が多く出土し、すでに見たように高松平野からの搬入土器が出土した遺構である。この溝は、田村遺跡の中で砂礫・砂で埋まっているほとんど唯一の溝である。これ以後、田村遺跡では新たに設けられた遺構は極僅少であり、集落が急速に衰退して行ったことを示している。高知平野では、後期Ⅱ期の段階に大規模な洪水が発生し、そのことによって平野部に展開していた集落が、壊滅的

な痛手を被ったことがわかる。今後、当該期の集落研究においてこのような事例が、どれだけ普遍化できるのか追究しなければならない。

比較的標高の高いところに立地していた新興集落は、後期Ⅲ期から古墳時代前期にかけて継続的に営まれる。また後期Ⅲ期に至って新たに多くの集落が登場するが、これらの集落の特徴は、洪積台地上に営まれる例が多いこと、田村遺跡のように拠点的な集落に成長する例が認められないことである。拙者は、かつて南四国に前期古墳が欠如する原因について、青銅祭器と土器生産のあり方から、弥生時代的な社会関係を最後まで保ち続けたことに求めた[19]が、社会的諸関係とともに高知平野の弥生社会の発展を頓挫させた自然災害にも、その要因の一つがあることを付け加えなければならない。

表9　高知平野における主要な弥生時代集落遺跡の消長

註)

1）小松大洋・出原恵三・池澤俊幸・行藤たけし『下ノ坪遺跡Ⅰ』高知県野市町教育委員会　1997年

2）出原恵三「『土佐型』甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号 遺跡刊行会　1990年

3）出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開」『遺跡』第31号 遺跡刊行会　1988年

4）廣田佳久「Loc.34A」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第４分冊 高知県教育委員会　1986年

5）出原恵三「Loc.44A」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第３分冊 高知県教育委員会　1986年

6）出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書 田村遺跡群 田中地区』高知県教育委員会　1986年

7）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1990年

8）大久保徹也他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第６冊 上天神遺跡』香川県埋蔵文化財研究会　1995年

9）森下友子「胎土１類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第４冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1990年

10）大久保徹也「上天神遺跡の『在地』土器と『搬入』土器」前掲８）

11）宮崎哲治『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第２冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1993年

12）森格也他『空港跡地遺跡発掘調査概報』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1992年

13）出原恵三「『薄手式土器』について」『南国史談』第７号　1989年

14）出原恵三「弥生から古墳へ ― 前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻第２号 考古学研究会 1993年

15）出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻第３号 考古学研究会　1987年

16）出原恵三「弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷」『小籠遺跡Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997年

17）出原恵三「『川津』としての岩村遺跡」『岩村遺跡群Ⅱ』高知県南国市教育委員会　1997年

18）出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会　1993年

19）14）に同じ

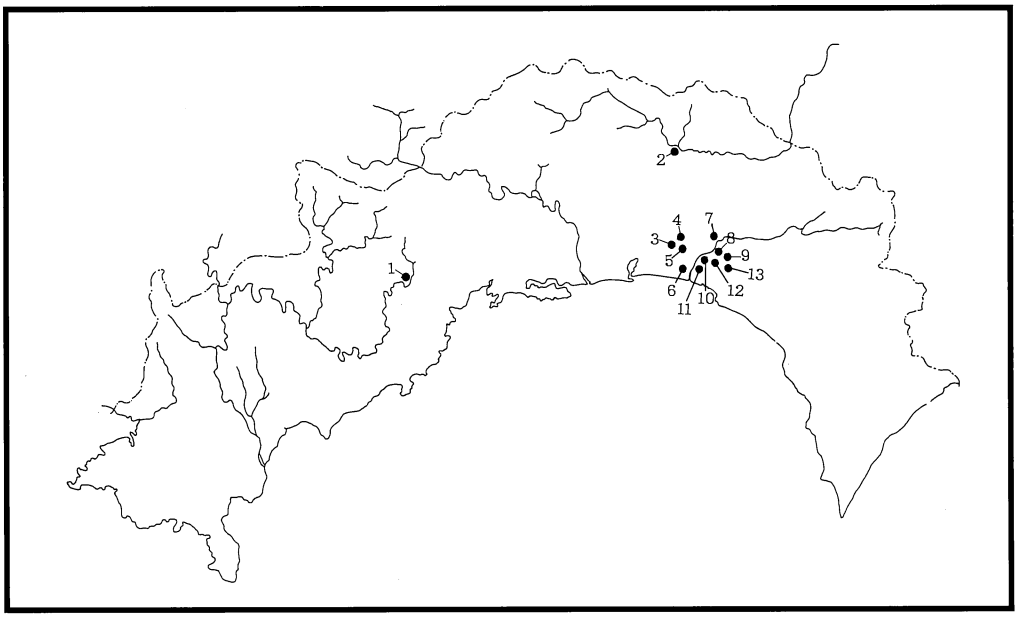
2．南四国における弥生時代の鉄器について

小　松　大　洋

(1)　はじめに

下ノ坪遺跡の調査では、弥生時代から古代の鉄器が多数出土しており、その中で弥生時代に属するものは７点を数える。一遺跡における出土点数としては、高知県下の弥生諸遺跡の中では比較的多い例に属する。県下の弥生時代に属する鉄器の出土点数は、管見の限りでは13遺跡82点にのぼるが、これまで鉄器についての本格的な検討はなされていない。すでに周知のように鉄器は革命的な生産用具として位置づけられており、特に鉄器が広く普及し始める弥生時代中期末以降は鉄器の入手が弥生社会の最大の関心事のひとつとなり、その入手や入手ルートの確保を巡っての動きが列島社会を政治的統合へと加速させる。本県においてもこの頃から集落の立地や規模、或いは土器組成に大きな変化が見られ、伝統的社会に地殻変動が生じていたであろうことが、最近の遺跡調査から窺うことができる。これらの変化の全てが鉄器の普及に原因することはないにしても、相当な影響を与えたものと考えられる。

ここでは、南四国における鉄器と弥生社会の関係を明らかにする前提として、県下出土の鉄器を集成し時期的な変遷や出土器種とその特徴などについて述べるものである。なお、後期の鉄器の時期比定については、出原恵三氏後期土器編年のⅠ期を前葉、Ⅱ期を中葉、Ⅲ期を後葉とする。



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	宮野々遺跡	6	田村遺跡	11	下ノ坪遺跡
2	田畠遺跡	7	ひびのきサウジ遺跡	12	本村遺跡
3	小籠遺跡	8	林田遺跡	13	稗地遺跡
4	五軒屋敷遺跡	9	龍河洞遺跡		
5	東崎遺跡	10	深渕遺跡		

表10　鉄器の出土遺跡分布図

表11　弥生鉄器出土遺跡一覧表

遺　跡　名	市町村	出土点数	鉄器の種類と点数
宮野々遺跡	大野見村	7点	鉄鏃4、その他3
田畠遺跡	土佐町	1点	鉇1
小籠遺跡	南国市	4点	鉇2、鉄斧1、その他1
五軒屋敷遺跡	南国市	2点	鉄鏃1、その他1
東崎遺跡	南国市	20点	鉄鏃10、鉄鎌2、鉇2、鍬・鋤先2、その他4
田村遺跡	南国市	2点	鉄鏃1、鉄斧1
ひびのきサウジ遺跡	土佐山田町	3点	鉄鏃1、刀子1、鉇1
林田遺跡	土佐山田町	17点	鉄鏃14、鉇1、その他2
龍河洞遺跡	土佐山田町	2点	鉄鏃2
深渕遺跡	野市町	5点	鉇1、鉄釧2、その他2
下ノ坪遺跡	野市町	7点	鉄鏃3、鉇2、鉄斧1、摘鎌1
本村遺跡	野市町	3点	鉄鏃3
稗地遺跡	香我美町	9点	鉄鏃6、摘鎌1、その他2

表12　器種別一覧表

鉄器の器種	点数	出　土　遺　跡
鉄斧	3	小籠遺跡1、田村遺跡1、下ノ坪遺跡1
鉇	10	林田遺跡1、ひびのきサウジ遺跡1、小籠遺跡2、田畠遺跡1、東崎遺跡2、深渕遺跡1、下ノ坪遺跡2
鍬・鋤先	2	東崎遺跡2
鉄鎌	2	東崎遺跡2
摘鎌	2	下ノ坪遺跡1、稗地遺跡1
刀子	1	ひびのきサウジ遺跡1
鉄釧	2	深渕遺跡2、宮野々遺跡4、田村遺跡1、東崎遺跡10
鉄鏃	45	五軒屋敷遺跡1、稗地遺跡6、本村遺跡3、下ノ坪遺跡3、ひびのきサウジ遺跡1、林田遺跡1、龍河洞遺跡2
その他	15	林田遺跡2、小籠遺跡1、東崎遺跡4、深渕遺跡2、五軒屋敷遺跡1、宮野々遺跡3、稗地遺跡2
計	82	

(2)　工具

①　鉄斧

鉄斧は石器から鉄器への変換の中で、いち早く鉄器化した工具で、南四国においては板状鉄斧が1点（2）と袋状鉄斧が2点（1、3）の計3点が出土している。2は田村遺跡[1]の竪穴住居ST 18

から出土している。全体に錆化が著しく、刃部の形状はつかめないが全体の形状は把握することはできる。全長6.8㎝、全幅6.3㎝、厚さ0.3㎝、重さ280.0ｇを測る。後期中葉に属する。３は小籠遺跡[2]の竪穴住居ST 22から出土している。刃部の形状はいまひとつ明らかではないが袋部はよく残っている。袋部は密閉していない。残存長5.7㎝、袋部の幅1.6㎝、袋部の厚さ1.0㎝、鉄板の厚み0.1㎝、重さ9.9ｇを測る。後期後葉に属する。１は下ノ坪遺跡[3]の竪穴住居ST 11から出土しており、平面形は柄袋部から身にかけて肩を有し刃部は両刃である。全長11.1㎝、全幅3.7㎝、全厚0.5㎝、重さ99.9ｇを測る。後期中葉に属する。出土点数は少ない。

② 鉈

木工具である鉈は、南四国において小籠遺跡、東崎遺跡[4]、林田遺跡[5]、ひびのきサウジ遺跡[6]、田畠遺跡[7]、深渕遺跡[8]、下ノ坪遺跡の７遺跡より出土しており、出土数は10点を数え鉄器全体の12.1％を占める。初現は、現在のところ後期中葉でそれより古い例はない。もっとも早いものでは、下ノ坪遺跡の竪穴住居ST 11より１点（６）、同土坑のSK 35より１点（５）、深渕遺跡の竪穴住居ST３より１点（７）、小籠遺跡の竪穴住居ST 11床面より１点（４）の計４点を挙げることができる。これらは後期中葉に属する。４は刃部が断面三日月形の裏すきを有し、基部は断面長方形を呈す。刃部から茎端部にかけては徐々に細くなっており、全長14.2㎝、最大幅1.8㎝、厚さ0.5㎝、重さ29.4ｇを測る。完形品の中では南四国で最大である。

後期後葉に属するものは東崎遺跡の竪穴住居ST５より１点（８）、同トレンチTR３より１点(12)、田畠遺跡の竪穴住居ST１より１点（９）、ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST９－Ｐ１より１点(10)、小籠遺跡の竪穴住居ST 22－Ｐ６より１点(11)、林田遺跡の竪穴住居ST２より１点(13)の計６点があげられる。

これらの形態的な特徴をみると完形品が少なく明確にはいえないが、残存部が刃部のみで身の確認できない６を除いては、全て身の断面は方形であり、裏すきがあるものは見られない。また、身は刃部から茎端部まで真っすぐに延びるタイプ（12、13）とやや幅を狭めるタイプ（４、５、７）がある。刃部については４、６、７、12、13に裏すきが、６、７、８については鎬が確認できる。10は刃部が欠損しているが、欠損部の断面は片丸を呈する。４、12の刃部はいわゆる鰻状をなし、10も欠損部にわずかな膨らみが確認できることから鰻状をなしていたものと推測される。また、これらの中で５のみは刃部から身にかけて断面が方形を呈し、幅もやや広く、他のものと比較すると若干様相が異なる。平面形は刃部のみを比較してみると、出土地点の同じである下ノ坪遺跡のST 11から出土した６と似ているが、裏すきは見られない。９は古墳時代初頭に属する可能性がある。

(3) 農具

① 鍬・鋤先

東崎遺跡の竪穴住居ST４とST５から１点づつ、計２点出土している。ST４出土の14は、全長4.4㎝、幅2.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ10.2ｇを測り、全国例と比較すると小形である。ST５出土の15は、片方の折り返し部が欠損しており、刃部は外湾する。全長6.8㎝、幅4.1㎝、厚さ0.5㎝、重さ45.5ｇを測る。共に後期後葉に属する。

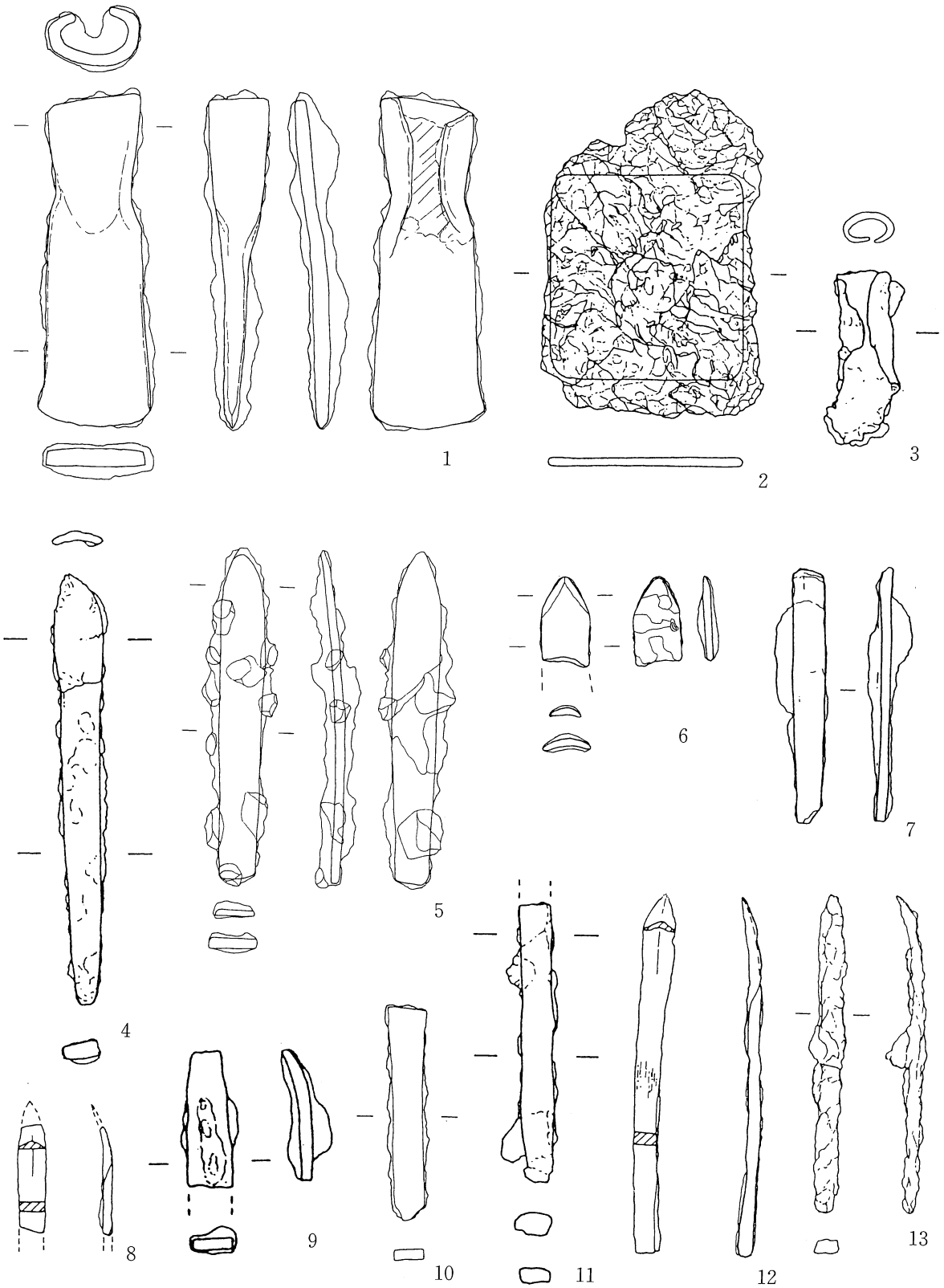


Fig. 137　鉄斧：1～3、鉇：4～13（S＝1/2）

② 鉄鎌

東崎遺跡の竪穴式住居ST４より１点（16）、同ST５より１点（17）の計２点が出土している。16は直角状で木柄の上半部の背面に溝を設け、基部を挟み込み、折り返しが横にずれないようにストッパーの機能を果たしている。17は折り返しが丸みを帯び「つ」の字状になっており、木柄に長方形の柄穴を設け、鎌を通して曲部を叩いて折り返しの先端を木柄に食い込ませ、木柄が抜けないように固定するようになっている（地獄止め）[9]。共に後期後葉に属する。

③ 摘鎌

稗地遺跡[10]の竪穴住居ST５から１点（19）、下ノ坪遺跡の包含層より１点（18）の計２点が出土している。19は後期後葉に属し、両端に折り返しが見られ、刃部はやや外反する。最大長7.4㎝、幅2.7㎝、厚さ0.3㎝、重さ30.6ｇを測る。18は全体に錆化が著しいが、原形はよくとどめている。全長8.3㎝、幅3.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ39.1ｇを測る。刃部・背部はわずかに外湾し、折り返しはみられない。18は包含層からの出土で時期は不明確であるが、周辺の状況から見て後期中葉に属するものと思われる。

④ 刀子

ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST８から１点（20）出土している。錆化が激しいが刃部がわずかに認められる。全長6.3㎝、全幅1.7㎝、厚さ0.4㎝、重さ8.6ｇを測る。後期後葉に属する。

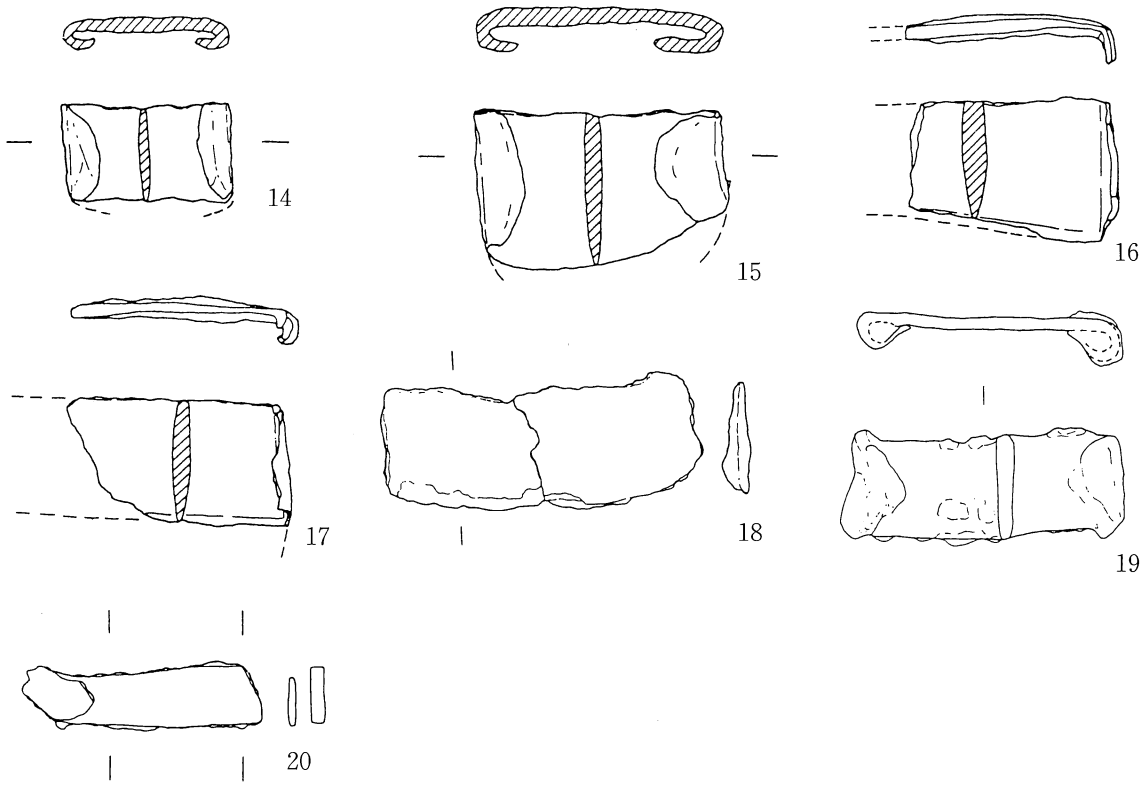


Fig. 138　鍬・鋤先：14・15、鉄鎌：16・17、摘鎌：18・19、刀子：20（S＝1/2）

(4) 武器

① 鉄鏃

鉄鏃の出土点数は45点であり、鉄器総点数の割合から見ると過半数を占める。遺跡別にみると林田遺跡14点、東崎遺跡10点、宮野々遺跡[11]4点、稗地遺跡6点、本村遺跡[12]3点、下ノ坪遺跡3点、龍河洞遺跡[13]2点、ひびのきサウジ遺跡1点、田村遺跡1点、五軒屋敷遺跡[14]1点となる。なお分類は、柳葉式と圭頭式は関のないものをa類、関が明瞭にとれるものをb類とする。

もっとも早いものは中期末に出現する本村遺跡の土坑SK2より2点（21、24）、同未確認遺構のSX1より1点（23）の計3点があげられる。3点はすべて無茎鏃であり、21は平基式、23は凹基式、24は尖基式である。

後期中葉に属するものは、下ノ坪遺跡の竪穴住居ST14より1点（27）、同ST11より1点（34）、同ST8より1点（38）の計3点、田村遺跡の竪穴住居ST14より1点（28）の計4点があげられる。これら4点はすべて柳葉式であり、28はa類、27、34、38はb類である。

後期後葉に属するものは、宮野々遺跡1区の竪穴住居ST1より3点（22、30、62）、同未確認遺構SXより1点（61）の計4点、東崎遺跡の竪穴住居ST1より3点（31、44、49）、同竪穴住居ST4より1点（46）、同竪穴住居ST5より3点（39、42、60）、同竪穴住居ST7より1点（48）、同竪穴住居ST8より2点（25、32）の計10点、五軒屋敷遺跡の竪穴住居ST1より1点（43）、稗地遺跡の竪穴住居ST3より5点（40、41、45、58、59）、同竪穴住居ST5より1点（63）の計6点、ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST3より1点（50）、林田遺跡の竪穴住居ST2より11点（26、29、36、37、51、52、53、54、57、64、65）、同竪穴住居ST4床上より1点（33）、同トレンチより1点（56）の計14点、龍河洞遺跡の第1室より2点（35、47）の計45点である。この中で柳葉式a類は33、36、39、b類は27、31、32、34で、分類ができないものは25、26、29、30、37である。圭頭式はa類が46、47、50、51、52、53、54、b類は42、43、44、45、48、55、56、57で、分類できないものは40、41、49である。方頭式は58、59で、60、61、62、63、64、65は不明である。尚、65は鉋の可能性もある。

(5) 装身具

① 鉄釧

南四国において2点の出土例しかなく、2点（66、67）とも同一地点である深渕遺跡の竪穴住居ST3床面から出土している。通常大きさは腕輪としての機能を果たすため直径が7～8㎝のものが多いようであるが、66は全長11.3㎝であり円を作ると直径3.2㎝となるので半分程度欠損しているものと思われる。67も全長16.4㎝で同じことがいえる。両者とも後期中葉に属する。

(6) その他

69、70、76は棒状鉄製品、66、71、81はその先が細く尖っていることから針状鉄製品と思われる。その他は破片であったり、錆化が激しく形が不明瞭のため不明とする。

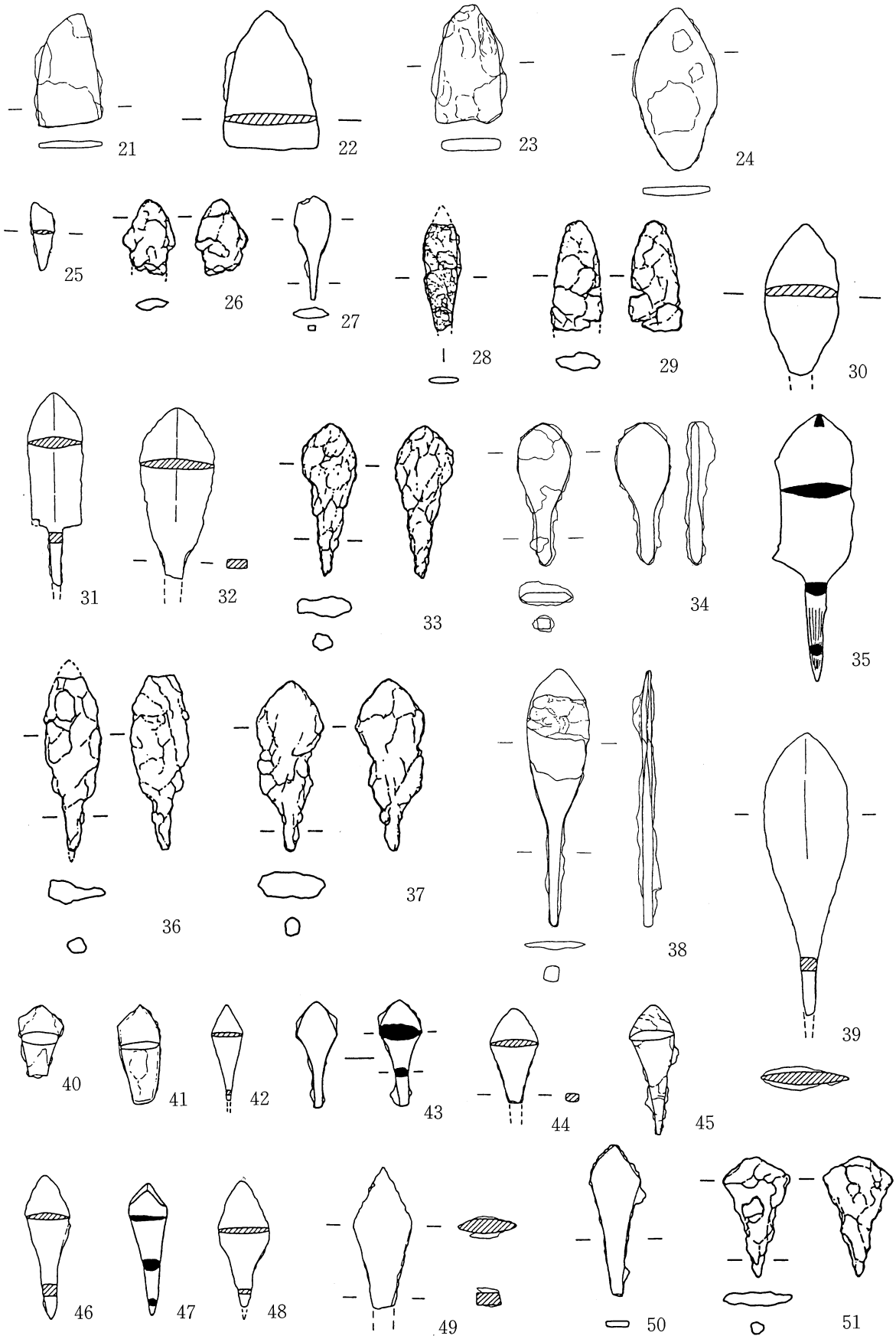


Fig. 139　鉄鏃：21～51（S＝1/2）

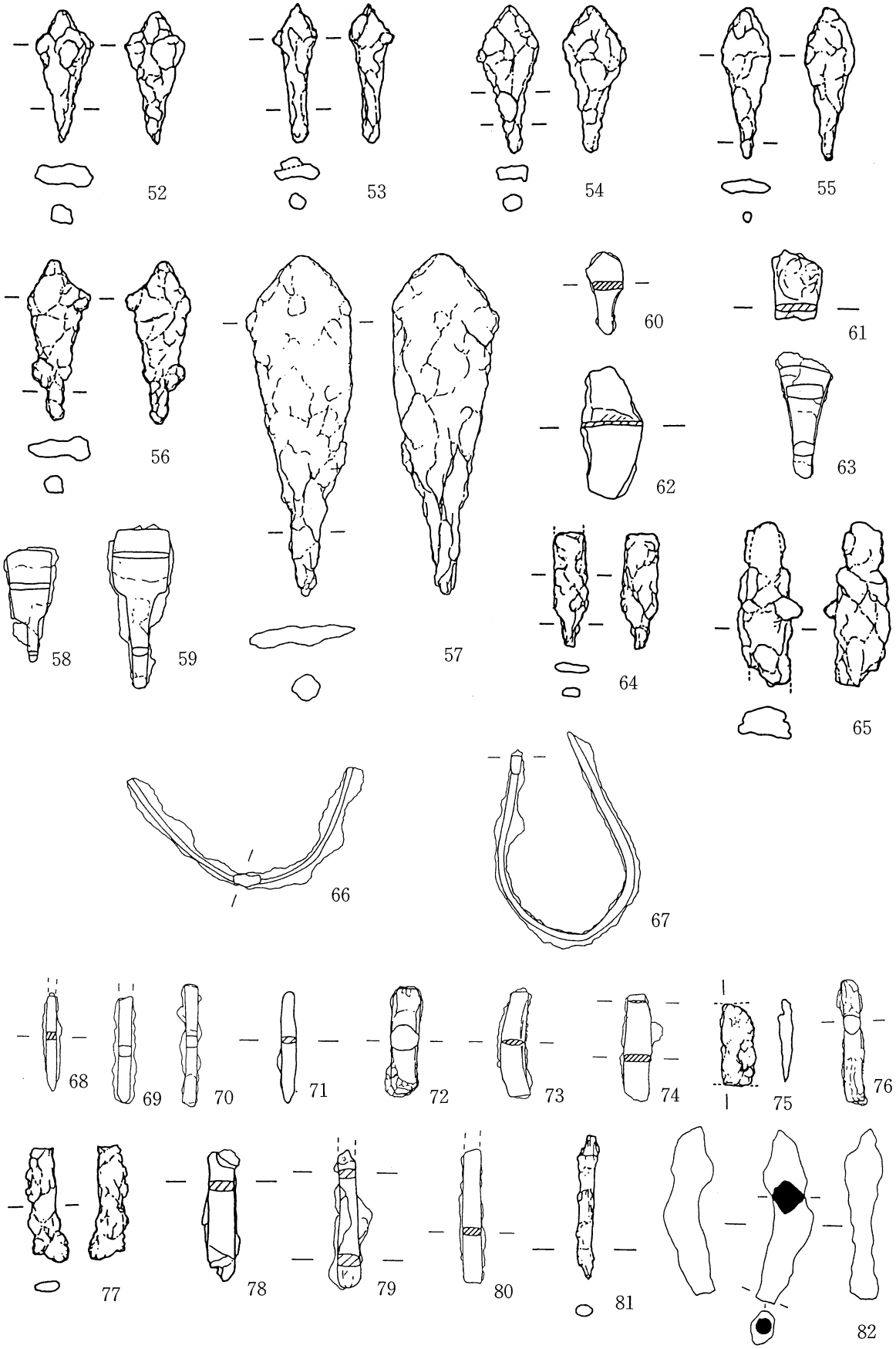


Fig. 140　鉄鏃：52～65、鉄釧：66・67、その他：68～82（S＝1/2）

(7) まとめ

我が国における鉄器の使用は、福岡県曲り田遺跡出土の板状鉄器が縄文時代終末まで遡ることが確認されている。南四国においては中期末に使用の開始が確認される。鉄器は石器と共存しながら徐々に鉄器に置き換えられていくが、それは明らかに器種による時期差があり、生活に必要なものから鉄器化が開始される[15]。その中で鉄器化がもっとも早いのは工具の鉄斧であり、南四国においては後期中葉に田村遺跡に出現する板状鉄斧がみられる。板状鉄斧と袋状鉄斧の両者は中期前半から中頃まで北部九州において共存しており、中期後半になると瀬戸内、近畿以東へと広がりをみせていく。しかしながら両鉄斧は同じ歩調の広がりをみせず、板状鉄斧の分布だけが優越する。その過程は、製作技術の未成熟さや、同じ機能の扁平片刃石斧の存在により袋状鉄斧の必要性がなかったことから、板状鉄斧が優越したものといわれている[16]。その後、瀬戸内、近畿以東も後期後半から終末にかけて袋状鉄斧が優越するようになり、南四国においても同様の傾向がみられる。一方、下ノ坪遺跡、小籠遺跡より出土している袋状鉄斧は、素材の整形や袋の形状に独自性があり、後期中葉の段階ですでに在地生産があったと考えられるものである[17]。

鉇は中国に起源を発し、青銅製から鉄製へと材質変化をたどり、中期前半までに舶載品として北部九州に出現する（福岡県吉ヶ浦遺跡）。国産品として出現するのは北部九州において中期後半と考えられている。その後瀬戸内、近畿以東へと波及していき、後期後葉から終末に急速に普及と定着をみせる。南四国においては、深渕遺跡、下ノ坪遺跡、小籠遺跡が後期中葉に出現をみせる。中でも下ノ坪遺跡、小籠遺跡は、鉄斧同様、後期中葉の段階にすでに在地生産があったものと考えられている。

次に農具であるが、我が国においてその出現は工具より遅い。それは弥生の農具が石包丁を除けば木製品が主流を占め、その製作のために工具の鉄器化を優先したからである。南四国においては鍬・鋤先２点（14、15）、鉄鎌２点（16、17）、摘鎌２点（18、19）であり、すべて後期終末期から古墳時代初頭にかかるものである。一般に農具が盛んになるのは弥生後期終末になってからであり、本格的な鉄器化は古墳時代以降であるといわれているが[18]南四国も全国的な動きと同一である。

武器である鉄鏃は、南四国における鉄器の出現の中ではもっとも早く、本村遺跡の出土例では中期末まで遡る。しかし、本村遺跡の出土遺物全体でみると石鏃が主流であり、徐々に鉄鏃が出現し始めた時期であることが窺える。後期中葉になると田村遺跡、下ノ坪遺跡からも鉄鏃が出現し始めるが、後期中葉以前に出現するのはその３遺跡の７点のみであり、鉄鏃全体の割合で見ると13％程度でしかない。その他はすべて後期後葉に属するものである。後期後葉になると林田遺跡で14点、東崎遺跡で12点と多量に出土する遺跡も出現し、鉄鏃も後期後葉に爆発的に増加するものである。また、型式と時期に着目すると中期末は全３点の出土数のうちすべてが無茎鏃である。後期中葉は出土している４点のすべてが柳葉式である。後期後葉になると不明を除く35点中18点が圭頭式、９点が柳葉式であり、圭頭式が過半数を占め圧倒的に多い。これらのことから鉄鏃は出現をみる中期末には無茎鏃が主流であり、後期中葉に柳葉式へと変化していき、後期後葉になると前葉の流れを継続しながらも圭頭式へと変化していったものと推測できる。

これら鉄器の出土地点をみると洞穴遺跡である龍河洞遺跡出土のものを除く80点中69点が竪穴住

居から出土している。これは鉄器全体の86％を越えるものである。次に多いのが土坑の５点で６％を占める。他は住居跡外１点、包含層１点、性格不明土坑２点、トレンチ２点である。

次に石器の出土と比較しながら鉄器の出土状況を遺跡別にみることにする。中期末から後期前半ともっとも早い時期に鉄器が出現する本村遺跡は、先に述べたが鉄鏃は３点で石器が大部分を占めている。後期中葉の遺跡をみると、下ノ坪遺跡は器種の豊富な７点が出土しているが、農具である石包丁も存在している。田村遺跡は３点で石鏃、石斧が共存する。小籠遺跡は後期中葉のものは１点出土しているが、石器はない。深渕遺跡は４点の出土で石器の出土はない。後期後葉の遺跡では東崎遺跡から20点が出土し、もっとも多い。現時点で石器の有無は報告書が未完のため不明である。次に多いのが林田遺跡で17点を数えるが、石器は確認されていない。稗地遺跡は９点に対し石包丁が４点、小籠遺跡は３点に対し石包丁が１点確認されている。宮野々遺跡は７点、ひびのきサウジ遺跡は３点、五軒屋敷遺跡は２点が出土しているが、それぞれ石器は確認されていない。田畠遺跡は鉈の破片の出土と一緒に石包丁も出土している。これらをみると、鉄器を保有していた集落の中にも石器は共存しており、その中でも農具の石包丁が目立つ。

これらのことから、南四国における鉄器は中期末に本村遺跡に出現し、次いで後期中葉に田村遺跡、下ノ坪遺跡、深渕遺跡、小籠遺跡と物部川下流域にかなり普及し、後葉になると林田遺跡や稗地遺跡など物部川中流域や内陸の平野部にまで拡大をみせる。後期後葉から古墳時代初頭にかけては、前期以来の拠点的集落である田村遺跡が解体し、周辺の平野部や物部川中流の段丘部に中・小の集落が爆発的に増加する時期であり、南四国の弥生社会に構造的な大変化が生じた時である。[19] このことと鉄器の普及は密接な関係があったものと考えられる。

末筆になりましたが、今回の集成については愛媛大学文学部の村上恭通氏、高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏に助言を得たことと、更谷大介氏の助力に対して記して感謝の意を表します。

（註）

（１）『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第４分冊 高知県教育委員会 1986年

（２）出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター　1996年

（３）出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし『農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1997年

（４）廣田佳久「考察」『高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長畝古墳群』(財)高知県埋蔵文化財センター　1996年

（５）宅間一之・山本哲也・森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会　1985年

（６）高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会　1990年

（７）筒井敬二『宮古野地区県営圃場整備事業に伴う田畠遺跡発掘調査報告書 田畠遺跡』土佐町教育委員会 1996年

（８）吉原達生・高橋啓明・出原恵三『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

(9) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993年
(10) 松田知彦『山南川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 稗地遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター　1993年
(11) 松田知彦『宮野々遺跡』大野見村教育委員会　1997年
(12) 坂本憲昭『野市町本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1993年
(13) 岡本健児他『高知県文化財調査報告書第10集 龍河洞』高知県教育委員会　1958年
(14) 角谷和男・下村公彦『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会　1984年
(15) 村上恭通「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』 1998年
(16) 高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』学生社　1990年
(17) 村上恭通「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』 1998年
(18) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993年
(19) 出原恵三「弥生から古墳へ ―前期古墳空白地域の動向―」『考古学研究』 1993年

表13　鉄器図版番号表

No.	器　種	時　期	出土地点	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	遺跡名
1	鉄斧	後期中葉	ST 11	11.1	3.7	0.5	99.9	下ノ坪遺跡
2	〃	〃	ST 18	6.8	6.3	0.3	280.0	田村遺跡
3	〃	後期後葉	ST 22	5.7	1.6	0.1	9.9	小籠遺跡
4	鉈	後期中葉	ST 11　床上5cm	14.2	1.8	0.5	29.4	〃
5	〃	〃	SK 35	11.1	1.4	0.3	25.3	下ノ坪遺跡
6	〃	〃	ST 11	3.0	1.6	0.2	3.6	〃
7	〃	〃	ST 3　床面	8.5	1.1	0.4	13.0	深渕遺跡
8	〃	後期後葉	ST 5	3.6	0.9	0.3	2.3	東崎遺跡
9	〃	〃	ST 1	4.6	1.3	0.4	10.0	田畠遺跡
10	〃	〃	ST 9　P 1	7.1	1.4	0.4	14.0	ひびのきサウジ遺跡
11	〃	〃	ST 22　P 6周辺	9.2	1.2	0.7		小籠遺跡
12	〃	〃	TR 3	11.9	1.1	0.4	10.8	東崎遺跡
13	〃	〃	ST 2　埋土	10.5	1.2	0.5	9.2	林田遺跡
14	鍬・鋤先	〃	ST 4	4.4	2.5	0.3	10.2	東崎遺跡
15	〃	〃	ST 5	6.8	4.1	0.5	45.5	〃
16	鉄鎌	〃	ST 4	5.6	3.7	0.6	16.0	〃
17	〃	〃	ST 5	6.0	3.2	0.5	11.8	〃
18	摘鎌	後期中葉	包含層	8.3	3.5	0.3	39.1	下ノ坪遺跡
19	〃	後期後葉	ST 5	7.4	2.7	0.3	30.6	稗地遺跡
20	刀子	〃	ST 8	6.3	1.7	0.4	8.6	ひびのきサウジ遺跡
21	鉄鏃	中期末	SK 2	3.9	2.2	0.2	11.1	本村遺跡
22	〃	後期後葉	1区　ST 1　床上	4.8	3.3	0.4	15.3	宮野々遺跡
23	〃	中期末	SX 1	4.0	2.3	0.4	9.3	本村遺跡
24	〃	〃	SK 2	5.6	2.8	0.3	12.6	〃
25	〃	後期後葉	ST 8	2.3	0.8	0.1	0.8	東崎遺跡
26	〃	〃	ST 2　P 15	2.6	1.9	0.4	2.5	林田遺跡
27	〃	後期中葉	ST 15	3.6	1.3	0.4	1.6	下ノ坪遺跡
28	〃	〃	ST 14	3.7	1.1	0.2	4.2	田村遺跡
29	〃	後期後葉	ST 2　埋土	3.8	1.9	0.6	4.6	林田遺跡
30	〃	〃	1区　ST 1　床面	5.3	2.5	0.4	9.2	宮野々遺跡
31	〃	〃	ST 1	6.7	1.9	0.4	7.2	東崎遺跡
32	〃	〃	ST 8	5.9	2.6	0.3	10.3	〃
33	〃	〃	ST 4　床上	5.3	1.9	0.7	6.9	林田遺跡
34	〃	後期中葉	ST 11	4.9	1.8	0.3	8.7	下ノ坪遺跡
35	〃	後期後葉	第1室	9.5	2.7	0.5	23.8	龍河洞遺跡
36	〃	〃	ST 2　埋土	6.0	2.0	0.8	7.7	林田遺跡
37	〃	〃	ST 2　埋土	5.9	2.3	0.9	12.4	〃
38	〃	後期中葉	ST 8	9.0	2.1	0.5	13.2	下ノ坪遺跡
39	〃	後期後葉	ST 5	9.8	3.0	0.8	14.3	東崎遺跡
40	〃	〃	ST 3	2.5	1.6	0.5	2.1	稗地遺跡
41	〃	〃	ST 3	3.4	1.3	0.2	3.9	〃
42	〃	〃	ST 5	3.3	1.1	2.0	0.9	東崎遺跡
43	〃	〃	ST 1	3.6	1.4	0.6	2.5	五軒屋敷遺跡

表13　鉄器図版番号表

No.	器　種	時　期	出土地点	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	遺跡名
44	鉄鏃	後期後葉	ST 1	3.2	1.7	0.3	2.6	東崎遺跡
45	〃	〃	ST 3	4.5	1.5	0.3	4.0	稗地遺跡
46	〃	〃	ST 4	5.0	1.5	0.2	4.1	東崎遺跡
47	〃	〃	第1室	4.7	1.4	0.2		龍河洞遺跡
48	〃	〃	ST 7	4.3	1.8	0.3	2.9	東崎遺跡
49	〃	〃	ST 1	4.9	2.0	0.5	9.5	〃
50	〃	〃	ST 3　床面	5.3	1.8	0.2	5.0	ひびのきサウジ遺跡
51	〃	〃	ST 2　埋土	4.7	2.4	0.5	5.6	林田遺跡
52	〃	〃	ST 2　埋土	4.6	2.0	0.8	5.6	〃
53	〃	〃	ST 2　床上	4.8	1.0	0.8	4.9	〃
54	〃	〃	ST 2　埋土	5.1	2.0	0.5	7.1	〃
55	〃	〃	住居跡外	5.2	1.7	0.5	5.7	〃
56	〃	〃	TR-P	5.5	2.2	0.9	9.2	〃
57	〃	〃	ST 2　床上	11.7	3.7	0.8	41.2	〃
58	〃	〃	ST 3	3.8	1.4	0.2	4.2	稗地遺跡
59	〃	〃	ST 3	5.6	2.0	0.3	8.8	〃
60	〃	〃	ST 5	2.6	1.3	0.5	2.4	東崎遺跡
61	〃	〃	1区　SX 1	2.4	1.7	0.3	3.1	宮野々遺跡
62	〃	〃	1区　ST 1　床面	4.5	2.1	0.1	14.8	〃
63	〃	〃	ST 2　埋土	4.0	1.2	0.4	2.9	林田遺跡
64	〃	〃	ST 5	3.8	1.8	0.5	5.9	稗地遺跡
65	〃	〃	ST 2　P 11	5.7	2.3	1.1	11.1	林田遺跡
66	鉄釧	後期中葉	ST 3　床面	11.3	0.9	0.4	9.9	深渕遺跡
67	〃	〃	ST 3　床面	16.4	0.6	0.3	13.9	〃
68	その他	後期後葉	ST 8	3.3	0.5	0.3	1.2	東崎遺跡
69	〃	〃	ST 3	3.6	0.5	0.4	3.1	稗地遺跡
70	〃	〃	ST 5	4.2	0.4	0.4	2.7	〃
71	〃	〃	2区　SK 1	3.8	0.5	0.3	1.3	宮野々遺跡
72	〃	後期中葉	ST 3　床面	3.7	0.9	0.7	7.3	深渕遺跡
73	〃	後期後葉	ST 6	3.6	0.4	0.2	2.7	東崎遺跡
74	〃	〃	ST 5	3.5	0.9	0.3	2.3	〃
75	〃	〃	ST 2　埋土	2.9	1.1	0.5	2.2	林田遺跡
76	〃	後期中葉	ST 3　床面	4.3	0.6	0.7	5.7	深渕遺跡
77	〃	後期後葉	ST 2　埋土	4.0	0.8	0.4	3.9	林田遺跡
78	〃	〃	1区　ST 1	4.5	0.9	0.4	5.2	宮野々遺跡
79	〃	〃	1区　ST 1	4.8	0.8	0.4	6.9	〃
80	〃	〃	ST 5	4.5	0.6	0.4	2.2	東崎遺跡
81	〃	〃	ST 22					小籠遺跡
82	〃	〃	SK 3	5.8	1.4	1.2	10.8	五軒屋敷遺跡

3．南四国における古代前期の土器様相
―下ノ坪遺跡の成果を中心として―

池　澤　俊　幸

Ⅰ．はじめに

今次の報告には、一括性の高い遺構出土遺物をはじめとする古代の遺物が多量に含まれている。これらは特に律令期の土器については散発的とも言えた従来の本県の状況と比較すると、画期的な質と量に恵まれたものである。よってここでは、まず今次出土の古代前期の土器について供膳具を中心に明らかにした後、既出の同件を併せて土佐の当該期の土器様相について考察する※。器形の呼称等は平城宮発掘調査報告をもとに、南四国の実態に沿うよう設定した。また本県域、南四国、土佐という名称をここでは同じ地域に対して用いる。該当資料が比較的に最も充実しているのは、下ノ坪遺跡も所在する物部川流域及び南国市にあたる地域で、香長平野の呼称をあてることができる。その他の県東部、西部は一括性と器種・器形の充実を満たす資料に欠けるが、西南部の幡多地域では一定量の出土がみられる。

Ⅱ．器種と分類

器形、細部形態共、器種を超えて認められるものには同じ名称を用いるようにした。Fig. 141及び表14に今次出土例を示している。また搬入品については同列に扱わず、別項を設ける。

1．土師器

杯A

高台を持たず、平坦な底部から屈曲して直線的に立ち上がる。後述のⅠ-5～6期では4種以上の法量分化が想定できる他、各期で法量分化がみられる（表17、18、19他）。SB 16やSF 1では重ねて祭祀的な使用もされている。

①　口縁部形態

次の3種に分類する。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

g）明確に外反するもの。

杯B

杯Aと同様の形態に、高台を付す。良好な資料が少なく、法量による分類は明確にし得ない。

①　口縁部形態

次の1種とそれ以外のものに分ける。

g）明確に外反するもの。

※以下、特記しない場合は供膳具について述べるが、例えば煮炊具についても共伴する供膳具の以下のような検討によって、既に一定の編年観は得られるものと考えている。煮炊具の詳細については紙幅の関係もあり、別稿に期したい。

② 高台形態、位置

高台の断面形によって次の３種に分ける。

1）下の２者に属さないもの。端部は方形になるものや、拡張するもの、端面が凹むものがある。

5）高さや厚さがやや大きく、断面が長方形となるもの。

6）基部に比して先が細いもの。

高台の位置は内側に付くものから外側（周縁部）に付くものまでがある。外側に付くものには、体部外面より連続的に高台に至るものがある。

杯C

断面形が丸みを持ち、底部より湾曲して立ち上がる。出土数は少ないが、法量分化はある。口縁端部内面はやや凹んで内傾するものや、段になるものがある。今次報告ではその全てが後述するⅠ群胎土の赤彩であり、外面下半に断続ケズリを施し、内面にはしばしば放射状暗文を認める。

本類の属性としては丸味を持った形態が特徴的で、その系譜としては畿内の「土師器杯C」が考えられ、その影響を受けて在地生産されたものとして捉えられる。

椀A

平坦で小振りの底部より弱く屈曲し、やや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は外反したり内面を凹状にせず、中にはやや内向を加えるものがある。少なくとも初現期である後述の編年試案Ⅰ-５期頃（以下編年試案略す）には、外底部にケズリを施すものとみられる。出土数は少なく、法量分化については明確にし得なかった。

皿A

平底の皿。表12、13をはじめ、各期で法量分化を認める。

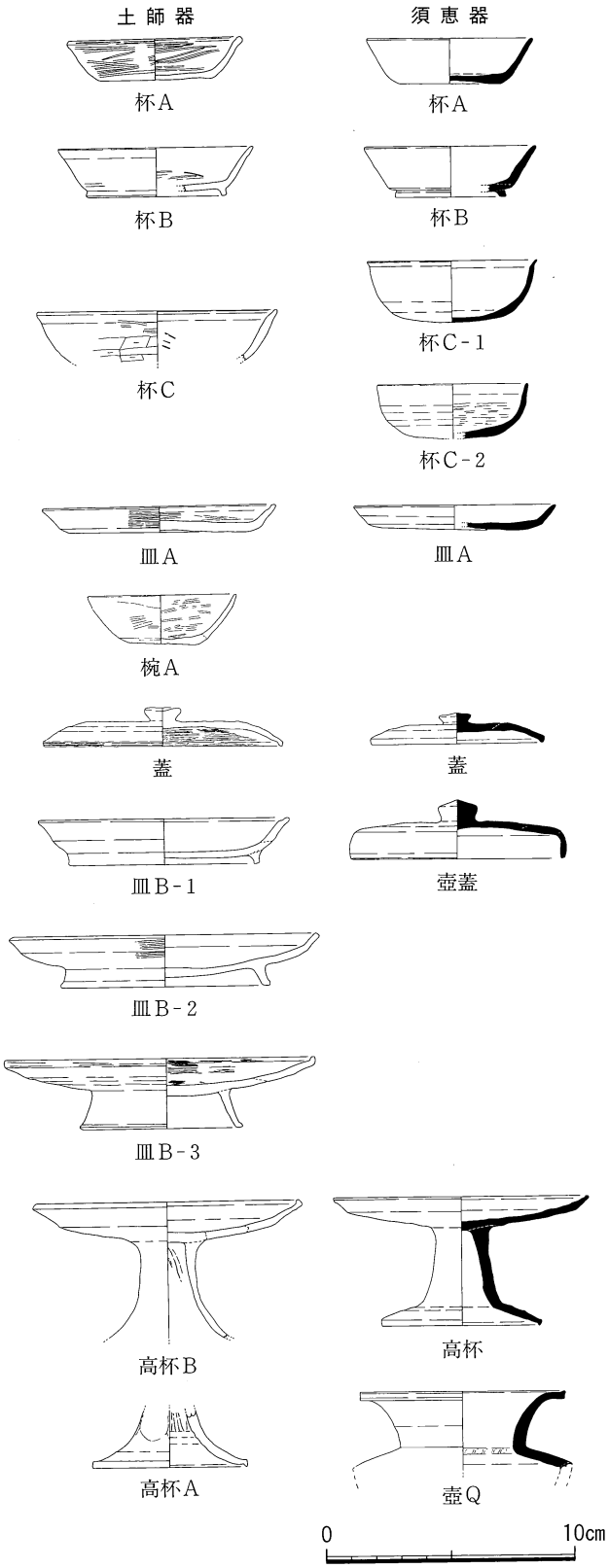


Fig. 141　器種図

① 口縁部形態

次の５種に分ける。

a）端部がやや尖り、内面が内傾する面になるか、弱く凹むもの。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

f）端部外面が外方へ突出或いは肥厚するもの。

g）明確に外反するもの。

皿Ｂ－１

底部周縁部に低い高台が付く皿。香長平野では後述の２段階以後出土例が僅少となるが、地域差も看取できる。

皿Ｂ－２

高い高台が内側に付く。

皿Ｂ－３

内側に脚が付く。香長平野ではⅠ－５期頃以後同定可能な例がない。

高杯Ａ

脚部外面を面取りし、断面が多角形となる。全体形が分かるものはなかった。

高杯Ｂ

脚部の断面形が円形となる。

① 口縁部形態

次の２種が存在する。

a）口縁部が上方へ屈曲し、厚みを保ち、端部は面をなすか、或いは断面形が隅丸方形状になる。

b）端部が上方へ突出する、皿を逆転させた形に近いもの。

表14－１　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態	出土例 土師器	出土例 須恵器
杯・皿	口縁部	a	444	皿A	—
		b	941 1019	杯A 皿A 皿B	杯A 杯B 皿A
		c	721	杯A 杯B 皿A 皿B	杯A 杯B 皿A
		d	701	—	皿A
		e	704	—	皿A
		f	700 694	皿A	皿A
		g	985 999	杯A 杯B 皿A	—
杯	高台	1	888	○	○
		2	228	○	○
		3	925	—	○
		4	629	○	○
		5	44	○	○
		6	999	○	○

0　5cm

※皿Ｂ－２、高杯Ｂについて

今次出土の両器形について検討すると、高杯のａ口縁形態と皿Ｂ－２の口縁部は近似しており、高台或いは脚部についての情報が得られる資料でなければ区別は難しい。このような関連性を理解するには、これらの器形の形態の分類や変化に言及し得る資料が充実しておらず、今後の好資料に期したい。

高杯脚裾部

① 裾端部の形態

全体形の明らかな資料に恵まれないため上記のA、Bの分類との関連は不明であるが、裾端部の形態を次の2種に分類する。

1）外面に稜をなして下方へ突出するもの。

2）外面の稜や下方への突出がみられない、或いは極めて弱いもの。

蓋

分類に堪える資料量に達していない。

2．須恵器

杯A

基本的形態は土師器に準ずる。SK 30での6種の法量をはじめ、各期で法量分化が窺える（表17、18）。口縁部形態は、殆どが素直に丸くおさめるが、対象を他遺跡出土遺物にまで拡げれば、土師器でみたb形態を呈すものも僅少ながら存在する。

杯B

杯Aの形態に高台を付す。SK 30等では4種の法量分化を想定する（表16）。

① 口縁部形態

次の2種に分類する。

b）端部内面が凹むもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

② 高台形態、位置

次の6種に分類する。

1）端部を内外又は外方へ拡張するもの。端面が凹状になる場合もある。

2）端面が凹、或いは角を摘み出すもの。

3）端部を内側へのみ拡張するもの。

4）端部を拡張せず、方形の断面形をなすもの。

5）高さや厚さがやや大きく、断面が長方形となるもの。

6）断面形で、基部に比して先が細くなるもの。

傾向でしか把握できていないが、4や5形態は杯BⅡ以上の大型品に、1や2形態は本稿対象期の前半の杯BⅢに採用される例が多い。高台の位置は内側に付くものから外側（周

表14－2　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態
蓋	全体	1	473
		2	567
		3	388
	口縁部	a	965
		b	970
		c	407
	摘み	A	971
		B	889
		C	436
		D	213
		E	590
		F	393
		G	266

0　5 cm

※「全体」は縮尺1/6

縁部）に付くものまでがあり、曖昧な表現だが、内側に付くものは律令期前半に、周縁部に付くものは同後半に属する場合が多い。

杯C

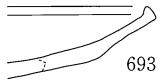
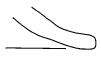
底部から体部にかけてが丸い。口縁部の形態によって次の２種を設定する。

C－１）口縁端部が内傾する面をなす。

C－２）口縁部を素直に丸くおさめる。蓋を反転したような全体形をなす。

上記の２種は何れも系譜を遡って求めることができ、後述のⅠ－３期には消滅に向う。なお、土師器杯Cとの関連は想定していない。さて、杯C－２の抽出を行う際、蓋との区別に迷うようなものがある。このような様相は先学による７世紀代の土器様相についての研究の中で指摘されており[1,2]、当地域での本器形の消長と考え合わせると、その文脈で考えることができよう。蓋と比較した場合の同形態の属性としては、全てに該当するわけではないが、立ち上がり部のスムーズなカーブや内面下半の擦痕、口縁部の特徴的なやや強い回転ナデ等を挙げておきたい。しかし、上記のように先学の成果に沿って考えられるとすると、まずは「そのような存在のあり方[1]」自体に着眼せねばならない。また県外では、香川県の打越窯跡や金蔵寺下所遺跡出土遺物も本器形の系譜の参考となろう[3,4]。

表14－３　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態	出土例 土師器	出土例 須恵器
高杯	口縁部	a	1023	○	○
		b	 693	○	○
	脚裾端部	1	875	○	○
		2	 876	○	—

0　5 cm

※ 縮尺は統一
※ ○は出土例があることを、
—は未確認であることを示す。

皿A

平底の皿である。SK 22、28、30の様相からは３種の法量分化が窺える（表17他）。

①　口縁部形態

次の６種に分類する。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

d）端部の断面形が方形を呈するもの。

e）端部が内傾する面をなすもの。

f）端部外面が外方へ突出或いは肥厚するもの。

杯蓋

SK 22・28・30をはじめとする資料からは３種以上の口径を想定できる（表16）。

①　外面の調整

次の２種に分類する。

1）外面にケズリを施すもの。

2）外面にケズリを施さず、ナデや回転ナデで仕上げるもの。

② 形態

天井部から口縁部にかけての形態を次の3種に分類する。

1）天井部から口縁部まで連続的に湾曲し、器高が高いもの。

2）天井部から屈曲して口縁部に至るもの。

3）平坦なもの。

③ 口縁端部の形態

次の3種に分類する。

a）外面が凹むもの。

b）外面に稜をもって屈曲し、外面が面をなすもの。

c）下方への突出が少ないもの。端部の稜が弱く、丸みを持つものがある。

④ 摘みの形態

次の7種に分類する。

A）頂部が円錐形に高く突出するもの。

B）基部が括れ、端部は稜をなし、中央部がやや凸となるもの。

C）基部が括れ、断面が楕円形を呈するもの。中央部がやや突出するものがある。

D）断面形が厚みのある楕円形を呈するもの。

E）上面が凹むもの。

F）基部の括れがごく弱い円筒状で、上面は凹まないもの。

G）輪状のもの。

高杯

全体を復元できたものは少ない。脚裾端部は外面に稜をなして下方に突出する。

Ⅲ．製作手法

古代の土器の製作手法については先学による数々の研究があるが、現在完全に統一された概念ないし用語体系が存在するわけではない。そして言うまでもなく、筆者にはそれらを体系的且つ合理的に提示することは出来ない。しかし、今次報告で使用する語句の意味合いについてここで明らかにしておくことは、今次資料を今後の叩き台とするために必要であろう。用語、属性については中島恒次郎氏の論考を多く参考にした[(5)]。以下の本項は従来の成果に依拠したもので、新しく発見したような内容は殆どない上に、慣例の用語と一致しない部分もあり、混乱したものとみられるかもしれない。しかし、現時点で今次出土遺物を全体的に理解しようとした結果であり、今後錬成していかねばならないものと考えている。なお後述するように、須恵器と土師器の同軌性が当地域でもみられるため、妥当性が認められる限り両者に共通の用語を使用することとした。

1．回転台の使用・非使用

須恵器の手法については数々の先学により論及されているが、森隆は「須恵器的な製作手法を特徴とする土師器の一群」について「回転台土師器」と呼称した[(6)]。今次報告ではこの問題を念頭に置き、何らかの「回転台」を用いたと考えられる諸手法に、「回転」を冠して表す。これに対し、回

転台の使用を想定させない諸手法に「断続」を冠する。しかし、これらは残存状態等により確定が困難な場合も多く、また部分的な観察しか出来ない場合、一律に即断すると誤認の可能性も出てくる。SK 30の須恵器杯に見られる口縁部上方に逃げる回転ナデなどはそれを示唆している（部分的には都城で出土する土師器と同様の痕跡に見える）。また連続・均一な手法痕跡で、「断続」とは形容し難いものに「連続」の語を用意し、上記のように「回転」か否かを判断し難い場合をこれに含めた。

2．ナデ

手指によって撫でる手法で、場合によっては布様のものを用いた形跡もある。主に「断続ナデ」、「回転ナデ」、「連続ナデ」に分ける。先述したような不確定要素もあり、回転ナデの属性としては、所謂「ロクロ目」或いは「多段ヨコナデ」[7]様の平行・均一に手指圧力のかかった痕跡や、一定の回転速度を想定させるディティールを複合して判断した。なお、断続ナデは適宜「ナデ」と略す。

3．ヘラケズリ

今次は「ケズリ」と略称し、「断続ケズリ」、「回転ケズリ」を設定する。例えば土師器において、従来「手持ちヘラケズリ」と呼称される場合のあった痕跡は、「断続ケズリ」に分類される。

4．ハケ・板ナデ

板の小口様の条痕をハケ、板状工具で撫でるものの、明瞭な条線を残さない痕跡を板ナデと表現した。そうすると、ケズリ痕跡の一部（特にケズリ後弱いナデ調整がなされた場合等）とも境界が不明瞭となってくるが、現段階では明瞭な条線を残すものをハケ、残さないものを板ナデ、削る効果が顕著で、比較的鋭い痕跡を残すものをケズリに分類する。今次は、例えば須恵器蓋の内面周縁部の擦痕等について、統一された表現をすることができなかった。なお同痕跡について特に注意された例が管見にないが、他の回転ナデ部分とは明らかに異なる擦痕が残る。南四国で広く認められ、他県では今治市八町遺跡（後記）出土資料中で確認している。

5．ヘラミガキ

「ミガキ」と略称した。今次は回転ミガキの存在を立証する資料が存在せず、断続ミガキと連続ミガキも本質的な違いに言及できない。

6．暗文

ミガキの要領で装飾的効果を出す手法で、内側から外（口縁部）側へ放射状に施されるものや、連弧状のものがある。SX 2 出土土師器等には細い線のものがあり、より都城の同手法に類似している。[8]

7．底部の痕跡・切り離し

H区出土土器では、切離しの方法を確認できた供膳具の殆どが所謂回転ヘラ切り手法で切り離されており、未報告のSR 2 上層等に限って糸切り手法の土師器が出土している。その為観察表では切り離し法の表記を適宜省略している。ヘラ切り後の調整が弱いものでは底部外面に渦巻状の痕跡が観察でき、粘土紐接合痕との区別が困難な例が多い。しかし、例えばSK 30出土の須恵器Ⅲの底部痕跡からは、切り離しに5回転程度を要したことが窺えるし、他に同杯AⅢで4回転程度で切り離した例もある。なお、今次報告では回転ヘラ切りの「回転」を省略した。

須恵器杯類において立上り外面に擦痕を認める例があるが、これには切り離しの開始時にヘラに角度を持たせて差し込むことによるものが含まれているものと思われ、回転ケズリとは区別しておく必要がある。底部の回転ケズリを、切り離し後に行うものと捉えておく。前者の「ケズれ」については、切り離し後のナデや、他の部位からわかる回転方向との関係によって判断できる。なお、今次調査の回転台使用の土器のうち、回転台を左回転させたと断定できる例は僅少である。

8．赤色塗彩・化粧土

土師器の中に、器表を赤色塗彩したものや、精選された化粧土が観察できるものが存在する。実体顕微鏡で観察するとどちらも粉末状の粒子が観察でき、赤色風化礫や石英の微細粒を含むものがある。この赤色物質の化学的調査の結果は第Ⅵ章で述べられている。その分析結果やSK 30の皿683の例を考えると、赤色塗彩と化粧土といった区別も課題であるが、赤褐色付近を示す明らかに赤く見えるものを赤色塗彩（適宜赤彩と略す）、通常の土師器の発色の範囲内で捉えられるものを化粧土と呼んで区別しておく。なお、そもそも遺物の色調には様々な要因があり、注意を要することは経験的にも知られ、また器表の状態は摩耗等の条件によって大きく左右されるものである。よって、今次は実体顕微鏡による観察を行った。なお後述のⅠ群土師器は、全て赤色塗彩である。

9．焼成

須恵器と土師器の区分であるが、中間的なものには判断し難いものがある。作業仮定として、多少とも還元焔焼成と言えるものを須恵器、対する酸化焔焼成色を呈するものを土師器とし、これに焼成の良好度と硬度との関係や、共伴出土遺物との比較といった要素も適宜加味して判断した。しかしながら、須恵器と土師器といった極めて基礎的な定義にこのような不確定要素が介在することは、当該期の土器を理解する上での問題である。しかし、当地域でもこのような問題が横たわっているという認識は得られた。

10．素地・胎土

土師器・須恵器とも、特徴的な「胎土」に着眼し群を捉える事を試みた。但しこの件については今次は自然科学的分析を行っておらず、肉眼観察によるものである。将来の分析に期するところである。さて、使用されている原材料を正当に類型化できれば、それが消費・生産各遺跡にわたる関係性を解明する上でどのような利器たり得るかは、改めて記す必要もない。一方で、その作業の実際においては様々な問題が存在することもまた既知である。例えば「原材料」と言っても製品段階では、究極的には焼成により変容しているものとみなければならない。特に焼成温度の高い須恵器ではその度合が強い。そこでこれらに関わる属性について、「胎土」と「素地」の概念を設定して記述を進める。「素地」は発色、硬度等の焼成過程を含めた製品の状態である。「胎土」は焼成の影響を差し引いて推定できる原材料の特徴で、焼成を同条件とした場合に相対的に設定できる場合もあり、また、焼成が不良であるほど精度が高い。

以上のような問題を踏まえて今次設定できた土器群は一部で、捕捉し得た遺物点数も全体からみれば少数である。しかし、下記の如く構成器形等との関連性も描出され、類別化の有効性を補強するものと考える。なお、土師器煮炊具についても独自の群を設定し、観察表には記しているが、本稿では触れない。

(1) 土師器

二群を設定する。

Ⅰ群

全て赤色塗彩される群である。胎土に透明感のある石英の細粒を多く含み、素地の発色は灰白10YR 8/2を主に10YR 8/1～7/4と、特徴的な白っぽい色を呈する。含有する砂粒は比較的多いものの、突出した粒度のものは少なく、概して粒度の揃った印象を受ける。赤色風化礫は含まないものが多いが、微量を含むものもある。顕微鏡観察では、さらにガラス質微細粒や長石の微細粒を認めるものもある。器厚の厚いものも多く、また硬質の焼成を示すものが目立つ。今次観察表に掲載した赤色塗彩土師器51点中の35点を本群が占める。器形は杯A、杯B、杯C、皿A、皿B、杯蓋、高杯、把手付き鍋が存在し、多様で特徴的といえる。手法的にもケズリや暗文、比較的厚く濃い発色の塗彩に本群の特徴を指摘することができる。細部形態でも、杯皿の口縁部形態が本群以外のそれとやや異なるなどの特徴を認める。なお、本群の他遺跡での確認例は、表23に示した。

Ⅱ群

精選された緻密で軟質な素地で、砂粒は少なく、発色は2.5YR～5YRの橙色を呈す。素地の特徴により器表の強度は弱いようで、多くは摩耗が著しい。赤色塗彩されたものがある。

(2) 須恵器

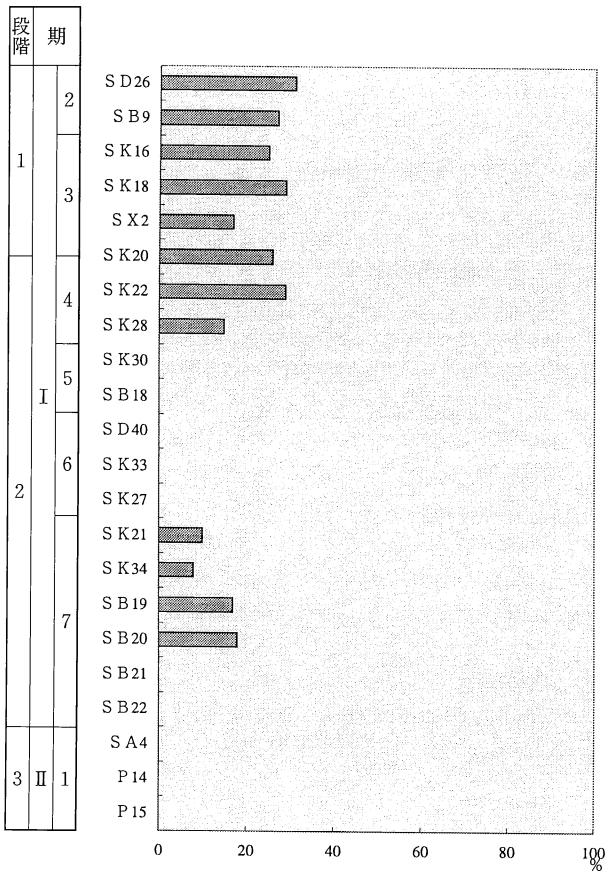
一群を設定した。

Ⅰ群

透明感のある粒度が比較的揃った石英の細粒を多く含み、赤色風化礫に由来すると考えられる黒粒は含まないものが主である。

本群として抽出できたものには焼成がやや軟質な傾向があるが、焼成良好な場合は、本来本群であっても素地がガラス化して属性が現れていない可能性を否定できない。故に、軟焼成傾向が本群の属性であるかどうかは不明である。しかし、軟焼成なもののみで検討しても冒頭の特徴は明らかなことから、本群の設定自体は有意であろう。観察表に掲載した遺物のうち、本群に分類できた器形と点数は杯B＝15、蓋＝19、高杯＝6、杯C＝2、杯A＝2、皿A＝1、そ

表15　須恵器Ⅰ群出土比率（供膳具）



遺構	Ⅰ群	須恵器	比率(%)
SD 26	4	13	31
SB 9	3	11	27
SK 16	2	8	25
SK 18	2	7	29
SX 2	3	18	17
SK 20	5	19	26
SK 22	15	51	29
SK 28	2	13	15
SK 30	0	51	0
SB 18	0	8	0
SD 40	0	10	0

遺構	Ⅰ群	須恵器	比率(%)
SK 33	0	16	0
SK 27	0	8	0
SK 21	2	20	10
SK 34	2	26	8
SB 19	1	6	17
SB 20	2	11	18
SB 21	0	7	0
SB 22	0	5	0
SA 4	0	4	0
P 14	0	0	0
P 15	0	2	0

の他（杯＝３、甕＝１、不明＝１）で、表６でみる各器形の出土比率からすると、杯Ｂ、杯蓋、高杯に偏っていると言える。

また表15からは出土した遺構、及び後述の編年試案における時期的な偏りが看取できる。また表25・27及び他遺跡での確認状況を併せると、本群の時期的・空間的分布及び器形との関連についての情報が得られる。本群が出土している今次SK 22・28、香長平野東端に位置する十万遺跡SK 50については各々の項で触れる。また同じく後述する白猪田遺跡SD１では、本群に類似した杯Ｂ底部１点を認めるのみで、本群の分布状況に示唆を与える。

Ⅳ．主な遺構出土遺物

以上を踏まえ、今次出土の遺構出土遺物群のうちでもその点数、遺存度、出土状況が特に良好な遺物群について、様相を把握しておく。

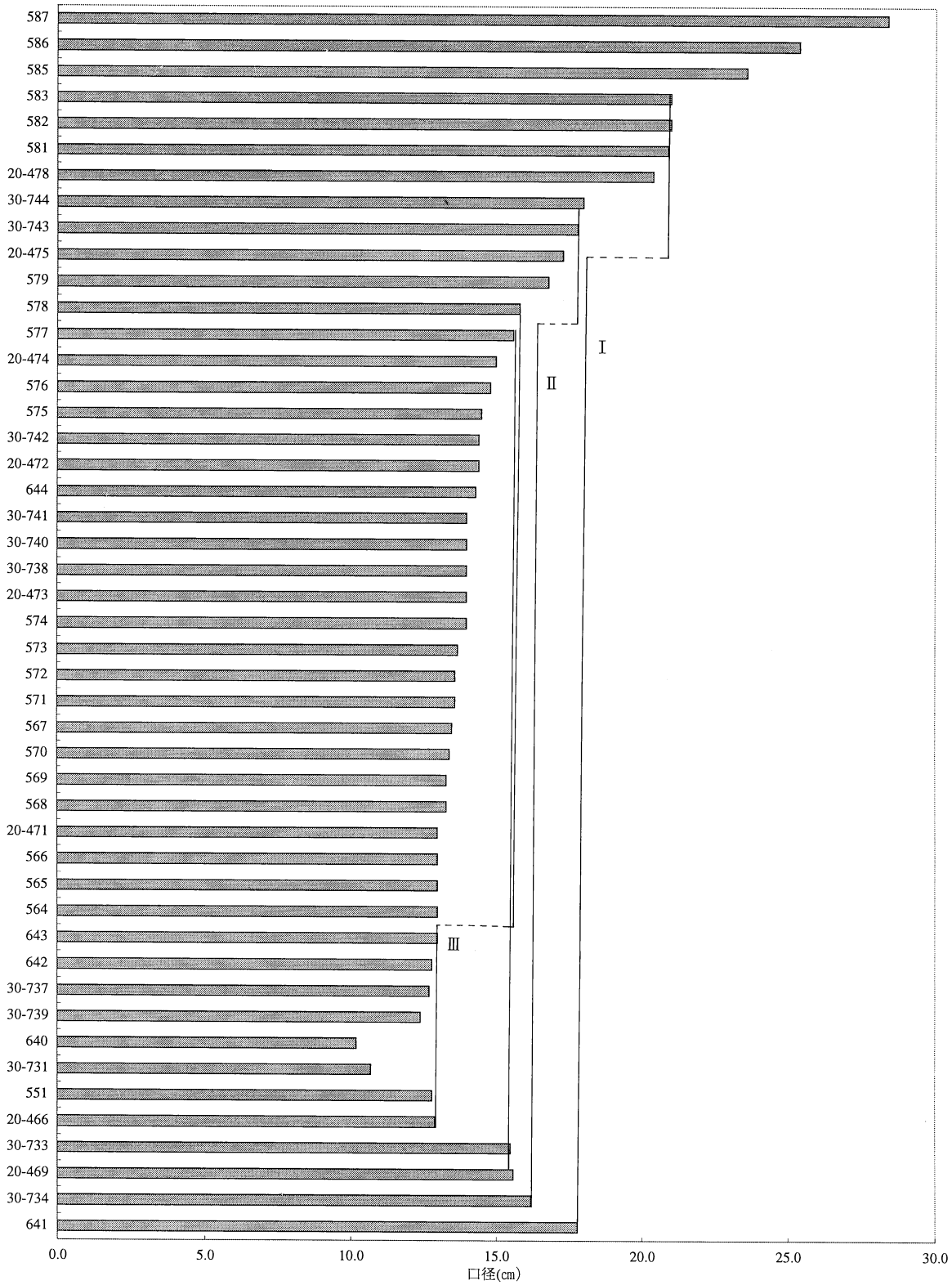
１．SX 2

概容を先に述べれば、構成器形、赤色塗彩土師器の比率、及び須恵器の一部に特徴的様相を見出せる遺物群である。表21のように土師器中の赤彩土師器の比率の高さは際立っており、表６と合わせてみると全共伴遺物の中でも赤彩土師器の占める比率が異例に高いことが分かる。出土した器形は、土師器に杯Ａ、皿Ａ、蓋、皿Ｂ-１、高杯、把手付き鍋、甕、カマド、須恵器に杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、蓋、甕、円面硯、その他に瓦、製塩土器が極少量ある。土師器、須恵器共に底部や天井部外面の手法痕跡が観察できるものではケズリを確認でき、調整の丁寧さもあって粘土紐痕や切り離し痕跡を明確に留めるものは存在しない。赤彩土師器は952を除き、全て胎土Ｉ群である。952の素地ベースはＩ群に似るものの、角の取れたチャートや泥岩の砂粒を含み、半透明の角粒はＩ群ほど目立たない。後述の十万遺跡ST 3からはこれと酷似する形態のものが出土しており、胎土に含む砂粒も同種である。946～949は内面に放射状暗文を施す。暗文の線は細い。975は表面の摩耗が著しいが、内外に赤色塗料が残る。杯皿にはＩ群としては器厚の薄いものがある。塗彩されない甕（976）とカマド（977）は互いに酷似した胎土を持つ。次に須恵器をみると、各個体が特徴的な形態・胎土・焼成を呈し、一様でない。手法的には回転ケズリの他、杯Ｂ底部、蓋の内面・摘みをはじめとする部位等で調整の丁寧さが目立つ。素地は３種以上を判別でき、971は他に類を見ない精良で堅緻な素地である。

２．SK 22・28

これら２遺構は以下のように類似性が強く、同時期の遺物群とみられる。表20の如く須恵器が圧倒的な比率を占めており、ここでは須恵器のみに触れることにする。杯Ａ550と636は形態・法量・胎土・焼成などが酷似する。杯皿では調整の丁寧なものがあり、蓋では外面の回転ケズリは確認可能な24点のうち21点に施され、残る３点がナデのみにより仕上げる。また杯Ｂ、蓋、高杯に須恵器胎土Ｉ群が目立ち、杯Ｂでは半数、蓋では31点中の８点を占める。Ｉ群の出土比率の他遺構との比較は、表15に表れている。なおSK 22は遺構出土遺物一覧表（表６）からも蓋が異例に多いことが知られ、杯Ｂの数がそれに見合っていないが、このような類似例として十万遺跡SK 50（後述）を挙げることができる。

表16　須恵器蓋・杯B　口径分布及び対応表



※ 20はSK 20
30はSK 30を指す。
※ 平城宮報告Ⅶを参考にした。

3．須恵器蓋と杯Ｂの口径

SK 22から纏まった数の須恵器蓋が出土しているため、その口径分布と杯Ｂとの対応を検討する。しかし、共伴する杯Ｂに口径の良好な資料が少ないので、SK 20、SK 28、SK 30出土遺物を援用したい。しかしこれらには時期差があるので、蓋・杯Ｂについてまとめて資料化することの有意性を検討しなくてはならない。表16でみる限り、SK 20～SK 30の間で時期差に伴う明らかな口径変化は指摘し得ず、現段階では検討することが有意であると考える。さて法量分化についてみると、表16より蓋、杯Ｂ共３種以上に分類できる。杯身の口径に対する蓋の口径に必要な余裕については、実物による試験の他、275や744の口縁変色部も傍証となろう。そのような口径差を考慮して、表のような対応関係が想定できる。なお、大径の蓋585～587の残存率は良好とは言えない。

4．SK 30

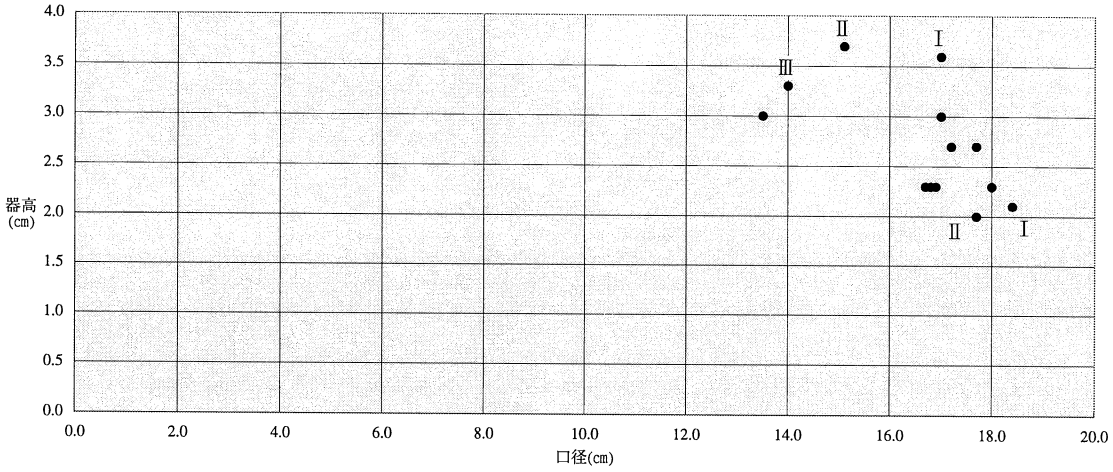
Ⅳ章でも述べたように、出土遺物の点数、各個体の遺存度及び出土状態から窺える廃棄の同時性からみて、当該期の土器群資料として現時点では南四国で最良の資料と言える。他と比較すると細片の比率も低く、主体を占める残存率の高い遺物に対象を絞る事で、より同時性の高い一群とし捉えることができると考え、以下では原則として遺物実測図に掲載できた遺物に限って検討する。

出土した器形は、土師器には杯Ａ、皿Ａ、蓋、高杯Ｂ、甕、須恵器には杯Ａ、杯Ｂ、皿Ａ、蓋、高杯、鉢、及び製塩土器、土錘がある。土師器も杯皿は全て回転ナデ調整されており、ヘラ切り痕も認める。土師器杯皿は689を除いて、全て全面にミガキを施す。土師器と須恵器の比率は表20の通りである。

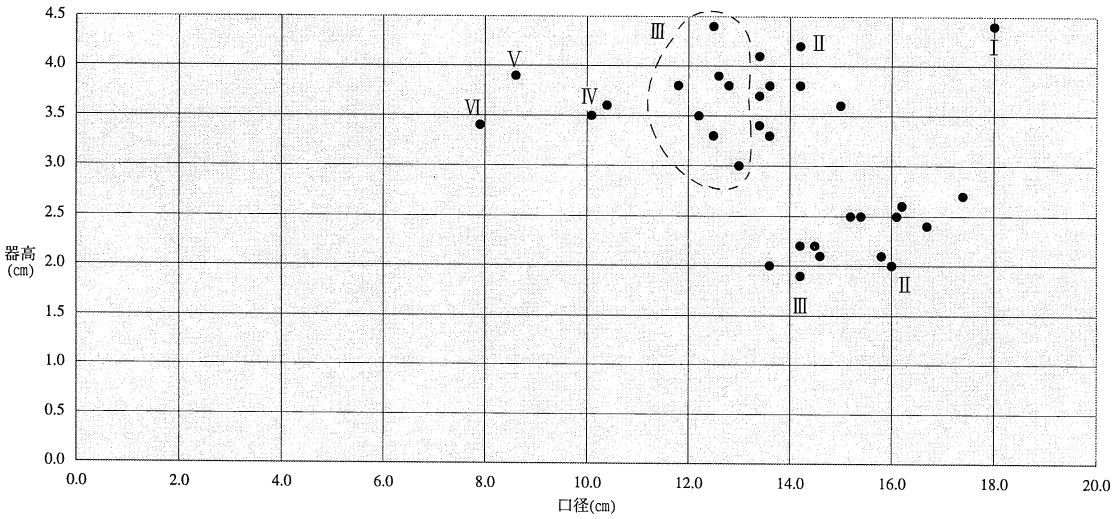
まず土師器杯Ａについて検討すると、法量については表17に表れているように３種に分けた。手法については、赤色塗彩は全く確認できず、ミガキは上記の通りである。この、非赤彩、回転台成形で内外に連続的なミガキを施す杯Ａは４小期程度にわたって安定して出土しており、律令期における「定型化した杯Ａ」と呼称しておく。時期的な詳細は後述する。なお、689は他の杯Ａとは手法、形態共に異なる。口縁部に鋭い一条の沈線が巡っており、ミガキは内面と外底では施されないことが確認でき、恐らく何れの部分にも施されていないとみられる。外底は粘土紐接合部などに断続する押圧とナデを加えており、手法の特異さより搬入品の可能性がある。次に土師器皿Ａでは675を除いて考える。法量分化は表17では不明瞭であるが、676は底径も大きく他と一線を画す。手法についてはこの676が赤彩で、他２点で化粧土が確認できる。赤彩と化粧土については手法の項で述べた通りである。683は外面に化粧土の垂れが観察でき、赤褐色を呈する部分もあって赤彩との区別に躊躇も残る。高杯は脚の断面が円形のものが２点出土しているが、脚断面の径が大きく異なる。杯部が知れる693は、皿を反転したような杯部を持っている。

須恵器杯Ａは、法量では表17のように６種に分ける。中法量域の境界が表では不明瞭であるが、ここでは口径で13.4㎝以上と13.0㎝以下のものに境界を見出し各々ＡⅡ、ＡⅢとする。例えばＡⅢの最大口径のものとＡⅡの最小口径のものでは底径にも差があり、実物においては無理なく入れ子にすることができる。翻ってＡⅡ内では口径にばらつきがあっても底径に大差がなく、実物においては入れ子にできない。底部から径を違えて製作されている可能性を重視し、二者を分けた。なおこのＡⅡとＡⅢの境界値にあたる計測資料には、特に残存率の高いものを使用した。ＡⅡの723と

表17　SK30杯ⅢA径高分布



ＳＫ30土師器杯ⅢＡ径高分布



ＳＫ30須恵器杯ⅢＡ径高分布

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
676	ⅢＡ	18.4	2.1
677	〃	17.7	2.7
678	〃	16.8	2.3
679	〃	16.7	2.3
680	〃	16.9	2.3
681	〃	18.0	2.3
682	〃	17.6	2.0
683	〃	17.2	2.7
684	〃	17.0	3.0
685	杯Ａ	13.5	3.0
686	〃	14.0	3.3
687	〃	15.1	3.7
688	〃	17.0	3.6

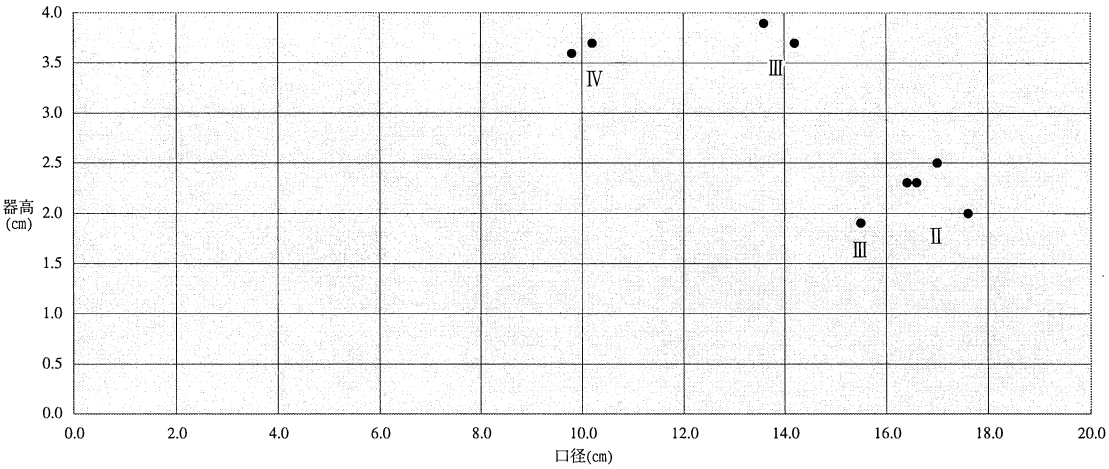
土師器

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
694	ⅢＡ	13.6	2.0
695	〃	14.5	2.2
696	〃	14.6	2.1
697	〃	14.2	2.2
698	〃	14.2	1.9
699	〃	16.0	2.0
700	〃	15.8	2.1
701	〃	15.2	2.5
702	〃	15.4	2.5
703	〃	16.1	2.5
704	〃	16.0	2.0
705	〃	16.2	2.6
706	〃	16.7	2.4
707	〃	17.4	2.7
708	杯Ａ	7.9	3.4
709	〃	8.6	3.9
710	〃	10.4	3.6

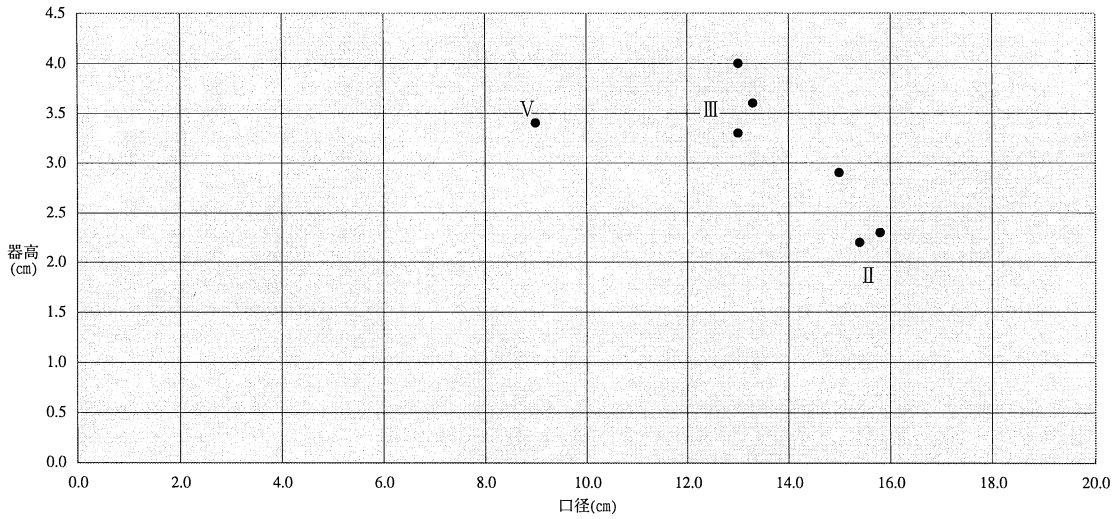
図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
711	杯Ａ	10.1	3.5
712	〃	11.8	3.8
713	〃	12.2	3.5
714	〃	12.8	3.8
715	〃	12.5	4.4
716	〃	13.4	3.4
717	〃	12.5	3.3
718	〃	13.0	3.0
719	〃	13.4	4.1
720	〃	12.6	3.9
721	〃	13.6	3.3
724	〃	13.4	3.7
725	〃	13.6	3.8
726	〃	14.2	3.8
727	〃	14.2	4.2
728	〃	15.0	3.6
735	〃	18.0	4.4

須恵器

表18　SD 40杯皿Ａ径高分布



ＳＤ40土師器杯皿Ａ径高分布



ＳＤ40須恵器杯皿Ａ径高分布

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
901	皿Ａ	15.5	1.9
902	〃	16.4	2.3
903	〃	16.6	2.3
905	〃	17.0	2.5
906	〃	17.6	2.0
907	杯Ａ	9.8	3.6
908	〃	10.2	3.7
909	〃	13.6	3.9
910	〃	14.2	3.7

土師器

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
917	杯Ａ	9.0	3.4
918	皿Ａ	15.4	2.2
919	〃	15.8	2.3
920	〃	15.0	2.9
921	杯Ａ	13.0	4.0
922	〃	13.3	3.6
923	〃	13.0	3.3

須恵器

724、725～728はそれぞれ胎土、焼成、形態が類似している。SK 22・28と比較すると杯ＡⅡの縮小が推測できるが、比較資料が量的に充分でない。須恵器杯Ｂでは、表16よりSK 22・28との比較が一定可能であると解釈し、733・734をＢⅡとした。どちらも内面が生焼けである。須恵器皿Ａは表17のように２種以上の法量に分かれる。須恵器皿ＡⅠとしては、SK 22・28や後述の白猪田遺跡SD

１から出土している口径18㎝以上の皿にあたるものを想定する。口縁部形態はバリエーションに富んでおり、先期で須恵器皿の口縁部形態をｂ形態が占めていた状態からの解放と捉えられる。また696と702は類似した形態、手法痕跡、胎土、焼成、発色で、法量が異なる。須恵器蓋は杯ＢⅡの蓋とみられるものが２点、杯ＢⅢとみられるものが６点である。何れも外面にケズリを施さず、ナデも雑なものがある。多くは口縁部付近の内面周縁部に回転ケズリと同様の痕跡があり、その際回転台は右回りである。738は内面に板状工具による調整痕を認める。また観察表で内面が平滑と記したものは、その部分の器表を滑らかに仕上げており、特に737は単なる丁寧なナデではなく鏡面の如く平滑であるが、墨痕は観察できない。本遺構出土の須恵器杯皿Ａには、火襷を持つものや上半と下半の焼成・発色が異なるものがある。杯Ｂの内面生焼けのものや、蓋の口縁部のみ発色が異なるものもあり、窯内置勢の一端を窺うことができる。本遺物群と他の主な遺構出土遺物との先後関係については、SK 22・28は須恵器の調整、同皿の形態より、SK 30に先行するものと考えられる。またSD 40は土師器・須恵器皿の形態や土師器の赤彩より、SK 30に後続するものと考えられる。

５．SD 40

溝跡に分類した遺構であるが、遺物の出土状態及びその遺存状態より、高い一括性が窺える。SK 30と同様に、以下では原則として遺物実測図に掲載できた遺物に限って検討する。

出土した器形は、土師器に杯Ａ、杯Ｂ、椀Ａ、皿Ａ、高杯Ａ、須恵器に杯Ａ、杯Ｂ、皿Ａ、及び製塩土器、土錘がある。在地産土師器供膳具は全て回転ナデ調整されており、ヘラ切り痕も認める。ミガキは摩耗により観察困難なものもあるが、全て全面に施しているとみられる。土師器と須恵器の比率は表20の通りである。

まず土師器について検討すると、杯Ａは表18のように法量で２種に分かれる。909・910は上記のSK 30と比較すると杯Ⅲの値域内に収まり、手法・形態的にもSK 30との差異が看取できない。杯ＡⅣ及び椀ＡはSK 30等では出土していないもので、杯ＡⅣは他にSB 20・22、SK 34から出土を認める。杯ＡⅣは形態も須恵器と共通となり、ミガキが須恵器との唯一の相違点として残るのみである。椀Ａは２点出土しているが、器表の状態などにより調整痕跡の観察はやや困難であった。しかし914では、ヘラ切り後の回転ケズリを底部から立ち上がり部までの外面に確認した。回転ケズリは、共伴する遺物群のみならずSK 30等でも既に土師器・須恵器を問わず例外的手法となっているだけに本例の特異さが目立つが、新器形としての属性と仮定しておく。皿Ａは表18のように２法量に分けられ、SK 30との比較よりＡⅡ、ＡⅢに比定できる。901は全体に器厚が薄く、軽量である。903は化粧土を施しているものとみられる。次に須恵器杯皿Ａをみると、表のように杯２法量、皿１法量があり、SK 30等と比較すると各々杯ＡⅢ、杯ＡⅤ、皿ＡⅢに相当する。ところで土師器底部913は底部が突出し、断面で観察できる接合痕からは円盤状に作った底部に粘土紐を圧着させながら体部を立ち上げる製作工程が窺える。底部外面は丁寧に撫でられているが、外縁部には粘土がはみ出している。このような特徴は、後に述べる本遺物群の属する時期の後に顕在化してくる、後述のＤ相の萌芽の１つと捉えることができよう。

本遺構からは、胎土その他より他地域からの搬入品とみられる土師器911、916、927が出土している。全容が知れる916は都城の土器編年との並行関係に示唆を与えるものであり、後の搬入品の

項にまとめる。

V．編年試案

本県域の律令期の土器に関連する研究としては、松田直則氏によって「9世紀後半から12世紀初頭」を大きくⅠ～Ⅲ期に区分する研究成果が発表されて以来[9]、古代後半を中心に先学の研究が後続している。

一方、古代前期については本稿冒頭のように、これまで資料が充実していなかった。その中で、須恵器については廣田典夫氏による古墳時代からの集成と編年研究、それを承けての廣田佳久氏による研究がある[10,11]。また高橋啓明氏は、曽我遺跡の出土遺物を9世紀頃に位置付けた[12]。出原恵三氏は白猪田遺跡出土土器の位置付けと共に、当該地域の律令期土器生産について考察した[13]。

以下では本稿冒頭に記した枠組みの中で、今次出土の各遺構出土土器群を軸とした編年を試みる[※]。作業の緒として暗文、赤色塗彩、ケズリ、切り離し痕等の調整の粗雑化或いは省略といった周知の変遷観や、搬入品を時期的傍証としている小籠遺跡SK 130・136出土土器群の様相を手掛かりとした[14]。

Ⅰ-2期

SD 26、SB 9を挙げる。律令期の主要な器形となる杯A・B、皿等が、土師器・須恵器において既に一定の定着をみている。一方、先代の系譜をひくとみられる土師器杯C、須恵器杯Cも器種構成上に相当の地位を占めている。本期の須恵器杯Cは4㎝以上の器高を測るものを主とし、形態は底部から口縁部まで大きく弧を描いて立ち上がる。土師器においては赤色塗彩されるものが表21のごとくの割合を占め、胎土群はⅠ群、Ⅱ群を抽出できる。Ⅱ群胎土のものには赤色塗彩されないものも在るようである。土師器の多くにはミガキや暗文を施す。土師器の回転台使用については資料に恵まれていないが、皿B-2の外面に回転ケズリを認める。なお赤彩土師器を中心に、土師器では断続ケズリを施すものが量的に勝る。土師器・須恵器共ケズリや丁寧なナデを施すものが多く、切離しや粘土紐の痕跡を残すものは例外的である。胎土も精良なものが一定量認められる。須恵器杯Bでは底部内外面の丁寧なナデや外底の回転ケズリをはじめ、調整の丁寧さが看取できる。高台形態はほぼ例外なく端部を内外方へ拡張、或いは角を摘み出す1、2、3形態の何れかを呈す。須恵器杯蓋は調整を確認できるものは例外なく外面の半分以上に回転ケズリを施し、形態的には一定の器高をもつものが主流である。口縁部が厚みを保つものも見うけられ、摘みはB、E形態が確認できる。なお、SD 26とSB 9には時期差が存在する可能性があるが、現段階では明確にできない。また本期の名称については、土佐山田町須江古窯跡群出土遺物等の中に本期より古相を呈する須恵器があり、Ⅰ-1期を想定してのものである。

※今次は掘立柱建物にも、柱穴よりまとまった量の遺物が出土した例が多い。柱抜取痕と掘方では埋没の時期差を考慮すべきであるが、今次は明確に分離できない場合が多かった。その為遺物の同時性については、同期に比定できる他遺構とのより注意深い比較・検討が必要である。

Ⅰ-3期

SK 16、SK 18、SX 2を挙げる。先期から受け継ぐ要素は多く、以下本項では、特記しない事項については原則として先期に準ずるものとする。

まず須恵器では、杯A・杯Cの区別が困難なものがあり、よって杯Cに分類できるものは減少している。960は先期の杯Cに比べると器高が低下している。平底の杯Aも確認できる。杯BⅠ・Ⅱ・Ⅲ及びSK 16の杯AⅢの存在より、相当に法量分化が進んでいると考えられる。この須恵器杯における法量分化は次期以降へと連続していく。土師器では胎土Ⅱ群が確認できず、赤色塗彩土師器はⅠ群のみによって担われている。器種構成をみると土師器に皿A、杯A・B・C、蓋、皿B-1、高杯、把手付き鍋、須恵器に皿A、杯A・B・C、蓋、皿B又は高杯、円面硯等多様な器種・器形が揃っている。また須恵器杯蓋の摘み形態は、先期に加えてA、C、D形態を認める。

Ⅰ-4期

SK 22、SK 28、SB 17出土遺物を挙げる。土師器杯C、須恵器杯Cが構成器種から脱落している。土師器は依然資料量が充分でないが、後記の白猪田遺跡資料も援用すると、須恵器と共通の成形・調整法、全体形態、法量のものが主要な器形で既に揃っているものとみられる。下ノ坪遺跡では赤彩土師器が激減し、赤彩土師器Ⅰ群及び断続ケズリを施す一群がほぼ消滅しているものとみられる。土師器は資料量が充分でないが、須恵器では杯身及び杯蓋で3種類以上、須恵器皿Aも2種以上の法量を認める（表16他）。総括的に、形態・手法は整理され、法量は規格的に分化していると言え、当地において最も律令的に整った土器様式の開始期と捉えられる。

杯蓋の手法・細部形態は前期とほぼ同様であるが、概してやや器高が低平化し、まだ少数ながら天井外面をケズることなくナデで仕上げるものが現れる。須恵器皿Aでは口縁部b形態が主流化しているが、既に形骸化が始まっている感もある。次期から量的にも安定して出土する、SK 30の項で述べた「定型化した杯A」は、本期で既に成立していることが後述の土佐国衙跡資料からも窺える。なお、今次SK 20出土遺物群は先期と本期の中間的様相と捉えておく。

Ⅰ-5期

SK 30を挙げる。先期との比較において、須恵器における手法的簡略化が顕著である。法量分化については、明確な規格性を持った分化が、土師器も含めて確認できる。

先期までは須恵器蓋の外面や杯身外底のケズリや、杯皿の外底のやや丁寧なナデが一定みられたが、本期においてはケズリは例外的となり、杯皿の外底には粘土紐痕或いはヘラ切り痕を明瞭に残す例も散見されるようになる。細部形態では、須恵器蓋において摘みの括れが弱く上面を凹状にしないF形態が認められ、口縁端部は先期まで少量ながら散見できたa形態が例外的となる。須恵器皿Aでは先期の主流であった口縁部b形態のものが少数に転じ、f形態が出現、次期へと続く。但しこのb形態の残り方には地域差があるようである。また先期の比較資料が貧弱だが、須恵器杯AⅡの縮小を仮定できる。

Ⅰ-6期

SD 40、SK 27、SK 33、及びSB 16柱痕出土遺物を挙げる。口縁部の回転ナデが強くなって器形に反映する後述のC相は、先期までに既に萌芽がみられたが、本期に至って土師器・須恵器双方の

皿に顕在化する。土師器の赤彩や化粧土は先期以上に僅少となる。中型の須恵器杯では外傾率のやや大きなもの（(口径－底径)÷器高≧1.5程度）が一定量存在する。須恵器杯Ｂの高台の形態では、これまで少なくとも中・小法量器種では主流であった、端部を拡張したり角を摘み出す形態（１形態、２形態）が少数となり、断面がシンプルな方形となる４形態がこれに代わっている。土師器では、杯ＡⅣを本期以降確認できるが、この器種の口縁部形態はこれまで土師器杯ＡⅢＡ（以下杯ⅢＡ）に特徴的であった端部が屈曲するｂ形態をとらず、プロポーションが須恵器と完全に共通となっている。高杯、ⅢＢ-２、ⅢＢ-３の口縁端部が方形状となる口縁は、土師器・須恵器共に本期以降確認できない。同杯Ｂの高台は底部周縁端部に付くものを認める。同杯ⅢＡには比較的器厚の薄いものが散見できるようになり、以後浸透して行く。各器種の法量変化について検討するには今尚資料量の不足を否めないが、表17と18の比較から土師器・須恵器ⅢＡが若干縮小傾向にあるという仮説を得られる。

Ⅰ-７期

SK 21、SK 34、SB 19、SB 20、SB 21、SB 22を挙げる。土師器においてⅠ期の最終段階として捉えられるものと、次期につながる新相の出現という重層的な変化がみられる。

まず土師器杯ⅢＡについてみると、まず口縁部形態では端部が屈曲するｂ形態が、小口径の杯Ａという例外を除いて堅持されてきたが、本期に至ってこの口縁部形態をとらないものが少なからず出現する。さらに先期までほぼ例外なく施されたミガキも省略された、従って焼成以外に須恵器との差異を見出せないものも顕在化する。皿では先期まで未確認の土師器ⅢＡⅢにあたる口径14cm台以下のものが出現し、法量分化も須恵器と共通となる。

蓋は土師器・須恵器とも、低平なものや摘みの基部が殆ど括れないものが主となる。

土師器・須恵器杯皿に共通する現象としては、先期から確認できる外傾率の大きなものがやや増加し、更に外傾したものも出現する。皿ではこのような新相を備えた低平なものが顕在化する。杯Ａでは次期以降定着して行く後述のＤ相を呈するものが散見できるようになる。土師器について概観すると、小さい外傾率（先期参照）・口縁部ｂ形態・従来の器厚・ミガキという諸属性と、大きい外傾率・口縁部の非ｂ形態・薄い器厚・非ミガキという諸属性にはそれぞれある程度の相関関係があり、前者が古相、後者が新相を示す属性群として捉えることができる（Fig. 142）。またその指標の一部は須恵器にも適用できる（Fig. 同）。本期の土器様相が一見雑多にも見えるのは、このような様相が重複することによるものであろう。

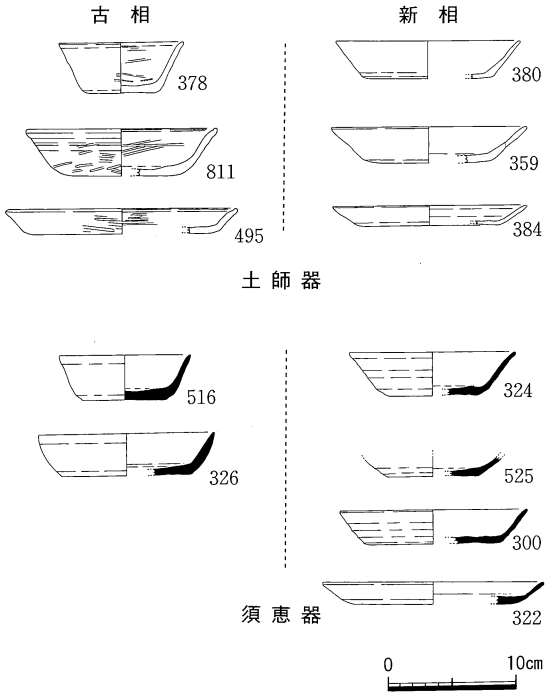
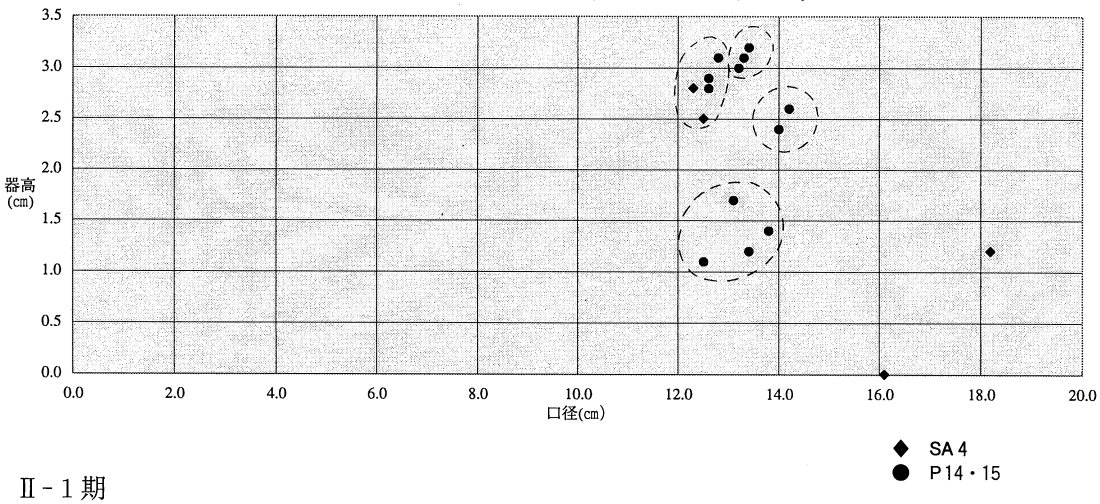


Fig. 142　Ⅰ-７期における対比例

表19　SA４、P14・15土師器杯皿Ａ径高分布



Ⅱ-１期

SA４、P14、P15を挙げる。供膳具が一変する。先期で古相の一群として捉えたような、変容しながらも保たれてきた律令期以来の土器様式の伝統が払拭され、同じく先期で新相として捉えた諸特徴を備える土器群へと転換する。須恵器は供膳具において急激に後退する（表20）。以下詳細を述べる。

遺構	図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
SA４	397	皿Ａ	16.1	不明
〃	398	〃	18.2	1.2
〃	399	杯Ａ	12.3	2.8
〃	401	〃	12.5	2.5
P14	983	皿Ａ	12.5	1.1
P15	984	〃	13.4	1.2
P14	985	〃	13.8	1.4
〃	987	〃	13.1	1.7
P15	990	杯Ａ	12.8	3.1
P14	991	〃	12.6	2.9
〃	993	〃	12.6	2.8
P15	994	〃	13.3	3.1
〃	995	〃	13.2	3.0
P14	996	〃	14.0	2.4
〃	997	〃	13.4	3.2
〃	998	〃	14.2	2.6

まず土師器については、杯ではⅠ期に準ずるような法量分化はみられない。これは新相と位置付けられた先期の段階で既に内包されていたものとみられる。但し法量分化自体は認められ、表19のごとく杯皿Ａで口径及び底径より各々３種に分類する。杯の口縁径境界は不明瞭なところもあるが、底径も含めた差がある。口縁部形態は、杯皿とも素口縁であるｃ形態に加えて、明確に外反するｇ形態が顕在化する。

皿Ａの形態は、底部から比較的明確に屈曲して立ち上がり、口縁部はｇ形態をとらないＡａ(987)、立ち上がりの屈曲が不明瞭で口縁部は素直におさめ、しばしば強めの回転ナデ痕を残すＡｃ（397、984)、口縁部がｇ形態をとるＡｇ（398、985、986)、以上３種に分ける。

杯Ｂの全体形が分かるものは１点で、高台は先が細くなる第６形態に分類できる。同形態自体は先期でも僅かながら帰属させ得る例を確認できるが、999は他の部分と同様に高台も華奢で端部が面をなさず、特徴的である。

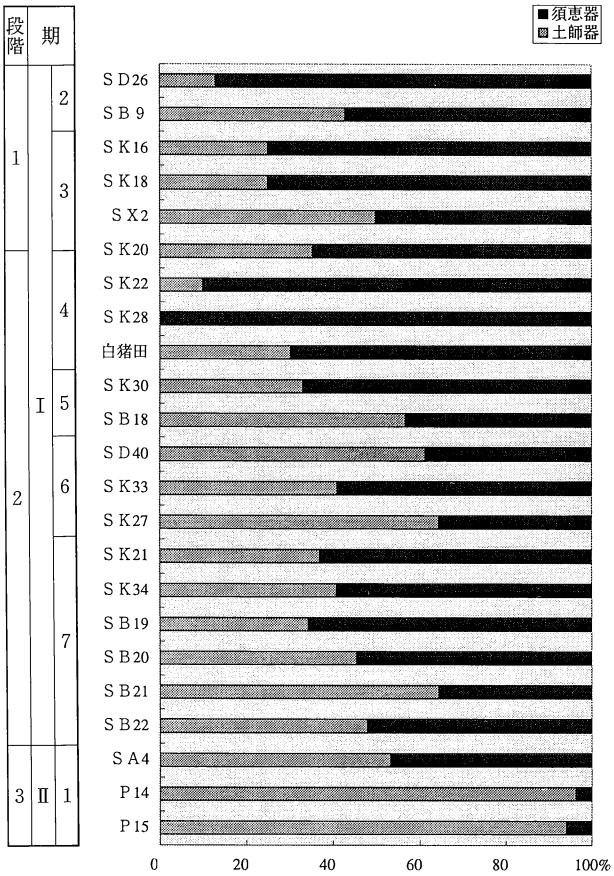
須恵器は激減して質・量共に分析に堪えず、混入の可能性も高いとみられるが、SA４の蓋は低平化及び口縁端部の突出の退化が著しい。高杯は土師器・須恵器共に確認できない。

Ⅵ．他例との比較

１．南四国（消費地）

以上でみて来た諸様相を、本県域である南四国の他例と比較する。これまでの出土例は冒頭で述べたような状況であったので、比較的纏まった遺物群を選択し、要点を記す。なお、以下は原則として報告された遺物の実見に基づいており、それ以外はその旨を記した。

表20　土師器・須恵器（供膳具）の比率

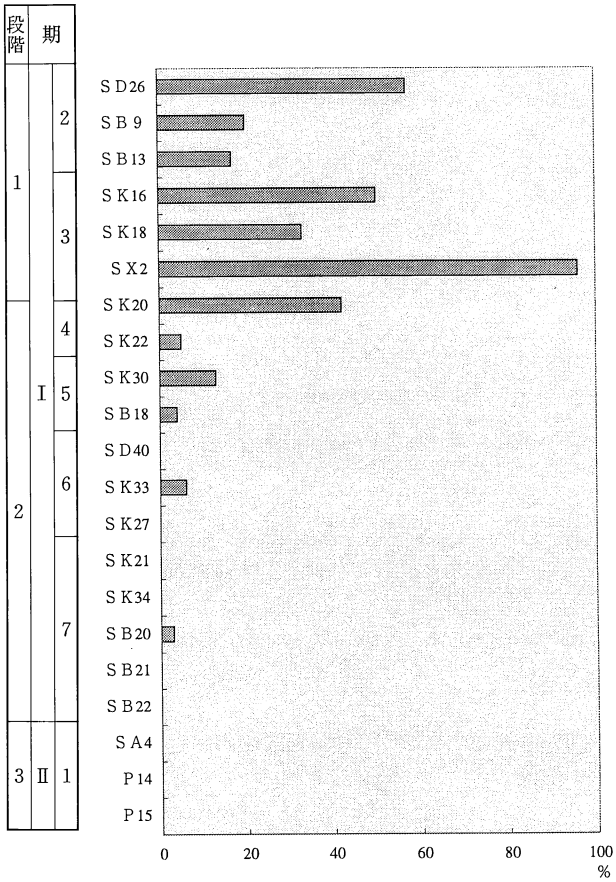


白猪田は白猪田遺跡 SD 1

遺　構	土師器	須恵器
SD 26	7	47
SB 9	30	40
SK 16	4	12
SK 18	6	18
SX 2	23	23
SK 20	12	22
SK 22	19	172
SK 28	0	29
白猪田	30	69
SK 30	40	81
SB 18	25	19
SD 40	27	17
SK 33	18	26
SK 27	40	22
SK 21	37	63
SK 34	42	61

遺　構	土師器	須恵器
SB 19	24	46
SB 20	35	42
SB 21	31	17
SB 22	24	26
SA 4	16	14
P 14	55	2
P 15	32	2

表21　赤彩土師器出土比率



遺　構	赤　彩	土師器	比率（%）
SD 26	4	7	57
SB 9	6	30	20
SB 13	1	6	17
SK 16	2	4	50
SK 18	2	6	33
SX 2	22	23	96
SK 20	5	12	42
SK 22	1	19	5
SK 30	5	40	13
SB 18	1	25	4
SD 40	0	27	0
SK 33	1	18	6
SK 27	0	40	0
SK 21	0	37	0
SK 34	0	42	0
SB 20	1	35	3
SB 21	0	31	0
SB 22	0	24	0
SA 4	0	16	0
P 14	0	55	0
P 15	0	32	0

(1)　十万遺跡 SK 50[15]

須恵器杯、同蓋、土師器蓋、同高杯、同甕、同把手、土錘が報告されており、出土比は概して須恵器が多い。蓋と土師器高杯の一部を実見した。蓋は全て外面に回転ケズリを施し、更にナデを加えるものがある。内面周縁部に回転板ナデ痕のあるものもある。形態は概して、途中よりやや屈曲する全体形で、口縁部は明確に下方に折れ、摘みは基部が括れるBやE形態及び輪状がある。蓋に

は胎土Ⅰ群のものがある。杯Ｂの底部はケズリを施し、高台端面は凹む。無高台の杯には立上り部が丸いものがある。以上の特徴は編年試案Ⅰ-３期頃に相当する。

(2)　十万遺跡 ST 3

須恵器蓋、土師器皿Ｂ-１、同把手が報告されている。須恵器蓋と土師器皿Ｂ-１を実見した。須恵器蓋は外面に回転台右回りのケズリを施し、内面中央部はナデにより滑らか、周縁部は回転板ナデ痕を認める。全体に調整は丁寧である。口縁部の屈曲は明確で、摘みの括れは弱いものの中央部が突出する。土師器皿Ｂ-１は外底のケズリが確認できないことを除けば下ノ坪遺跡 SX 2 出土例と酷似し（既述）、胎土に含む砂粒も同種である。以上の特徴はⅠ-３期頃に相当する。

(3)　土佐国衙跡 SK - 113、SK - 114、SK - 115[16]

実測された遺物を実見すると、土師器・須恵器供膳具の調整は丁寧で、土師器にはほぼ全てにミガキが施されていたとみられ、暗文も認められる。須恵器蓋では例外なく回転ケズリが施されている。土師器・須恵器杯の立ち上がり部外面はスムーズに仕上げられ、丸味のある形状をなすが、土師器杯Ｃや須恵器杯Ｃの典型的なものは見当たらない。土師器杯・皿の口縁端部は極めて明瞭なｂ形態を呈す。なお、土師器には本稿のⅡ群と同じ素地のものがある。須恵器杯Ｂは形態・手法とも今次 SX 2 に類似する。須恵器蓋には器高の高いものや、口縁端部のａ形態が今次報告のどの例よりも顕著なものがある。また SK 115出土の土師器甕は、今次 SD 26、SB 9 出土遺物中に同群を認める。以上の様相はⅠ-３期新相頃に相当する。

(4)　土佐山田北部遺跡群Ｂ47・Ｃ89グリッド[17]

近隣には現在南四国最多の当該期の窯跡数を数える土佐山田町須江古窯跡群が所在する。県営圃場整備に伴う試掘調査であり、遺構一括遺物による検討は困難であるが、幾つかの試掘坑からは遺存の良好な遺物が纏まって出土している。Ｂ47グリッド溝状遺構とＣ89グリッドより出土した土師器及び須恵器の杯・皿・蓋の形態・手法は、Ⅰ-３～Ⅰ-４期のそれに相当する。実見した中では赤色塗彩土師器と製塩土器が確認できない。なお同遺物群の土師器には、「回転台土師器」が含まれる。

(5)　白猪田遺跡 SD 1[18]

全出土遺物を実見した。土師器供膳具では摩耗が目立つが、器表面が残存している部分ではミガキが確認できる。須恵器皿Ａでは確認できた４点の口縁端部は全てｂ形態で、全形も含めて SK 22・28に近く、焼成及び胎土も SK 22・28に酷似するものがある。須恵器杯Ｂの点数は杯Ａと同等とみられ、底部の調整は丁寧なものがある。須恵器・土師器蓋では天井部外面の調整を観察できた９点全てにおいて、回転ケズリが確認できる。須恵器蓋の摘みは４点を観察し、やや退化傾向を示すものもあるが、全て基部が括れ中央部がやや凸となるＢ形態に属するものである。以上のような様相はⅠ-４期頃に相当する。なお赤彩土師器は出土していない。製塩土器片総重量は212ｇで、口縁部でカウントした土器総点数101点で除すると2.1ｇとなる。

(6)　土佐国衙跡 SD - 12[19]

報告に従って判断する。土師器杯Ａは口縁端部がｂ形態、内外面にミガキを施し、赤彩は観察されていない。既述の、定型化した土師器杯Ａに帰属させ得るものと考える。口径を今次 SK 30と比較すれば杯ＡⅡに相当するが、口径、器高共に本例が凌駕しており、口縁部ｂ形態は明瞭である。

また口縁部ａ形態の土師器高杯が存在し、杯部内外面にミガキを認める。２点の須恵器蓋の外面には回転ケズリを施し、須恵器杯Ｂの立ち上がり部外面には擦痕を認めるものがある。このような様相はⅠ-４期頃に相当するものとみられる。

⑺　小籠遺跡 SK 106[20]

全出土遺物を実見した。識別可能な口縁部点数は土師器杯Ａ３点、同杯Ｂ１点、同皿Ａ１点、須恵器杯２点、同皿Ａ２点、同蓋１点、土師器甕２点である。底部で数えると土師器杯Ａ１点、同杯Ｂ１点、須恵器杯Ａ１点、同杯Ｂ１点である。土師器杯皿の口縁部５点のうち細片の１点を除いて、口縁部はｂ形態をなす。また、そのうち器表の観察が可能な杯皿各１点は内外面にミガキを施す。須恵器皿のうち１点は回転ナデによって体部がやや外反し、口縁端部はｄ形態をなす。土師器・須恵器杯には、外傾度のやや大きいものや器厚の薄いものが含まれる。須恵器杯Ｂの高台は貧弱である。このような諸様相はⅠ-６～Ⅰ-７期に相当する。なお識別可能口縁部片１点当たりの製塩土器重量は15.3ｇである。

⑻　土佐国衙跡 SK-71[21]

土師器皿Ａ１点、須恵器皿Ａ２点と報告点数は少ないが、何れも調整手法が比較的良く観察できる。何れも体部の外傾度が比較的強く、特に須恵器皿は体部の回転ナデが強く、口縁部が外反する。土師器皿は回転ナデ後、内外にやや粗いミガキを施す。このような諸特徴はⅠ-６～Ⅰ-７期に相当する。

⑼　土佐国衙跡 SB-62[22]

報告の土師器杯Ａ４点、須恵器皿Ａ１点を実見した。完形の土師器杯４点は互いに酷似しており、口縁部は素直におさめるＣ形態で、摩耗が著しいがミガキは施されていないとみられ、器厚は薄い。２点は立ち上がり部外面が弱い段をなす。須恵器皿Ａは底部が緩やかに突出し、低い体部は強い回転ナデによって外反、器厚は薄い。内底はナデ、外底は弱いナデを施す。このような諸特徴はⅠ-７～Ⅱ-１期に相当する。

⑽　土佐国衙跡 SA-13[23]

報告の土師器皿Ａ２点と同甕１点を実見した。報告では土師器の出土が多いことが記されている。土師器皿Ａ２点は体部の外傾が大きく器高が低く、体部は２～４段の強い回転ナデ痕を残す。ミガキは施されず外底はナデを施す。１点は口縁部がｇ形態をなし、外底には並行圧痕を認める。土師器甕は今次Ｐ14出土の1005と同群・同形態である。このような諸特徴はⅡ-１期頃に属する。

⑾　四国西南部（風指遺跡[24]、具同中山遺跡群[25]、船戸遺跡[26]、宮崎遺跡[27]）

宮崎遺跡を除き四万十川下流域に位置する。各遺跡より古代前期の遺物も出土しているが、多くは流路や包含層からの出土であって一括性が認められず、具同中山遺跡群での土坑出土遺物はごく少数である。従って本地域の土器様相について論ずる事自体が時期尚早の感を拭えないが、現状は本稿冒頭の通りで、土佐における香長平野の土器様相を比較・理解する為の端緒としたい。遺物の再検討は、報告された遺物について行った。なお四国西南部という表現には問題も含まれようが、今次は土佐に属する地域のみを対象とする。

まず、それらの形態・手法を下ノ坪遺跡の各遺物群と比較すると、大きく６つの時期を考えるこ

とができる。基準になるとみられる個体を抽出したのがFig. 143である。同図と編年試案を比較すると、両地域の様相差についての仮説も得られる。以下にその要点を記す。

① 須恵器杯皿

編年試案Ⅰ-7期頃に相当する形態・手法のものに、口縁端部b形態をとるものが少なからず存在する。期は全て同じではないが、杯にも同形態が一定量認められる。下ノ坪遺跡での同形態はⅠ-4期の皿において主流をなすがⅠ-5期以後少数に転じ、杯においては全期を通じて稀である。また西南部で出土しているb形態には外方への屈曲が極めて弱いもの、内面の凹が沈線で表されるもの、型式的に退化が著しいものが少なくない。これらもb形態の展開・存続において下ノ坪遺跡との間に差異が存在することの傍証であろう。次に調整についてみると、西南部では西南4期まで底部及び立ち上がり部外面の調整が丁寧且つ整美で、西南5期に至っても何らかの処理を施すものが多いことを指摘できる。下ノ坪遺跡ではⅠ-5期より底部処理を簡略化したものが現われ、Ⅰ-7期ではヘラ切り痕を残すものが顕在化、中には切り離し後未調整のものも見うけられる。また底部内面に条痕状の粗い痕跡を残す特徴的なナデを施すものがみられるが、これは主に西南2期以前に存在するようである。

② 須恵器蓋

輪状摘みを持つものは香長平野では少数で、Ⅰ-4期頃以降はほぼ消滅するとみられるが、船戸遺跡からは一定量出土しており、しかも型式的に若干新相のものも見うけられる。

③ 土師器供膳具

ミガキなどの手法及び形態からみて、編年試案Ⅰ-6期以前に比定し得るものが殆ど存在しないという在りよう自体が極めて特徴的である。この結果については今後の検討を要す。F53-1は搬入品である。K89の形態を香長平野の編年観でみればミガキを施すのが常であるが、本例は施さない。ミガキ自体は宮崎遺跡において僅かに認められる。皿では、平底の周縁部に低い高台を貼付し、体部が大きく外傾して直線的に立ち上がる器形が土師器・須恵器共に存在する。香長平野では、類例を僅かに田村遺跡群[28]に求められるが、資料母群に対し極僅少と言える。搬入品F53-1はその手法・形態・胎土・焼成より所謂畿内産土師器の範疇で捉えられ[29]、平城Ⅲ期頃に位置付けられよう。なお回転台の非使用を断定できる在地の土師器が存在しないことは、香長平野と共通する。

⑿ 小籠遺跡SK 130、SK 136

供膳具に須恵器が存在しない。土師器の個別的な器形や法量では編年試案Ⅱ-1期との明確な差異化ができないが、次のような点を指摘することができる。まず杯Aにおいて、本遺物群は器高の高い杯Aが存在する。この器形は底部の分割成形が明瞭化し、体部の回転ナデ痕も顕著である。高台を持つ杯は、下ノ坪遺跡P14・15では平底の杯とは一線を画す独自の形態を有しているが、小籠遺跡では上記の器高の高い杯Aと共通化している。下ノ坪遺跡出土で全容の判る1点は、小籠遺跡の同器形及び共通性を持つ杯Aのどれよりも体部が深く、高台は低い。また小籠遺跡では下ノ坪遺跡SA 4、P14・15と共通の杯A、皿Aでも回転ナデ痕の顕著なものを若干認める。以上より小籠遺跡SK 130・136出土遺物群を編年試案と比較すると、Ⅱ-1期に後続する「Ⅱ-2期」に相当する。なお本遺構から出土している搬入黒色土器椀については下記の搬入品の項で触れる。

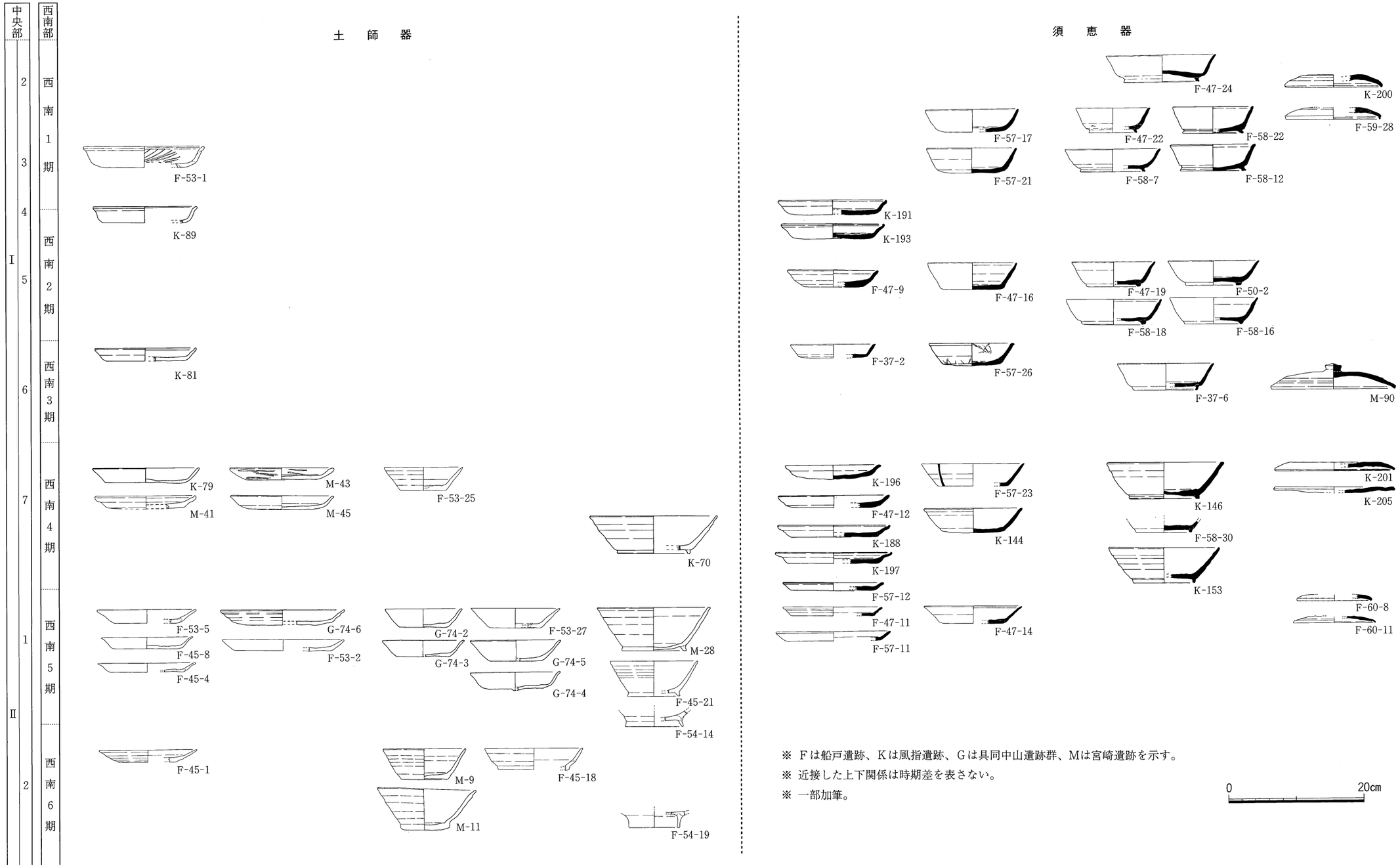
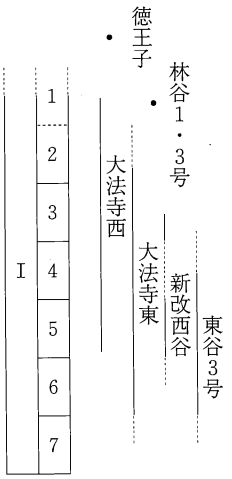


Fig. 143　四国西南部における変遷試案図

2．窯跡

須恵器窯跡より出土している資料と編年試案との比較を試みた。南四国で資料数などにおいて比較に適すると思われるものを選択した結果、徳王子窯以外は土佐山田町須江古窯跡群に属するものとなり、地域的に限られたものとなったが表22を得た。ただ、実見できた遺物は一部である。しかし、現在南四国最多の須恵器窯跡を擁する須江古窯跡群がⅠ-2期以前より操業を開始し、Ⅰ-3～5期に活況を呈していたことは了解できよう。中には操業期間が長くなっている窯跡があるが、灰原のみの遺存など、遺跡の状態は一様ではない。

表22　南四国中央部の窯跡出土資料との対比(30)



3．搬入品

南四国地域外の製品とみられるものを挙げる。散発的な出土であり、また必ずしも産地を特定できるものではないが、他地域との関係を考える上での資料となる。今次そのような資料として認識できたものは、何れも所謂畿内系として捉えられるものであった。以下に検討に適する搬入品を伴出した遺物群ごとにまとめる。

①　下ノ坪遺跡 SK 27、SD 40

共にⅠ-6期に位置付けた。搬入品は土師器杯、高杯（614、616、910、916、927）である。916は都城の手法分類のｃ手法後ミガキを施すものである。これら杯の手法及び形態は、都城の土器編年では平安京Ⅰ期中頃に位置付けられよう。なお在地産土師器椀Ａ（914、915）の形態もこの年代観を補強する。(31)

②　下ノ坪遺跡 SB 21

Ⅰ-7期に位置付けた。搬入品は土師器Ⅲ（353、354）で、平安京Ⅰ期新頃に相当しよう。

③　下ノ坪遺跡 SB 20

Ⅰ-7期に位置付けた。搬入品は黒色土器杯（309）で、森分類の畿内系黒色土器Ⅰ類、同編年Ⅰ～Ⅲ期に相当しよう。(32)

④　小籠遺跡 SK 130・136

先述のように、編年試案Ⅱ-1期に後続するⅡ-2期に位置付けることができた。搬入の黒色土器椀は、報告されているように森分類の畿内系黒色土器Ⅲ類でＣ段階、都城の土器編年では平安Ⅱ期中～新に相当しよう。

Ⅶ．画期

編年試案でみた変化に前項の各遺跡の様相も加え、供膳具からみた画期について検討する。

1段階

編年試案Ⅰ-2～Ⅰ-3期である。まず杯Ａ、杯Ｂ、ⅢＡといった器形は土師器・須恵器共に一定の定着をみている。土師器杯Ｃの存在や各器形の暗文、須恵器蓋の形態等から、相当忠実にいわゆる畿内系の土器を模倣していると言えよう。規格的法量分化については、須恵器にそれを想定でき

る資料があるが、土師器では、強い規格性を示す証左はない。また須恵器杯Cのような先段階の系譜をひく器形が残っている。本段階の前半では須恵器杯C-2が主要器形の一角を占めるが、後半では杯Aとの区別が不明瞭になっていく。土師器の調整では回転ケズリを施すものを認めるが、断続ケズリのものも併存する。なお、本段階の土師器の出土量は次段階と比較すると少ないことから、製作手法や法量を検討できるレベルが、同じく次段階との比較において、その資料量的裏付けに準じたものになっていることを断っておく。更に、先行する土師器の資料群が現在確認できないことも、本段階の様相把握を次段階と比べると難しくしている。一方、これら出土比率とも関連して、本段階の土師器の概要については、少量・多器形と表現できる。また本段階頃の下ノ坪遺跡と北部の土佐山田北部遺跡群、土佐国衙跡といった香長平野内での比較で、土器の形態・手法・素地等が異なる例を見出せる。赤彩土師器の分布については各遺跡間の差異が大きいようである。窯跡出土須恵器との比較では表22のように、既に須江古窯跡群が操業しているとみられる。

以上から本段階は、総括的にみると律令的土器様式[33]として評価された様相が既にある程度浸透しながらも、個別的な器形・手法では先段階の系譜をひくものの残留や、比較的多様な形態上のディティール等、やや多様で初期的な様相を残す段階と言えよう。また土師器については、須恵器との同軌性が既にある程度以上看取される。

2段階

Ⅰ-4～Ⅰ-7期である。前半のⅠ-4～Ⅰ-5期では供膳具の多くを須恵器が担っていることが、表20をはじめ各遺跡資料より確認できる。須恵器杯C、土師器杯Cが消滅しており、下ノ坪遺跡では赤彩土師器が激減する。土師器杯皿Aは、非塗彩で須恵器と同じ調整とプロポーションに口縁部b形態とミガキをもつ、「定型化」したものになる。供膳具は須恵器・土師器共に杯A・B、皿A、高杯を中心に構成され、法量分化も須恵器・土師器共に明確な規格性が看取できる。換言すれば本段階前半は、器形・法量分化・手法共に規格性が最も顕著で様相が整然としている時期と言える。また現段階の資料では、同時期より遺物の出土が開始或いは急増する遺跡が目立つ。一方、須江古窯跡群出土須恵器との比較では、同窯群の操業は活況を呈しているといえる（表22）。

以上より本段階前半は、南四国における律令的土器様式の頂点を示していると言えよう。そして同期の各遺跡資料を総合すると、その様相は当地域としての最盛期に至った律令的須恵器生産体制を軸として達成されたものとみられる。

後半の様相は変化しているが、前半期の様相を基盤とした枠組みの中で理解することができる。Ⅰ-7期は当地域における律令的土器様式の終焉期であると共に、大きな画期をなす次期の土器様式の台頭期である。

3段階

Ⅱ期に相当する。前段階との間に本稿で扱う時期の中で最大の画期が存在する。当地域の律令的土器様式として捉えた様相を劇的に払拭し、平安時代前期における新しい土器様相が成立する。具体的には、供膳具における須恵器の消滅と、後述の回転台土師器4類への移行として現われている。

本段階に入って顕在化する土師器の外反する口縁部（g形態）や、やや内湾する体部、同杯Bの底部周縁端部に付く先細りの高台（6形態）は新しく登場してきた上位器種の影響を含むものと解

することができる。土師器供膳具を概観すると、継続される調整の省略化或いは欠落と共に、回転力のより顕著な利用、器厚の減少、底部と体部の「分割」的成形の進行を指摘することができる。[34] 後者は素材の精選、練度の向上、焼成法等に言及するまでもなく、土器製作技術の体系的発展を示すものである。さらに後述するように、発色にみる変化もそれらに同調して現れている。換言すれば本画期は、当地域で律令的土器様式を成立させた初期段階よりの基礎的な土師器製作技術である、回転台土師器製作技術の継承的発展とも捉えることができよう。また本段階の土師器供膳具にあらわれた形態・法量・ミガキ手法の変化はとりもなおさず製品に対する需要の変化への対応の結果であり、さらに踏み込めばその変化は、一方で土器生産において律令的須恵器生産を終息せしめ、他方では生産性向上を指向した土師器製作技術の発展を促すような要因を内在したものであったといえよう。さらに時代区分を超えてこの後に視野を広げると、当地域に連綿と続く回転台使用の土師器の一群に繋がる基本的技術の確立期の一つを、本段階に求めることもできるのではないだろうか。

Ⅱ期の推移については、小籠遺跡 SK 130・136に後続する遺物群も今次調査で出土しているが、報告に至っていない。次巻「下ノ坪遺跡Ⅲ」に期したい。見通しとしては、「播磨系須恵器模倣」[35]の土師器椀の出現をもって次の画期を設定でき、それまでをⅡ期として把握することができる。[36]

Ⅷ. 各視点からの様相

1．杯皿の形状

本稿での各期を通観すると、土器の形態及びそれより窺える手法自体に特徴を見出せる。ここでは巨視的な視点で属性を把握したい。以下には須恵器・土師器の同軌性が認められる事にも、当地域の様相が現れている。なお、平底の器形を前提として検討する。

まず、平らな底部から屈曲して斜直する箱形を基本とする全形的形態を「B相」とする。口縁部がやや外反したり、体部がやや内湾して立ち上がるものを

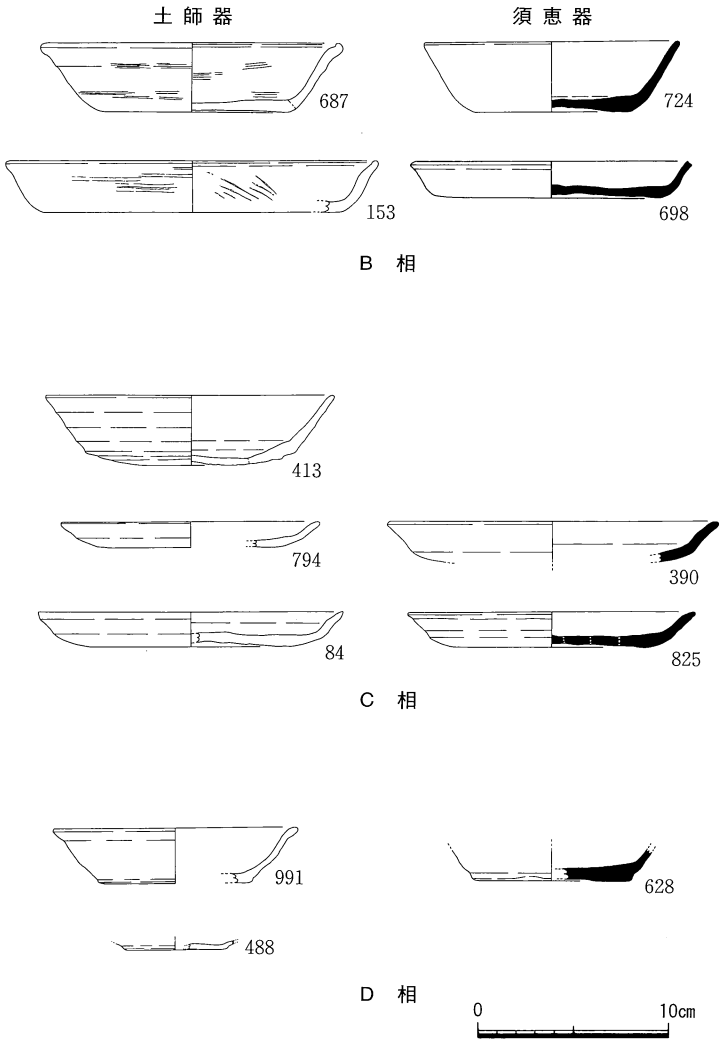


Fig. 144　杯・皿の形状類型例

含める。杯A・皿Aの基本的形態で、高台を持つ器形にも通底するとみてよい。既述の2段階前半の須恵器・土師器にその典型を求める。本相を広義に解すると、律令期の系譜上にある供膳具全ての普遍的形態にまで敷衍することもできようが、ここでは後述のC、D相を呈さず、それらに対置できる概念とする。なお本相の名称については、1段階の属性となる形態について‘A相’を仮想してのものである。

次に、口縁部の回転ナデが強くなり、器形に影響を与えるに至ったものを「C相」とする。具体的には口縁或いは体部の外反、やや顕著な回転ナデ痕としてあらわれる。やや突出気味であったり、立ち上がり外面を丁寧に成形しない底部を伴う場合がある。本相はⅠ-4期に萌芽を認め、Ⅰ-6期以降形態・量共に顕著となる。

3つめに、立ち上がり部外面に段を有するものを「D相」とする。初現は明確にできないが、Ⅰ-7期以降顕在化する。本属性は底部の分割的成形の進行と、立ち上がり部の調整の簡略化の表れとして理解することもできる。しかし、同部に丁寧な連続ナデを加え、整美に仕上げた個体が存在する。それとB相との相違とを重視すれば、本相を有する土器群の存在を許すに至った、或いは成立せしめた背景が想定され、その形態については当該期頃より始まる新しい器種構成における上位器種からの影響も考えられる。

2．回転台使用の土師器

西日本における「回転台土師器」[6]の研究史は東日本に較べ浅いものの、'80年代前半より土器生産との関連に論及する研究が発表され、視点としての重要性が周知されるに至った[37]。ここでは本稿資料中の在地産土師器小型供膳具（杯・皿・椀・蓋）における回転台の使用に関してまとめる。まず概要を先記すると、同資料中では回転台の非使用を断定できる例は見当たらない。断続ケズリを施す一群は、遺存度の問題もあり判断を保留しなければならなかった。換言すれば本稿該当時期においては、回転台土師器について論ずる事が、現段階では在地土師器供膳具についてのそれと同義となる場合が多い。さて、当地域の回転台土師器を理解するにあたっては、以下のような分類が有効である。

回転台土師器1類

須恵器と共通する成形・調整手法と、土師器の独自性即ち口縁部形態・ミガキを併せ持つもので、律令期前半の土師器の主軸をなす。画期1段階に属するものは、底部或いは杯部外面の回転ヘラケズリを証左として、362、944、951を挙げることができる。現時点での回転台土師器の初現である。上記のように断続ケズリを施す赤彩土師器が共伴し、画期の項で述べた同段階の多様性の一面をなしている。

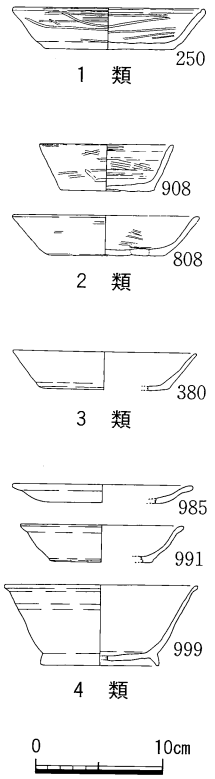


Fig. 145 回転台土師器の類型例

2段階に属するものは資料量も多く、須恵器と同じ回転ナデ・回転ヘラ切り痕及び全体形より、須恵器と共通の成形・調整によることが確認できる。一方で原則的に杯皿の全面に施すミガキや、

口縁端部の形態に土師器としての明確な独自性を看取できる。これらは安定した出土量と手法・形態の斉一性より、当地域の律令期の土師器の典型として捉えられる。

回転台土師器２類

ミガキと焼成以外に須恵器との差異が存在しないものである。２段階後半、Ⅰ-６～７期に確認できる。

回転台土師器３類

焼成を除くと律令期の系譜をひく須恵器と全く同じものである。Ⅰ-７期に出現する。

回転台土師器４類

編年試案Ⅱ期の供膳具の主流を占めるもので、須恵器供膳具は殆ど共伴しない。形態も３類から離れ、もはや律令期の土器の形態とは言えない。具体的には低平・小径化した皿や、口縁部のｇ形態、底部のＤ相といった特徴があらわれている。

３．赤色塗彩土師器

既述のように、今次まとまった量が出土した赤色塗彩土師器（以下赤彩土師器）に関しては、幾つかの特性が看取される。赤彩土師器は下記のごとく、現状では土佐、伊予、讃岐では一般的な遺物ではなく、従ってその全容の把握も困難であるが、地方における律令期の土器様式を性格付ける上で、重要な構成要素の一つになるものと考える。ここでは今次報告及び香長平野の同器種についてまとめ、隣県に関する管見も加えて大略的様相を摑み、課題を認識したい。原則的に、今次報告例との比較の有意性が高い奈良時代頃のものに限って検討する。また個々の時期についての詳細は省略する。

(1)　南四国中央部

既述したような南四国での当該期遺跡の調査例より、赤彩土師器の出土例をまとめたのが、表23である。今次報告以外は少数の出土であり、香長平野では国衙推定地や土佐山田町の所在する一帯では確認されず、物部川沿岸から東方の香宗川流域にかけて偏在している。また、本県中西部の佐川町や[38]、仁淀川下流域にも少数の出土例がある。出土器形については、土師器の群について述べた項と同様である。今次SK 30出土の皿は刷毛塗りであることを示すが、他の多くの個体では不明瞭である。素地については次の３種、及びその他に分けて捉える。1) Ⅰ群、2) Ⅱ群、3) 共伴する

表23　南四国の赤彩土師器[39]

	Ⅰ群	Ⅱ群	他の土師器と同	その他
下ノ坪遺跡	杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂ、蓋、高杯、鍋	皿、壺	皿Ａ	皿Ｂ-１、皿Ｂ-２、壺
十万遺跡 ST３				皿Ｂ-１
深渕北遺跡				皿Ｂ
曽我遺跡	皿Ｂ、蓋			杯Ｂ、皿Ｂ
田村遺跡				皿、蓋（Ⅰ群か）

他の土師器と区別できないもの。Ⅰ、Ⅱ群については既に述べた。さて素地の発色を見ると、非塗彩土師器には存在しない10 YR 8/2灰白色付近を示すものと、橙色系を示すものに分けられる。以下、前者を灰白色系、後者を橙色系と称す。灰白色系の多くは1) で占められ、2)、3) は橙色系である。

(2) 伊予（燧灘沿岸）

今治市八町遺跡、同四村日本遺跡、東予市幸の木遺跡等に出土例がある。[40,41,42] 伊予では松山平野でも出土が報告されているが、[43] 遺物を実見していない。まず八町遺跡、四村日本遺跡では、全出土遺物に対する赤彩土師器の点数は少数と言える。器形は杯、杯Ｂ、皿、皿Ｂが報告されており、八町遺跡では実見した細片44点の中に高杯もあった。素地は両遺跡の既報告例を合わせて、灰白色系５点、橙色系３点である。回転台の使用については使用を肯定できるもの１点、使用を否定できるもの３点で、残りは不明である。

幸の木遺跡は整理段階で遺物を拝見した。相当量の赤彩土師器が出土している。「Ⅰ区」出土の赤彩土師器片のうち、器形判別可能なものには、皿Ｂ-２、蓋、皿Ｂ-１、杯Ａ、高杯（確認点数順）がある。同出土遺物群の素地に今次の基準を適用してみると、発色では灰白色系のものが橙色系の４倍強、胎土の精・粗では、粗なものが精良なものの４倍近くを数える。また「Ⅲ区」から出土している杯Ａには回転台使用のものが存在する。

(3) 讃岐（中讃）

中讃地域の森広遺跡 SD 7801、前田東・中村遺跡 SE 01で一定量の赤彩土師器が出土している。[44,45] 下川津遺跡、[46] 川津一ノ又遺跡等[47]では確実な報告例がなく、出土は偏っていると言える。森広遺跡 SD 7801で図示されている土師器供膳具から黒色処理されたものを除いた28点のうち、赤彩土師器は10点を数える。そのうち素地の観察ができた９点中の２点が灰白色系、７点が橙色系の素地で、砂粒を多く含むものとそうでないものがある。器形は皿７点、杯Ａ２点、杯Ｂ１点で、口縁端部の形態や皿の全体形には比較的多様性がある。回転台の使用については、その非使用を断定できる例はあるが、使用を断定できる例はない。共伴している須恵器の形態は土佐の本稿編年試案（以下本稿編年試案）ではⅠ-３期頃にあたる。次に前田東・中村遺跡 SE 01では、報告されている土師器供膳具10点のうち８点が赤彩土師器である。器形は皿Ａ４点、皿Ｂ４点である。素地は灰白色系５点、橙色系２点、分類不能１点である。回転台の使用については、その非使用を断定できる例はあるが、使用を断定できる例はない。共伴している須恵器の形態・手法は、本稿編年試案ではⅠ-３～４期にあたる。なお、川津元結木遺跡では赤彩の椀が出土しているが、上記の様相から考えて、本項で扱う赤彩土師器とは異なる背景を持つものと捉えておくのが適当と考えられる。[48]

(4) 阿波

鮎喰川下流域の庄遺跡、鮎喰遺跡、高畑遺跡、矢野遺跡、吉野川北岸の黒谷川宮ノ前遺跡、阿南市立善廃寺に比較的まとまった出土例がある。[49,50,51,52,53] まず資料を概観すると、少なくとも奈良時代においては赤彩土師器が土師器中で高率を占めることと、「平安中」[54] まで赤彩の杯類が継続的に一定量出土していることが、四国内で異彩を放つ。しかし、検討する時期についてはここでも本項冒頭の枠組みに準ずることとする。このような様相により、器形は皿Ａ、皿Ｂ、杯Ａ、杯Ｂ、蓋、高杯等主要なものが揃っており、杯皿Ａでは法量分化も認められる。奈良時代前半に位置付けられる資料群

では杯Ａが比較的多く、蓋も目立つ。「奈良後半」では高畑遺跡を見る限り、皿Ａがやや比率を増し、次いで杯Ａが多い。次に素地については徳島県立埋蔵文化財総合センター展示品の実見によるもので、あくまでも断片的になるが、庄遺跡出土で「奈良前」に位置付けられている皿Ａと、高畑遺跡出土で「奈良後」の皿Ａに灰白色系の素地を認める。他の橙色系と比較するとこれらの素地はやや粗で、微細な気孔が顕著である。数量的には橙色系の方が明らかに多い。回転台については、非使用のものから使用のものへの変遷が提示されている。[55]

(5)　小結

最初に、筆者の力量等の制約によりここで何らかの結論を出すことはできず、課題の提示に終わることを断っておく。さて各出土例を総覧して、次のような点を列挙できる。まず、阿波が赤彩土師器についてやや他と異なる様相を示している。そしてひとまず阿波を除けば、赤彩土師器の出土する遺跡について現段階ではつぎのように認識できる。第１は一定量の出土がある遺跡である。第２はごく少数が出土している遺跡である。第３は赤彩土師器が出土していない遺跡である。第１の遺跡の性格や立地を考えると、何れも寺院や地域の拠点ないしは在地支配層と中央権力との接点とみられ、また水上・陸上交通の要衝に位置する遺跡である。次に遺物自体に目を移して検討する。まず、既述のように赤彩土師器を観察してみると、地域或いは遺跡によって数比に差はあるものの、各々の地域での非塗彩土師器に存在しない発色或いは胎土の素地を持つものがある。灰白色系として捉えたグループはその主たるものである。その素地色については、同時期の非塗彩土師器のみならず、時期を超えた在地の酸化焔焼成の土器の中にも普遍性を見出せない場合、意図されたものであるか、或いは特殊な製作法の結果であると仮定できる。素地を白くする理由としては、施釉製品の例を持ち出すまでもなく、鮮やかな発色の追求に求められるであろう。土佐の香長平野では、素地の発色のみならず胎土も特殊な一群が認められ、赤い器としての仕上がりを強く意識した生産が想定できる。そして四国の上記のような遺跡で、そのような効果を素地から意図したものと、従来の素地に塗彩を加えたものが併存していることになる。ところで、このように赤彩土師器を検討する場合、その製作手法を克明に解明することが本来の前提条件であるが、現段階では十分と言えない。例えば塗料の塗布を行う段階や、塗布後の焼成の有無等は本件の基礎的問題であるが、[56]現在の資料からは断定することができない。いずれ遺存状態の極めて良好な資料が出土すれば、黒斑との関係等から判断できるであろうし、最終的には化学的裏付けや生産遺構からの検証が望まれる。なお塗布の方法については、刷毛塗りを確認できる個体が４県全てに存在する。

以上の事柄を踏まえて、赤彩の意味について考えてみたい。本稿で検討する赤彩は、畿内を軸として律令期に展開する器形に広く採用される一方で、その畿内においては行われないことは周知の通りである。このような問題に関しても先学による研究があり、鶴間正昭氏は汎本土的に資料を網羅し、その性格を官衙主導の儀式で使用される儀器に、手法的系譜を在地の伝統的赤彩土器に求めた。[57]武田恭彰氏は備中の律令期土器様相に関して考察を進める中で、赤彩の意味について「特殊な器に対する在地の伝統が反映された」と解釈すると同時に、赤彩土師器を含めた備中の土器様相に「他の地域を凌」ぐ律令的な土器様式の完成度を見出している。[58]また、「畿内産土師器」の橙色の発色を意識したものであるとの解釈も各所で見受けられる。このような先学の成果から四国の赤彩

土師器の背景を推考してみる。まず、赤彩自体に在地の伝統的背景をみる解釈は、四国では先行期に赤彩土師器の全域的な盛行がみられず、無理がある。次に「畿内産土師器」の発色の模倣という解釈について検討してみる。確かに、平城京跡より出土している土師器の多くは表面の発色はややにぶいものの、内部は彩度の高い橙色を示す。頻繁に赤彩を施される器形が畿内に発信源を求められるものであることを考えると、この解釈は合理的である。さて、ここで四国の赤彩土師器について得られた知見と留意点を列挙する。

① 盛行期の開始時期については同時ではないものの、一定の符号を看取することができる。これはおそらく、各地域の「律令化」の進展と関連するものと思われ、先学の成果とも軌を一にする。

② 出土比率と存続時期において、阿波が様相を異にする。

③ 赤彩土師器と非塗彩土師器は共存している。

④ 灰白色系として捉えた一群が、比率の差はあれ、何れの県でも存在する。言うまでもなく、この素地は先行する時期の土師器に系譜を求めることはできない。

これらを総覧すると、「畿内産土師器」の模倣という解釈の合理性は否定しないものの、それだけでは不十分であることも無視し難い。例えば③は赤彩と非塗彩の土師器の性格が異なることを示している。④については、単に橙色を求めるのみならば従来の土師器に彩色するものだけで事足りるのであり、さらに踏み込んで表24等から判断すれば、非塗彩でもかなりの橙色を示すものがあり、在地の非塗彩土師器と「畿内産土師器」の“橙色度”の格差についても客観的な比較・検討の必要性を感じる。同様に「畿内産土師器」の模倣という仮説に立って、回転台の使用等にみられる土師器の在地性と対比すれば、色彩への固執が突出する感がある。以上より、四国の赤彩土師器について確認及び推考をすれば、その用途には特殊性があり、背景には主として在地的伝統ではなく、各地方の「律令化」に伴う必要性を考えるべきである。またその製作法においては、灰白色系の一群の存在を単なる偶然の群発的事象と捉えるには不自然さがあり、何らかの関連を考慮しておくべきであろう。そう仮定する場合、少なくとも畿内の中枢からの直接的伝播ではない、地方における情報の授受が問題になるのであり、課題とする価値はあろう。また、上で確認したような論拠に立てば、例えば②のような様相差を抽出することが、各地域の律令制の浸透・展開・消長についての手掛りともなり得ることを示している。

4．土師器の発色

今次報告分を主とした赤彩を除く土師器の色調を表24-1に集計した。表24-2は各遺物群を編年試案に沿って時期ごとにまとめ、その比率を視覚化したものである。この結果を評価するにはいくつかの問題点を認識しておくことが前提となる。第1に、色の序列化である。左端に「赤い」色を、右方にそれから遠ざかる色を配した。両端に近いものは問題ないが、中庸部分の明度・彩度による序列化の正当性に疑義の余地がある。第2に多数の遺物の色を同列に論じられるかという点である。今次調査では遺物の色に異なった影響を与えるような埋没状態の差を認めず、その意味で少なくとも今次出土遺物内での検討は有意である。第3に普遍性である。他遺跡との間には上記のような条件差が存在する可能性がより高い。表では遺物を実見できた2遺跡を挿入した。比較資料として量的に貧弱であるが、表に表れた今次資料との同軌性を評価しておく。なお、今回資料化できなかっ

段階	編年試案		遺構／色調	2.5YR 5/8 明赤褐	2.5YR 6/8 橙	2.5YR 6/6 橙	5YR 5/8 明赤褐	5YR 5/6 明赤褐	5YR 6/8 橙	5YR 6/6 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/6 橙	7.5YR 7/8 黄橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	10YR 7/6 明黄褐	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/3 浅黄橙	2.5YR 8/4 淡黄	2.5YR 8/3 淡黄	5Y 7/8 橙	5Y 7/1 灰白
1	Ⅰ	2	SD26	1		1				1		4					2													
			SB9						1	3																				
		3	SX2					2		1		1																		
			SB13						1	2				1																
2			SK20									1																1		
		4	SK22							1				1			1													
			白猪田		1					2		3																		
		5	SK30						1	4		1		3	1	1	1	1			1				2					
			SB18							1				1				1				1			1					
		6	SD40		1				1	5		3		3			1													
			SK27							2		1		4	3				1		5									
			SK33			1				3					2						1									
			SB16							4		1		1			1	1						1						
		7	SB19						1	2				1							1									
			SK34						1	3	3	1		1			1	3		1	2				1					
			SK21		1	1				1		1		3				1	1		2	1			1	2				
			SB20						1	1		1	1	1			1					1	1						1	1
			SB22							3	1		1	3	1						1	1	1		1					
			SB21		1				1	3	1	1		4	`						1				1					
3	Ⅱ	1	SA4									3			1						1				1					
			P14・15							1			1	5	1	2	5				1	2			2		1			
		2	小籠					1	2	12	1	6		18	2	1	2	1	5	2	4				1					

表24-1　出土点数

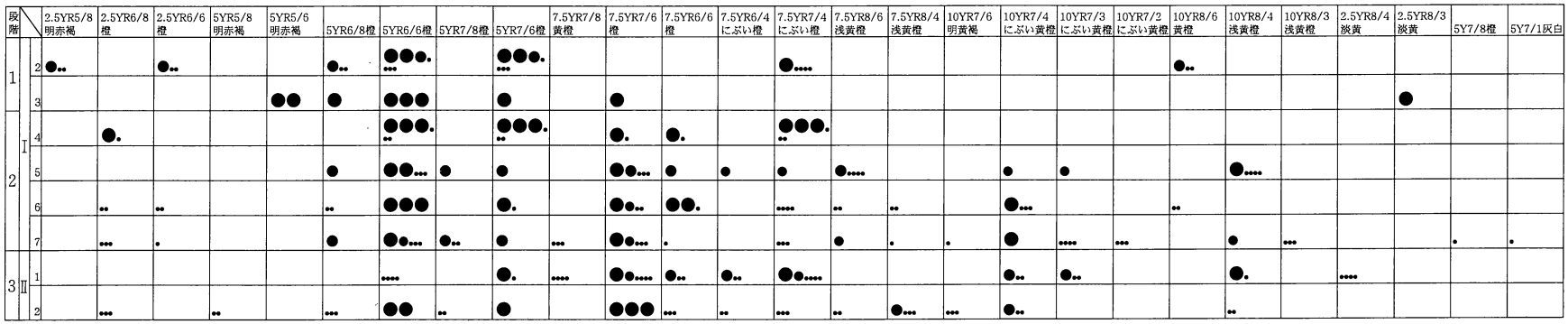


表24-2　各期ごとの比率

表24　土師器の発色

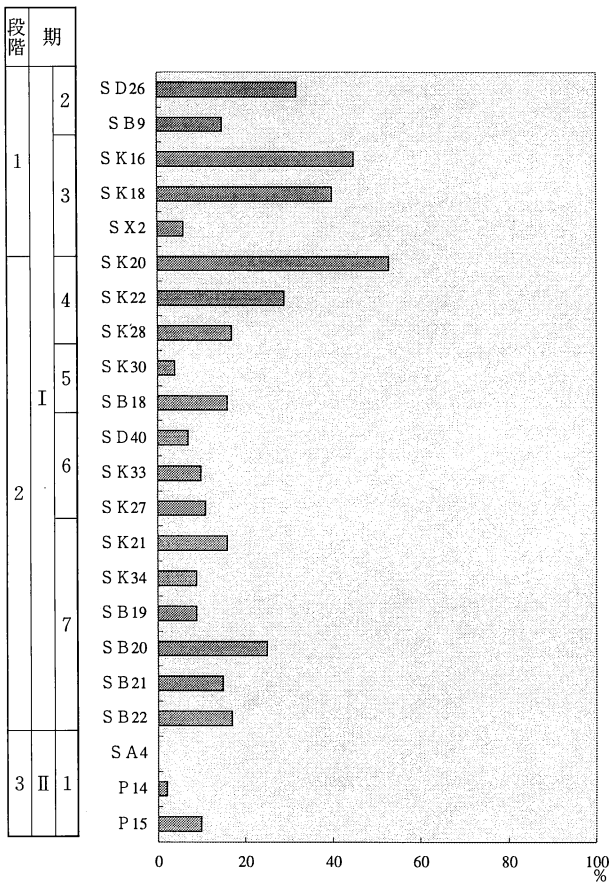
＊色調は巻頭凡例に準ずる。
＊白猪田は白猪田遺跡ＳＤ１、小籠は小籠遺跡ＳＫ130・136をさす。
＊赤彩、搬入は除く。
＊●＝10%、●＝5%、•＝1%

た土佐山田北部遺跡群（既述）の出土遺物からは、色における傾向差を窺える。以上を踏まえて、表より次のようなことが読み取れる。まず時期の下降に従って、赤色傾向から非赤色（淡・黄）傾向への傾斜が読み取れる。既述の第２段階までは色相5 YR に最大の重心があり、同段階前半までは赤彩土師器にも匹敵する2.5 YR に属するものも一定量を数える。同段階中頃以降は10 YR に属するものが安定して含まれるようになり、３段階では7.5 YR に重心が移っている。このような推移は焼成に関係するものと見ることができると共に、画期の項の動向とも、少なくとも齟齬を来たしていない。

５．杯と蓋

杯と蓋について、土師器・須恵器を総合して時期的出土傾向をみたのが表25～27である。杯Ｂについては１段階～２段階前半において、他期に例を見ない高率を示す遺物群が存在し、２段階末にも一定率を示す群がある。蓋も多くは杯Ｂと同調する遺物群が多いが、SB 22、SA 4 の率は杯Ｂとの関係でやや目立つ。これら杯Ｂと蓋の出土比率の推移は、杯Ａのそれと比較するとその特徴が一層明らかである。この結果から、２段階前半以前において杯Ｂと蓋のセットが比較的多く必要とされる場合があったのではないかという仮説を立て、今後検証したい。SK 22・28の項で触れた蓋の多量廃棄という問題についても課題である。なお、須恵器杯Ｂ及び蓋と須恵器胎土Ｉ群の関係については素地・胎土の項で触れた。

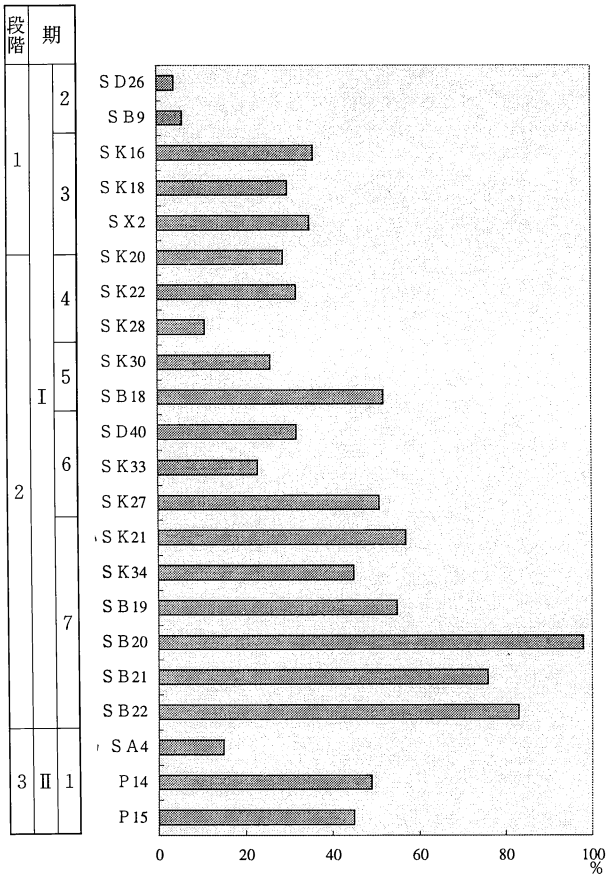
表25　杯Ｂ出土比率



遺　構	杯Ｂ	杯皿椀高杯	比率（%）
SD 26	8	25	32
SB 9	8	54	15
SK 16	5	11	45
SK 18	4	10	40
SX 2	2	31	6
SK 20	9	17	53
SK 22	25	85	29
SK 28	5	29	17
SK 30	4	107	4
SB 18	5	31	16
SD 40	3	41	7
SK 33	4	39	10
SK 27	5	47	11
SK 21	11	68	16
SK 34	7	80	9
SB 19	5	53	9
SB 20	13	52	25
SB 21	5	34	15
SB 22	5	30	17
SA 4	0	20	0
P 14	1	53	2
P 15	3	31	10

※杯皿椀高杯の口縁部総計に対する杯Ｂ底部の点数。

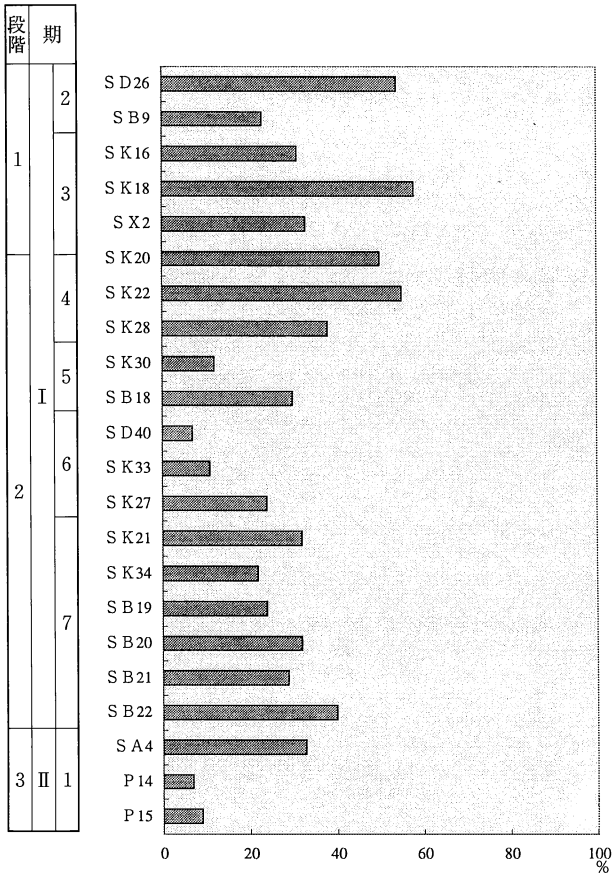
表26　杯A出土比率



遺　構	杯A	杯皿椀高杯	比率（%）
SD 26	1	25	4
SB 9	3	54	6
SK 16	4	11	36
SK 18	3	10	30
SX 2	11	31	35
SK 20	5	17	29
SK 22	27	85	32
SK 28	2	18	11
SK 30	28	107	26
SB 18	16	31	52
SD 40	13	41	32
SK 33	9	39	23
SK 27	24	47	51
SK 21	39	68	57
SK 34	36	80	45
SB 19	29	53	55
SB 20	51	52	98
SB 21	26	34	76
SB 22	25	30	83
SA 4	3	20	15
P 14	26	53	49
P 15	14	31	45

※杯皿椀高杯の口縁部総計に対する杯A底部の点数。

表27　蓋出土比率



遺　構	蓋	供膳具	比率（%）
SD 26	29	54	54
SB 9	16	70	23
SK 16	5	16	31
SK 18	14	24	58
SX 2	15	46	33
SK 20	17	34	50
SK 22	106	191	55
SK 28	11	29	38
SK 30	14	121	12
SB 18	13	44	30
SD 40	3	44	7
SK 33	5	44	11
SK 27	15	62	24
SK 21	32	100	32
SK 34	23	103	22
SB 19	17	70	24
SB 20	25	77	32
SB 21	14	48	29
SB 22	20	50	40
SA 4	10	30	33
P 14	4	57	7
P 15	3	34	9

※母数は杯皿椀蓋高杯の口縁部総計。

Ⅸ. まとめ

以上で得られた知見を要略し、視覚化するために表28を作成した。西弘海をはじめとする諸先学によって評価されてきた「律令的土器様式」に照らすと、本稿で検討してきたように、南四国では8世紀中頃から後半寄りの時期をピークとする律令的様相の変遷を追うことができた。それは都城の土器様式とは異なる内容を含むばかりでなく、四国という限定された地域の中でも同様とは言えず、「土佐型」の語を冠しておくのが適当であろう。そして各地の様相を比較する中で、地方における律令期の様相が立ち上がってくるものと考える。

表28　奈良～平安時代前期の概要

搬入品	段階	期		概要
	1	Ⅰ	2	奈良時代的様相と先代的様相の混在。
			3	過渡期。
	2		4	土佐型の律令的土器様式定型化。
			5	律令的土器様式最盛期
平安Ⅰ中→			6	律令的土器様相の最終形。
平安Ⅰ新→			7	過渡期。
	3	Ⅱ	1	新たな土器様相の開始。
平安Ⅱ中～新→			2	
			3	

さて、以下では回転台土師器及び平安時代前期の画期に関連する事項を主としてまとめと考察を行う。既述の事項を反復することにもなるが、今後の出発点として重要と考えるからである。まず、汎西日本的に古代の土器様相を概観する場合、土師器における畿内中枢部での「左手手法」の固守と、それ以外の広範な地域での回転台土師器の盛行という対置がなされる。畿内及びその周辺地域についての各研究では、回転台土師器出現について、その時期を畿内周辺において9世紀代に、背景を古代的土器生産の弛緩としての須恵器生産の衰退に求めた。その後、畿外即ち前記の地域以外の地域でも資料の蓄積と検討がなされ、畿外での出現時期を8世紀中頃までに求めることとなった。(59) 南四国では出原恵三氏が白猪田遺跡SD1出土遺物中に回転台土師器の存在を指摘し、いみじくも「律令的土器様式の一翼」を担っているものであるとの位置付けを示した。(60) さて今次報告では、既述のように8世紀前半に遡る回転台土師器を確認すると共に、その後の消長について一定の把握をすることができた。それによると南四国中央部においては、8世紀における律令的土器様式の展開の中で、畿内との同軌性が高い左手手法による土師器は定着していない。さらにその様相から考えると、今次出土遺物からは断定できないが、左手手法による律令的土師器は一度も定着していない可能性がある。因みに四国の他県では、8世紀中葉～後半頃に位置付けられている土師器に、畿内同様の手法を示唆するものが確実に存在する。一方、南四国中央部における回転台土師器の出現は、従来言われることの多かった律令的土器生産の崩壊・須恵器生産の衰退に伴うものではなく、当地域の律令期の土師器そのものが回転台使用によるものなのである。そして律令的土器生産の衰退期ではなく、まさに当地域の律令的土器様式のピークを迎える時期に、手法・形態共に最も整然とした律令期の回転台土師器群が成立するのである。上記した土佐型の律令的土器様相とは、このような南四国中央部の様相を考慮してのものであり、当地域における土器生産体制、ひいては律令体制の実相に関して重要な示唆を与えるものである。ところでこのような一見従前の回転台土師器に関する文脈になかった結果が導かれた原因の一つとして、これまでの回転台土師器に関する論議の中で、時期毎の性格付けや地域毎の様相についての認識が必

ずしも充分でなかったことが挙げられよう。例えば9世紀後半以降の回転台土師器と8世紀のそれは異なる内容を含むものとして認識するべきである。本稿で回転台土師器1類・2類としたものは当地域における律令期の回転台土師器であり、3類は律令的土器生産崩壊期の、4類は平安時代前期の新たな土器様相の主軸をなす器種である。このような区分自体は、今次南四国中央部において捉えられたものに過ぎないが、回転台土師器についてもその背景について考える場合は、各地域で前提となる区分を設定した上で検討する必要があろう。次に、2段階から3段階、編年試案Ⅰ期からⅡ期への画期について触れる。既述したように、ここには本稿で扱った時期中最大の画期が存在した。小森俊寛氏は都城の土器様相の変遷を概括し、「先行する律令的土器様式の終焉期であり、平安京を主要な舞台として新たに成立する土器様式の台頭期でもある」平安京Ⅰ期新からⅡ期古に「大きな画期」を見出すと共に、その画期を経て「平安時代前半期において平安京を中心に展開し発展した土器・陶磁器類の様相」を「前期平安京的土器様式」として評価した。[61] 南四国の土器編年試案と都城の土器編年を、共伴している搬入品を手掛りに比較すると、上記した各々の画期はよく同調している。各々の内容は異なるが、画期の到来自体は都城と軌を同じくしていると言える。そうすると、都城と南四国で把握できた土器様相の画期に象徴される社会的背景の変化は、少なくとも汎西日本的且つ同時的な現象ではなかったかという仮説を得られよう。最後に、今後各地域で様相が検討され、地域間の比較が可能になって、互いの差異或いは相似の背景を検討できるようになる段階を期待しておきたい。そうして地方と畿内、地方と地方の比較検討が行われて、律令期或いは古代の実相が明らかになるものと考える。

長々と述べてきたが、以上で本稿を閉じる。拙稿を記すにあたり、未熟な筆者に対して懇切丁寧なご指導を頂いた方々のお名前を記し、深く感謝申し上げたい。
片桐孝浩、勝浦康守、金田明大、国下多美樹、佐藤隆、佐藤竜馬、柴田昌児、鈴木忠司、武田恭彰、谷若倫郎、玉田芳英、出原恵三、中島恒次郎、中野良一、橋本久和、前田光雄、松田直則、百瀬正恒、森　隆、山中章、吉成承三（敬称略）、四国中世土器研究会の諸氏、高知県埋蔵文化財センターの諸氏。また、図表作成においては山本純代、森綾子両氏の補助を得た。

註）

（1）小森俊寛「概説」『古代の土器5－1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会　1997年
（2）菱田哲郎「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究 ―律令的土器様式の西・東5　7世紀の土器―』古代の土器研究会　1997年
（3）渡部明夫・森格也・古野徳久「打越窯跡出土須恵器について」『研究紀要Ⅴ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1997年
（4）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 金蔵寺下所遺跡 西碑殿遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1994年
（5）中島恒次郎「古代前期における食器製作の技法」『太宰府陶磁器研究 ―森田勉氏追悼論文集―』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会　1995年
（6）森　隆「畿内に於ける古代後半の土器様相」『土器からみた中世社会の成立』シンポジウム実行委員会　1990年

(7) 武内雅人「古代末期紀伊国の土器様相」『考古学研究』第31巻第1号　1984年

(8) 細い暗文が都城の土師器の属性の一つに挙げられることは、金田明大氏にご教示頂いた。

(9) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相 ―模倣系土器の展開を中心にして―」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会　1989年

(10) 廣田典夫『土佐の須恵器』 1991年

(11) 廣田佳久「南四国の須恵器 ―周辺地域における須恵器の変遷―」『王朝の考古学』雄山閣　1995年

(12) 高橋啓明「総括」『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

(13) 出原恵三「まとめ」『白猪田遺跡 ―久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書―』高知県南国市教育委員会　1997年

(14) 下ノ坪遺跡の北西約6㎞に所在する。『小籠遺跡Ⅱ ―あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書―』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996年

(15) 下ノ坪遺跡の東約5.8㎞の香宗川河畔に所在する。『高知県香美郡 十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988年

(16) 下ノ坪遺跡の北西約5.5㎞に所在する。廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第11集 ―金屋地区の調査―』高知県教育委員会　1991年

(17) 下ノ坪遺跡の北西約6.1㎞に所在する。『土佐山田北部遺跡群 ―山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書―』土佐山田町教育委員会　1992年

(18) 下ノ坪遺跡の北西約6.3㎞に所在する。『白猪田遺跡発掘調査報告書』南国市教育委員会　1997年

(19) 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第4集 ―府中・太郎三郎ヤシキ地区の調査―』高知県教育委員会 1983年

(20) (14) に同じ。

(21) 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第8集 ―松ノ下・金屋地区の調査―』高知県教育委員会　1988年

(22) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第10集 ―金屋・神ノ木戸地区の調査―』高知県教育委員会 1990年

(23) (21) に同じ。

(24) 出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡』高知県教育委員会　1989年

(25) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992年

(26) 『船戸遺跡 ―中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996年

(27) 廣田佳久『竹シマツ遺跡 宮崎遺跡』高知県大方町教育委員会　1992年

(28) 「Loc. 39C」『田村遺跡群 第9分冊 高知県空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会　1986年

(29) 林部均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会 1992年。以下これに従って畿内産土師器の語を用いる。

(30) (10)に同じ。林谷1・3号窯跡については土佐山田町教育委員会保管資料を実見した。中山泰弘氏には貴重なご教示を頂いた。

(31) 『古代の土器1　都城の土器集成』『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会編　1994年

(32) 森　隆「西日本の黒色土器生産(上)」『考古学研究』第37巻第2号 考古学研究会　1990年

(33) 西弘海『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会　1986年

(34) 出原恵三氏は (14) で、「分割成形技法」を提唱した。この手法的特徴は3段階、Ⅱ期の土師器杯で顕著になることは確かであるが、今回の律令期からの連続的な変遷の中では、漸進的な発展が認められた。

(35) (9)に同じ。

(36) 当該期の土器編年については吉成承三氏による研究がある。「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相 ―高知平野を中心に―」『中近世土器の基礎研究XII 基本資料の再検討と今後への展望』日本中世土器研究会　1997年

(37) 森　隆「回転台土師器の研究史素描」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会　1994年

(38) 廣田佳久『上美都岐遺跡』佐川町教育委員会　1997年

(39) (15)に同じ。『深渕北遺跡発掘調査概要報告書』野市町教育委員会　1995年。『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年。田村遺跡は'98年2月現在発掘調査中である。

(40) 『八町1号遺跡 ―2次調査区―』今治市教育委員会　1995年。遺物の実見に際しては、廣田秀久氏に便宜を図って頂いた。

(41) 『四村日本遺跡 ―県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第1集―』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター　1998年

(42) 『幸の木遺跡・久枝遺跡埋蔵文化財発掘調査　現地説明会資料』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

(43) 栗田正芳「愛媛県における古代土器 ―石井幼稚園遺跡を中心に―」『第8回四国中世土器研究会資料』四国中世土器研究会　1996年

(44) 片桐孝浩「讃岐出土の東北系土器について ―特に黒色土器について―」『研究紀要Ⅲ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1995年

(45) 『前田東・中村遺跡 第1分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995年

(46) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団　1990年

(47) 『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1997年

(48) 片桐孝浩『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1992年

(49) 『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会　1985年

(50) 勝浦康守「庄遺跡」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6』徳島市教育委員会　1996年

(51) 『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畑遺跡発掘調査概要報告書』徳島県教育委員会　1990年

(52) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告9 黒谷川宮ノ前遺跡』徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1994年

(53) 立善廃寺、矢野遺跡は徳島県立埋蔵文化財総合センターの展示品による。

(54) 徳島県立埋蔵文化財総合センター展示室の表記による。

(55) 早渕隆人「黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について」(52)に同じ。

(56) 谷若倫郎氏よりご教示頂いた。

(57) 鶴間正昭「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究』第122号 古代学研究会 1990年

(58) 武田恭彰「備中に於ける律令期土器様相の諸問題」『古代吉備』第18集 1996年

(59) 『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1994年

(60) (13)に同じ。

(61) 小森俊寛「概要」『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会 1993年

4．下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物

池　澤　俊　幸

Ⅰ．はじめに

ここでは特に注目される２点の遺物についての覚え書きを記す。また、掘立柱建物の消長についての試案を、簡単に示しておく。

Ⅱ．四仙騎獣八稜鏡

国内の出土例として長岡京、太宰府宮ノ本遺跡、発掘調査ではないが香川県綾南町羽床出土鏡が知られる。[1,2,3] 伝世品では正倉院第34号、35号、36号の各鏡があり、今次出土例と同じ文様を配する同型鏡で国内より出土又は伝世したものは、以上６面となる。本鏡については、既に東京国立博物館蔵の中国出土品と天津市蔵品をも含めた戸原和人氏の研究や、宮ノ本遺跡出土例に際しての狭川真一氏の考察があり、それらに委ねる。[4,5] 今次出土鏡は大きく欠損しているため法量に関する比較検討が不可能なこともあって、検討材料が多くはないが、長岡京出土鏡との比較を中心とした印象を記しておく。

まず残存部であるが、戸原氏が「麒麟」と判断した部分を中心に、左方に「鶴」の頭部、右方に「鳳凰」の尾の端部を含む部分である。下ノ坪遺跡出土鏡（以下下ノ坪鏡）は変色が目立つが、著しい錆膨れ等は見られず、鋳造時の微細な気泡や縁辺部の加工・調整痕も観察できる。しかし長岡京出土鏡との比較では、一見して文様の描出が鈍い。該当部分を互いに合わせると、３つの頂点は一致するが、それ以外の部分で下ノ坪鏡の方が僅かに肉痩せしているような感がある。また厚さについて、紐脇より麒麟頭部前方を通って「花枝」、稜縁部に至る線上で双方を計測したが、同値或いは0.6㎜までの範囲で下ノ坪鏡が凌駕している。紐穴の方向はやや異なる。下ノ坪鏡の破断面は全体と同様に錆化しており、廃棄時より破損していたものとみられる。破損によりできた角部は若干摩耗しているが、風化によるものか使用によるものかは判断できない。しかし、破断面の加工はみられない。

他の同型鏡とは写真での比較になるが、文様描出では下ノ坪鏡の方が正倉院35号、36号より鈍く、宮ノ本鏡より明瞭に見える。紐穴の方向は正倉院の３面と下ノ坪鏡は若干異なる。

ここで出土例をまとめてみると、出土遺構は掘立柱建物と墳墓で、環境的には都城と太宰府という中央権力の拠点と、西日本における讃岐と土佐中央部の地方拠点ということになる。第Ⅵ章の化学的調査の結果では、下ノ坪鏡も未分析の綾南町出土鏡を除く６面と同じく、「私的に製作された」とされるグループに分類されている。狭川氏は太宰府での出土に際しての同様の結果から、在地の工房での製作と都城からの搬入の両面の見解を示した。南四国では現在のところそうした工房を想定できる例がなく、下ノ坪鏡は他地域から搬入されたものと考えておくことが妥当である。下記の「緑釉単彩陶器」や二彩陶器と同じく、地方の拠点遺跡に文物が持ち込まれる背景について考える上で、注目すべき出土例と言うことができよう。

Ⅲ.「緑釉単彩陶器」

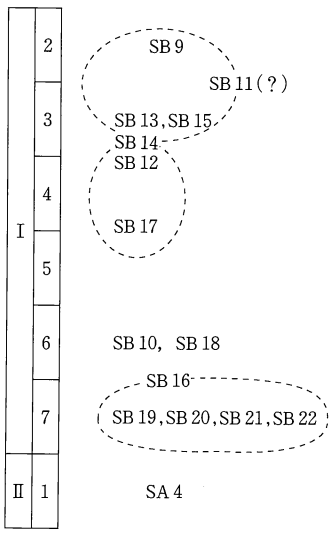
SB 10の柱穴より、火舎とみられる緑釉陶器片（180）が出土した。名称については竈、炉などの呼称もある。出土片は両端が透かしにあたる部分で、穿孔部にも若干の釉が残っている。外面に2条の弱い横位の凹線を認める。釉が残る部分は黄緑色を呈し、素地は観察表のごとく密で白く、軟質である。石英質の砂粒や雲母細片を少量含む。内面器表がやや変色して灰黄褐色を呈するのは、被熱や煤けによるものとみられる。長岡京出土の「緑釉単彩陶器」群と実際に比較すると、素地、釉調がほぼ同一のものがある。なお「緑釉単彩」の呼称の妥当性についての検討は、ここでは省略する。

「緑釉単彩陶器」は、「技術的には多彩釉陶器と共通する面を多く持つが、器種構成が特異で、奈良時代以来の鉛釉陶器とは趣を異に[6]」する一方で、後の量産型緑釉陶器とは器形・技法の両面で「連続性を看取することは難し[7]」いことが周知されている。出土例は平安京Ⅰ期中を中心とする短期間に限定され、空間的には都城及び寺院を主とする近畿地方の限られた遺跡より出土し、近畿以外では下野国分寺に例があるのみという[8]。このような遺物が下ノ坪遺跡より出土した背景についてここで明らかにすることはできないが、近隣に目をやると深渕遺跡（Fig. 2）より二彩陶器片が出土し、律令期の遺構も検出されている[9]。「緑釉単彩陶器」や二彩陶器は限定的な階層によって限定的な用途に使用されたものと考えられ、非量産品で流通ルートに乗るものではない。このような事例より物部川下流東岸地域は、地方の拠点遺跡と都城よりの文物流入について考える上で、現段階では南四国はもちろん全国的に見ても突出した要素をはらむ地域と言えよう。

Ⅳ. 掘立柱建物の消長

表題についての試案のみ提示しておく。建物の存続期間については、柱痕や柱抜き取り痕と柱穴埋土の遺物を分離して検討すれば、それについての情報を得られる場合があろうが、今次はそのような条件が必ずしも揃わなかった。その条件の下で、出土遺物と切り合い関係及び位置関係より推考した時期を編年試案に沿って示したのが表29である。SB 12は出土遺物より判断することが困難であるが、SB 9と共存することはできず、それに後続する時期に位置付けた。SB 10は「緑釉単彩陶器」や黒色土器が出土しており、SB 20に切られている。SB 10とSB 18の時期については、基本層準との切り合い関係と出土遺物の時期を比較した場合、疑問点も残る。SB 15・16は出土遺物に大きな時期幅があるように見えて判断に躊躇するが、その原因としては互いの柱穴が重複しており、しかも遺物を正確に分離できていないことが考えられる。SB 15では、検出面で川原石の集中があったことも含めて、新相の遺物は混入と捉えておく。そしてSB 16については古相の遺物を混入と捉えておく。なお、両棟付近の包含層では遺物の集中がみられ、その時期は両棟出土遺物の古相を示すものが多い。結局、両棟の時期比定においては、SB 16出土の完形の土師器杯4点と

表29　掘立柱建物消長試案



両棟の切合い、及び基本層準との切合いを重視した。なお、表29の年代観に関しては、258ページの表28を手掛かりにできる。今次は建物の配置や設計の基準、周辺の条里や他遺跡との関係に言及できないが、別稿を用意している。

V．結び

八稜鏡の比較・検討については上原真人氏、戸原和人氏、中島皆夫氏、成瀬正和氏、百瀬正恒氏、山本信夫氏の、「緑釉単彩陶器」については国下多美樹氏、百瀬正恒氏のご教示やご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

註）

（1）『長岡京市文化財調査報告書　第14冊』長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所　1985年

（2）『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市教育委員会　1993年

（3）片山昭悟『奈良時代の鏡研究 出土地・伝世地を訪れて』 1997年

（4）戸原和人「長岡京出土の八稜鏡」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編 同朋舎　1986年

（5）狭川真一「八稜鏡について」『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市教育委員会　1993年

（6）平尾政幸「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究 ―律令的土器様式の西・東３ 施釉陶器―』古代の土器研究会　1994年

（7）小森俊寛「概要」『古代の土器２ 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編　1993年

（8）高橋照彦「東国の施釉陶器」（6）に同じ。

（9）『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

第Ⅵ章　自然科学分析

1．高知県下ノ坪遺跡出土の金属製品、赤彩土器の化学的調査

成　瀬　正　和（宮内庁正倉院事務所）

高知県香美郡野市町下ノ坪遺跡より出土した四仙騎獣八稜鏡破片１点と佐波理容器口縁部破片１点の金属材質、および赤彩土器13点について赤色の由来となる物質とその塗彩技法を知る目的で、蛍光Ｘ線分析[1]、Ｘ線回折[2]、顕微鏡観察[3]などの科学的調査を行った。

1　四仙騎獣八稜鏡

いわゆる緑青錆は表面にあまり析出していないが、全体に錆化しオリーブ色を呈している。鈕を含む３分の１ほどの破片である。

蛍光Ｘ線分析の結果、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）を主成分とし、このほか鉄（Fe）、

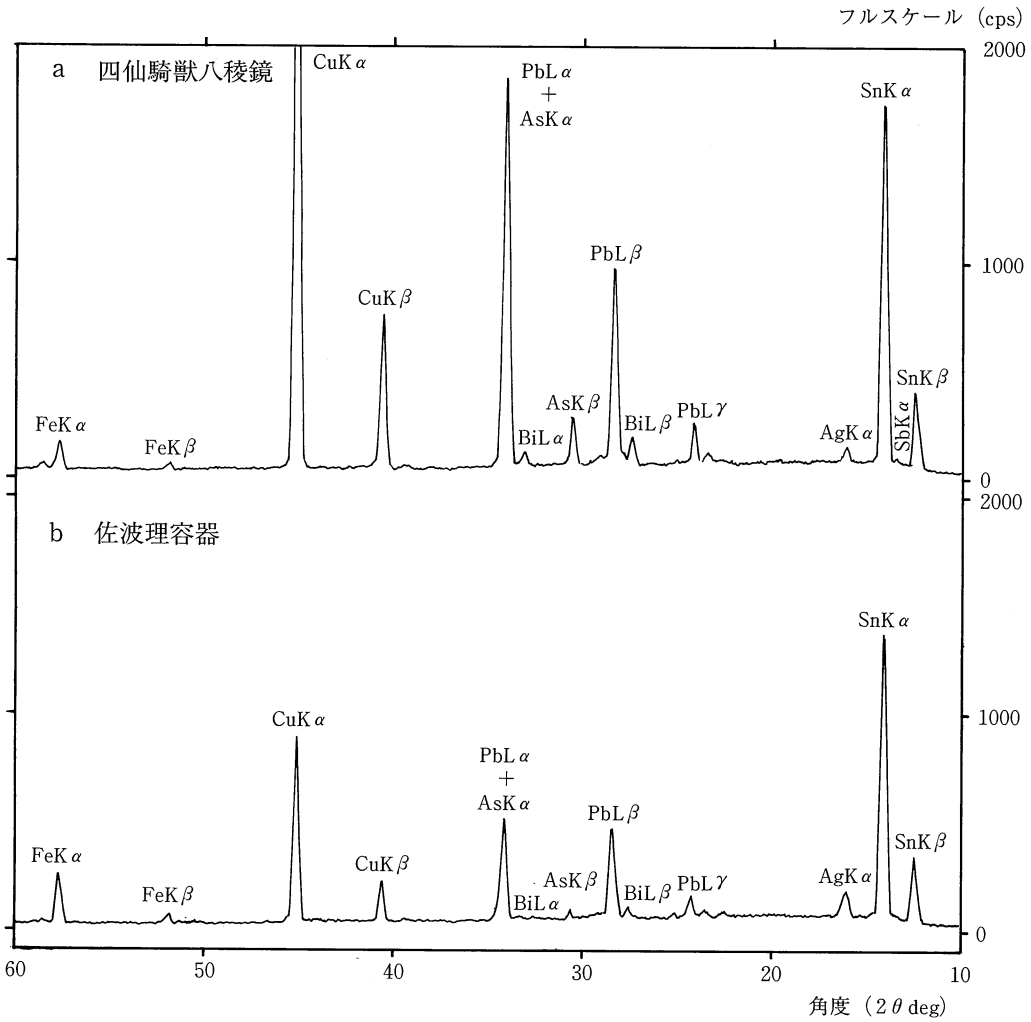


Fig. 146　蛍光Ｘ線スペクトル図

銀（Ag）、ビスマス（Bi）などを少量含む材質であることが明らかとなった（Fig. 146）。標準試料との比較により、表面における微量成分の見かけ上の含有量は銀（Ag）約0.5％、鉄（Fe）約0.4％、ビスマス（Bi）約１％、アンチモン0.5％と見積もることができる。

筆者はこれまで、正倉院の鏡34面について蛍光X線分析を終えているが、化学組成よりこれを大きく三つに分類している。[4]

A：銅（Cu）約70％、スズ（Sn）約25％、鉛（Pb）約５％からなる一群。

B：銅（Cu）約80％、スズ（Sn）約20％、ヒ素（As）１～３％からなる一群。

C（その他）：銅（Cu）70～75％、スズ（Sn）15～25％、鉛（Pb）1％以上、ヒ素（As）１～３％

A群はこの化学組成が、前漢から盛唐に至る中国鏡の標準的化学組成と一致することから唐よりもたらされた鏡と考えている。B群はこの化学組成が天平６年（734）の興福寺西金堂あるいは天平宝字４年（760）の法華寺阿弥陀浄土院の造営に関わる官営工房式の鏡原料配合比とほぼ等しく、またわが国古代の銅原料にはヒ素（As）が含まれることが特徴であることを考慮して、わが国の官営工房製と考えている。C群はヒ素（As）が含まれるものの、鉛（Pb）などを含み、わが国官営工房の鏡の特徴とは異なることから、私的に製作された鏡と考えている。

下ノ坪遺跡の四仙騎獣八稜鏡をこれに当てはめると一応C群に相当する。

わが国で四仙騎獣八稜鏡は正倉院に３面伝わり（厳密に言えば１面は杉本神社床下からの出土品）、また出土品としては京都府長岡京市長岡京跡左京六条二坊出土鏡、福岡県太宰府市宮ノ本遺跡（第７次調査）出土鏡、香川県綾歌群綾南町羽床下白梅出土鏡の３面が知られており、そこに新たに下ノ坪遺跡の一面が加わった。このうち羽床下白梅出土鏡を除く、６面については蛍光X線分析を行う機会に恵まれた。[5]

これらの鏡は互いに非常によく似た化学組成とは言えないが、銅（Cu）、スズ（Sn）の他に鉛（Pb）、ヒ素（As）などを少量含み、C群の範疇で捕らえることが可能である点では一致している。出土品についてはもちろん錆の影響があり、今回行った様な非破壊的な方法では地金の正しい化学組成を求めることはできないが、それでも６面の鏡の中に同じ溶湯から作られた鏡はないものと考えられる。

検出元素から見ると、下ノ坪遺跡出土鏡をはじめとする出土鏡３面はいずれもビスマス（Bi）が認められたが、正倉院の３面からはいずれもビスマス（Bi）は検出されなかった。ただしこの違いは直ちには原料や、製作地の情報に結びつくものではない。

2　佐波理容器破片

佐波理容器破片は口径に沿って幅５～10㎜程度、長さ７㎝、厚さ2.4～0.9㎜ほどの小さな破片である。これだけでは、この容器が皿なのかあるいは鋺なのかわからない。

蛍光X線分析により銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）を主成分とし、このほか鉄（Fe）、ヒ素（As）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）などを少量を含む材質であることが明らかとなった（Fig. 147b）。破片が小さいため、充分な測定面積が得られず、したがって表面における各元素の見かけ上の含有量を算出することも難しいが、銀（Ag）は１％近く以上含まれるようである。

筆者はこれまで正倉院佐波理約1,500点のうち約300点についてその科学的調査を行ってきた。その結果、佐波理の標準的化学組成は、銅（Cu）約80％、スズ（Sn）約20％であることがわかってきた。もちろん鉛（Pb）あるいはヒ素（As）をどちらかあるいは両方、１～数％程度含み、その分スズ（Sn）や銅（Cu）が少ないものもある。[6]

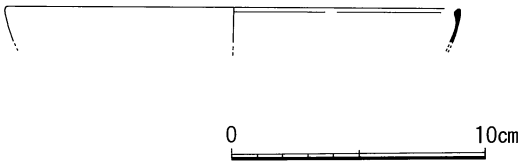


Fig. 147　下ノ坪遺跡Ｈ区Ⅳ層出土佐波理容器実測図

下ノ坪遺跡の佐波理は銅（Cu）、スズ（Sn）のほか、おそらく鉛（Pb）を数％程度含むタイプである。

3　赤彩土器

杯13点については表面に塗彩された赤色の由来となる物質を明らかにするため、蛍光Ｘ線分析とＸ線回折を実施し、また顕微鏡による観察を行った。縄文時代～古代の土器に赤色彩色が施されている場合、それは酸化状態の鉄（Fe）を含む化合物が用いられたことによるものか、朱（硫化水銀）が用いられたことによるものか、いずれかである。

蛍光Ｘ線分析では、いずれの試料からも、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）などが検出された。水銀（Hg）は検出されていないことから、赤色は鉄（Fe）に由来するものと言える。しかしＸ線回折では、赤色の由来となる化合物として、873、939、949、952の４点からわ

表30　赤彩土器の分析結果

図版番号	蛍光Ｘ線分析	Ｘ線回折	赤色物質	器　　種
	鉄（Fe）	赤鉄鉱		
48	＋	－	鉄系赤色物質	（高台付底部）
676	＋	－	鉄系赤色物質	皿ＡⅠ
868	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ａ（底部）
873	＋	＋	鉄系赤色物質	器種不明
939	＋	＋	鉄系赤色物質	皿Ａ
944	＋	－	鉄系赤色物質	杯Ａ
949	＋	＋	鉄系赤色物質	高杯（口縁部）
952	＋	＋	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１
Ｄ区166	＋	－	鉄系赤色物質	杯Ｂ（底部）
Ｄ区167	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１（底部）
Ｄ区168	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１（底部）
Ｄ区169	＋	－	鉄系赤色物質	高杯（脚部）
Ｄ区187	＋	－	鉄系赤色物質	杯（口縁部）

＊Ｄ区は「下ノ坪遺跡Ⅰ」[7]掲載

ずかに赤鉄鉱が検出されたのみで、ほかからは検出されなかった。表には赤彩土器についての蛍光X線分析およびX線回折の結果を示した。縄文時代の赤彩土器の場合、塗彩が焼成前、焼成後のいずれでも、器面にある程度の赤色物質が付着している場合、通常X線回折によって赤鉄鉱が検出される。すなわち縄文の赤彩土器の場合、鉄が発色の由来となる物質としては、基本的にはベンガラが用いられているものと考えられる。これに対し、下ノ坪遺跡例は、充分な量の赤色物質が残存している場合でも、赤鉄鉱の検出は不可能か、もしくはごくわずかで、ベンガラを塗彩したものであるとは必ずしも言えない。古代の赤彩土器に用いられた赤色物質および塗彩技法については、さらに研究を進める必要がある。

本調査をすすめるあたり以下の方々にはお世話になりました。記して感謝いたします。京都大学上原真人・高知県埋蔵文化財センター池澤俊幸・野市町教育委員会小松大洋（敬称略）

（注）

（1）蛍光X線分析　試料に含まれる元素の種類とその量を知るための装置である。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。試料の測定は、全くの非破壊で行った。

（2）X線回折　試料に含まれる結晶性化合物すなわち鉱物など明らかにするための装置である。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；27.5kv、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～100°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。試料の測定は、全くの非破壊で行った。

（3）顕微鏡観察　赤彩土器の表面観察に用いた。オリンパス製顕微鏡SZH11を用い、×7.5～×64倍（ズーム）で観察を行った。

（4）成瀬正和（1995）正倉院宝物の化学組成を通してみた奈良時代の銅製品　第5回鋳造研究会発表要旨

（5）成瀬正和（1993）宮ノ本遺跡第7次調査出土四仙騎獣八稜鏡とその同型鏡について太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ　太宰府市教育委員会

（6）成瀬正和（1989）正倉院の銅製品 ―化学的調査から―　金属博物館紀要14

成瀬正和（1997）正倉院佐波理の化学組成　日本文化財科学会第14回大会発表要旨

（7）高知県香美郡野市町教育委員会（1997）

2．下ノ坪遺跡　竪穴住居址出土の骨同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．骨格の種類

(1)　試料

試料は、弥生時代後期前葉の８点（試料番号１～８）である（表31）。各資料とも細片化したものが多く、集中して出土したものはないようである。

(2)　方法

ルーペを用いて骨格の特徴を観察し、種類・部位を同定する。

(3)　結果及び考察

同定結果を表31に示す。限られた試料であるが、魚骨片と獣骨片が多かった。これらは細片が多く、種名を特定できた試料は少ない。また、全ての獣骨には強く加熱を受けた痕跡があり、試料番号13のように黒色に変色しているのもあった。一方、試料番号７は鹿骨の角幹を縦方向に割いたものを素材としたヤス状の刺突具である。接合後に別個体の先端部が２本見られたので、少なくとも２本以上の個体が存在していたものと考えられる。本地域の弥生時代後期の資料として貴重である。

表31　骨同定結果

試料番号	採取地区・遺物番号など	時代性	種　類	部　位	備　考
1	D区 ST 6	弥生後期前葉	シカ or イノシシ	中手・足骨片(？)	
2	D区 ST 7 Ⅱ層	弥生後期前葉	不明獣骨片	不明	
3	F区 ST 8 中央P炭層	弥生後期前葉	ヒト(？)	指趾骨片	
4	H区 ST 10 中央P覆土下	弥生後期前葉	不明獣骨片		
5	J区 ST 11	弥生後期前葉	ヒト(？)	肢骨片	
6	J区 ST 11 Ⅱ層	弥生後期前葉	不明魚骨片	鰭片	
7	H区 ST 12	弥生後期前葉	鹿角	角幹	ヤス状の刺突具
8	H区 ST 12	弥生後期前葉	シカ or イノシシ	肢骨片	先端の尖るのは加工痕？

報告書抄録

ふりがな	しものつぼいせきに
書名	下ノ坪遺跡Ⅱ
副書名	農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	高知県野市町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	小松大洋
編集機関	高知県野市町教育委員会
所在地	〒781-5292 高知県香美郡野市町西野2706　TEL 08875-6-3910
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
下ノ坪遺跡（しものつぼいせき）	〒781-5292 高知県香美郡（こうちけんかみぐん） 野市町上岡（のいちちょうかみおか）	39324	200024	33度 33分 10秒	133度 41分 43秒	平成7年 1月5日 ～ 平成8年 7月16日	(C, E, F, H, J区) 4,060m²	土地区画整理工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下ノ坪遺跡	集落跡 官衛	弥生 古墳 古代	竪穴住居 溝 土坑 土壙墓 掘立柱建物 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石包丁 鉄器 ガラス小玉 四仙騎獣八稜鏡	南四国最大級の掘立柱建物群 竪穴住居址よりガラス小玉100点以上出土 香川県からの搬入土器多量

下　ノ　坪　遺　跡　Ⅱ

（野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第６集）

1998年３月

編　集
発　行　　高知県野市町教育委員会
　　高知県香美郡野市町西野2706
　　電話（08875）6－3910

印　刷　　西村謄写堂